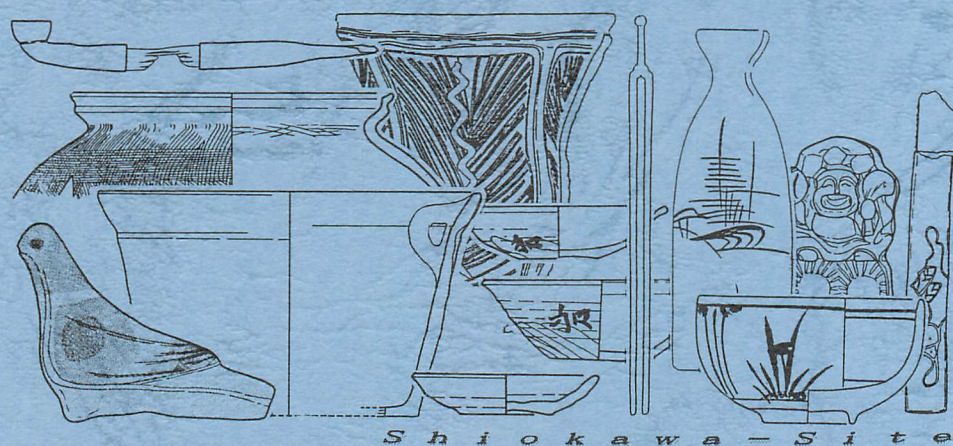


山梨県北巨摩郡須玉町

# 塩川遺跡

—塩川ダム建設工事に伴う発掘調査報告書—



Shikawa-Site

1992

山梨県教育委員会

山梨県土木部

山梨県北巨摩郡須玉町

# 塩川遺跡

—塩川ダム建設工事に伴う発掘調査報告書—

1992

山梨県教育委員会

山梨県土木部





舶載陶磁器および東海系国産陶器（ナンバーはF i g. 200に合致する）



墓壙出土の磁器および玩具（ナンバーは土壙の号数に合致する）

# 序 文

本報告書は、塩川ダム建設工事に先立ち、1989年度から1991年度までの三カ年にわたり実施されました塩川遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。

本遺跡の所在する山梨県北巨摩郡須玉町比志および小尾は釜無川水系の一支流である塩川の上流域に位置し、周囲を奥秩父山系の山々に囲まれた小集落が点在する環境にあります。この流域は、戦国期には甲州から信州を結ぶ重要な交通路であったと考えられており、烽火台の伝承地が数多く残ることが従来から知られております。しかし、原始・古代の遺跡につきましては、調査例も少なく縄文時代の遺跡が数カ所知られている程度でした。このような地域で行われました今回の発掘調査は、これまで不明点の多かったこの地域の歴史の一端を覗かせる成果をあげる結果となりました。

調査は塩川ダムの湖底に沈むA・B両地区および遮水壁工事により掘削される前の山地区の3地区について実施し、その調査面積の合計は約10,000㎡を測り、各地区の概要は以下の通りであります。

A地区からは縄文時代の土坑3基、時期不明の土坑11基・溝状遺構2基が検出され、遺物は縄文時代前期から後期に至る土器群・石器・土偶などや平安時代の土器片が発見されており、特に縄文時代前期・中期の土器群の資料が注目されます。

B地区からは縄文時代の住居址6軒・土坑3基、古墳時代の住居址1軒、平安時代の住居址5軒、中世の地下式土壇1基・竪穴状遺構41基・五輪塔の集中区1カ所、近世の墓壇104基、時期不明の土坑10基・掘立柱建物址1軒・石組み状遺構1カ所などが検出されております。また遺物としましては、縄文時代早期から晩期にいたる土器群・石器類、古墳時代前期の土器、平安時代の土器類、中世の土器・陶磁器類・石造物、近世の陶磁器類・生活用具類などが発見されております。B地区はその内容が多岐に渡りますが、特に縄文時代の早期から晩期の土器群・山間部での出土例として貴重な古墳時代前期の「S字甕」・墨書土器などを出土する平安時代の小規模集落・中世の武士階級層の生活を想起させる舶載陶磁器や茶臼・火葬骨埋葬を伴う五輪塔・近世山村部の生活復元に貴重な資料を提供する墓壇群などが注目されます。

前の山地区からはそこに伝わります「前の山烽火台」の伝承を確証できる遺構・遺物は検出されませんでした。人為的に構築されたテラス状遺構・石垣・焼土や炭化物を伴う土坑などが検出されました。

以上の様に、我々の予想をはるかに上回る豊富な内容を持った遺構・遺物を検出しましたA・B両地区の調査や塩川流域に数ある烽火台伝承地で初めて発掘調査が行われました「前の山烽火台」を含む前の山地区の調査は多くの成果をあげましたが、今後の課題も残されております。本報告書が多くの方々に研究資料としてご利用いただければ、これにまさる喜びはありません。末筆ながら、発掘調査から報告書刊行に至るまで、種々ご支援・ご協力をいただいた関係機関各位、並びに直接調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1992年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義



# 例 言

1. 本書は、山梨県北巨摩郡須玉町比志・小尾に所在する塩川遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、塩川ダム建設工事に伴うものであり、山梨県教育委員会が県土木部の委託を受け実施した。
3. 発掘調査および整理調査は山梨県埋蔵文化財センターが行なった。
4. 調査は調査年度により、第1次～3次に分かれるが、本報告では遺跡名を「塩川遺跡」と総称し、調査年度にかかわらず各地区（A地区・B地区・前の山地区）ごとにまとめて報告する。
5. 各地区の地番・調査期間は以下のとおりである。

A地区（須玉町字比志3870番地他）	1989年5月15日～8月4日（第1次）
B地区（須玉町字小尾 200番地他）	1989年7月17日～12月18日（第1次）
	1990年5月7日～11月20日（第2次）
前の山地区（須玉町字比志3772番地他）	1991年5月7日～9月17日（第3次）
6. 本書の編集および付篇以外の執筆は、保坂裕史・森原明廣が行なった。執筆分担は第V章第1節・第2節を保坂が担当し、それ以外を森原が担当した。
7. 遺構・遺物の写真撮影は八巻與志夫・保坂・森原が行なった。
8. 一部の遺構（墓墳）・遺物（石器）の実測については、シン航空写真㈱に写真実測を委託した。
9. 付篇の執筆は下記の方々に委託し、玉稿を賜った。記して感謝申し上げたい。

「塩川遺跡出土土器の胎土分析」 河西 学氏（帝京大学山梨文化財研究所）  
「塩川遺跡出土人骨について」 森本岩太郎氏・吉田俊爾氏（聖マリアンナ医科大学）  
「塩川遺跡出土の脊椎動物遺体」 金子浩昌氏（早稲田大学）
10. 塩川遺跡の資料（遺物・図面・写真等）は一括して、山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
11. 発掘・整理調査に際し、下記の方々・機関からご協力・ご教示を頂いた。記して感謝申し上げたい。

須玉町教育委員会、須玉町塩川地区・比志地区の方々、帝京大学山梨文化財研究所、塩川ダム本体JV、真行寺、小野正敏、河野真知郎、小林真一、萩原三雄、服部英雄、金刺伸吾、小林寅夫、小林経広、山路恭之助、深沢裕三、大村昭三  
(順不同・敬称略)
12. 塩川遺跡の発掘調査・整理調査にかかわる組織は以下のとおりである。

調査主体 山梨県教育委員会  
調査担当 山梨県埋蔵文化財センター  
副主査・文化財主事 八巻與志夫（平成元年度担当）  
文化財主事 保坂 裕史（平成元年度・2年度・3年度担当）  
文化財主事 森原 明廣（2年度・3年度担当）

調査員 大柴 宏之（平成元年度）、森原智恵子（平成3年度）

発掘調査作業員  
河手寿子、中村雪江、松田かね代、堀込静子、堀内としえ、丸山幸男、植松政直、植松春子、丸山倉吉、丸山正文、八巻志げ子、日向七典、小沢幸子、比志登代子、比志はな子、日向君子、清水増子、鷹左右久恵、碓井かつえ、小沢いえ子、小沢玉子、三井晴子、小野 秀、平井あさえ、矢巻安義、有井勝美、比志妙子、網野秀貴、飯島隆士、小沢すみえ、浅川滋子

整理調査作業員  
野中はるみ、望月和佳子、塩島富美子、中沢美智子、斉藤多喜子、石原はつ子、渡辺征子、小林とし美、長田明美、弦間千鶴、梅林はなの、斉藤つね子、長田くみ子、吉岡歌子、塩島博夫、内藤真千子、伊林佳子、長田久江、金井京子、福澤準子、平 重蔵、高野眞寿美、西名博恵、若林初美、名取洋子、伊藤順子、五味節子、萩原和華子、保坂典子、長田美和子、中込よしみ、宇野和子、出月多津子、出月満寿江、長田可祝、出月遊亀子、長田和子、矢崎ます子、長田純子

土木作業員 小山孝雄、古川竹弘、藤原健次  
(順不同)

# 凡 例

1. 遺構番号は、種類別に確認順で付してあるため、その所属時期・位置とは無関係である。また、調査時と報告時で番号が異なる遺構（特に墓墳）については墓墳No新旧対応表（Tab. 3）を付した。
2. 全体図・遺物分布図等で用いた各種スクリーントーン・ドットマークの用例は、それぞれに指示した。
3. 各遺構図版中のドットマークは遺物の出土点を示し、付した番号は遺物図版中の番号に合致する。また、接合関係にある遺物は、各々を実線で結んだ。
4. 遺構図版は、原則として磁北を上に加すが、例外もある。
5. 遺構図版等で使用したレベル（LEVEL）は標高を示し、単位はm（メートル）である。
6. 遺構・遺物図版の縮尺は以下のとおりであるが、例外もあるので各図版ごとのスケールを参照されたい。  
住居址……1/60 炉……1/20 土杭……1/60、1/40 埋甕……1/20 カマド……1/20  
墓墳……1/30 掘立柱建物址……1/80 五輪塔集中区……1/30 石組状遺構……1/30  
縄文土器……1/4あるいは1/3（縄文土器の拓本は1/3） 土偶・耳飾……1/2  
石鏃・石錐・石匙など……2/3 打製石斧・磨製石斧……1/3 磨石・凹石など……1/4  
土師器・須恵器……1/3あるいは1/4 紡錘車……1/3  
土師質皿形土器……1/3 内耳土器……1/4 陶磁器……1/3あるいは1/2  
五輪塔・石臼・その他の石製品……1/6 飾金具……1/1 土製品……1/2  
煙管・古銭・火打金・小柄・鏝など……1/2
7. 土器・陶磁器の実測図は原則として、右側に内面と断面を、左側に外面を示したが、例外もある。また、拓本・断面図は左に外面を、右に断面を示し、内面の拓本がある場合は断面の右側に示した。
8. 土器以外の遺物の実測図は原則として、第三角法を用いたが、石臼・金属製品などの一部に例外がある。
9. 胎土に繊維を含む土器の断面図には、網目を入れ、須恵器の断面は黒く塗りつぶした。
10. 陶磁器の釉薬や文様は、可能な限り墨・スクリーントーンなどを用いて表現した。
11. Fig. 200（「遺構外出土遺物 船載陶磁器・東海系陶器」）では、釉の掛かる範囲を特に示したい場合は、「横線」のスクリーントーンを用い、釉の掛からない範囲を特に示したい場合は、「点網」のスクリーントーンを用い示した。
12. 各図版で単的に用いたスクリーントーン等については、それぞれに用例を示した。
13. 本文中の土層説明や土器の色調説明には『標準土色帖（1990年版）』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修）を参考に記述した。
14. Fig. 2（「周辺の地形および遺跡分布」）に用いた地図は国土地理院発行の1：50,000地形図「八ヶ岳」「金峰山」「韭崎」「御岳昇仙峡」である。



正 誤 表

ペ-ジ	行段数	訂正部分(誤)	(正)
巻頭から	下段+パジョン	墓壙出土遺物の磁器および玩具	墓壙出土の陶磁器および玩具
31	32行目	…に位置し、第層上面にて確認…	…に位置し、第Ⅲ層上面にて確認…
37	32～33行目	…縄文時代前期半(Ⅱ群5類-b種)	…縄文時代前期前(Ⅱ群5類-b種)
38	26行目	I群4類(12・13～17)	I群4類(12～17)
94	42行目	…埋葬形態は寝棺であり、…	…埋葬形態は寝葬であり、…
144	Tab.60註4	…重量はg(グラム)である。また、計測	…重量はg(グラム)である。
169	4行・5行目	我孫子昭二…	安孫子昭二…
172	31行目	須玉町埋蔵文化財調査報告 第 集	須玉町埋蔵文化財調査報告 第2集
図版1 ～図版36	各ペ-ジ 右上	図版1. 図版2. 図版3. ……	Pl.1 .Pl.2 .Pl.3. ……
図版18	第4段目	84.130号墓壙	84.103号墓壙
図版19	パジョン	1.1号住居址 2.2号住居址	1.1号住居址(上の2段) 2.2号住居址(下の2段)
報告書 概要	概要 主な遺物欄	…茶臼・銅製品(鐔・小柄)…	…茶臼・銅製品(鐔・小柄)(中世)…

本報告書の付篇のうち『塩川遺跡出土土器の胎土分析』（河西 学氏）  
[173ページ～178 ページ] につきまして、下記および別表のとおり誤記箇所が  
あります。

これらはすべて編集者の責任であり、ご執筆いただいた河西氏に深くお  
詫びするとともに訂正させていただきます。

訂正箇所

174ページ	上段の図（Table 2）について、キャプションが抜けている。
174ページ	下段の図（Fig. 1）について、各図のタイトルおよび基数が抜けている。
176ページ	上段の図「第3図」はFig. 3の誤りである。
176ページ	下段の図「第4図」はFig. 4の誤りである。

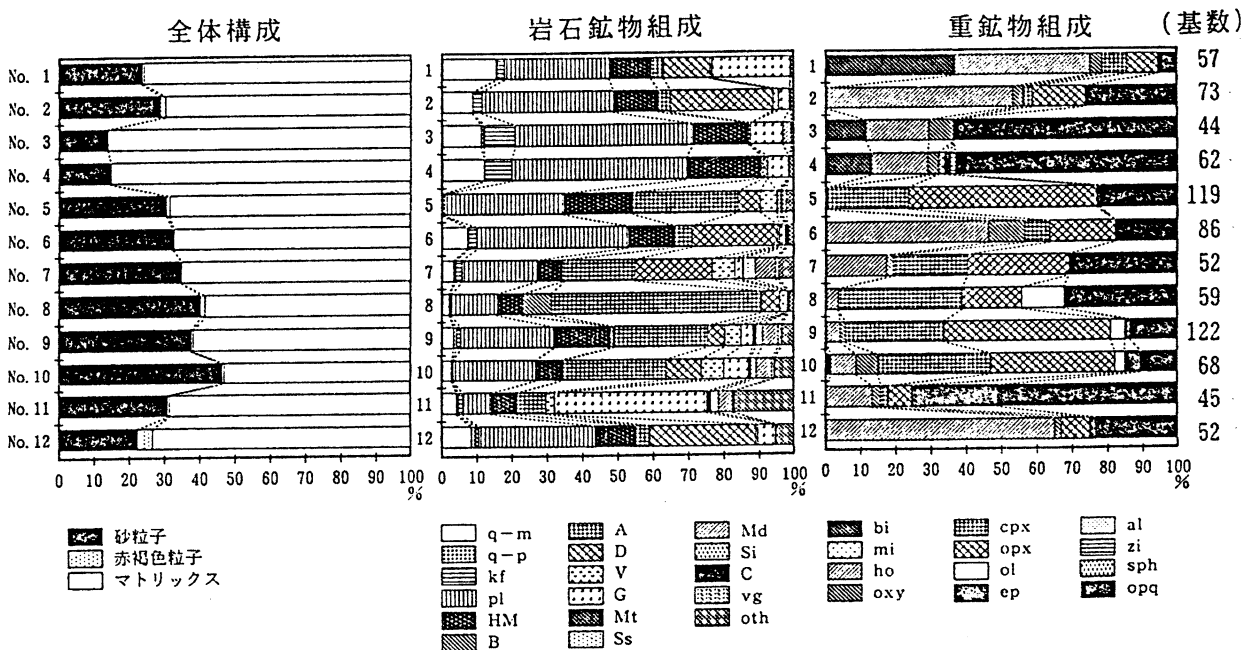
※なお、174ページの訂正箇所と訂正内容は別図のとおりである。



組成では角閃石39%・黒雲母37%が優勢で、単斜輝石・斜方輝石・酸化角閃石・不透明鉱物などがわずかに含まれる。

Table 2 塩川遺跡出土土器の岩石鉱物 (数字はポイント数、+は計数以外の検出を示す)

鉱物番号	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9	No. 10	No. 11	No. 12
石英-単結晶	73	50	31	35		46	23	17	24	23	25	38
石英-β型		*						*				
石英-多結晶	1		2			3	4		7	3	4	5
カリ長石	10	15	25	23	5	16	12	3	8	3	8	5
斜長石	142	217	139	144	210	280	148	108	201	230	51	150
黒雲母	21		5	8						1		
無色雲母	*											
角閃石	22	39	8	10		40	9	2	5	5	6	34
酸化角閃石	2	2	3	2		9	1		2	4	1	1
単斜輝石	4	2			28	6	11	21	34	23	1	
斜方輝石	5	11		1	64	16	15	10	58	24	3	4
カンラン石						*		7	5	2		
緑輝石				1	1				2	3	11	1
輝石			*									
ジルコン				1								
スフェーン	*											
不透明鉱物	3	19	28	39	26	15	16	19	16	7	23	12
玄武岩							4	65	5	2		
安山岩	17	19	2	2	183	31	141	181	203	275	50	17
デイサイト	63	169		3	40	159	152	40	36	96		139
変質火山岩類	2	8			28	4	45	18	35	59	15	3
炭酸塩岩												
花崗岩類	107	17	25	17	2	11	16	1	26	64	266	22
ホルンフェルス				1					7	8		
変成岩類							1				6	
砂岩							24	1	12	14	13	
泥岩		3	7		5	2	40	2	34	42	25	1
珪質岩					2	2	6	1	8	5	2	1
炭酸塩岩				1	7	2			1	4	1	
火山ガラス-無色					1							
火山ガラス-褐色												
変質岩石	3	1		1	8	5	22	6	19	42	95	9
変質鉱物		3		2	4	3	7	3	4	4	8	12
その他												
赤褐色粒子	12	29	2	8	19	6	4	22	13	8	16	82
マトリックス	1513	1396	1722	1702	1367	1341	1299	1170	1235	1060	1353	1467
合計	2000	2000	2000	2000	2000	2003	2000	2000	2000	2000	2000	2000



q-m 石英-単結晶 (含β型), q-p 石英-多結晶, kf カリ長石, pl 斜長石, HM 重鉱物, B 玄武岩, A 安山岩, D デイサイト, V 変質火山岩類+炭酸塩岩, G 花崗岩類, Mt 変成岩類 (含ホルンフェルス), Ss 砂岩, Md 泥岩, Si 珪質岩, C 炭酸塩岩, vg 火山ガラス, oth その他, bi 黒雲母, mi 無色雲母, ho 角閃石, oxy 酸化角閃石, cpx 単斜輝石, opx 斜方輝石, ol カンラン石, ep 緑輝石, al 褐輝石, zi ジルコン, sph スフェーン, opq 不透明鉱物

Fig. 1 塩川遺跡出土土器の岩石鉱物組成

# 目 次

巻頭カラー図版

序 文

例 言

凡 例

第 I 章	調査にいたる経緯と経過	1
第 1 節	第 1 次・2 次調査に至る経緯と経過	1
第 2 節	第 3 次調査にいたる経緯と経過	1
第 II 章	遺跡の環境	2
第 1 節	自然的環境	2
第 2 節	歴史的環境	3
第 III 章	A 地区の調査	7
第 1 節	調査の概要	7
第 2 節	調査された遺構と遺物	9
(1)	土 坑	9
(2)	溝状遺構	11
(3)	遺構外出土遺物	18
第 IV 章	B 地区の調査	28
第 1 節	調査の概要	28
第 2 節	調査された遺構と遺物	31
(1)	縄文時代	31
1)	住居址	31
2)	埋 甕	36
3)	土 坑	37
4)	遺構外出土遺物	38
(2)	古墳時代	51
1)	住居址	51
(3)	平安時代	52
1)	住居址	52
(4)	中世～近世	59
1)	地下式土壙および竪穴状遺構	59
2)	五輪塔集中区	64
3)	3-6 G スリバチ	68
4)	墓 壙	69
5)	遺構外出土遺物	129
(5)	時期不明の遺構と遺物	147
1)	石組状遺構	147
2)	土 坑	148
3)	掘立柱建物址	150
4)	遺構外出土遺物	151



第V章	前の山地区の調査	152
	第1節 調査の概要	152
	第2節 調査された遺構	156
	(1) テラス	156
	(2) 土坑	159
	(3) 山頂部の石積み	161
	第3節 まとめ	161
第VI章	塩川遺跡の調査成果について	162
付 篇		173
	塩川遺跡出土土器の胎土分析	173
	塩川遺跡出土人骨について	179
	塩川遺跡出土の脊椎動物遺体	194

## 図版 (F i g.) 目次

1. 遺跡の位置と山梨県の地形	2	40. 5号住居址(炉のみ)	36
2. 周辺地形および遺跡分布	4	41. 6号住居址(炉のみ)	35
3. 塩川遺跡全域図	6	42. 10号住居址	35
4. A地区全体図	8	43. 1号埋甕	36
5. 1号土坑出土遺物	9	44. 1号埋甕出土遺物	36
6. 1号土坑	9	45. 2号埋甕	36
7. 2・3号土坑	9	46. 2号埋甕出土遺物	36
8. 2・3号土坑出土遺物	9	47. 1号土坑出土遺物	36
9. 4・5号土坑	10	48. 1号土坑	36
10. 6・7・8号土坑	10	49. 8号土坑出土遺物	37
11. 11号土坑	10	50. 8号土坑	37
12. 10号土坑	10	51. 13号土坑出土遺物	37
13. 9号土坑	10	52. 13号土坑	37
14. 1号溝状遺構	11	53. 遺構外出土遺物 耳飾	37
15. 2号溝状遺構	11	54. 縄文Ⅰ-1~5/Ⅱ-1~8類分布図	39
16. 遺構外出土遺物 土偶・耳飾	11	55. 縄文Ⅲ-1467/Ⅳ-23/Ⅴ-1類分布図	40
17. 遺構外出土遺物 縄文土器①	12	56. 遺構外出土遺物 縄文土器①	41
18. 遺構外出土遺物 縄文土器②	13	57. 遺構外出土遺物 縄文土器②	42
19. 遺構外出土遺物 縄文土器③	14	58. 遺構外出土遺物 縄文土器③	43
20. 遺構外出土遺物 縄文土器④	15	59. 遺構外出土遺物 縄文土器④	44
21. 遺構外出土遺物 縄文土器⑤	16	60. 遺構外出土遺物 縄文土器⑤	45
22. 遺構外出土遺物 縄文土器⑥	17	61. 遺構外出土遺物 縄文土器⑥	46
23. 遺構外出土遺物 縄文土器⑦	18	62. 遺構外出土遺物 石器①	46
24. 縄文Ⅱ群1・8類分布図	21	63. 遺構外出土遺物 石器②	47
25. 縄文Ⅱ群4~6類分布図	22	64. 遺構外出土遺物 石器③	47
26. 縄文Ⅲ群1類分布図	23	65. 遺構外出土遺物 石器④	47
27. 縄文Ⅲ群2~8類分布図	24	66. 石器分布図	50
28. 遺構外出土遺物 石器①	25	67. 7号住居址	51
29. 遺構外出土遺物 石器②	25	68. 7号住居址Pit	51
30. 遺構外出土遺物 石器③	26	69. 7号住居址出土遺物	51
31. 石器分布図	27	70. 3号住居址	52
32. B地区全体図	29・30	71. 3号住居址カマド	52
33. 1号住居址	31	72. 3号住居址出土遺物	52
34. 1号住居址内埋甕	31	73. 8号住居址	53
35. 1号住居址出土遺物	32	74. 8号住居址カマド	53
36. 2号住居址	33	75. 8号住居址出土遺物	54
37. 2号住居址内埋甕	33	76. 9号住居址	55
38. 2号住居出土遺物	34	77. 9号住居址出土遺物	55
39. 4号住居址(炉のみ)	35	78. 11号住居址	56

79. 11号住居址出土遺物	56	121. 23号墓壙	84
80. 12号住居址	57	122. 24・25号墓壙および出土遺物	85
81. 12号住居址カマド	57	123. 26号墓壙および出土遺物	86
82. 12号住居址出土遺物	57	124. 27号墓壙	86
83. 1号竪穴状遺構	59	125. 28号墓壙および出土遺物	87
84. 2～4号竪穴状遺構	59	126. 29号墓壙および出土遺物	87
85. 5～11号竪穴状遺構	59	127. 30号墓壙および出土遺物	88
86. 1号地下式土壙出土遺物	60	128. 31号墓壙および出土遺物	89
87. 12・13号竪穴状遺構	60	129. 32号墓壙	89
88. 14号竪穴状遺構	60	130. 33号墓壙および出土遺物	90
89. 15号竪穴状遺構	60	131. 34号墓壙および出土遺物	90
90. 41号竪穴状遺構	60	132. 35号墓壙および出土遺物	91
91. 20号竪穴状遺構出土遺物	60	133. 36号墓壙	91
92. 16～30号竪穴	61	134. 37・38号墓壙および出土遺物	92
93. 31～40号竪穴・地下式土壙	62	135. 39号墓壙	92
94. 五輪塔集中区	64	136. 40号墓壙および出土遺物	93
95. 五輪塔集中区出土遺物①	65	137. 41号墓壙および出土遺物	94
96. 五輪塔集中区出土遺物②	66	138. 42号墓壙および出土遺物	94
97. 五輪塔集中区出土遺物③	67	139. 43号墓壙および出土遺物	95
98. 3-6 Gスリパチ	68	140. 44号墓壙および出土遺物	96
99. 3-6 Gスリパチ出土遺物	68	141. 45号墓壙	96
100. 1号墓壙および出土遺物	69	142. 46号墓壙	97
101. 2号墓壙および出土遺物	70	143. 47号墓壙および出土遺物	97
102. 3号墓壙	71	144. 48号墓壙および出土遺物	98
103. 4号墓壙および出土遺物	71	145. 49号墓壙	98
104. 5号墓壙および出土遺物	72	146. 50号墓壙および出土遺物	99
105. 6号墓壙および出土遺物	72	147. 51号墓壙	99
106. 7号墓壙および出土遺物	73	148. 52号墓壙および出土遺物	100
107. 8号墓壙および出土遺物	74	149. 53～56号墓壙出土遺物	101
108. 9号墓壙および出土遺物	74	150. 57号墓壙出土遺物	101
109. 10号墓壙および出土遺物	75	151. 58号墓壙および出土遺物	102
110. 11号墓壙および出土遺物	76	152. 59号墓壙および出土遺物	102
111. 12号墓壙および出土遺物	76	153. 60号墓壙および出土遺物	103
112. 13号墓壙および出土遺物	77	154. 61号墓壙および出土遺物	103
113. 14号墓壙および出土遺物	78	155. 62号墓壙および出土遺物	104
114. 15号墓壙	79	156. 63号墓壙および出土遺物	104
115. 16号墓壙および出土遺物	79	157. 64・65号墓壙	105
116. 17号墓壙および出土遺物	80	158. 66号墓壙および出土遺物	105
117. 18号墓壙および出土遺物	81	159. 67号墓壙および出土遺物	106
118. 19号墓壙および出土遺物	81	160. 68号墓壙および出土遺物	106
119. 20号墓壙および出土遺物	82	161. 69号墓壙および出土遺物	107
120. 21・22号墓壙および出土遺物	83	162. 70号墓壙および出土遺物	108

163. 71号墓壙および出土遺物	108	194. 103号墓壙	125
164. 72号墓壙および出土遺物	109	195. 104号墓壙および出土遺物	126
165. 73号墓壙および出土遺物	109	196. 土師質皿・内耳土器分布図	127・128
166. 74号墓壙	110	197. 遺構外出土遺物 土師質皿形土器	129
167. 75号墓壙および出土遺物	110	198. 遺構外出土遺物 内耳土器①	131
168. 76号墓壙	111	199. 遺構外出土遺物 内耳土器②	132
169. 77号墓壙	111	200. 遺構外出土遺物 舶載陶磁ほか	134
170. 78号墓壙および出土遺物	112	201. 遺構外出土遺物 陶磁器・灯明皿	136
171. 79号墓壙および出土遺物	112	202. 遺構外出土遺物 小柄・鏝	136
172. 80号墓壙および出土遺物	113	203. 遺構外出土遺物 土製品・埴埴	136
173. 81号墓壙および出土遺物	113	204. 遺構外出土遺物 古銭・煙管	137
174. 82号墓壙および出土遺物	114	205. 遺構外出土遺物 石製品①	138
175. 83号墓壙および出土遺物	114	206. 遺構外出土遺物 石製品②	139
176. 84・85号墓壙および出土遺物	115	207. 遺構外出土遺物 石製品③	140
177. 86号墓壙および出土遺物	116	208. 1号石組状遺構	147
178. 87号墓壙および出土遺物	117	209. 2号土坑	149
179. 88号墓壙および出土遺物	117	210. 3～6号土坑	149
180. 89号墓壙および出土遺物	118	211. 7・9号土坑	149
181. 90号墓壙および出土遺物	118	212. 12号土坑出土遺物	149
182. 91号墓壙および出土遺物	119	213. 10・11号土坑	149
183. 92号墓壙	119	214. 12号土坑	149
184. 93号墓壙および出土遺物	120	215. 1号掘立柱建物址	151
185. 94号墓壙および出土遺物	121	216. 遺構外出土遺物 砥石	151
186. 95号墓壙および出土遺物	121	217. 遺構外出土遺物 鉄鏃	151
187. 96号墓壙および出土遺物	122	218. 前の山地区全体図	152
188. 97号墓壙および出土遺物	122	219. 前の山全体図(トレンチ・遺構)	153
189. 98号墓壙および出土遺物	123	220. 前の山トレンチセクション 図①	154
190. 99号墓壙	123	221. 前の山トレンチセクション 図②	155
191. 100号墓壙および出土遺物	124	222. 前の山土坑①	157
192. 101号墓壙および出土遺物	124	223. 前の山土坑②	158
193. 102号墓壙および出土遺物	125	224. 前の山山頂部現況図	160
194. 103号墓壙	125	225. 時期別の墓壙位置図	168



## 写真 (Pl.) 目次

1. ……A地区 遺構	19. ……B地区 出土遺物①
2. ……A地区 出土遺物①	20. ……B地区 出土遺物②
3. ……A地区 出土遺物②	21. ……B地区 出土遺物③
4. ……A地区 出土遺物③	22. ……B地区 出土遺物④
5. ……A地区 出土遺物④	23. ……B地区 出土遺物⑤
6. ……A地区 出土遺物⑤	24. ……B地区 出土遺物⑥
7. ……A地区 出土遺物⑥	25. ……B地区 出土遺物⑦
8. ……B地区 遺構①	26. ……B地区 出土遺物⑧
9. ……B地区 遺構②	27. ……B地区 出土遺物⑨
10. ……B地区 遺構③	28. ……B地区 出土遺物⑩
11. ……B地区 遺構④	29. ……B地区 出土遺物⑪
12. ……B地区 遺構⑤	30. ……B地区 墓壇出土遺物①
13. ……B地区 遺構⑥	31. ……B地区 墓壇出土遺物②
14. ……B地区 遺構：墓壇①	32. ……B地区 墓壇出土遺物③
15. ……B地区 遺構：墓壇②	33. ……B地区 墓壇出土遺物④
16. ……B地区 遺構：墓壇③	34. ……B地区 墓壇出土遺物⑤
17. ……B地区 遺構：墓壇④	35. ……前の山地区 遺構①
18. ……B地区 遺構：墓壇⑤	36. ……前の山地区 遺構②

## 表 (Tab.) 目次

1. 塩川遺跡出土の縄文土器分類表 …… 7	14. 石製品観察表① (茶臼) …… 146
2. 竪穴状遺構 位置・形態・計測値表 …… 63	15. 石製品観察表② (石臼) …… 146
3. 墓壇ナンバー新旧対応表 …… 141	16. 墓壇 (座葬) の平面形態内訳表 …… 165
4. 古銭 (銅銭) 観察表① …… 142	17. 墓壇 (寝葬) の平面形態内訳表 …… 165
5. 古銭 (銅銭) 観察表② …… 143	18. 埋葬形態内訳表 …… 165
6. 古銭 (銅銭) 観察表③ …… 144	19. 時期別の埋葬および墓壇形態表 …… 165
7. 煙管 (雁首部・吸口部) 観察表 …… 144	20. 座葬の遺体方向内訳表 …… 165
8. 中世土器 (土師質土器・内耳土器) 観察表 …… 145	21. 寝葬の遺体頭位内訳表 …… 165
9. 墓壇出土の陶磁器観察表 …… 146	22. 寝葬の遺体方向内訳表 …… 165
10. 五輪塔観察表① (空風輪) …… 146	23. 被葬者の死亡年齢表 …… 166
11. 五輪塔観察表② (火輪) …… 146	24. 「六道銭」副葬点数表 …… 166
12. 五輪塔観察表③ (水輪) …… 146	25. 「六道銭」組成パターン表 …… 166
13. 五輪塔観察表④ (地輪) …… 146	26. 「六道銭」組成パターン分布表 …… 167

# 第 I 章 調査にいたる経緯と経過

## 第 1 節 第 1 次・2 次調査にいたる経緯と経過

山梨県土木部では、塩川総合開発事業の一環として、北巨摩郡須玉町字比志・小尾地内に塩川ダムを建設することとなった。そのため、山梨県教育委員会文化課は、県土木部河川課と協議の上、昭和61年10月に建設予定地内の分布調査を実施した。この分布調査によって、小尾200番地周辺（旧塩川神社南西側＝B地区）および比志3870番地周辺（旧須玉北小学校東南側＝A地区）に縄文時代・中世を中心とした遺物の散布が確認された。

分布調査の結果を受け、平成元年4月17日より、開発事業主体である大門・塩川ダム事務所と具体的に調査等に関する協議を重ねた。また、これと並行して須玉町教育委員会や塩川地区との打ち合わせを行ない、同年5月から11月までA地区およびB地区について発掘調査を実施した。

また、B地区に関しては遺跡の内容等から、平成2年度も継続調査することを平成元年度中に協議決定し、平成2年5月から11月まで発掘調査を実施した。以下、平成元年度・2年度の調査事務の経過について記述する。

- 平成元年4月6日 文化庁長官宛に発掘通知を提出する。
- 5月15日 第1次発掘調査を開始する。
- 12月18日 第1次発掘調査を終了する。
- 12月26日 斐崎市警察署長宛に埋蔵文化財発見通知を提出する。  
以後、平成2年3月末日まで整理調査を実施する。
- 平成2年4月18日 文化庁長官宛に発掘通知を提出する。
- 5月7日 第2次発掘調査を開始する。
- 11月7日 第2次発掘調査を終了する。
- 12月26日 斐崎市警察署長宛に埋蔵文化財発見通知を提出する。  
以後、平成3年3月末日まで整理調査を実施する。

## 第 2 節 第 3 次調査にいたる経緯と経過

平成2年10月、県土木部河川課より堰堤補強工事のため、須玉町比志3772番地周辺（通称「前の山」の山頂を一部含む西斜面）を掘削する計画があるとの連絡を受けた。通称「前の山」は伝承や立地環境などから烽火台であった可能性が従来から指摘されていた。そこで河川課、文化課および須玉町教育委員会との協議の上、あらかじめ現地踏査を行ない、掘削計画地外に石垣状の遺構が存在することが確認された。しかし、掘削予定地内についての遺構有無は現況からは判断しかねたため、試掘調査を実施することを協議決定した。試掘調査を実施した結果、テラスや焼土の散布を確認した。その後、掘削計画の変更等も協議したが、やむを得ず発掘調査を実施することとなった。以下、平成2年度・3年度の調査事務の経過について記述する。

- 平成2年10月26日 現地踏査を開始する。
- 11月8日～16日 試掘調査を実施する。
- 平成3年4月17日 文化庁長官宛に発掘通知を提出する。
- 5月7日 第3次調査を開始する。
- 9月17日 第3次調査を終了する。  
以後、平成3年12月20日まで整理調査を実施する。
- 平成4年3月末日 第1次～3次調査の発掘調査報告書を発行する。

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 自然的環境

塩川遺跡（A地区・B地区・前の山地区）の存在する須玉町は、甲府盆地の北西側に広がる北巨摩郡の北東部に位置する。

須玉町の面積は約174.2km<sup>2</sup>であるが、その約86%は北部の山林地が占めており、平地は南西部に若干ある程度である。現在の集落は南部・南西部に集中し、山林地には河川沿いの段丘上に小集落が点在している。

町の南西端を東西に中央自動車道が横断し、大豆生田地内に須玉I・Cがある。また、西端には南北に国道141号線が縦断し、山梨県と長野県佐久地方とを結んでいる。町域内の標高は南西端の市街若神子周辺で約490m前後、北東端の集落（黒森周辺）で約1,150m前後を測り、高低差

の開きが著しい。また、北部から東南部にかけては、標高1,500m～2,000mクラスの山並みが連なり、秩父多摩国立公園の一部を形成し、瑞牆山・金峰山・通仙峡などの景勝地がある。須玉町の北西部は長野県南佐久郡南牧村に、北東部は同じく川上村に接している。また、東部は山梨県甲府市に、南東部は山梨県中巨摩郡敷島町・韮崎市に、南部は北巨摩郡明野村・西部は武川村・高根町にそれぞれ隣接している。

須玉町周辺の地形を概観すると、北西側に位置する八ヶ岳（赤岳2,899m他）東南麓と北側に位置する奥秩父連峰山系（金峰山2,595m・瑞牆山2,230m他）から延びる山地（斑山1,115m他）にはさまれた須玉川（釜無川水系）が南流している。同じく、奥秩父山系から延びる山地（斑山地）と黒富士火山帯（黒富士1,760m・茅ヶ岳1,704mなど）にはさまれた塩川（釜無川水系）が南流している。この二河川の流域には、それぞれ河岸段丘が形成されており、合流点付近の須玉町南西端（若神子・大豆生田周辺）には平坦部が広がっている。

なお、山梨県および須玉町周辺の地形については、Fig. 1（「遺跡の位置と山梨県の地形」）Fig. 2（「周辺地形および遺跡分布」）を参照されたい。

塩川遺跡は以上に述べたような地形を見せる須玉町の北部の山間部、比志・小尾地内に位置し、中央自動車道須玉I・Cから北東へ約12kmを測る地点であり、長野県佐久地方への一交通路（「小尾街道」）沿いに位置する。

この地域は先述した二河川のうちの塩川の上流域に属している。塩川はその源を奥秩父連峰西端の山地に発する河川であり、約40km以上を南流した後、韮崎市内にて釜無川と合流する。塩川の最上流は東側の金峰山を源とする本谷川と西側の瑞牆山を源とする釜瀬川の二河川に大きく分かれ、両者は比志・小尾地内で合流する。塩川遺跡は、ここの合流点を中心に位置し、釜無川と塩川の合流点からは、約20kmを測る。

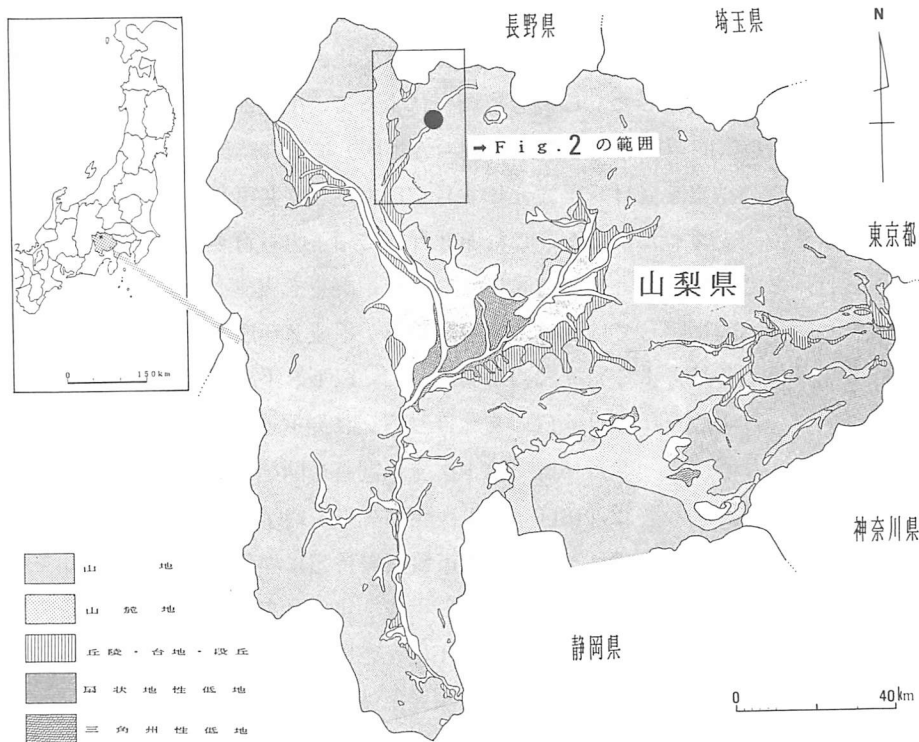


Fig. 1 遺跡の位置と山梨県の地形

以下、各地区の地形を概観する。

A地区およびB地区は、釜瀬川と本谷川の合流点を擁する谷底の旧塩川集落に位置し、西流する本谷川をはさみ、対峙する位置にある。両者間の距離は最短部で、約400mを測る。

A地区は旧須玉北小学校東南側、本谷川の左岸段丘上（南側）の北西向き緩斜面に位置する。調査区の標高は最低所で約868m、最高所で約872mを測る。調査区南側には山斜面が迫り、小規模な窪地となっていたため調査区全体は南西向きに傾斜する地形を見せる。また、調査区東側には小河川が北流している。窪地のためか、地元ではA地区付近を「屋敷窪」と呼称していた。

B地区は旧増富保育園の南側、あるいは旧塩川神社の南西側に位置する。本谷川の右岸段丘上（北側）、南流する釜瀬川の左岸段丘上（東側）の平坦地に位置するが、本谷川と釜瀬川にはさまれる舌状の段丘先端部とも表現できよう。調査区の標高は最高所で約847m、最低所で約839mを測る。調査区の東側は山斜面が迫り、北側には小河川が北方の神戸集落（標高約1,000m）方面から流れている。調査区全体は南西側へ緩く傾斜するものの、調査区東側の平坦面（標高844m前後）と西側の平坦面（標高841m前後）が認められる。

前の山地区はA区・B区の位置する谷底の南方にある山にあり、新設された増富小学校の西側、移転した新塩川集落の北西に位置している。調査区は山頂および山頂から北東へ延びる尾根上に位置している。山頂（調査区最高所）の標高は990.191mを測り、最低所の標高は、約952mを測る。この山は旧塩川集落では、「前の山」と呼称されていたが、比志集落では、同じ山を「<sup>かみもり</sup>金森」と呼称していた。調査区名は「前の山地区」としたが、これは発掘前から調査区周辺が「前の山烽火台」として推定されていたことに起因するものである。

なお、塩川遺跡周辺の地形や各地区の位置については、Fig. 3（「塩川遺跡全域図」）を参照されたい。

## 第2節 歴史的環境

塩川遺跡の位置する須玉町周辺地域では現在までのところ、Fig. 2（「周辺の地形および遺跡分布」）に示したように、旧石器～近世にいたるまでの多くの遺跡が分布している。これらの内容をここで詳細に述べることはできないが、この地域の歴史の大まかな流れを見ておきたい。はじめに、塩川遺跡周辺の遺跡分布の状況についてふれる。

Fig. 2に示した範囲は、東端を一部欠いた須玉町と南部に隣接する敷島町、明野村、西部に隣接する高根町、北部に隣接する長野県の南牧村、川上村のそれぞれ一部である。一見すると、西の高根町に遺跡の濃密な分布が看取される。これは、高根町で近年、詳細分布調査が実施されたことに起因するが、その町域を遺跡の集中地である八ヶ岳東南麓に占めていることも影響している。須玉町では須玉川・塩川流域の河岸段丘上を中心とした部分に、縄文時代から中・近世にいたる遺跡が確認・調査されており、明野村でも茅ヶ岳東南麓において、数カ所の遺跡が確認されている。しかしこれらの地域では、まだ詳細な分布調査が実施されておらず、未確認の遺跡も多いことが予想される。近年、この地域内では、大規模なゴルフ場等の開発が相次いでおり、今後さらに多くの遺跡が発見され、調査されることは必至であろう。

現在までのところ、この須玉町周辺の地域のうち、特に山間部の遺跡は分布数も少なく、内容が明らかにされるものも少ない。しかしながら、塩川遺跡の調査によって得たデータからも言えることだが、山間部の遺跡から意外とも言えるほどの内容の遺構・遺物が発見されることも例外ではない状況にある。周辺地域の各時代の様々な歴史究明のために、今後もより一層の注意が必要とされよう。

以下、時代を追って、塩川遺跡周辺の遺跡を概観する。

旧石器時代については、塩川流域で遺跡・遺物等が確認された例は現在のところない。ただし、塩川遺跡の北西の高根町清里地区周辺あるいは、長野県側の南牧村野辺山では、後期旧石器時代の遺跡が確認されている。縄文時代については、塩川遺跡周辺の山間部に時期は不明であるが散布地として、須玉町浜井場遺跡（13）焼牧遺跡（9）他が確認されている。草創期については、須玉町周辺における確認例は現在のところない。早期については

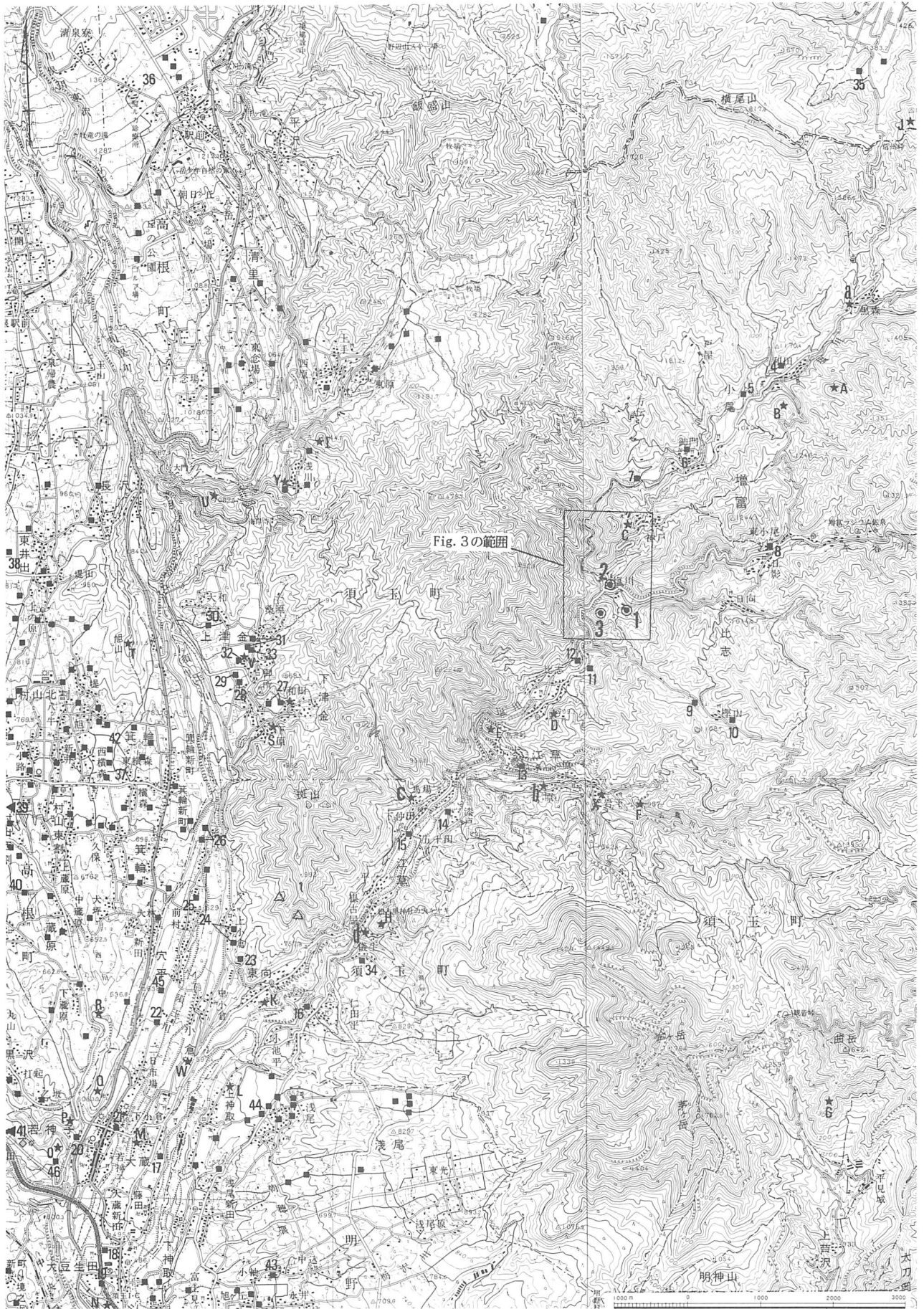


Fig. 2 周辺地域および遺跡分布



高根町丘の公園第1～3遺跡(36)他で確認され、須玉町では原の前遺跡(32)御屋敷遺跡、御屋敷西遺跡(27)などで確認されている。前期については、高根町では数カ所の遺跡が確認され、須玉町では桑原南遺跡(31)塚田遺跡(17)川又南遺跡(26)ほかで出土例がある。中期については、遺跡数が急増する。高根町・須玉町・明野村で確認される縄文時代の遺跡の大半はこの時期に属するものである。須玉町の遺跡例としては、出産を表現した文様の土器(井戸尻式)の出土で知られる津金御所前遺跡(28)や郷蔵地遺跡(11)など多数が挙げられる。後晩期については、高根町青木遺跡(37)石堂B遺跡(38)、須玉町桑原遺跡などが挙げられ、配石遺構の存在などに祭祀的要素の強さが指摘される。弥生時代については、須玉町の大豆生田遺跡(19)から中期の条痕文土器が出土している。また須玉町川又遺跡(26)から前期の遺物が出土した旨の報告があるが、内容は定かでない。他の確認例は現在のところない。古墳時代前期については、高根町西ノ原遺跡で住居址が確認されているが、須玉町周辺で確認される遺跡はなく、南東側の韮崎市に遺跡の分布が濃い。後期については、古墳が須玉町若神子周辺に湯沢古墳(20)他が確認され、高根町にも数基確認される。しかし、集落・土器等の様相はわずかに高根町の小池土取場遺跡(40)などから出土した遺物から窺い知れるのみである。奈良時代については、北巨摩郡全体でも不明であり、わずかに韮崎市中田小学校などに調査例がある程度である。平安時代については、遺跡数が急増し重要な遺跡も多く確認される。平安時代の須玉町周辺の地域(塩川流域)は巨摩郡逸見郷に属したとする説が有力である。また、周辺地域には、柏前・真衣野・穂坂の三御牧の存在が推測され、それぞれ八ヶ岳東南麓・西南麓、武川村牧ノ原、韮崎市穂坂に不確定ではあるが比定されている。そして、須玉町周辺はこの三御牧の掌握を可能とする位置にあることから、関連遺跡の存在が推測されている。代表的な遺跡としては、高根町湯沢遺跡(41)〈柵列・コ字形配列の掘立柱建物址群・隆平永宝・他〉が公的施設(官衙など)の可能性のある遺跡として挙げられる。また湯沢遺跡に近接する須玉町大小久保遺跡(46)〈9世紀後半の土師器焼成遺構・工房址・内黒土器他〉も技術者集団にかかわる遺跡例として挙げられる。これらの遺跡および須玉町大豆生田遺跡からは「布目瓦」の出土もあり、近隣に瓦葺の建物の存在したことが窺える。他にも、高根町青木北遺跡、東久保遺跡(42)須玉町塚田遺跡(17)西川遺跡(25)明野村普門寺遺跡(43)など多くの遺跡が確認される。また、塩川遺跡の北方、信州峠を越えた長野県側の横尾遺跡(35)でも、内黒土器を出土する住居址の調査例がある。平安時代以降の遺跡については、中世に関わるものが多い。明野村中村道祖神遺跡(44)等では地下式土壇他が、須玉町塚田遺跡では五輪塔他が確認されている。これら以外にも、烽火台・関・屋敷址などの伝承地も多く存在する。これらすべてを確実視することはできないが、現在のところ、それらを否定する材料もない。そのため、確認あるいは調査された遺跡とともに図中には掲げておく。また、武田家臣団の一つ「津金衆」および「小尾党」ほか(戦国期の塩川および須玉川流域に存在したとされる)については、塩川遺跡の調査内容に大きくかかわると考えられる。本来であれば、詳細な記述を必要とするところだが、第VI章末に参考文献等を記載したので、それらを参照されたい。近世の遺跡については、確認例が少ない。石碑や古銭の出土例がある程度であり、遺構はほとんど確認されていない状況である。

なお、塩川遺跡は古道「穂坂路」(近世以降の「小尾街道」)の筋上に位置している。「穂坂路」については甲府から西へ茅ヶ岳南麓を経て、塩川に沿って北上し、信州の川上へいたるルートが推測されている。これについては『穂坂路』(山梨県教育委員会、1984年刊)を参照されたい。

塩川遺跡周辺の遺跡(番号とアルファベットはFig. 2「周辺の地形および遺跡分布」と第2節本文に合致する)

■……遺跡の位置(遺跡や調査区の大きさは無関係である)

1. 塩川遺跡A地区 2. B地区 3. 前の山地区 4. 村ノ内 5. 千石 6. 上の平 7. 寝屋 8. 大柴 9. 焼牧 10. 四辻 11. 郷蔵地 12. 馬込 13. 浜井場 14. 押出 15. 上の原 16. 下平 17. 塚田 18. 大免 19. 大豆生田 20. 湯沢古墳 21. 若神子小学校古墳 22. 蟹坂 23. 西大久保 24. 小倉 25. 西川 26. 川又、川又南 27. 御屋敷、御屋敷西 28. 津金御所前1次 29. 津金御所前2次 30. 相の原 31. 桑原、桑原南 32. 原の前 33. 西原 34. 穢生 35. 横尾(長野県) 36. 丘の公園第1～3 37. 青木遺跡 38. 石堂B 39. 西ノ原 40. 小池共同土取場 41. 湯沢 42. 東久保 43. 普門寺 44. 中村道祖神 45. 柳坪 46. 大小久保

★……城・砦・屋敷跡・関など(伝承地を含む)

A. 和田の城山 B. 比丘尼塚 C. 神戸の城山 D. 比志の城山 E. 大渡の烽火台 F. 岩下(小森)の城山 G. 平見城の烽火台 H. 獅子吼城 I. 浅川砦 J. 信州峠の烽火台 K. 三枝土佐守屋敷跡 L. 屋代氏屋敷跡 M. 真田氏屋敷跡 N. 大豆生田砦 O. 若神子南城 P. 若神子古城 Q. 若神子北城 R. 大坪砦 S. 津金又十太郎屋敷跡 T. 旭山砦 U. 源太ヶ城 V. 古宮屋敷跡 W. 中尾城 X. 小森将監屋敷跡 Y. 浅川氏屋敷跡 a. 小尾の番所跡 b. 岩下の関 c. 馬場の関 d. 根小屋の関

△……鉱山

1. 斑山金鉱跡

※須玉町内の遺跡および本文中に引用した遺跡のみ名称を示した。その他については、第VI章末の参考文献を参照されたい。

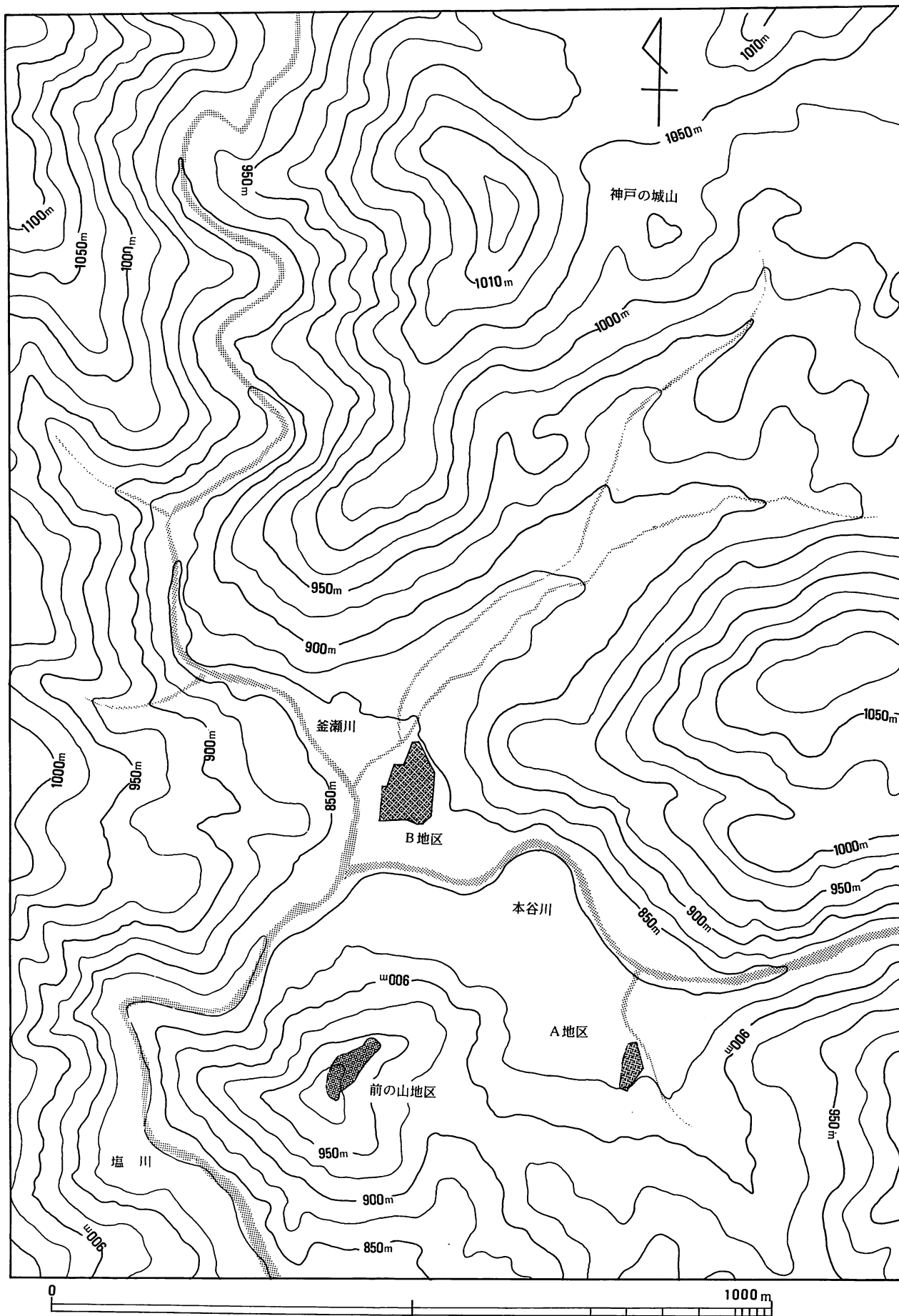


Fig. 3 塩川遺跡全域図 (A地区・B地区・前の山地区)

# 第三章 A地区の調査

## 第1節 調査の概要

A地区は、須玉町字比志3870番地他に位置する。地形・調査経緯等は第I章・第II章を参照されたい。

調査前のA地区は、ほぼ全域が畑地として利用されており、少量の縄文土器片が表面採集されるような状況であった。そこで、調査は先ず遺跡の範囲・残存状況等を確認すべく、試掘調査から開始した。その結果、総面積約1,200㎡におよぶ遺跡の範囲を確認し、全面掘り下げによる本調査に移行した。

調査はGridを基本に進めたが（Fig. 4「A地区全体図」参照）、そのGridは北を基準の南北基本線（磁北より19°東へふれる）とこれに直交する東西基本線をもとに、一辺5mの正方形にそれぞれを設定した。各Gridの名称は南西端のポイント杭名称（調査区南西端より北へA～N…（東西ライン）と英大文字を付し、東へ1～7…（南北ライン）と数字番号を付した。）を付し、（北へ並ぶ英大文字）－（東へ並ぶ数字）のように呼称した。

なお、第IV章で述べるB地区の調査にもGrid法を採用しているが、A地区のGridとは基本線が完全にずれており共通するものではない。また、呼称も混乱を避けるため、故意的に変えてある点を予め了承されたい。

調査は試掘調査で確認した表土層を重機で除去し、遺構・遺物の確認に努めた。遺構は全て第III層上面にて確認され、各遺構を層位的に時期区分して捉えることはできなかった。遺構の残存状況は礫を多く含む第III層に構築されたため、良好とは言えない状況であった。また、遺物（特に縄文土器）は第II層中位から第III層上面にかけて集中的に出土し、現地においては層位的な新旧関係を追求できるものではなかった。

記述が前後してしまうが、A地区の基本土層については以下のとおりである。

第I層 表土層であり、黒褐色を呈する耕作土である。小礫を若干含む。

第II層 茶褐色を呈する。表土層よりやや茶色を帯びる程度だが、小礫を多く含む。

第III層 明茶褐色を呈する。10cm大～人頭大の礫を多く含む。各遺構は本層を掘り込んで構築される。

確認された遺構・遺物は縄文～平安時代におよぶ。内容については第2節以下にて述べていくこととする。

分類（群－類－種）		A	B	分類（群－類－種）		A	B
<b>I群</b> （早期の土器を一括する）				●	●	<b>III群</b> （中期の土器を一括する）	
1類	早期中葉前後？（刺突文）		◎	1類	中期初頭（集合沈線文ほか・五領ケ台式）	◎	◎
2類	早期中葉（平行沈線文系）		◎	- a	集合沈線文	○	○
3類	早期後半（条痕文系）		◎	- b	縄文	○	○
4類	早期末葉（条痕文系）		◎	- c	連続刺突文	○	○
5類	早期末葉（条痕文系；貝殻文）		◎	- d	刺突文（交互刺突文）	○	○
<b>II群</b> （前期の土器を一括する）				●	●	- e	角押文
1類	前期前半（縄文土器・厚手・腕輪・内面調整が粗雑）		◎	- f	a～e種以外	○	○
- a	直線的な格子目状の細い沈線文	○	○	2類	中期前半（角押文ほか）	◎	
- b	直線的な縦の方向性を有す沈線文	○	○	3類	中期前半（角押文・三角押文ほか）	◎	
- c	直線的な不規則な方向性を有す粗い条痕文	○	○	4類	中期前半（角押文ほか）	◎	
- d	曲線的な弧状の条痕文	○	○	5類	中期中葉（隆帯文ほか）	◎	
- e	縄文あるいは隆帯文	○	○	6類	中期後半（會利式）	◎	◎
- f	無文あるいは隆帯文	○	○	- a	會利Ⅳ式		○
2類	前期前半（縄文土器・PP薄手・腕輪・内面調整が丁寧）		◎	- b	會利Ⅴ式	○	
3類	前期前半（縄文無含・PP薄手・堅緻・内面指頭圧痕残）		◎	7類	中期後半（加會利E式）		◎
4類	前期後半（半莖竹管文主体・踏礎a式300a～b式）		◎	<b>IV群</b> （後期の土器を一括する）			
- a	縄文地文に格子目状の沈線文	○	○	1類	後期初頭（称名寺式？）		◎
- b	縄文地文に連続刺突文	○	○	2類	後期前半（堀之内Ⅰ式）	◎	◎
- c	地文なしで連続刺突文	○	○	3類	後期中葉（加會利B式）		◎
- d	地文なしで円形刺突文	○	○	4類	後期（後期の粗製土器）		◎
5類	前期後半（沈線文・浮線文など主体・踏礎b式）		◎	<b>V群</b> （晩期の土器を一括する）			
- a	縄文地文に弧状の平行沈線文	○	○	1類	晩期後葉（水式？）		◎
- b	浮線文のみ	○	○	<b>VI群</b> （各群に分類できない時期不明の土器を一括する）			
- c	浮線文	○	○	塩川遺跡A・B地区から出土した縄文土器についての説明には、左表に示した分類を用いることとする。分類は以下のような考えを基本とした。			
- d	貼付文（浮線文より幅広い）	○	○	⇒ 群（時期の分類：縄文時代草創期～晩期の6期区分に基づく）			
- e	無文	○	○	⇒ 類（時期の分類：上記6期区分内の区分）			
6類	前期後半（ボタン状貼付文・踏礎c式）	◎	◎	⇒ 種（文様の特徴などによる分類）			
7類	前期末葉（結節浮線文ほか・十三舌提式）		◎	なお、分類は、A・B両地区に共通したものを採用するため、地区によっては出土していない群・類・種も存在する。記述が煩雑になってしまうが、表（Tab. 1）の右側欄に出土地区の該当有無を示したので参照されたい。			
8類	前期初頭（東海系・薄手・内面指頭圧痕残・木島式）	◎	◎				
9類	前期後半（西日本〔関西〕系）	◎	◎				

Tab. 1 塩川遺跡出土の縄文土器分類表

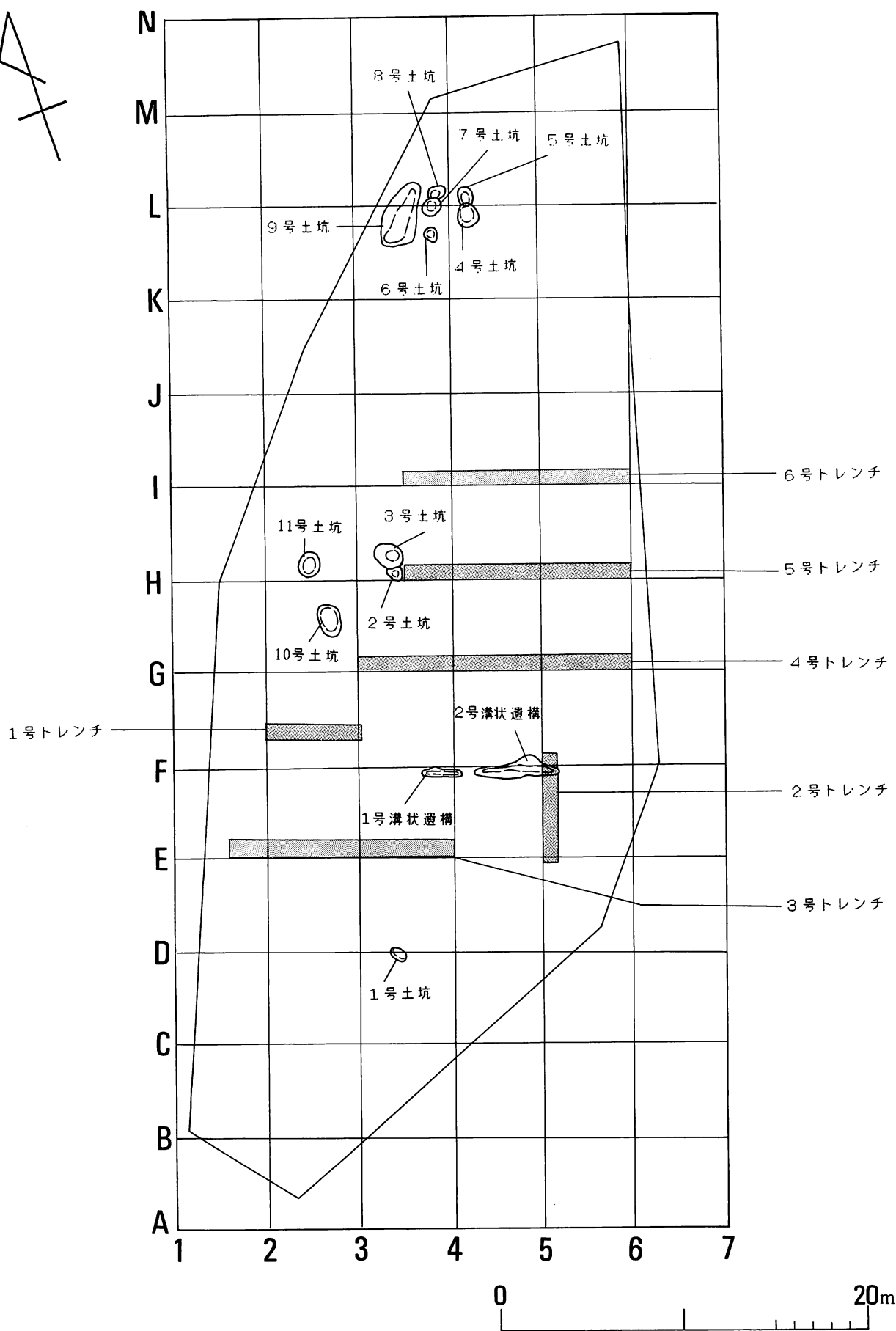


Fig. 4 A地区全体図

## 第2節 調査された遺構と遺物

### (1) 土坑

#### 1号土坑 (Fig. 5・6、Pl. 1-3)

(位置) 調査区の南端側、C・D-3 Gridに位置する。周辺に他の遺構はなく、遺物の分布も少ない。

(形状) 平面形態は長楕円形、断面形態は箱形を呈する。

(規模) 長軸は1.15m、短軸は0.55mを測る。深さは0.51mを測る。

(遺物) 覆土中より1点のみ出土した。1は縄文土器の底部である。

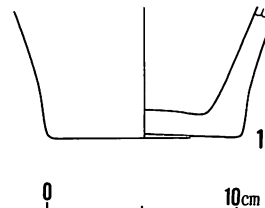


Fig. 5 1号土坑出土遺物 (1/4)

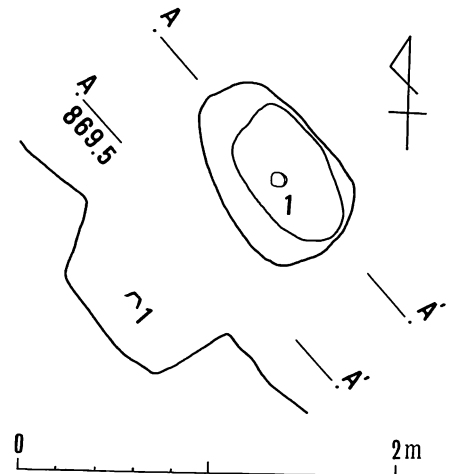


Fig. 6 1号土坑

#### 2号土坑 (Fig. 7・8、Pl. 1-4)

(位置) 調査区中央の西寄り、H-3 Gridに位置する。北側に存在する3号土坑によって切られる。

(形状) 平面形態は不整形、断面形態は円形を呈す。

(規模) 長軸は1.02m、短軸は0.82mを測る。深さは0.36mを測る。

(遺物) 覆土中から1点のみ出土した。3 (Fig. 8-3)は縄文土器、深鉢胴部である。2群5類-bであり、縄文の地文に沈線文が施される。

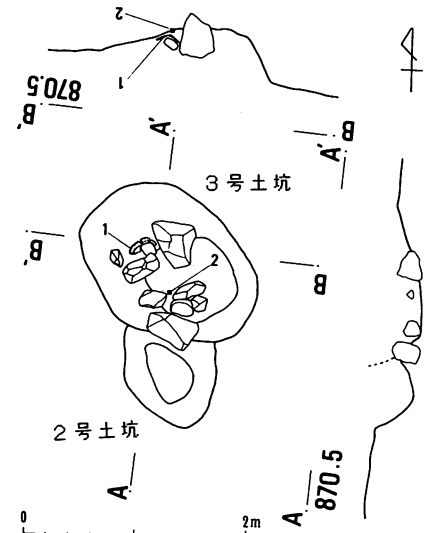


Fig. 7 2・3号土坑

#### 3号土坑 (Fig. 7・8、Pl. 1-4)

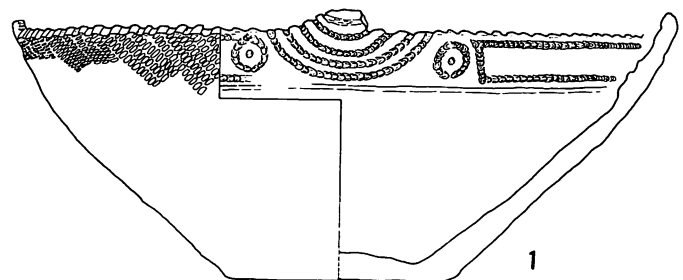
(位置) 調査区中央の西寄り、H-3 Gridに位置する。南側の2号土坑を切る。

(形状) 平面形態は長楕円形、断面形態は現状では浅鉢形に近いが、一部残る壁(東壁)から元は箱形であった可能性が高い。

(規模) 長軸は1.68m、短軸は1.24mを測り、遺構確認面からの深さは0.45mを測る。

(遺物) 土坑底部に接して、1・2 (Fig. 8-2・3)の2点が出土した。1は、縄文土器の浅鉢である。口縁部内面に角押文の連続刺突が、口縁部外面には縄文

(RL)が施される。また、口縁端部には刻み目が巡り、対峙する2カ所に突起が付される。Ⅲ群2類である。2は、縄文土器の深鉢底部である。五領ケ台式に特有の器形である。



#### 4号土坑 (Fig. 9)

(位置) 調査区の北端、K・L-4 Gridに位置し、北側の5号土坑を切る。

(形状) 平面形態は隅丸台形、断面形態は皿形を呈する。

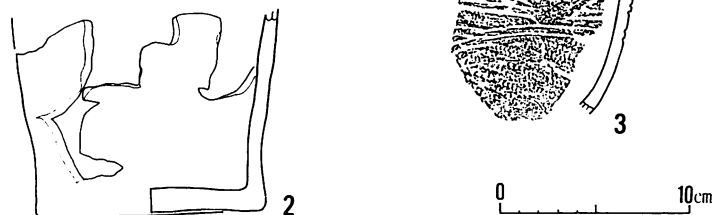


Fig. 8 2・3号土坑出土遺物 (1/4)

(規模) 長軸は0.55m、短軸は0.52mを測る。  
遺構確認面からの深さは0.13mを測る。

5号土坑 (Fig. 9)

(位置) 調査区の北端、L-4 Gridに位置し、南側の4号土坑に切られる。

(形状) 平面形態は長楕円形、断面形態は、浅鉢形を呈する。

(規模) 長軸は約1.0mと考えられ、短軸は0.78mを測る。遺構確認面からの深さは0.15mと非常に浅い。

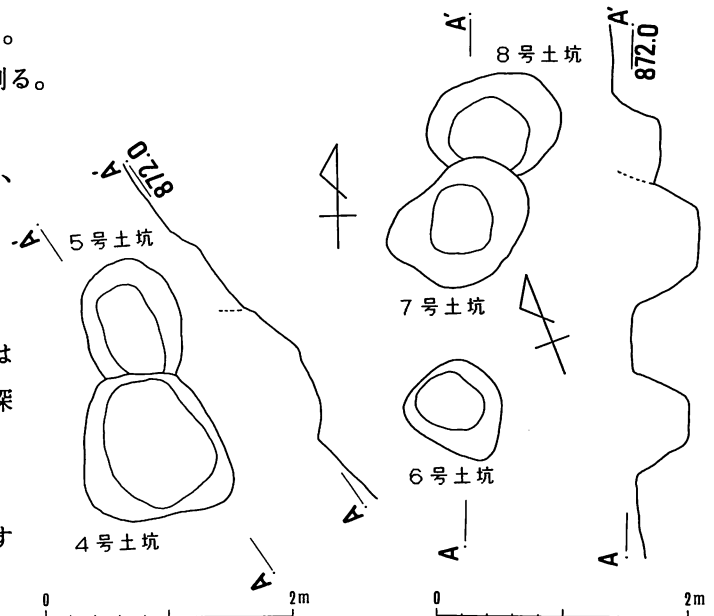


Fig. 9 4・5号土坑

Fig. 10 6・7・8号土坑

6号土坑 (Fig. 10、Pl. 1-5)

(位置) 調査区の北端、K-3 Gridに位置する。

(形状) 平面形態は不整円形、断面形態は台形を呈す。

(規模) 長軸は0.79m、短軸は0.66mを測る。  
深さは0.43mを測る。

7号土坑 (Fig. 10、Pl. 1-5)

(位置) 調査区の北端、K・L-3 Gridに位置する。北側の8号土坑を切る。

(形状) 平面形態は不整円形、断面形態は台形を呈す。

(規模) 長軸は1.05m、短軸は0.83m、深さは0.52mを測る。

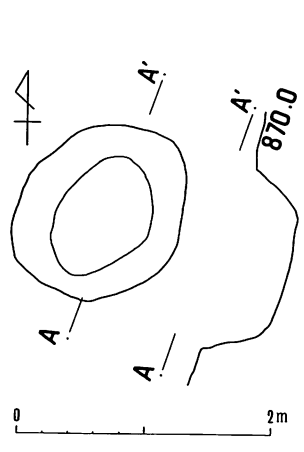
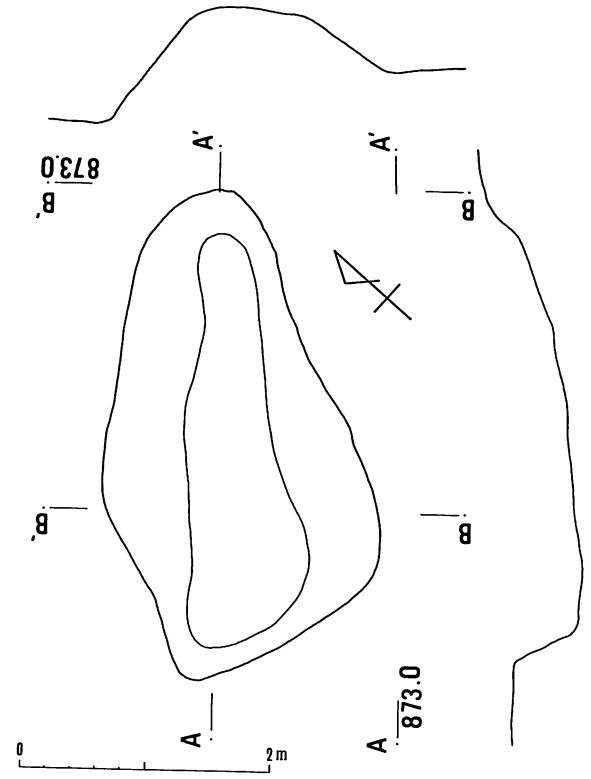


Fig. 11 11号土坑

Fig. 12 10号土坑

Fig. 13 9号土坑

8号土坑 (Fig. 10、Pl. 1-5)

(位置) 調査区北端、L-4 Gridに位置し、7号土坑に切られる。(形状) 平面形態は楕円形、断面形態は箱形を呈する。(規模) 長軸は1.07m、短軸は0.82m、深さは0.34mを測る。

9号土坑 (Fig. 13、Pl. 1-5)

(位置) 調査区北端、K・L-4 Gridに位置する。(形状) 平面形態は不整円形、断面形態は台形を呈する。

(規模) 長軸は3.85m、短軸は2.15m、深さは0.58mを測る。

10号土坑 (Fig. 12)

(位置) 調査区中央西寄り、G-2 Gridに位置する。(形状) 平面形態は楕円形、断面形態は皿形を呈する。

(規模) 長軸は1.91m、短軸は1.15m、深さは0.26mを測る。



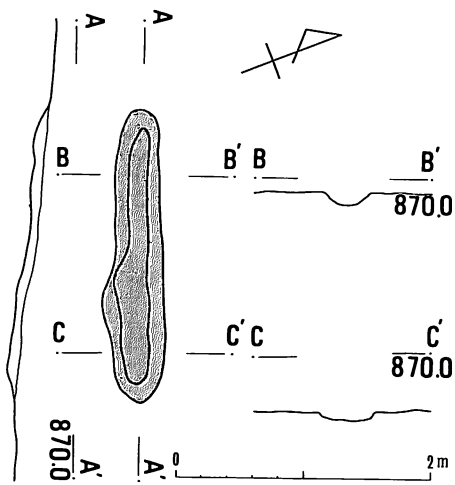


Fig. 14 1号溝状遺構

11号土坑 (Fig. 11)

- (位置) 調査区中央西寄り、H-2 Gridに位置する。
- (形状) 平面形態は楕円形、断面形態は台形を呈する。
- (規模) 長軸は1.43m、短軸は1.26m、深さは0.51mを測る。

(2) 溝状遺構

1号溝状遺構 (Fig. 14、Pl. 1-7)

- (位置) 調査区ほぼ中央、E-3・4 Gridに位置する。緩い斜面上の遺構であり、2号溝状遺構と隣接し、長軸方向を一とする。
- (形状) 平面形態は両端が細く窄まる溝形であり、断面形態は斜面下位(西側)では皿状になり、斜面上位では船底状となる。
- (規模) 全長は2.34mを測り、斜面下位の幅が約0.4m、斜面上位の幅が約0.36mを測る。最大幅は中央から下位にやや下がった部分で、0.5mを測る。深さは約0.1mを測るが、位置によりばらつきがある。底面の東西方向の傾斜角度は約7°~9°を測る。
- (特徴) 底部の全面が焼け、焼土化している。出土遺物はなく、遺構の性格は不明である。

2号溝状遺構 (Fig. 15、Pl. 1-7)

- (位置) 調査区中央東寄り、E・F-4・5 Gridに位置し、1号溝状遺構より斜面上位に隣接する。
- (形状) 1号溝状遺構とほぼ同一であるが、断面形態が全体的に皿形に近くなる点で異なる。
- (規模) 全長は4.60m、斜面下位の幅が約0.51m、斜面上位の最大幅部分が1.05mを測る。深さは最深部で約20cmを測る。底面の傾斜角度は約8°~10°を測り、1号溝状遺構よりやや急な程度である。
- (特徴) 底面全体が1号溝状遺構より強く焼け、ブロック状に焼土塊を残す。性格は不明である。1号溝状遺構と同遺構の可能性もある。

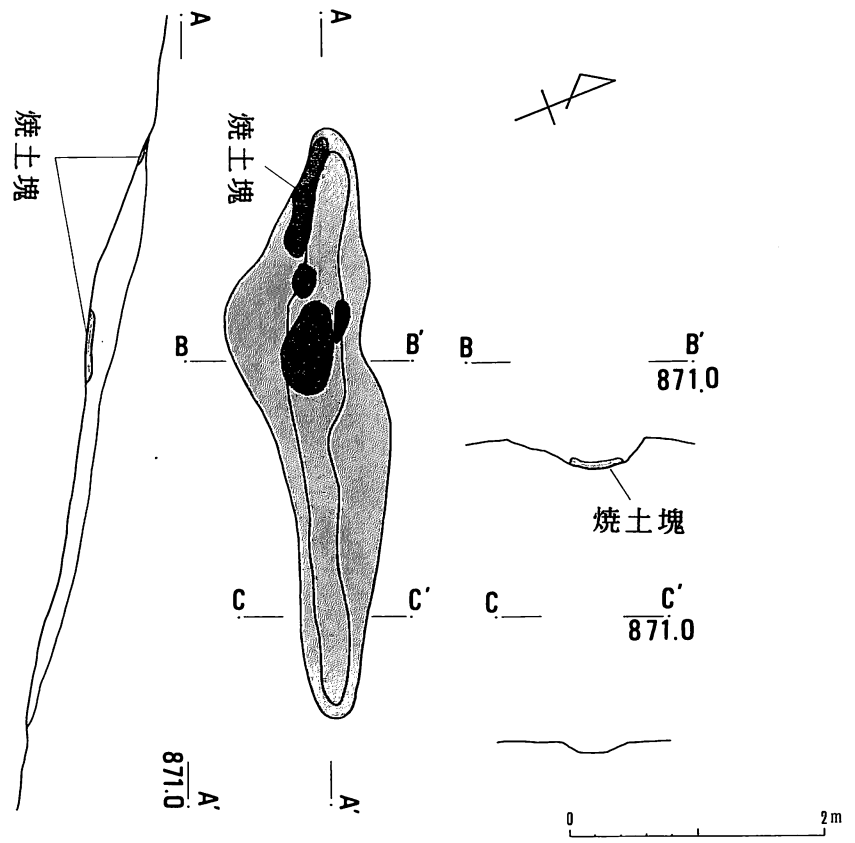


Fig. 15 2号溝状遺構

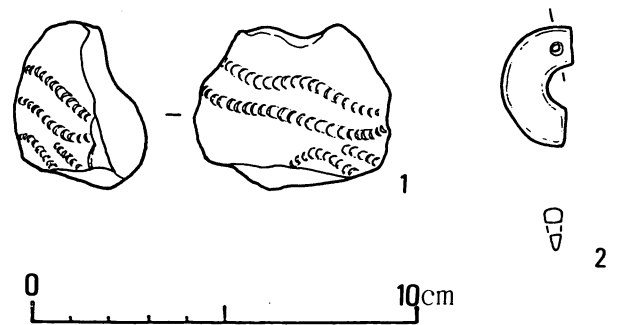


Fig. 16 遺構外出土遺物 土偶・耳飾(1/2)

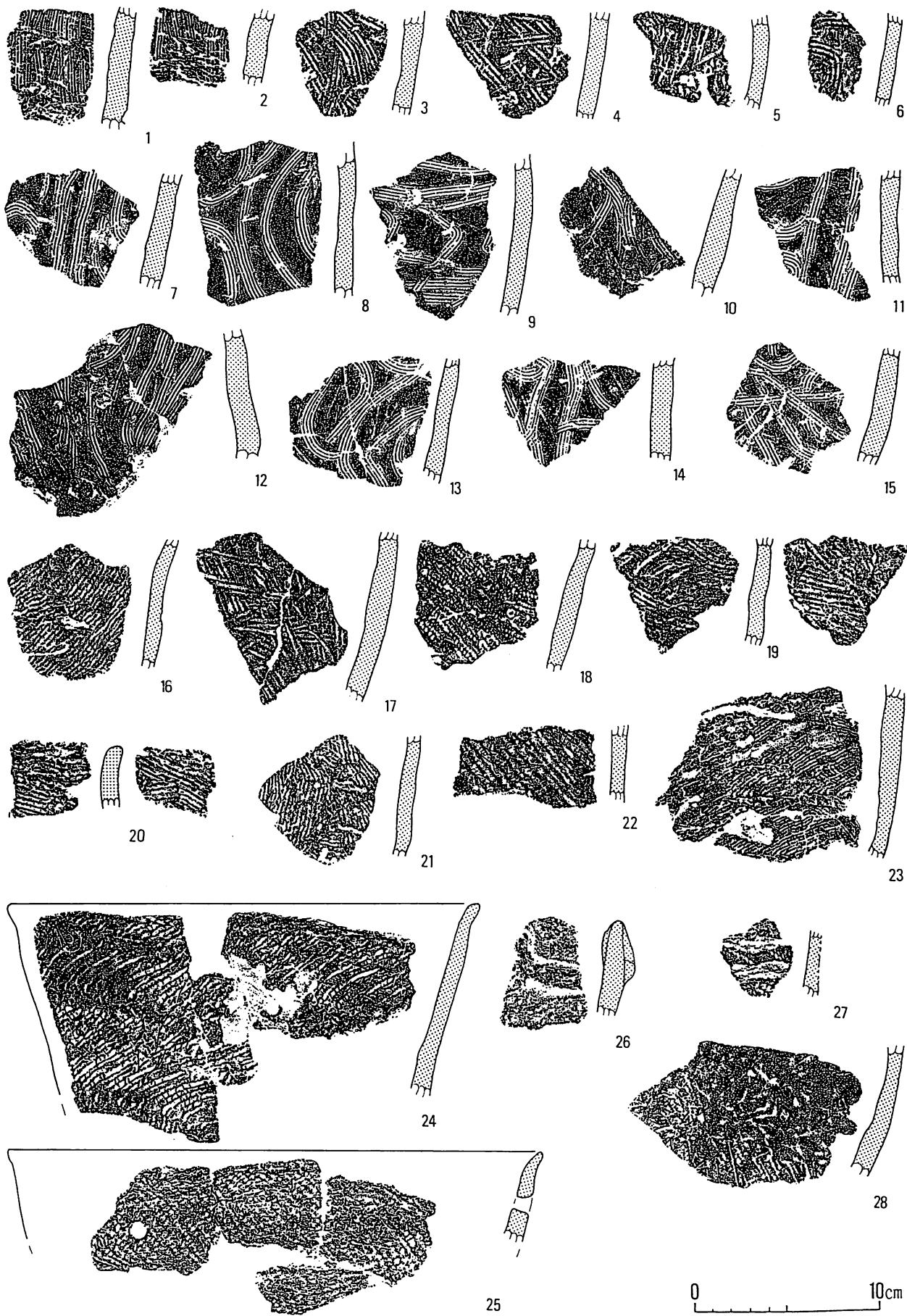


Fig. 17 遺構外出土遺物 縄文土器① (1/3)



Fig. 18 遺構外出土遺物 繩文土器② (1/3)

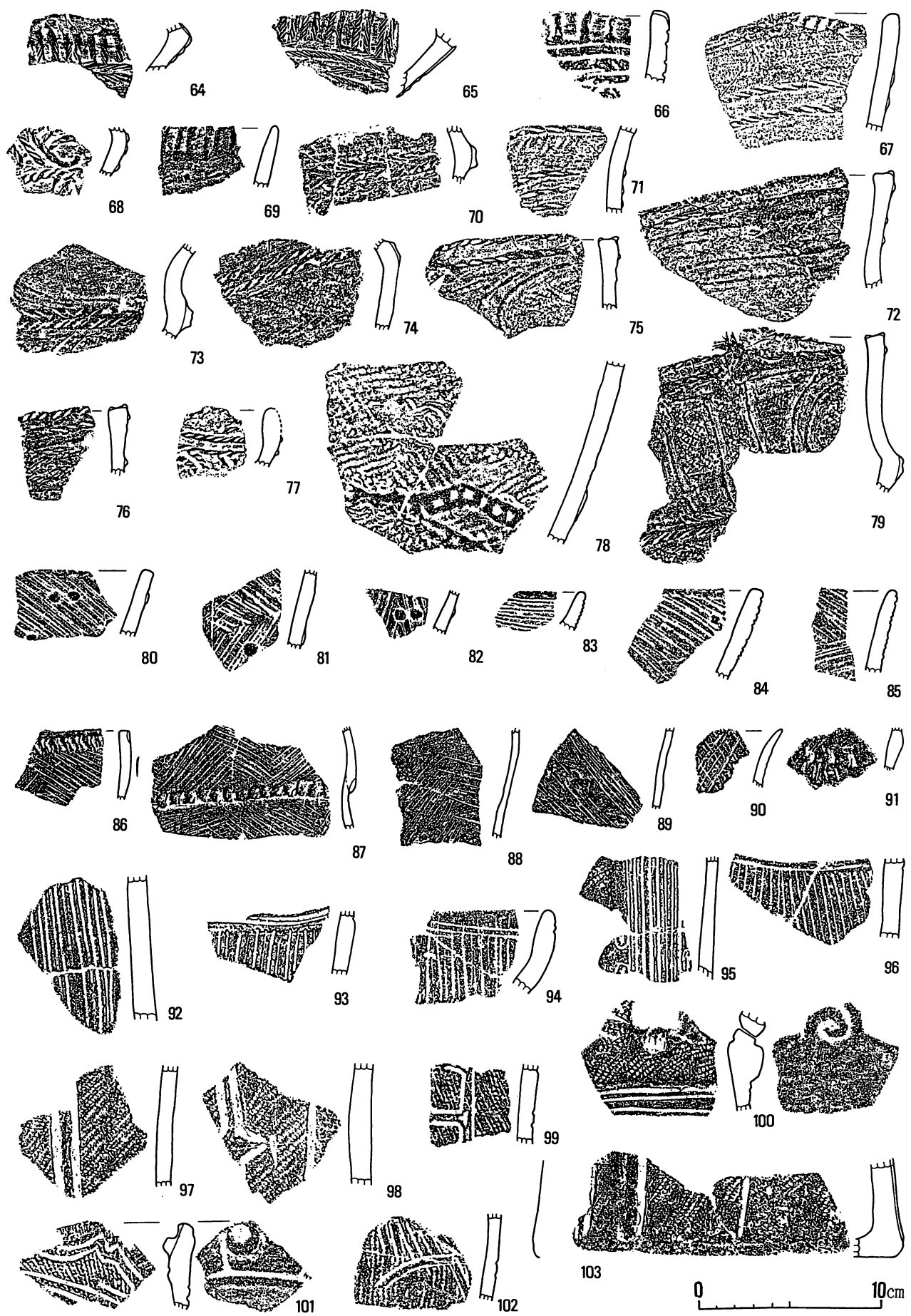


Fig. 19 遺構外出土遺物 繩文土器③ (1/3)





Fig. 20 遺構外出土遺物 縄文土器④ (1/3)

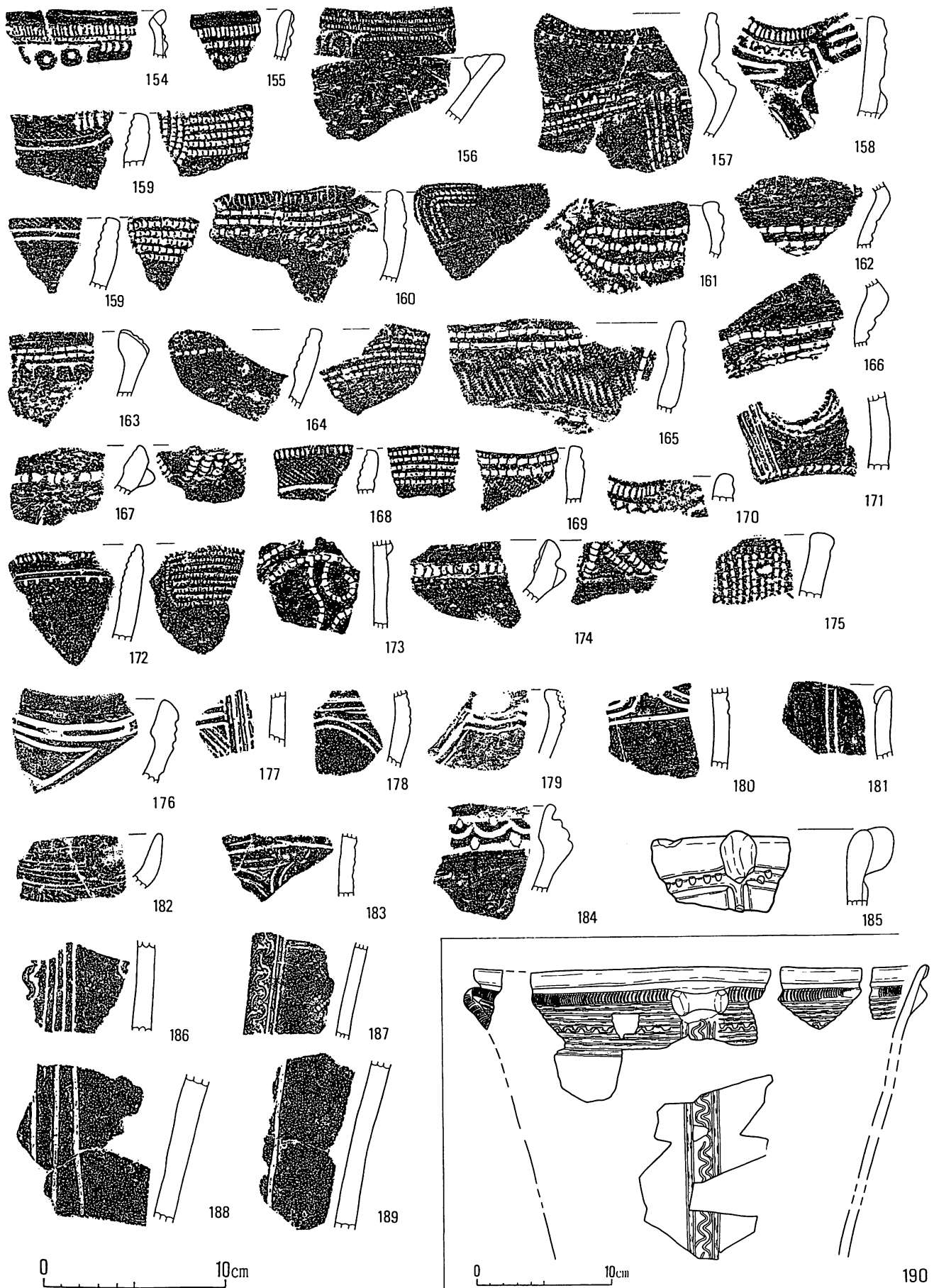


Fig. 21 遺構外出土遺物 繩文土器⑤ (1/3 · 1/4)

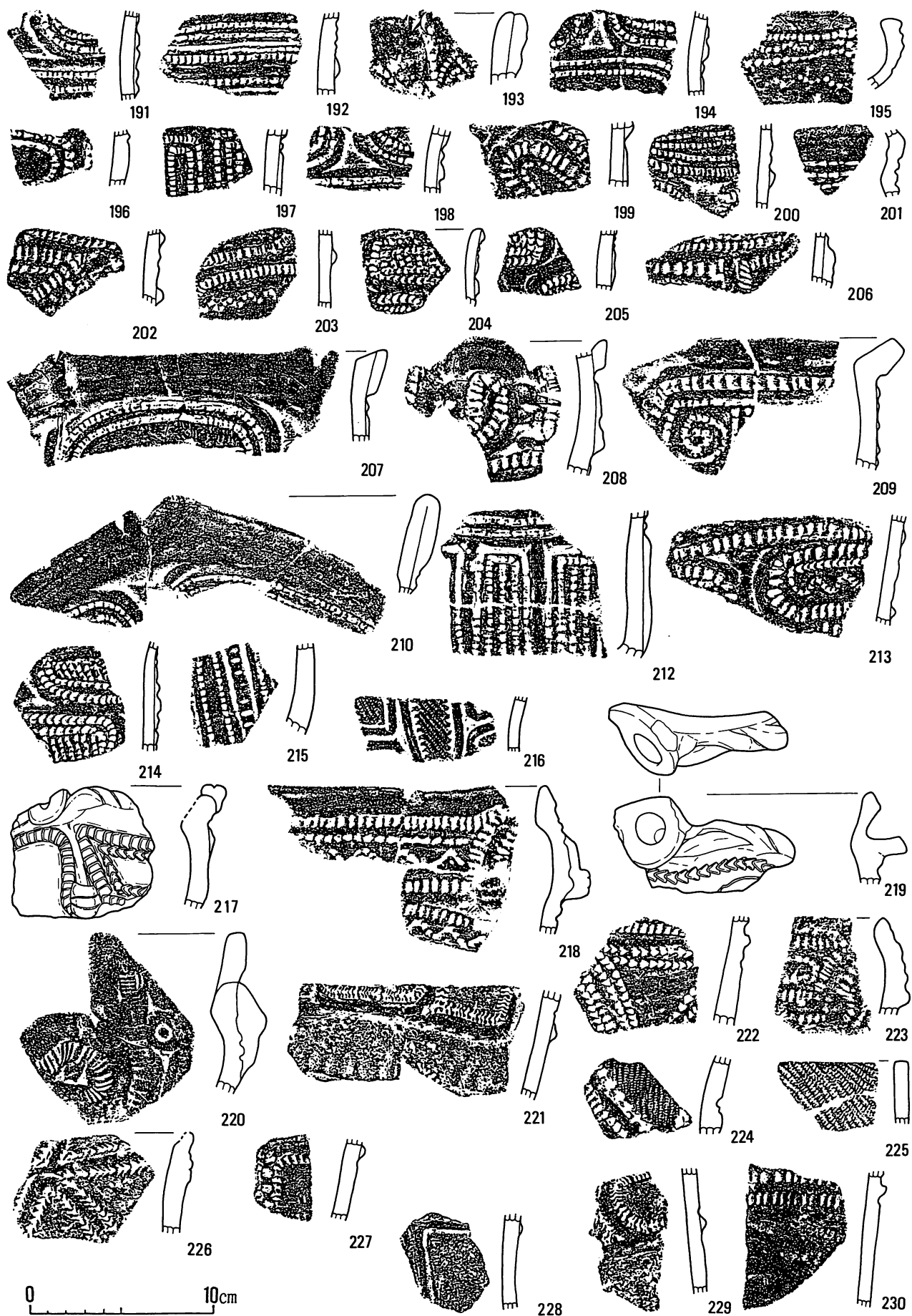


Fig. 22 遺構外出土遺物 縄文土器⑥ (1/3)

(3) 遺構外出土遺物

A地区からの遺構外出土遺物は縄文土器1,200点、土偶1点、玦状耳飾1点、土師器35点である。以下、それぞれについて説明を加える。なお、土師器については、図示可能な資料がないため文章表現による報告に留め、ここに記載する。出土した土師器は甲斐型坏・甕であり、いずれも小破片である。出土位置はG-4・5 Grid周辺に集中するが、遺構等は確認不能であった。坏には甲斐編年IX～X期の所産と考えられる資料もある。

a) 土偶 (Fig. 16-1、Pl. 2-5)

1は、土偶の胴体部下位(腰部)である。出土位置はD-2 Grid北端であり、周辺に遺構はない。形態は丸みを帯びる半円錐形である。表面には半裁竹管による連続押圧による文様が施され、現存する法量は縦が4.2cm、横が5.2cm、奥行(幅)が3.5cmを測る。胎土には雲母を多量に含み、焼成は堅緻である。所産時期は縄文時代中期前半を前後する時期と考えられる。

b) 玦状耳飾 (Fig. 16-2、Pl. 2-4)

2は、石製玦状耳飾である。出土位置はD-2 Grid北西端である。残存状況は約1/2であり、法量は縦3.0cm、横2.9cm、最大厚0.4cmを測る。上部に小孔が穿たれるが、その目的は不明である。また、破損部には調整(磨きなど)の痕跡はなく、割れ口のままである。所産時期は不明である。

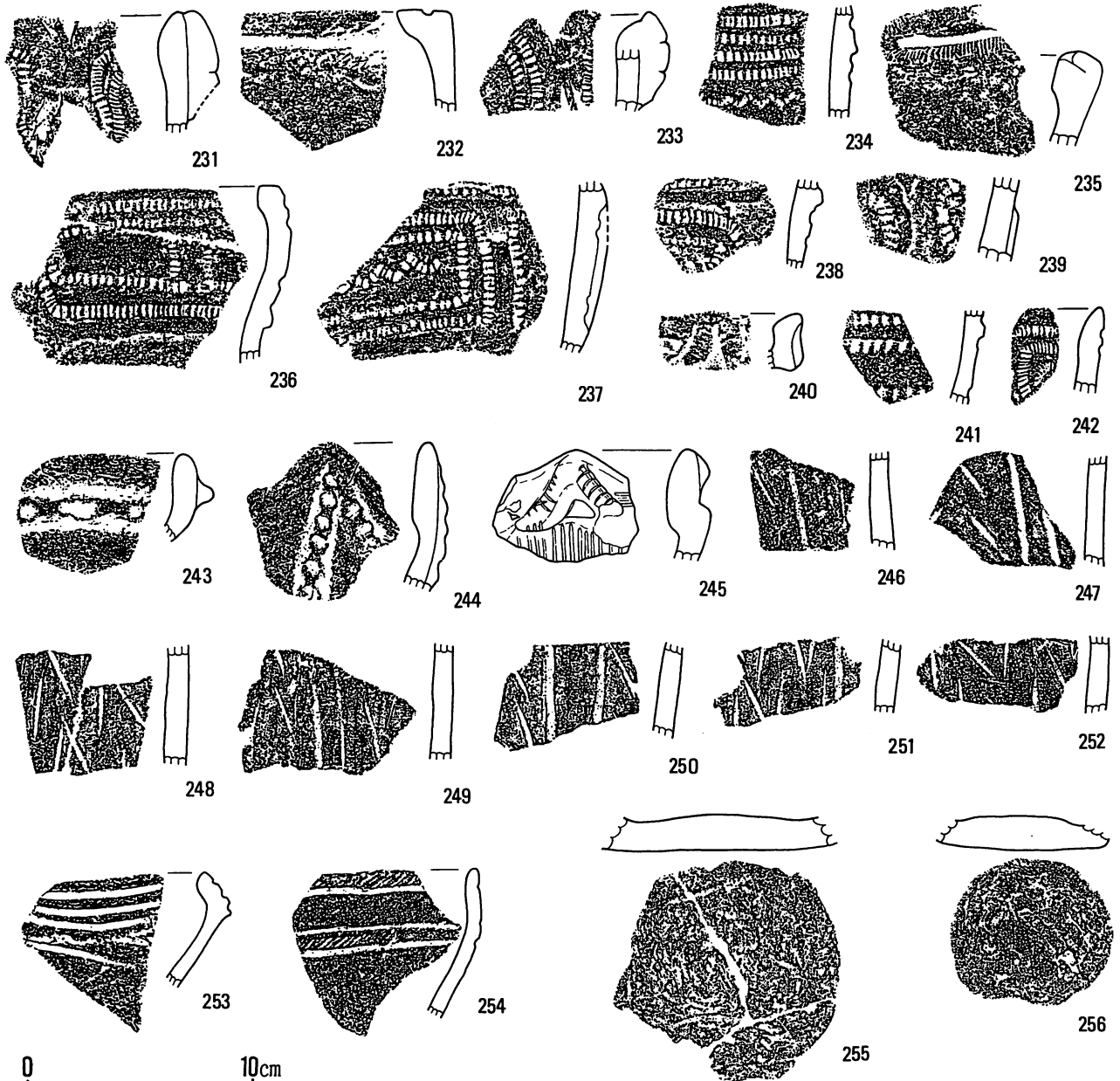


Fig. 23 遺構外出土遺物 縄文土器⑦ (1/3)

c) 縄文土器 (Fig. 17~27、Pl. 2 - 7 ~ Pl. 6 - 15)

A地区から出土した縄文土器の総数は破片資料で約1,200点を数え、その所産時期は前期初頭から後期中葉におよんでいる。各時期の遺物総数はそれぞれ多寡があるが、特に前期初頭・前期後半・中期初頭の遺物が多く出土した。以下、出土した土器を分類し説明を加える。分類については塩川遺跡出土の縄文土器分類表 (Tab. 1) を、各群種類の出土位置については分布図 (Fig. 24~27) を参照されたい。

**II群** (Fig. 17~19、Pl. 2 - 7 ~ 3 - 9) 前期に位置付けられる土器群を一括する。

**II群1類** (1~28) 厚手で胎土は非常に脆く、繊維を多量に含み、内面の調整は雑な撫でが施される程度の一群である。これらの一群は前期初頭に位置付けられる。文様によりさらに数種に細分される。

**II群1類-b種** (1・2) 直線的な条痕文が縦方向に施される一群である。

**II群1類-c種** (3・4・5) 直線的な粗い条痕文が不規則な方向に施される一群であるが、4のように部分的には格子目状になる資料もある。

**II群1類-d種** (6-15) 曲線的な条痕文が施される一群である。条痕文は5条程度の単位で浅いものであり、施文具は貝殻腹縁ないしは櫛状工具と考えられるが不明である。条痕文は曲線を組み合わせた文様となっているが、その方向性等は破片資料のため不明である。

**II群1類-e種** (16~25) 縄文あるいは撚糸文の施される一群である。

**II群1類-f種** (26~28) 無文あるいは粘土紐貼り付けによる隆帯文の施される一群である。26・27は無文の資料であるが、27は混和した繊維ごと器表が剥落している。26は波状口縁の波頂部の資料であろう。口縁直下を横走るタガ状の隆帯と口縁端部から垂下する隆帯の交点が残存している。また、垂下する隆帯は口縁の内面側にも見え、口縁端部を跨ぐように隆帯が付されたことがわかる。

**II群4類** (29~50) 前期後半 (諸磯 a 式ないしは a~b 式) に位置付けられる一群である。胎土には金色雲母を多く含み堅緻である。色調は明褐色を呈す資料が多い。文様によりさらに数種に細分される。

**II群4類-a種** (29~31) 縄文の地文に格子目状の沈線文が施される一群である。施文具は半裁竹管状の工具を用い、2条で一単位となっている。30は口縁部の資料であり、口唇端部直下を横走る沈線文の施文後、体部の沈線文を施している。

**II群4類-b種** (35・39・43・49) 半裁竹管による連続刺突文が施される一群のうち縄文を地文とする一群である。35は横走る平行沈線内の中央を押し連続刺突文、両端を連続刺突文 (爪形文) の3列の文様で充填し、その下位に円形の刺突文を並列して施している。なお、結節痕跡が見える縄文が施される39は35と同一個体であるため、本種に分類してある。49は35に類似するが、連続刺突文の単位等が異なり別個体の可能性が高い。

**II群4類-c種** (32・34・36~38・40~42・44~48・50) 半裁竹管による連続刺突文が施される一群のうち、地文が無文となる一群である。平行沈線内に連続刺突文が施される資料 (34など) と単に連続刺突文が施される資料 (32など) がある。また、連続刺突文 (爪形文) も複数種が存在するようであり、さらに細分は可能である。特に32は不完全な円形刺突文が並列して施される資料であり、他の連続刺突文とは趣が異なる。

**II群4類-d種** (33) 半裁竹管をコンパス状に用い、円形の文様が施される一群である。35のみであるが、円形の文様の中心がコンパスの中心状に凹んでいる。地文は無文である。

**II群5類** (51~82) 前期後半 (諸磯 b 式) に位置付けられる一群である。さらに数種に細分される。

**II群5類-a種** (51~57・59~61) 縄文の地文に沈線文が施される一群である。施文具は半裁竹管を用い、文様は曲線を多用した弧状が主体となるが、61のように平行線状になるものもある。

**II群5類-b種** (58) 縄文のみが施される一群である。58は羽状縄文となる。

**II群5類-c種** (64~79) 浮線文の施される一群である。浮線文はヘラ切りの施されるものが主体となるがヘラ切りの施されないもの (72) もあり、両者が共存するもの (79) もある。また、70・73・74は幅広の隆帯の両側を掴みあげヘラ切りを加え、浮線文が並走するような文様としているものもあり、別分類が可能かも知れない。

**II群5類-d種** (78) 縄文地文に貼付文の施される一群である。78は梯子形の形状を呈する貼付文を2列用



い、菱形（あるいは木葉形）の文様を作り出している。全体的に粗雑な作りである。胎土も脆弱である。

Ⅱ群 5類－e種（62・63） 無文の一群である。やや軟質であり、色調も白色を帯びる点が特徴的である。

Ⅱ群 6類（80～85） 前期後半（諸磯c式）に位置付けられる一群である。斜位・平行の細沈線文上にボタン状貼付文が施されるもの（80～82・84）を基本とするが、ボタン状貼付文がないもの（83・85）も含む。

Ⅱ群 8類（86～91） 前期初頭の土器群のうち、東海系の土器群（木島式）を一括する。いずれも薄手で器面に指頭圧痕が顕著に残る一群であるが、胎土・色調は堅緻で黒色を帯びるもの（86～89）とやや軟質で白色を帯びるもの（90・91）がある。外面には細線が施されるが、矢羽状（86・87・88・91）・斜位（89）・格子状（90）の3列がある。86の口縁部の口唇端部は平坦で、外面にヘラによる刻みが連続して巡る。87の頸部の段部は明瞭であり、成形時に粘土を重複させて作り出されている。段部上の刻みは指頭による抓みによるものだが、刻みの間隔は狭い。また、器外面の細線は深い。91も頸部だがやや厚手の粗雑な作りであり、刻みは指頭による弱い抓み（指頭の押圧？）による。90の口縁部は端部が尖り反り返る。なお、本類の出土位置はF-2・3 Gridに集中する。

Ⅲ群（Fig. 19～23、P 1. 4-10～6-16） 中期に位置付けられる土器群を一括する。

Ⅲ群 1類（92～190） 五領ケ台式に位置付けられる一群である。文様により各種への細分を行なったが各々の要素は交錯することが多く、明確に分類することはできない。

Ⅲ群 1類－a種（92～96・186～190） 半裁竹管による沈線文が施される一群であるが、集合沈線的なもの（92～96）と垂下沈線（蛇行含む）のもの（186～190）がある。

Ⅲ群 1類－b種（97～113） 縄文が施される一群である。沈線文を伴うものは縄文施文後に施されている。

Ⅲ群 1類－c種（114～124・127） 半裁竹管による連続刺突文が施される一群。隆帯上に施すものもある。

Ⅲ群 1類－d種（125・126・128～153・184・185） 刺突文が施される一群。刺突文は交互刺突になるもの（125・126・128～141）とならないもの（142～153・184・185）が存在し、前者はⅢ群 1類－cと共通するもの（125・126・128～131）が多い。

Ⅲ群 1類－e種（154～175） 角押文が施される一群である。本種は後述するⅢ群 2類－a種の角押文が施される一群との区別がやや不明瞭な点があり、時期的な位置付けにも疑問点があるものも含まれる。

Ⅲ群 1類－f種（176～183） a～f類に分類できなかった一群だが、沈線文の施されるものが主体となる。

Ⅲ群 2類（191～220） 中期前半に位置付けられる一群である。角押文が施されるものが主体である。

Ⅲ群 3類（221～230） 中期前半に位置付けられる一群である。三角文が施されるものが主体であるが、縄文の施されるもの（224・225）もある。

Ⅲ群 4類（231～242） 中期中葉に位置付けられる一群である。角押文の施されるものが多いが、Ⅲ群 2類ほど明瞭な深い角押文ではない。

Ⅲ群 5類（243～245） 中期中葉に位置付けられる一群である。

Ⅲ群 1類～5類（特に2類～4類）については分類は行なったものの、角押分や三角押文などの分類が曖昧であり、時期的な位置付けについても誤認している部分が多いものと思われる。

Ⅲ群 6類（246～252） 中期後半（曾利式）に位置付けられる一群で、さらに数種に分類される。A地区からはb種（曾利V式）のみが出土している。すべて「ハの字」文が施されるものばかりである。

Ⅳ群（Fig. 23、P 1. 6-15） 後期に位置付けられる土器群を一括する。

Ⅳ群 2類（253） 後期前半（堀之内I式？）に位置付けられる一群である。260は浅鉢の口縁部と考えられ、口縁部に沈線文が2条巡り、体部にも沈線文が施される。

Ⅳ群 3類（254） 後期中葉（加曾利B式？）に位置付けられる一群である。261は深鉢の口縁部と考えられ、沈線区画内には縄文が施される。しかし、充填されたものか磨消したものなのかは不明である。

Ⅵ群（Fig. 23、P 1. 6-15） 各群に分類できない時期不明の土器を一括する。2点（255・256）とも底部資料である。

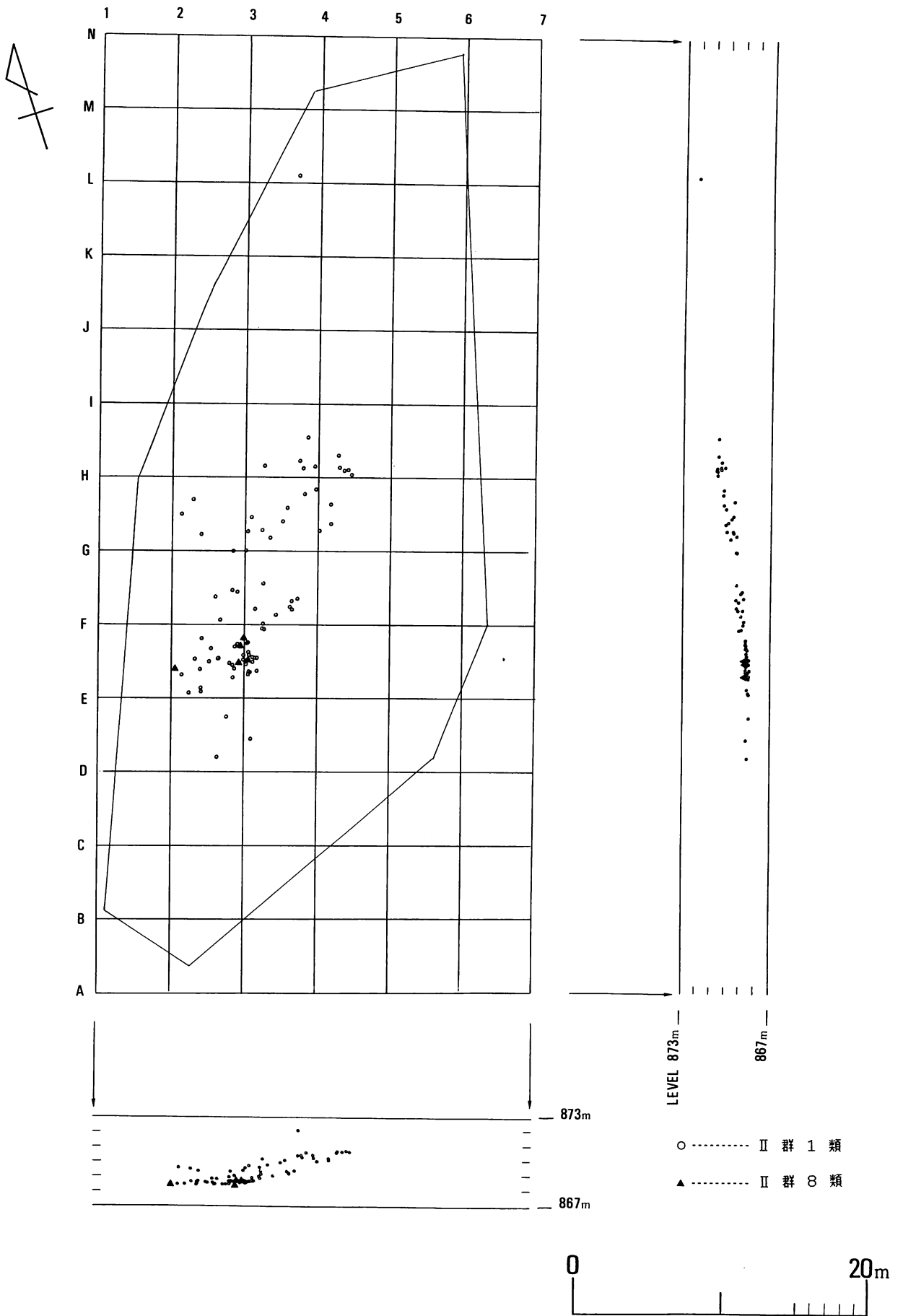


Fig. 24 縄文土器Ⅱ群1類およびⅡ群8類の分布

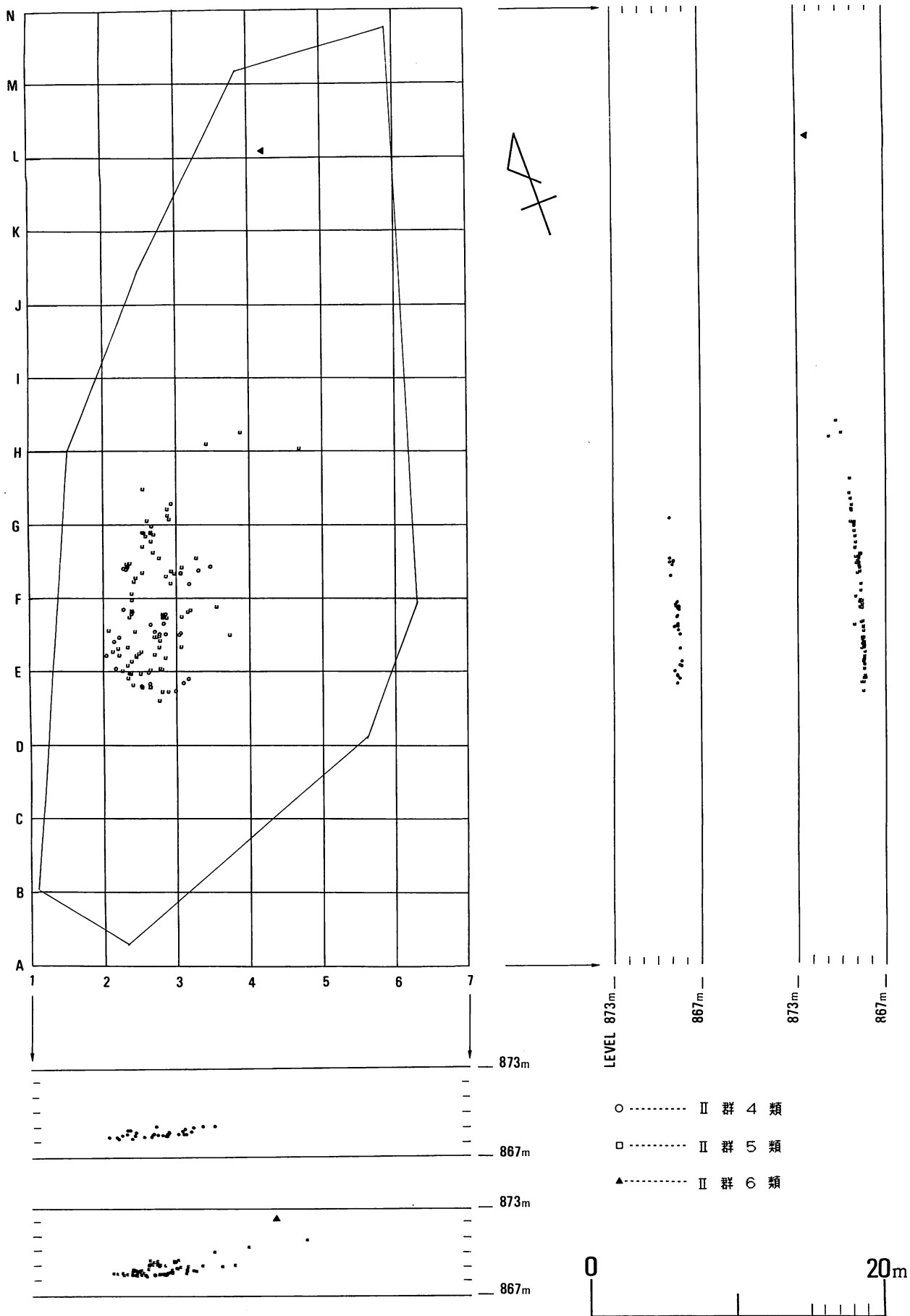


Fig. 25 縄文土器Ⅱ群4類・5類・6類の分布

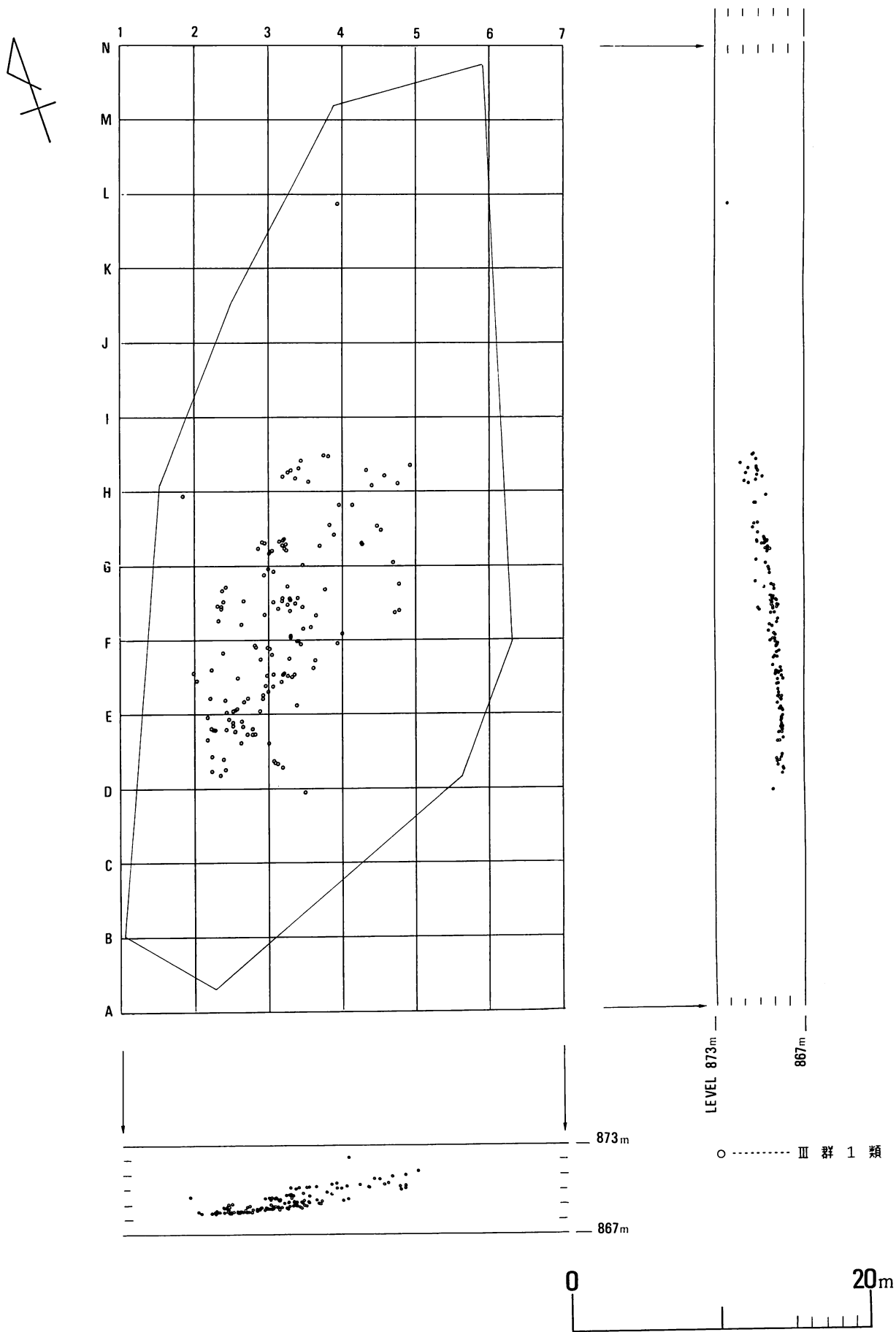


Fig. 26 縄文土器 Ⅲ群 1類の分布

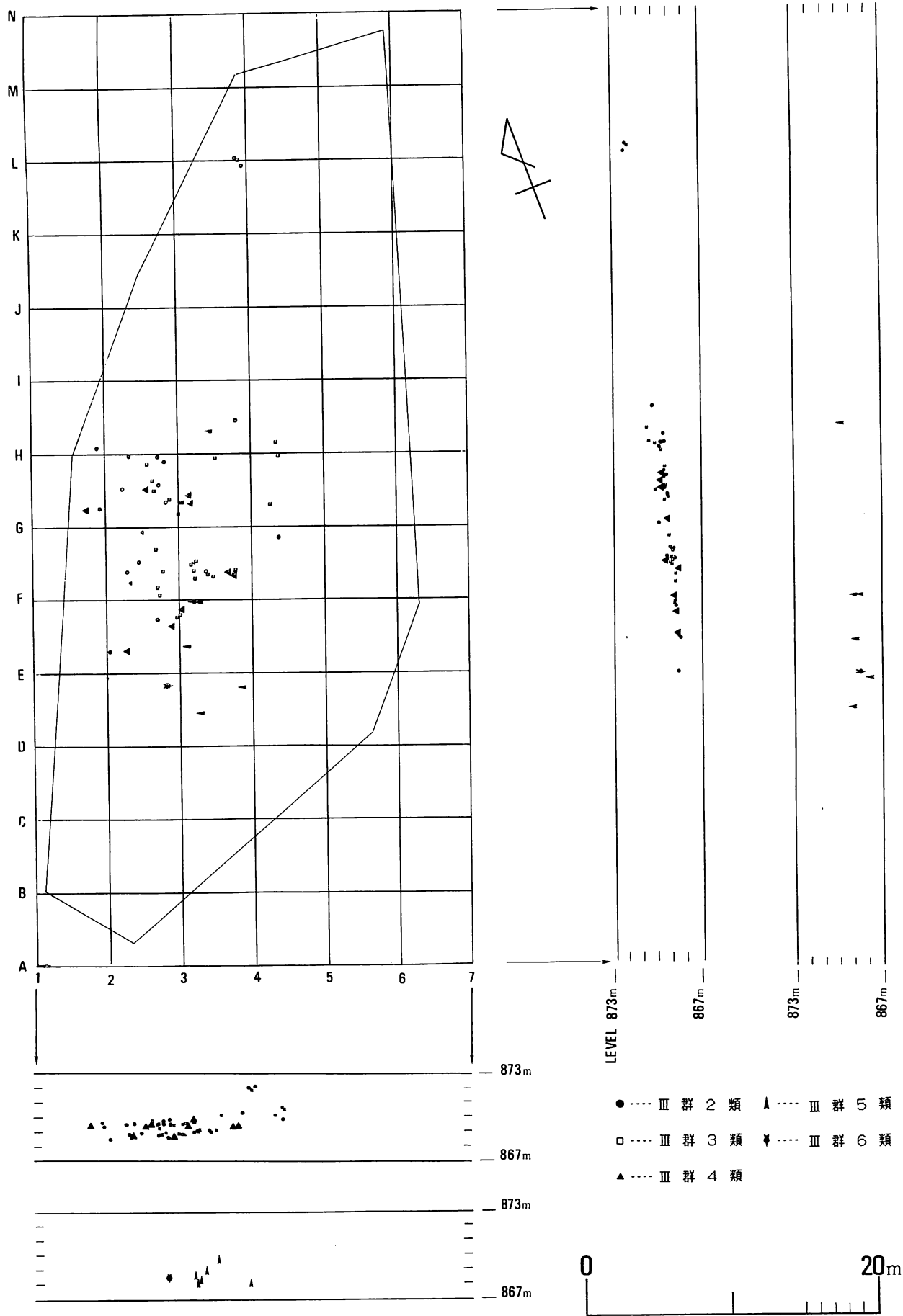


Fig. 27 縄文土器Ⅲ群2類～6類分布図



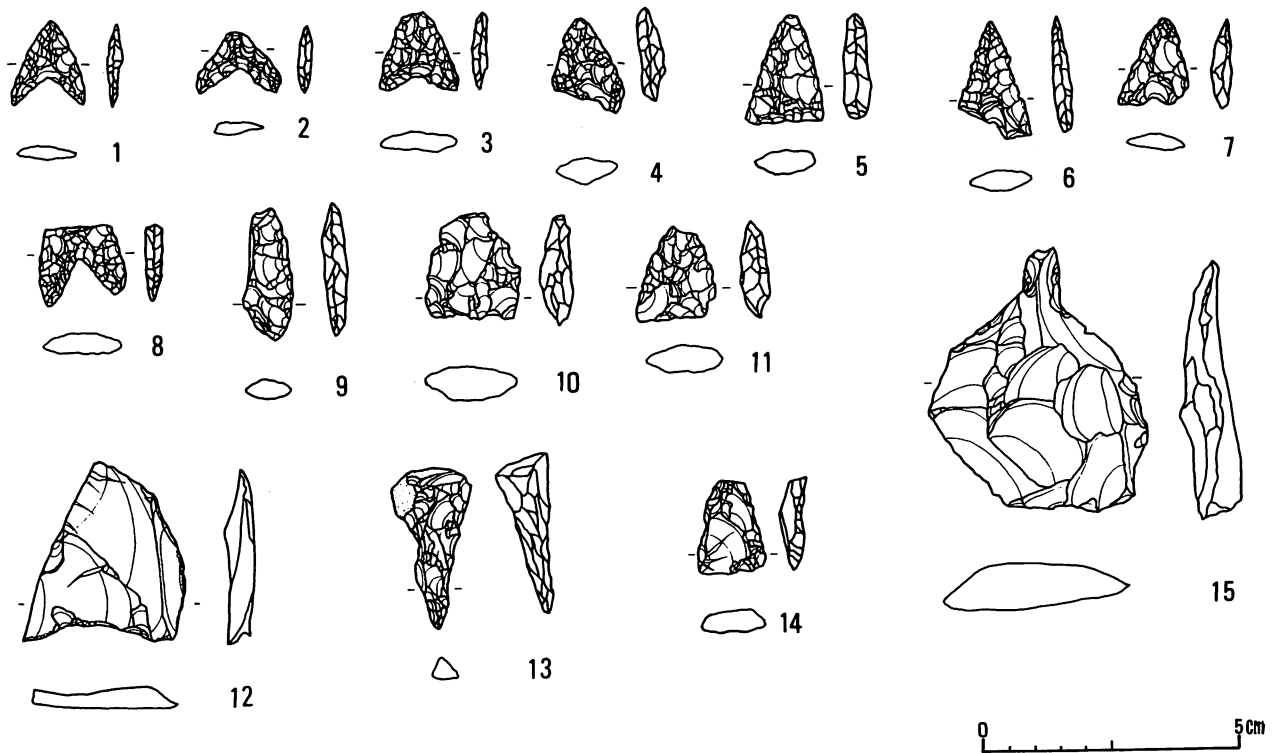


Fig. 28 遺構外出土遺物 石器① (1/3)

d) 石器 (Fig. 28・29・30・31・P. 1. 6-7)

A地区から出土した石器は総点数80点以上におよぶ。ここでは、それらのうち図示した41点の資料について説明を加える。なお、磨石等については図示可能な資料が少なく、約10点程度が出土したことのみに文章報告するに留めておく。

①石鏃 (Fig. 28-1~11、P. 1. 7-17)

11点を図示した。石材はすべて黒曜石であるが、形態は凹基無茎鏃(1~4・6~9)と平基無茎鏃(5・10・11)の2形態が認められる。

②石錐 (Fig. 28-13、P. 1. 7-17)

1点を図示した。石材は黒曜石であり、頭部の上端と側面の一部には自然面が残存している。錐部と頭部が明瞭に分かれ、錐部のみに調整が施される。

③その他 (Fig. 28-12・14・15、P. 1. 7-17・18)

12は使用痕のある剥片であり、石材はチャートである。実測図の左側面と下部に調整とは考え難い「使用痕」が認められる。14は用途不明の石器であり、石材は黒曜石である。実測図の右側面と下部の一部に、表裏面からの押圧剥離が認められる。石鏃の未製品である可能性もある。15は石匙の未製品と考えられる。石材はチャートである。形状から石匙の未製品としたが、調整は粗雑な状態であり未確定要素が強い。

④磨製石斧 (Fig. 29-16、P. 1. 7-19)

A地区から出土した磨製石斧は図示した1点のみである。石材は蛇紋岩であり、表面は摩滅が著しい。乳棒状磨製石斧の形態であるが、刃部は欠損しており、基部を主体的に残存している。

⑤ 打製石斧 (Fig. 30-17~41、P. 1. 6-15、P. 1. 7-16)

25点を図示した。石材は粘板岩(17~39)、頁岩(40~41)である。形態はほとんど短冊形であるが、基部が尖るようなタイプ(34・35等)は別に分類することが可能かもしれない。

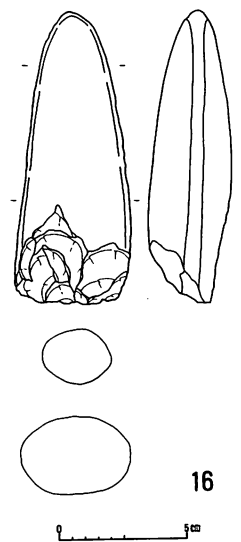


Fig. 29 石器② (1/3)

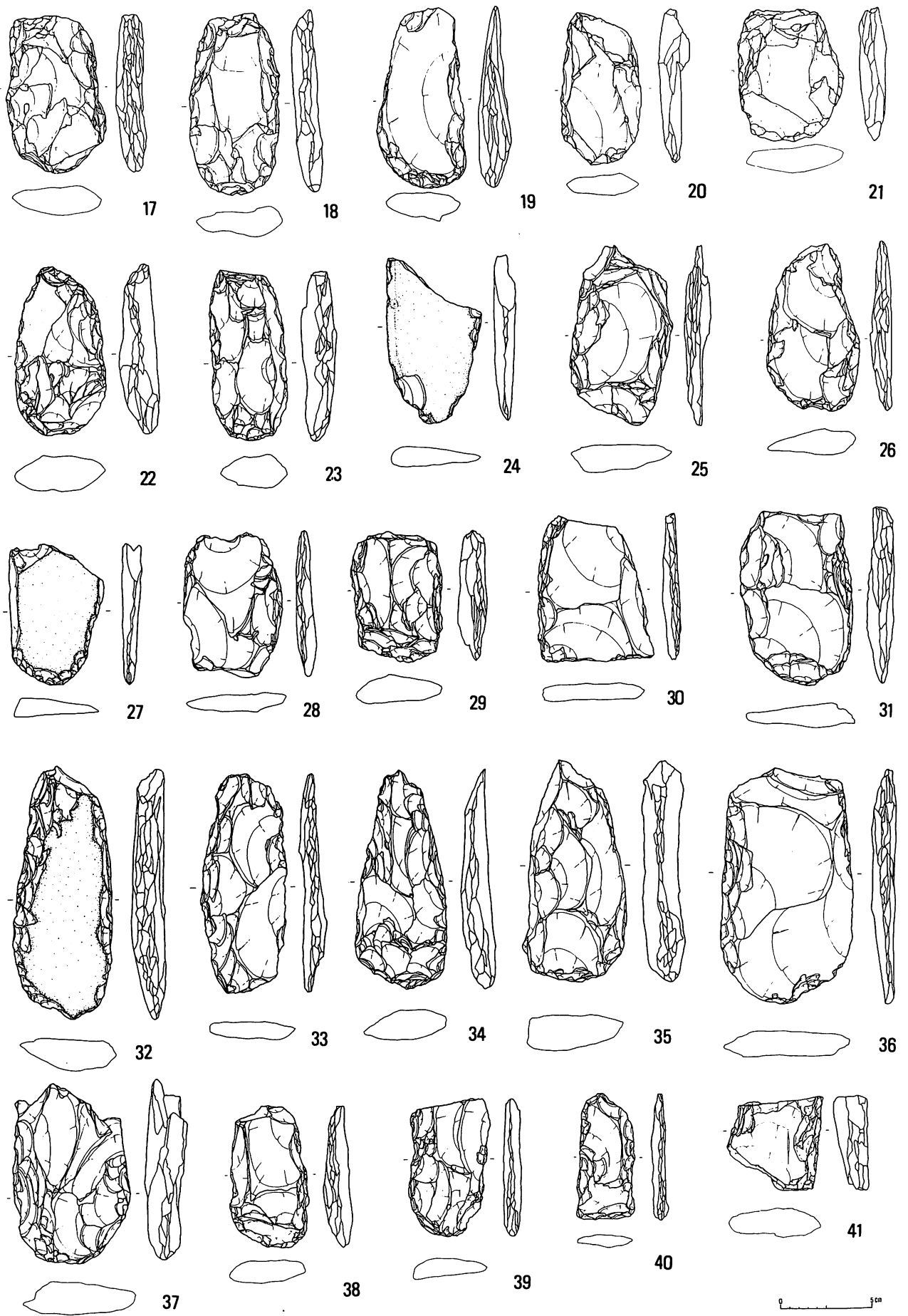


Fig. 30 遺構外出土遺物 石器③ (1/3)

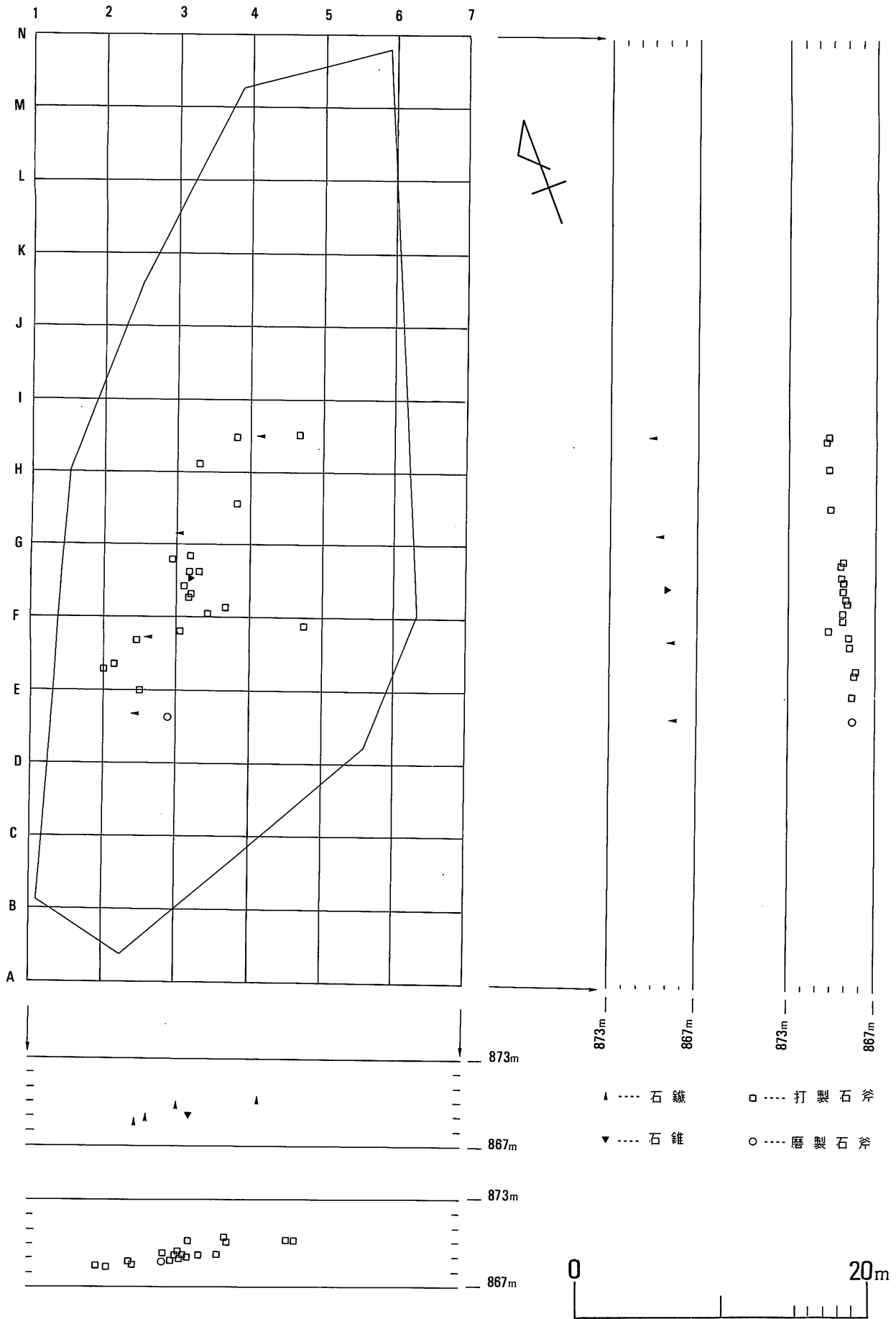


Fig. 31 石器分布图

# 第IV章 B地区の調査

## 第1節 調査の概要

B地区は、須玉町字小尾200番地他に位置する。地形等は第II章－第1節「自然的環境」を参照されたい。

調査は平成元年度および2年度に実施したが、その経緯と経過については第I章－第1節にあるとおりである。

調査前のB地区は、住宅・神社・畑地等に利用されており、一部は保育園の造成もされていた。元年度の調査では、まず遺跡の範囲を確認すべく、任意にトレンチを設定し試掘調査を行なった。その結果、総面積約5,500㎡におよぶ遺跡の範囲を確認し、本調査を開始した。

調査に先立ち、調査区にGridを設定した。(右図参照)

Gridは北(磁北より7°東へふれる)を基準とする南北方向の基本線とこれに直交する東西方向の基本線をもとに、一辺5mの正方形にて設定した。各Gridの名称は、南西端のポイント杭名称を付すこととした。そのポイント杭は調査区南西端より北へ1～20……(東西ライン)、東へ1～16……(南北ライン)と整数の番号を両者に振り、(北へ並ぶ番号)－(東へ並ぶ番号)で呼称した。調査はこのGridを基本に進め遺構の測量、遺構外出土遺物の取り上げ、調査中のトレンチ設定、調査日誌作成などの基本とした。

なお、Gridの名称は整数を連続させた名称で煩雑である。これは元年度に一時併行して調査していたA地区のGrid名称と重複することを避け、整理調査に支障をきたさない様に対処したためであり、了承されたい。

調査は排土を調査区内で処理する必要があったため、段階的に行なった。元年度の調査は、1～4区を対象とし、2年度の調査は残る全区(5～8区)および0-20 Grid付近の「五輪塔集中区」を対象とした。

調査は試掘調査により確認した表土層を重機により除去し、遺構・遺物の確認に努めた。遺構はいずれも、第III層・第IV層上面にて確認されたが、各遺構を層位的に時期区分して捉えることはできず、時期の判断は出土遺物や形態的な特徴で行なうよりなかつた。遺構の残存状況も地点によっては良好でなく全体像を検出することができなかった遺構も多い。また、遺物は主に第III層下位や第IV層上面から出土し、各時期の遺物がほぼ同一の層から出土し、その情報を抽出することが困難であった。遺跡の地形や多時期におよぶ土地利用が大きく影響しているものと考えられる。

記述が前後してしまうが、B地区の層位について触れておく。調査区全体についての層位は決して一様ではなかったが、おおむね以下の様に捉えられた。

第I層 表土層であり、暗褐色の色調を呈す。

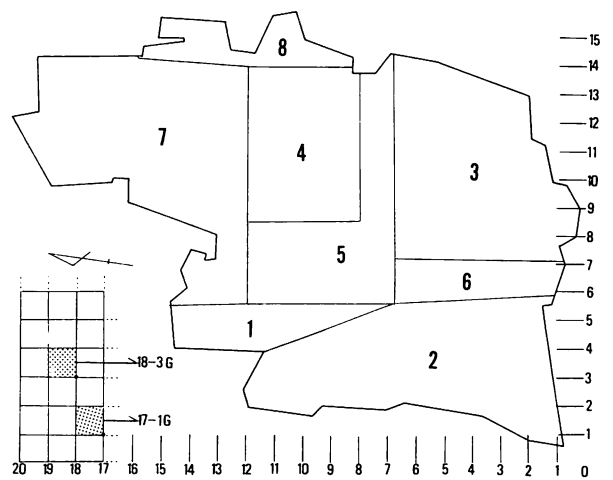
第II層 暗褐色土。砂質であり礫を多量に含む。

第III層 黒褐色土。砂質であり、第II層より少量の礫層を含む。調査区西半に主体的に見られる。

第IV層 黄褐色土。砂質であり、礫は50cm以上の大礫をも含む。各遺構は本層を掘り込んで構築される。

これらの土層以外にも、間層が存在したり、地点によって異なる点が多いが、基本土層からは除外した。

調査により確認された遺構・遺物は縄文時代早期から晩期、古墳時代初頭、平安時代、中・近世の長時期におよぶ。それらの内容については、第2節以下において述べていくこととし、ここでは省略する。



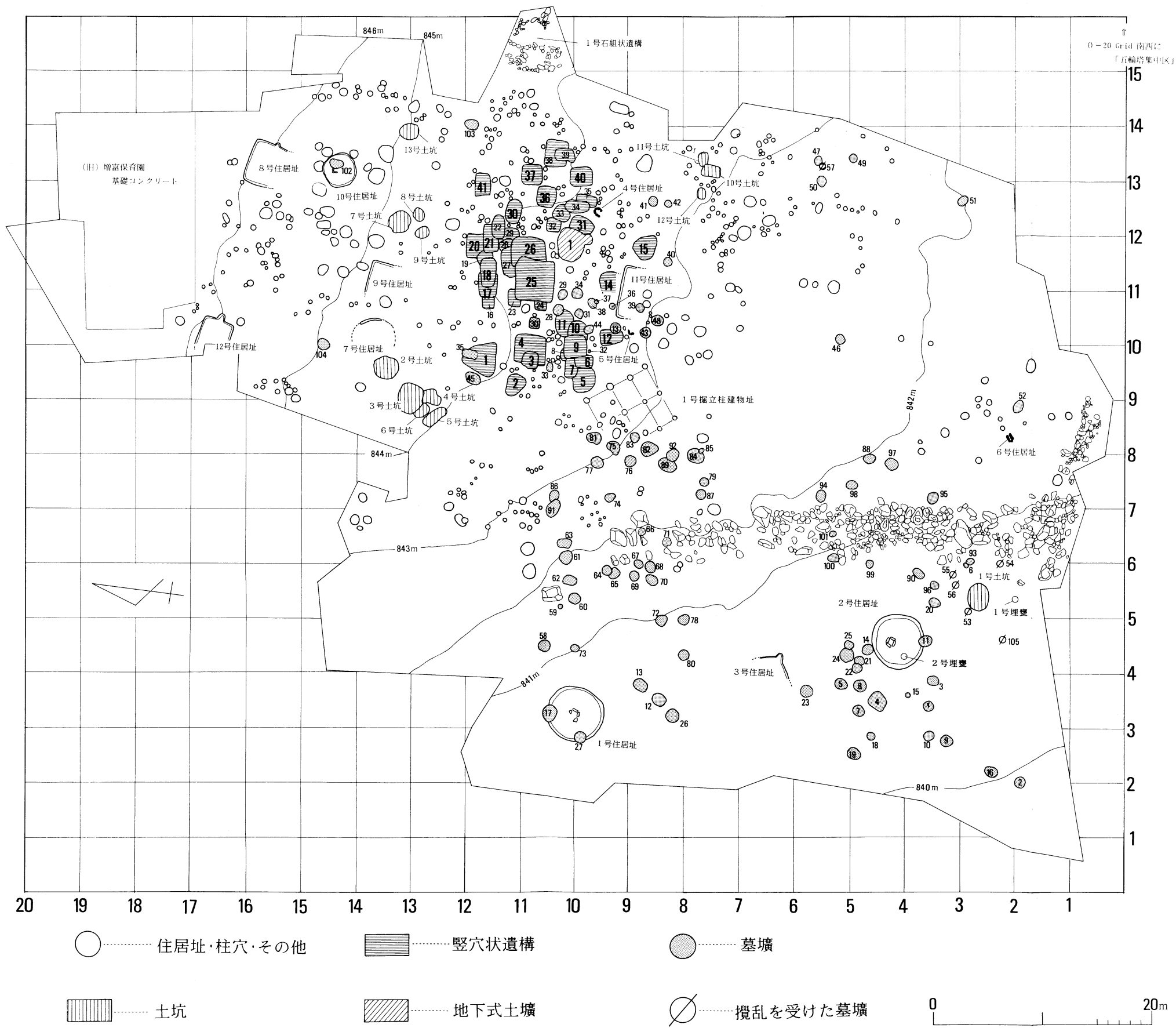


Fig. 32 B地区 遺構全体図

## 第2節 調査された遺構と遺物

### (1) 縄文時代

#### 1) 竪穴住居址

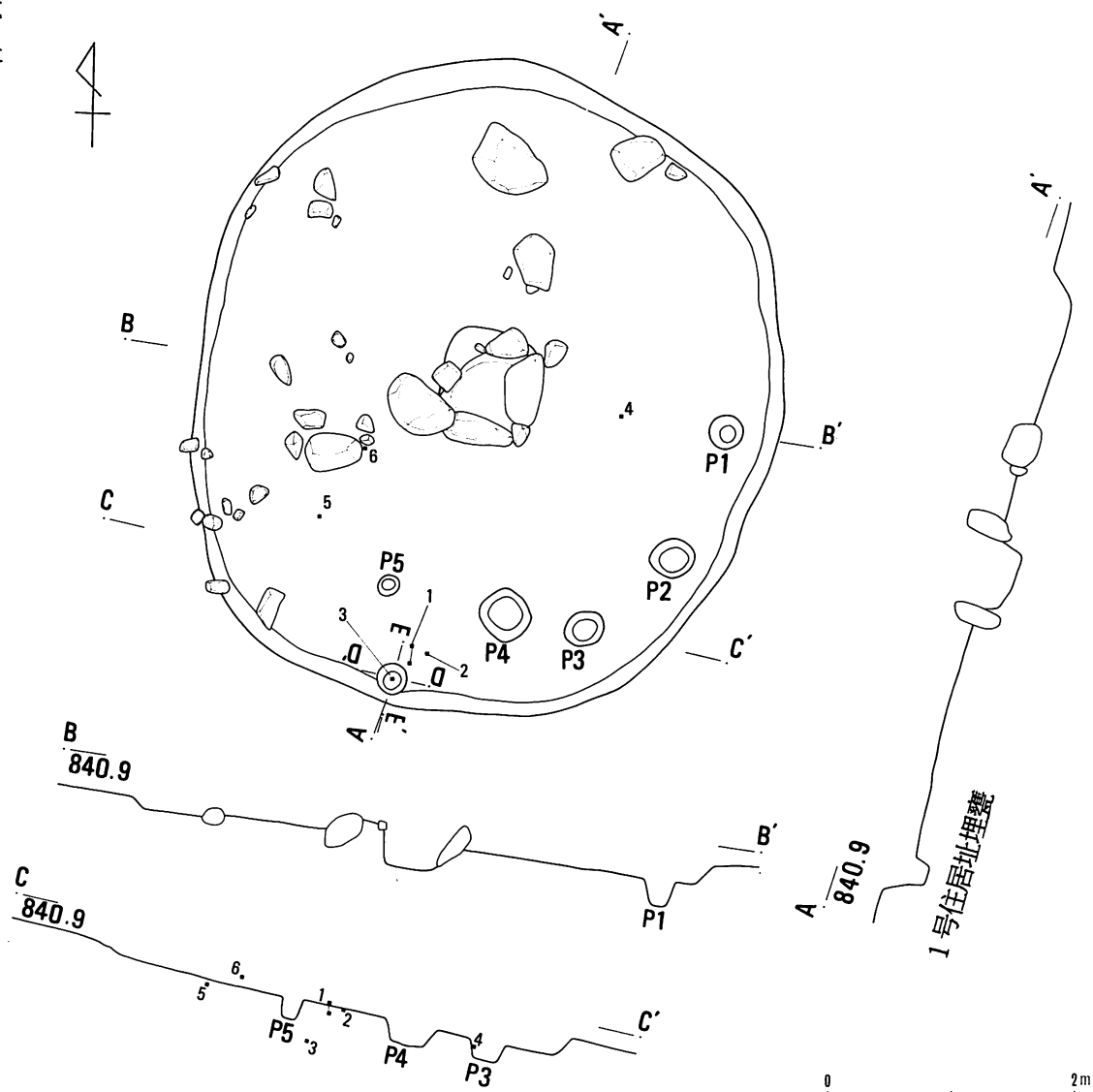


Fig. 33 1号住居址

#### 1号住居址 (Fig. 33・34・35、P1. 8-5・6、P1.19-1)

(位置) 調査区の北西端の平坦地、9-2・3 Grid・10-2・3 Gridに位置し、第層上面にて確認された。

(形態) 平面形態は、南北にやや長い楕円形を呈する。主軸は北から東へふれる。規模は、南北5.3m×東西4.7mを測る。壁高は残存状況の良好な北壁部で0.24mを測り、残存状況が不良な南西部は壁が0.05mを測る。床面は平坦だが、南西側へやや傾斜する。特に硬化する部分や周溝は確認されなかった。

(炉) 住居址のほぼ中心に方形の石囲い炉が検出された。規模は南北1.0m×東西0.9m、床面からの深さ0.25mを測る。主軸方位はN-9°-Eである。北西側が一部、欠損する他は残存状況は良好である。最大幅50cm程度の礫を主体的に、

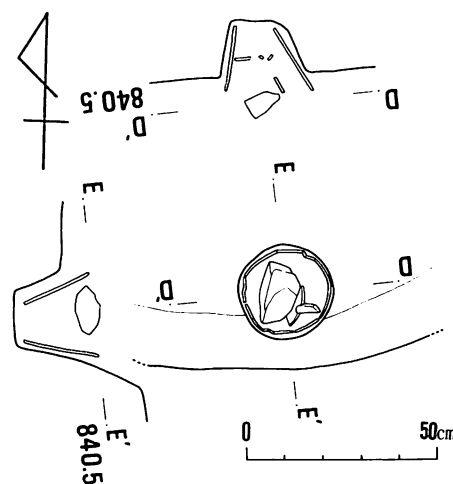


Fig. 34 1号住居址内 埋甕



最大幅20cm程度の礫を補助的に使用している。礫の炉内面側はいずれも強く焼けていたが、炉の底面は焼土化せず、覆土に含まれる焼土・炭化物も極めて少量であった。

(柱穴) 住居址南側・北側は不明だが、南東側において、P 1～P 5 の5基が検出された。平面形態はいずれも円形を呈し、P 1 は南北0.28m×東西0.28m、深さ0.2mを測り、以下同様にP 2 は0.32m×0.35m、0.23m、P 3 は0.28m×0.32m、0.15m、P 4 は0.43m×0.41m、0.14m、P 5 は0.18m×0.15m、0.17mを測る。

(埋甕) 住居址の南壁際に屋内埋甕が1基検出された。掘り方の平面形態は円形であり、規模は南北0.26m、東西0.25m、床面からの深さ0.16mを測る。埋甕本体には底部を欠損する深鉢形土器 (Fig. 35-3) が使用され、正位に埋設されている。本体覆土は黒褐色土であり、特に混入物は認められなかった。また、埋甕の上部には長さ12cm、幅9cm、厚さ5cmの礫が蓋状に埋置されていた。

(遺物) 6点を図示した (Fig. 35-1～6)。すべて縄文時代中期後半の土器である。1は深鉢で現存高19.8cm、地文は櫛状工具による縦条線文であり、後に蛇行懸垂文が施される。2は甕で現存高22.2cmで地文は櫛状工具による縦条線文であり、後に粘土帯貼り付けによる渦巻文が施される。3は埋甕本体の深鉢である。口径23.8cm、現存高22.1cm、口縁部直下に棒状工具による沈線文が一条横走り、他は無文である。4は深鉢で現存高19.8cm、文様は2に類似する。5は深鉢で断面三角形の細い隆帯による区画内が櫛状工具による条線文で充填され、口縁部直下に指等による撫でが横走る。6は深鉢形の体部である。地文は櫛状工具による綾杉状条線文であり、後に蛇行懸垂文が施される。

2号住居址 (Fig. 36・37・38、Pl. 8-7・8、Pl. 19-2)

(位置) 調査区の南西側の平坦地、4-4・5 grid・3-4・5 gridに位置し、第三層上面にて確認された。

(形態) 平面形態は不整円形を呈す。規模は南北4.35m×東西5.11mを測り、壁高は南壁で0.2mを測る。しかし、本住居址は砂地に位置するため壁面はだれており、規模・壁高は不明確である。床面は平坦だが南側へやや傾斜する。硬化面や周溝は確認されなかった。

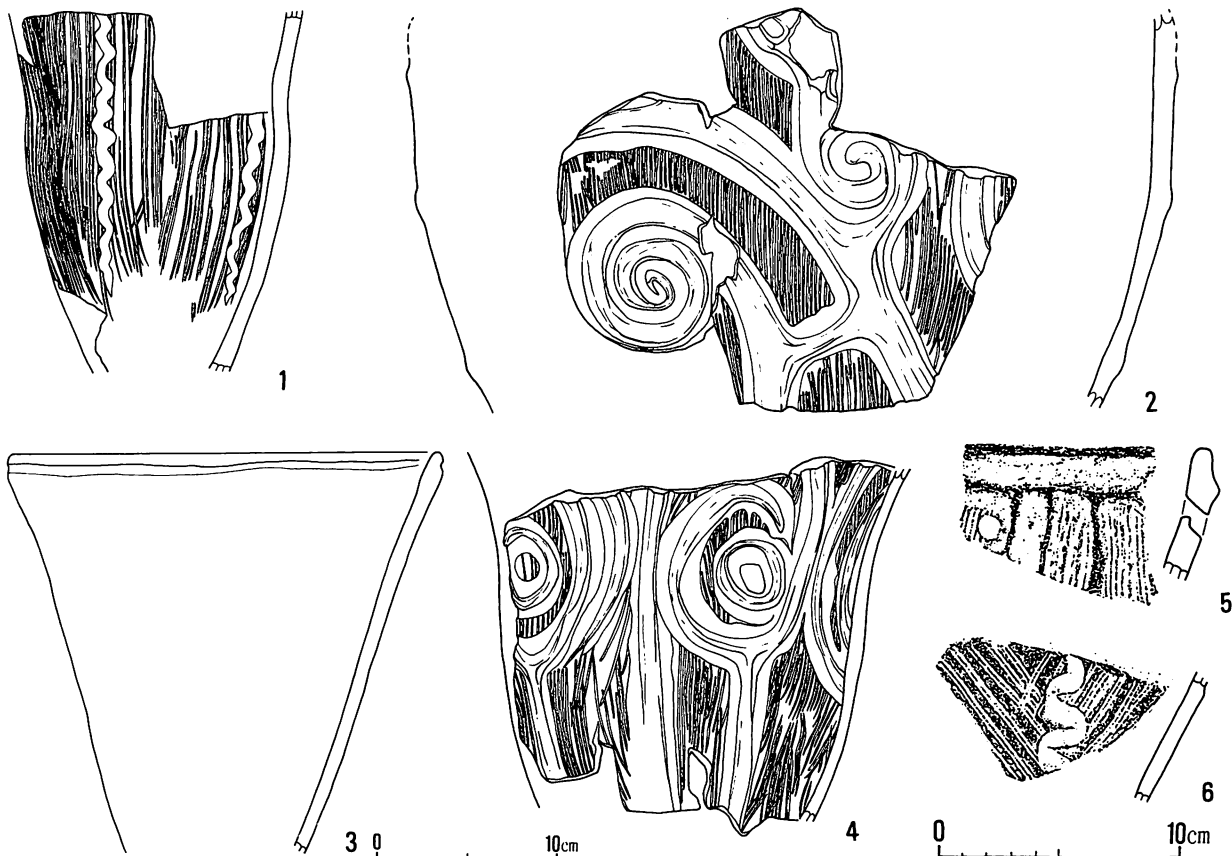


Fig. 35 1号住居址出土遺物 (1～4=1/4, 5・6=1/3)

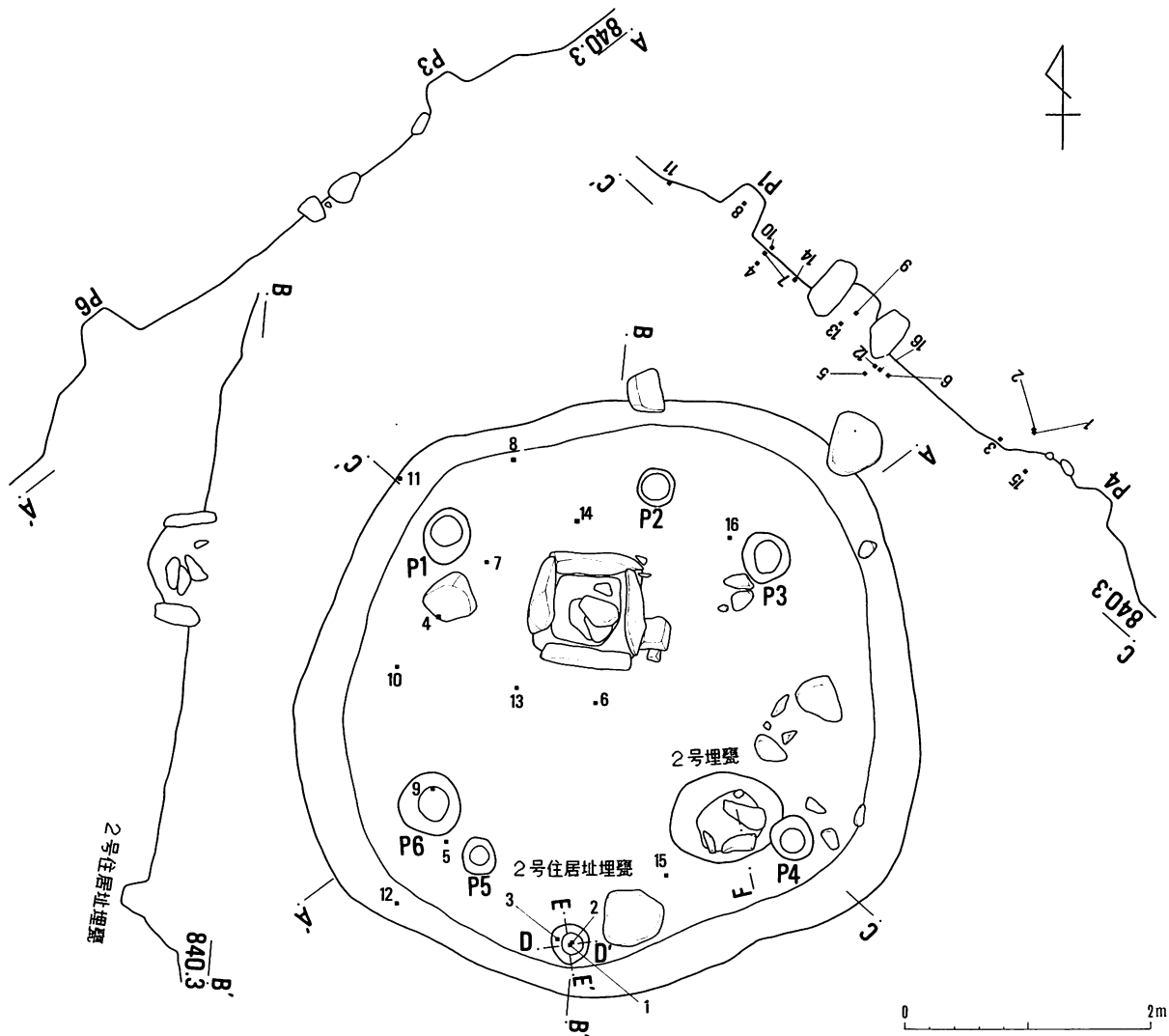


Fig. 36 2号住居址

(炉) 住居址の中央北寄りに方形の石囲い炉が検出された。規模は南北0.93m×東西0.92m、床面からの深さ0.28mを測る。主軸方位はN-5°-Eである。炉内に礫が数点存在するが、炉はほぼ完全な形で残存している。最大幅70cm程度の礫4点を四方に配置し、使用している。礫の炉内面側は強く焼け、炉の覆土に焼土を多く含む。

(柱穴) P1～P6の6基が検出された。平面形態はいずれも円形に近い。P1は南北0.45m×東西0.41m、深さ0.3mを測り、以下同様にP2は0.31m×0.3m、0.28m、P3は0.42m×0.38m、0.22m、P4は0.35m×0.35m、0.18m、P5は0.28m×0.26m、0.14m、P6は0.5m×0.51m、0.3mを測る。

(埋葬) 住居址の南壁際に屋内埋葬が1基検出された。掘り方の平面形態は円形であり、規模は南北0.33m×東西0.31m、深さ0.23mを測る。埋葬本体は2点の深鉢 (Fig. 38-1・2) が重ねて使用され、両者とも正位で埋設されている。両者とも、底部他の一部を欠損する以外は完全な形であり、先ず1を埋設し、さらに2をその内側に埋設している。時間的な差異の有無等については不明である。なお、1と2の隙間の破片はいずれも1の体部下位破片である。また、埋葬の上部には長さ20cm、幅14cm、厚さ8cmの礫が埋置され、埋葬本体へ落ち込んでいる。

(遺物) 16点を図示した (Fig. 38-1～16、P1.19-2)。出土位置はFig. 36に示した。いずれも縄文時代中期後半の土器である。1は深鉢で口径24cm、現存高22.1cm、地文は櫛状工具による菱形状条線文と部分

0 2m

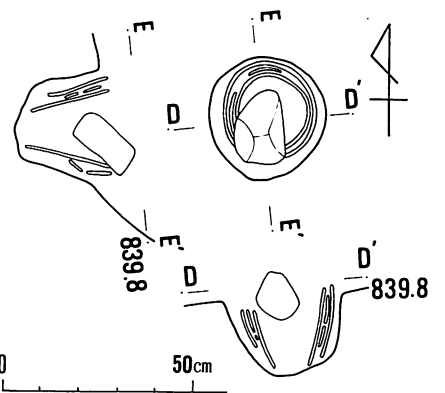


Fig. 37 2号住居址内埋葬

0 50cm

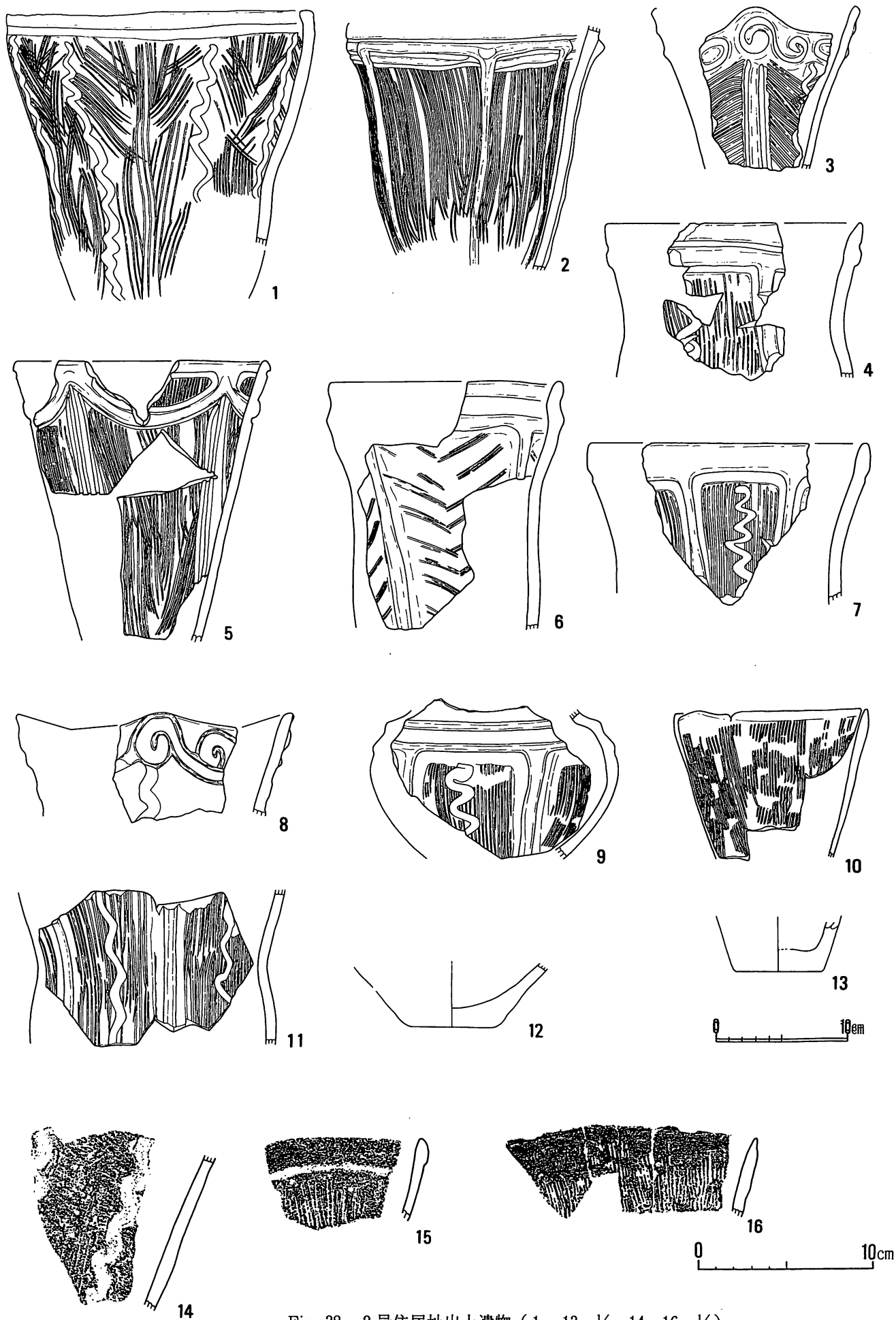


Fig. 38 2号住居址出土遺物 (1~13=1/4, 14~16=1/3)

的な縦条線文で、後に蛇行懸垂文が施される。2は深鉢で現存高18.0cm、隆帯による区画内を櫛状工具による縦条線文で充填している。3は深鉢で口径15.6cm、現存高12cm、波状の口縁に隆帯の渦巻文、体部は懸垂文（沈線二条）による区画後、櫛状工具による綾杉状条線文を地文に蛇行懸垂文が施される。4は深鉢で口径19.4cm、現存高12cm、隆帯による区画内を櫛状工具による縦条線文で充填し、さらに蛇行懸垂文を加えている。7・9・14・15も類似する。5は深鉢で口径19.6cm、現存高21.5cm、地文は櫛状工具による縦条線文で、口縁部に隆帯の弧線文がめぐり、弧線文のつなぎ部から懸垂文が垂下する。6は深鉢で現存高19cm、隆帯の区画内に粗い綾杉状条線文が施される。8は深鉢で現存高7.9cm、波状の口縁に渦巻文、体部に蛇行懸垂文が施され、他は無文である。9は球状の体部で鉢形か？文様は4に類似する。10は深鉢で口径14.8cm、現存高11.2cm、口縁端部以外に櫛状工具による断続的な縦条線が上→下へ施される。16も類似する文様であろう。12は浅鉢の底部、13は深鉢の底部であろう。出土遺物はいずれもⅢ群6類-a種である。

4号住居址 (Fig. 39、Pl. 9-9)

(位置) 9-12 gridに位置する。北側に竪穴状遺構(31号・34号35号等)が密集し、方形の石囲い炉のみが確認された住居址である。全体の形態や柱穴等は他遺構との切り合いや攪乱により不明である。

(炉) 平面形態は方形であり、規模は北西から南東が0.7m、北東から南西が0.75を測り、深さは現状で0.07m程度であり、主軸方位はN-41°-Eである。南西側を欠損するが、残存状況は良好である。比較的中小型の炉であり、内面の焼けは弱く、焼土等も少量であった。

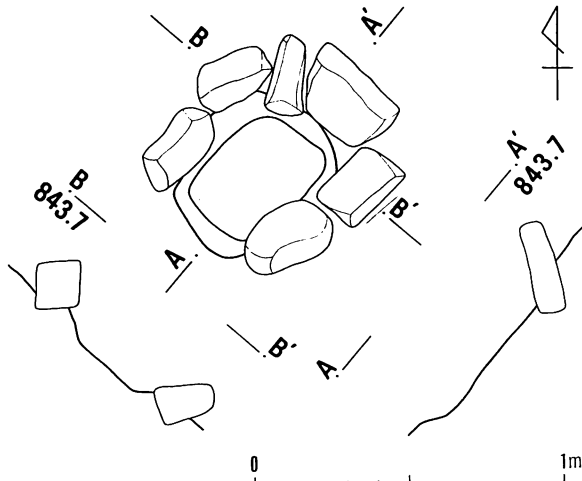


Fig. 39 4号住居址 (炉のみ)

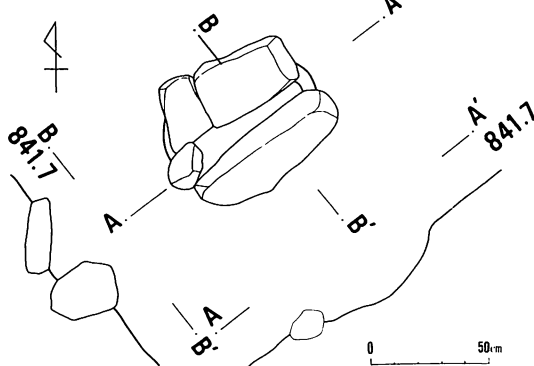


Fig. 41 6号住居址 (炉のみ)

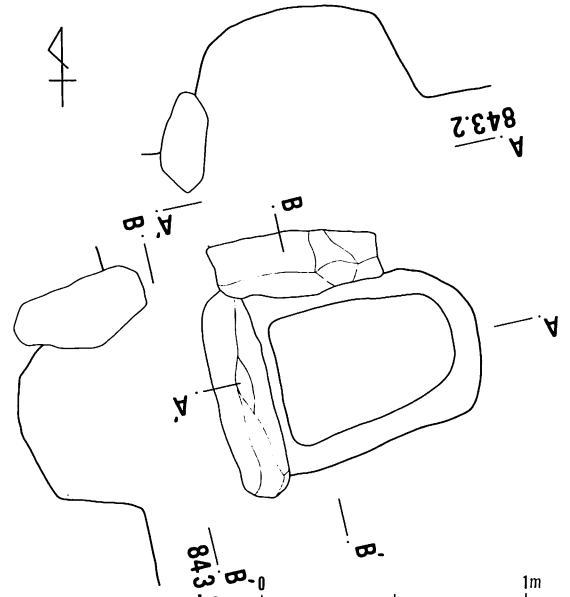


Fig. 40 5号住居址 (炉のみ)

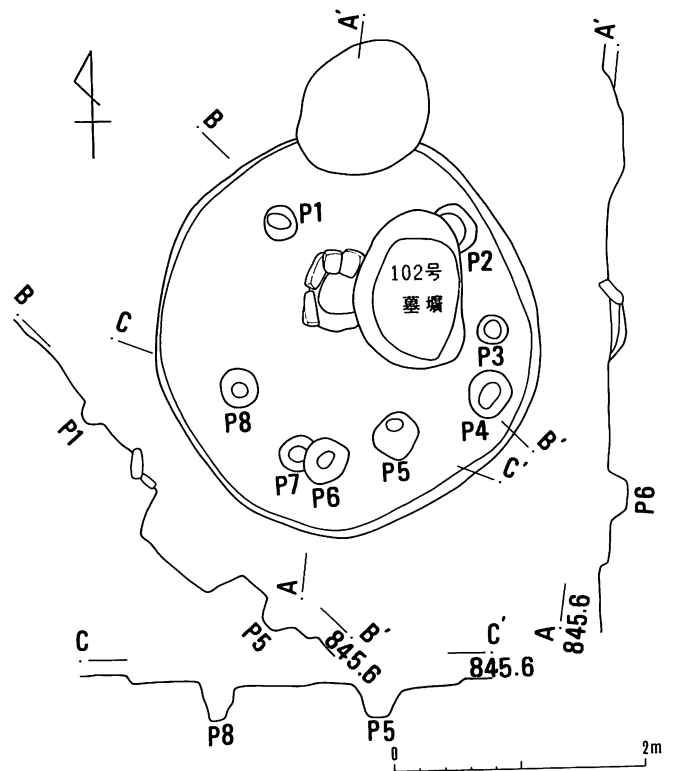


Fig. 42 10号住居址

5号住居址 (Fig. 40、  
P1. 9-10)

(位置) 8-10 Grid に  
位置する。東側に竪穴状  
遺構 (12号・13号) が存  
在し遺構が集中する地点  
であるため、石囲い炉の  
一部のみが確認された住  
居址である。

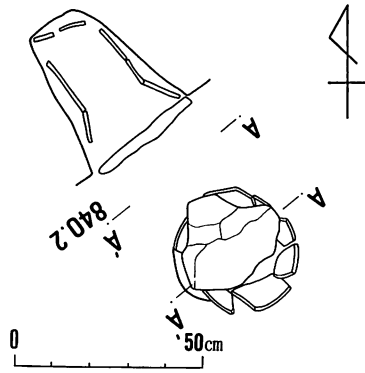


Fig. 43 1号埋甕

(炉) 平面形態は方形

であり、規模は南北が0.9 m、東西が1 mを測るが、北側と  
西側の礫を残すのみである。

6号住居址 (Fig. 41、P1. 9-11)

(位置) 2-8 Grid に位置する。周辺には複数の小穴が確  
認されているが、本住居址に伴うかどうかは不明である。

(炉) 平面形態は方形であり、規模は南北が0.52 m、東西  
が0.75 mを測る。東側の礫を欠き、北側の礫は内側へ崩落する。

10号住居址 (Fig. 42、P1. 9-12)

(位置) 14-12・13 Grid に位置し、  
第Ⅲ層上面にて確認された。

(形態) 平面形態は円形を呈する。  
規模は南北3.54 m × 東西3.32 mを測り、  
壁高は西壁で0.12 mを測る。床面は平  
坦であるが、硬化面や周溝は確認され  
なかった。

(炉) 住居址の中央やや北寄りに方  
形の石囲い炉が検出された。規模は南  
北0.64 m × 東西約0.6 mを測る。10~20  
cm 大の礫を用いた比較的の小型の炉で  
ある。ただし、東側は102号墓墳によって切られている。

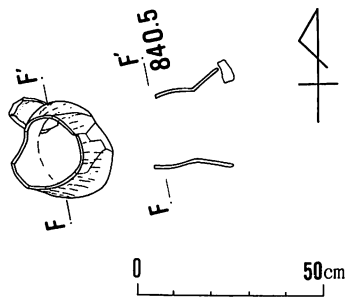


Fig. 45 2号埋甕

(柱穴) P1~P8の8基が検出された。平面形態はいずれも円形に近  
い。P1は南北0.40 m × 東西0.38 m、深さ0.18 mを測り、以下同様にP2は0.  
40 m × 0.40 m?、0.17 m、P3は0.25 m × 0.28 m、0.16 m、P4は0.40 m × 0.  
36 m、0.18 m、P5は0.40 m × 0.38 m、0.27 m、P6は0.38 m × 0.37 m、0.15  
m、P7は0.30 m × 0.30 m?、0.16 m、P8は0.32 m × 0.32 m、0.31 mを測る。

## 2) 埋甕

1号埋甕 (Fig. 43・44、P1. 9-13、20-3)

(位置) 調査区の南西端、2-5 Grid に位置し、第Ⅲ層上面にて確認  
された。



Fig. 47 1号土坑 出土遺物 (1/3)

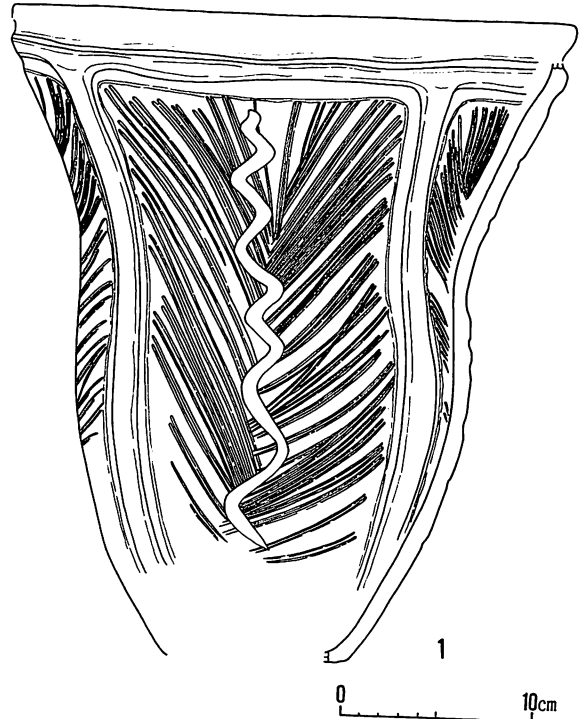


Fig. 44 1号埋甕

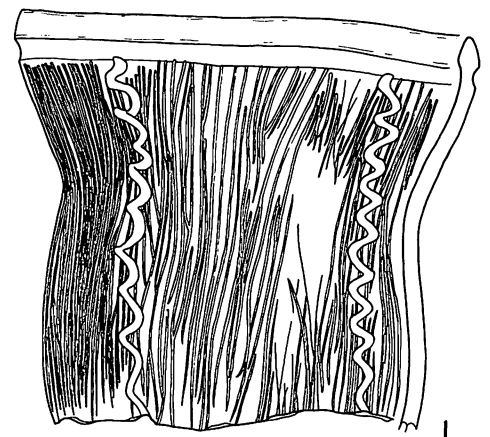


Fig. 46 2号埋甕 出土遺物 (1/4)

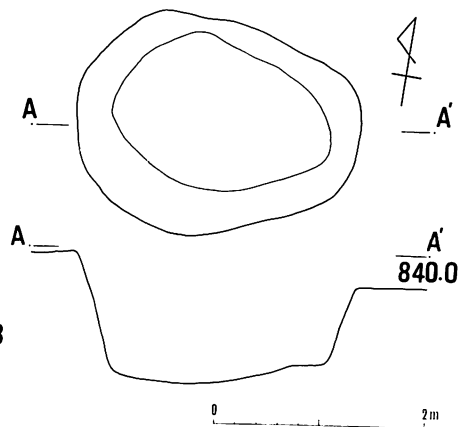


Fig. 48 1号土坑

(形態) 掘り方の平面形態は円形であり、平面形態は南北0.31m×東西0.32m、深さ0.38mを測る。埋甕本体は深鉢であり、正位で埋設されている。口縁部・底部の一部を欠く他はほぼ完形である。また、埋甕の上部には長さ29cm、幅24cm、厚さ4cmの扁平な礫が蓋状に置かれている。

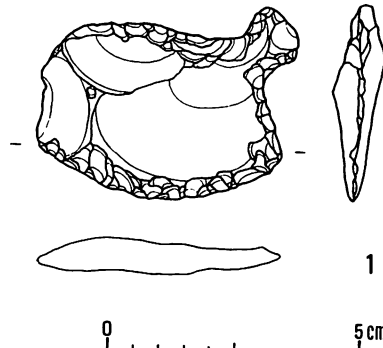


Fig. 49 8号土坑 出土遺物 (1/3)

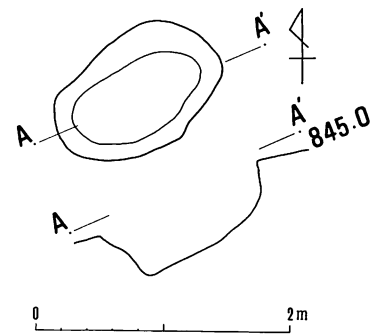


Fig. 50 8号土坑

(遺物) 1が埋甕本体の深鉢であり、口径29.6cm、器高35cmを測る。口縁部直下に沈線が一条横走し、体部は隆帯による区画後、櫛状工具による綾杉状条線文を地文に蛇行懸垂文が施される。縄文時代中期後半(Ⅲ群6類-a種)の土器である。

2号埋甕 (Fig.45・46、P1.9-14、20-4)

(位置) 調査区の南西側、4-4 Gridに位置する。  
2号住居址南西部の上位に位置している。

(形態) 明瞭な掘り方は確認できなかったが、本体となる深鉢は逆位に埋置され、その下部には長さ13cm、幅7cm、厚さ3cmの礫

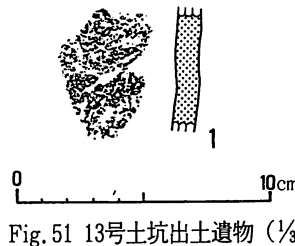


Fig. 51 13号土坑出土遺物 (1/3)

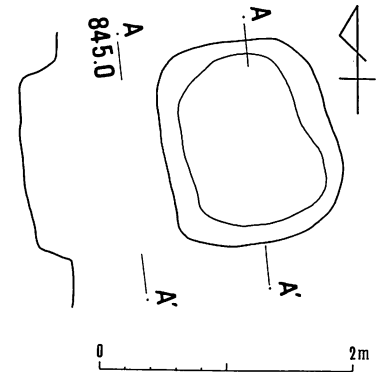


Fig. 52 13号土坑

が土器の直下で出土した。本遺構はその位置・時期等から、2号住居址に伴う遺物とも考えられた。しかし、2号住居址の床面より約40cm以上も高く位置していることなどから、別遺構として扱ったものである。2号住居址との位置関係はFig.36を参照されたい。

(遺物) 1は深鉢であり、底部と体部下位を欠く。口縁部直下に指等による沈線が横走し、体部は斜条線文を地文に蛇行懸垂文が施される。縄文時代中期後半(Ⅲ群6類-a種)の土器である。

### 3) 土坑

1号土坑 (Fig.47・48、P1.9-15)

(位置) 調査区の南側の平坦地、2-5 Gridに位置する。南側約4mに1号埋甕が存在する。また、本遺構の周辺からは縄文時代の各時期の遺物が集中して出土している (Fig.54・55「縄文土器分布図」参照)。ただし、土坑内出土の遺物は少量であり、遺構の上部や周辺から多くの遺物が出土したものである。

(形態) 平面形態は長楕円形、断面形態は箱形を呈する。底面はほぼ平坦だが、やや西側へ傾斜する。規模は長軸2.66m、短軸2.11mを測り、確認面からの深さは0.18mを測る。

(遺物) 覆土中から土器3点 (Fig.47-1~3) のみが出土した。いずれも縄文時代前半(Ⅱ群5類-b種)の土器である。

8号土坑 (Fig.49・50、P1.10-17・20-7)

(位置) 調査区の北側、12-12 Gridに位置する。周辺には7・8号土坑が存在する。

(形態) 平面形態は楕円形、断面形態は箱形を呈する。規模は長軸1.38m、短軸0.91mを測り、確認面からの深さは0.45mを測る。

(遺物) 底面から石匙が1点 (Fig. 49-1、P1.20-7) 出土した。石材はチャートである。

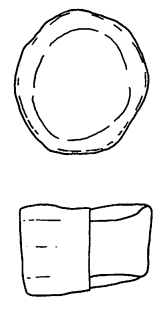


Fig. 53 遺構外出土遺物 耳飾 (1/2)

13号土坑 (Fig.51・52、P1.9-16)

(位置) 調査区の北東側、13・12-13 Gridに位置する。

(形態) 平面形態は方形に近い不整円形、断面形態は箱形を呈する。規模は長軸が1.62



m、短軸1.29mを測り、確認面からの深さは0.34mを測る。

(遺物) 覆土中より土器1点(Fig.51-1)が出土した。縄文時代前期前半(Ⅱ群1類-f種)の土器である。

#### 4) 遺構外出土の遺物

B地区から遺構に伴わず出土した縄文時代の遺物について説明を加える。ここで取り扱うのは、耳飾1点・土器230点・石器30点である。

##### a) 耳飾(Fig.53-1)

土製の耳飾が1点出土した。出土位置は13-13 Grid南西端である。ほぼ完形であり、法量は3.7cm×3.5cmを端部の厚さ1.9~2.4cm、中心部の厚さ1.4cmを測る。形態は円盤の中心部がやや薄くなる「滑車形」である。なお、表面には部分的に赤彩らしき痕跡が残る。

##### b) 土器(Fig.54~61、P.1.21~23)

B地区から出土した縄文土器の総数は破片資料で約900点を数え、その所産時期は早期中葉から晩期後葉におよんでいる。各時期の遺物総数はそれぞれ多寡があるが、特に前期前半・中期初頭・中期後半の遺物が多く出土した。

以下、出土した土器を分類し説明を加える。分類については、塩川遺跡出土の縄文土器分類表(Tab.1)を、各群種類の出土位置については分布図(Fig.54~55)を参照されたい。

**I群**(Fig.56、P.1.21-10) 早期に位置付けられる土器群を一括する。

**I群1類(1)** 棒状工具による刺突文が施される一群であり、早期中葉前後に位置付けられると考えられるが明確ではない。1は地は無文であり、方形の刺突文が3列を単位として縦・横方向に施され、ほぼ直交する。

**I群2類(2~4)** 沈線文系の一群である。沈線は太く深いものであり、平行ないしはやや交差するように施される。2~4の胎土はいずれも白色を帯び、白色砂粒を多く含む点で共通する。2の口縁部は口唇端部の内面側と外面側にヘラによる刻みが離れてそれぞれ巡る。これらの土器群は早期中葉に位置付けられよう。

**I群3類(5~11)** 条痕文系の土器群のうち、早期後半の早い段階に位置付けられると考えられる一群を一括する。いずれも外面には縦ないしは斜位方向の条痕文が施され、内面は横方向の条痕文が施される。ただし、5は内面剥離が著しくふめいである。また、9は内面の条痕文が弱い点や外面に弱い隆帯文とヘラ先による刺突文が施される点から別分類が必要かもしれない。

**I群4類(12・13~17)** 条痕文系の土器群のうち、早期末葉に位置付けられると考えられる土器群を一括する。12は条痕文地に細沈線文・ヘラ先による連続刺突文を施すものであり、内面に弱い横方向の条痕文が施される。13は刻みを有す隆帯文の区画内を交差する沈線文?で充填する。14の平坦な口唇端部は内外面に抓み出すように広くなり、外面側には刻みが巡る。15の平坦な口唇端部(波頂部は尖る)は14同様に広く、内・外面側に刻みが巡り、外面には矢羽状の沈線文(条痕文?)が施される。

なお、14・15は赤褐色の胎土が類似する。16の平坦な口唇端部は14・15同様に広く、内・外面側に刻みが巡り、外面には矢羽条の沈線文(条痕文?)が施される。17は口唇端部が尖りやや反り、外面には口唇端部からやや間隔をおいて縦方向の沈線文(3条単位)が施される。

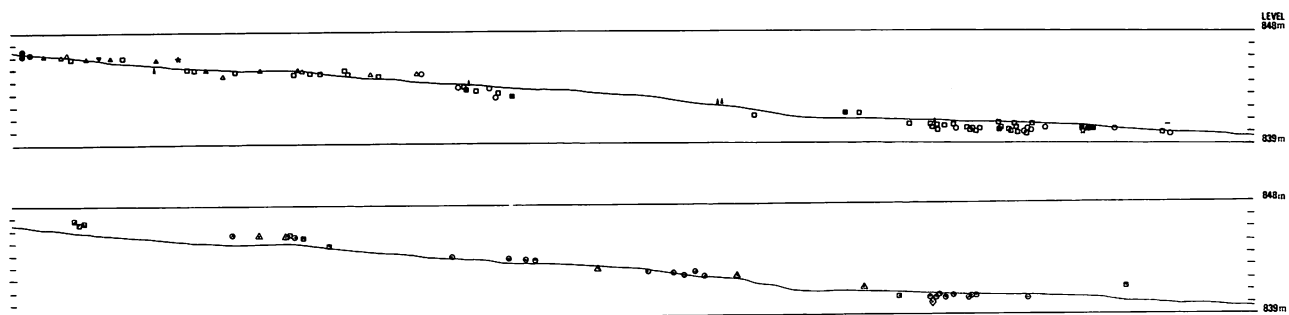
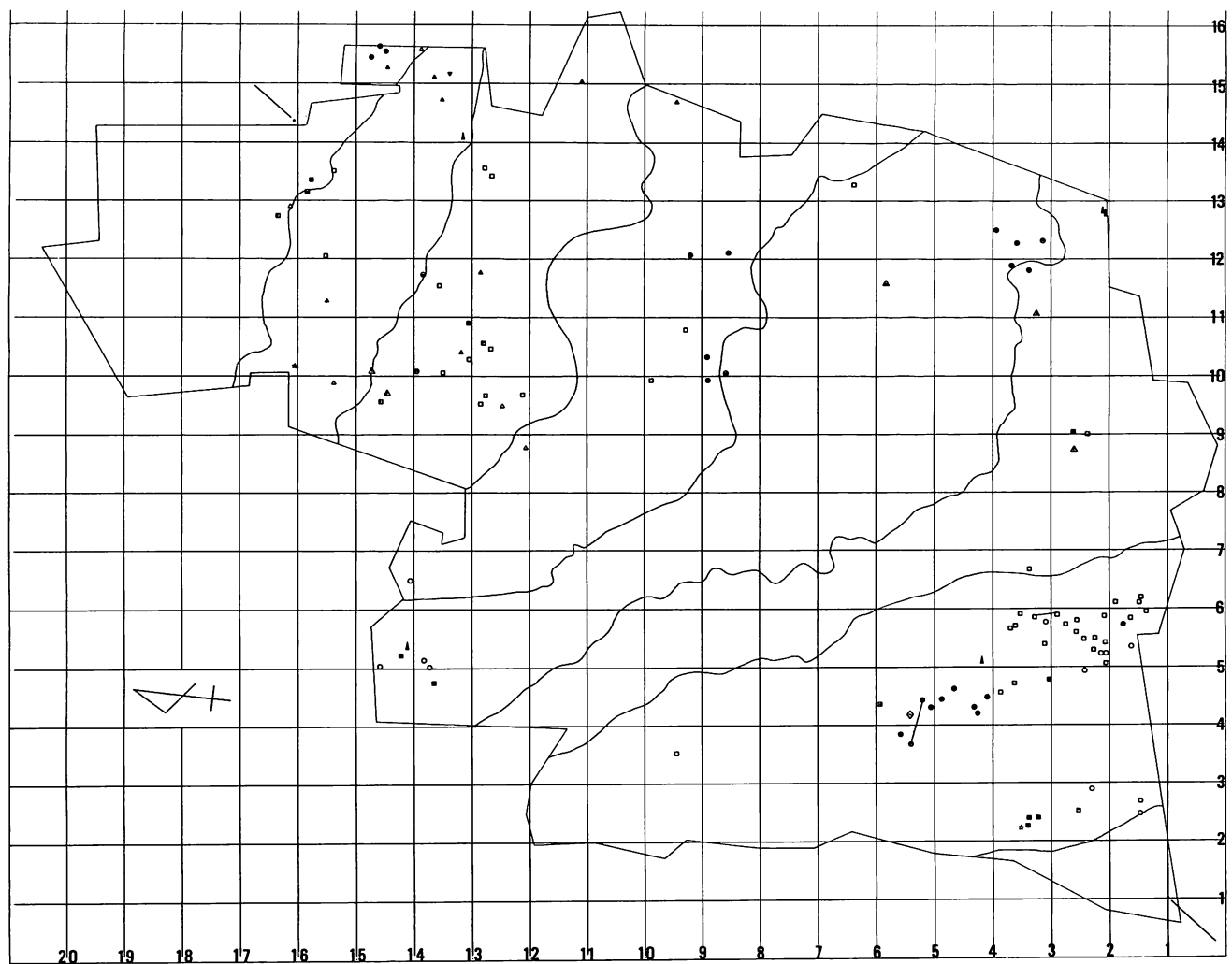
**I群5類(18)** 条痕文系の土器群のうち、貝殻文が施されるものを一括する。これらは早期末葉に位置付けられると考えられる。18は外面に斜位の条痕文、内面に横方向の条痕文が施され、外面には貝殻文(貝殻端部を横方向に連続してジグザグに押圧したもの)が施される。

**Ⅱ群**(Fig.56~58、P.1.21-10~22-12) 前期に位置付けられる土器群を一括する。

**Ⅱ群1類(19~62)** 厚手で胎土は非常に脆く、繊維を多量に含み、内面の調整は雑な撫でが施される程度の一群である。これらの一群は前期初頭に位置付けられる。文様によりさらに数種に細分される。

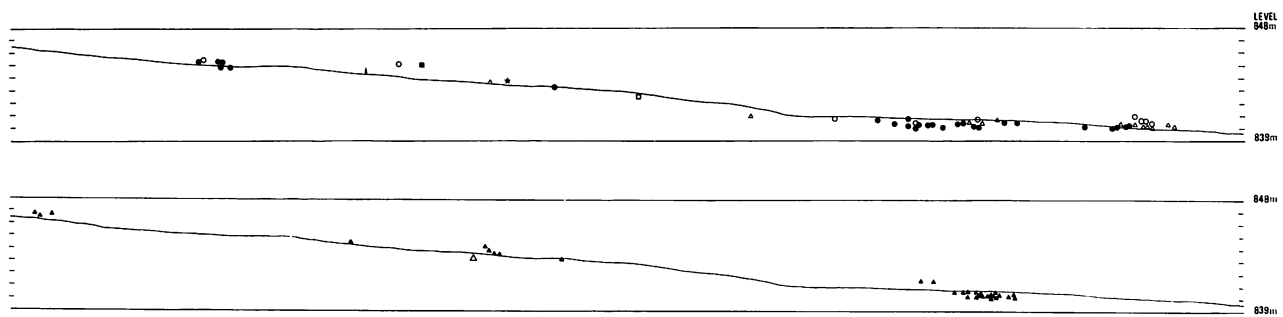
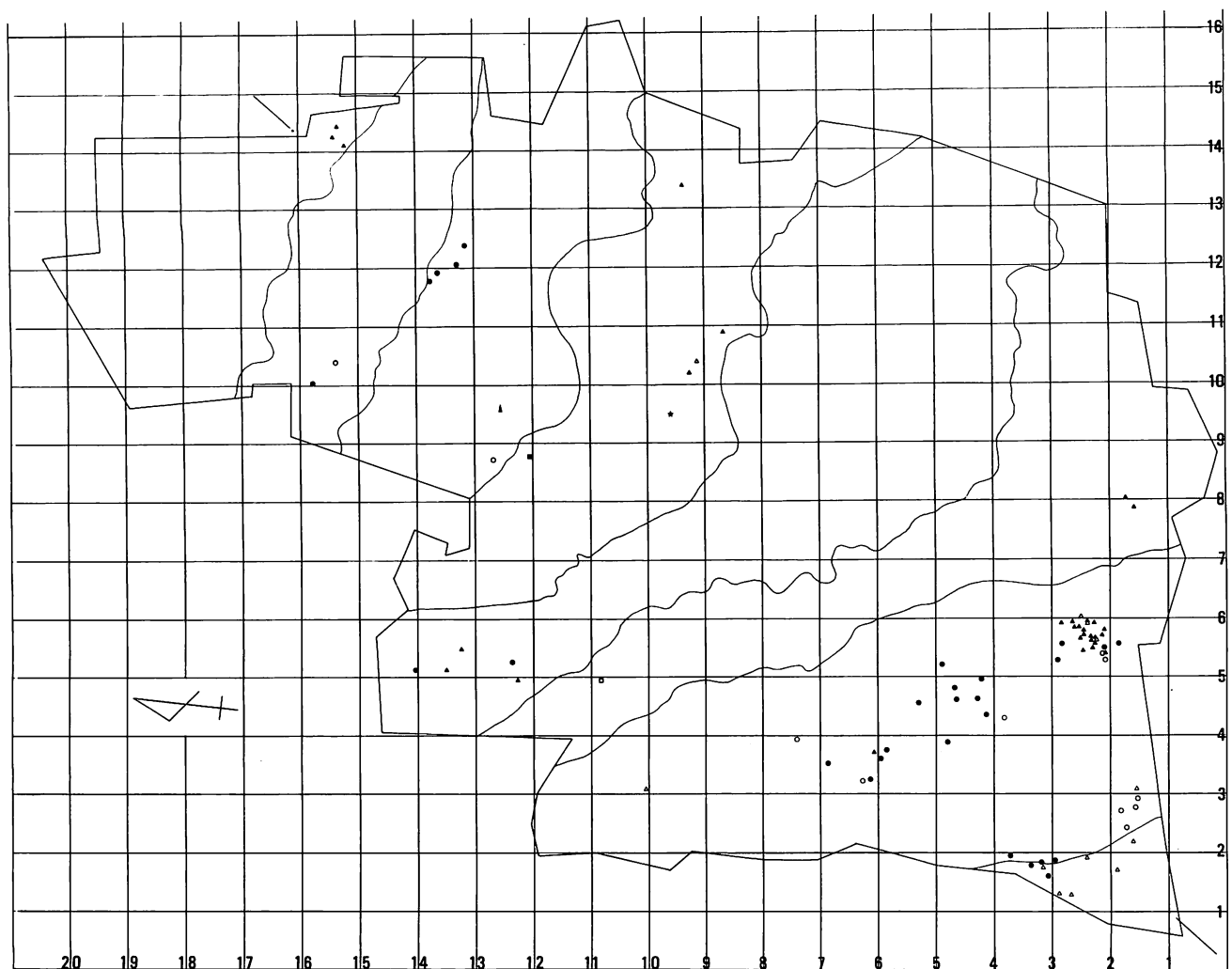
**Ⅱ群1類-a種(19~22)** 直線的な細沈線が格子目状に施される一群である。沈線は非常に浅く細いものであり、中には格子目条というより不規則方向に施されたものもある。22は底部に近い部位と考えられる。

**Ⅱ群1類-b種(26~33)** 直線的な細沈線が縦方向に施される一群である。沈線がやや太いもの(27・29・



- |           |            |               |            |
|-----------|------------|---------------|------------|
| ☆ I 群 1 類 | □ II 群 1 類 | ∧ II 群 8 類 -a | □ II 群 6 類 |
| ● I 群 2 類 | ■ II 群 2 類 | ∨ II 群 8 類 -b | ◇ II 群 7 類 |
| ▲ I 群 3 類 | ○ II 群 3 類 | △ II 群 4 類    |            |
| △ I 群 4 類 | * I 群 5 類  | ◎ II 群 5 類    |            |
- 0 20m

Fig. 54 縄文土器 I 群 1 類～5 類  
II 群 1 類～8 類 分布図



- III群 1類
- III群 4類
- ▲ III群 6類
- ┆ III群 7類
- △ IV群 2類
- IV群 3類
- ★ V群 1類



Fig. 55 縄文土器 III群 1類・4類・6類・7類  
IV群 2類・3類  
V群 1類 分布図

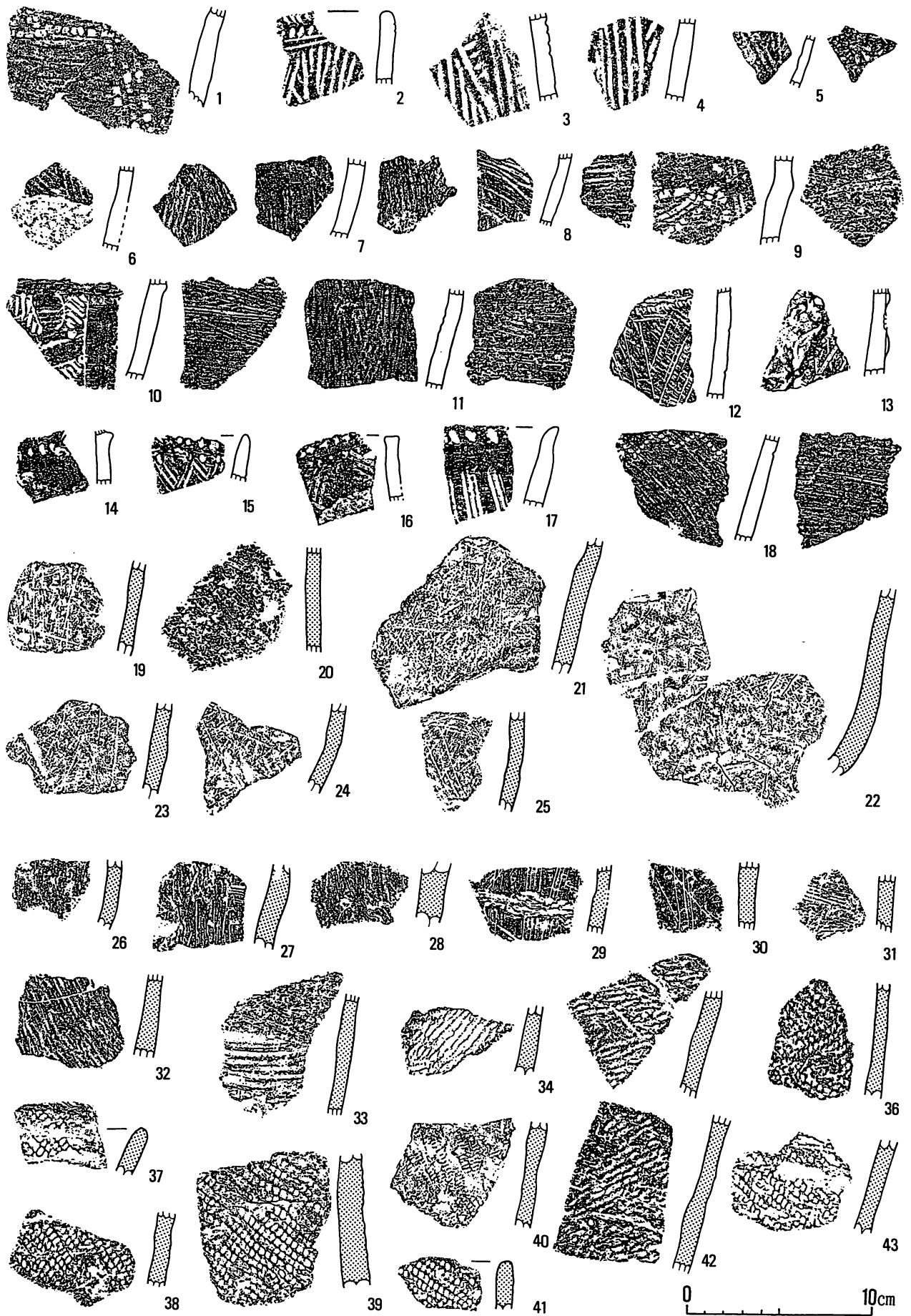


Fig. 56 遺構外出土遺物 縄文土器① (1/3)

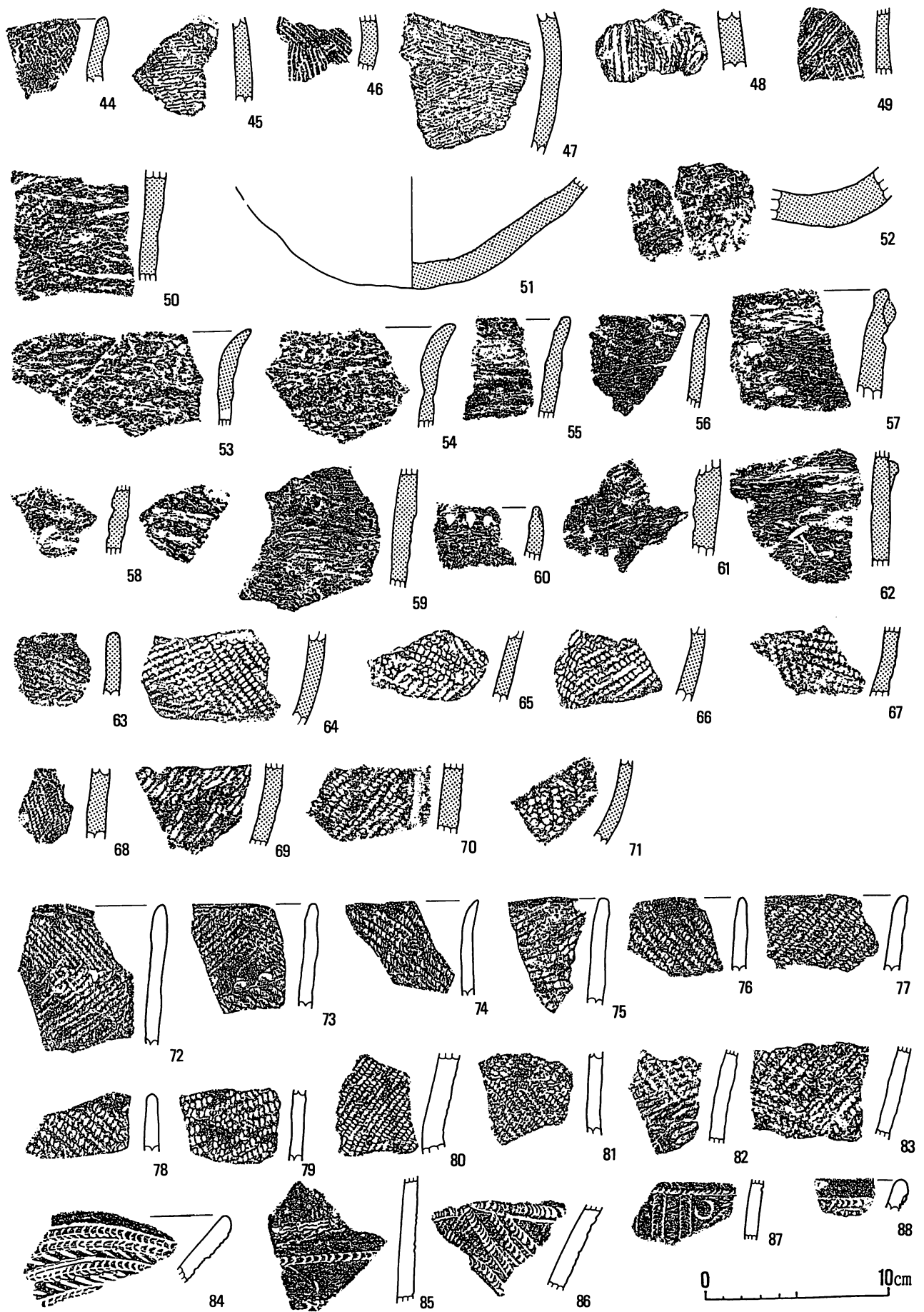


Fig. 57 遺構外出土遺物 縄文土器② (1/3)

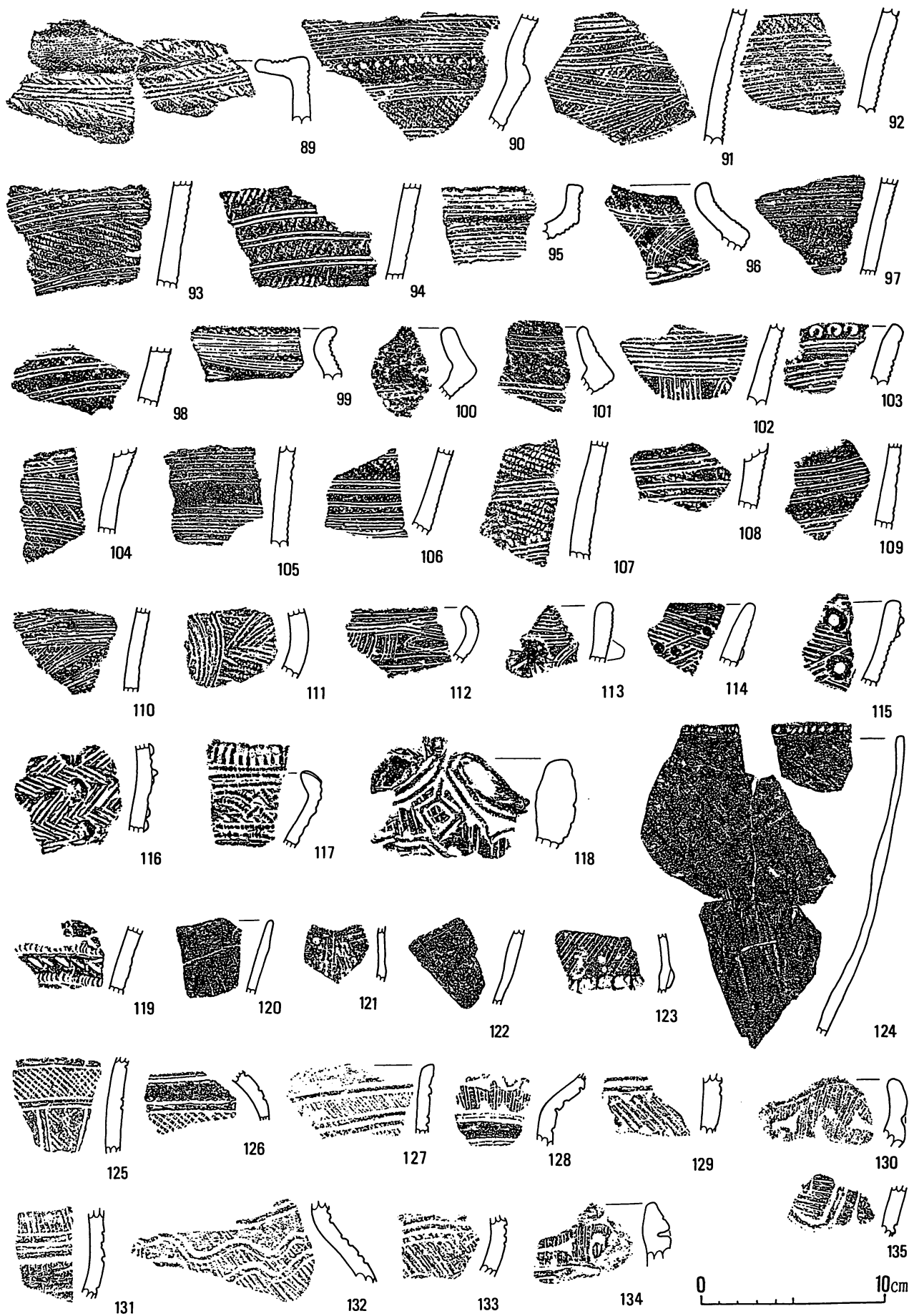


Fig. 58 遺構外出土遺物 繩文土器③ (1/3)



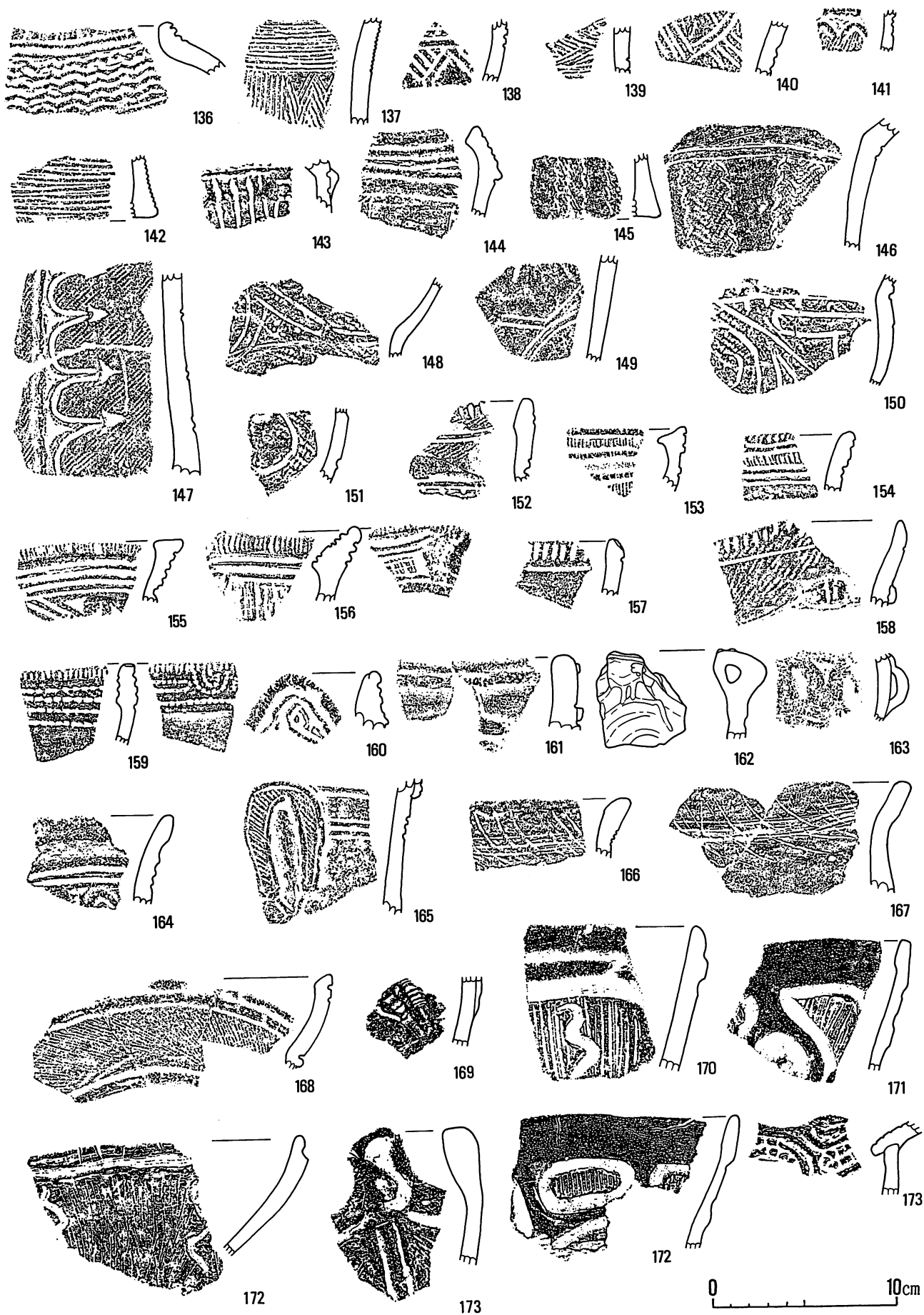


Fig. 59 遺構外出土遺物 繩文土器④ (1/3)

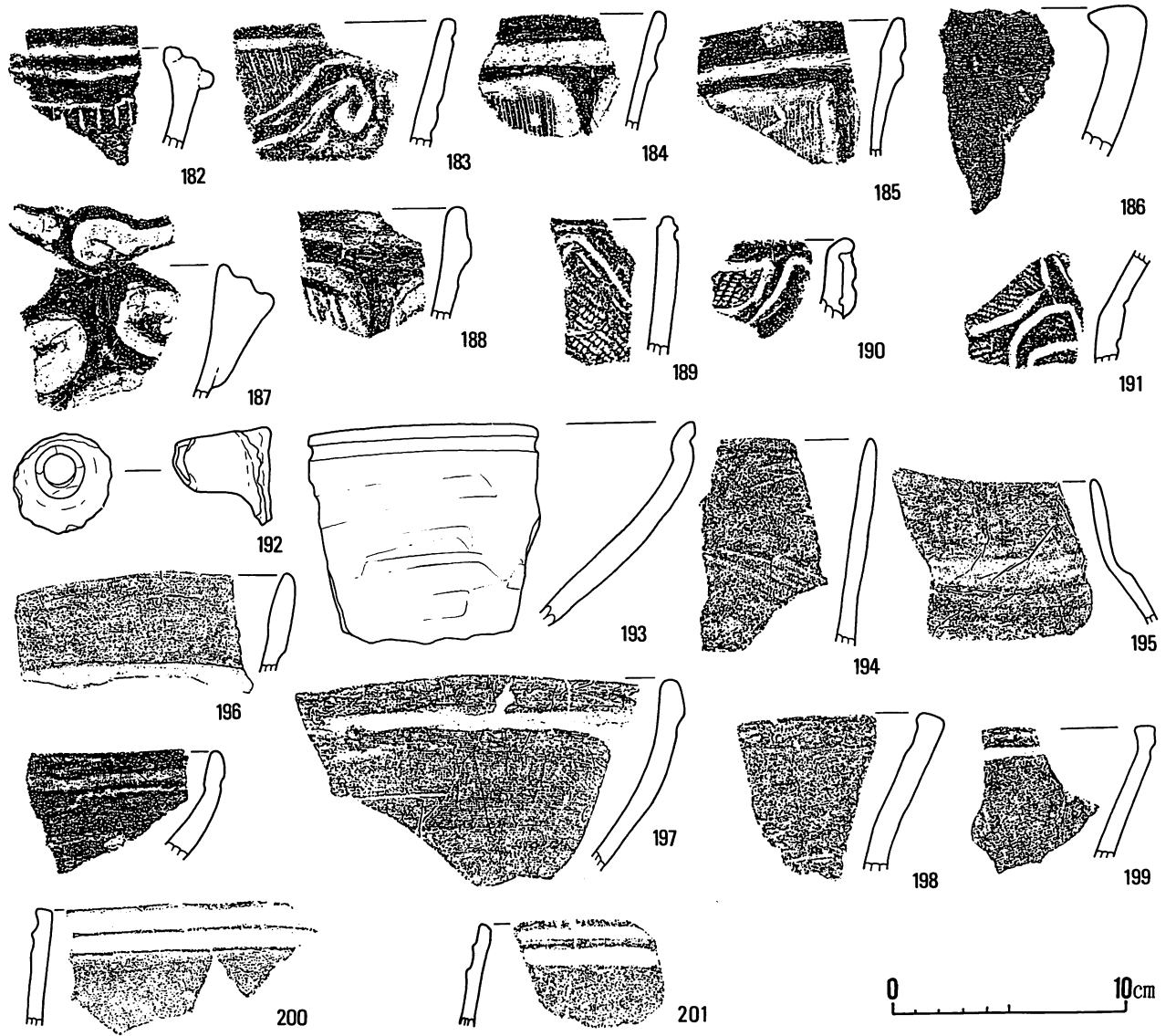
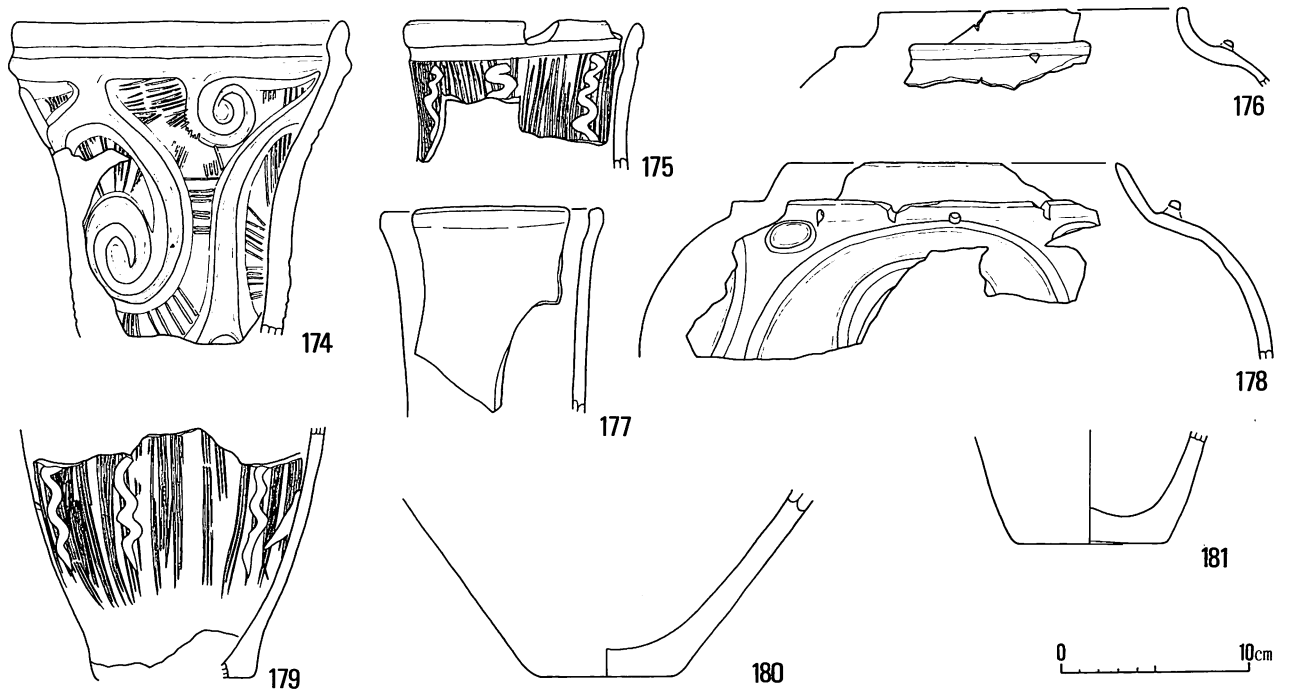


Fig. 60 遺構外出土遺物 縄文土器⑤ (1/3 · 1/4)

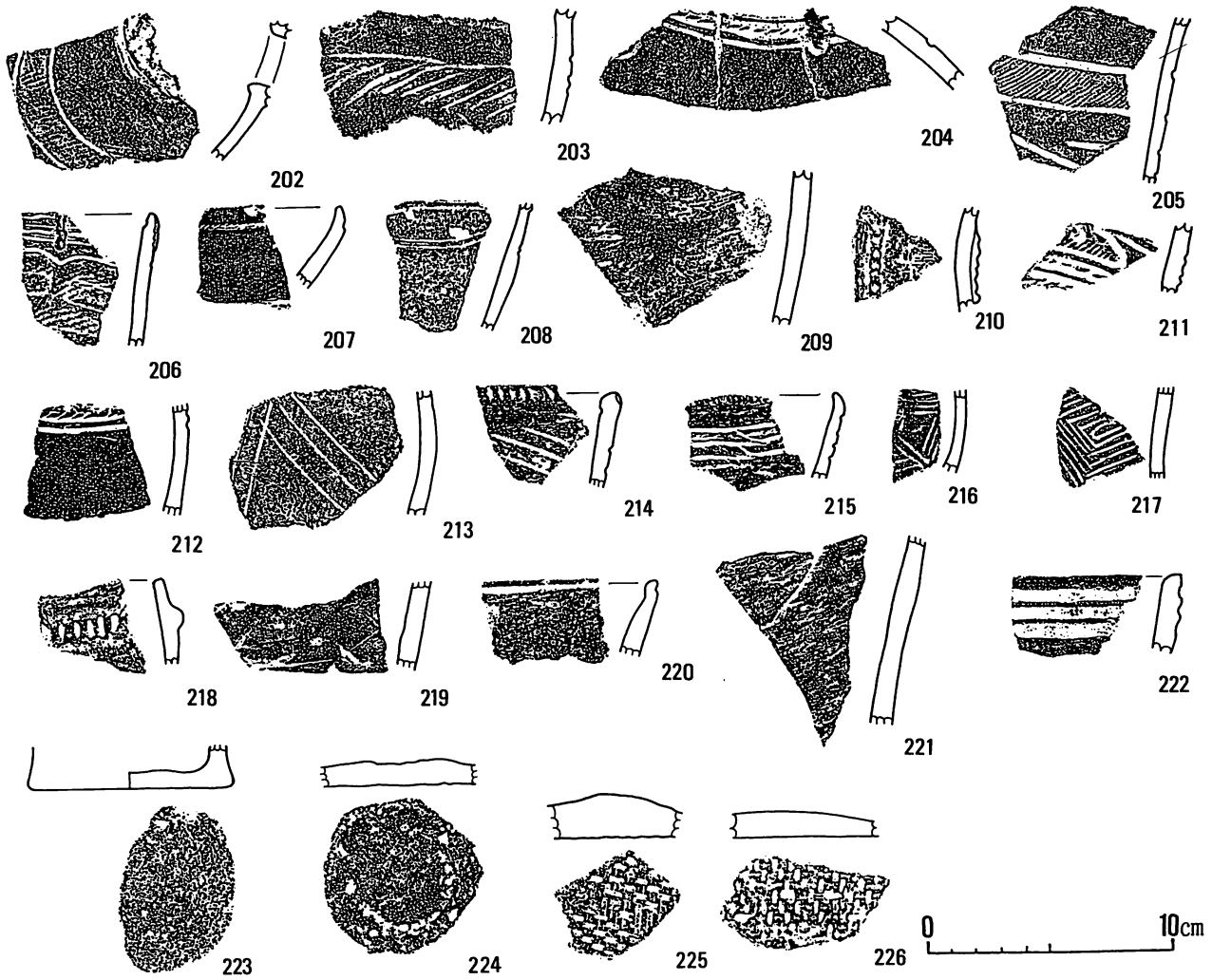


Fig. 61 遺構外出土遺物 繩文土器⑥ (1/3)

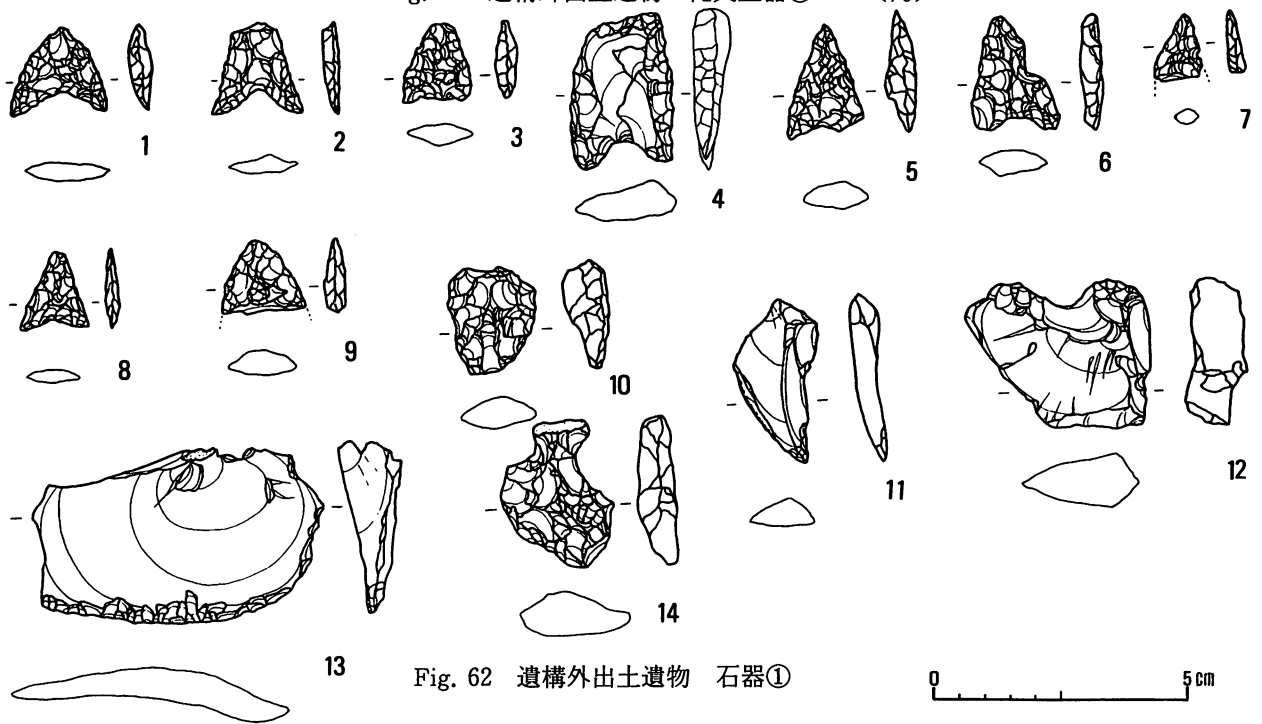


Fig. 62 遺構外出土遺物 石器①

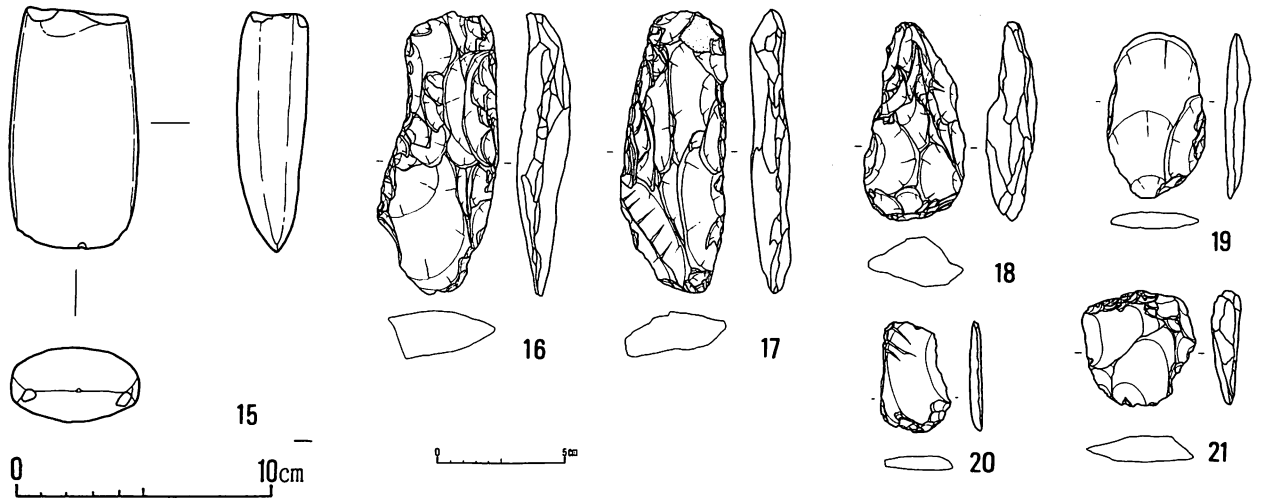


Fig. 63 遺構外出土遺物 石器② (1/3)

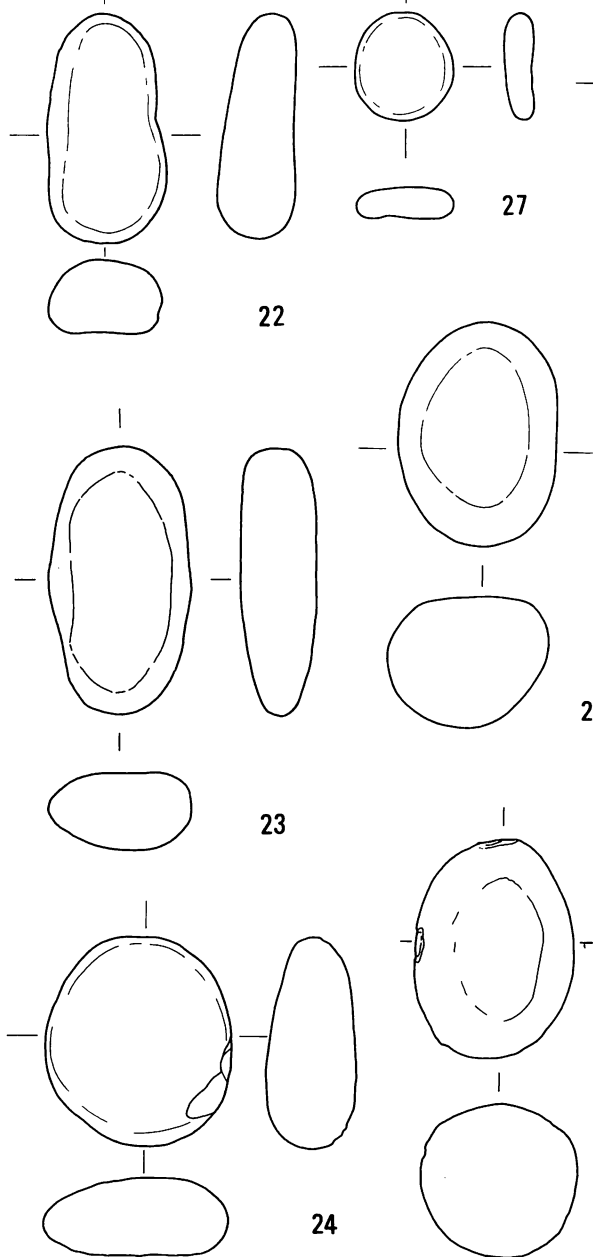
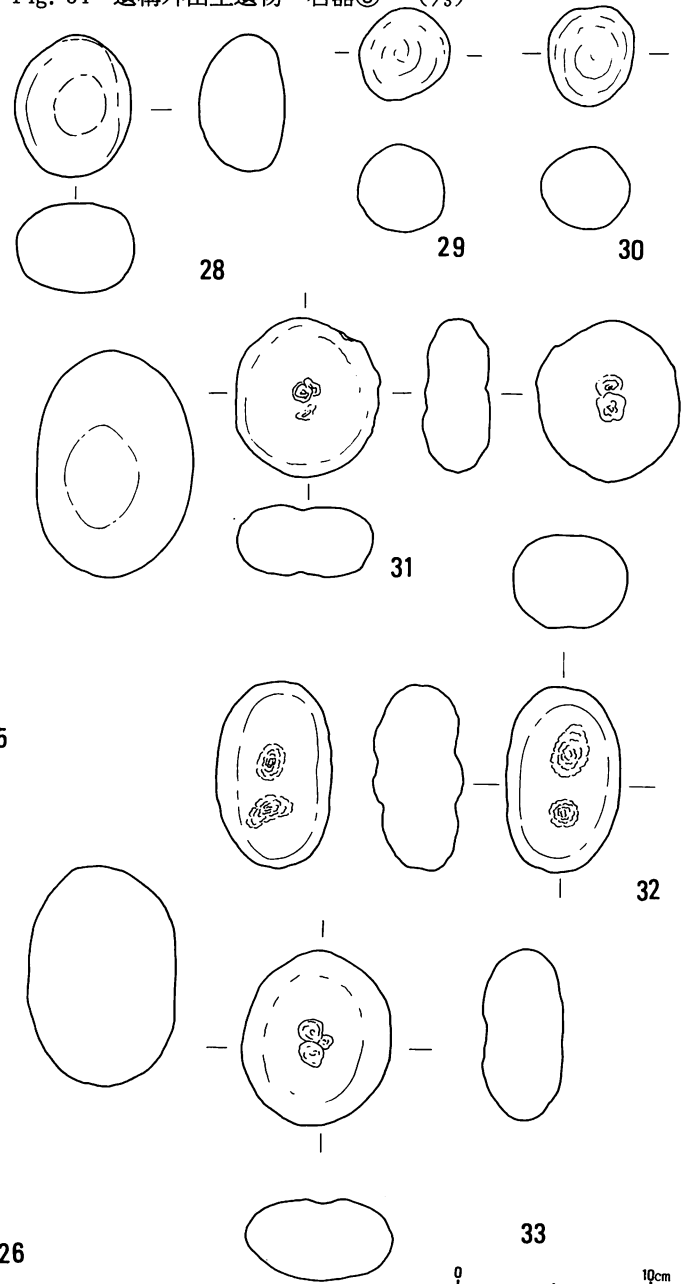


Fig. 65 遺構外出土遺物 石器④ (1/4)

Fig. 64 遺構外出土遺物 石器③ (1/3)



32・33) も含まれる。29は混入した繊維ごと器面が剥落している。

Ⅱ群1類-e種(33~49) 縄文(あるいは撚糸文?)の施される一群である。原体は複数種が認められるがここでの細分は避けておく。なお、44の口唇端部は尖り、口唇直下まで縄文が施される。

Ⅱ群1類-f種(50~62) 無文あるいは粘土紐貼り付けによる隆帯文の施される一群である。51・52は底部の資料であり、尖底というよりは丸底に近い形態を呈する。53~57・60・62は口縁部の資料であるが、反り返るもの(53・54)、ほぼ直線的に開くもの(55・56)、直線的に開くが口縁端部外面に刺突文が巡るもの、口縁端部直下にタガ状の隆帯が横走するものがある。なお、62も口唇部は残らないものの、57同様の資料であろう。

Ⅱ群2類(63~71) 繊維を多量に含むが、内面には丁寧な撫で調整が施される一群である。前述のⅡ群1類と比較するとやや薄手で胎土もやや堅緻であり、縄文が施される資料がその主体を占める。これらの一群は前期前半に位置付けられると考えられるが、1類との区別が付けにくい部分もあり、誤認点も多いかも知れない。63の口縁部は直立に近く開き、口唇部は丸みを帯びる。

Ⅱ群3類(72~83) 薄手で胎土は堅緻であり、繊維を含まず内面には指頭圧痕が著しい一群である。72~78は口縁部の資料である。直線的に開き口唇部が尖るものが主体的であるが、反り返るもの(74)や口唇部が丸みを帯びるもの(75)もある。全て縄文が施されるものであり、特に72は羽状縄文が施される。

Ⅱ群4類(84~88) 前期後半(諸磯aないしはa~b式)に位置付けられる一群である。B地区からはc種のみが出土している。

Ⅱ群4類-c種 半裁竹管による連続刺突文が施される一群のうち、地が無文となる一群である。84は緻密で良質な胎土を用い、内面には磨きが施されるなど精製された土器であると言える。また、87には半裁竹管による円形刺突文が施されており、別分類が必要かも知れない。

Ⅱ群5類(89~112) 前期前半(諸磯b式)に位置付けられる一群である。B地区からはⅡ群5類-a種(縄文の地文に沈線文が施される一群)のみが出土している。ただし、95・103・110~112については、地文に縄文を明瞭に確認することはできないが、器形などから本種に含めたものもある。これらは別類・種へ分類した方が良いのかも知れない。

Ⅱ群5類-a種(89~112) 縄文の地文に沈線文が施されるものを一括する。90は段部上位に小径の半裁竹管による刺突文が施される。103は口縁部内面に弱い段を有し、口縁部外面(口唇部直下)には半裁竹管による刺突文が巡る。

Ⅱ群6類(113~116) 前期後半(諸磯c式)に位置付けられる一群である。斜位・平行の沈線文上にボタン状貼付文が施されるものを一括する。貼付文は大粒のもの(113)・小粒のもの(114)・輪状のもの(115・116)の3種類がある。116は斜位の沈線を交差させずに施し、数段の羽状になっている。

Ⅱ群7類(117) 前期末葉(十三菩提式)に位置付けられる一群である。116は結節状浮線文が特徴的な口縁部の資料であり口唇端部は尖る。口縁端部は内面側へ屈曲し、屈曲部を跨ぐように浮線文(結節状にはならず貼付文とした方が良くかも知れない)が施されている。

Ⅱ群8類(120~124) 前期初頭の土器群のうち、東海系の土器(木島式)群を一括する。いずれも薄手で器面に指頭圧痕が顕著に残る一群であるが、胎土・色調は堅緻で黒色を帯びるもの(122・124)とやや軟質で白黄色を帯びるもの(120・123)がある。120の口縁部は口唇端部を含めて無文である。121・122の体部には格子状の細沈線が施される。123の頸部の段部は成形時に粘土を重複させて作り出され、段部上の刻みは指頭による抓みによるものである。A地区の資料(Fig.19-90)と比較すると、刻みの間隔が広い点・細沈線が斜位で浅い点・胎土が軟質で白黄色を帯びる点などに差異が認められる。124は体部から口縁部が比較的大きく残る資料であるが、丸みを帯びる口唇端部に刻みが巡る以外は無文である。

Ⅱ群9類(119) 前期初頭の土器群のうち、西日本(関西)系の土器群を一括する。119は半裁竹管の連続刺突文とへら先状工具の刺突文が横方向に平行して施されるものである。色調は白色を帯びるものの胎土は堅緻であり、他の類種とも異質である。

**Ⅲ群** (Fig.58~60、P.1.22-12~23-15) 中期に位置付けられる土器群を一括する。

**Ⅲ群1類** (118・125~168) 五領ヶ台式に位置付けられる一群である。さらに数種に分類される。

**Ⅲ群1類-a** (125~144・168) 半裁竹管による集合沈線が施される一群であるが、中には半裁竹管によらないと考えられる。沈線文も含まれ、f類との差異が曖昧である。125・126は沈線文を交差させて、格子目状の文様を施すが一方の沈線文は浅く施すものである。128・129は沈線の施文後に刺突文が施される。130・135は立体的な口縁部の資料であり、f種に分類した方が良いかも知れない。136は半裁竹管を用いた横位のジグザグ文が施される。

**Ⅲ群1類-b** (145~154・158) 縄文が施される一群である。ループ状の沈線文を伴うもの(145・146)や太い沈線文を伴うもの(147~150)がある。

**Ⅲ群1類-e** (159) 角押文が施される一群である。159は浅鉢形土器の口縁部の資料であり、内・外面ともに角押文が巡るが、両者は異なる工具により施されている。

**Ⅲ群1類-f** (118・152~158・160~167) a~e類に分類されなかった一群であり、様々な要素を有す土器が含まれる。口唇端部に刻みが施されるもの(152~158)・隆帯文を有すもの(161)・立体的な口縁突起部・把手部など(118・160・162・163)・太い沈線文のみが施されるもの(164)・沈線文を付す馬蹄形の貼付文が施されるもの(165)・頸部を横走る沈線文に斜位の沈線文が施されるもの(166・167)などである。

**Ⅲ群6類** (169~188) 中期後半(曾利式)に位置付けられる一群で、さらに数種に分類される。B地区からはa種(曾利IV式)のみが出土している。173は器形に不明点はあるが、釣手土器の一部であることが推測され、半裁竹管による連続刺突文が施される。176・178は有孔罅付土器である。胎土は緻密で良質な粘土を用い、外面には磨きが施されるなど精製された土器と言える。

**Ⅲ群7類** (189・190) 中期後半(加賀利E式)に位置付けられる一群である。189・190とも縄文の施される口縁部の資料であるが、189は沈線・190は隆帯による連弧文と差異がある。

**Ⅳ群** (Fig.60~61、P.1.23-14・23-16) 後期に位置付けられる土器群を一括する。

**Ⅳ群1類** (191) 後期初頭(称名寺式)に位置付けられる可能性のある一群であるが、不明点が多い。沈線区画内に縄文が施されるが、施文の前後関係は不明である。

**Ⅳ群2類** (192~205・206・208~217・220~222) 後期前半(堀之内1ないしは2式)に位置付けられる一群である。口縁部内面に段状の太い沈線(1条ないしは2条)を施し外面が無文の土器(198~201)などがあるが、中には後期中葉近くに位置付けられるような資料も含まれる。192・202・204・217などはいずれも注口土器の部分資料と考えられ、胎土は緻密で良質である。外面は吸炭したような黒色を帯びる。これらは後期中葉に近い時期に位置付けられる可能性もある。206・210は貼付文が付される資料である。特に210は8字貼付文に近く後期前半の新しい段階(堀之内2式?)に位置付けられるかも知れない。また、205・213・216・217にも同様のことが言えそうだが明確ではない。なお、193や197は中期にも類似した器形が存在するため、他の群・類への位置付けが可能かも知れない。

**Ⅳ群3類** (203・214・215) 後期中葉(加曾利B式)に位置付けられる一群であり、いずれも沈線文を主体とする文様が施される。214・215は口縁部の資料であり、214は口唇端部の外側に、215は屈曲する内側に刻みが巡る。

**Ⅳ群4類** (219~221) 後期に位置付けられる粗製土器を一括する。無文で胎土が白色を帯びるものが主体的だが、220は外面の口唇端部直下に一条の沈線が巡る。

**V群** (Fig.61、P.1.23-16) 晩期に位置付けられる土器群を一括する。

**V群1類** (222) 晩期後半(氷式)に位置付けられる一群である。A・B地区を通じて1片のみの出土である。226は外面の口唇部直下に3条の太い沈線が巡る。胎土は堅緻であり、色調は黒色を帯びる。

**Ⅵ群** (Fig.61、P.1.23-16) 各群に分類できない時期不明の土器を一括する。4点(223~226)とも底部資料である。224の底面には縄状の圧痕が弧状に残る。また、225・226の底面には網代痕が残る。

c) 石器

B地区から出土した石器は、総点数100点以上におよぶ。ここでは、それらのうち図示した33点の資料について説明を加える。

①石鏃 (Fig.62-1~9、P.1.20-7)

9点を図示した。石材は黒曜石(1~3、6~9)とチャート(4、5)の2種類がある。形態は凹基無茎鏃(1・2・4・5・6・8)と平基無茎鏃(3)の2形態が認められるが、7・9は基部を破損しており、その形態は不明である。また、4については石鏃の未製品であると考えられるが、調整順序や大きさにやや疑問点があり、他の器種である可能性もある。

②石錐 (Fig.62-11、P.1.20-7)

1点を図示した。石材は黒曜石であり、幅広の剥片の側辺部下位と先端部に調整を加え、石錐としている。

③搔器 (Fig.62-13、P.1.20-7)

1点を図示した。石材はチャートである。半月形の剥片の弧部分に表裏面から剥離を加え、刃部としている。

④石匙 (Fig.62-14、P.1.20-7)

1点を図示した。材質は水晶であり、つまみ部の端部上面には自然面が残る。調整は雑であり、未製品である可能性もある。刃部の両端は欠損している。

⑤その他 (Fig.62-10・12、P.1.20-7)

器種は不明である。材質はともに黒曜石である。

⑥磨製石斧 (Fig.63-15、P.1.20-5)

B地区から出土した磨製石斧は図示した1点のみである。石材は蛇紋岩であり、表裏面には縦方向の擦痕が残る。基部を欠損するが、形態は中型の定角式磨製石斧である。

⑦打製石斧

(Fig.64-16~21、P.1.20-6)

6点を図示した。石材はすべて粘板岩である。形態はほとんどが短冊形であるが、基部が尖るようなタイプ(18・19)は別に分類することが可能かも知れない。また、20や21は小型であったり、破損品のため形態は不明である。

⑧磨石

(Fig.65-22~26、P.1.20-7)

5点を図示した。材質は砂岩(22~23)、安山岩(24~26)である。形態は丸形が主体的である。

⑨丸石

(Fig.65-27~30、P.1.20-7)

材質は砂岩。用途は不明。

⑩凹石

(Fig.65-31~33、P.1.20-7)

材質はいずれも安山岩。

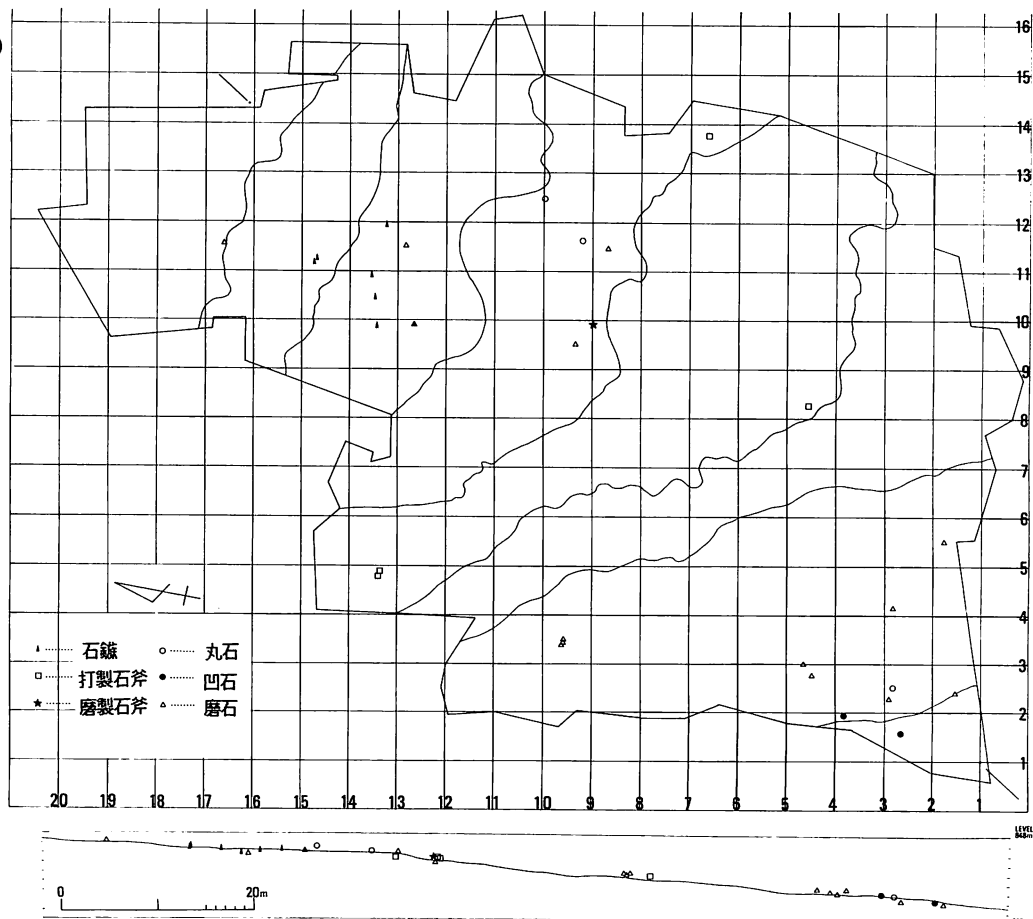


Fig. 66 石器分布図



(2) 古墳時代

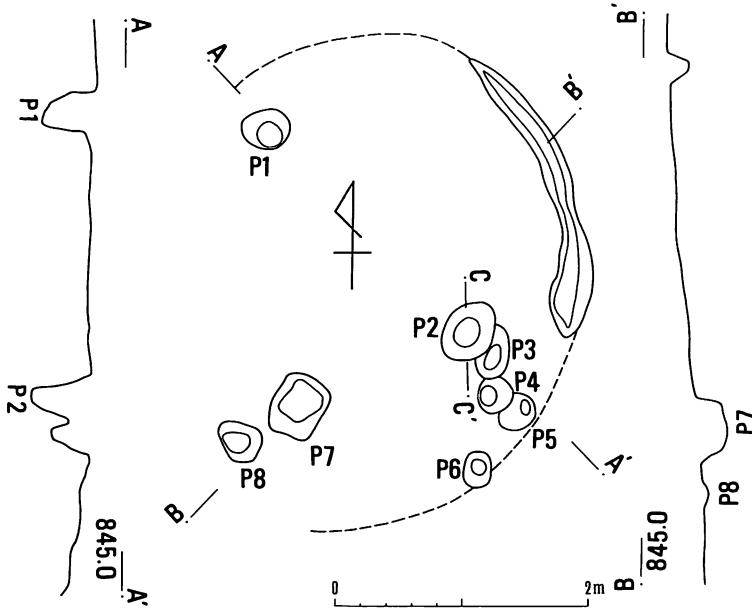


Fig. 67 7号住居址

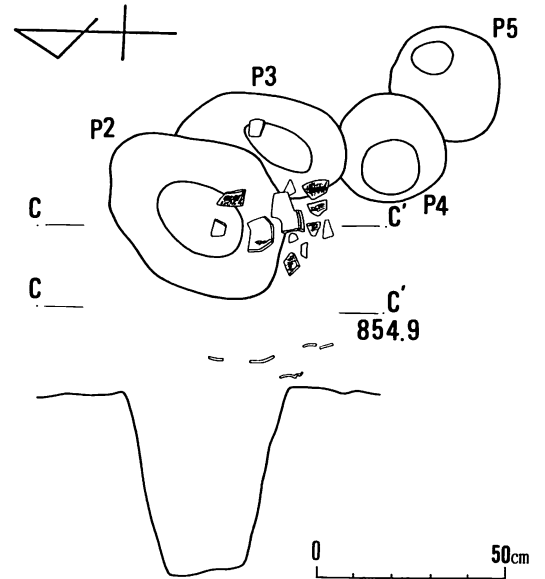


Fig. 68 7号住居址 pit 拡大

7号住居址 (Fig.67・68・69、P1.10-18、P1.24-17)

(位置) 調査区の北側、13・14-10 grid に位置し、第IV層上面にて確認された。

(形態) 本住居址は竪穴としては確認されず、北東端の周溝状の溝と複数の柱穴状の小土坑が確認されたのみである。平面形態は円形に近いと推定されるが、周溝状の溝は部分的に存在するのみである点などから確定はできない。溝や小土坑を基準とした推定規模は、南北方向で約3.8mを測る。また、炉や硬化した床面も確認されず、「住居址」と確定し難い点もある。

(柱穴) いずれも柱穴状の小土坑である。配列は整わず柱穴として確定することはできないが、P1～P8の8基が検出された。平面形態はP7が方形に近い以外は、いずれも楕円形である。P1は南北0.3m×0.38m、深さ0.41mを測り、以下同様に、P2は0.44m×0.4m、0.95m、P3は0.45m×0.25m、0.3m、P4は0.28m×0.26m、0.25m、P5は0.29m×0.29m、0.22m、P6は0.28m×0.22m、0.18m、P7は0.5m×0.4m、0.25m、P8は0.32m×0.35m、0.06mを測る。

(周溝) 北東端に部分的に存在する。床面の残存状況が不良のため、部分的な周溝であるのか、全周するものが部分的に残存したものであるのかは不明である。規模は最大幅0.32m、深さ0.15mを測る。

(遺物) 出土した遺物はすべてP2の覆土内およびその周辺に集中していた (Fig.68)。図示した2点 (Fig.69-1・2) 以外の個体は認められなかった。1は、「S字状口縁台付甕」の口縁部および体部上位である。推定口径は16.8cm、現存高は5.2cmを測る。調整は口縁部内外面は横撫でであるが鋭利な作りは工具成形の可能性もある。体部は外面下位から↘方向の刷毛状工具による撫で、その後上位に↙方向の刷毛状工具による撫でが施される。体部外面の刷毛目は肩部にて交差し、交差点には刷毛状工具による横方向の撫でが巡る。また、体部内面には↑方向の撫でが施され、指頭圧痕が残る。なお、頸部内面には刷毛状工具による撫でが施される。口縁端部・段部は稜が鋭利な作りで上段部上面は押圧面となる。形態的にはいわゆる「赤塚分類」B類に類似する。胎土分析を依頼し付篇 (P173) に掲載したので参照されたい。2は、櫛描波状文の施される壺か甕の体部破片である。

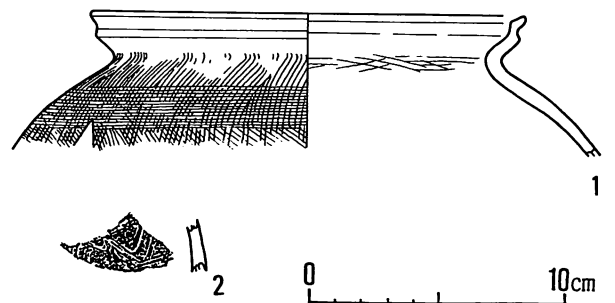


Fig. 69 7号住居址出土遺物

(3) 平安時代

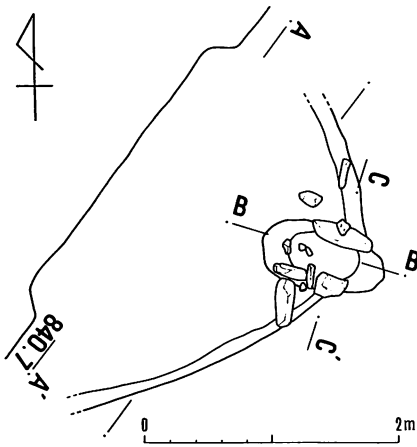


Fig. 70 3号住居址

3号住居址

(Fig.70~72、P.1.10-20、P.1.24-18)

(位置) 調査区の西側、6-3・4 Gridに位置し、第Ⅲ層上面にて確認された。

(形態) 本住居址は周辺の攪乱により、残存状況が不良であった。よって確認されたのは、カマドとその周辺の壁・床の一部のみであり、柱穴・周溝等は確認されていない。残存するカマド・壁から平面形態は、方形あるいは長方形を呈すると推測され、主軸は北から西へ約20°程ふれる。全体的な規模は不明であるが、壁高は東壁で0.2m、南壁で0.19mを測り、立上がりは緩やかである。床面はほぼ水平であるが砂質のためか特に硬化する部分は確認されなかった。

(カマド) 住居址の南東コーナーに石組みのカマドが検出された。主軸方位はN-197°-Eである。規模は全長0.98m、最大幅0.58m、煙道長0.2mを測る。煙道部は壁面を半円形に掘り込み、約30°で緩やかに立ち上がる。焚口部・燃焼部は浅い皿状に掘り込まれる。

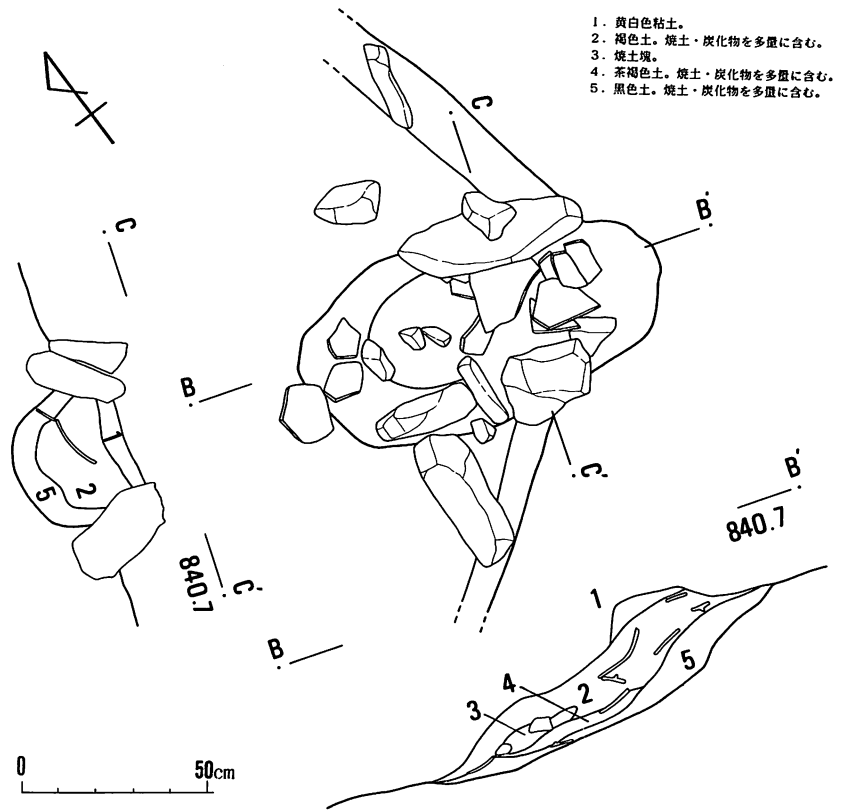


Fig. 71 3号住居址カマド

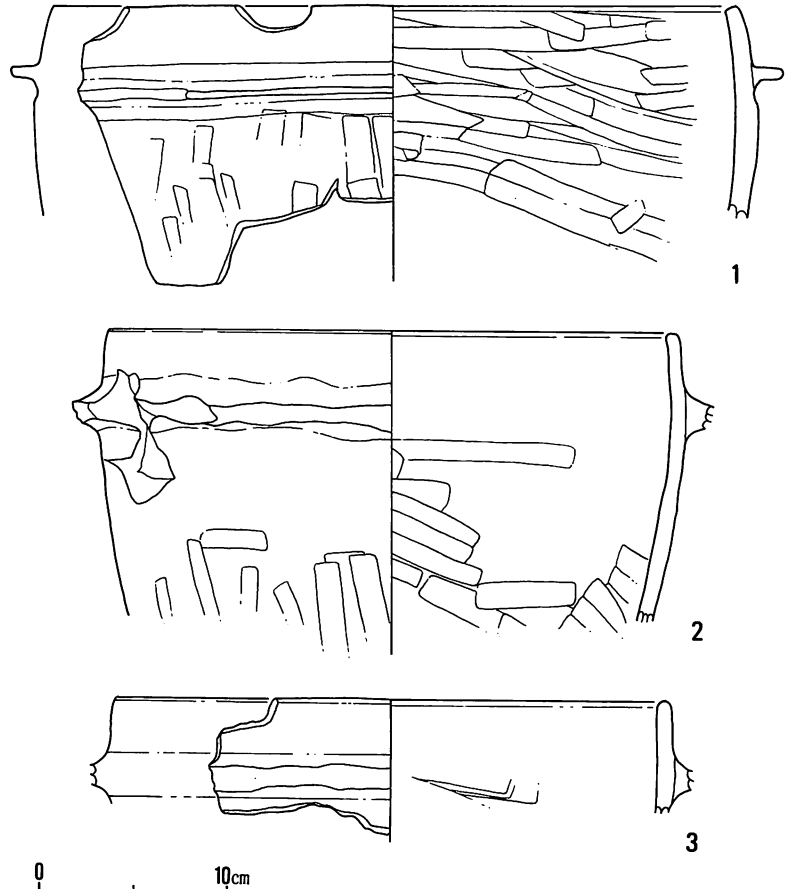


Fig. 72 3号住居址遺物(1/4)

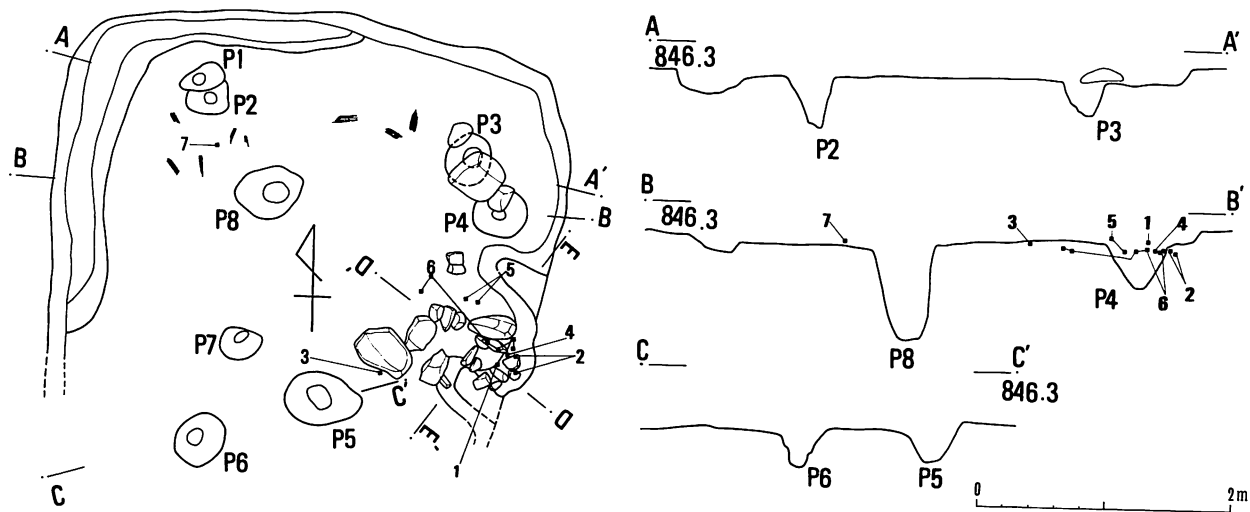
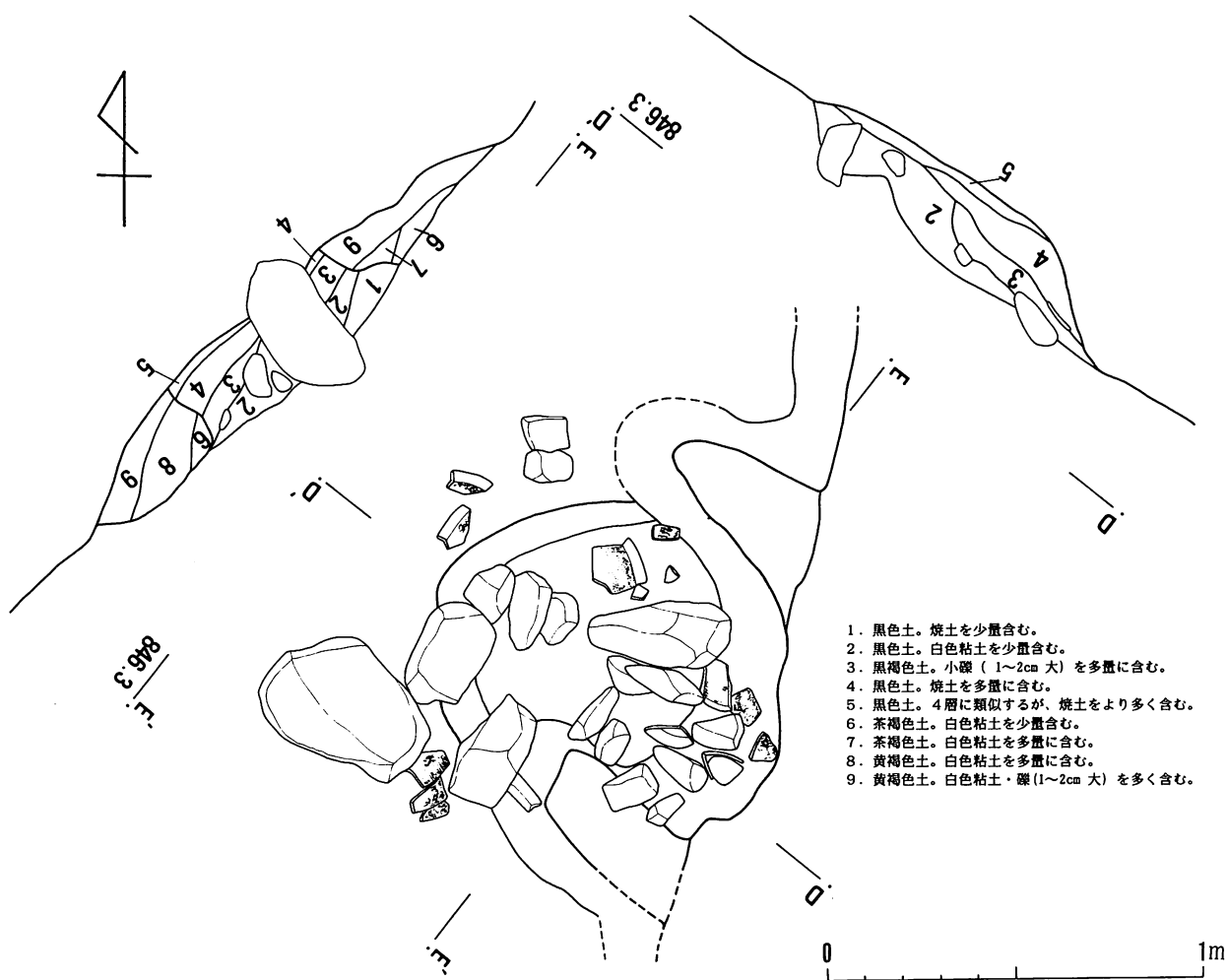


Fig. 73 8号住居址



1. 黒色土。焼土を少量含む。
2. 黒色土。白色粘土を少量含む。
3. 黒褐色土。小礫（1~2cm大）を多量に含む。
4. 黒色土。焼土を多量に含む。
5. 黒色土。4層に類似するが、焼土をより多く含む。
6. 茶褐色土。白色粘土を少量含む。
7. 茶褐色土。白色粘土を多量に含む。
8. 黄褐色土。白色粘土を多量に含む。
9. 黄褐色土。白色粘土・礫（1~2cm大）を多く含む。

Fig. 74 8号住居址カマド

袖部は南側が良好な残存状況を見せ、扁平な礫を組み合わせ構築され、部分的に黄白色粘土が充填される。天井部は崩壊しており不明である。また、覆土や前面の床上に黄白色粘土が多く確認されることから、石組みを粘土で覆い構築されていたカマドと考えられる。

(遺物) いずれも土師器の羽釜であり、3個体分 (Fig.72-1~3) が出土した。出土位置は1・2がカマド内、3がカマド前面床上である。1は、推定口径35.2cm、現存高14.5cmを測る。粘土帯の貼付による鐳部は最大厚1.2cm、推定径40.6cmを測る。体外外面には篋状工具による撫で、口縁部外面には横撫でが施される。2は、推定口径29cm、現存高17cmを測る。粘土帯貼付による鐳部は最大厚2.6cmを測るが、

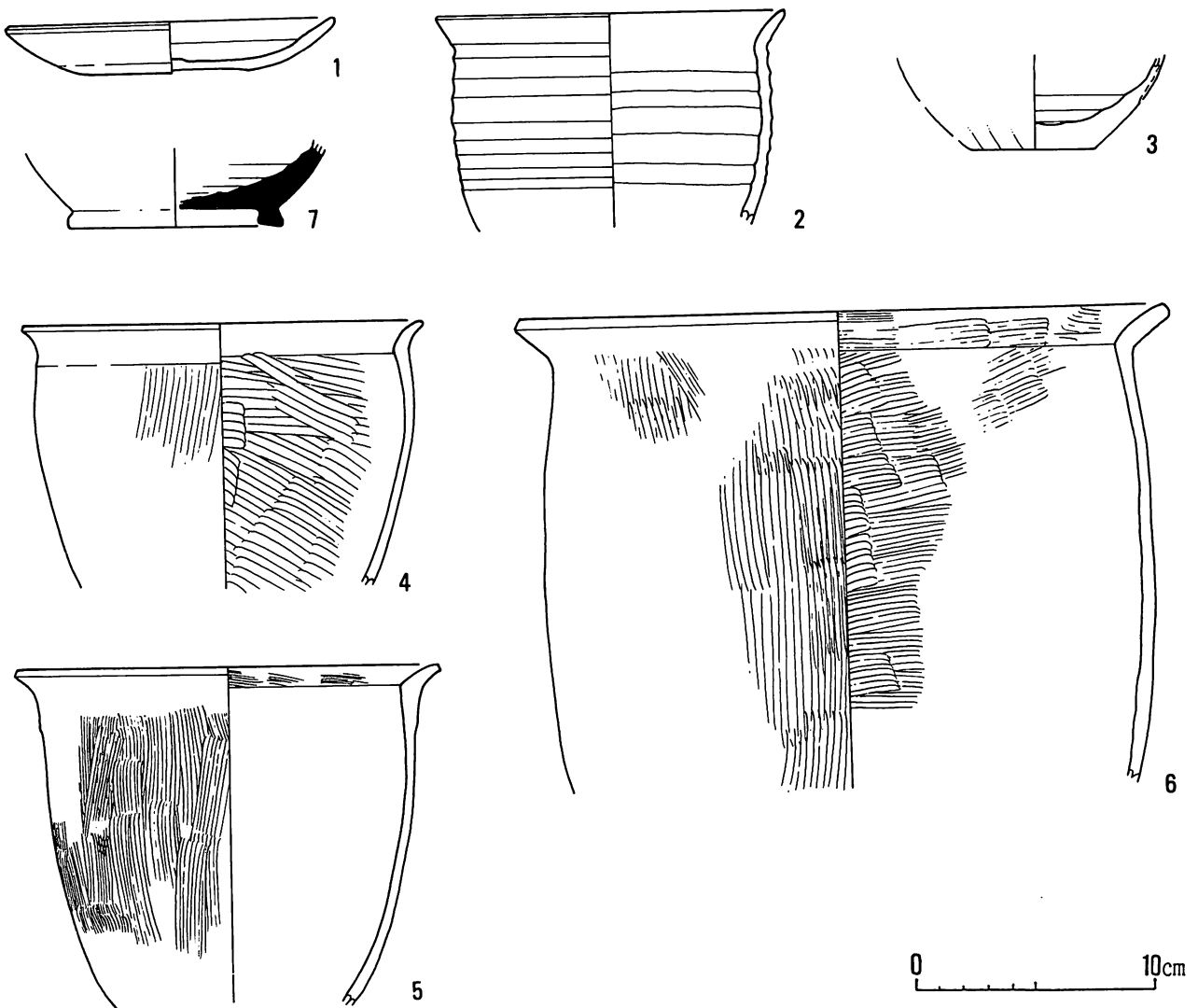


Fig. 75 8号住居址出土遺物

径は不明である。1と調整が異なり、体部内外面には指等による撫でが、口縁部内外面には横撫でが施される。3は、推定口径29.8cm、現存高7.2cmを測る。罎部は最大厚2.1cmを測るが径は不明である。口縁端部は丸くなり、1・2と異なる。1～3とも胎土には0.5cm大の小礫を含む。

8号住居址 (Fig.73～75、P1.10-21・22、P1.24-19)

(位置) 調査区の北東端、16-12・13Grid、15-12・13Gridに位置し、第IV層上面にて確認された。9号住居址が南西へ約15m、12号住居址が西へ約15mの位置に存在する。

(形態) 本住居址は南側が不明瞭であるが、平面形態は方形あるいは長方形を呈すると考えられる。主軸方位はN-110°-Eである。規模は南北3.6m以上×東西3.95mを測る。壁高は西壁で0.05m、北壁で0.1m、東壁が0.15mを測る。床面はほぼ平坦であるが、カマドの周辺は0.05m程度高くなる。

(カマド) 住居址の東壁にカマドが検出された。主軸方位はN-120°-Eであり、住居址の主軸より南側へややふれる。崩壊が著しく、不明瞭なカマドである。規模は全長1.02m、最大幅1.32m、煙道長0.26mを測る。煙道部は壁面を半円形に僅かに掘り込み、約40°で立ち上がる。焚口部・燃烧部は約0.1m程、皿状に掘り込まれる。袖部は白色粘土を多く含む黄褐色土・茶褐色土で構築され、断面は層状となるが、残存状況は不良である。天井部は崩壊し不明である。本カマドの内部や周辺には40cm大・拳大の礫(大部分は被火熱である)が散乱しており、原形は石組みのカマドであった可能性が高い。しかし、残存する袖部は粘土を含む土で構築されており、礫は袖部の先端や天井部の補強材であったのかも知れない。また、カマド内からは遺物が多く出土しており、中には坏や小型甕などカマドに伴う使用が考えられない遺物もある。崩壊の著しさも含め、カマド廃棄の一様相を見せている。

(柱穴) P1～P8の8基が検出された。平面形態はいずれも楕円形あるいは不整形である。P1は南北0.2m×東西0.35m、深さ0.3mを測り、以下同様に、P2は0.27m×0.32m、0.4m、P3は0.4m×0.35m、0.25m、P4は0.36m×0.41m、0.34m、P5は0.42m×0.61m、0.2m、P6は0.43m×0.4m、0.35m、P7は0.23m×0.32m、0.22m、P8は0.4m×0.52m、0.73mを測る。なお、近接する柱穴(P1・P2やP3・P4)の検出状況からは本住居址には「建て替え」があった可能性が伺えるが、壁・カマド等にはその状況は確認されなかった。

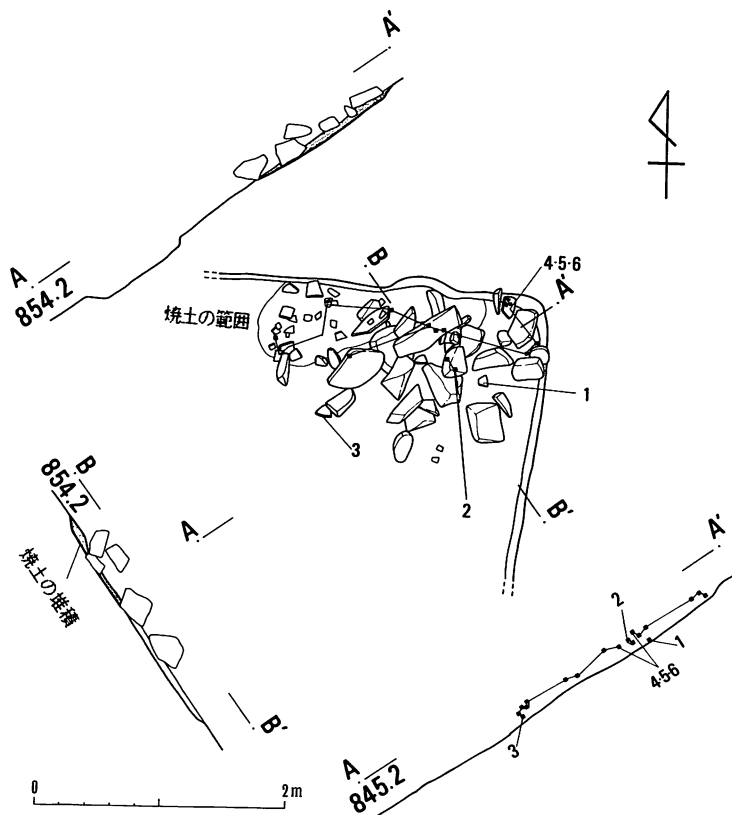


Fig. 76 9号住居址

(周溝) 住居址の北西端、西壁・北壁の一

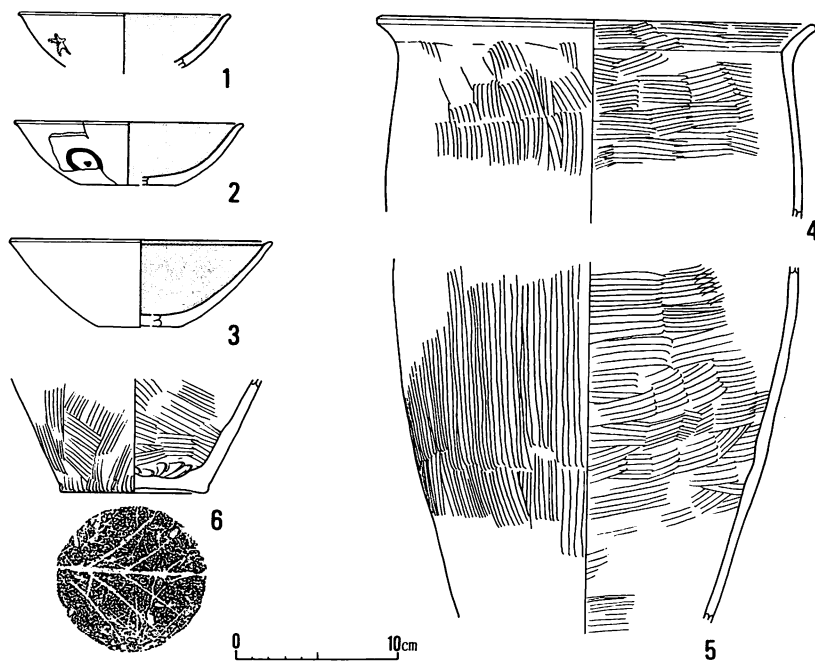


Fig. 77 9号住居址出土遺物

部に幅の広い周溝が検出された。規模は最大幅0.5m、深さ0.13mを測る。

(遺物) 土師器6点 (Fig.75-1～6)・須恵器1点 (Fig.75-7) を図示する。1は皿である。口径14.8cm、底形6.4cm、器高2cmを測る。ロクロ成形であり、体部外面はロクロ撫での後、下位にのみ篋削りが施される。底部は篋削り、体部内面と口縁部にはロクロ撫でが施される。2は、甕である。推定口径14.8cm、現存高8.5cmを測る。ロクロ成形であり、内外面ともロクロ撫でが施される。胎土は緻密で焼成は良好である。3は甕の底部であろう。底形5cm、現存高3.8cmを測る。ロクロ成形であるが、体部外面下位には、\方向の篋削りが施される。内面にはロクロ撫での痕跡が明瞭に残り、回転は右回りで底部から口縁部へ引き上げるようにひいたことが観察される。4は甕である。推定口

径16.8cm、現存高11cmを測る。体部内外面にはいずれも刷毛状工具による撫でが施され、その後口縁部に横撫でが施される。口縁部は内面は丸味を帯び外反し、端部は丸くなる。5は、甕である。推定口径27.4cm、現存高20.2cmを測る。体部外面と口縁部内面には刷毛状工具による撫でが施され、体部内面には指等による撫でが施される。また、口縁部外面には横撫でが施される。頸部が厚く、口縁端部は四角く面を有す形態である。6は、甕である。推定口径27.4cm、現存高20cmを測る。体部内外面および口縁部内面には刷毛状工具による撫でが施され、口縁部外面には横撫でが施される。口縁端部は丸くなる。7は、長頸壺の底部であろう。推定高台径9cm、現存高3.3cmを測る。高台は付け高台であり、断面は台形を呈す。外面には部分的に自然釉が見える。

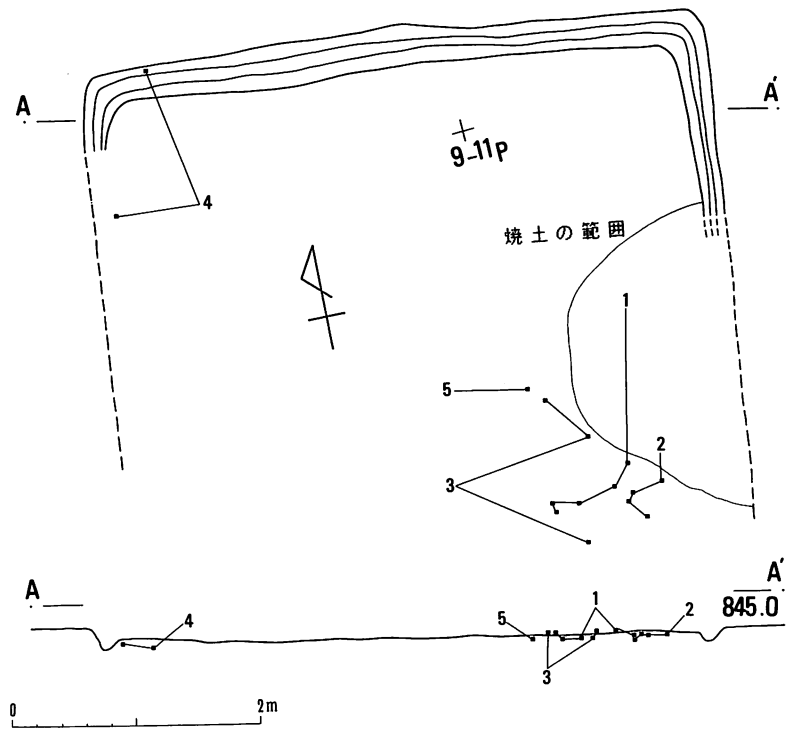


Fig. 78 11号住居址

9号住居址 (Fig.76・77、P.1.10-23・24、P.1.24-20)

(位置) 調査区北側、13-11・12Gridに位置し、第IV層上面にて確認された。

(形態) 本住居址はカマドの痕跡と考えられる焼土・礫の集中域とその周囲の壁・床が僅かに確認されたのみであり、柱穴等は確認されていない。残存する壁・カマドから平面形態は方形あるいは長方形を呈すると考えられ、主軸方位はN-8°-E程度となる。全体的な規模は不明であるが、壁高は北壁で0.06m、東壁で0.07mを測る。床面はほぼ平坦である。

(カマド) 焼土や白色粘土が堆積し、火熱を受けた礫が集中する住居址北東端がカマドの痕跡と考えられる。また、北壁の東寄りに半円形の掘り込みがあり、煙道部の痕跡であるかも知れない。しかし、燃焼部・焚口部あるいは袖部も確認することはできず、不明確である。焼土・白色粘土・礫は床面上に散乱し、それらに混在するように遺物が出土している。

(遺物) 土師器6点 (Fig.77-1~6) を図示する。なお、4・5・6の甕は同一個体であり、1~3は内面に黒色処理の施される土器である。1は、坏である。推定口径12.8cm、現存高3.5cmを測る。ロクロ成形であり、内外面にはロクロ撫でが施され、その後内面のみ工具による横方向の磨きが施される。体部は丸みを帯び立ち上がり、口縁端部は外反し尖る。外面に「大」状の墨書が見えるが、

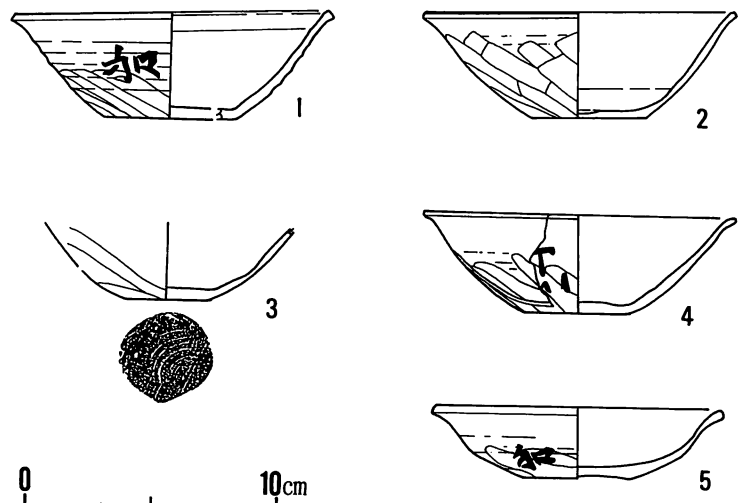


Fig. 79 11号住居址出土遺物

薄くなっており不明である。2は坏である。推定口径14cm、器高3.8cm、推定底径5.8cmを測る。成形・調整技法は1・3と同様であるが、僅かに残存する底部には回転糸切りが見える。器形は1に類

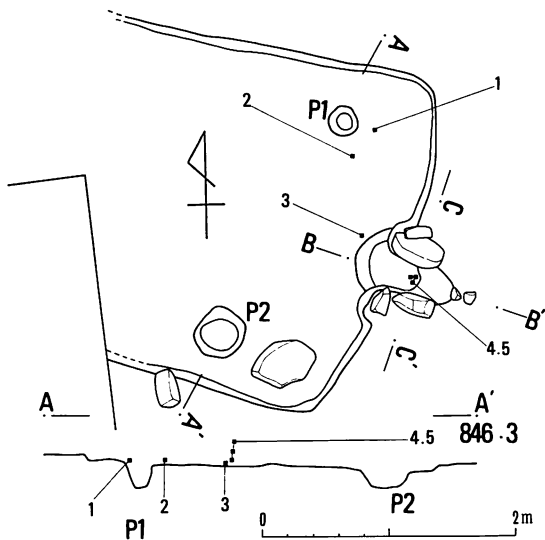
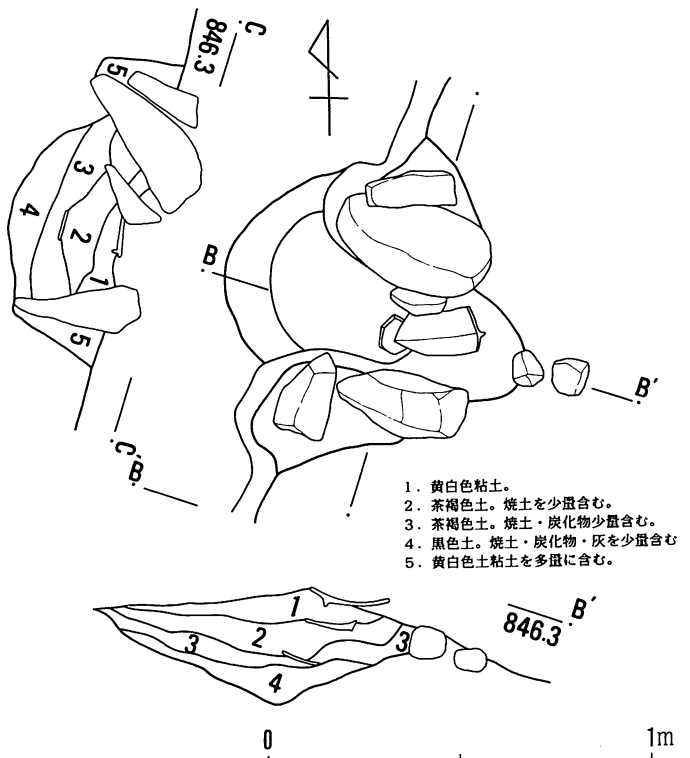


Fig. 80 12号住居址



1. 黄白色粘土。
2. 茶褐色土。焼土を少量含む。
3. 茶褐色土。焼土・炭化物少量含む。
4. 黒色土。焼土・炭化物・灰を少量含む。
5. 黄白色粘土を多量に含む。

Fig. 81 12号住居址カマド

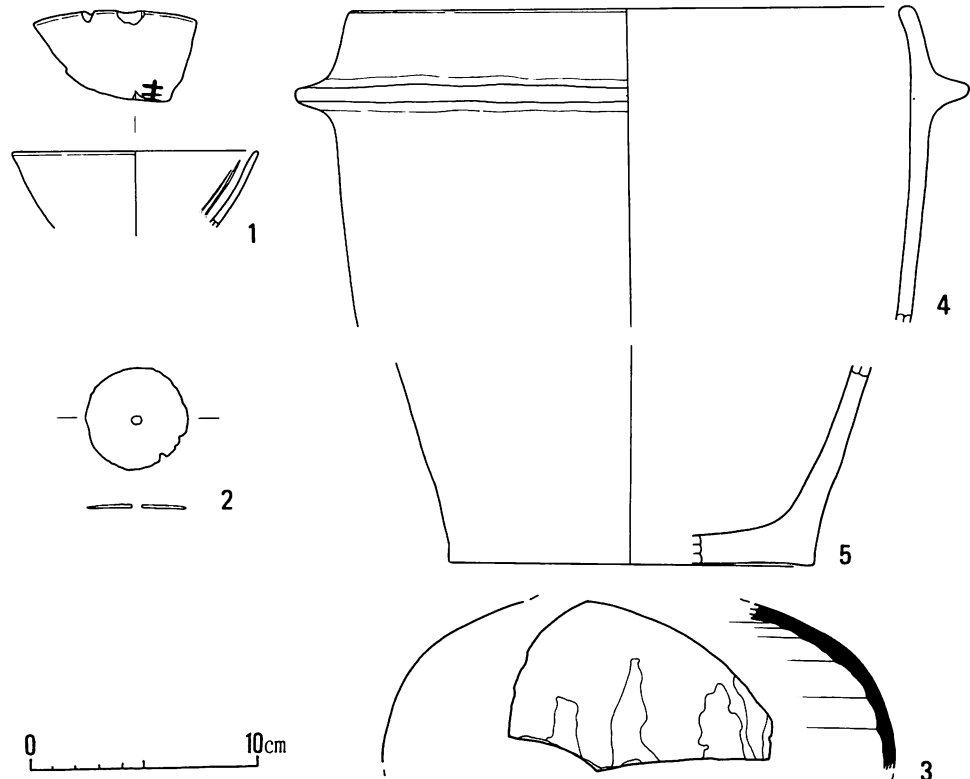


Fig. 82 12号住居址出土遺物

似するが、口縁端部の外反がやや弱い。外面には記号と考えられる「●」状の墨書が見える。3は、坏である。推定口径16.2cm、器高5.2cm、推定底径5.2cmを測る。成形・調整技法は1・2と同様である。底部は僅かに残存するが調整技法は不明である。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部は外反し丸くなる。4・5・6は甕である。推定口径は26.4cm、底径は9cm、推定器高は約35cmを測る。体部内外面および口底部縁端部内面には刷毛状工具による撫でが施され、外面は↓方向、内面は横方向である。口縁部外面には横撫でが施される。底部内面には、指等による強い搔き目が内

側から外側に向けて放射状に施され、外面には木葉痕が残る。口縁端部は丸くなるが、部分的に四角く面を有す箇所もある。

#### 11号住居址 (Fig.78・79、P1.25-21)

- (位置) 調査区のほぼ中央、9-10・11Grid、8-10・11Gridに位置し、第IV層上面にて確認された。9号住居址が北へ約25mの位置に存在する。
- (形態) 本住居址は北壁、西壁・東壁のごく一部および床・周溝が確認されたのみであり、柱穴・カマド等は確認されていない。ただし、住居址の東端部には焼土の集中する部分があり、カマドの痕跡とも考えられる。平面形態は残存する壁から方形あるいは長方形を呈することが推測され、焼土の集中する東壁を基準とした主軸方位はN-83°-Eである。全体的な規模は不明であるが、北壁は4.9mを測る。壁高は西壁で0.1m、北壁で0.1m、東壁で0.05mを測る。床面はほぼ平坦である。
- (周溝) 住居址の北端、西壁・北壁・東壁の一部で周溝が検出された。幅は0.14m~0.3mを測り、深さは0.8m~0.12mを測る。住居址北西端の周溝には遺物(4)が落ち込んでいた。
- (遺物) 5点を図示する(Fig.79-1~5)。いずれも土師器の坏である。1は、口径12.4cm、底径5.2cm、器高4.2cmを測る。ロクロ成形であり、内外面にはロクロ撫でが施され、その後、体部外面下位に、方向の篋削りが施される。底部は篋削りが施されるが残存状況が不良のため一定方向か不整方向かは不明である。口縁端部は肥厚し、内外面の両端が角張る形態である。また、体部外面の中位に「和」と考えられる墨書が見える。2は、口径12.2cm、底径4.5cm、器高4.3cmを測る。成形・調整技法は1~5に等しいが、体部外面の篋削りが上位から施される点で異なる。また、底部の篋削りは不整方向に施される。口縁端部は肥厚し丸くなる。3は、底径3.4cm、現存高2.8cmを測る。成形・調整技法は1~5に等しいが、底部は回転糸切り後、一定方向の篋削りが全面に施される。4は、口径12.4cm、底径4.2cm、器高4cmを測る。成形・調整技法は1~5に等しいが、底部は一定方向の篋削りが全面に施される。口縁端部は強く外反し、丸くなるがあまり肥厚しない。また、体部外面中位に判読不明の墨書が見える。なお、口縁端部には「灯明皿」特有のタール状付着物も見える。5は、口径11.2cm、底径4.4cm、器高2.7cmを測る。成形・調整技法は1~4に等しいが底部は不整方向の篋削りが全面に施される。体部は中位が膨らみ、口縁端部は肥厚し丸くなる。また、体部外面中位に「和」と考えられる墨書が見える。

#### 12号住居址 (Fig.80~82、P1.11-25・26、P1.25-22)

- (位置) 調査区の北側、16-10Gridに位置し、第IV層上面にて確認された。
- (形態) 本住居址は西側を攪乱により失っているが、平面形態は長方形を呈する。主軸方位はN-107°-Eである。全体的な規模は不明であるが南北2.7m×東西2.7m以上を測る。壁高は北壁で0.1m、東壁で0.25m、南壁で0.12mを測る。床面はほぼ平坦だが、やや南傾する。
- (柱穴) 平面形態が円形の2基が検出された。P1は南北0.24m×東西0.25m、深さ0.2m、同様にP2は0.4m×0.4m、0.15mを測る。
- (カマド) 東壁のほぼ中央に石組みのカマドが検出された。主軸方位はN-110°-Eであり、規模は全長0.82m、最大幅0.97m、煙道長0.3mを測る。煙道部は壁を半楕円形に掘り込み、約50°で立ち上がり、焚口部・燃烧部は皿状に約0.08m掘り込まれる。袖部は残存状況が不良で不明だが、短い形態あるいはカマド本体が壁に割りこむ形態である可能性もある。礫と粘土を使用して構築されたカマド内には遺物(4・5)が残存する。
- (遺物) 5点を図示する(Fig.82-1~5)。1は土師器坏である。推定口径5.4cmを測り、内面に暗文、外面に判読不明の墨書が見える。3は須恵器壺の体部上位であり、自然釉が掛かる。4・5は羽釜の同一個体で、口径24cm、底径16cmを測る。体部内外面は指等による不整方向の撫で、口縁部は横撫でが施される。2は薄い鉄製の紡錘車である。



(4) 中世～近世

1) 竪穴状遺構及び地下式土塋

B地区の4区(P28参照)に集中して竪穴状遺構が41基、地下式土塋1基が確認された。竪穴状遺構の性格は不明であるが、平面形態は方形あるいは長方形を呈し、断面形態は箱形を呈するものが多い。地下式土塋の構坑部分が残存したのとも考えられ、主軸方位や形態に共通性が多いことから「竪穴状遺構」と呼称し、本項で一括して報告する。

a) 地下式土塋

1号地下式土塋

(Fig.93、P1.11-29)

(位置) 10-11・12Grid、9-11・12Gridに位置し、東側の31号竪穴状遺構を切っている。第IV層上面にて確認され、竪坑および構坑が残存する。調査時には、天井部を残した状態での検出を試みたが、砂質の第IV層を掘り込み構築されていたため、崩落の危険を伴った。そのため、天井部は図化と除去を並行し、その全体像の検出に努めた。

(形態) 南側の竪坑と北側の構坑からなる。竪坑開口部の平面形態は南北に長い楕円形を呈し、規模は南北1.12m×南北1.05mを測る。断面形態は筒形で、

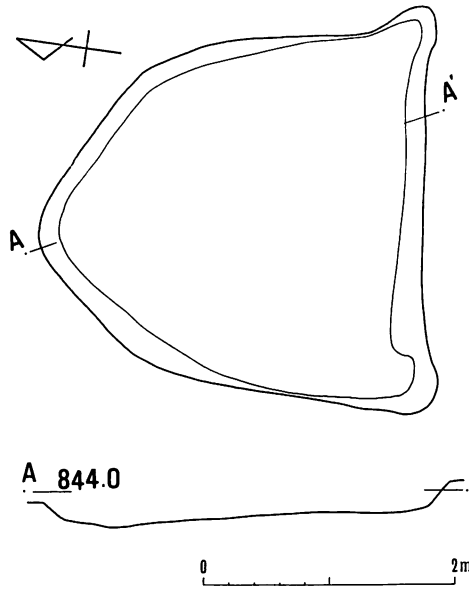


Fig. 83 1号竪穴状遺構

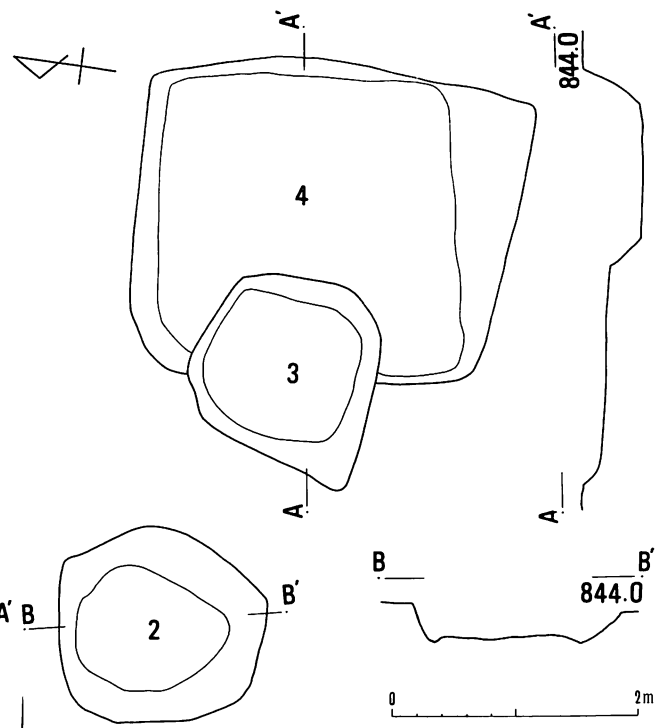


Fig. 84 2～4号竪穴状遺構

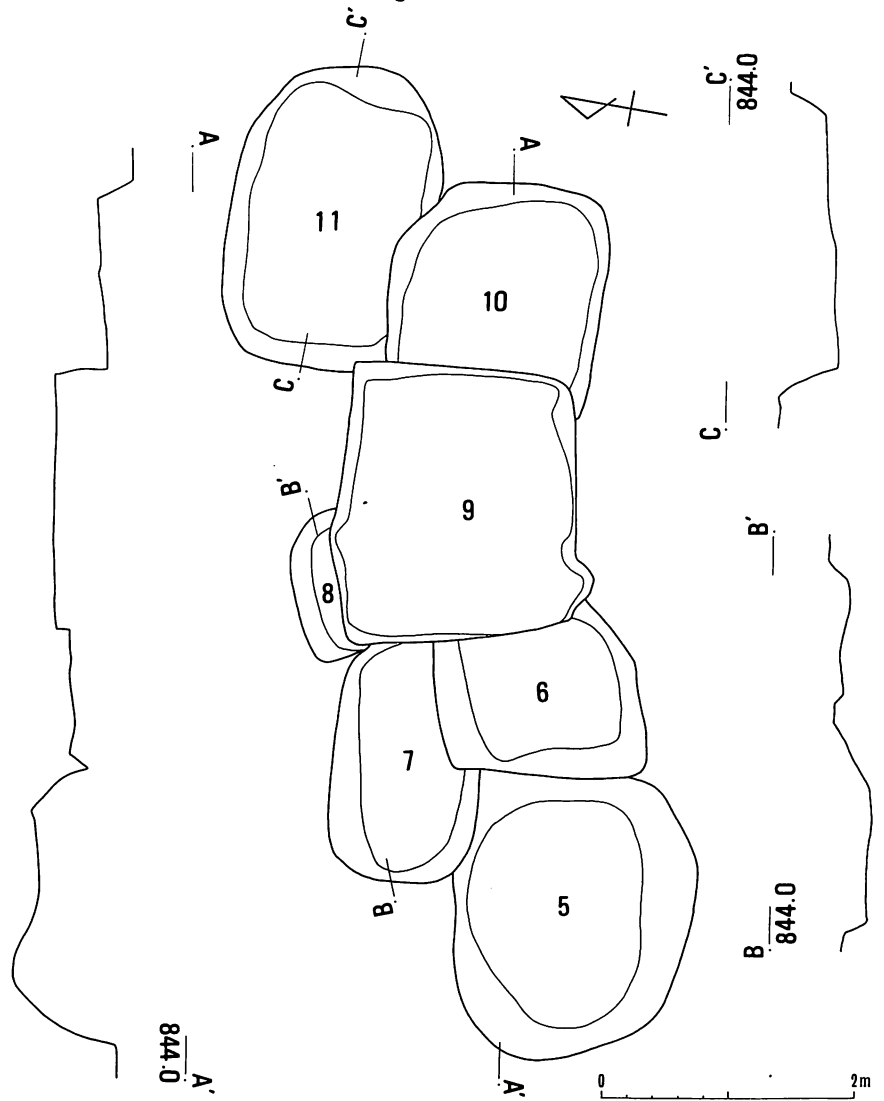


Fig. 85 5～11号竪穴状遺構

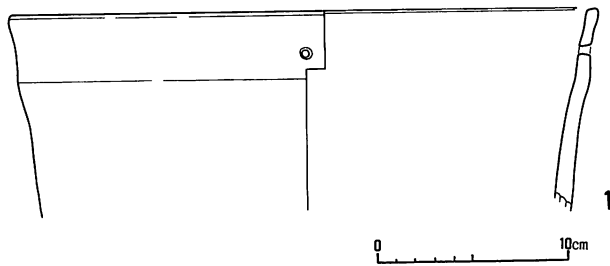


Fig. 86 1号地下式土壇出土遺物

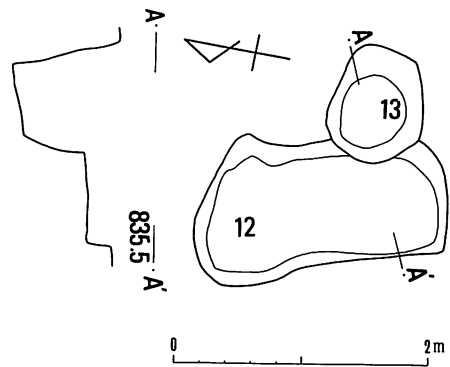


Fig. 87 12・13号竖穴状遺構

上部がやや開き気味に立ち上がり、竖坑底部までの深さは1.45mを測る。竖坑の壁面には掘り込み等はない。竖坑底部の平面形態は開口部と同様であり、規模は南北0.75m×0.85mを測る。竖坑底部は横坑側へ傾斜しつつ、連続するためその境界は不明瞭である。横坑の平面形態は不整形である。しかし、壁面は部分的な崩落が著しく、残存する東壁・南壁などから本来は長軸を東西方向に有す長方形を呈していたとも考えられるが不明である。規模は東西2.9m×南北2.7mを測る。床面はほぼ平坦であるが、多少凹凸がある。壁は天井部まで内湾気味に開き立ち上がり、高さは1.1m～1.2mを測る。天井部の断面形態はやや丸みを帯びるもののドーム状にはならず、直線的である。天井高は横坑の中央部が最も高く1.3mを測る。横坑にも掘り込み等の付属施設はない。また、竖坑・横坑とも工具痕は確認されていない。

(遺物) 内耳土器の口縁部と考えられる破片が1点出土している (Fig. 86-1、P. 26-25-1)。出土位置は横坑底部であり、器形・法量などは観察表 (Tab. 8) および遺構外出土遺物の分類中 (P. 133) に触れたので参照されたい。

b) 竖穴状遺構 (Fig. 83~85、87~93、P. 11-29)

竖穴状遺構は合計41基が確認された。これらの位置・形態・規模等については表 (Tab. 2) にまとめ、報告する。なお、特筆事項・出土遺物のある遺構については、以下に若干の説明を加える。

25号竖穴状遺構 (Fig. 92)

位置・規模等は表の通りである。23・24・26・27号竖穴状遺構を切っており、壁高は約1.1mが残存し、周辺の竖穴状遺構より深い。平坦な底部に礫が規則的に配されている点が特筆される。礫は10cm～40cm大の平らなものを使用し、上面を平坦にするよう配されている。配置は遺構の東壁に平行し、壁から約1m離れた位置に直線的に並べられる一群とその南端の「L字」状の一群に分けられる。用途や目的は不明である。

20号竖穴状遺構 (Fig. 92)

位置・規模等は表の通りである。19・21号竖穴状遺構に切られる。底面直上から古銭5点 (Fig. 91-1~5) が出土した。1・2は皇宗通寶、3は景德元寶、4は元祐元寶、5は景祐元寶であり、いずれも渡来銭 (北宋銭) である。計測値はTab. 6にあるとおりである。

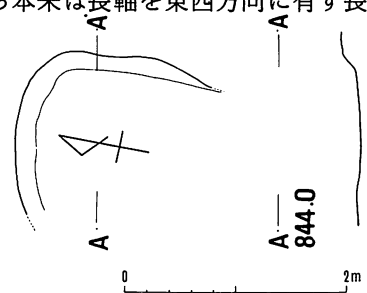


Fig. 88 14号竖穴状遺構

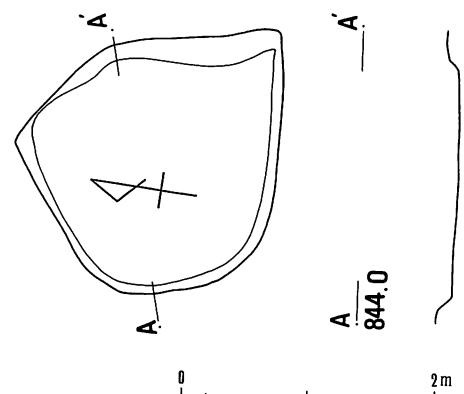


Fig. 89 15号竖穴状遺構

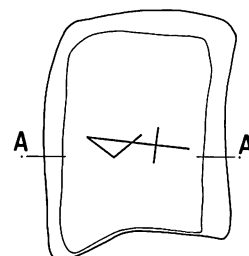


Fig. 90 41号竖穴状遺構

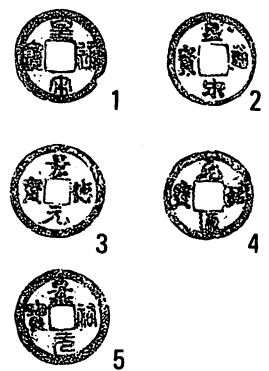


Fig. 91 20号竖穴状遺構出土遺物

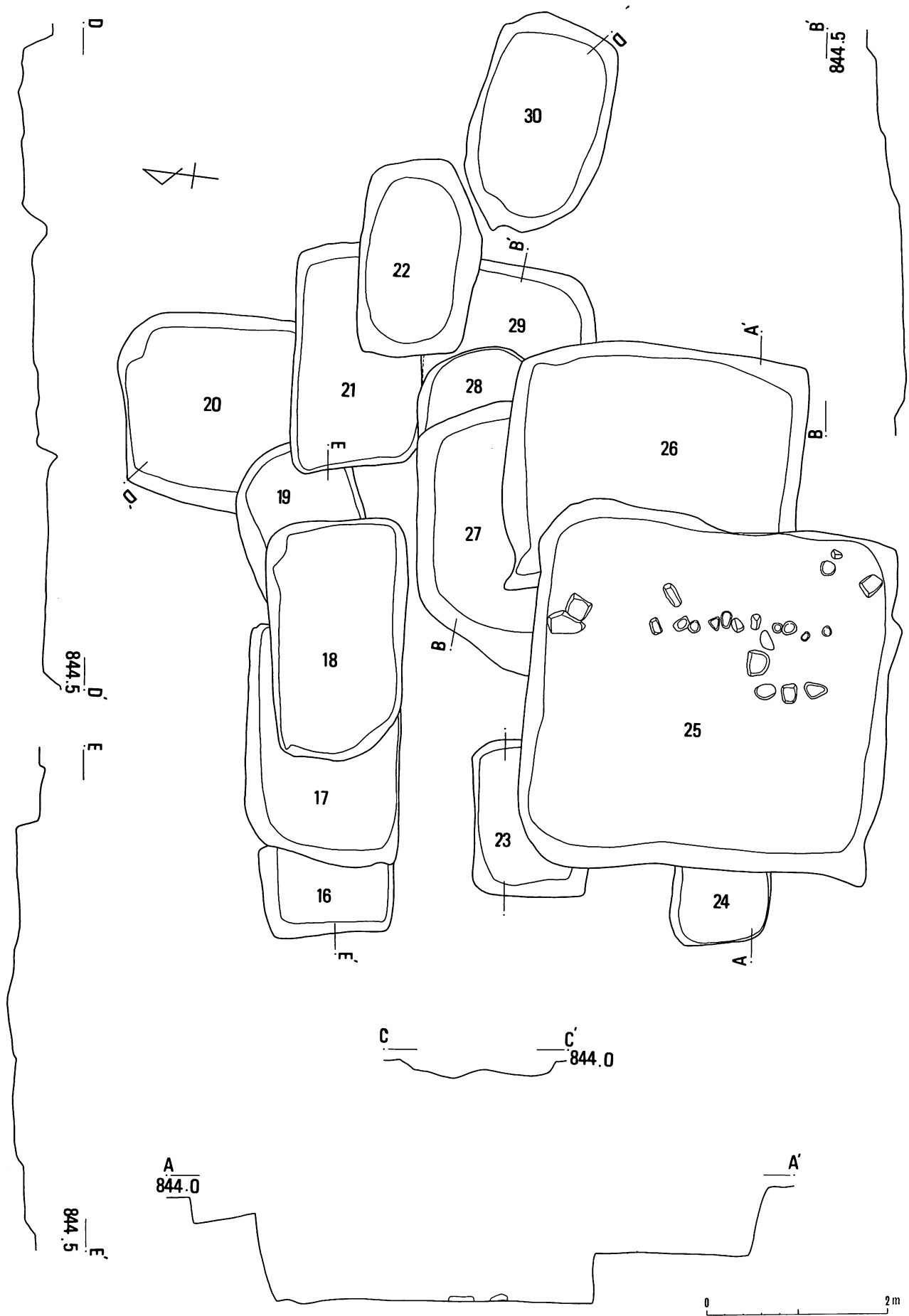


Fig. 92 16~30号竖穴状遺構

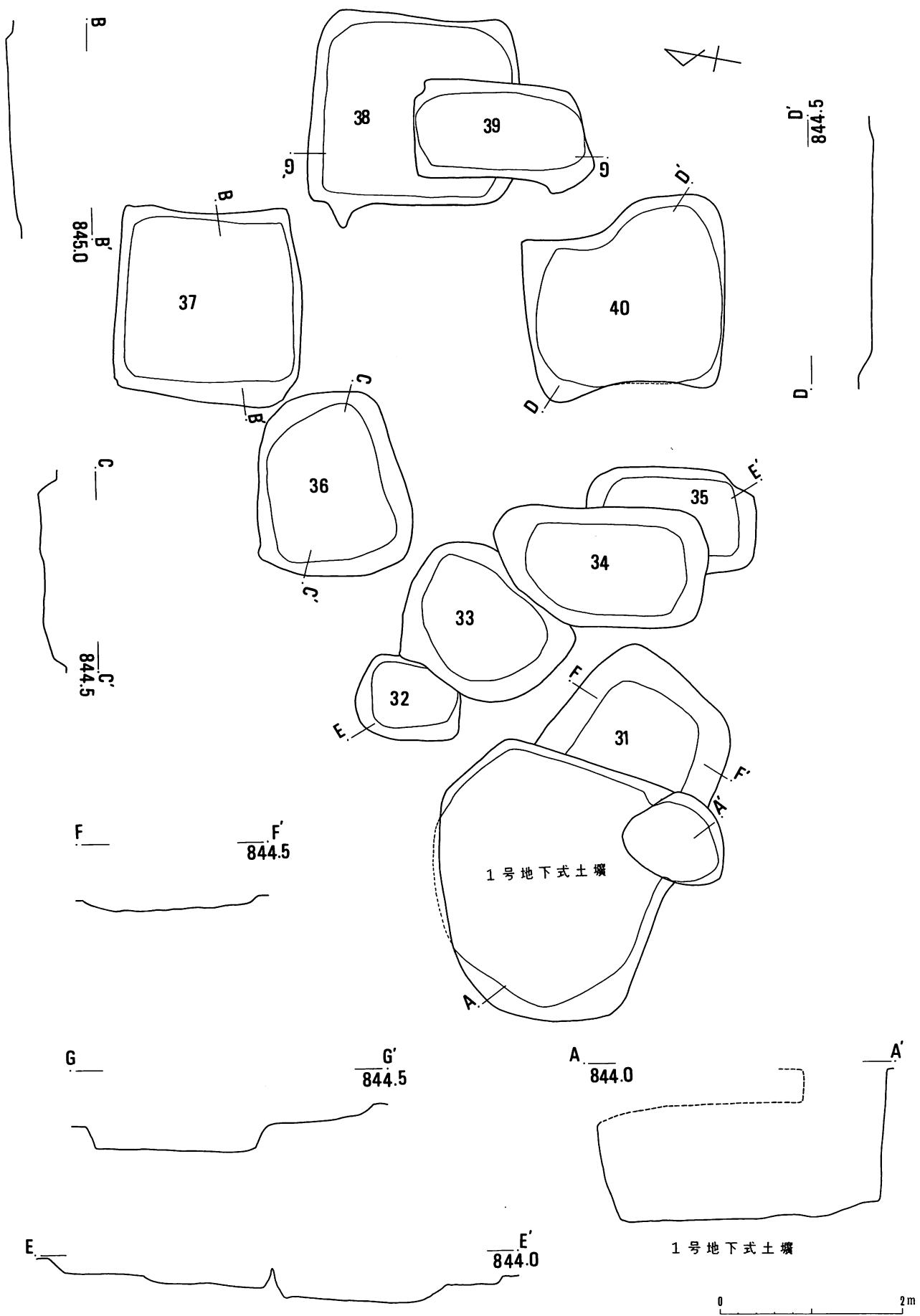
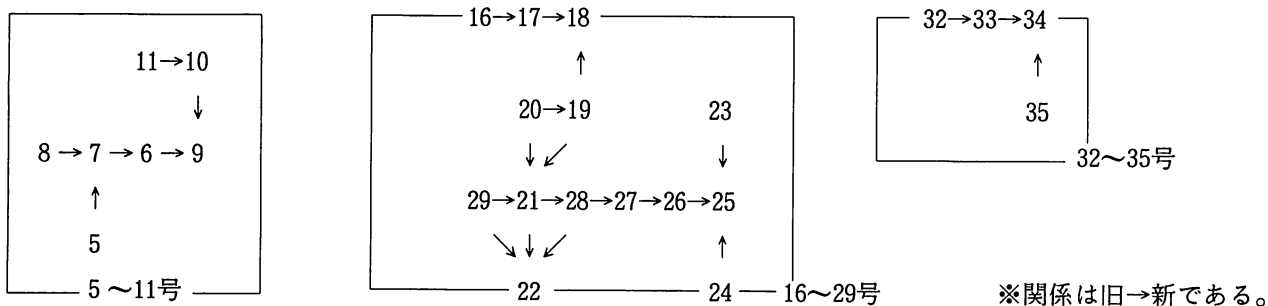


Fig. 93 31~40号竖穴状遺構

その他の竪穴状遺構については、表 (Tab. 2) に計測値等をまとめた。なお、残存状況が不良な遺構や切り合いの著しい遺構については形態の表現や計測値が曖昧になっている。詳細については実測図にあたられたい。

また、切り合い関係の複雑なものについては以下に関係を示しておく。



遺構	位置 (grid)	形態		規模		
		平面	断面	長軸	短軸	壁高
1号	11-9・10、12-9	不整形	皿形	3.14m	3.0m	0.25m
2号	11-9	円形	箱形	1.65m	1.55m	0.26m
3号	10・11-9	円形	箱形	1.55m	1.50m	0.54m
4号	10-9、10-9 他	方形	皿形	3.2m	2.6m	0.14m
5号	9-9・10	楕円形	皿形	2.3m?	1.85m	0.82m
6号	9-9	方形?	皿形	1.6m?	1.4m	0.16m
7号	9・10-9	楕円形	箱形	1.9m?	1.15m	0.23m
8号	10-9	楕円形	箱形	1.15m	0.5m?	0.2m
9号	9-9、10-10 他	長方形	箱形	2.2m	1.85m	0.42m
10号	9・10-10	方形?	箱形	1.8m?	1.52m	0.29m
11号	10-10	楕円形	箱形	2.4m	1.58m	0.49m
12号	9-10	楕円形	箱形	1.95m	1.0m	0.2m
13号	9-10	円形	円筒形	0.95m	0.74m	0.85m
14号	9-11	不明	皿形	1.8m?	1.5m?	0.15m
15号	8-11	不整形	皿形	2.20m	2.0m	0.07m
16号	11-10	長方形	皿形	1.46m	1.05m	0.12m
17号	11-10・11	長方形	皿形	2.6m?	1.73m	0.1m
18号	11-11	長方形	箱形	2.6m	1.5m	0.23m
19号	11-11	楕円形	皿形	1.7m?	1.9m	0.1m
20号	11-11	方形	箱形	2.2m	2.0m?	0.19m
21号	11-11・12	長方形	箱形	2.52m	1.45m	0.21m

遺構	位置 (grid)	形態		規模		
		平面	断面	長軸	短軸	壁高
22号	11-11・12	長方形	箱形	2.15m	1.35m	0.22m
23号	11-10・11	長方形	皿形	1.73m	1.28m	0.15m
24号	10-10	方形	箱形	1.2m	0.7m?	0.3m
25号	10-10・11他	方形	箱形	4.0m	3.85m	1.1m
26号	10・11-12	長方形	箱形	3.26m	2.6m	0.76m
27号	11-11	不整形	皿形	3.0m	1.3m?	0.14m
28号	11-11	円形?	皿形	1.3m?	0.6m?	0.05m
29号	11-11・12	楕円形	箱形	1.4m?	1.0m?	0.12m
30号	11-12	楕円形	箱形	2.35m	1.5m	0.33m
31号	9・10-12	方形?	皿形	1.85m	1.35m	0.12m
32号	10-12	方形?	皿形	1.15m	0.94m	0.18m
33号	10-12	楕円形	皿形	1.85m	1.5m?	0.22m
34号	9・10-12	楕円形	箱形	2.42m	1.3m	0.35m
35号	9-12	長方形	皿形	1.85m	1.14m	0.12m
36号	10-12	方形?	皿形	2.04m	1.7m	0.19m
37号	10-12・13 他	方形	皿形	2.12m	2.1m	0.1m
38号	10-13	方形	箱形	2.25m	2.1m	0.28m
39号	9・10-13	長方形	皿形	1.9m	1.08m	0.11m
40号	9-12・13 他	不整形	皿形	2.2m	2.0m	0.13m
41号	11-12・13	長方形	皿形	1.8m	1.5m	0.14m

Tab. 2 竪穴状遺構位置・形態・計測値表

2) 五輪塔集中区 (Fig. 94~97、P.12-30~35)

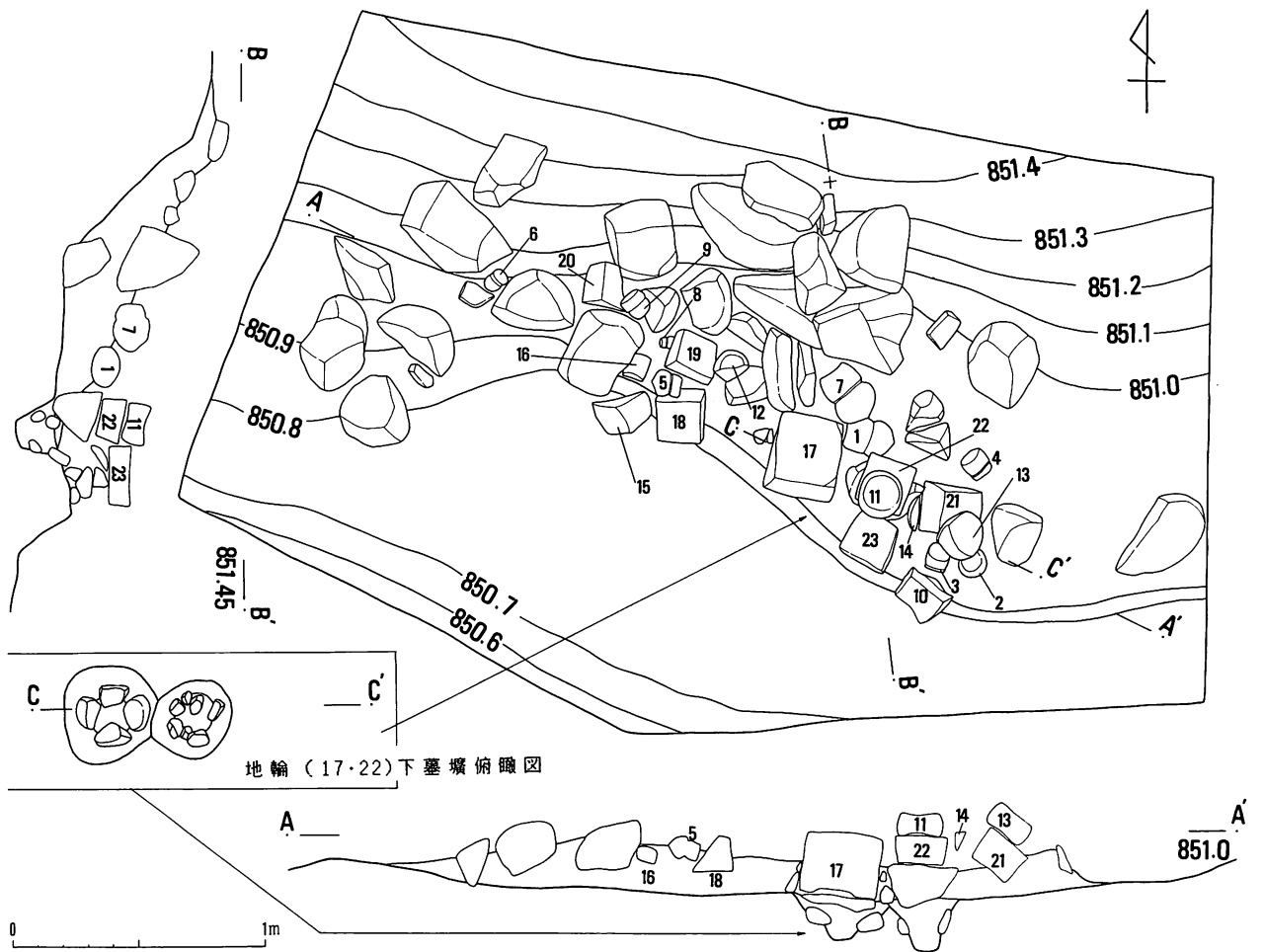


Fig. 94 五輪塔集中区

B地区調査区の東側は標高1,100m程度の山が迫っている。この山の南東側裾部（舌状の突出部）斜面、B地区南東端から東へ約30mの位置に若干のテラス部分（南北幅約1m、東西幅約7m）が存在した。Gridでは、0-19・20、1-19・20Gridにあたり、標高は850.6m~851.4mを測る。B地区南東端の標高と比較すると約10m高くなる位置であり、調査前の状況は竹藪となっていた。この位置には調査前から五輪塔が集中することが知られ、地表面においても、数基の五輪塔（空風輪〜地輪のセット）が確認できたが、これらの五輪塔については、ダム建設に伴う塩川集落の移転の際、同時に一括して移転が行なわれたため、内容については不明である。なお、この地点については、地元で「墓地」としての伝承が伝わっていたことを付記しておきたい。

本区の調査は地表面の五輪塔移転後、その他の遺物・遺構の有無を確認するための試掘調査（第1次調査時：1989年）から始められた。トレンチはテラス上、東西方向に長さ2m、幅0.8mで設定し、約50cm掘り下げた。その結果、空風輪12点、火輪5点、水輪6点、地輪1点（Fig. 96-24~28、Fig. 97-1~20）が出土し、全面的な調査（第2次調査時：1990年）に至った。なお、調査した位置はB地区からやや離れていることもあり、「五輪塔集中区」の別名称を付し調査に臨み、同名称で報告する。

調査の結果、テラスは上段・下段に分かれ、いずれも人為的な掘削によるものであり、複数基の五輪塔が上段部に設置されていたことが確認された。（試掘調査は下段に設け、出土した資料は上段から落ちたものであったことも確認された。）しかし、急斜面上のテラスのため、斜面上部から崩落した礫や竹木による破壊が著しく、原位置を留める資料は17、22+11、23のみであり、他は各部位（空風輪9点、火輪1点、水輪6点、地輪7点）が散在する状況であった。よって、セットの確認は一部を除いては不可能に近い。出土遺物（Fig. 95-1~16、

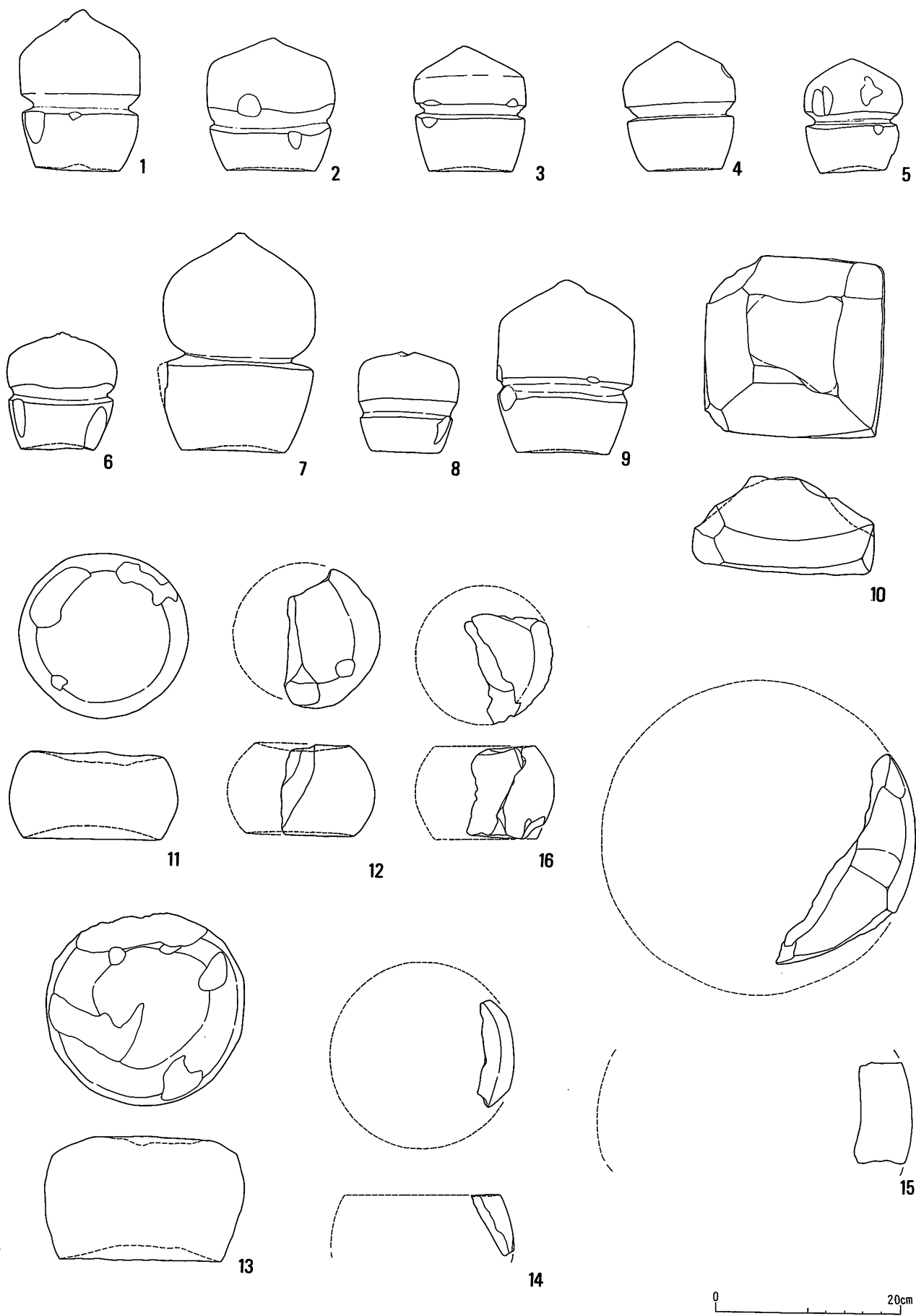
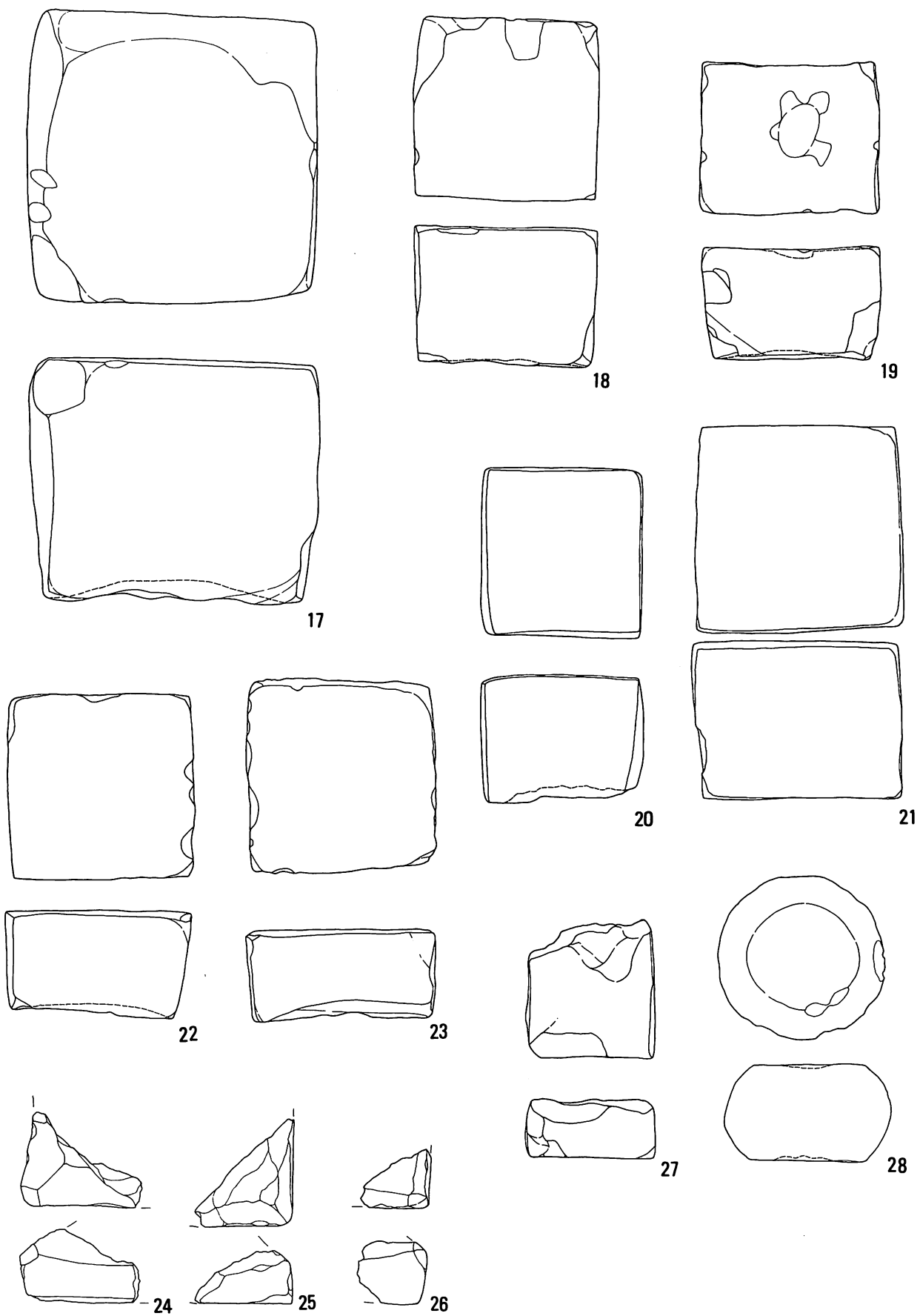


Fig. 95 五輪塔集中区出土遺物① (1/6)



0 20cm

Fig. 96 五輪塔集中区出土遺物② (1/6)



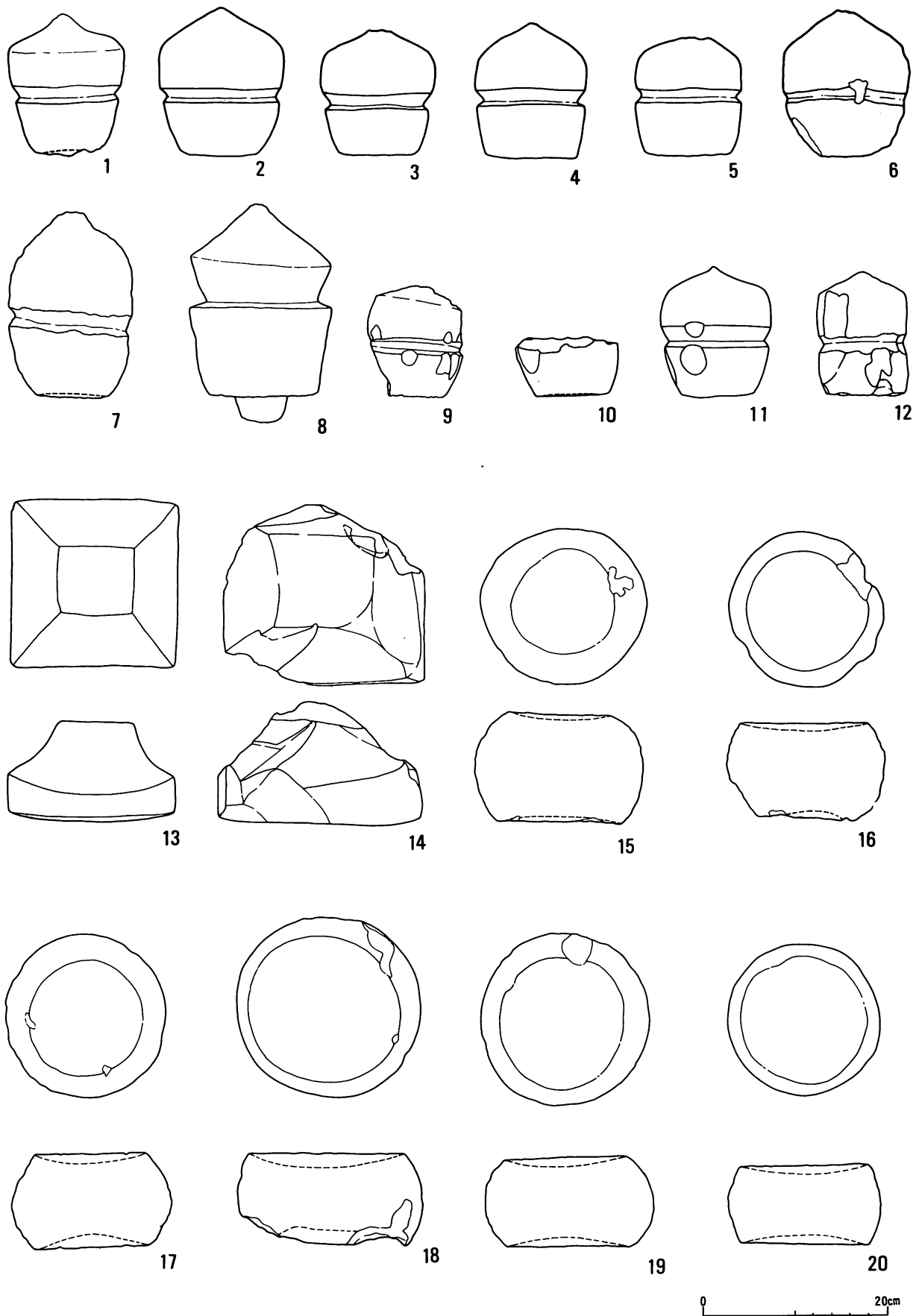


Fig. 97 五輪塔集中区出土遺物③

Fig. 96-17~23) の計測値等は、試掘調査分も含めて、観察表 (Tab. 10~13) を参照されたい。

原位置を留めていた資料のうち、隣接する17と22+11の下部から焼人骨を伴う墓壙が検出されたので説明を加える。17は地輪で、本集中区内で最大の法量を有す資料である。下部には扁平な磔が蓋状に設置され、その下部に土壙が掘り込まれていた。土壙の平面形態は径0.4mの円形、断面形態は深さ0.18mの漏斗形である。土壙内

には12cm大の扁平な礫が四隅に組まれ、その中に約250gの焼人骨が充填していた。22+11は地輪および水輪でありセットとなる。下部には蓋とも台とも考えられる上面が平坦な礫が設置され、その下部に土壌が掘り込まれていた。土壌の平面形態は径30cmの円形、断面形態は深さ0.22mの漏斗形である。土壌内には拳大以下の礫が円形に組まれ、その中に約70gの焼人骨が混在していた。土壌は17下の土壌を切っており、時期は17より22+11の方が新しい。また、蓋あるいは台の礫により17（地輪）上面に22（地輪）上面を揃えるような操作がなされていることも新旧関係の傍証となろう。なお、22+11の南側に位置する23（地輪）も17（地輪）に上面を揃えるように、複数の礫を使用して操作している点も注目される。両土壌から出土した焼人骨は量が非常に少なく、それぞれ「分骨」等が行われた可能性もあろう。なお、焼人骨について

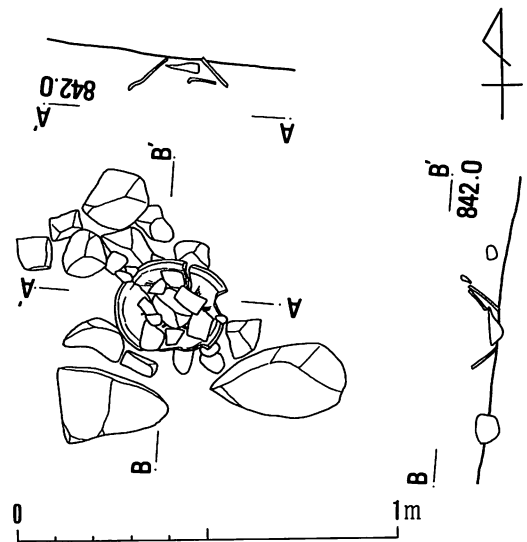


Fig. 98 3-6 Gスリパチ

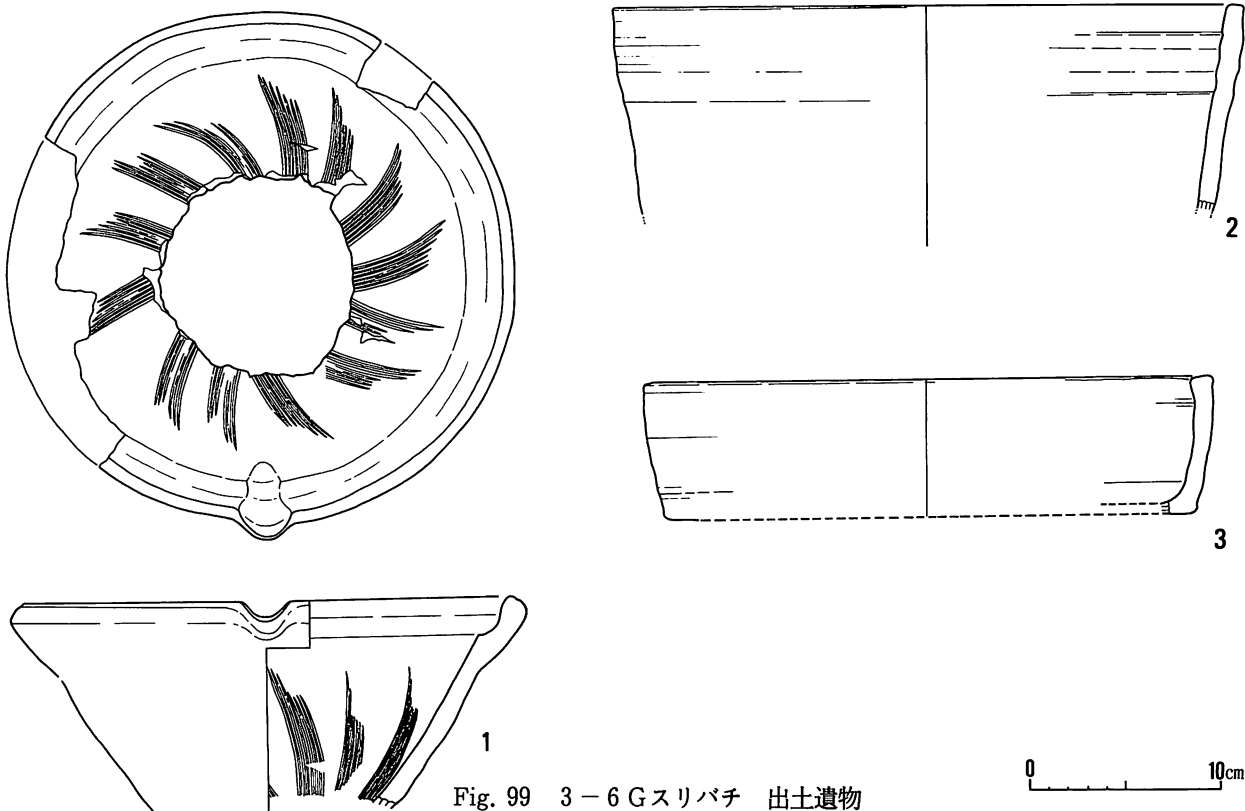


Fig. 99 3-6 Gスリパチ 出土遺物

ては、分析を森本岩太郎・吉田俊爾両氏（聖マリアンナ医科大学）に依頼した。その成果は「付篇」（P179）を参照されたい。

### 3) 3-6 Gスリパチ

(Fig. 98・99, P1. 12-36・37, P1. 25-23, P1. 26-24)

調査区の南端、3-6 Gridにおいて確認された播鉢である。土坑等を伴わず、遺構外出土の遺物として扱うべきかも知れないが、出土状況から本項で「3-6 Gスリパチ」と名称を付して報告する。播鉢（1）は底部が抜け（抜かれ？）、正位に設置されるかのように出土した。また、播鉢の底部には上面が平坦な礫が埋置され、内面には内耳土器破片2個体分（2・3）が貼り付けられるように残存する。覆土は黒褐色土で、特に混入物は認められなかった。また、周辺からは石臼・内耳土器等が多く出土している（Fig. 196）。遺物については、観察表（Tab. 8）および遺構外出土遺物の分類中（P132・133）にふれたので参照されたい。

#### 4) 墓墳

塩川遺跡B地区は、旧塩川集落の存在した場所であり、近世～近代の墓が存在することは調査以前に地元の伝承等により知られていた。そこで、B地区の調査を開始するに先立ち、地元住民の方々による、これらの墓の移転作業が行なわれた。その結果、調査区内から20体余りの遺骨・副葬品が収拾され、新墓地に移転された。これらの経緯を経て調査は開始されたが、開始とともに調査区には移転されなかった墓が多く残存することが判明した。これらの墓の取扱いについては、様々な協議がなされたが、移転作業終了後であるため、考古学的な調査を行ない記録保存するべきであるとの結論が出された。

2ヵ年に渡る調査の結果、確認された墓墳は合計104基におよんだ。また、遺構外出土の人骨も16体分あり、これらと調査前に移転された墓を合計すると約140体の人骨（あるいは墓墳）がB地区には存在していたこととなる。以下、各墓墳の説明を行なうが、文中における記載事項について若干の説明を付け加えておきたい。

- ・「遺構確認面」は、調査区西側においては基本土層第三・IV層であり、東側においては第IV層である。
- ・「平面形態」および「断面形態」は、現況の形態に加え、推定される形態を記載したものもある。
- ・「埋葬形態」は、人骨が座った状態で埋葬されたものを「座葬」、横たわる状態で埋葬されたものを「寝葬」と分類して記載した。「棺」などの使用については明確な例のみ記載し、その他は不明とした。
- ・「骨の遺存状況」については、以下のように分類して記載した。
  - 最良……頭部・四肢はもちろん、細部の脆い骨の形状も変わっていないもの。
  - 良好……頭部・四肢は残るが、細部の骨の形状は若干損なわれるもの。
  - 良……頭部・四肢が脆く、形状は残るが取り上げが厳しいようなもの。
  - 不良……頭部・四肢が部分的に残るもの。
- ・「出土遺物」については、図示可能な資料を中心に報告するが、図示不能な資料についても文章中でふれる。また、古銭・煙管・陶磁器については、章末に観察表（Tab. 4・5・6・7・9）を付したので参照されたい。
- ・各墓墳中の人骨・遺構外出土の人骨については、形質学的分析を森本岩太郎・吉田俊爾両氏（聖マリアンナ医科大学）に依頼した。その成果については、巻末の「付篇」（P179）を参照されたい。
- ・各墓墳の報告時No.は、調査時No.とは大きく異なる。章末の「新旧No.対応表」（Tab. 3）を参照されたい。

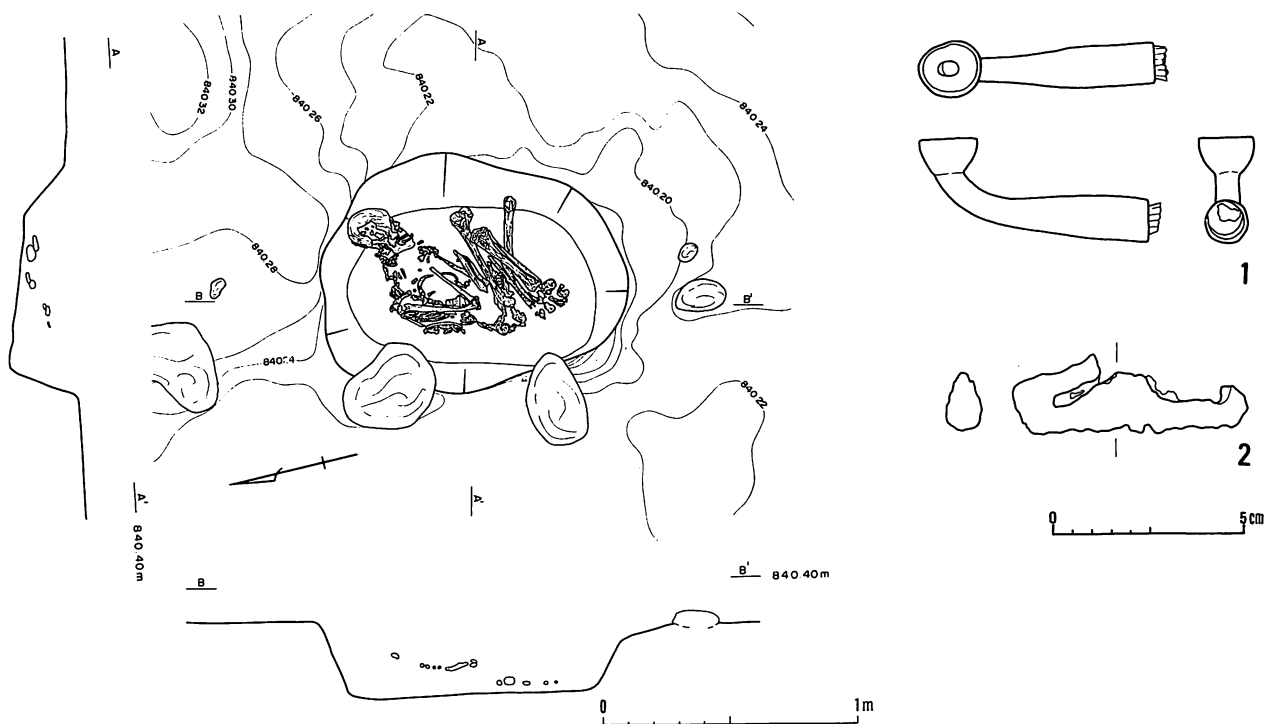


Fig. 100 1号墓墳および出土遺物

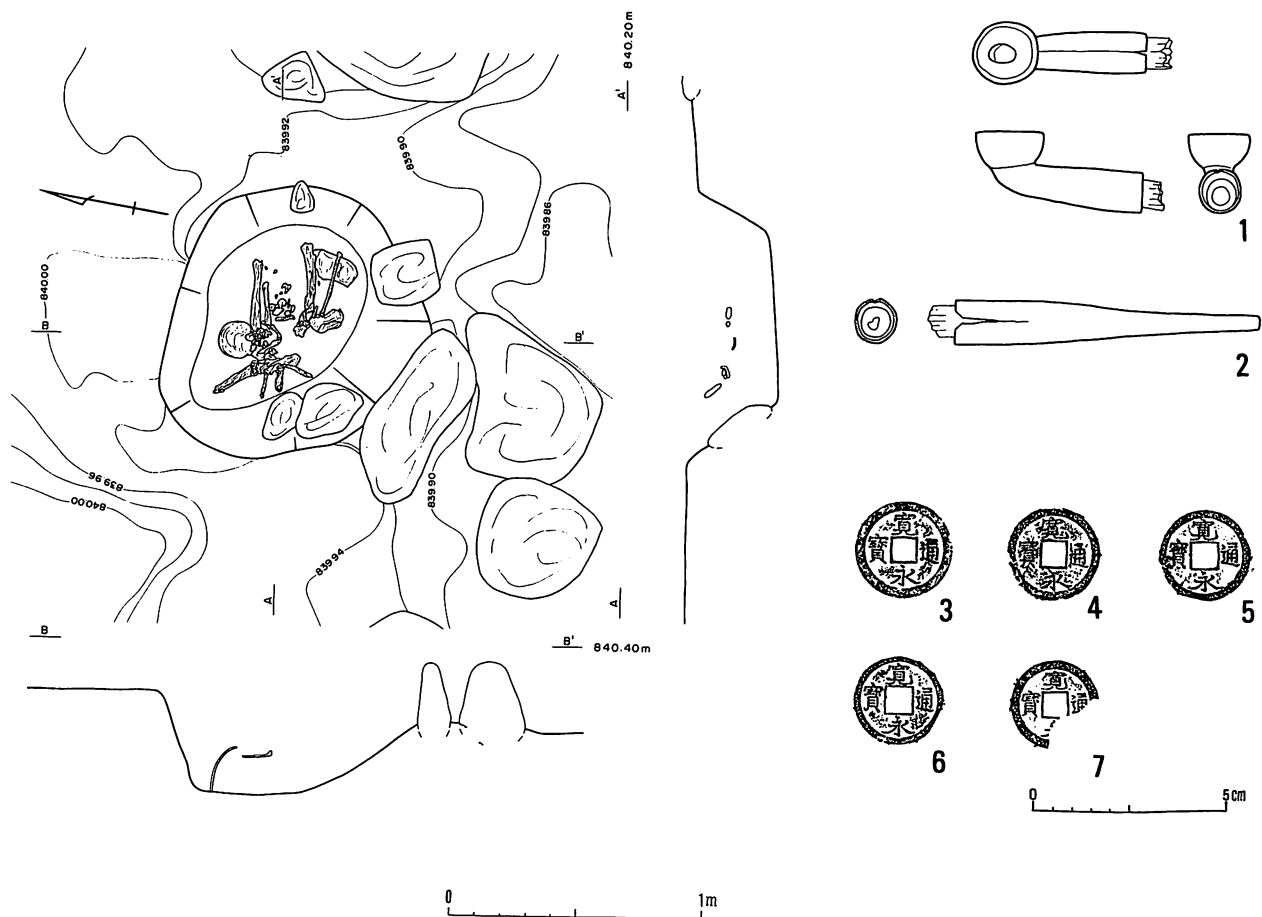


Fig. 101 2号墓壙および出土遺物

#### 1号墓壙 (Fig.100、P1.14-1、30-1)

3-3 Grid内中央に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す楕円形を呈し、その規模は長軸1.20m、短軸0.90mを測る。断面形態は台形を呈し確認面からの深さは0.30mを測る。埋葬形態は寝葬であり、頭位は北側にあり体は東向きである。腕部は手首部を揃え前胸部に密着する状態である。脚部は屈折し、膝部を揃え腹部に近づける状態である。骨の遺存状況は最良である。出土遺物として、煙管の雁首部のみ1点(木質のラウが僅かに残存する)、火打金1点が出土している。

#### 2号墓壙 (Fig.101、P1.14-2、30-2)

1-1・1-2 Grid内に位置する。平面形態は楕円形を呈し、その規模は長軸1.12m、短軸0.92mを測る。断面形態は台形を呈し確認面からの深さは0.40mを測る。埋葬形態は北向きの座葬である。腕部は屈折する状態であるが、詳細は不明である。脚部は屈折し、足首部を重ねる程度に交脚する状態である。骨の遺存状況は良である。出土遺物として煙管の雁首部1点と吸口部1点(木質のラウが僅かに残存する)、銅銭(全て寛永通寶)5点、鉄銭1点(図示不能)が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。

#### 3号墓壙 (Fig.102、P1.14-3、30-3)

3-3 Grid内南東端に位置する。平面形態はほぼ円形を呈し、長軸1.02m、短軸0.92mを測る。断面形態は台形を呈し確認面からの深さは0.48mを測る。埋葬形態は西向きの座葬である。腕部は屈折する状態であるが、詳細は不明である。脚部は屈折し、脛部を重ねる程度に交脚する状態である。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、鉄銭4点(図示不能)が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。

#### 4号墓壙 (Fig.103)

4-3 Grid内中央に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す不整円形を呈し、その規模は長軸1.72m、短軸1.62mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.80mを測る。埋葬形態は北向きの座葬である。砂層に構築された墓壙であるため、全体の崩落が著しく埋葬状態の詳細は不明であるが、腕部・脚部ともに屈折

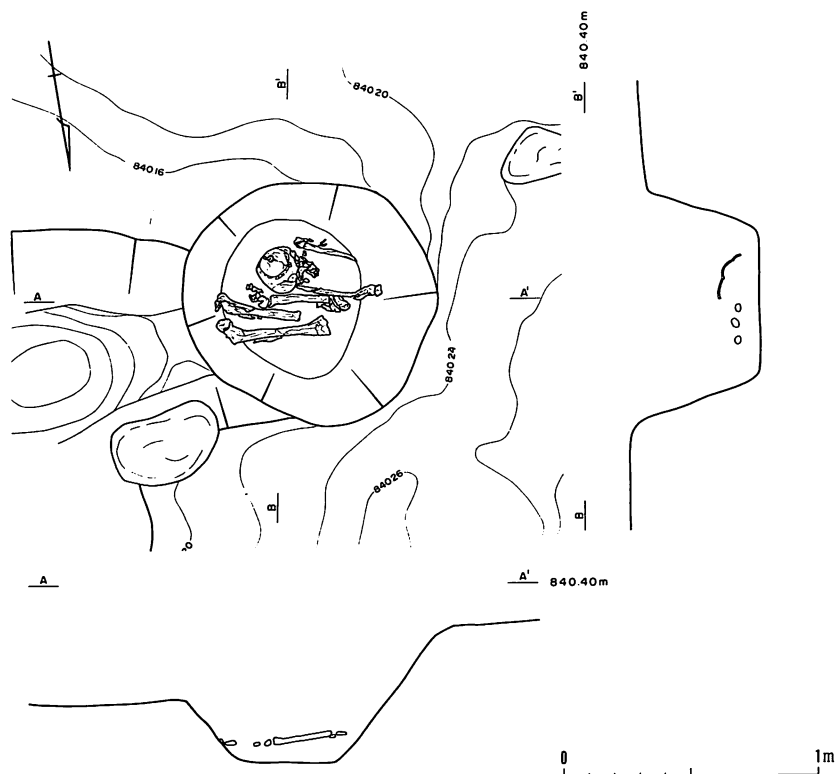


Fig. 102 3号墓墳

する状態であることは確認できた。なお、平面図については頭骨が検出された時点の状況が記録できたのみである。出土遺物としては、銅銭（全て寛永通寶）4点、鉄銭2点が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。

5号墓墳 (Fig.104、P.14-4)

5-3 Grid内南東側に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す不整円形を呈し、その規模は長軸1.20m、短軸1.05mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.63mを測る。埋葬形態は北向きの座葬である。腕部は屈折し手甲部を前腹部上に重ねる状態である。脚部は屈折するが、交脚せずに膝部を立てる状態である。

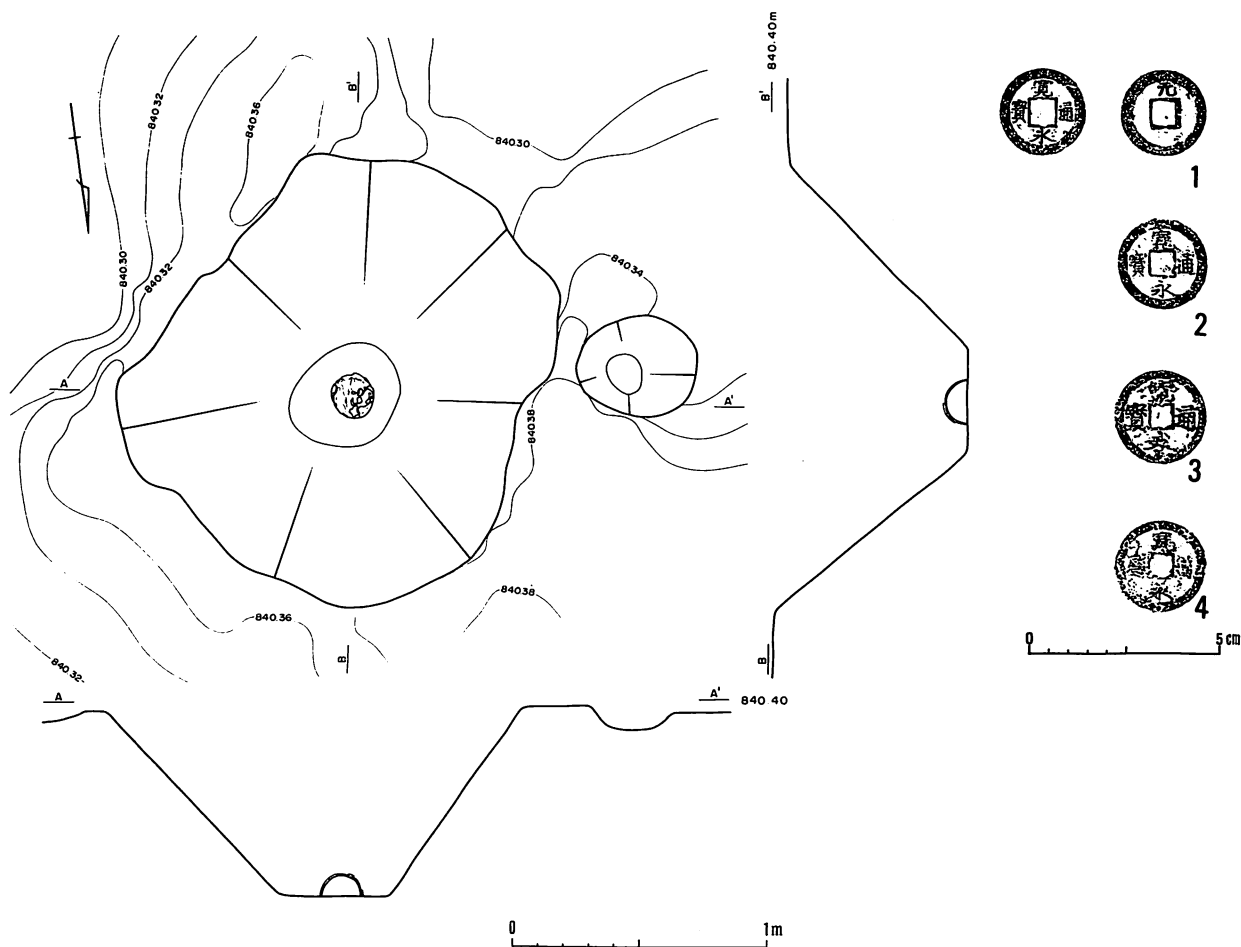


Fig. 103 4号墓墳および出土遺物

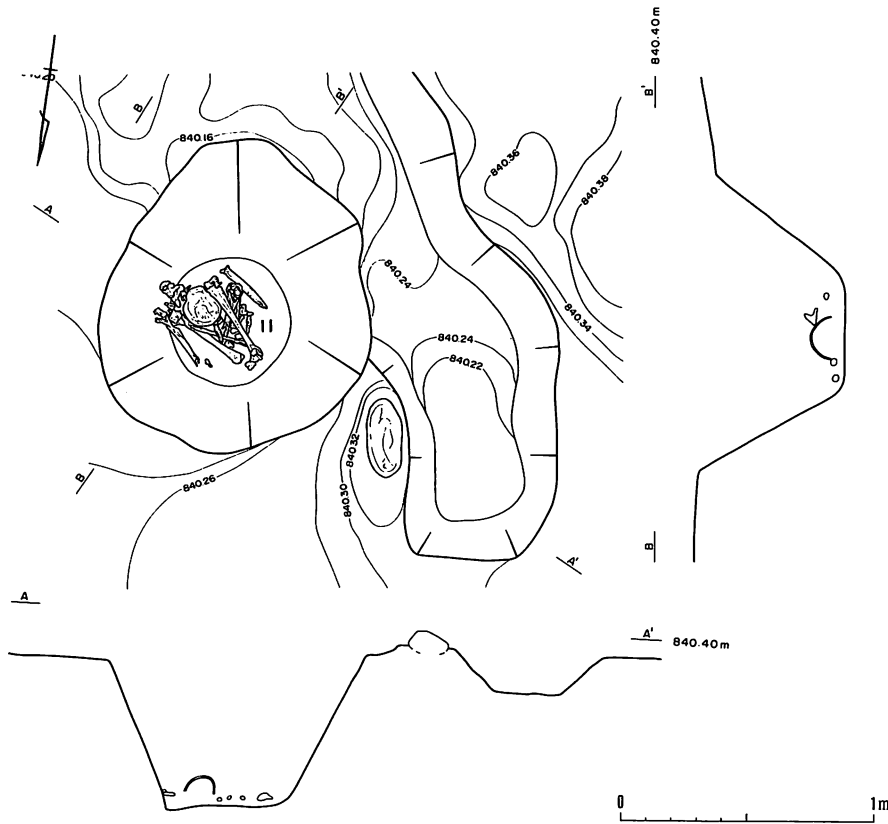


Fig. 104 5号土壙および出土遺物

骨の遺存状況は良好である。

出土遺物として、銅銭（寛永通寶）1点、貝殻2点（ハマグリ？）が出土している。

6号墓壙（Fig.105、P.1.14-5）

2-5 Grid内東側に位置する。南東側に存在する93号墓壙を切る関係にある。平面形態は東西方向に主軸を有す楕円形を呈しその規模は長軸1.20m、短軸0.90mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.55mを測る。埋葬形態は寝葬であるが、頭位は東側にあり体は北を

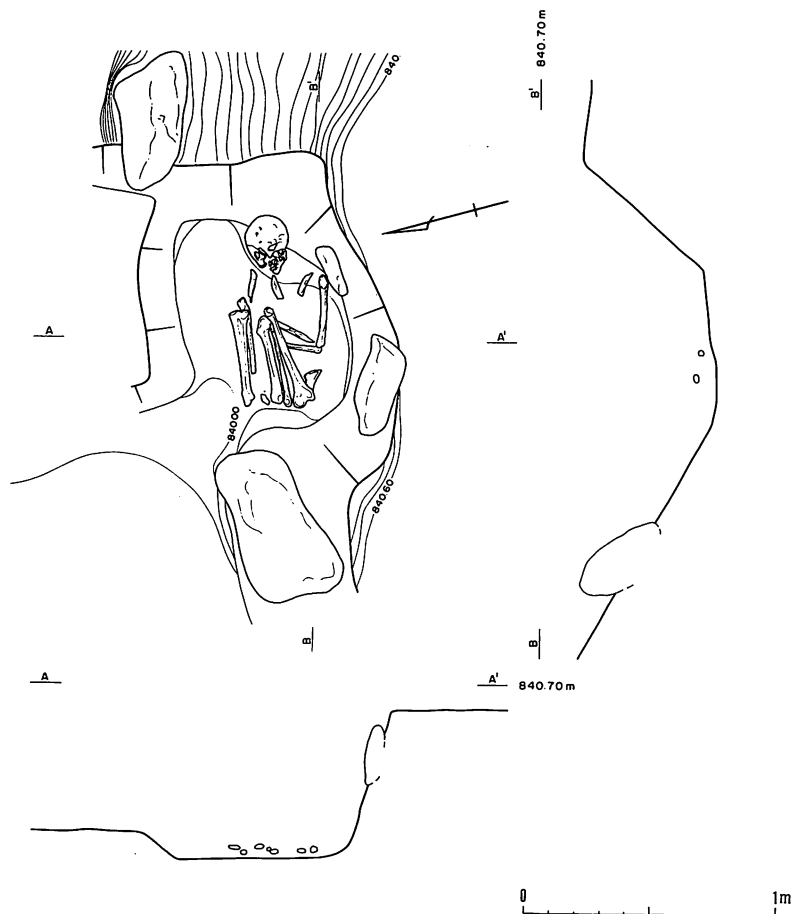
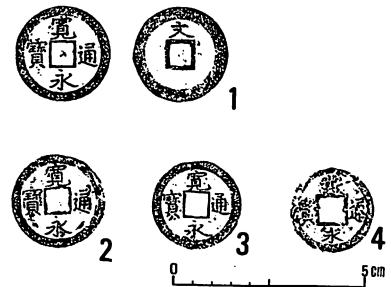


Fig. 105 6号墓壙および出土遺物



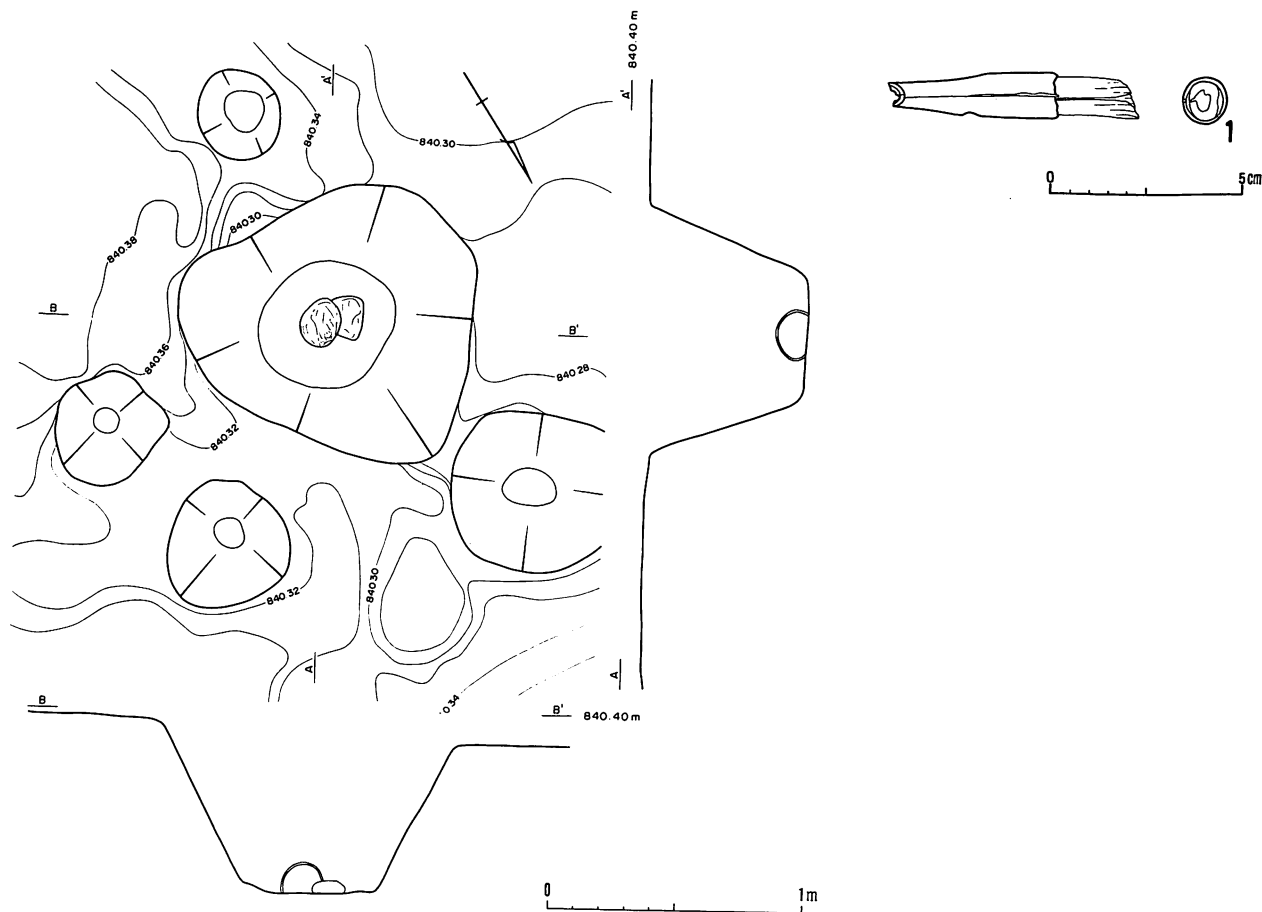


Fig. 106 7号墓墳および出土遺物

向く。腕部は屈折し、手甲部を前胸部に重ねる状態である。脚部は屈折し、膝部を胸部前まで近づける状態である。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、銅銭（すべて寛永通寶）4点が出土している。

#### 7号墓墳 (Fig.106、P1.14-6)

4-3 Grid内北西側に位置する。平面形態は現況では東西方向に主軸を有す楕円形を呈し、その規模は長軸1.16m、短軸1.00mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.62mを測る。埋葬形態は西向きの座葬である。砂層に構築された墓墳であるため、全体の崩落が著しく埋葬状態の詳細は不明であるが、腕部・脚部ともに屈折する状態であることは確認できた。なお、平面図については頭骨が検出された時点の状況が記録できたのみである。骨の遺存状況は良好である。本墓墳の特徴として、自然礫が頭骨と胸部骨の間に挟まるように検出された点が挙げられる。上部から落ち込んだものではないことは確実であり、意図的に置いたものと判断できる。出土遺物として、破損の著しい煙管の雁首部1点のみが出土している。

#### 8号墓墳 (Fig.107)

4-3 Grid内北西側に位置する。平面形態は現況では東西方向に主軸を有す楕円形を呈し、その規模は長軸1.10m、短軸1.05mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.77mを測る。埋葬形態は座葬であるが、墓墳壁全体の崩落が著しいことに加え、骨の遺存状況が不良であることもあり、体の向き・埋葬状態の詳細は不明である。なお、平面図については頭骨が検出された時点の状況が記録できたのみである。出土遺物として、銅銭（全て寛永通寶）3点、鉄銭数点（腐食により点数は不明）が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。

#### 9号墓墳 (Fig.108、P1.14-7、30-4・5)

3-2 Grid内南東側に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す楕円形を呈し、その規模は長軸1.55m、短軸1.27mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.58mを測る。埋葬形態は寝葬であり、頭位は南側にある。しかし、骨の遺存状況が不良のため、体の向き・埋葬状態の詳細は不明である。出土遺物として磁器の小型碗（内部にベニ状の付着物あり）1点、銅製の簪（銅製の飾金具を伴う）1点、横櫛の破片1点・木片

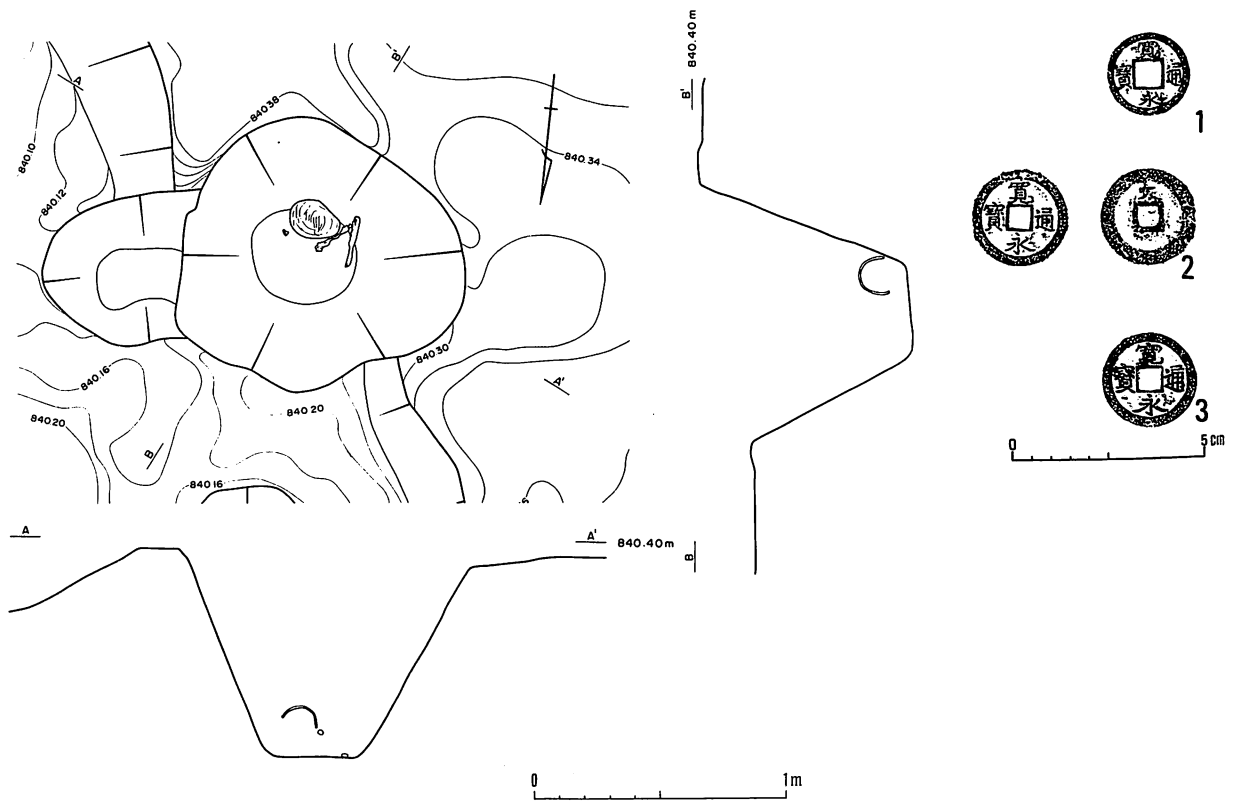


Fig. 107 8号墓墳および出土遺物

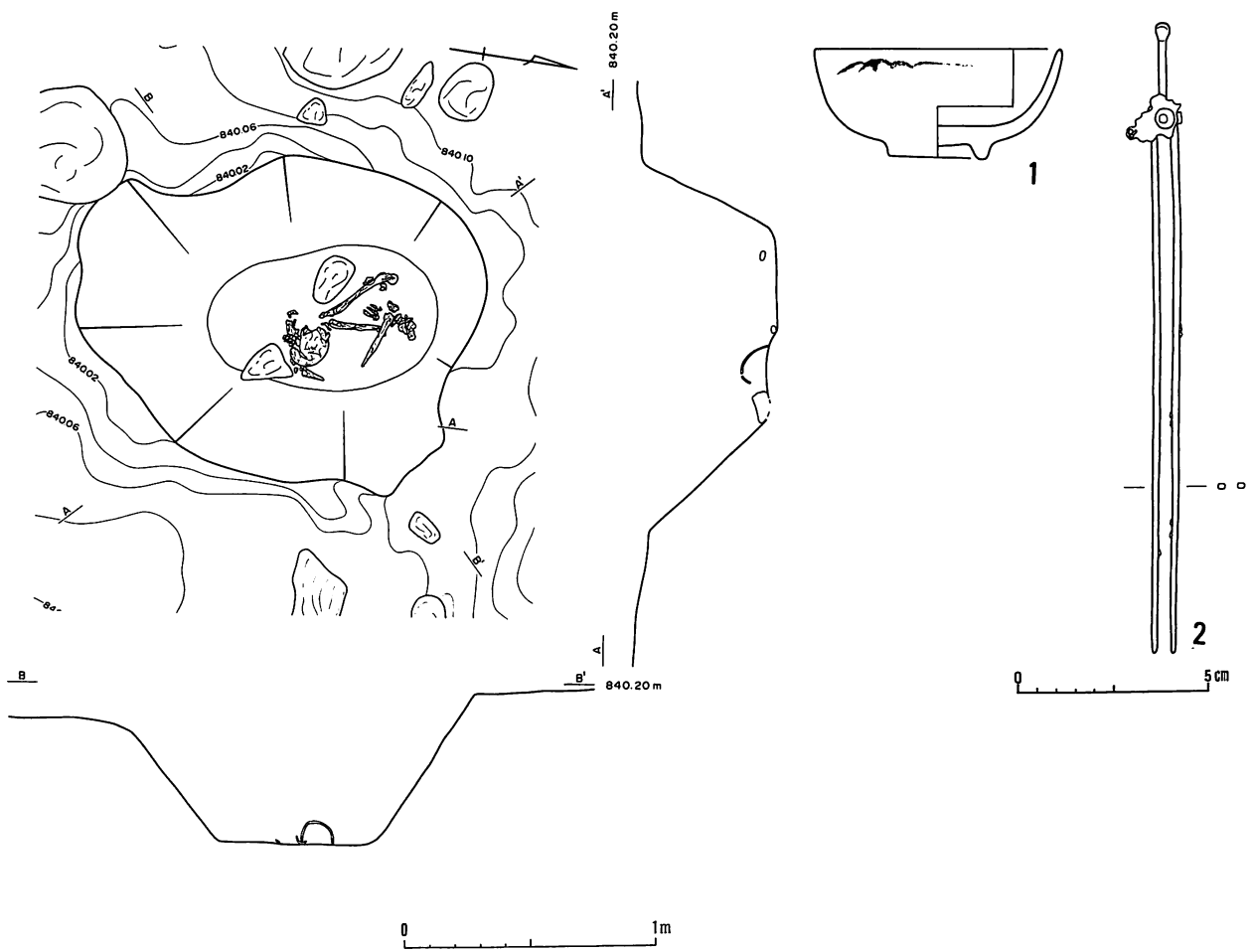


Fig. 108 9号墓墳および出土遺物



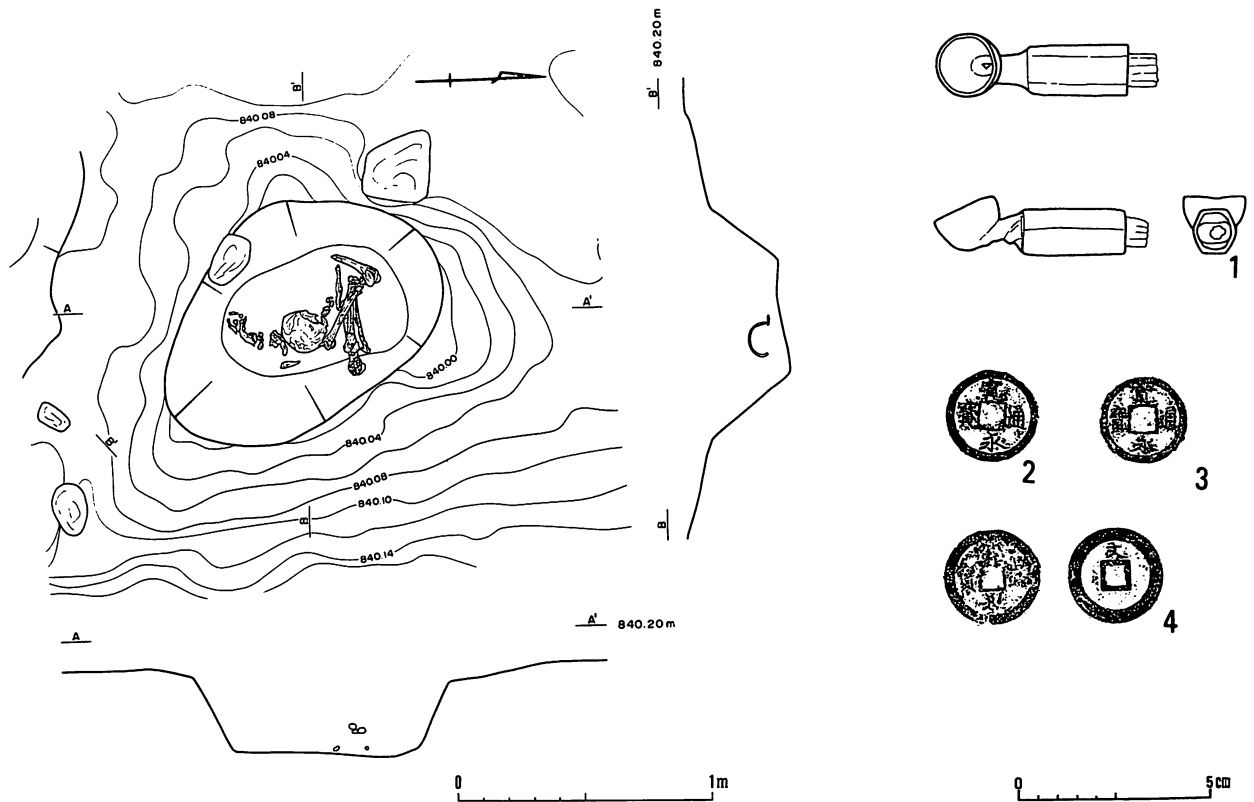


Fig. 109 10号墓墳および出土遺物

(用途不明だが、棺の一部と考えられる) 1点が出土している。ただし、簪の飾金具部分・木片類については腐食等により図示不能である。また、本墓墳からは被葬者の頭髪が多量に出土している。頭髪は先端部を細かく編んだ部分もあり、髪形等の復元も可能であろう。なお、出土遺物の簪はこの頭髪に装着された状態で出土したものである。

#### 10号墓墳 (Fig. 109、P.1.14-8、30-6)

3-2 Grid内東側に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す楕円形を呈し、その規模は長軸1.19m、短軸0.87mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.32mを測る。埋葬形態は北東向きの座葬である。腕部は前胸部に組む状態である。脚部は屈折し、足首部を重ねる程度に交脚の状態となる。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、煙管の雁首部(木質のラウが僅かに残存する) 1点、銅銭(全て寛永通寶) 3点、鉄銭1点が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。

#### 11号墓墳 (Fig.110、P.1.14-9、30-7)

3-4 Grid内中央に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す楕円形を呈し、その規模は長軸1.40m、短軸1.05mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.32mを測る。埋葬形態は寝葬であり、頭位は北側にあり、体は上向きである。腕部は前胸部に手首部を合わせ組む状態である。脚部は屈折し、膝部が胸部に近づく程腰部を折る状態となる。骨の遺存状況は最良である。出土遺物として、煙管の雁首部(木質のラウが僅かに残存する) 1点、銅銭(全て寛永通寶) 2点、鉄銭2点が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。

#### 12号墓墳 (Fig.111、P.1.14-10)

8-3 Grid内中央に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す不整形円形を呈し、その規模は長軸1.48m、短軸1.25mを測る。ただし、墓墳の北西側壁の崩壊が著しく、元は長楕円形を呈していたものと考えられる。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.35mを測る。埋葬形態は寝葬であり、頭位は北側にあり、体は西向きである。腕部および脚部は屈折する状態である。検出状況からは腕部で膝部を抱え込むような埋葬形態が観察できた。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、銅銭(寛永通寶) 1点が出土している。

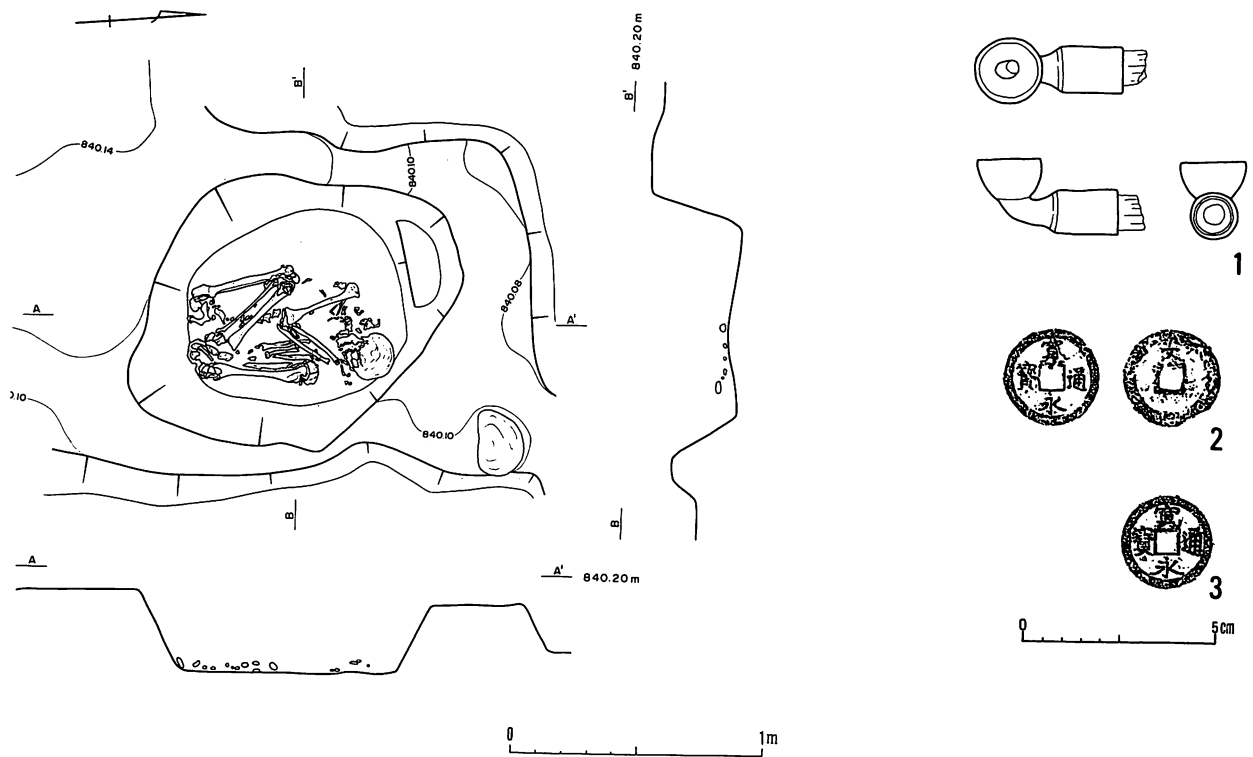


Fig. 110 11号墓壙および出土遺物

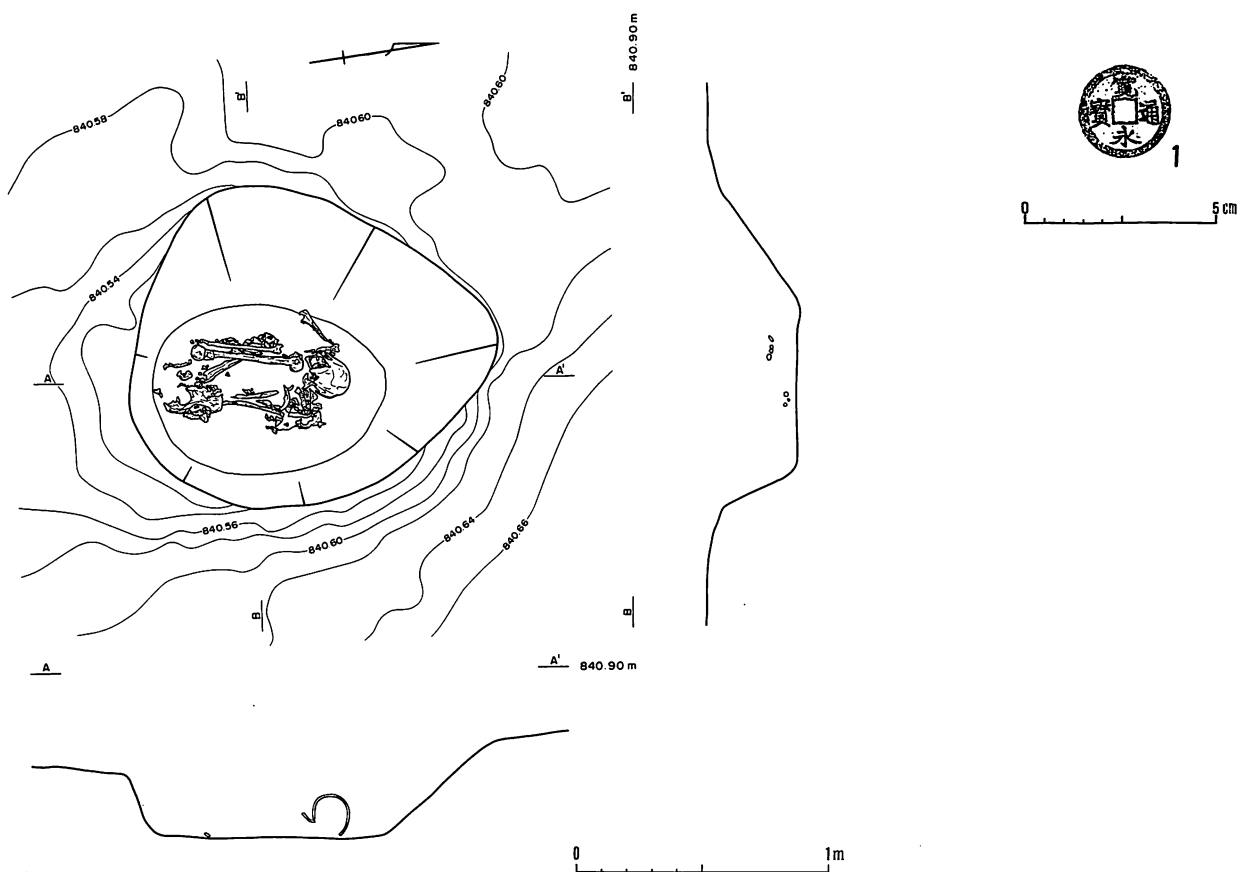


Fig. 111 12号墓壙および出土遺物

13号墓壙 (Fig.112、P.1.14-11)

8-3 Grid 内北東部に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す楕円形を呈し、その規模は長軸1.34m、短軸

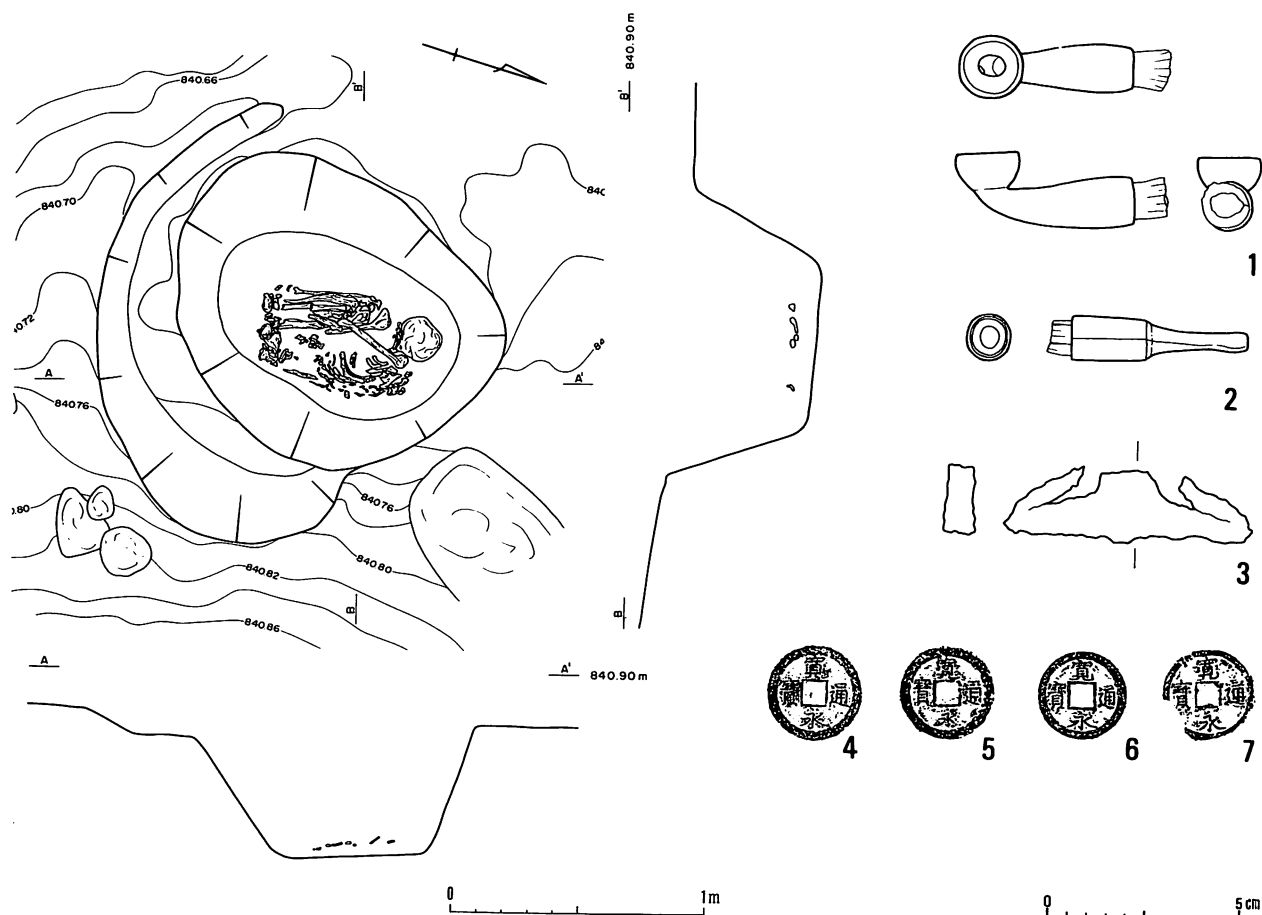


Fig. 112 13号墓墳および出土遺物

1.10mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.47mを測る。埋葬形態は寝葬であり、頭位は北側にあり、体は西向きである。腕部および脚部は屈折する状態である。検出状況から腕部で膝部を抱え込むような埋葬形態が観察できた。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、煙管の雁首部1点と吸口部1点（木質のラウが僅かに残存する）、火打金1点、銅銭（全て寛永通寶）4点、鉄銭2点、火打石（石英）1点、木片（用途不明だが棺材の一部と考えられる）1点が出土している。ただし、鉄銭、火打石、木片については図示不能である。

#### 14号墓墳 (Fig.113、P1.30-9)

4-4 Grid内中央のやや北寄りに位置する。平面形態は径約1.02mの円形を呈する。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは、0.87mを測る。埋葬形態は北向きの座葬であり、腕部および脚部は屈折した状態であった。骨の遺存状況は、良である。出土遺物として、ガラス製の簪1点、貝殻を模倣した磁器のベニ皿1点、火打金1点、煙管の吸口1点と雁首部1点（木質のラウ部が僅かに残存する）、銅銭（北宋銭1点・寛永通寶4点）5点、鉄銭1点、木片（用途不明）1点が出土している。ただし、鉄銭・銅銭1点・木片は図示不能である。

#### 15号墓墳 (Fig.114)

4-3 Grid内北端に位置する。平面形態は径約0.80mの円形を呈する。断面形態は皿形を呈し、確認面からの深さは0.32mを測る。ただし、墓墳は浅く、遺構壁面の崩落が著しい状態であったため、計測値は不明確である。埋葬形態は不明であるが、骨は小さく纏まるように埋葬されており、布状のものも包まれて埋葬された状況が推測できた。骨の遺存状況は頭骨と四肢の一部が若干残る程度と不良であった。残存していた骨はすべて小型であることから、被葬者は小児ないしは幼児であると考えられる。出土遺物はない。

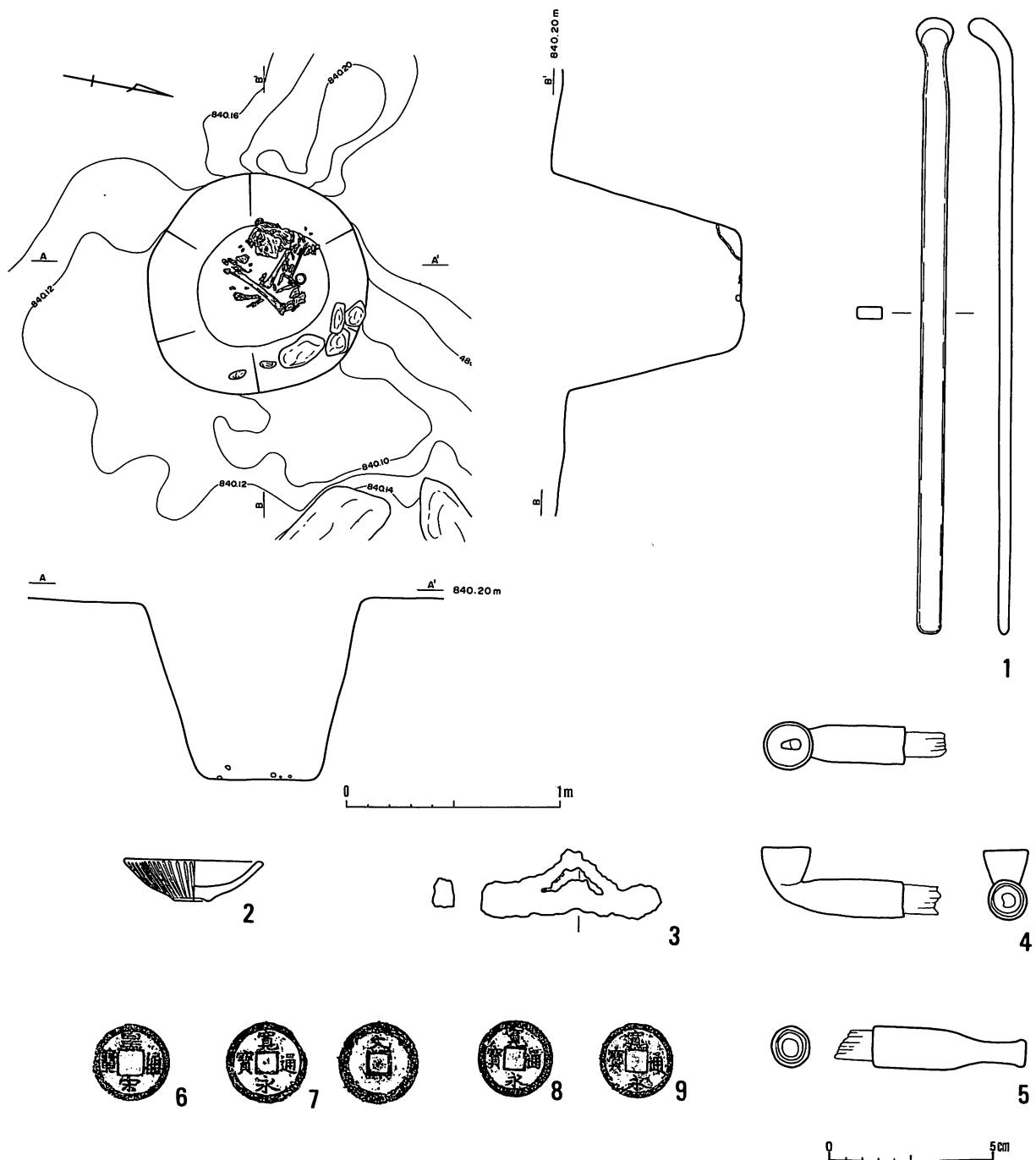


Fig. 113 14号墓墳および出土遺物

16号墓墳 (Fig.115、Pl.14-12、30-10)

2-2 Grid内西側に位置する。平面形態は現況では南北方向に主軸を有す不整形円形を呈し、その規模は長軸1.28m、短軸0.78mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.45mを測る。ただし、墓墳の周辺は自然礫が多く存在しており、形態の把握は困難であった。埋葬形態は寝葬であり、頭位は北側にあり体は西を向く。腕部および脚部は屈折した状態であるが、検出状況から腕部で脚部を抱え込むような埋葬方法が観察できた。骨の遺存状況は、良好である。出土遺物として、煙管の吸口部1点と雁首部1点、火打金1点、銅銭（北宋銭1点・寛永通寶2点）3点が出土している。

17号墓墳 (Fig.116、Pl.14-13、30-11)

10-3 Grid内中央の西寄りに位置し、1号住居址（縄文時代）の北端を切る。平面形態は現況では東西方向に主軸を有す不整形円形を呈し、その規模は長軸1.40m、短軸1.25mを測る。しかし、これは墓墳南側壁の崩落が原

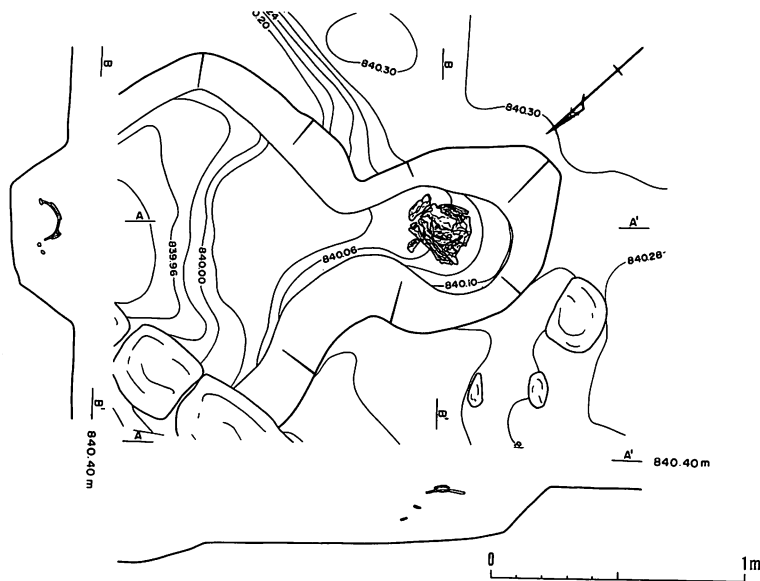


Fig. 114 15号墓墳

因であり、元は東西方向に長軸を有する長方形を呈していたものと考え、その規模は長軸約1.25m、短軸は約0.8m程度を測ると推測される。断面形態は台形を呈すが、北側の壁一辺のみは垂直に立ち上がっている。確認面からの深さは0.65mを測る。埋葬形態は北向きの座葬であり、腕部は前腹部に手首部を揃え置く状態である。脚部は脛部を重ねる程度に交脚した状態である。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、陶器の徳

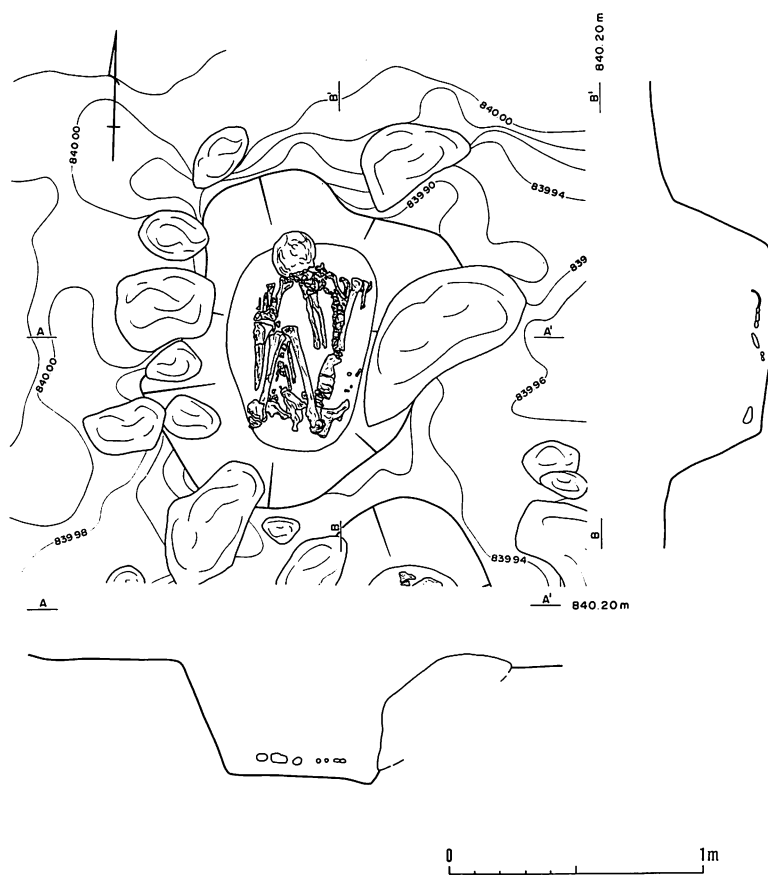
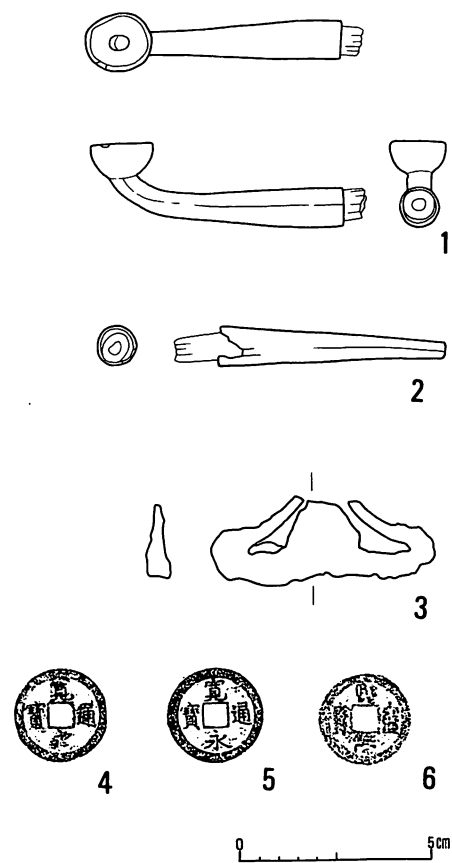


Fig. 115 16号墓墳および出土遺物



利1点、煙管の吸口1点、銅銭（全て寛永通寶）7点が出土している。

18号墓墳 (Fig.117、P.14-14)

4-2 Grid内東側に位置する。平面形態は径約0.75mを測る正円形を呈する。断面形態は皿形を呈し、確認面からの深さは0.25mを測る。埋葬形態は西向きの座葬と考えられるが、骨が小さく纏まるため布状のもの包まれて埋葬された状況が推測できた。骨の遺存状況は良であるが、小型であることから小児ないしは幼児であると考えられる。出土遺物としては、銅銭（寛永通寶）1点・鉄銭1点が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。

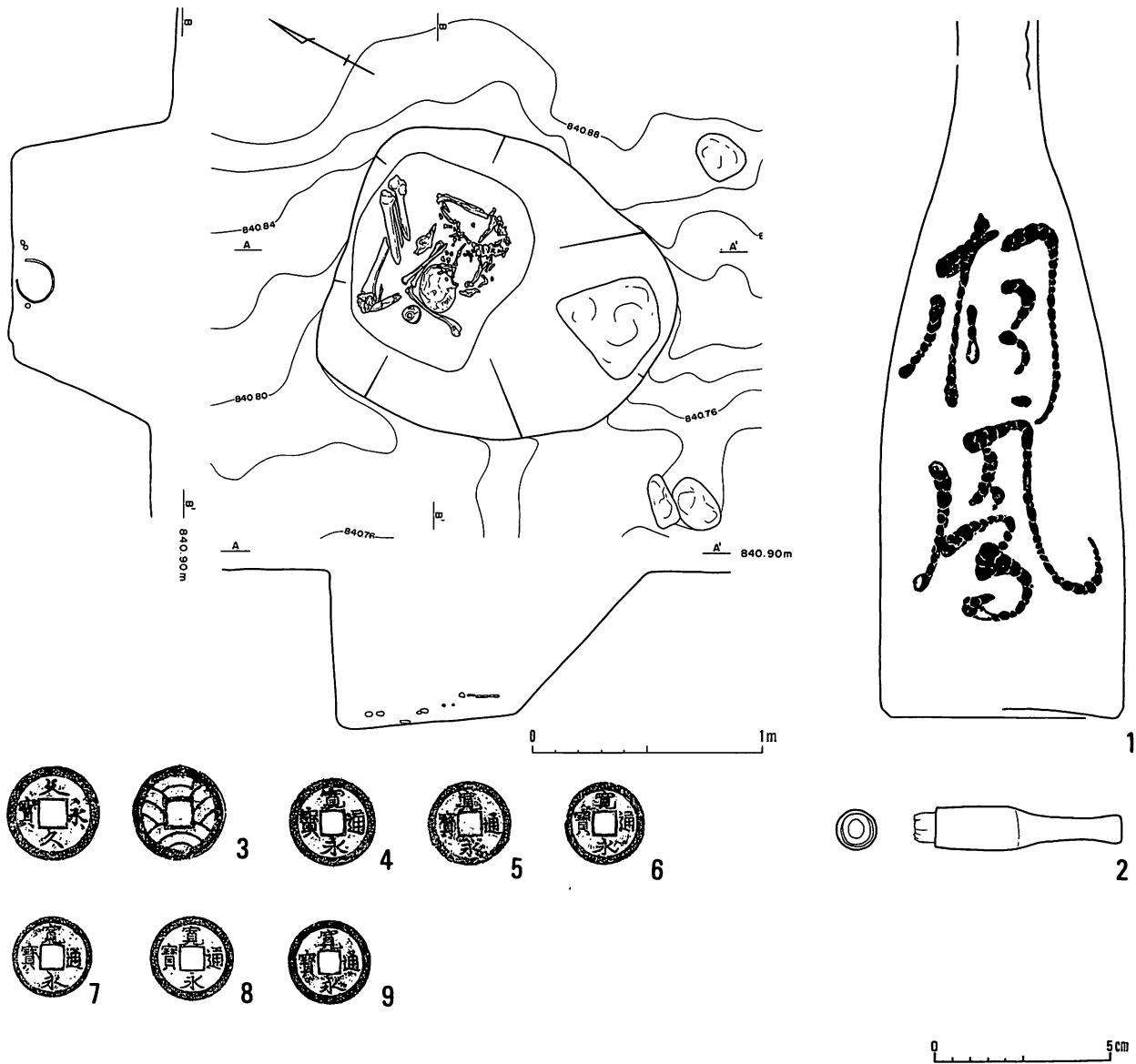


Fig. 116 17号墓墳および出土遺物

19号墓墳 (Fig.118、P.1.14-15、30-12)

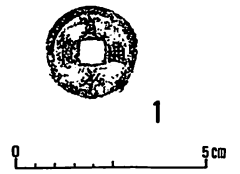
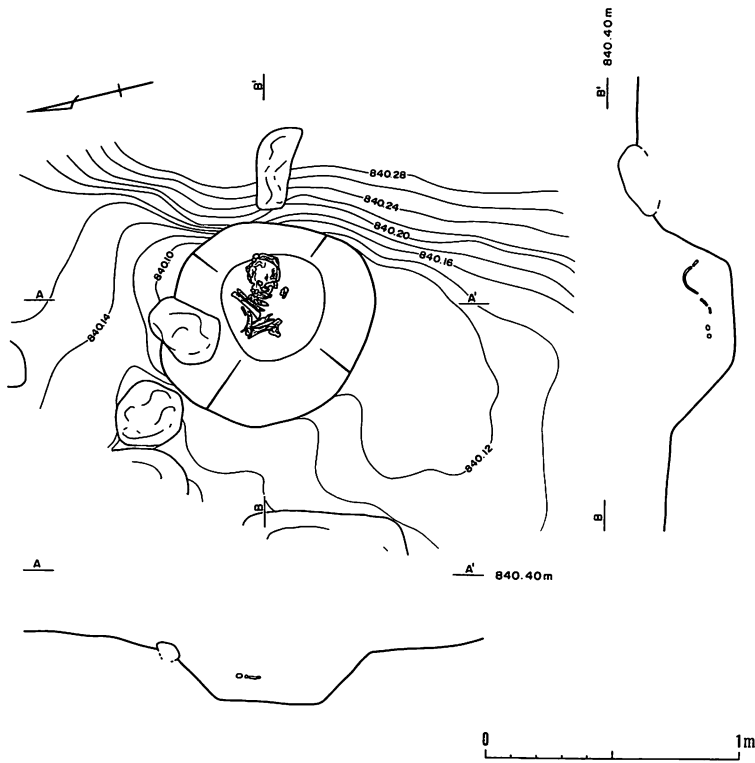
4-2 Grid 内北側に位置する。平面形態は楕円形を呈し、その規模は長軸1.45m、短軸0.98mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.48mを測る。埋葬形態は寝葬であり、頭位は北にあり体は上向きである。ただし顔面は東側を向く。腕部は手甲部を揃え、顔面（顎部）に密着する状態である。脚部は屈折し、腰部を折り腹部に近づける状態である。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、煙管の吸口部1点と雁首部1点（木質のラウ部が僅かに残存する）、火打金2点、銅銭（全て寛永通寶）2点が出土している。

20号墓墳 (Fig.119)

3-5 Grid 内中央西寄りに位置する。平面形態は、径約0.80mを測る正円形を呈する。断面形態は箱形を呈し、確認面からの深さは0.35mを測る。埋葬形態は北向きの座葬である。腕部の状態は不明だが、脚部は屈折し、脛部を重ねる程度に交脚する状態である。骨の遺存状況は、良好である。出土遺物として、煙管の吸口部1点（木質のラウが僅かに残存する）が出土している。

21号墓墳 (Fig.120、P.1.14-16・17、31-13)

4-4 Grid 内北西寄りに位置し、南側に接する22号墓墳に切られる関係にある。平面形態は、径約0.90mの正円形を呈する。断面形態は箱形に近い台形を呈し、確認面からの深さは0.62mを測る。埋葬形態は北向きの座葬で



あり、腕部および脚部は屈折する状態である。骨の遺存状況は最良であり、細部の骨も観察することができた。出土遺物として、陶器の徳利1点、磁器の猪口1点、ガラス製の玉1点、煙管の吸口1点と雁首（木質のラウが僅かに残存する）、銅銭（全て寛永通寶）3点、鉄銭2点が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。

Fig. 117 18号墓墳および出土遺物

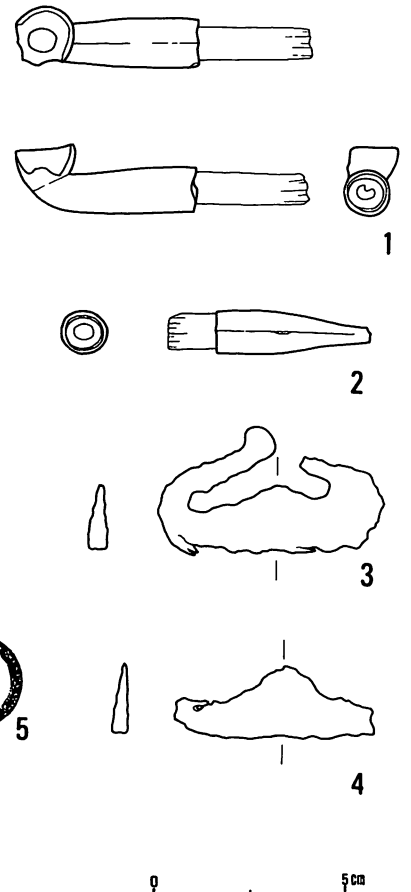
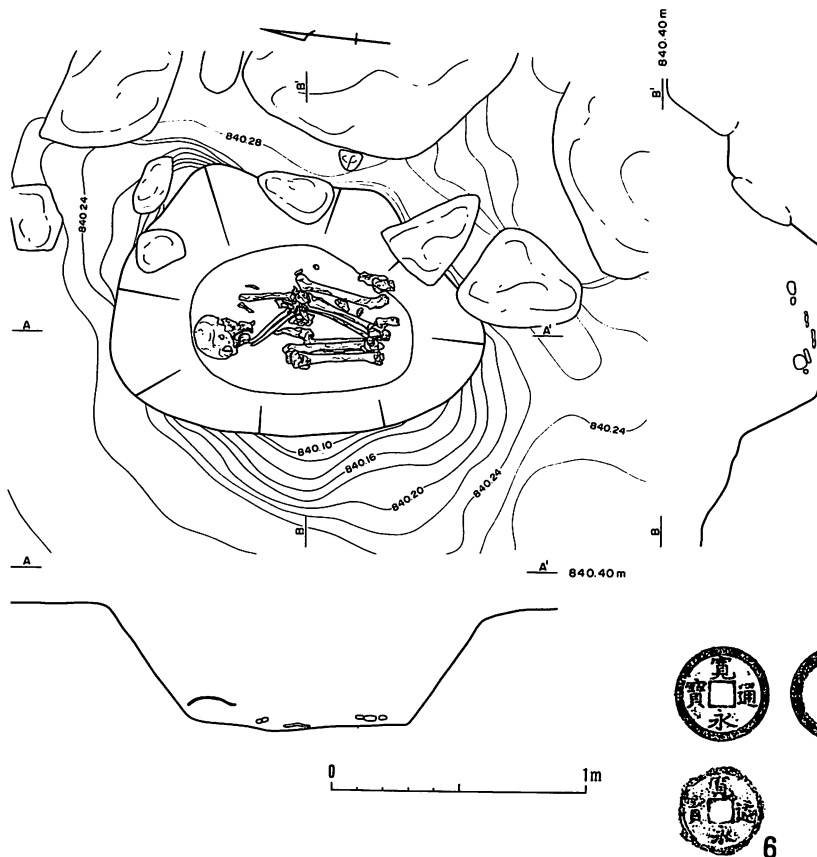


Fig. 118 19号墓墳および出土遺物

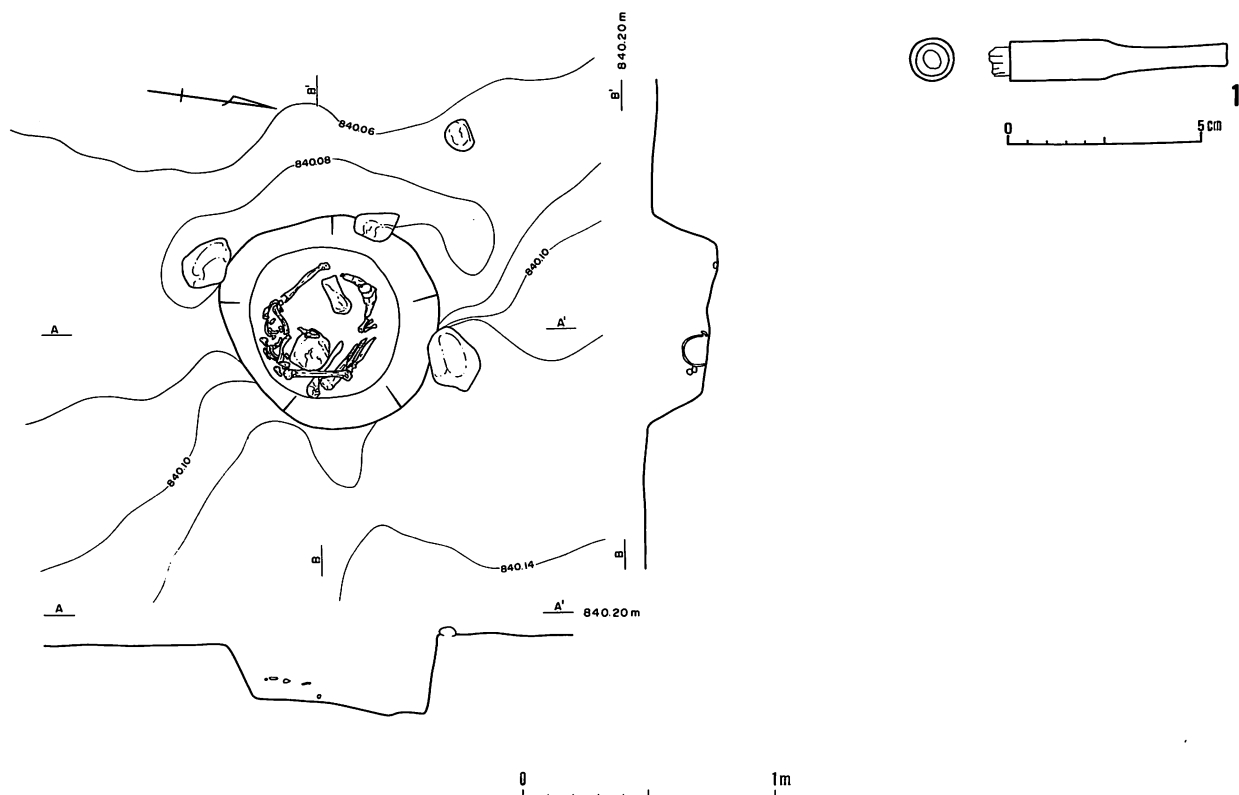


Fig. 119 20号墓墳および出土遺物

22号土壇 (Fig.120、P1.14-17、31-14)

4-4 Grid内北西寄りに位置し、北側に接する22号墓墳に切られる関係にある。平面形態は径約0.90mの正円形を呈する。断面形態は箱形に近い台形を呈し、確認面からの深さは0.62mを測る。埋葬形態は北向きの座葬である。腕部は前胸部で組む状態である。脚部は屈折するが、膝部を立てる状態であり、交脚はしない。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、煙管の吸口部1点と雁首部1点(木質のラウが僅かに残存する)、銅銭(全て寛永通寶)3点、鉄銭3点が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。

23号墓墳 (Fig.121、P1.14-18)

5-3 Grid内北側に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す長楕円形を呈し、その規模は長軸1.25m、短軸0.92mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.52mを測る。埋葬形態は北向きの座棺である。腕部の状態は不明である。脚部は屈折し、足首部を重ねる程度に交脚した状態となっている。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、鉄銭6点が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。

24号墓墳 (Fig.122、P1.31-15)

5-4 Grid内南端に位置し、東側に接する25号墓墳に切られる関係にある。平面形態は不整形円形を呈し、その規模は長軸1.25m、短軸1.15mを測る。なお、東側は遺構の切り合い関係で形態は不明瞭である。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.56mを測る。埋葬形態は南向きの座葬である。腕部はおよび脚部は屈折した状態である。検出状況から腕部で脚部を抱え込ませるような埋葬方法が観察できた。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、円形のガラス片(用途不明)1点、磁器の小皿(碗蓋の可能性あり)1点、磁器の小瓶(御神酒徳利か?)1点、鉄製の糸切鋏1点、鉄銭6点が出土している。ただし、鉄銭は枚数こそ判るものの、腐食が著しいため図示不能である。



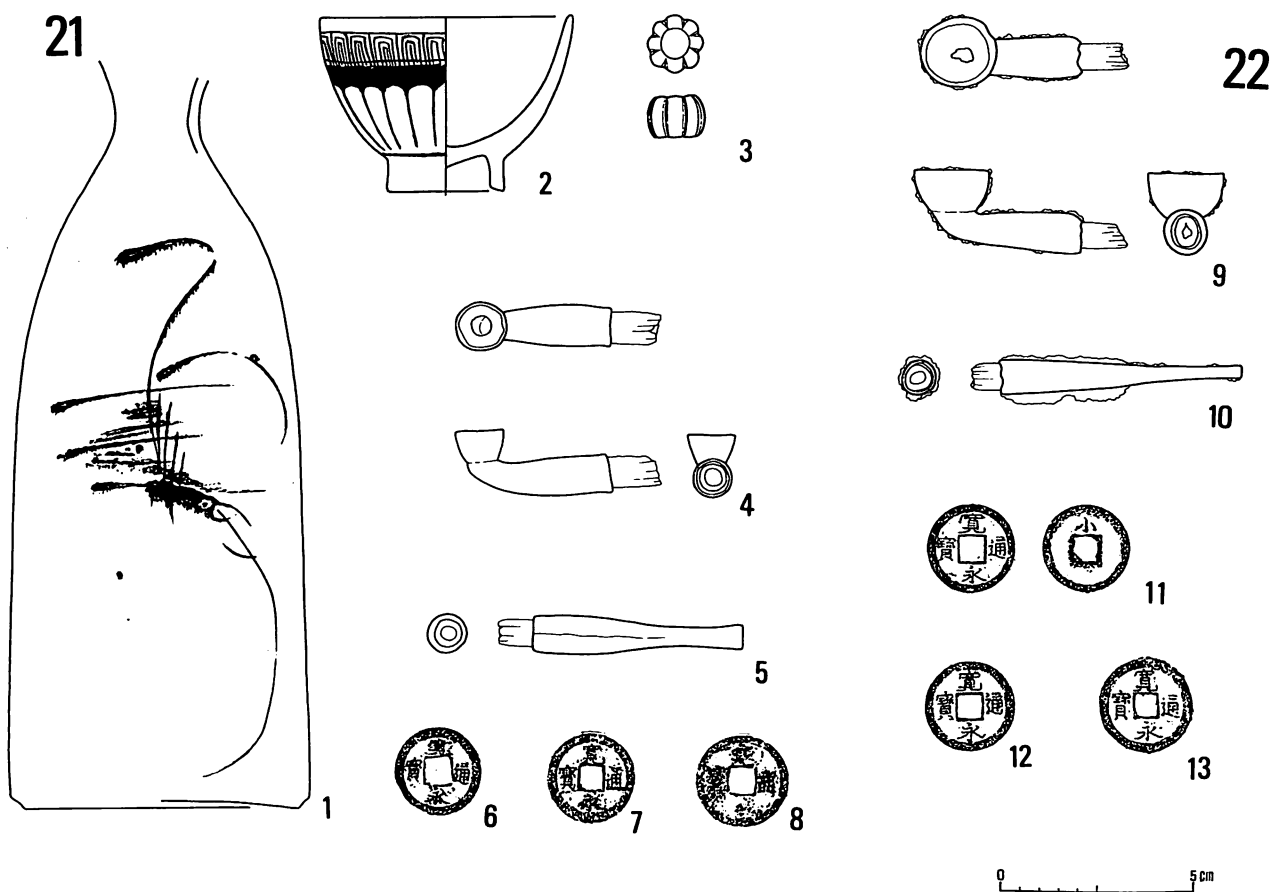
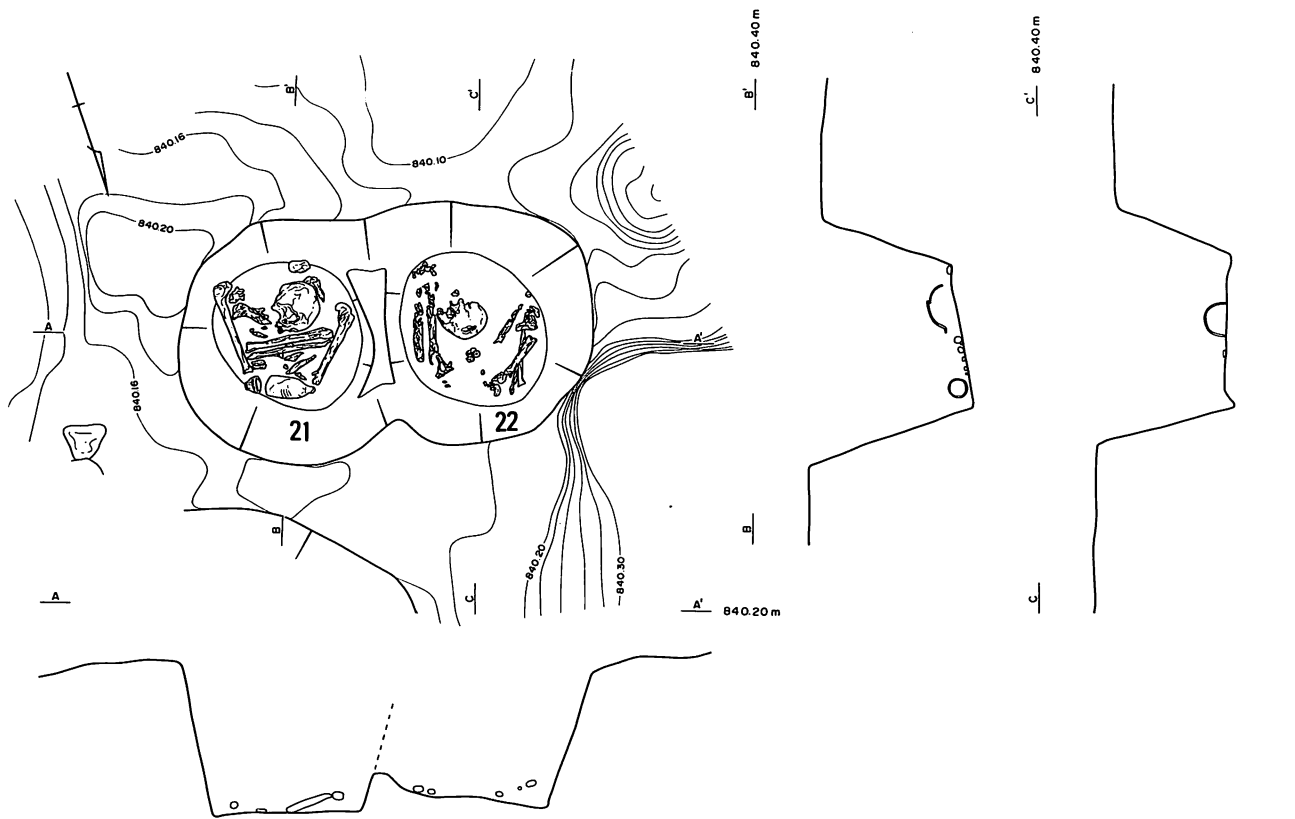


Fig. 120 21・22号墓墳および出土遺物

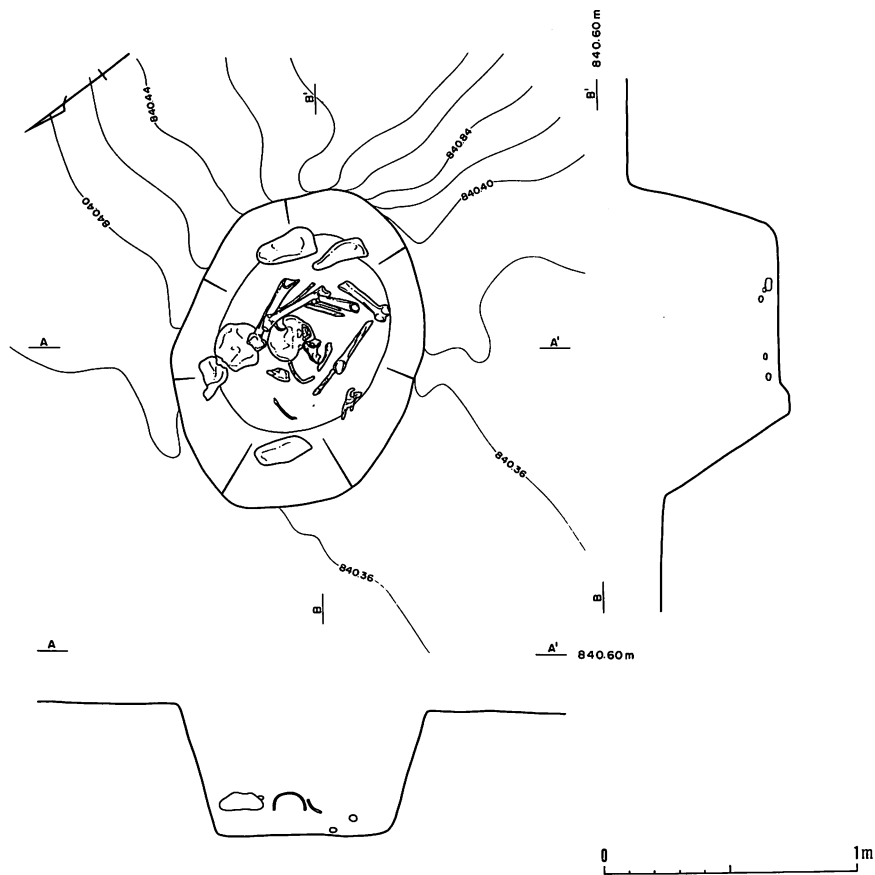


Fig. 121 23号墓墳

**26号墓墳 (Fig.123、P1.15-20、31-16)**

8-3 Grid内南西端に位置し、平面形態は長軸1.15m、短軸1.0mを測る楕円形を呈するが、南側壁面には大きい自然礫が存在するため不明瞭である。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.32mを測る。埋葬形態は寝葬であり、頭位は東側にあり体は北向きである。腕部は手甲部を前頭部に密着する状態である。脚部は屈折するが、両膝部が揃わず左足部のみがやや延びた状態である。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、煙管の雁首部1点と吸口部1点(木質のラウが僅かに残存する)、火打金1点が出土している。

**27号墓墳 (Fig.124、P1.15-21)**

9-2 Grid内北東端に位置し、1号住居址(縄文時代)の西端を切る。平面形態は径約0.90mを測る正円形を呈する。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.42mを測る。埋葬形態は北東向きの座葬であるが、腕部は手首部を揃え、胸部に密着する状態である。脚部は屈折し、脛部を重ねる程度に交脚した状態になっている。骨の遺存状況は良好である。出土遺物はない。

**28号墓墳 (Fig.125、P1.15-22、31-17)**

10-10 Grid内中央南寄りに位置し、11号竪穴状遺構(中世)を切る。平面形態は径約1.1mを測る正円形を呈する。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.55mを測る。埋葬状態は北向きの座葬である。腕部は手甲部を前腹部に乗せ置く状態である。脚部は屈折するが、膝部を立てる状態であり交脚はしない。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、煙管の吸口部(木質のラウが僅かに残存する)1点、銅銭(全て寛永通寶)3点、鉄銭3点が出土している。ただし、銅銭のうち1点と鉄銭は図示不能である。

**29号墓墳 (Fig.126、P1.15-23、31-18)**

10-10 Grid内南東端に位置する。平面形態は、径約0.9mを測る正円形を呈する。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは、0.75mを測る。埋葬形態は北向きの座葬であるが、腕部や脚部の状態は屈折することが判る程度であり、不明である。骨の遺存状況は良である。出土遺物として、銅製の簪1点、鉄銭5点が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。

**25号墓墳 (Fig.122、Pl.15-19)**

5-4 Grid内南端に位置し、西側に接する24号墓墳を切る関係にある。平面形態は、長軸1.10m、短軸1.0mを測る不整形円形を呈するが、西側は切り合いの関係で不明瞭である。断面形態は箱形に近い台形を呈し、確認面からの深さは0.50mを測る。埋葬形態は北向きの座葬である。腕部は手首部を胸部に密着する状態であり、脚部を抱え込む状態ではない。脚部の状態は不明である。骨の遺存状況は良好である。出土遺物はない。

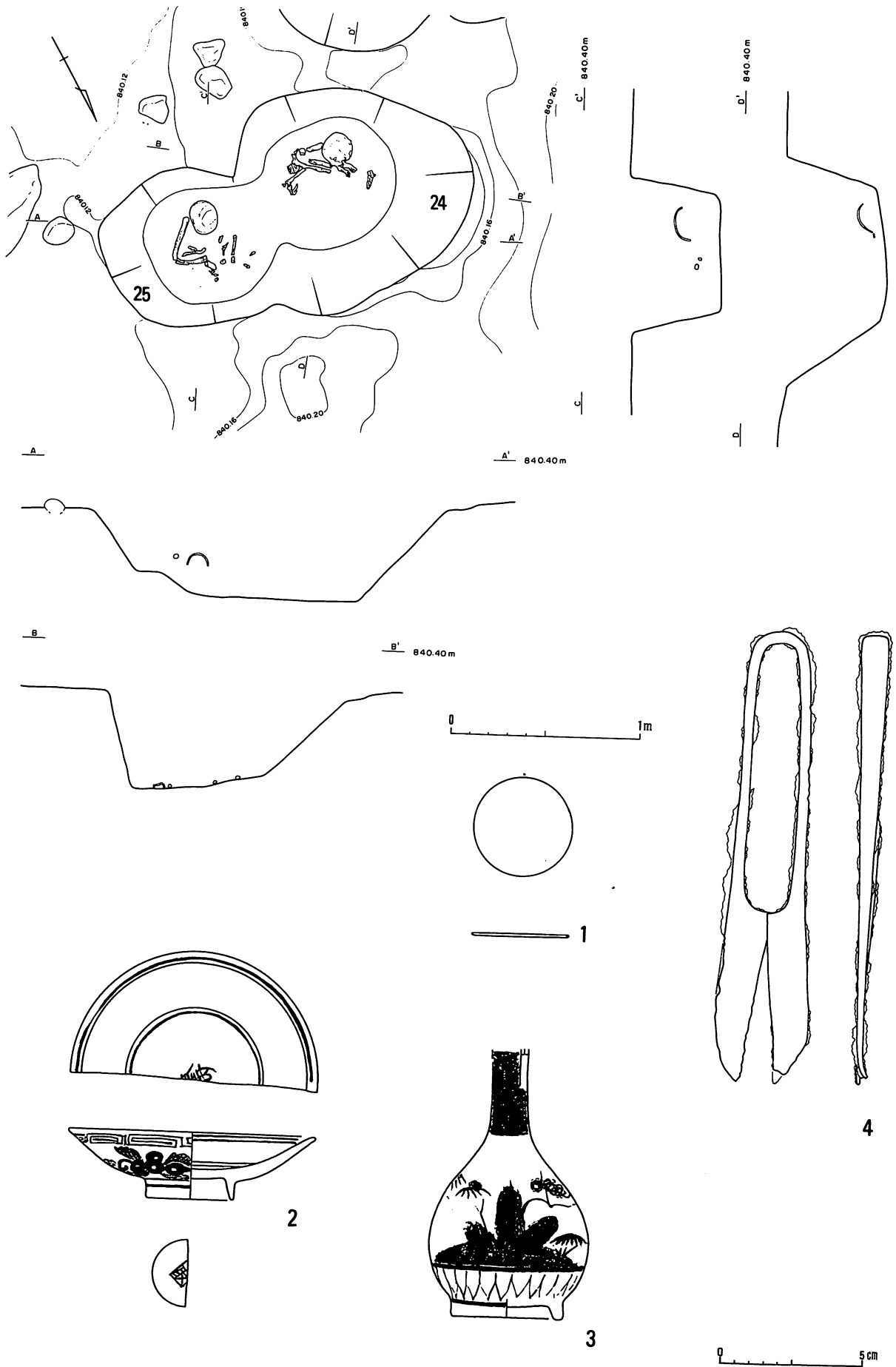


Fig. 122 24・25号墓墳および出土遺物

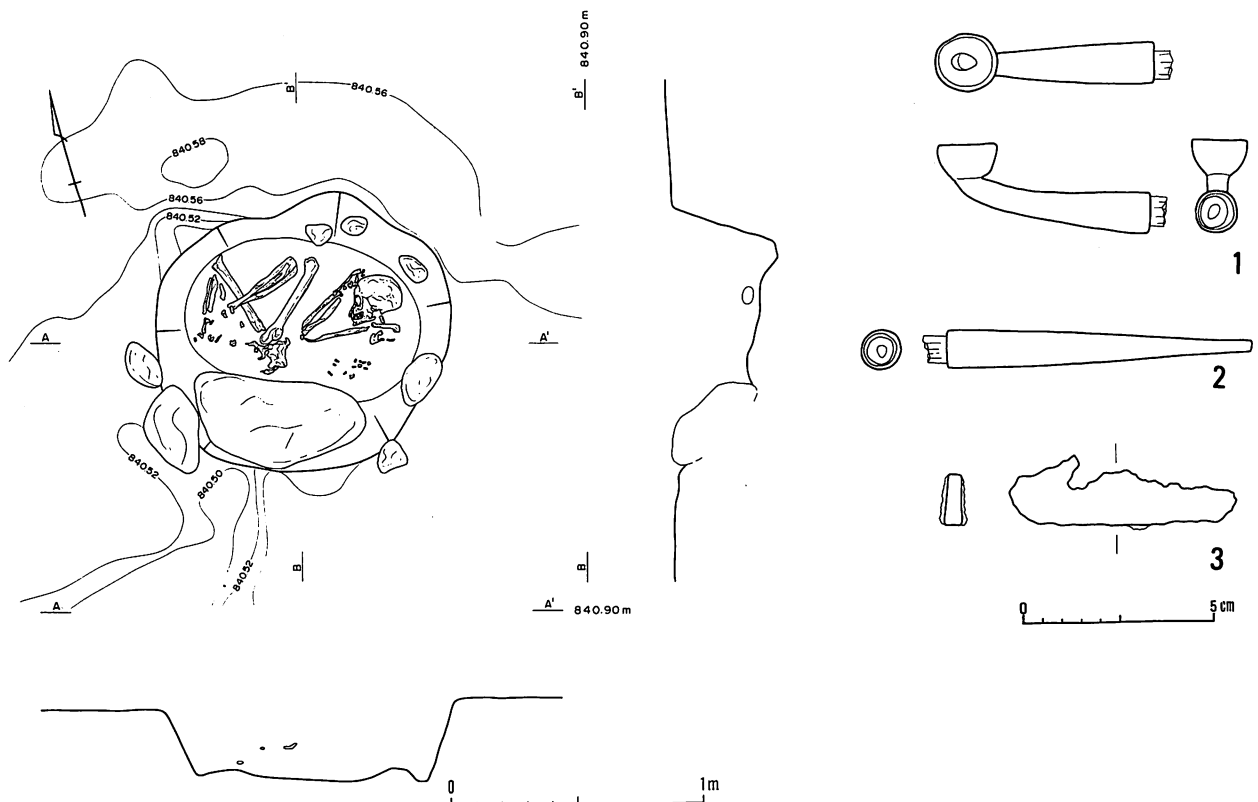


Fig. 123 26号墓墳および出土遺物

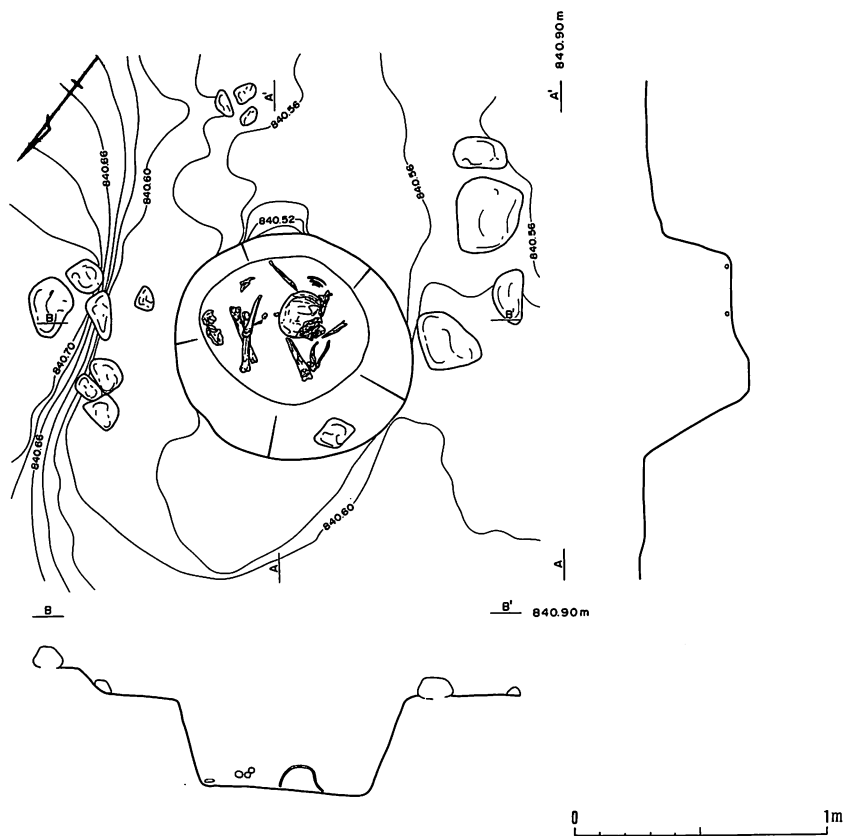


Fig. 124 27号墓墳

31号墓墳 (Fig.128、P.1.15-25、31-19、31-20)

9-10 Grid内北側に位置する。平面形態は長軸0.95m、短軸0.85mを測る不整形円形を呈するが、元は正方形に近い形態であったと考えられる。また、北東側には攪乱があり不明瞭である。断面形態は箱形を呈し、確認面か

30号墓墳 (Fig.127、Pl.15-24)

10-10 Grid内中央北寄りに位置する。平面形態は東西に長軸を有す長方形(隅丸方形)を呈し、その規模は長軸1.0m、短軸0.90mを測る。断面形態は箱形を呈し、確認面からの深さは0.65mを測る。埋葬形態は北向きの座葬である。腕部の状態は遺存状況が不良のため不明である。脚部は屈折し、深く胡坐をかくような状態である。骨の遺存状況は不良であり、特に頭部は形状不明なほどに崩れてしまっている。出土遺物として、磁器の碗(猪口?)1点、陶器の徳利1点、銅銭(全て寛永通寶)2点が出土している。

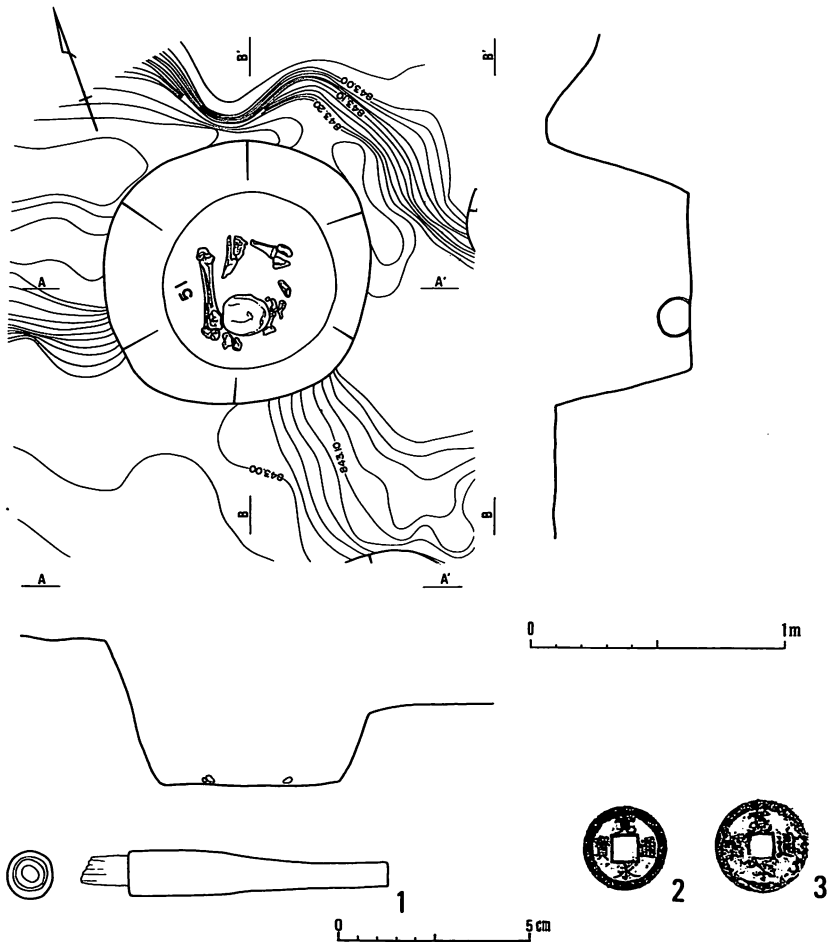


Fig. 125 28号墓壙および出土遺物

らの深さは0.55mを呈す。埋葬形態は北向きの座葬である。腕部は胸部に密着しており、脚部を抱え込む状態ではない。また、脚部は交脚した状態になっている。骨の遺存状況は良である。出土遺物として煙管の雁首1点と吸口部1点（木質のラウが僅かに残存する）、銅銭（すべて寛永通寶）2点、火打金1点、銀製の飾金具（蛸と女性を表したものであり、煙草入れ等の留金具と考えられる）1点が出土している。ただし、銅銭のうち1点は図示不能である。

32号墓壙 (Fig.129、P.1.15-26)

9-9 Grid 内北東側に位置する。「墓壙」の形態としては検出できず人骨のみを検出したものであるために、平面形態および断面形態は不明である。埋葬形態は寝葬であり、頭位は北側にあり体は西向きである。腕部は胸部に密着した状態である。また、脚部を屈折し

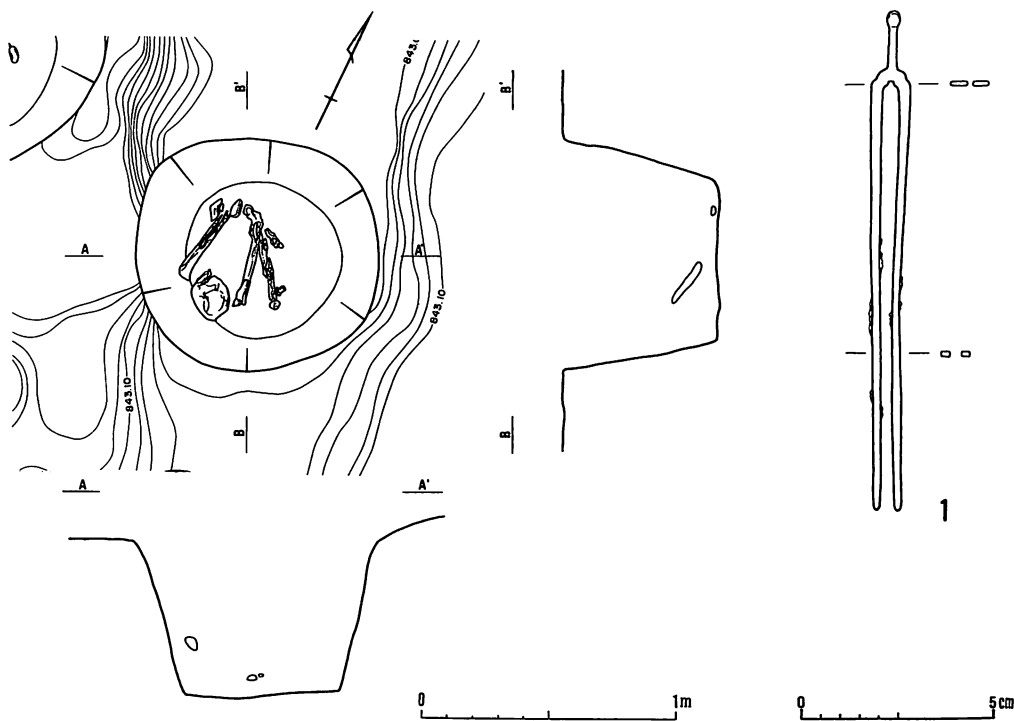


Fig. 126 29号墓壙および出土遺物

さらに腰部を極端に屈折させ腕部に密着させている。骨の遺存状況は良である。出土遺物はない。

33号墓壙 (Fig.130、P.1.15-27、31-21)

10-9 Grid 内中央に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す長方形を呈す。その規模は長軸1.1m短軸0.78mを測る。断面形態は箱形を呈し、確認面からの深さは0.58mを測る。

埋葬形態は寝葬であり、頭位は北側にあり体は西向きである。腕部は胸部に密着している状態である。脚部は屈折し、さらに腰部を極端に屈折させ腕部に密着させている。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、煙管の雁首部1点と吸口

り、頭位は北側にあり体は西向きである。腕部は胸部に密着している状態である。脚部は屈折し、さらに腰部を極端に屈折させ腕部に密着させている。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、煙管の雁首部1点と吸口

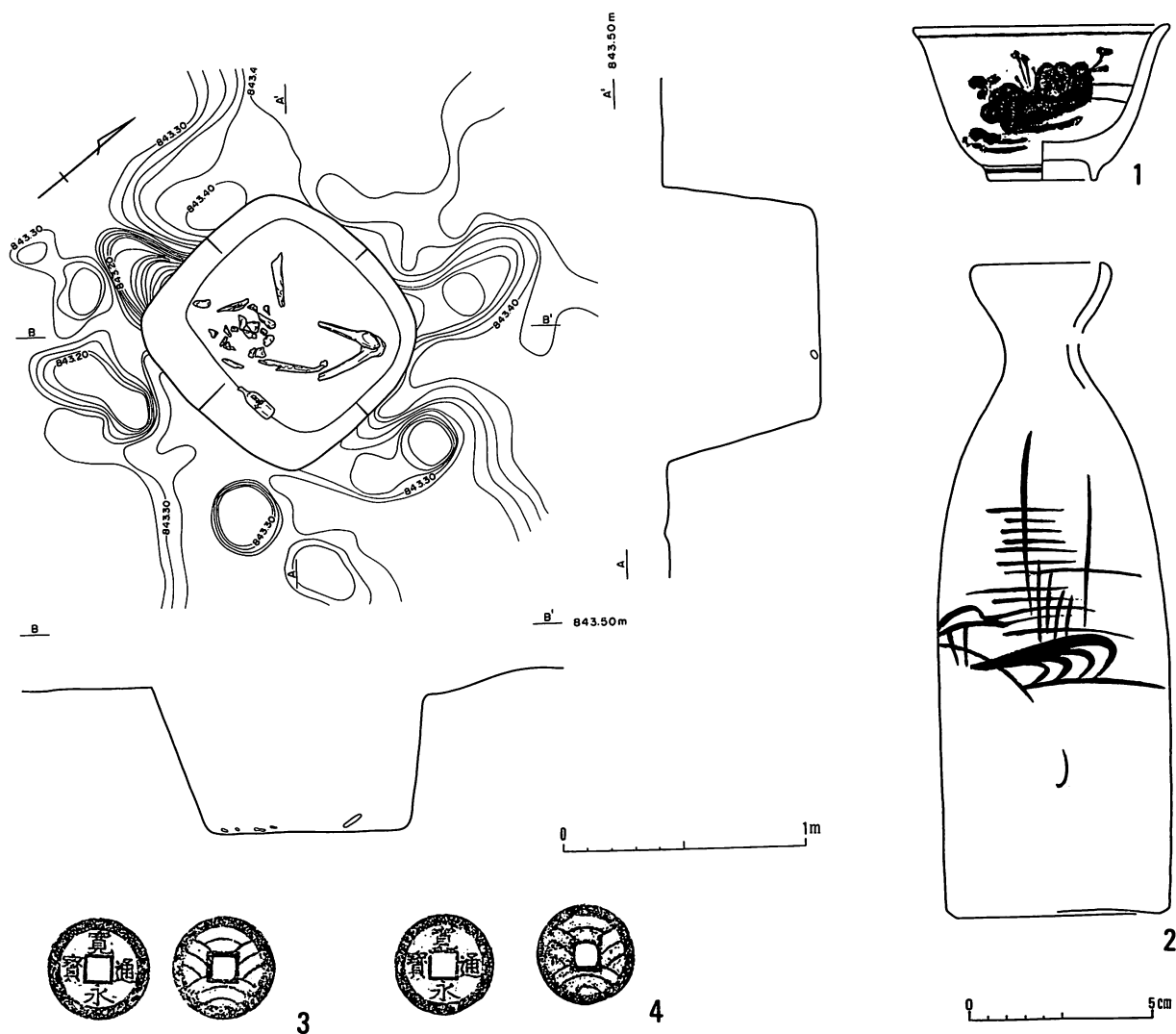


Fig. 127 30号墓壙および出土遺物

部 1 点（木質のラウが僅かに残存する）、銅銭（寛永通寶）1 点が出土している。

#### 34号墓壙 (Fig.131、P1.15-28、31-22)

9-10 Grid 内北東端に位置する。平面形態は現況では長軸0.85m、短軸0.80mを測る不整形を呈する。しかしこれは南西側壁の崩落が原因であり、元は南北方向に長軸を有す長方形を呈していたものと考えられる。規模は短軸が若干短くなることが推測されるが不明である。断面形態は台形であり、確認面からの深さは0.48mを測る。埋葬形態は北向きの座葬である。腕部は手甲部を前腰部に乗せ合わす状態であり、脚部は胡坐をかくような状態となっている。全体的には座禅を組んでいるかのような状態が観察できた。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、煙管の雁首部 1 点と吸口部 1 点（木質のラウが僅かに残存する）と鉄製品が出土している。鉄製品は棺の製造に用いた釘である可能性が高いが、腐食が著しく図示は不能である。

#### 35号墓壙 (Fig.132、P1.15-29)

11-9 Grid 内北東端に位置する。平面形態は、現況では径約1.25mを測る不整形を呈する。しかし、これは西側壁の崩落が原因であり、元は南北方向に長軸を有す長方形（隅丸方形）を呈していたものと考えられる。推定される規模は長軸1.3m、短軸0.87mを測る。断面形態は箱形を呈していたと考えられ、確認面からの深さは0.55mを測る。埋葬形態は寝棺であり、頭位は北側にあり体は西向きである。骨の遺存状況が不良であるため、腕部の形態は不明であるが、脚部は屈折し、膝部を揃え胸部に近づける状態である。出土遺物として、銅銭（全て北宋銭）3点のみが出土している。副葬品や骨の遺存状況などから、他の墓壙より時期的に古いものである可能性が高い。

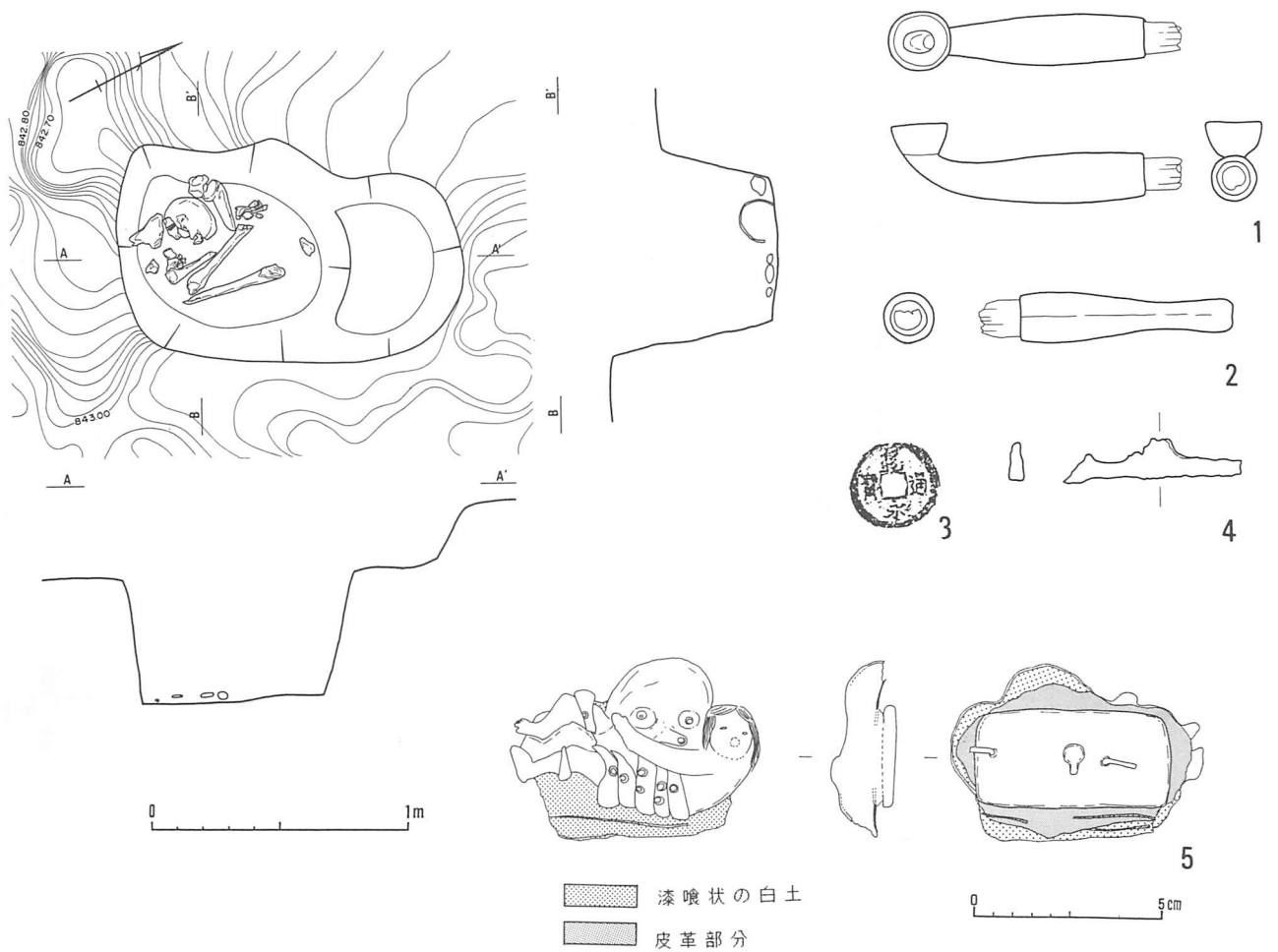


Fig. 128 31号墓壙および出土遺物



Fig. 129 32号墓壙

東西方向に主軸を有す長方形を呈していたものと考えられる。規模は長軸0.50m、短軸0.40mを測ると考えられる。断面形態は皿状であり、確認面からの深さは、0.07mを測る程度と浅い。埋葬形態は頭骨と少量の四肢骨が遺存しているだけの状況のため不明である。骨は小型であり、小児あるいは幼児である可能性が高い。出土遺物として、銅銭（全て寛永通寶）4点のみが出土している。

### 36号墓壙 (Fig.133)

9-10 Grid内南東寄りに位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す長楕円形を呈し、規模は長軸0.82m、短軸0.43mを測る。断面形態は箱形を呈し、確認面からの深さは、0.28mを測る。埋葬形態は寝葬であり、頭位は北側にあり体は西向きである。しかし、骨の遺存状況が不良のため、脚部が屈折する状態が観察できたのみである。出土遺物はない。

### 37号墓壙 (Fig.134)

9-10 Grid内南東寄りに位置する。北側には38号墓壙が存在するが、接する程度のために切り合い関係は不明である。平面形態は現況では、径約0.5mの不整形円形を呈する。しかし、これは南東側壁が攪乱により失われたためであり、元は

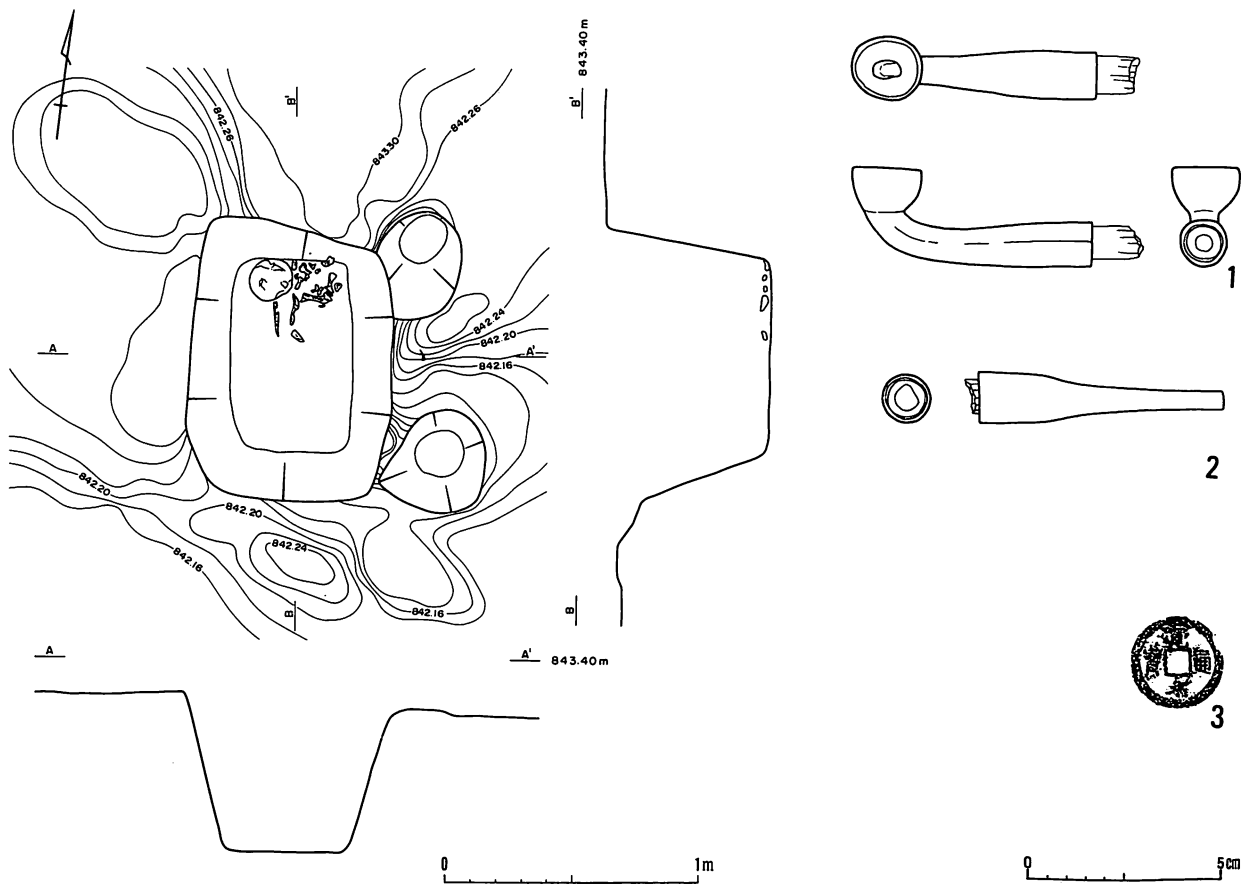


Fig. 130 33号墓壙および出土遺物

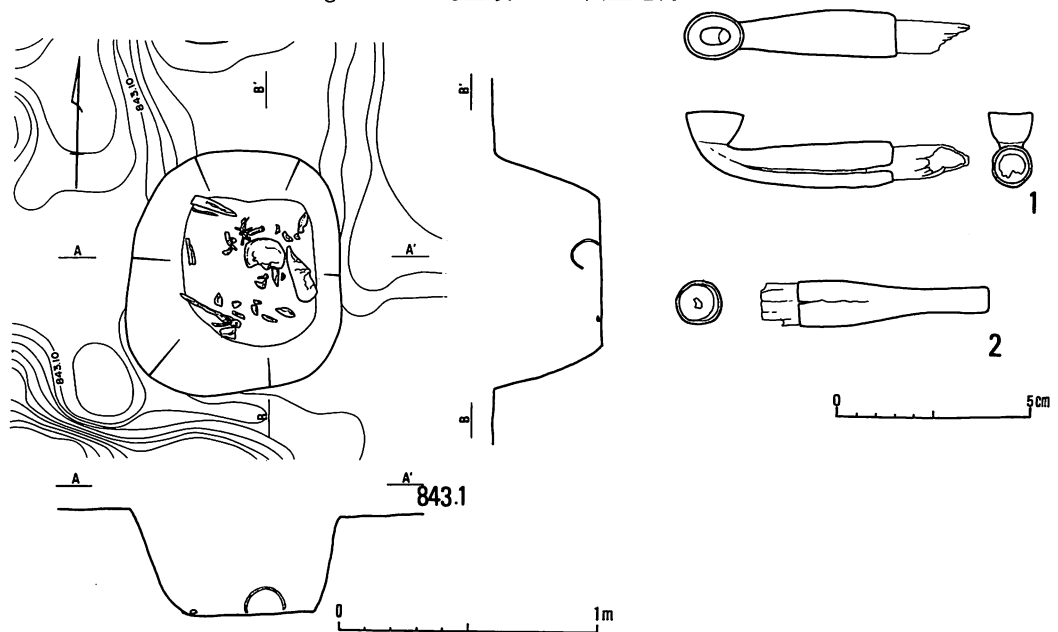


Fig. 131 34号墓壙および出土遺物

38号墓壙 (Fig.134)

9-10 Grid内南東寄りに位置する。南側には37号墓壙が存在するが、接する程度のために切り合い関係は不明である。平面形態は南北方向に主軸を有する長方形を呈し、規模は長軸0.78m、短軸0.58mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.21mを測る。埋葬形態は頭骨と少量の四肢骨が遺存しているだけの状況のため不明である。ただし、頭骨が正位で立った状態で検出されているため、座葬に近い形態であったと推測される。骨は小型であり、小児あるいは幼児である可能性が高い。出土遺物はない。



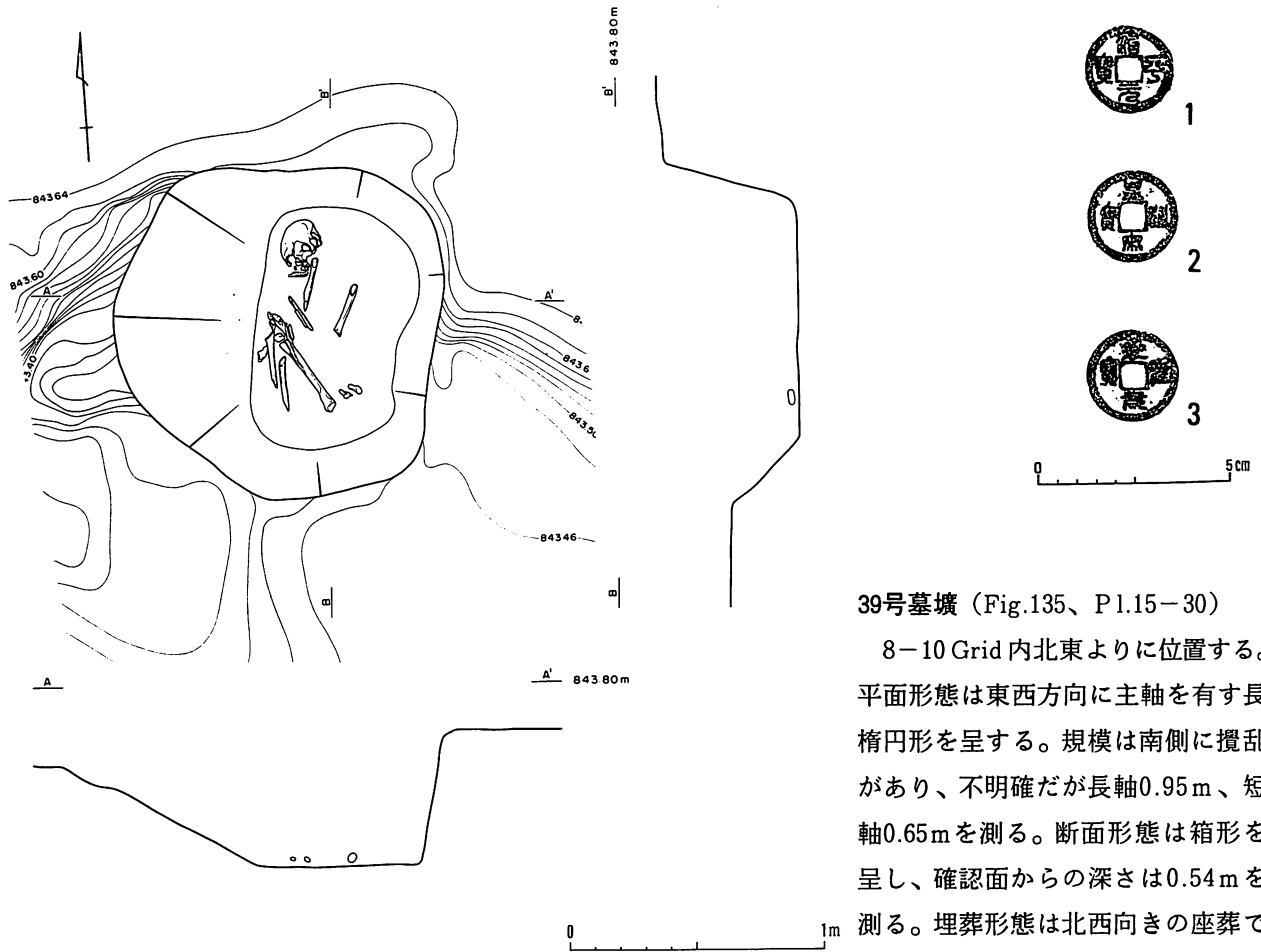


Fig. 132 35号墓墳および出土遺物

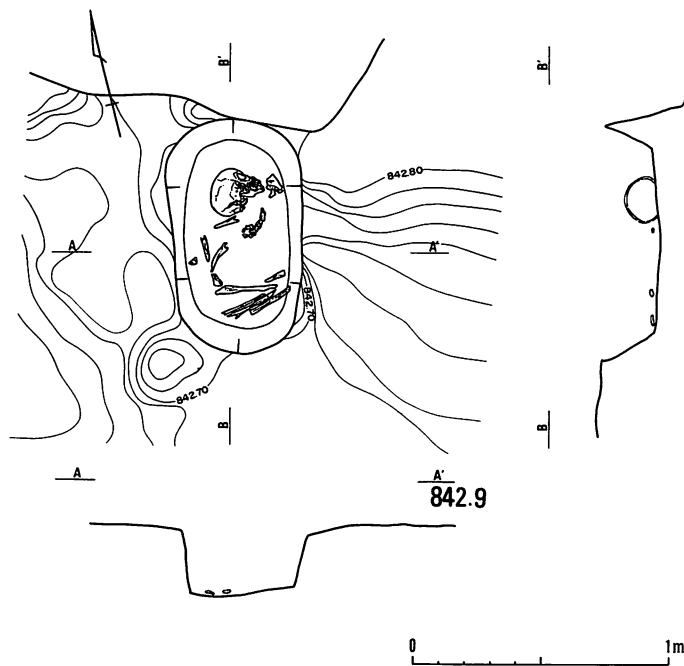


Fig. 133 36号墓墳

まるで正座したような状態となっている。骨の遺存状況は良好であり、頭骨の歯部表面にはベニ状の塗布物が残存している。あるいは「お歯黒」であるかも知れない。出土遺物として、煙管の雁首1点と吸口1点（木質のラ

39号墓墳 (Fig.135、P.1.15-30)

8-10 Grid内北東よりに位置する。平面形態は東西方向に主軸を有す長楕円形を呈する。規模は南側に攪乱があり、不明確だが長軸0.95m、短軸0.65mを測る。断面形態は箱形を呈し、確認面からの深さは0.54mを測る。埋葬形態は北西向きの座葬である。腕部は手首部を揃え、胸部に密着する状態である。脚部は足首を

重ねる程度に交脚した状態になっている。骨の遺存状況は良好である。出土遺物はない。

40号墓墳 (Fig.136、P.1.15-31、31-23)

8-11 Grid内南寄りに位置する。平面形態は径約0.85mの正円形に近い不整形円形を呈する。断面形態は箱形を呈し、確認面からの深さは、1.32mを測る。埋葬形態は北西向きの座葬である。骨の遺存状況が不良であるために腕部や脚部の状態は不明である。出土遺物として、銅製の簪1点、銅銭（全て寛永通寶）6点、煙管の雁首1点と吸口1点（木質のラウが僅かに残存する）が出土している。

41号墓墳 (Fig.137、P.1.15-32、32-24)

8-12 Grid内中央に位置する。平面形態は、径約0.85mを測る正円形を呈する。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.45mを測る。埋葬形態は北向きの座葬である。腕部は前胸部で組んだ状態である。脚部は屈折し

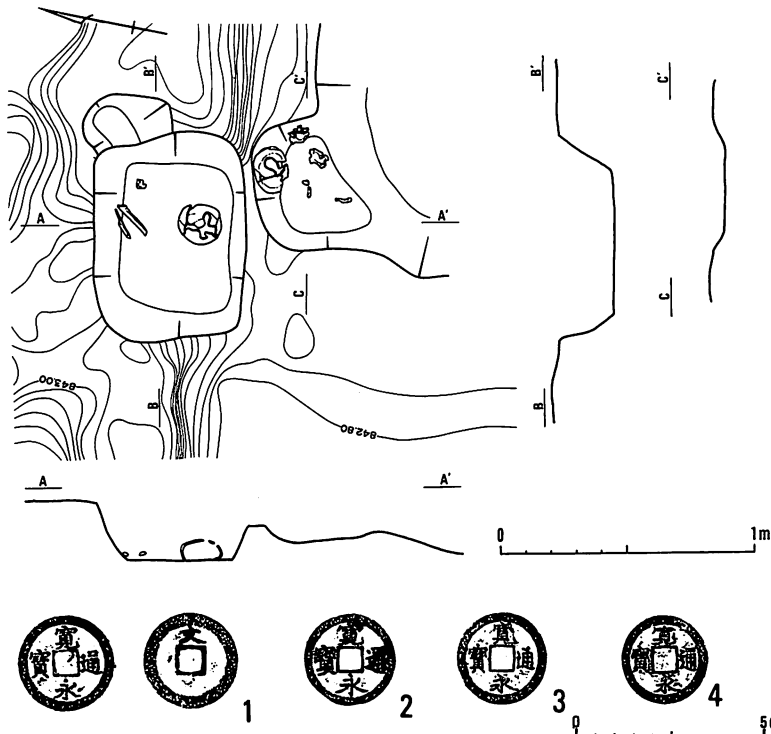


Fig. 134 37・38号墓壙および出土遺物

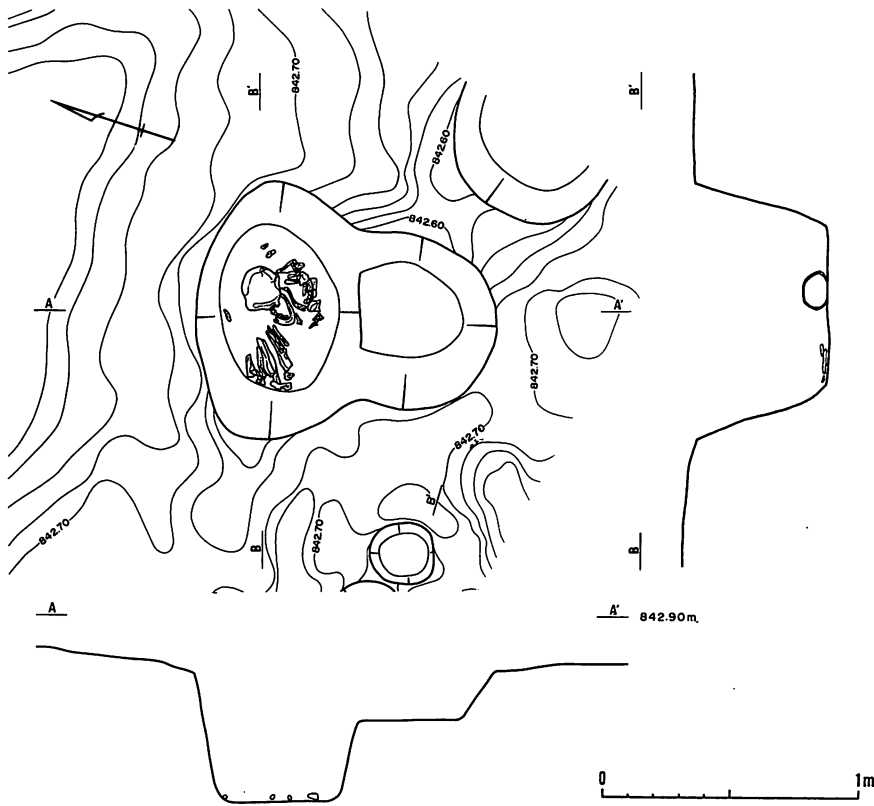


Fig. 135 39号墓壙

ウが僅かに残存する)、銅製の簪1点、磁器の猪口2点(いずれも内部にベニ状の付着物あり)、貝殻(ハマグリ?)1点が出土している。ただし、貝殻は図示不能である。人骨や出土遺物から見て、被葬者は女性である可能性が高い。

42号墓壙 (Fig.138、P.15-33)

8-12 Grid内南寄りに位置する。平面形態は、長軸0.72m、短軸0.63mを測る不整形円形を呈する。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.38mを測る。埋葬形態は北向きの座葬であるが、頭部と四肢骨の一部のみが残存する状況である。脚部の形態はまったく不明であるが、腕部は胸部に密着する

状態である。出土遺物として、火打金1点、銅銭および鉄銭(おそらく寛永通寶だが、腐食が著しく点数は不明)、木片1点、胡桃1点が出土している。ただし銅銭・鉄銭・木片・胡桃は図示不能である。

43号墓壙 (Fig.139、

P.15-34、32-25)

8-10 Grid内北西寄りに位置する。平面形態は、径約0.95mの不整形円形を呈する。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.78mを測る。埋葬形態は北東向きの座葬である。腕部は手首部を揃え胸部に密着する状態である。胸部は屈折し、足首部を重ねる程度に交脚する状態である。骨の遺存状況は最良である。出土遺物として、磁器の碗1点銅銭(全て寛永通寶)4点、胡桃が出土している。ただし、胡桃は図示不能である。

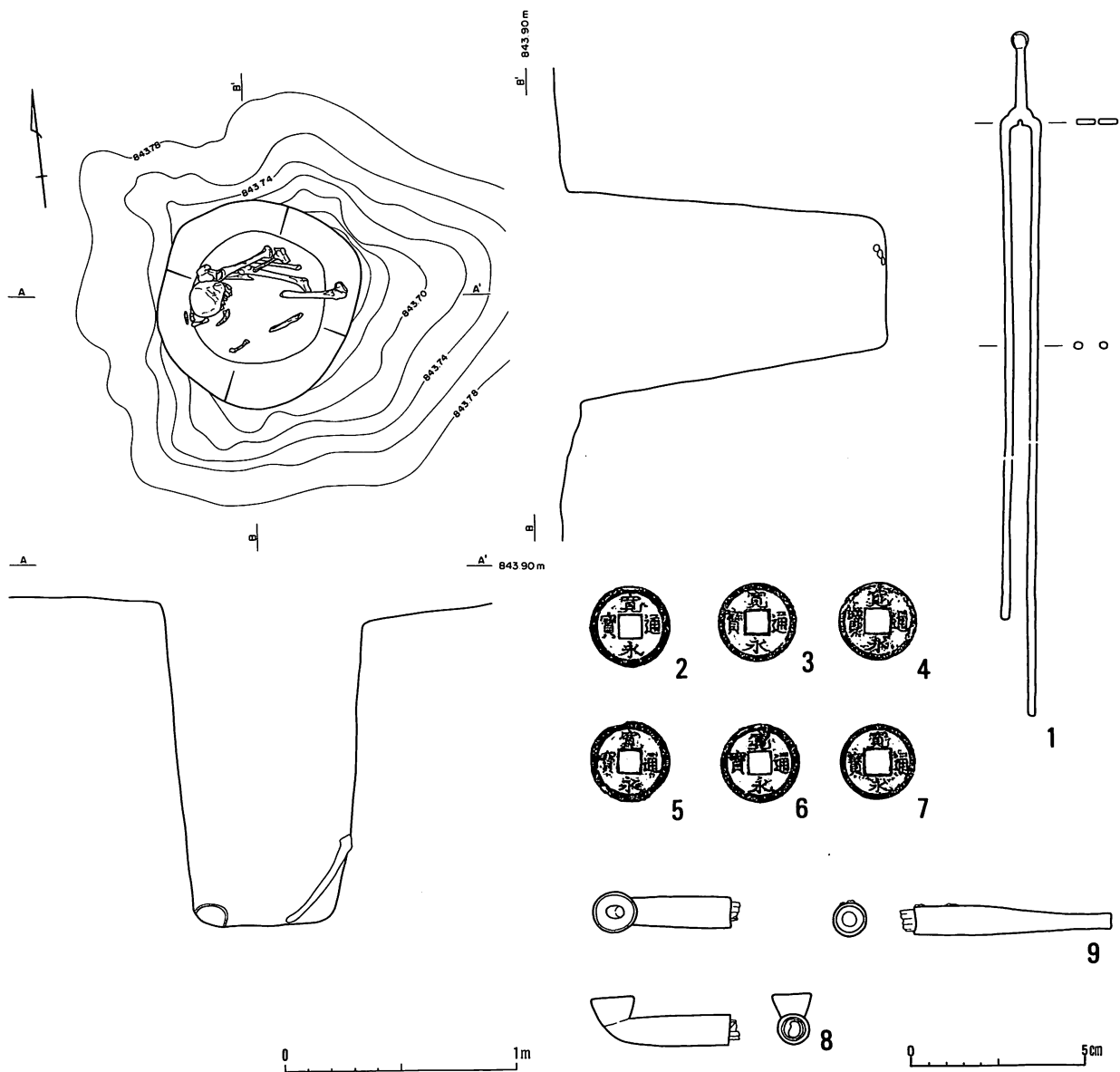


Fig. 136 40号墓壙および出土遺物

44号墓壙 (Fig.140、P.1.15-35)

9-10 Grid内北西寄りに位置する。平面形態は、長軸1.24m、短軸0.98mを測る楕円形を呈する。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.82mを測る。埋葬形態は北向きの座葬である。腕部は両脇を締めるように体側面に密着し、脚部は交脚せず屈折するのみの状態で開いている。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、銅銭（全て寛永通寶）4点、鉄銭2点、磁器の碗1点が出土している。ただし、鉄銭は枚数の判別ができたのみであり、図示は不能である。

45号墓壙 (Fig.141、P.1.15-36)

11-9 Grid内北側に位置する。平面形態は長軸1.52m、短軸0.92mを測る長楕円形を呈する。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.37mを測る。埋葬形態は寝葬であり、頭位は北側にあり体は西を向く。ただし、骨の遺存状況が頭骨と四肢骨の一部のみが残存するだけと不良である。そのため脚部が屈折している状態が観察されたのみである。出土遺物はない。

46号墓壙 (Fig.142)

5-10 Grid内南西寄りに位置する。「墓壙」の形態としては検出できなかったのに等しい状況であり、平面形態および断面形態は不明確である。現況での平面形態については、長軸1.25m、短軸1.0m程度を測る長楕円形を呈する。断面形態は皿状を呈するが、確認面からの深さは0.15mを測る程度である。埋葬形態は寝葬であり、頭

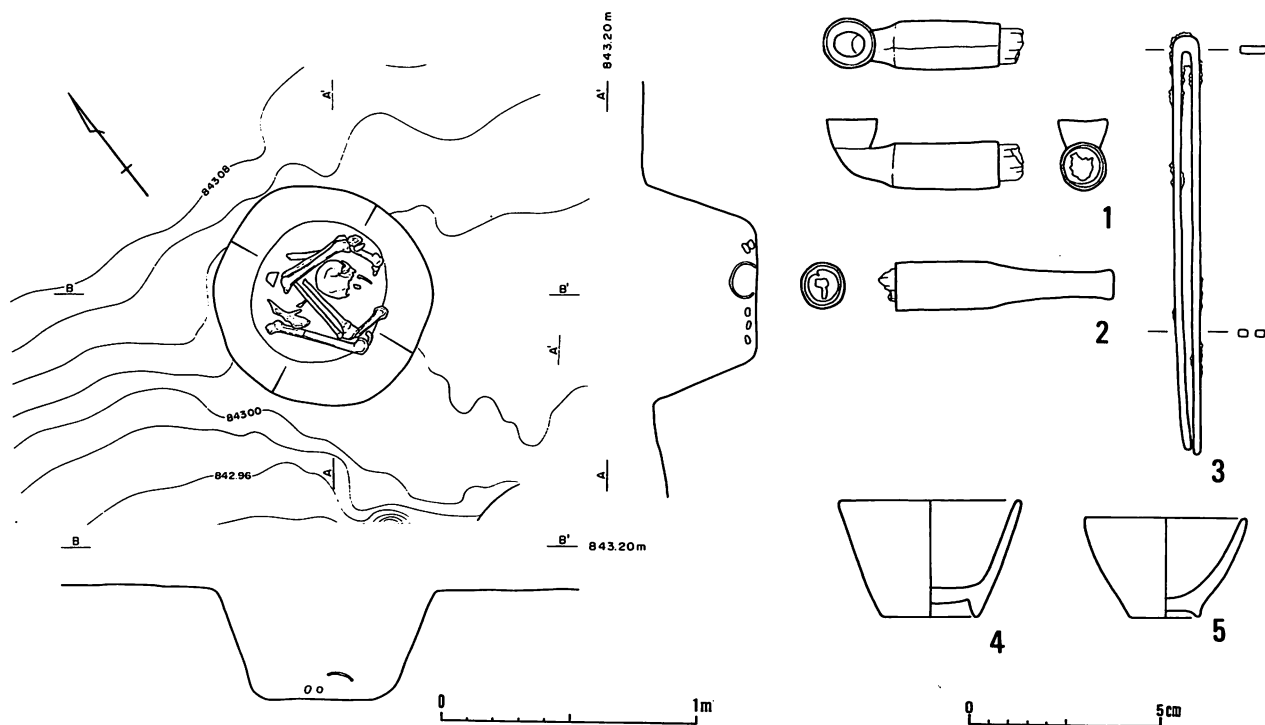


Fig. 137 41号墓墳および出土遺物

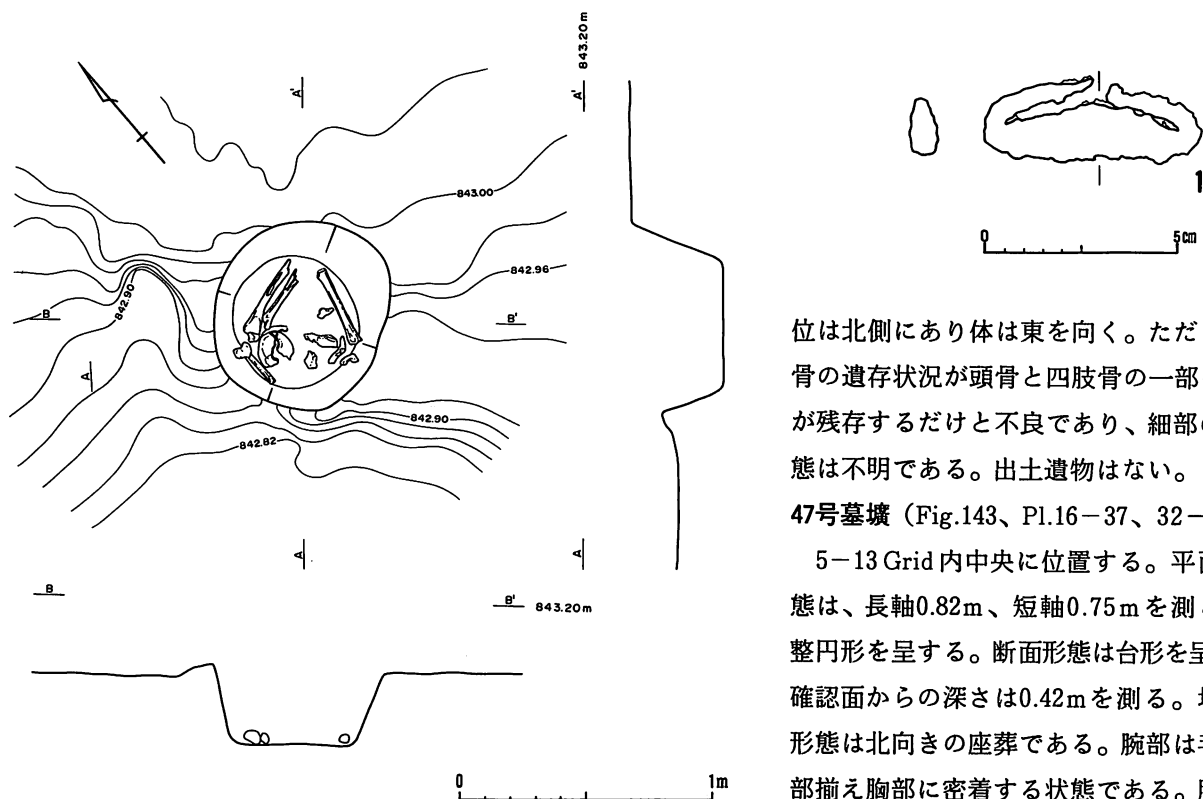


Fig. 138 42号墓墳および出土遺物

位は北側にあり体は東を向く。ただし、骨の遺存状況が頭骨と四肢骨の一部のみが残存するだけと不良であり、細部の状態は不明である。出土遺物はない。

**47号墓墳 (Fig.143、Pl.16-37、32-26)**

5-13 Grid内中央に位置する。平面形態は、長軸0.82m、短軸0.75mを測る不整円形を呈する。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.42mを測る。埋葬形態は北向きの座葬である。腕部は手首部揃え胸部に密着する状態である。脚部は屈折はするが、膝部を立て交脚はしない状態である。

**48号墓墳 (Fig.144、Pl.16-38)**

8-10 Grid内中央に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す長楕円形を呈し、その規模は長軸1.12m、短軸0.91mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.58mを測る。埋葬形態は寝棺であり、頭位は北

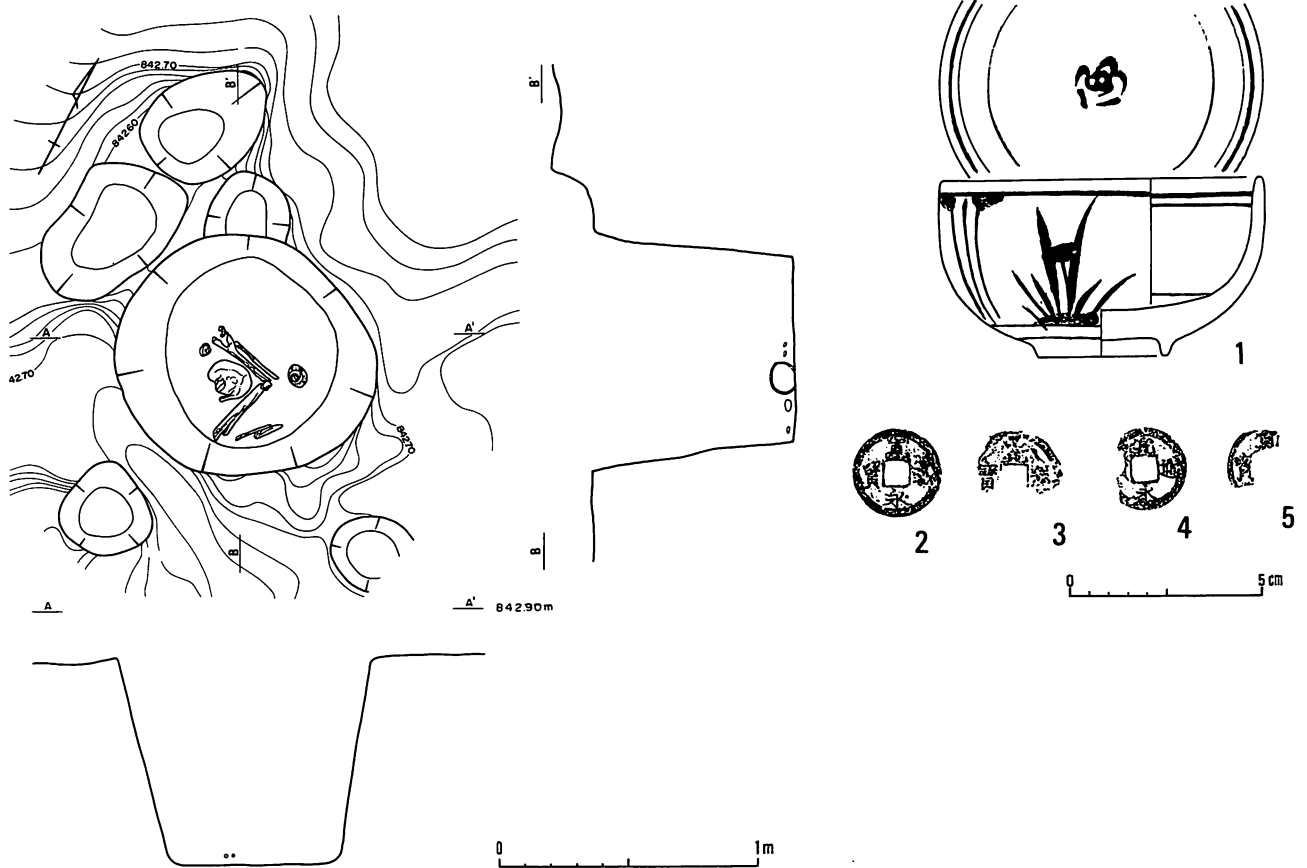


Fig. 139 43号墓壙および出土遺物

側、体は西向きである。腕部は胸部全面に揃えて屈折するが、胸部に密着はしていない。さらに胸部を抱え込む状態でもない。脚部は屈折する状態である。骨の遺存状況は、良好である。出土遺物として、銅銭（寛永通寶）1点、鉄銭1点が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。

#### 49号墓壙 (Fig.145、P.1.16-39)

4-13 Grid内北端に位置する。平面形態は、長軸0.88m、短軸0.75mを測る不整形を呈する。断面形態は台形を呈するが、残存状況が不良のため明確ではない。確認面からの深さは0.38mを測る。埋葬形態は北向きの座葬であるが、骨の遺存状況が不良のため四肢の状態は不明である。出土遺物として胡桃1点が出土しているが、腐食が著しく図示不能である。

#### 50号墓壙 (Fig.146、P.1.16-40、32-27)

5-12・13 Grid内に位置する。平面形態は現況では長軸0.90m、短軸0.76mを測る不整形を呈すが、墓壙の北西側壁は崩落している状況である。比較的に残存状況の良好な南壁および西壁の状況から見て、元は東西方向に主軸を有す長方形を呈していたものと推測される。推測される規模は長軸0.80m、短軸0.70m程度であろう。断面形態も現況では台形を呈すが、元は箱形を呈していたものと推測される。確認面からの深さは0.45mを測る。埋葬形態は北向きの座葬である。しかし、骨の遺存状況が不良のため、四肢の状態は不明である。出土遺物として、煙管の雁首部1点と吸口部1点（木質のラウが僅かに残存する）、火打金1点、銅製の簪1点、銅銭（全て寛永通寶）2点、鉄銭1点が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。

#### 51号墓壙 (Fig.147、P.1.16-46)

2-12・3-12 Grid内に位置する。平面形態および断面形態は、現況では径約1.50mを測る不整形の浅い落ち込みが認められる程度である。南側壁が僅かに残存し、確認面からの深さは0.15mを測る。事実上、「墓壙」の形態としては検出できず人骨のみを検出したものであると言えよう。埋葬形態は寝棺であり、頭位は北側にあり、



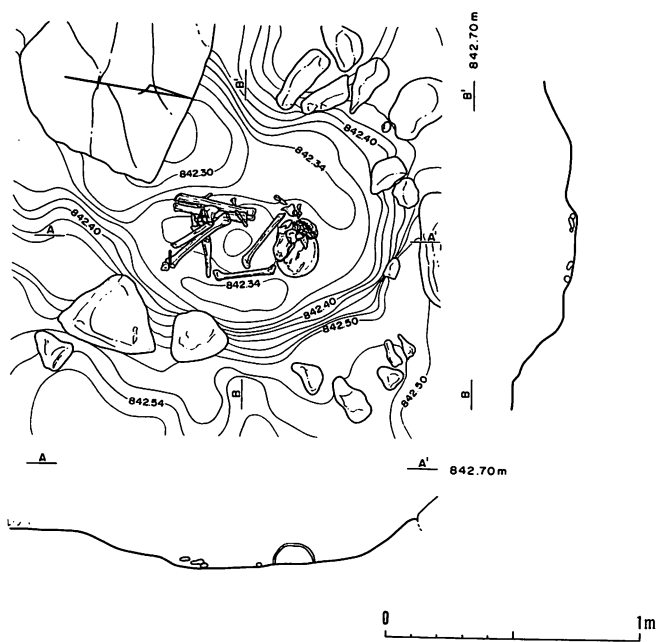


Fig. 142 46号墓墳

53号墓墳 (Fig.149、P.1.16-42、32-29)

2-5 Grid内北北西端に位置する。調査担当者側の手続きミスのため、調査途中で人骨等の移転を余儀なくされた墓墳である。移転に際しては調査担当者の立ち合いもできなかったために「遺構」の作図もできなかった。ゆえに、ここでは検出中の写真および残存した遺物を報告できるのみである。また、ごく僅かに残された人骨については、分析(付篇)も依頼した。

平面形態は、南北方向に主軸を有す長楕円形であり、その規模は長軸約1.15m、短軸約0.90mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは約0.35mを測る。ただし、形態・規模等は調査中の略測データであり、不正確なものである。埋葬形態は寝葬であり、頭位は北側にあり体は上向きの状態である。腕部は胸部に密

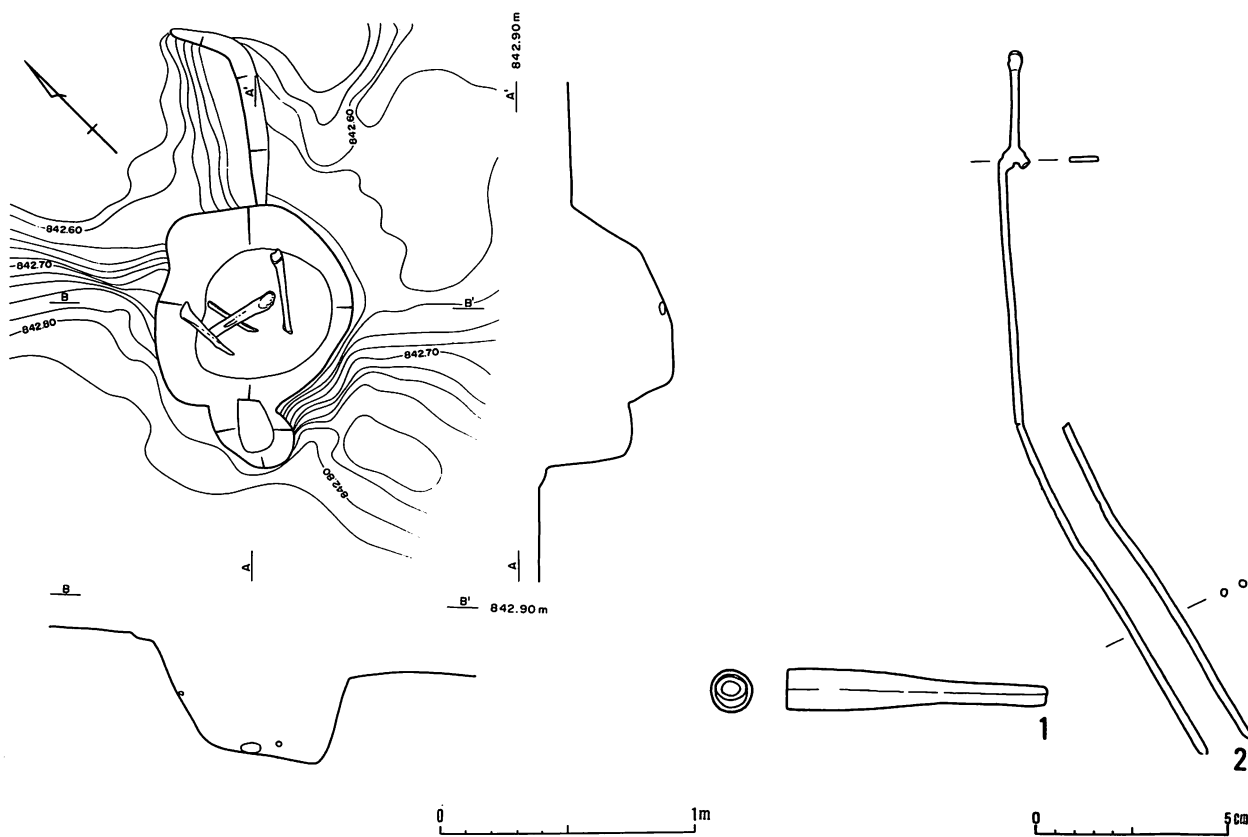


Fig. 143 47号墓墳および出土遺物

着し、左右の胸部にそれぞれを置いている。脚部は屈折するが、交脚の状態ではなく開いている。また、この墓墳はいわゆる「抱石葬」状になっており、遺体を押え込むように30cm~50cm大の礫が数個置かれている。礫には上部から落ち込んだ状況は認められず、埋葬時に直接、遺体の上に置いたものと考えられる。木棺等を用いていないことも併せて推測される。なお、本遺跡では同様な葬法は他に認められず、特異な例であると言える。骨の遺存状況は最良であった。出土遺物として、煙管の雁首部1点、吸口部1点(木質のラウが僅かに残存する)、火打金1点が出土している。他に銅銭等も出土していたようだが、人骨とともに移転されたようである。

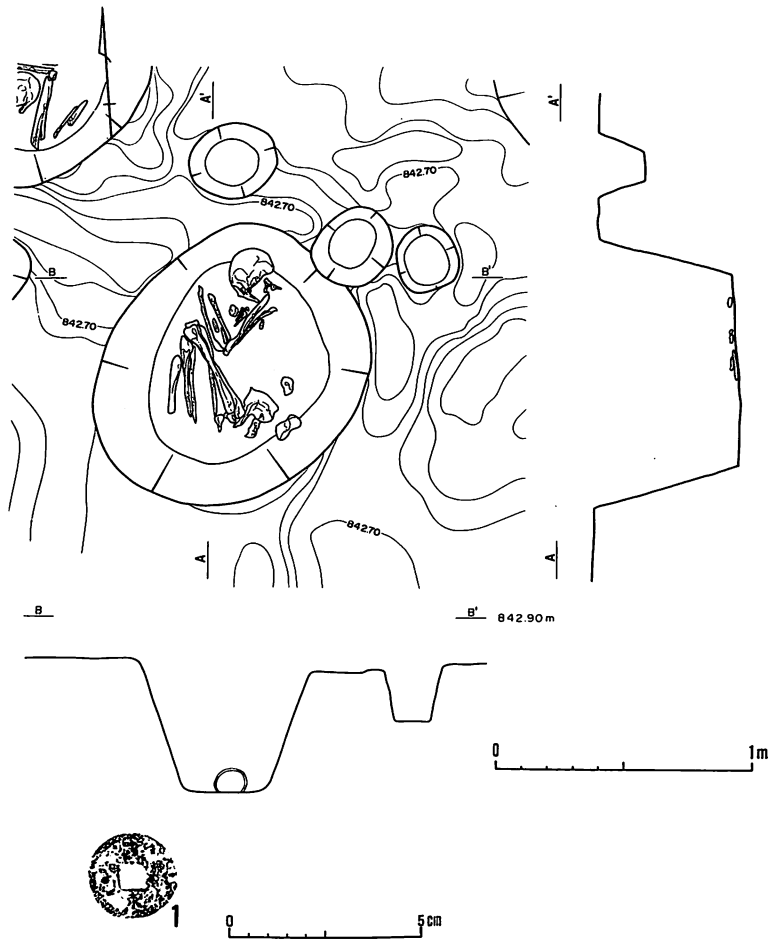


Fig. 144 48号墓墳および出土遺物

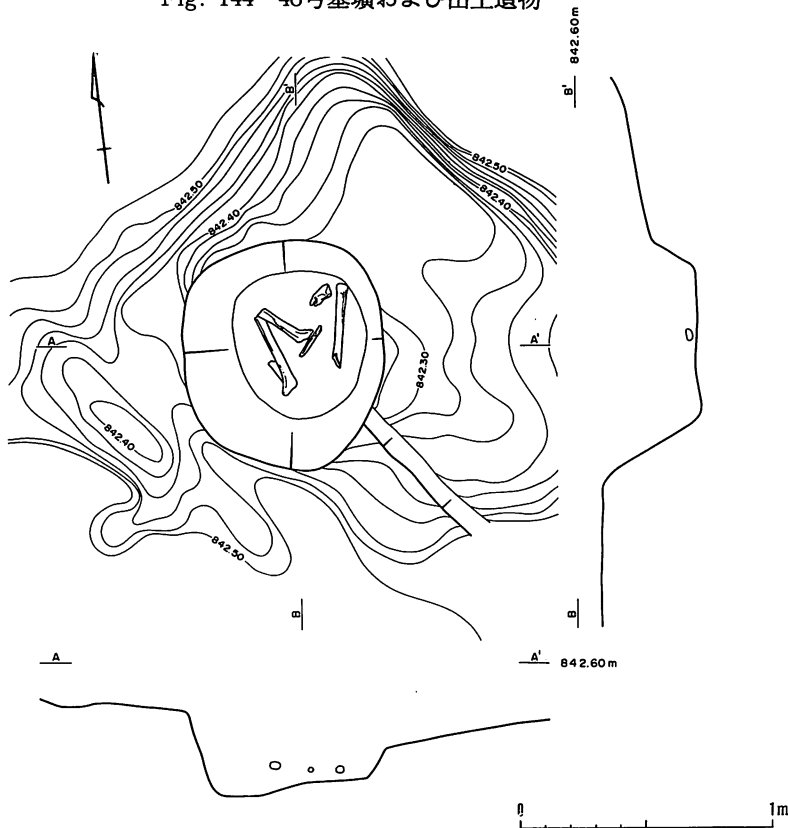


Fig. 145 49号墓墳

54号墓墳 (Fig.149)

2-5・2-6 Grid 内に位置する。53~57号墓墳と同様に移転された墓墳であり、その経緯等も同様である。人骨も残留したものについては分析を依頼した。

平面形態は、南北方向に主軸を有す長楕円形であり、その規模は長軸約1.10m、短軸約0.90mを測る。断面形態は皿形を呈し、確認面からの深さは約0.2mを測る程度である。ただし、形態・規模等は調査中の略測データであり、不正確なものである。埋葬形態は寝葬であり、頭位は北側にあり体は西を向く。腕部は手甲を前胸部にて組み、胸部に密着する状態である。脚部は屈折するが、交脚の状態ではない。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、銅銭（全て寛永通寶）4点、鉄銭1点、胡桃1点が出土している。ただし、鉄銭および胡桃は図示不能である。

55号墓墳 (Fig.149、P.1.16-43)

3-5 Grid 内南東端に位置する。53~57号墓墳と同様に移転された墓墳であり、その経緯等も同様である。人骨も残留したものについては分析を依頼した。

平面形態は径約0.6mの円形を呈する。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは約0.3mを測る。埋葬形態は不明であるが遺体は小さく纏まって検出されており、布状のものに包まれて埋葬されていた可能性もある。骨の遺存状況は良である。出土遺物として、銅銭（全て寛永通寶）2点、鉄銭2点が出土している。ただし、鉄銭については図示不能である。



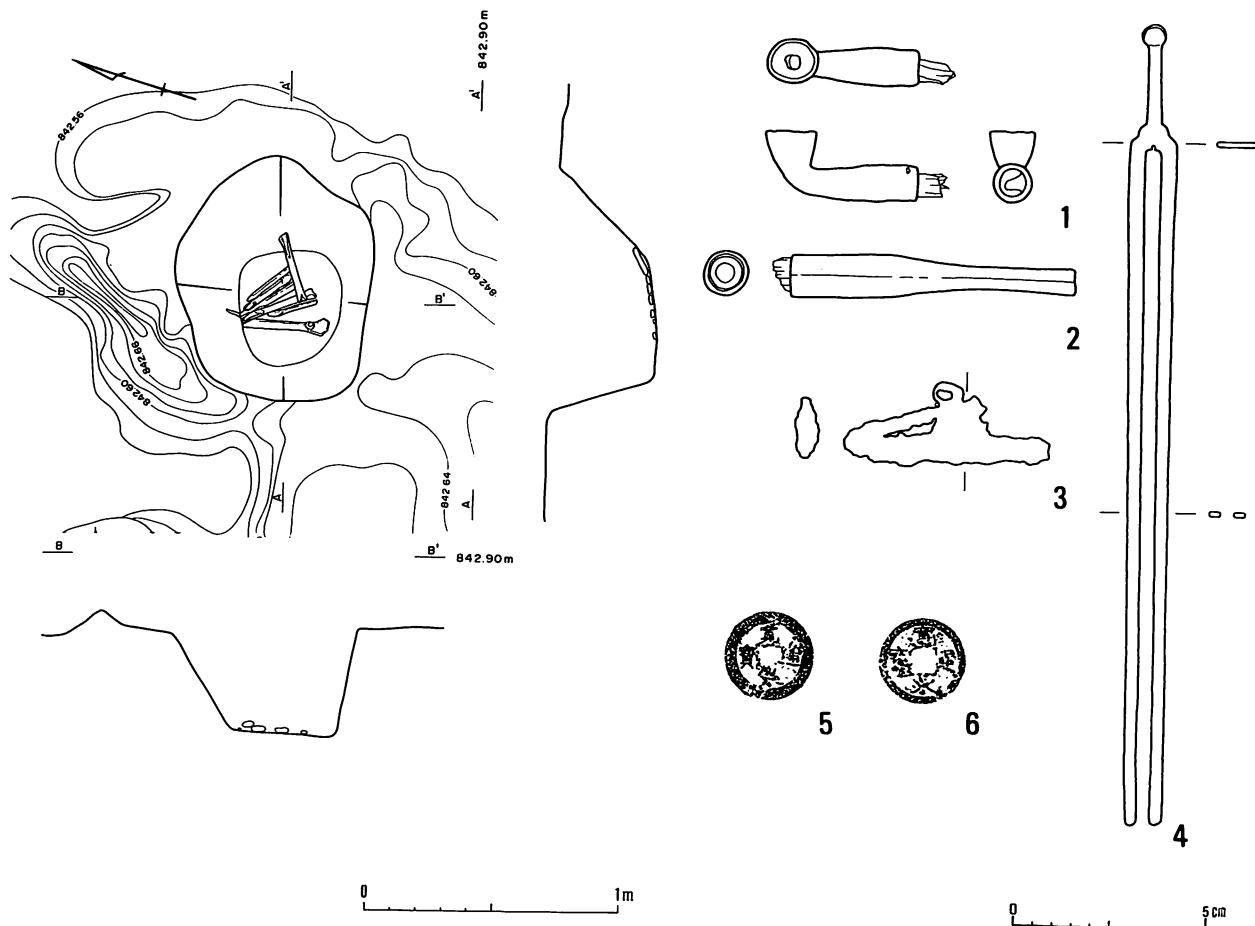


Fig. 146 50号墓墳および出土遺物



Fig. 147 51号墓墳

56号墓墳 (Fig.149、Pl.16-44)

3-5 Grid 内南端に位置する。53~57号墓墳と同様に移転された墓墳であり、その経緯等も同様である。人骨も残留したものについては分析を依頼した。

平面形態は径約0.7mの楕円形を呈する。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは約0.3mを測る。埋葬形態は不明であるが遺体は小さく纏まって検出されており、布状のものに包まれて埋葬されていた可能性もある。骨の遺存状況は良である。出土遺物として、煙管の雁首部1点と吸口部1点(木質のラウが僅かに残存する)、火打金1点、銅銭(全て寛永通寶)2点、鉄銭2点が出土している。ただし、銅銭・鉄銭については

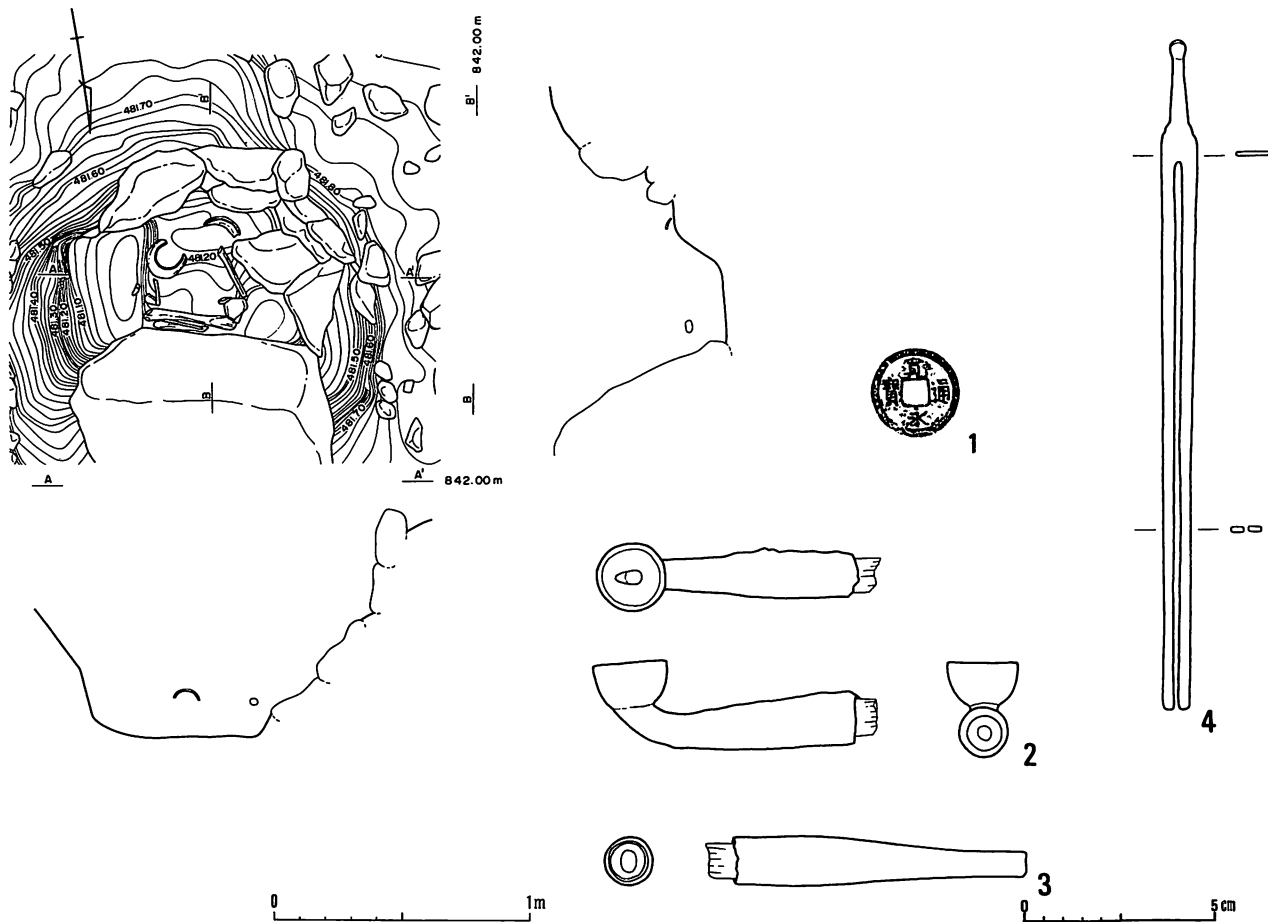


Fig. 148 52号墓壙および出土遺物

腐食が著しく付着しており、図示不能である。

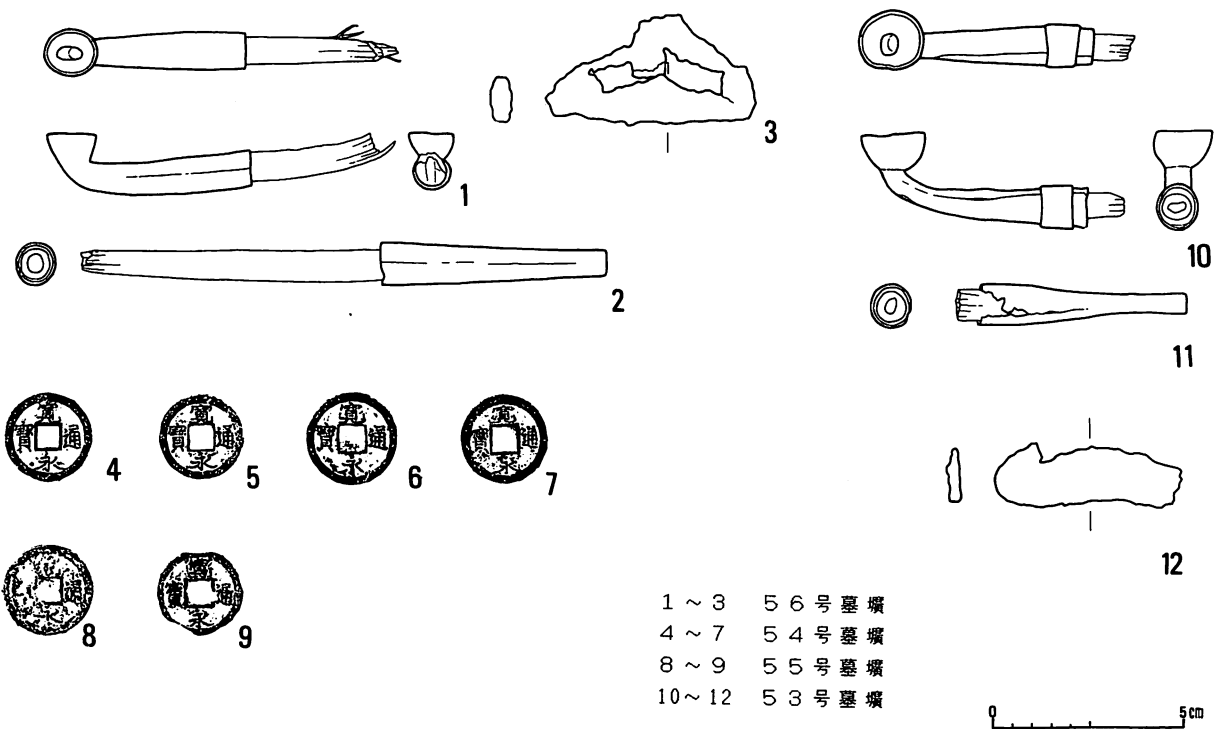
#### 57号墓壙 (Fig.150、P1.32-31)

5-13 Grid内中央西寄りに位置する。53~56号墓壙と同様に移転された墓壙であり、その経緯等も同様である。人骨も残留したものについては分析を依頼した。なお、47号墓壙を切る関係にある。

本墓壙は調査中から遺構・遺体ともに遺存状況が不良であることが判明していたものである。「墓壙」の形態では検出できず、小型の人骨がわずかに認められた程度である。ゆえに調査中の略測データ等もなく、平面形態や断面形態は不明であるとせざるを得ない。人骨は非常に小型であったことから、被葬者は小児ないしは幼児であった可能性が高い。埋葬形態についても不明であるが、人骨は小さく纏まるように出土していた。出土遺物としては、銅銭（全て寛永通寶）5点、鉄製の鑿（木質の柄が若干残る）1点、磁器の碗（猪口）1点が出土している。

#### 58号墓壙 (Fig.151、P1.16-47、32-32)

10-4 Grid内中央北寄りに位置する。平面形態は東西方向に主軸を有す楕円形を呈し、その規模は長軸0.98m、短軸0.88mを測る。断面形態は基本的には台形を呈するが、底部は平坦ではなく、凹凸が著しい。確認面からの深さは、0.72mを測る。ただし、本墓壙の周辺は自然礫が多く存在しており、形態の把握は困難であった。特に、平面形態は不整形に近い状態となっている。骨の遺存状況が不良であり、埋葬形態は不明である。残存する骨は非常に小型であった。出土遺物として、小型土鈴が2点、銅銭（全て寛永通寶）4点、磁器の猪口1点、髪刺状の銅製品3点、髪刺の装飾品あるいは耳飾（垂飾）と考えられる銅製装飾品が5点出土している。5点の形状は銅線を円形に細工したもの（1点）、銅片を木葉状に細工したもの（2点）、イヤリング状に細工したもの（2点）の3種類に分かれる。ただし、これらの銅製装飾品については腐食が著しく進行しているため、図示は不能であった。写真図版を参照されたい。また、磁器の猪口は覆土の最上層部からの出土であり、本墓壙に伴うか否か不明である。



1 ~ 3 56号墓墳  
 4 ~ 7 54号墓墳  
 8 ~ 9 55号墓墳  
 10 ~ 12 53号墓墳

Fig. 149 53~56号墓墳出土遺物

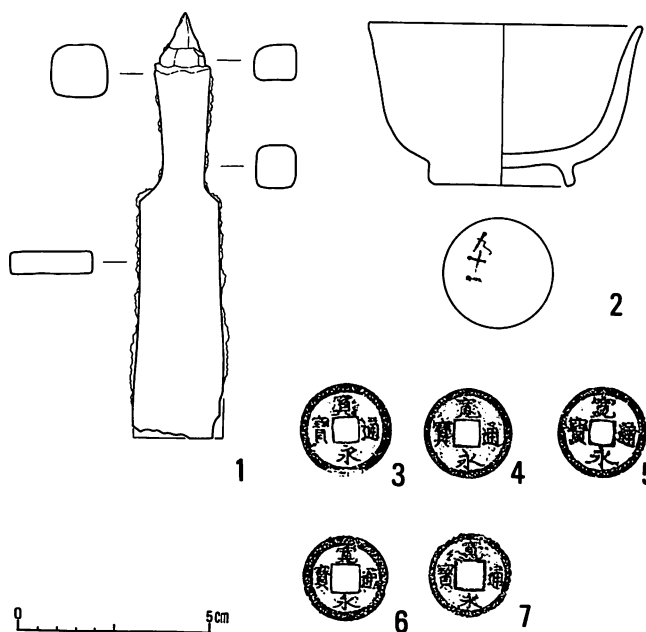


Fig. 150 57号墓墳出土遺物

はない。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、銅銭（全て寛永通寶）10点、鉄銭4点が出土している。ただし、鉄銭については腐食が著しく図示不能である。なお、本墓墳からは合計14点もの銭貨が出土しているがこの数値は本遺跡内では最大値である。

61号墓墳 (Fig.154、P.1.16-50、32-33)

10-6 Grid内南西側に位置する。平面形態は東西方向に主軸を有す楕円形を呈し、その規模は長軸1.25m、短軸1.19mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.15mを測る。埋葬形態は北西向きの座葬であり、腕部は手首部を揃え胸部に密着する状態である。脚部は屈折するが、交脚はしない状態である。骨の遺存状況は

59号墓墳 (Fig.152、P.1.16-48)

10-5 Grid内中央西寄りに位置する。「墓墳」の形態としては検出できず人骨のみを検出したものであるために平面形態および断面形態は不明である。骨の遺存状況が不良であり、埋葬形態は不明である。出土遺物として、髪刺1点、鉄銭1点が出土している。ただし、鉄銭は小片かつ腐食が著しく図示不能である。

60号墓墳 (Fig.153、P.1.16-49)

9-5・10-5 Grid内に位置する。平面形態は、径約1.0mの円形を呈する。断面形態は皿形を呈し、確認面からの深さは0.15mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.15mを測る。埋葬形態は北向きの座葬である。腕部は手首部を揃え胸部に密着する状態である。脚部は屈折し、足首部を重ねる程度に交脚する状態である。交脚は浅く胡坐をかくような状態ではない。

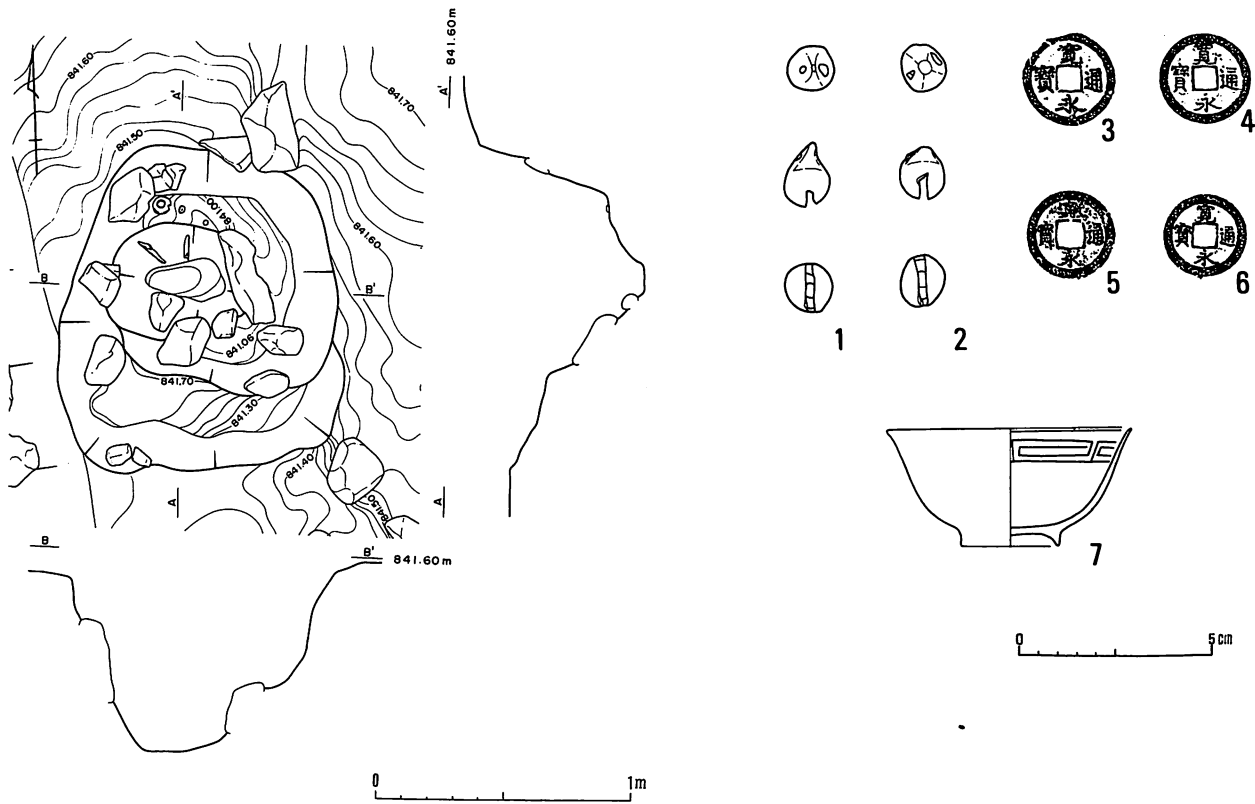


Fig. 151 58号墓壙および出土遺物

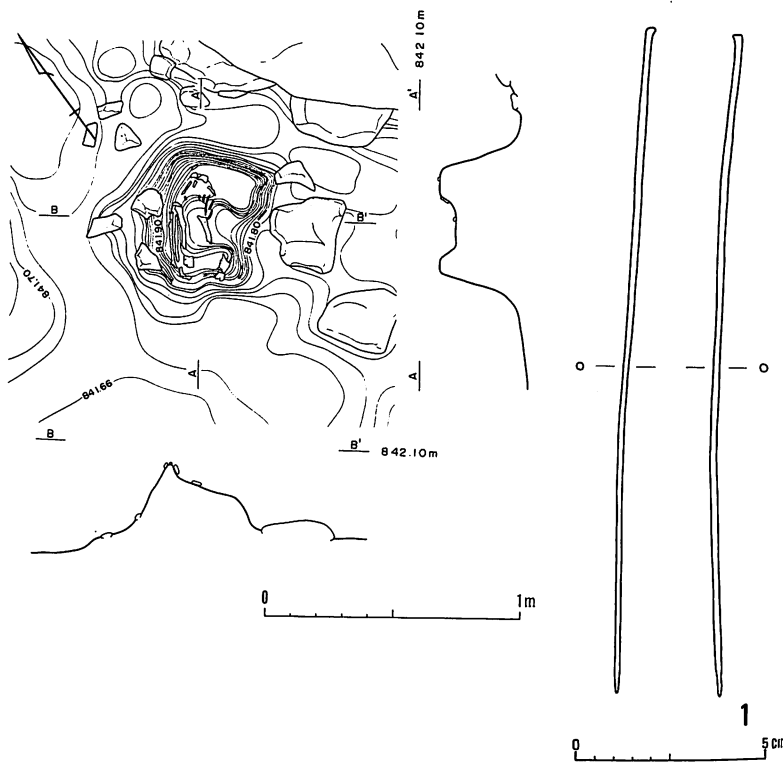


Fig. 152 59号墓壙および出土遺物

観察できた。また、脚部は交脚の状態ではなく、腕部は手首部を重ねる程度に組んでいる。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、銅銭（全て寛永通寶）3点、鉄銭3点が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。

良好である。出土遺物として、銅銭（全て寛永通寶）5点、火打金1点、煙管の雁首部1点と吸口部1点（木質のラウが残存し、煙管の全体像が窺い知れる）、胡桃3点、「刻み煙草」状の細かい植物遺存体が出土している。ただし、胡桃および「刻み煙草」状の植物遺存体は図示不能である。

#### 62号墓壙 (Fig.155、P.1.16-51)

10-5 Grid内南北端に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す長楕円形を呈し、その規模は長軸1.20m、短軸0.85mを測る。断面形態は皿形を呈し、確認面からの深さは0.16mを測る。ただし、本墓壙は非常に浅く、形態の把握は困難であった。埋葬形態は寝葬であり、頭位は北側にあり体は西向きである。脚部を屈折し、腕部で抱え込むような状態が





Fig. 155 62号墓壙および出土遺物

(石英) 1点、銅銭2点、鉄銭4点が出土している。ただし、鉄銭の腐食が著しく、さらに銅銭や火打石に付着しているため、図示不能である。銅銭・鉄銭の種別も不明である。

64号墓壙 (Fig.157、P.1.16-53)

9-5 Grid内東端に位置し、南側に接する65号墓壙を切る関係にある。平面形態は南北方向に主軸を有す楕円形を呈し、その規模は長軸約0.95m、短軸0.87mを測る。ただし、南側は遺構切り合いのため、計測値は不明確である。断面形態は台形に近い皿形を呈し、確認面からの深さは0.35mを測る。埋葬形態は南向きの座葬である。腕部は、

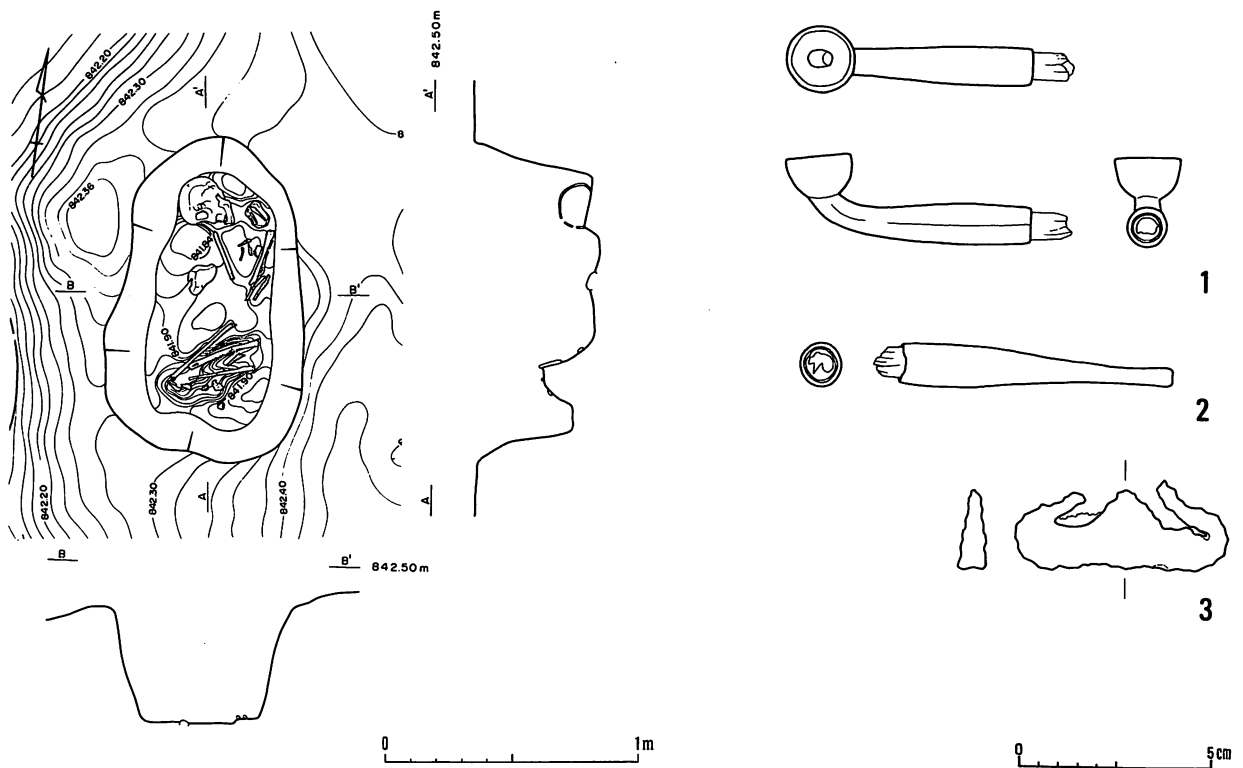


Fig. 156 63号墓壙および出土遺物

ほとんど屈折せず、脚部(膝部)に手甲部を置くような状態となる。脚部は屈折し、胡坐をかくような状態となる。本遺跡では座葬の場合、遺体は背を丸めるように埋葬される場合が多いが、本墓壙の遺体は背骨を墓壙壁面から底部に付けるような状態となっていることが特徴的である。骨の遺存状況は良である。出土遺物はない。

65号墓壙 (Fig.157)

9-5 Grid内東端に位置する。北側に接する64号墓壙に切られる関係にある。平面形態は東西方向に主軸を有す不整形に近い楕円形を呈し、その規模は長軸0.95m、短軸0.75mを測る。ただし、北側は遺構切り合いのため、計測値は不明確である。断面形態は台形に近い皿形を呈し、確認面からの深さは0.45mを測る。埋葬形態は北向

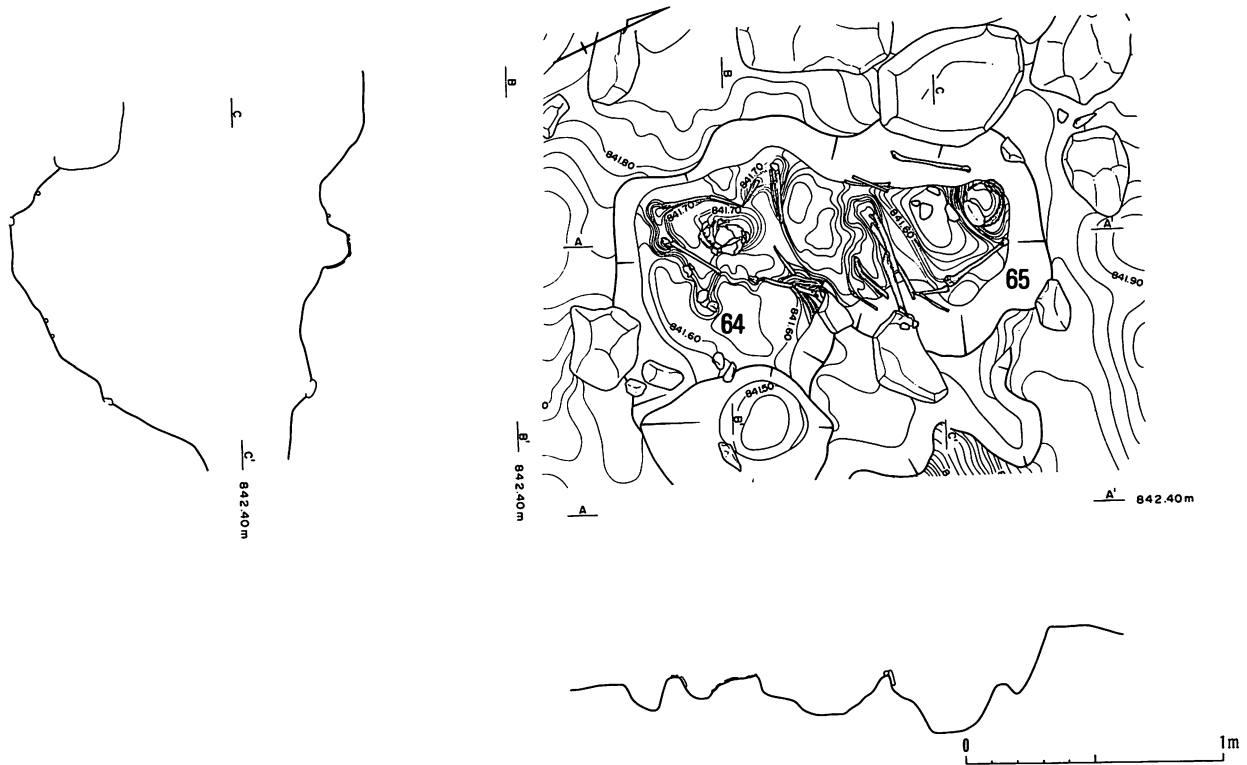


Fig. 157 64・65号墓墳

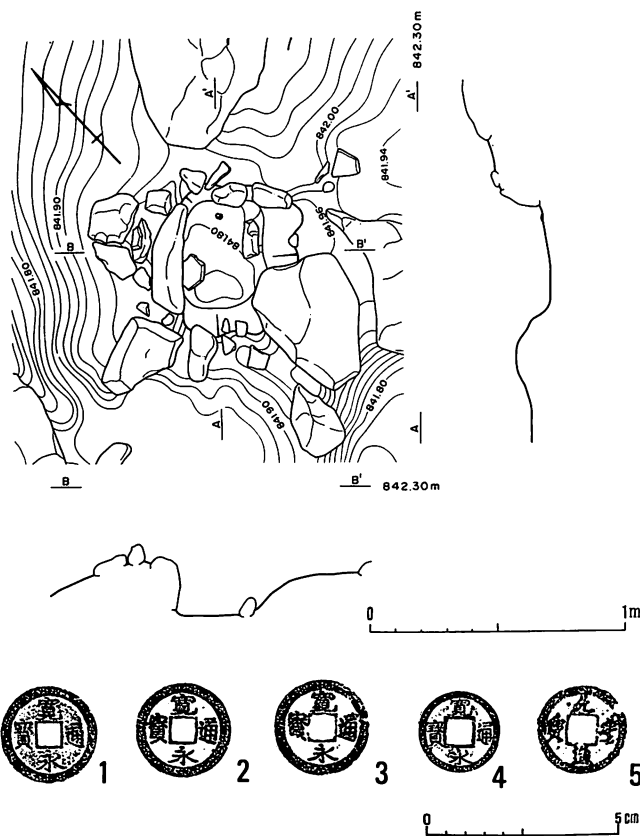


Fig. 158 66号墓墳および出土遺物

きの座葬である。腕部は前胸部に組む状態であるが、胸部に密着する状態か否かは不明である。脚部は屈折し、胡坐をかくような状態である。なお、切り合い関係のある64号墓墳の人骨とは向き合わせの状態となる。骨の遺存状況は良である。出土遺物として、鉄銭1点が出土している。ただし、図示は不能である。

#### 66号墓墳 (Fig.158)

8-6 Grid 内北端に位置する。平面形態は北東から南西方向に主軸を有す長方形を呈し、その規模は長軸0.45m、短軸0.30mを測る。断面形態は箱形を呈し、確認面からの深さは0.25mを測る。ただし、墓墳の周辺は自然礫が多く存在しており、形態の把握は困難であった。骨の遺存状況は脚部の骨がごく僅かに残存する程度と不良であり、埋葬形態は全く不明である。検出された人骨は非常に小型であり、被葬者は小児ないしは幼児であると考えられる。出土遺物として、銅銭5点(寛永通寶4点、北宋銭1点)が出土している。

#### 67号墓墳 (Fig.159、P.1.16-54、33-35)

8-5・6 Grid 内東端に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す長楕円形を呈し、その規模は長軸0.98m、

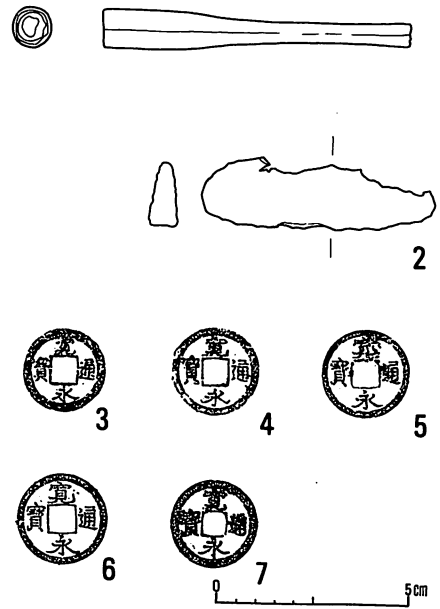
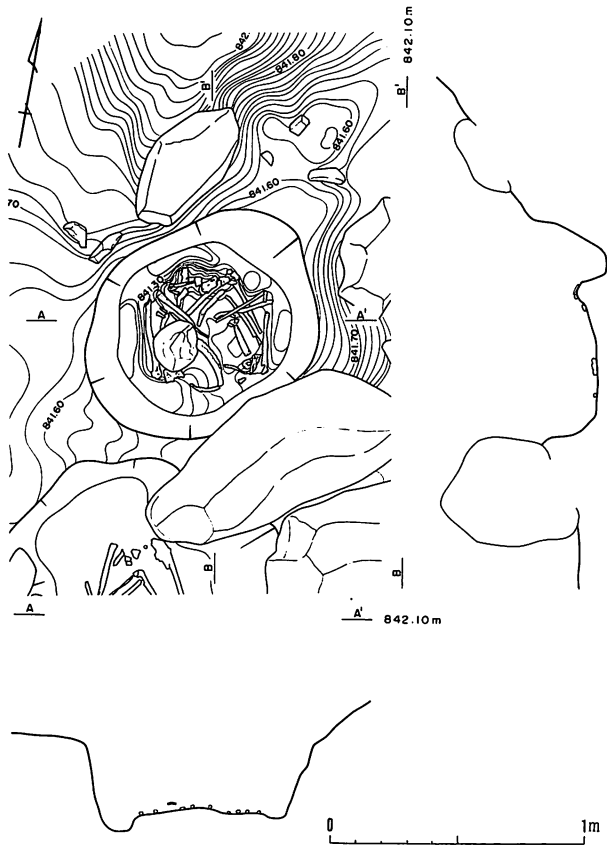


Fig. 159 67号墓墳および出土遺物

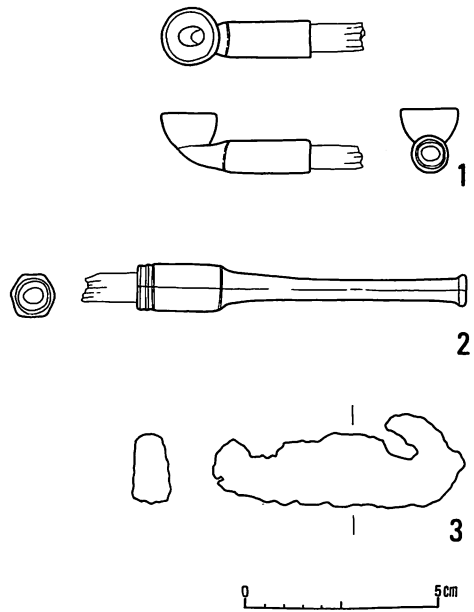
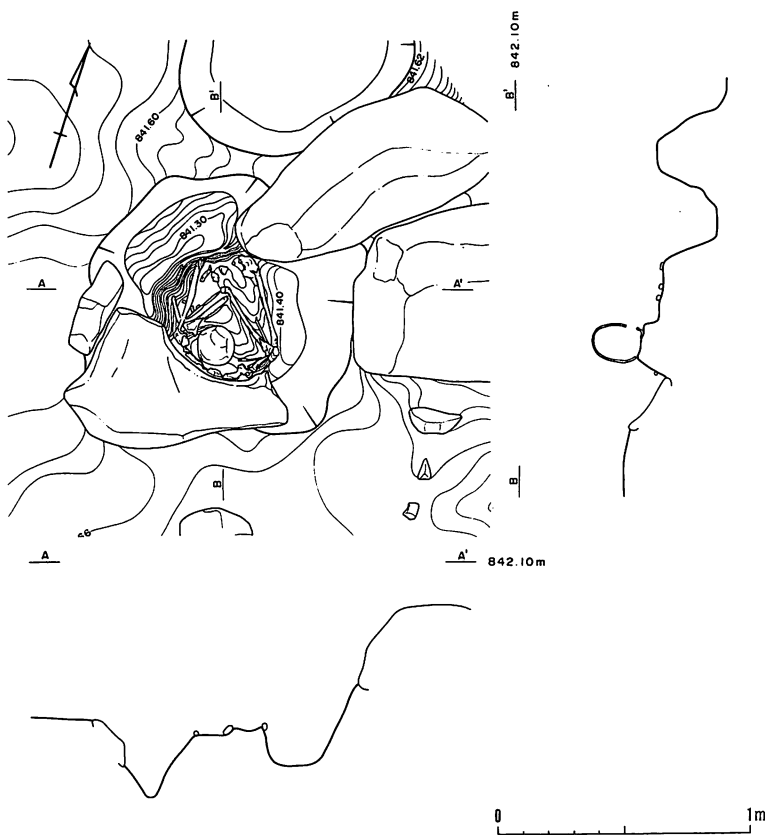


Fig. 160 68号墓墳および出土遺物

短軸0.78mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.67mを測る。埋葬形態は北向きの座葬である。腕部は前胸部で組み、胸部に密着している状態である。脚部は屈折し交脚する状態となっているが、脛部を重ね



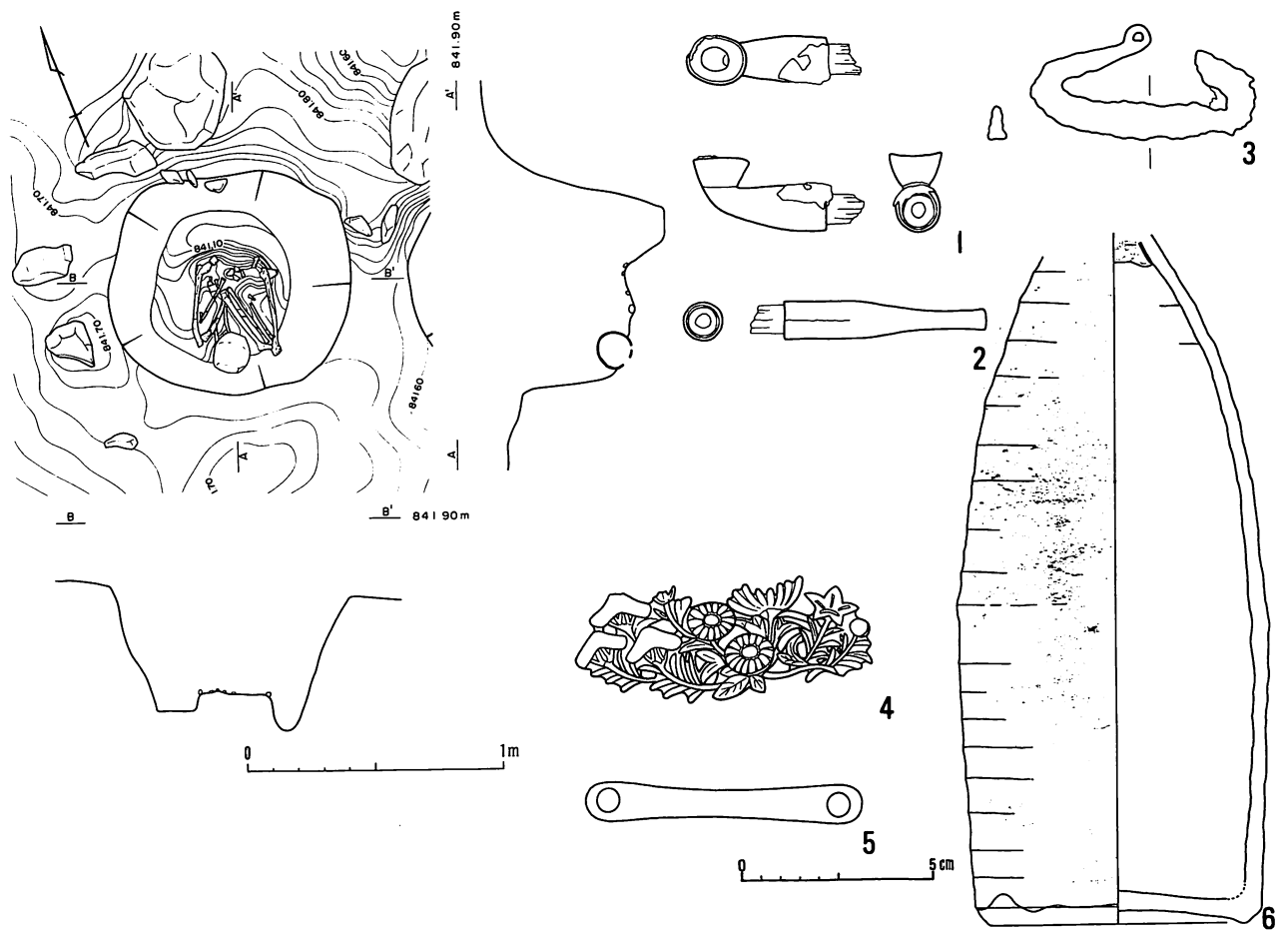


Fig. 161 69号墓壙および出土遺物

る程度である。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、煙管の吸口部1点、火打金1点、銅銭（全て寛永通寶）5点、鉄銭1点が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。なお、銭貨は布に包まれた状態で出土した。

**68号墓壙** (Fig.160、P1.17-55、33-36)

8-5 Grid内東端に位置する。平面形態は径約1.10mの円形を呈する。ただし、墓壙の北側と南側には大きな自然礫が存在し、墓壙の平面形態は把握は困難であった。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.55mを測る。埋葬形態は北向きの座葬である。腕部は前胸部に組み、胸部に密着する状態である。脚部は屈折するが、交脚の状態ではない。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、煙管の雁首部1点と吸口部1点（木質のラウが僅かに残存する）、火打金1点が出土している。

**69号墓壙** (Fig.161、P1.17-56・57、33-37・38・39)

8-5 Grid内北東端に位置する。平面形態は東西方向に主軸を有す楕円形を呈し、その規模は長軸0.95m、短軸0.86mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.72mを測る。埋葬形態は北向きの座葬である。腕部は前胸部に組み、検出途中で骨の原位置を損なってしまい不明点が多い。脚部は屈折するが、交脚の状態ではない。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、煙管の雁首部1点と吸口部1点（木質のラウが僅かに残存する）、火打金1点、銅製の飾金具（草花の文様）1点とそれに伴う銅製の留金具1点、鉄銭6点、陶器の徳利1点が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。なお、煙管・飾金具・留金具については布に包まった状態で出土し、徳利については墓壙底部に正位で立った状態で出土している。

**70号墓壙** (Fig.162、P1.17-58、33-40)

8-5 Grid内中央東寄りに位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す楕円形を呈し、その規模は長軸1.15m、

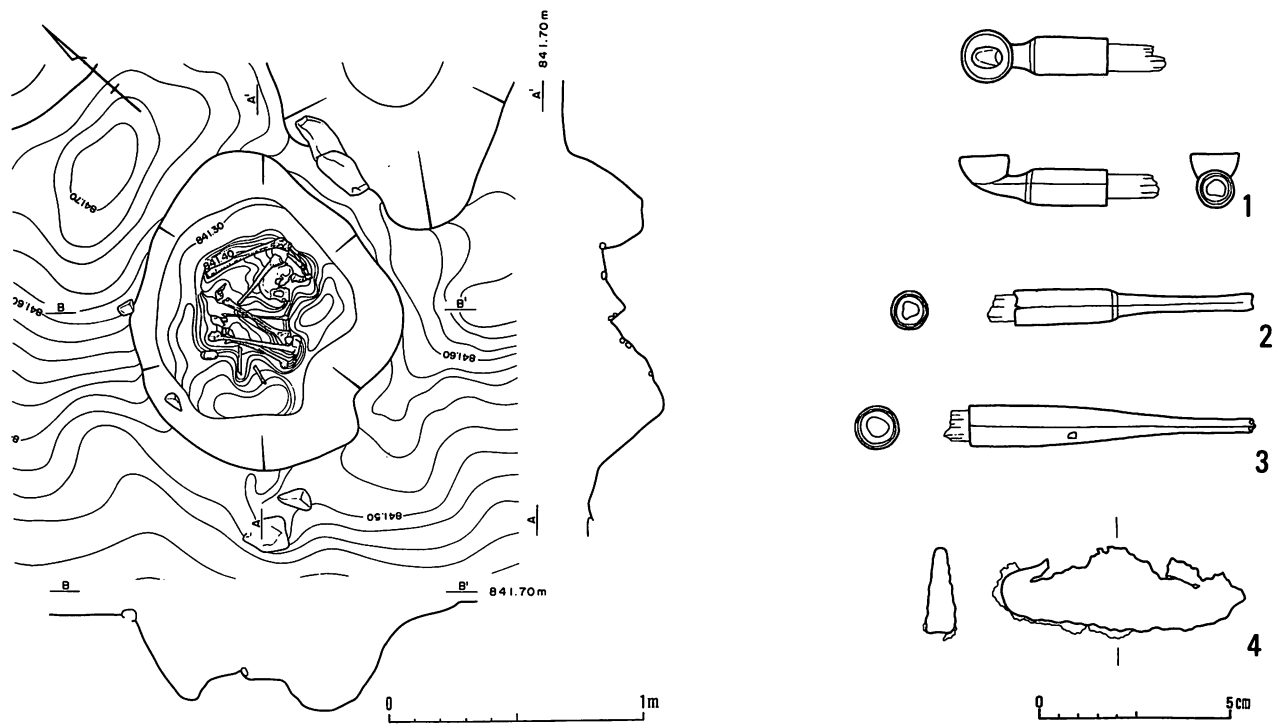


Fig. 162 70号墓壙および出土遺物

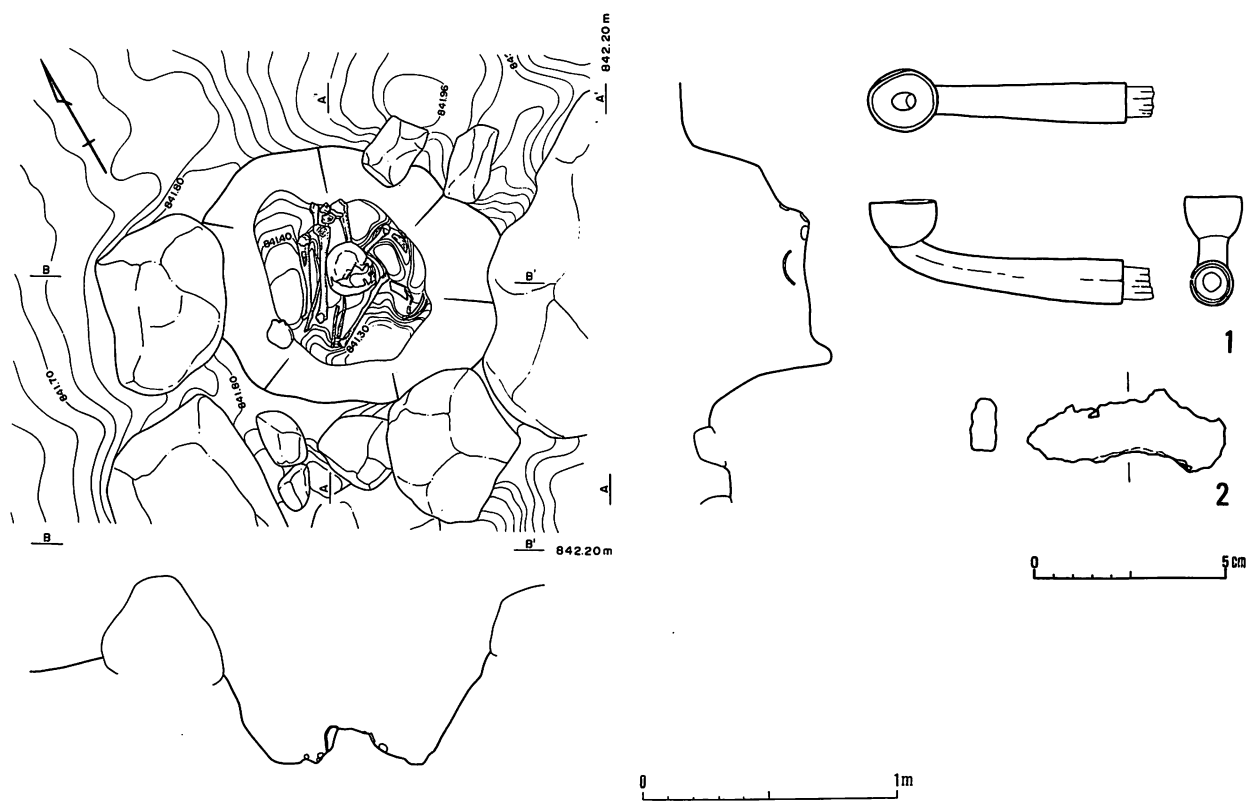


Fig. 163 71号墓壙および出土遺物

短軸1.0mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.45mを測る。埋葬形態は北向きの座葬である。腕部は前胸部に組み、胸部に密着している状態である。脚部は屈折するが、交脚の状態ではない。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、煙管の雁首部1点と吸口部2点（木質のラウが僅かに残存する）、火打金1点、用途不明の鉄製品（鉄の小片状）数点が出土している。ただし、用途不明の鉄製品は腐食し塊状に付着しているため、図示不能である。

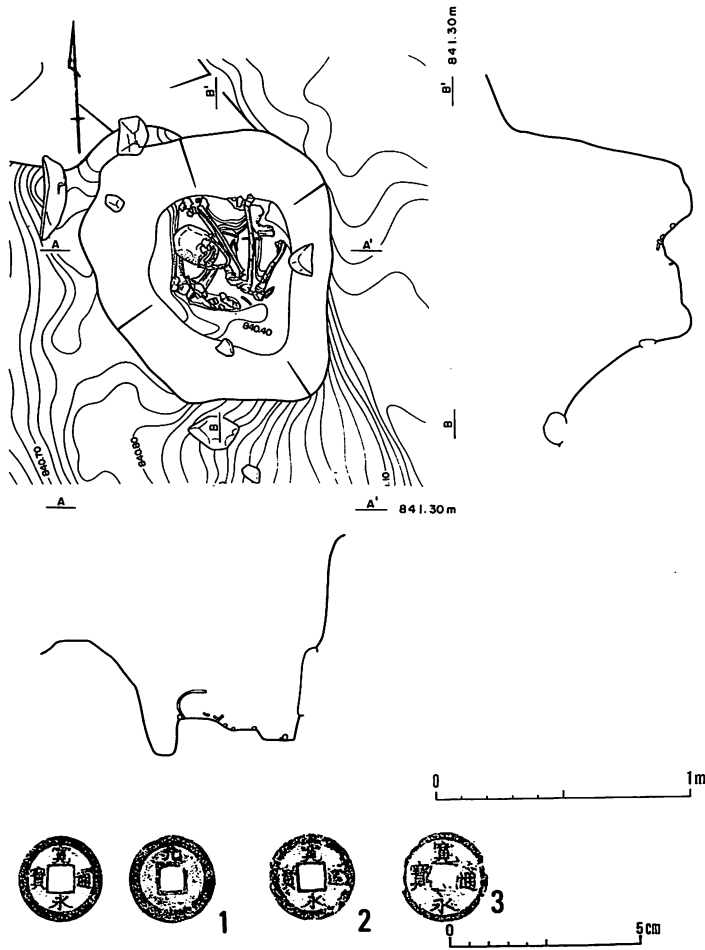


Fig. 164 72号墓壙および出土遺物

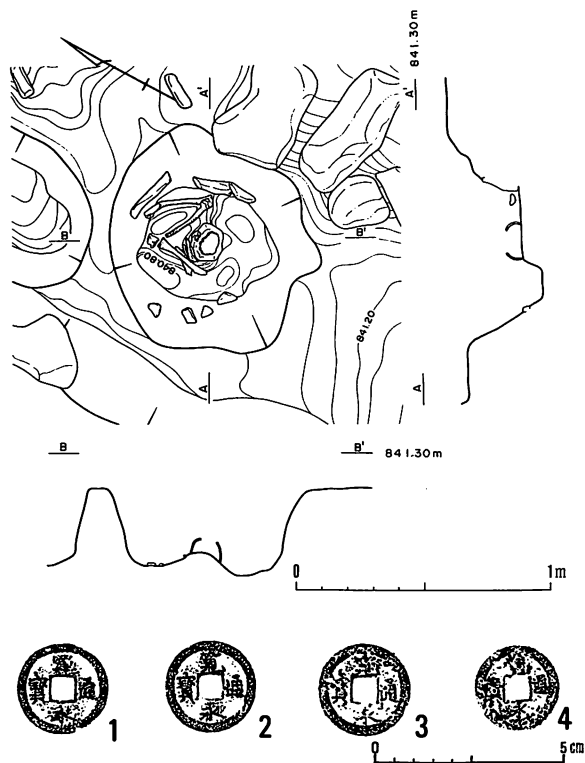


Fig. 165 73号墓壙および出土遺物

### 71号墓壙 (Fi.163、P.1.17-59、33-41)

8-6 Grid内中央南寄りに位置する。平面形態東西方向に主軸を有す楕円形を呈し、その規模は長軸1.15m、短軸0.98mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.70mを測る。埋葬形態は北西向きの座葬である。腕部は前胸部に組み、胸部に密着している状態である。脚部は屈折し交脚の状態となり、胡坐をかくような状態となる。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、煙管の雁首部が1点(木質のラウが僅かに残存する)、火打金1点が出土している。

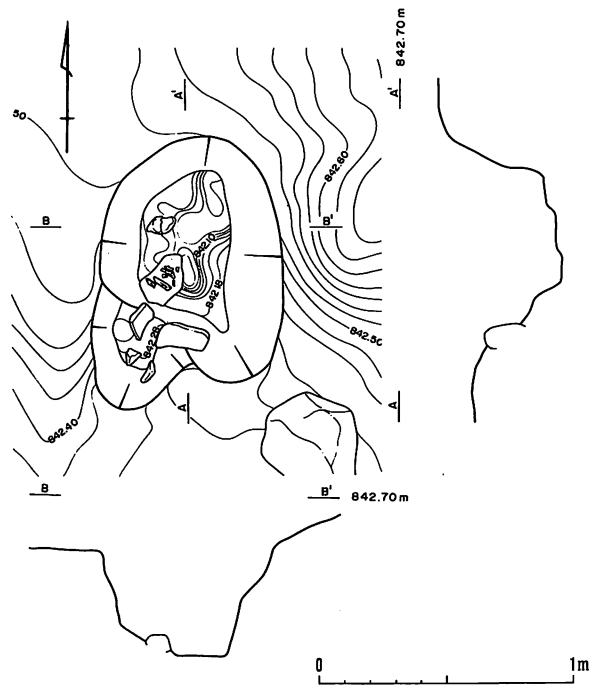
### 72号墓壙 (Fig.164、P.1.17-60)

8-4 Grid内東端に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す不整円形を呈し、その規模は長軸1.0m、短軸0.90mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.68mを測る。埋葬形態は西向きの座葬である。腕部は前胸部に深く(交差するように)組み、胸部に密着している状態である。脚部は屈折し交脚の状態となり、胡坐をかくような状態となる。骨の遺存状況は

良好である。出土遺物として、銅銭(全て寛永通寶)3点、鉄銭2点が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。

### 73号墓壙 (Fig.165、P.1.17-61)

9-4・10-4 Grid内に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す不整円形を呈し、その規模は長軸0.78m、短軸0.75mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.35mを測る。埋葬形態は北西向きの座葬であることが推測される。骨の遺存状況が不良のため、座棺であることが窺い知れる程度であり、小さく纏まる骨の出土状況からは布状のものに包まれて埋葬された可能性もあろう。骨は非常に小型であり、被葬者は小児あるいは幼児である可能性が高い。出土遺物として、銅銭(全て寛永通寶)4点、鉄銭2点が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。



74号墓墳 (Fig.166、P.1.17-62)

9-7 Grid内西端に位置する。平面形態は東西方向に主軸を有す楕円形に近い不整形円形を呈し、その規模は長軸0.90m、短軸0.75mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.49mを測る。骨の遺存状況が頭骨と若干の四肢骨が残存する程度と不良のため、埋葬形態は不明である。小さく纏まる骨の出土状況からは布状のものに包まれて埋葬された可能性もある。骨は非常に小型であり、被葬者は小児あるいは幼児である可能性が高い。出土遺物はない。

75号墓墳 (Fig.167、P.1.17-63、33-42・43)

9-8 Grid内西端に位置する。平面形態は東西方向に主軸を有す楕円形を呈し、その規模は長軸1.43m、短軸1.35mを測る。断面形態は箱形に近い台形を呈し、確認面からの深さは0.90mを測る。

Fig. 166 74号墓墳および出土遺物

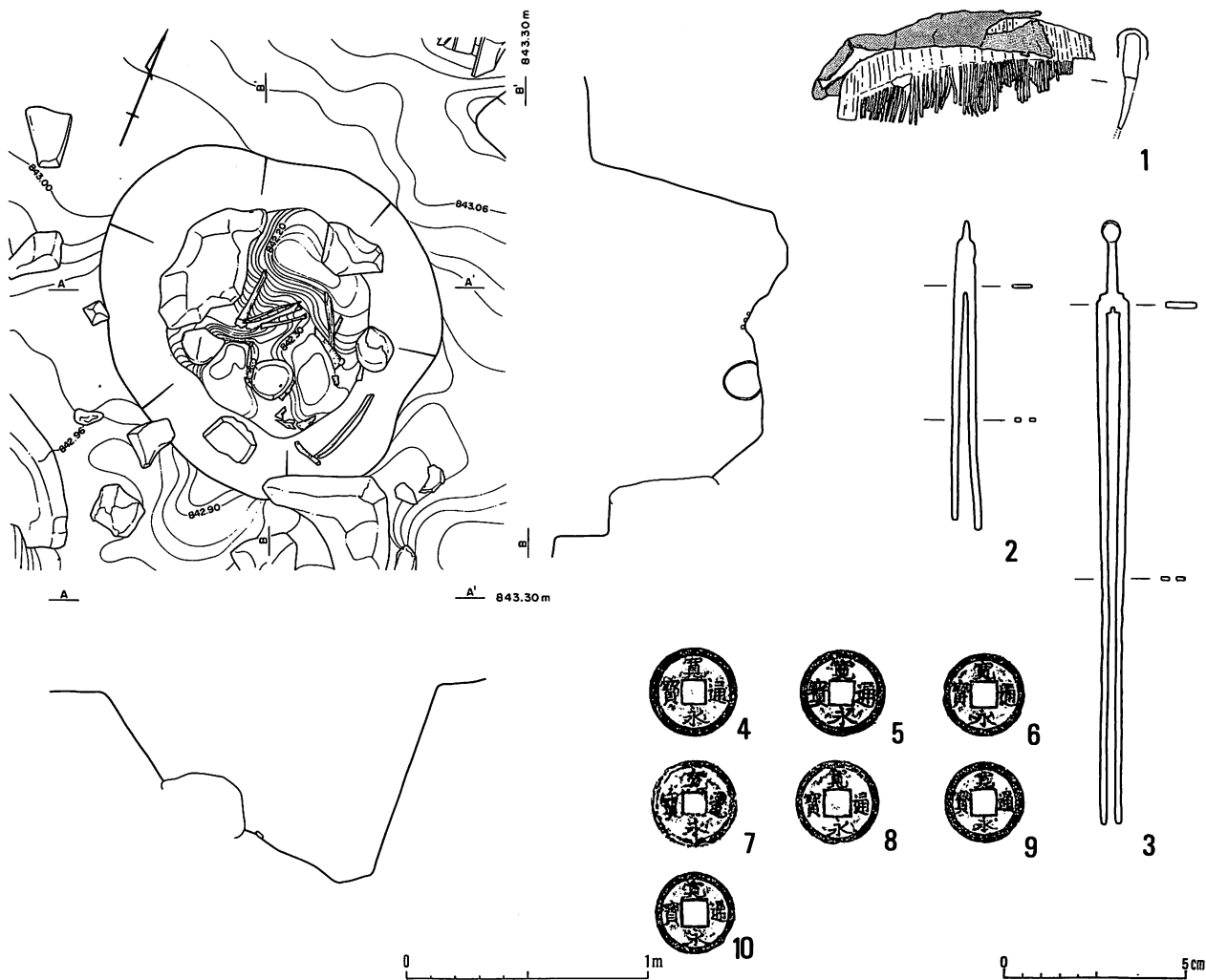


Fig. 167 75号墓墳および出土遺物

本墓墳からは2体分の人骨が検出され、極めて特異な埋葬例である。調査中は「2体合葬」・「追葬」・「遺構の切り合い」などの本墓墳をめぐる様々な見解が提示され、遺構性格の把握が困難な状況であった。しかし、



Fig. 168 76号墓墳



Fig. 169 77号墓墳

検出を進めるうちに、墓墳は完全に1基であることや2体のうちの1体は墓墳の端部に寄せ片付けられる状態になっていることが判明した。そのため、主体となる人骨を〔75-A〕、寄せ片付けられた人骨を〔75-B〕として報告する。

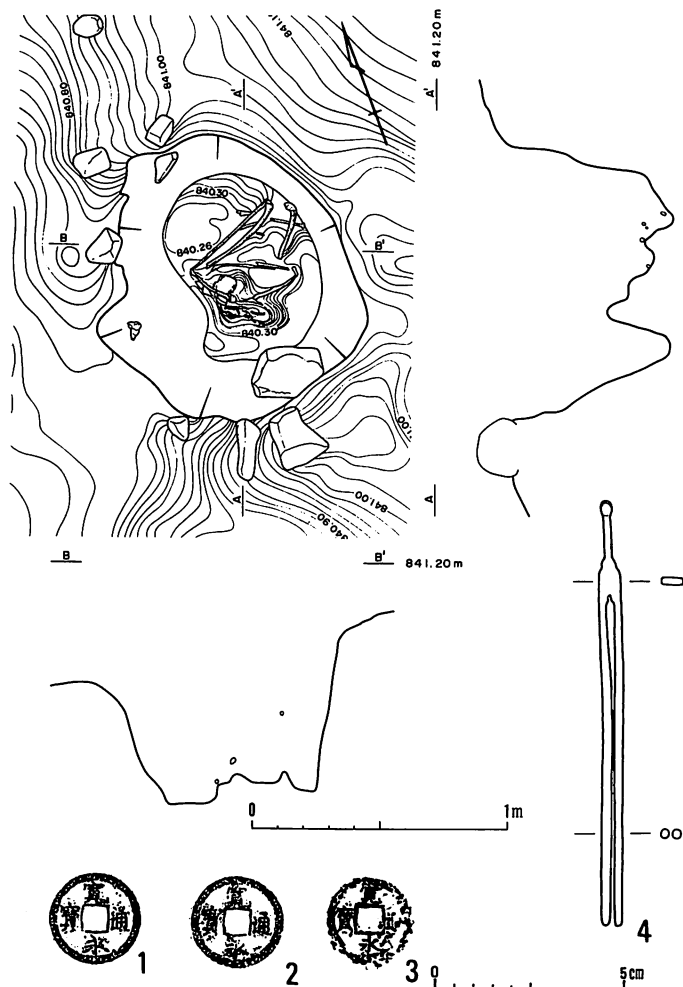
〔75-A〕は〔75-B〕を片付けたうえで埋葬された人骨である。用語的には相応しくないかも知れないが、一種の「追葬」と考えることも可能である。ただし、両被葬者の関係（血縁関係など）が明確化できないため、単なる偶発的事象の可能性もある。〔75-A〕の埋葬形態は、北向きの座葬である。腕部は腹部前で手甲部を重ねるような状態である。脚部は屈折するが、交脚の状態ではない。骨の遺存状況は良好である。

〔75-B〕は墓墳端部に寄せ片付けられた人骨であり、埋葬形態は不明である。ただし、墓墳の形態から見れば、座棺であった可能性が高い。骨の遺存状況は頭骨と若干の四肢骨が残存する程度と少なく、不良である。

本墓墳の出土遺物としては、木製の横櫛（素材はツゲ、基部にはサクラ皮が巻かれる）、簪2点、銅銭（全て寛永通寶）7点、胡桃6点、栗3点が出土している。ただし、胡桃・栗は図示不能である。また、遺物のそれぞれが〔75-A〕・〔75-B〕のどちらの副葬品かは不明である。しかし、少なくとも横櫛（Fig.167-1）と簪1点（Fig.167-3）と銅銭については〔75-A〕の人骨上に置かれていたことから、その副葬品と限定できる。

**76号墓墳（Fig. 168、P1.17-64）**

8-7・9-7 Grid内に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す楕円形に近い不整形円形を呈し、その規模は長軸1.52m、短軸1.10mを測る。断面形態は擂鉢形に近い台形を呈し、確認面からの深さは0.62mを測る。埋葬形態は南西向き座葬である。骨の遺存状況が不良のため、座葬であるこ



とが窺い知れる程度である。ただし、脚部については屈折するが、交脚の状態ではないことのみ確認できる。出土遺物はない。

77号墓墳 (Fig.169、P1.17-65)

9-7 Grid内東端に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す不整円形を呈し、その規模は長軸1.25m、短軸1.12mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.52mを測る。埋葬形態は寝葬である。頭位は北側であり体は上向き(やや西向き)となるが、顔面は西側を向く。腕部は手首部を揃えて前胸部に組み、胸部に密着している状態である。脚部は屈折するが、膝部を揃えて立てやや西側に倒す状態である。骨の遺存状況は良好である。出土遺物はない。

78号墓墳 (Fig.170、P1.17-66)

8-5 Point直下に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す長楕円形に近い不整円形を呈し、その規模は長軸1.08m、短軸0.98mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.65mを測る。ただし、墓墳の西側壁は崩落が著しく、平面形態には不明点が多い。

Fig. 170 78号墓墳および出土遺物

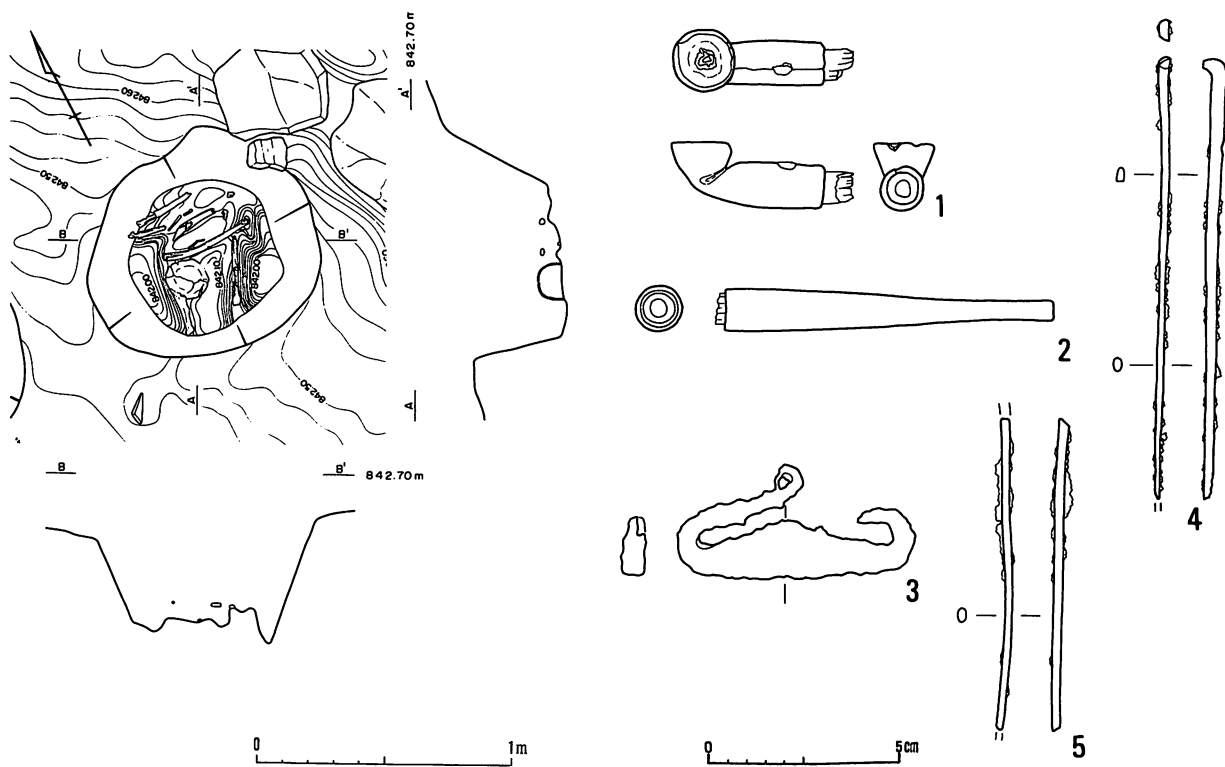


Fig. 171 79号墓墳および出土遺物

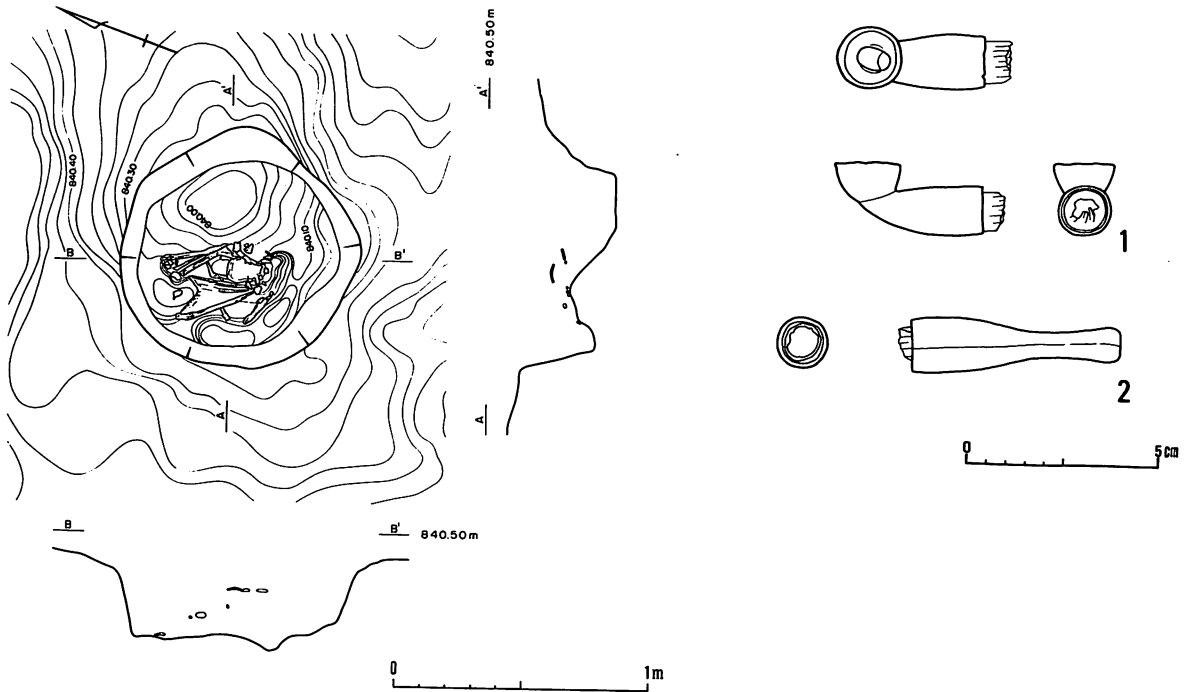


Fig. 172 80号墓壙および出土遺物

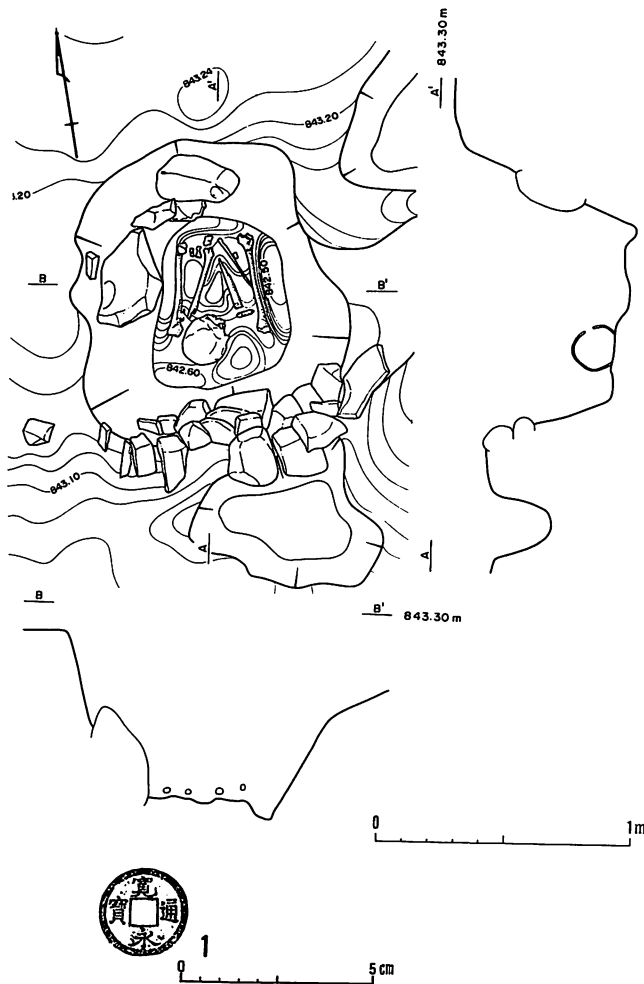


Fig. 173 81号墓壙および出土遺物

埋葬形態は北東向きの座葬である。腕部は手首部を揃えて前腰部に置く状態である。脚部は屈折するが、交脚の状態ではない。膝部を揃えてやや東側に倒す状態である。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、銅銭（全て寛永通寶）3点、鉄銭3点、簪1点が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。

79号墓壙 (Fig.171、P.1.17-67、33-45)

7-7 Grid内中央北寄りに位置する。平面形態は東西方向に主軸を有す楕円形に近い不整円形を呈し、その規模は長軸0.90m、短軸0.80mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.54mを測る。埋葬形態は北東向きの座葬である。腕部は前胸部に組む状態である。脚部は屈折するが、交脚の状態ではない。膝部を揃えて立てやや西側に倒す状態である。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、煙管の雁首部1点と吸口部1点（木質のラウが僅かに残存する）、火打金1点、簪1点（あるいは2点）、鉄銭1点が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。

80号墓壙 (Fig.172、P.1.17-68、34-46)

7-4・8-4 Grid内に位置する。平面形態は、径約0.85mの円形を呈する。断面形態は

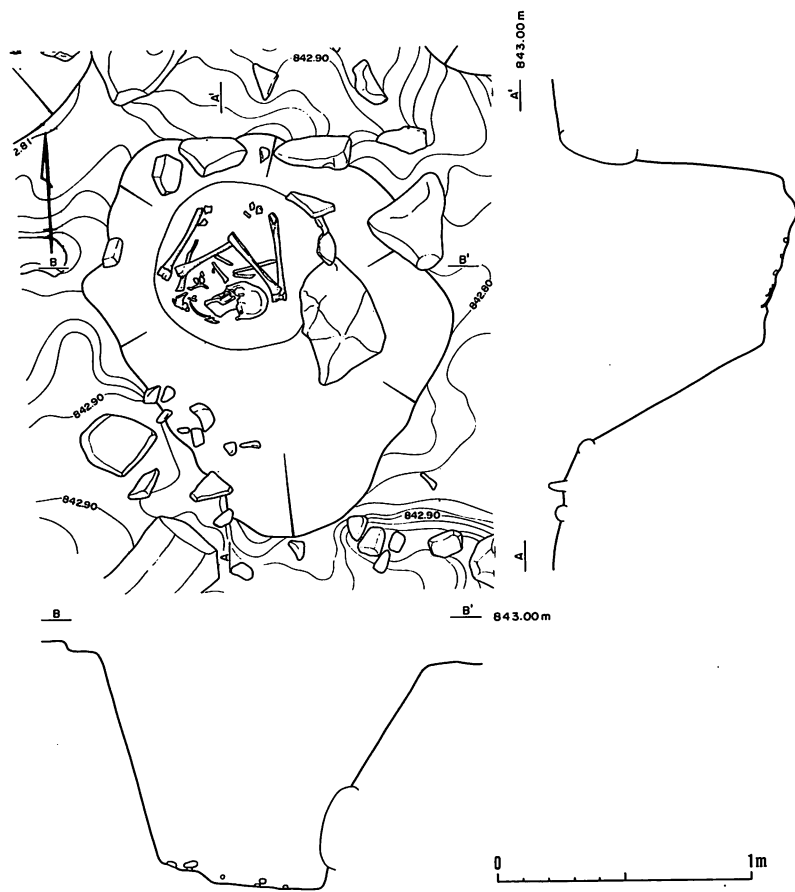
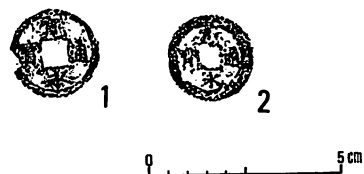


Fig. 174 82号墓壙および出土遺物



台形を呈し、確認面からの深さは0.40mを測る。埋葬形態は北向きの座葬である。腕部は前胸部に組み、胸部に密着する状態である。脚部は屈折し、深く腰部を折り膝部は肩部に接している。人骨は非常に小さく纏められている。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、煙管の雁首部1点と吸口部1点（木質のラウが僅かに残存する）が出土している。

81号墓壙 (Fig.173、

P1.17-69、34-47)

9-8 Grid内北西寄りに位置する。平面形態は、南北方向に主軸を有し南側を底辺とする台形を呈する。その規模は長軸1.20m、短

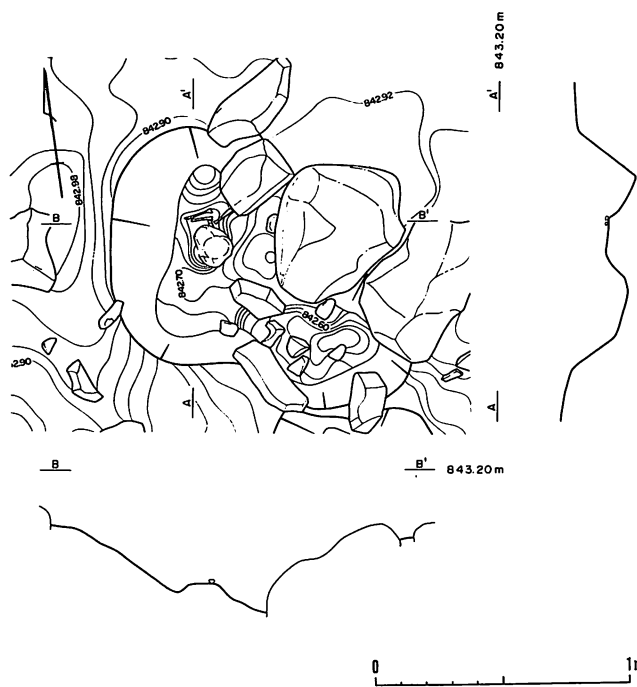
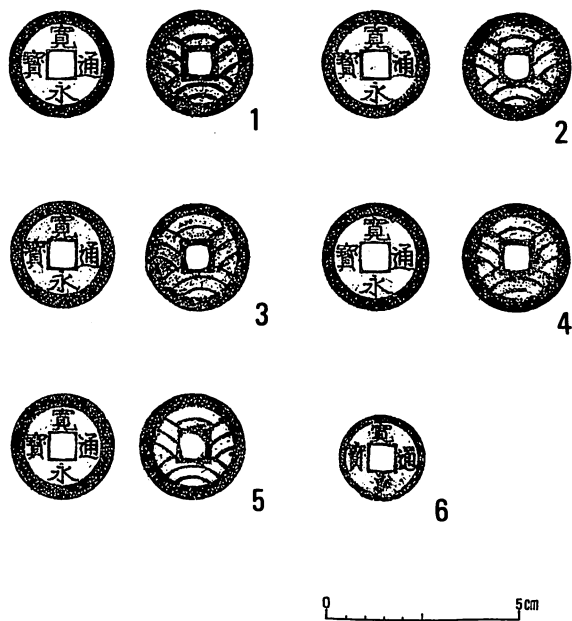


Fig. 175 83号墓壙および出土遺物



軸1.0mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.70mを測る。本墓壙の南側壁面の内側には石積が構築されている。石積は15cm~30cm大の自然礫を用いて構築され、その規模は高さ0.5m、幅0.9mを測る。石積の目的については不明であるが、「壁面の崩落を防ぐため」・「棺桶を固定するため」などの目的が考えられる。このような墓壙内の石積は他の墓壙には見られず、本墓壙のみの特徴である。埋葬形態は北向きの座葬である。



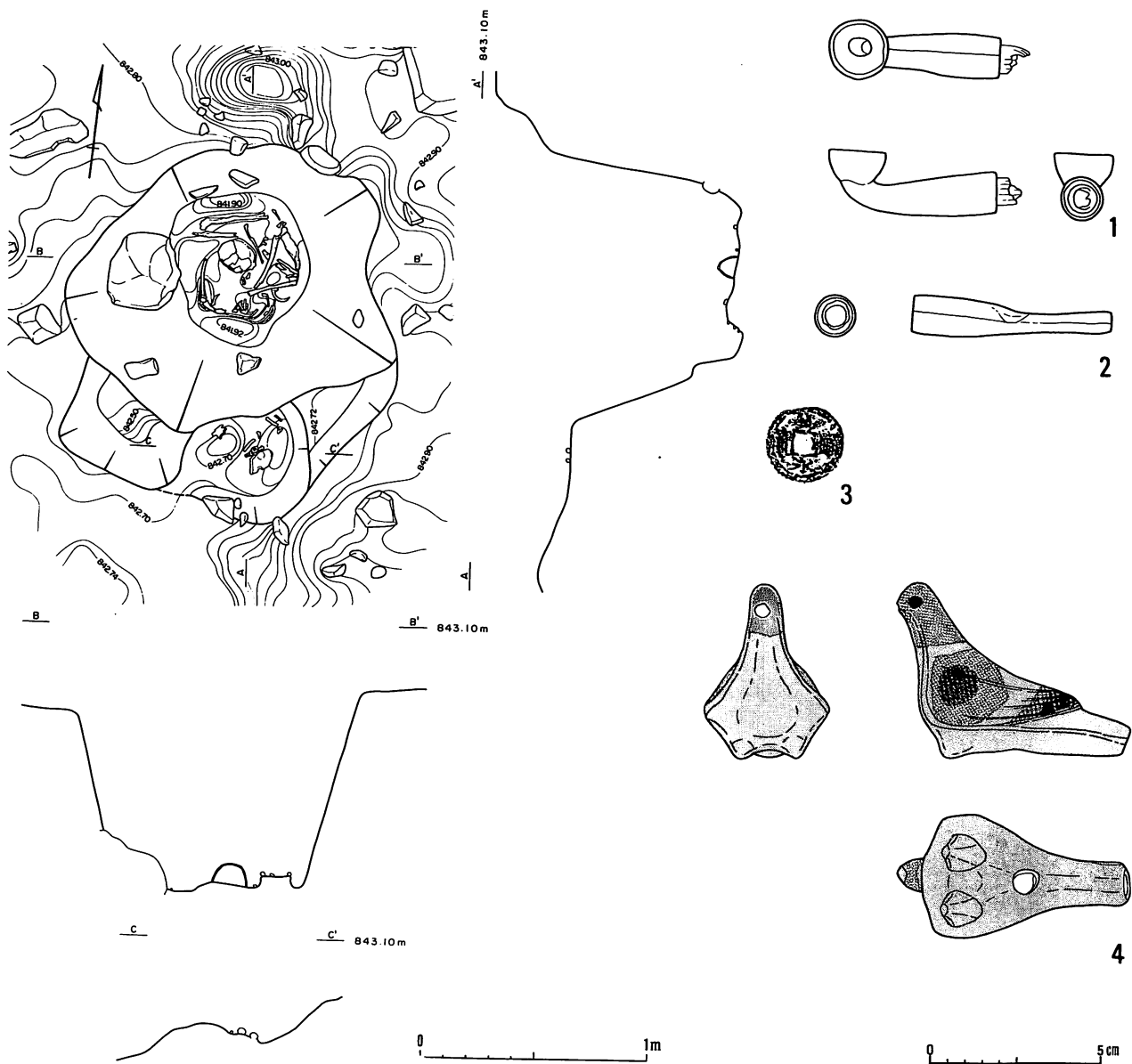


Fig. 176 84・85号墓壙および出土遺物

腕部は前胸部に手首を揃えるように組み、胸部に密着する状態である。脚部は屈折し、深く腰部を屈折することにより膝部は肩部に接する程である。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、銅銭（寛永通寶）1点、胡桃1点が出土している。

#### 82号墓壙（Fig.174、Pl.17-70）

8-8 Grid内西寄りに位置する。平面形態は現況では南北方向に主軸を有す不整円形を呈し、その規模は長軸1.30m、短軸1.20mを測る。ただし、墓壙の南側壁は崩落が著しく、元は径約1.20m程度の円形を呈していたものと考えられる。断面形態は箱形に近い台形を呈し、確認面からの深さは0.96mを測る。埋葬形態は北向きの座葬である。腕部は前腹部に手甲部を重ね組む状態である。脚部は屈折し、深く腰部を屈折することにより膝部は肩部に接する程である。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、銅銭（全て寛永通寶）2点、鉄銭2点が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。

#### 83号墓壙（Fig.175）

8-8 Grid内中央北端に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す不整楕円形を呈し、その規模は長軸0.96m、短軸0.63mを測る。断面形態は楕錐形を呈し、確認面からの深さは0.40mを測る。ただし、墓壙の東側には大き

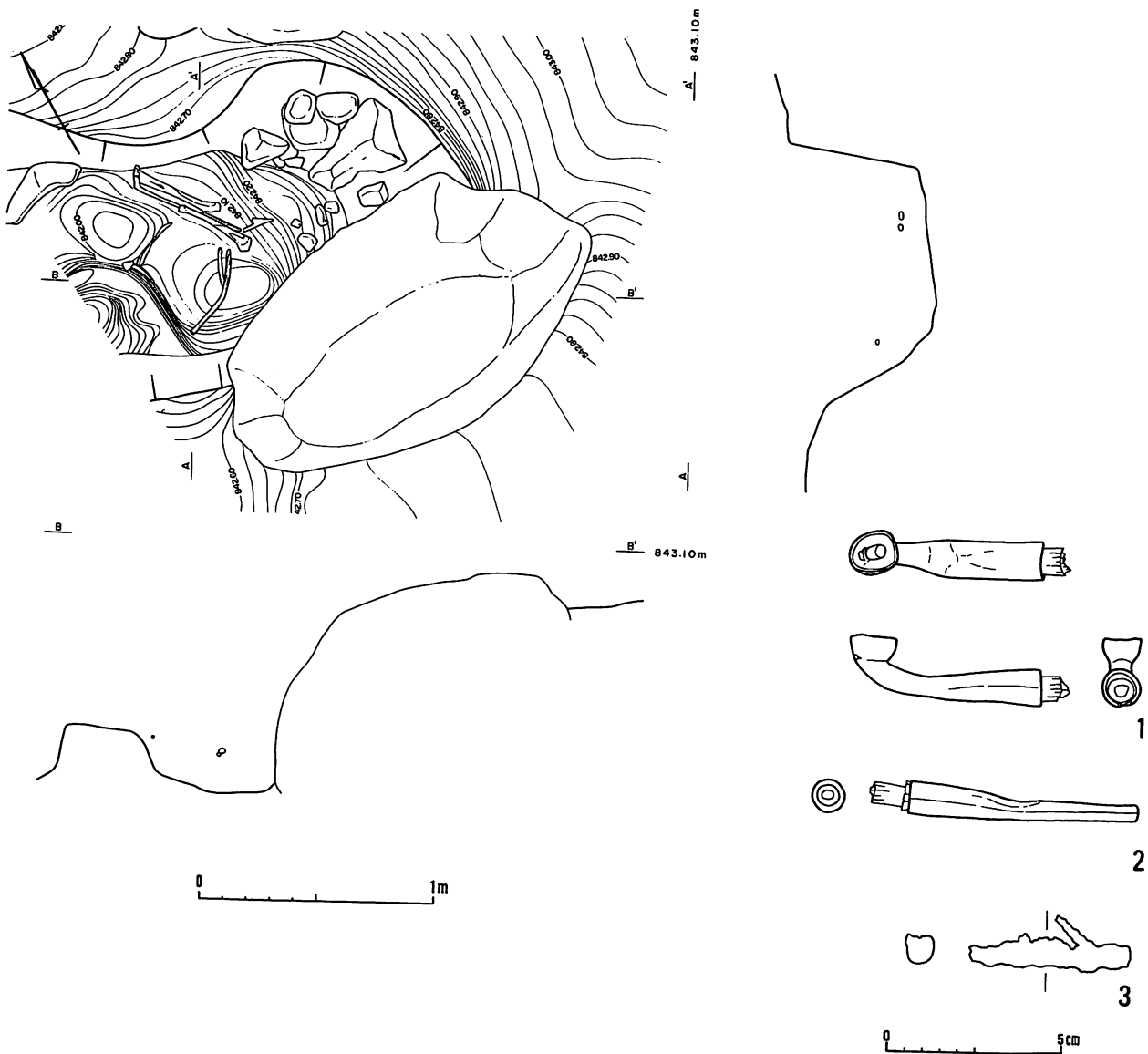


Fig. 177 86号墓墳および出土遺物

い自然礫が存在し、形態の把握は困難であった。埋葬形態は骨の遺存状況が不良のため不明であるが、骨が小さく纏まることから、布状のものに包まれて埋葬された可能性もある。残存する骨は非常に小型であり、被葬者は小児あるいは幼児である可能性が高い。出土遺物として、銅銭（全て寛永通寶）6点が出土している。

#### 84号墓墳 (Fig.176、P.1.17-71)

7-7・7-8 Grid内中央に位置する。南東側に存在する小規模な85号墓墳に切られる関係にある。平面形態は東西方向に主軸を有す不整楕円形を呈し、その規模は長軸1.40m、短軸1.10mを測る。断面形態は箱形を呈し、確認面からの深さは0.90mを測る。埋葬形態は北東向きの座葬である。腕部は前腹部に手甲部を重ね組む状態である。脚部は屈折し、足首部を重ねる程度に交脚の状態となる。出土遺物として、煙管の雁首部1点と吸口部1点（木質のラウが僅かに残存する）、銅銭（寛永通寶）1点、鉄銭1点が出土している。なお、分析（付篇）にはA・B 2体とあるが調査中には不明であった。

#### 85号墓墳 (Fig.176、P.1.17-72、34-48)

7-8 Grid内北西端に位置する。北西側に存在する84号墓墳を切る関係にある。平面形態は径約0.5m程度の円形を呈する。断面形態は皿形を呈し、確認面からの深さは0.18mと非常に浅い。骨の遺存状況は頭骨と四肢骨の一部が残存する程度と不良であり、埋葬形態は不明である。人骨は非常に小型であり、被葬者は小児ないしは幼児である可能性が高い。出土遺物として、陶製の鳩笛1点のみが出土した。本遺跡において、副葬品として玩具が出土した墓墳は本墓墳のみである。鳩笛の産地等は不明であるが、いわゆる江戸期の「今戸焼」に類似する。

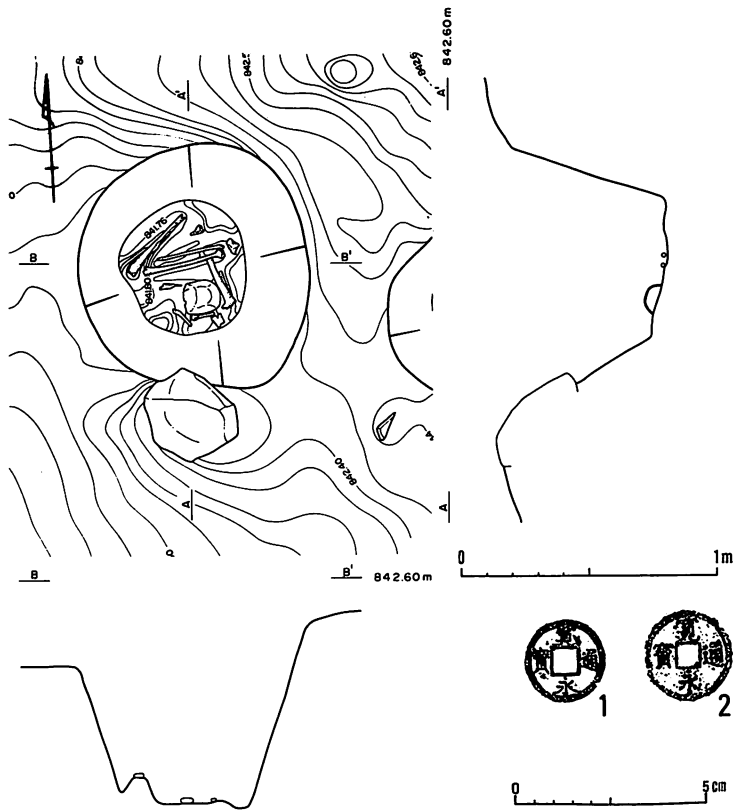


Fig. 178 87号墓壙および出土遺物

山梨県内における同時期の鳩笛の類例は、一宮町・笠木地藏遺跡4号墓壙出土遺物等に見ることができる。

86号墓壙 (Fig.177、P1.34-49)

10-7 Grid内西寄りに位置する。西側に存在する91号墓壙に切られる関係にある。平面形態は南北方向に主軸を有す長楕円形に近い不整円形を呈し、その規模は長軸約1.20m、短軸0.67mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.30mを測る。墓壙の南側には径約1.55mの自然礫が存在し、墓壙は礫に寄り添うように構築されている。骨の遺存状況は四肢骨の一部が残存する程度と不良であり、埋葬形態は不明である。ただし、残存する脚部骨（大腿部）が立った状態で検出されていることから、東向きの座葬である可能性が高い。出土遺物として煙管の雁首部1点と吸口部1点（木質のラウが僅かに残存する）、火打金1点、

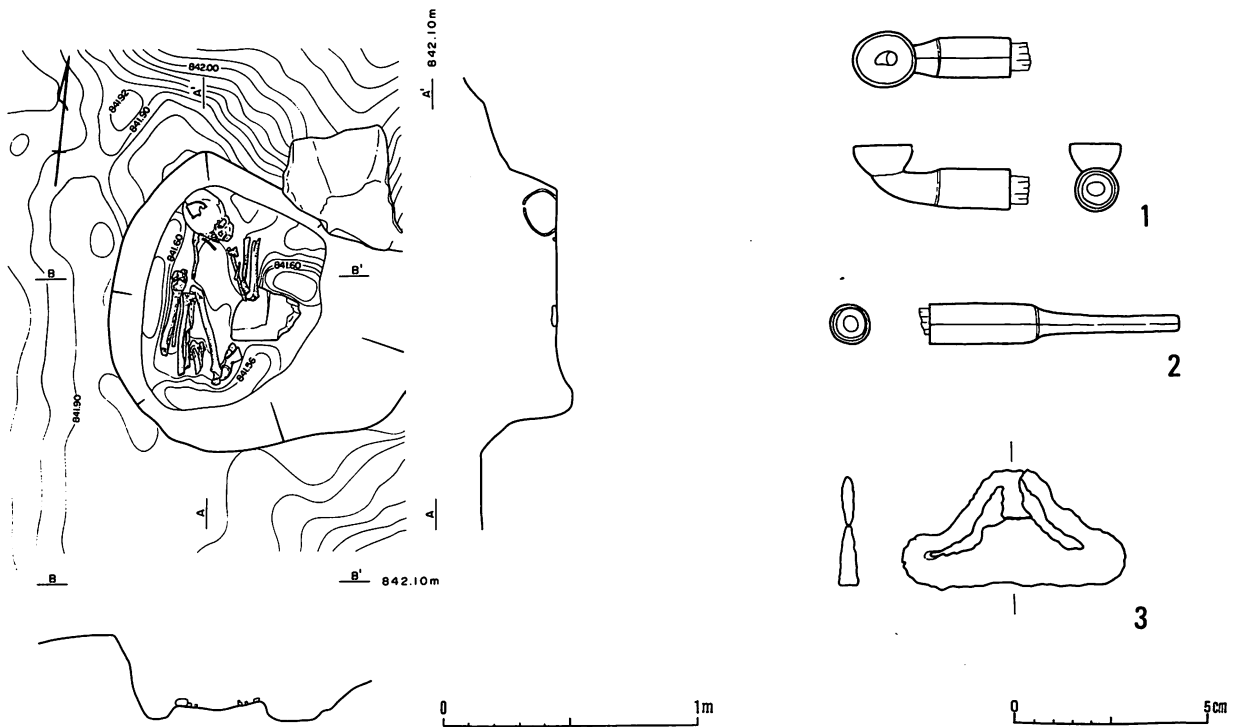
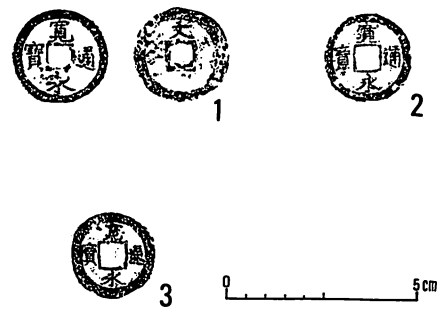


Fig. 179 88号墓壙および出土遺物

鉄銭3点、鉄釘（棺の製造に用いたものと考えられる）9点が出土している。ただし、鉄銭・鉄釘は図示不能である。

87号墓壙 (Fig.178、P1.18-73)

7-7 Grid内北西寄りに位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す楕円形を呈すが、正円形に近い。その規模は長軸約0.95m、短軸0.87mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.75mを測る。特に本墓壙は



自然礫が少ない砂質土層に構築されており、墓壙の壁面などの残存状況が比較的良好であった。観察によれば土壙はその平面形態を正円形を意識するように構築されていることが明らかである。しかし、工具痕跡等までは観察できなかった。埋葬形態は北向きの座葬である。腕部は前腰部に手首部を組む状態である。脚部は深く胡坐をかくような状態である。骨の遺存状況は、良好である。出土遺物として、銅銭（全て寛永通寶）2点、鉄銭3点が出土している。ただし鉄銭は図示不能である。

Fig. 180 89号墓壙および出土遺物

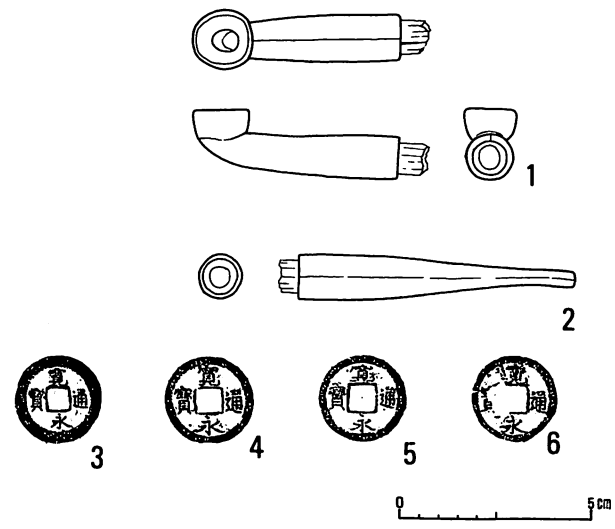
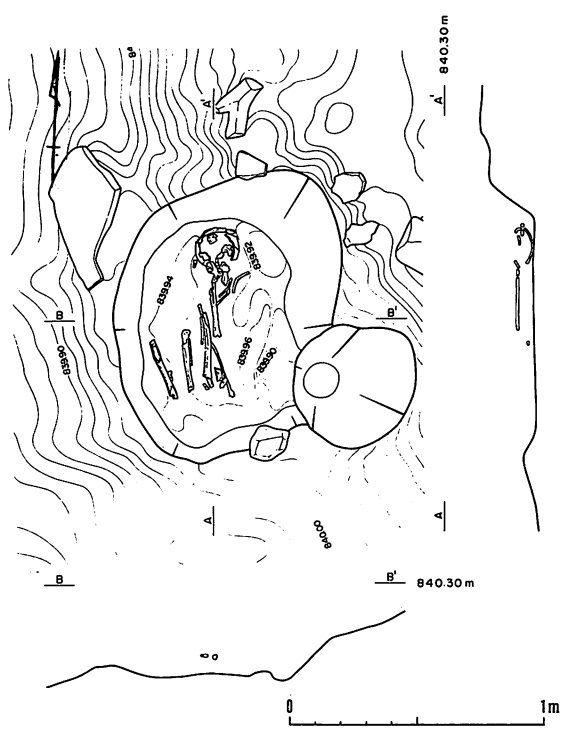


Fig. 181 90号墓壙および出土遺物

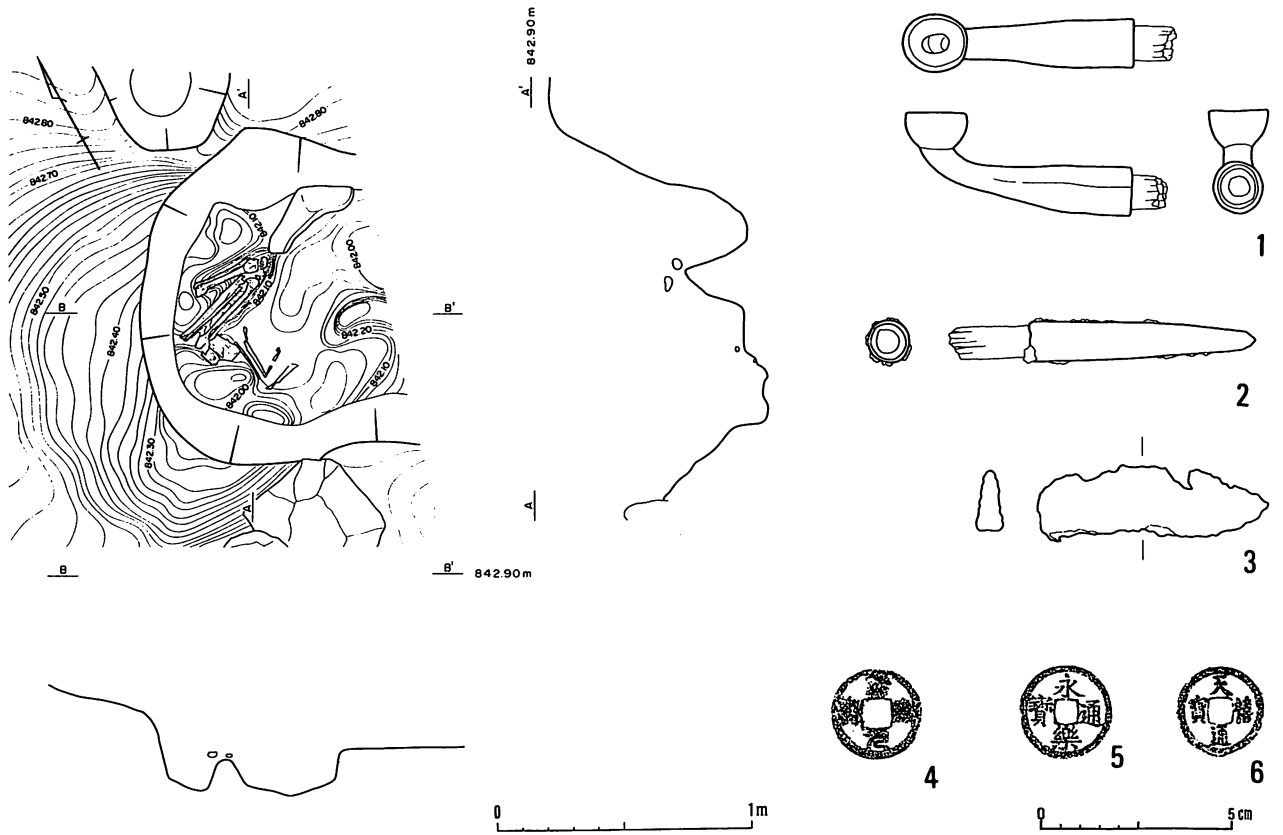


Fig. 182 91号墓墳および出土遺物

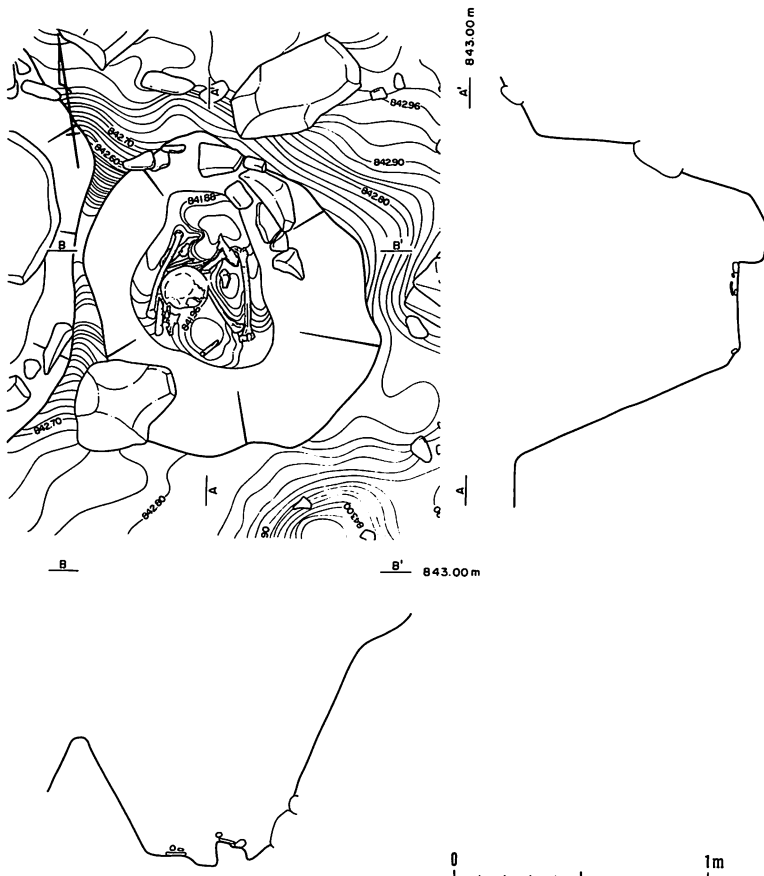
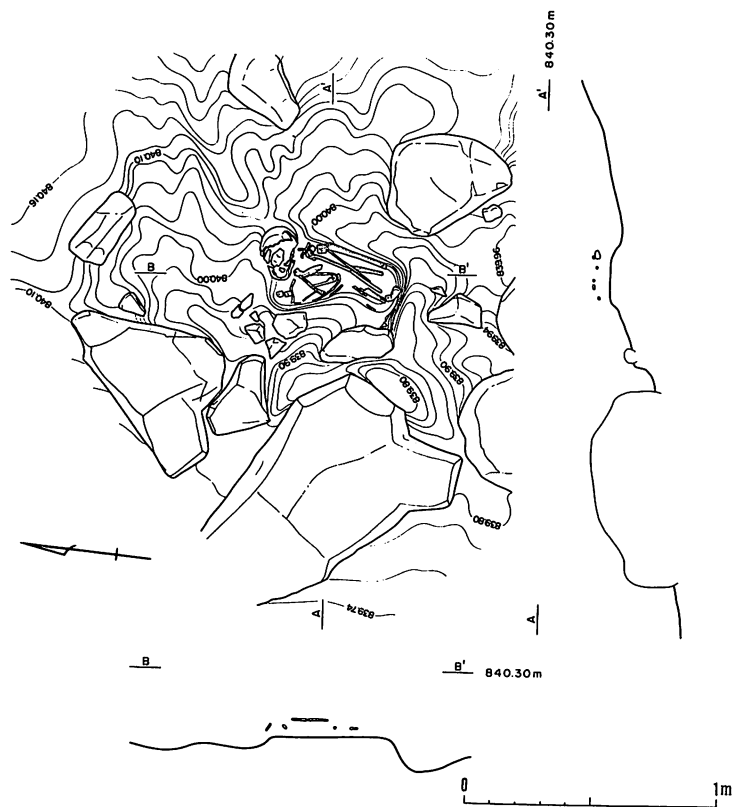


Fig. 183 92号墓墳

88号墓墳 (Fig.179、

P1.18-74・75、34-50)

4-7 Grid 内東端に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す長楕円形を呈し、その規模は長軸1.15m、短軸約0.97mを測る。断面形態は箱形を呈し、確認面からの深さは0.35mを測る。ただし、墓墳の東側は崩落が著しく形態は不明確である。埋葬形態は寝葬であり、頭位は北側にあり体は上向きである。腕部は手首を揃え前胸部のやや左側に寄せ置く形態である。脚部は屈折し、揃えた膝部を前腹部に密着する程まで腰部を深く折った状態である。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、煙管の雁首部1点と吸口部1点(木質のラウが僅かに残存する)、火打金1点、鉄銭数点が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。



### 89号墓墳 (Fig.180)

8-7 Grid内南東端に位置する。南東側に存在する92号墓墳に僅かだが切られる(接する程度)の関係にある。平面形態は南北方向に主軸を有す長楕円形を呈し、その規模は長軸1.70m、短軸1.05mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.70mを測る。ただし、墓墳平面は全体的に崩落が著しく、形態は不明確である。埋葬形態は寝葬であり、頭位は北側にあり体は西向きである。腕部は残存状況が不良のため不明確な点が多い。ただし、部分的には脚部を抱え込むような状況も認められる。脚部は屈折し、膝部を揃え前腹部に近づける状態である。骨の遺存状況は良である。出土遺物として、銅銭(全て寛永通寶)3点、鉄銭1点が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。

### 90号墓墳 (Fig.181、P.1.18-76、34-51)

3-5 Grid内北東端に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す長楕円形を呈し、その規模は長軸1.05m、短軸0.87mを測る。断面形態は浅い皿形を呈し、確認面からの深さは0.17mを測る。ただし、墓墳壁面は全体的に崩落が著しく、形態は不明確である。埋葬形態は寝葬であり、頭位は北側にあり体は西向きである。腕部は残存状況が不良のため不明確な点が多い。脚部は屈折し、膝部を揃え前腹部に密着する状態である。骨の遺存状況は良である。出土遺物として、煙管の雁首部1点と吸口部1点(木質のラウが僅かに残存する)、銅銭(全て寛永通寶)4点が出土している。

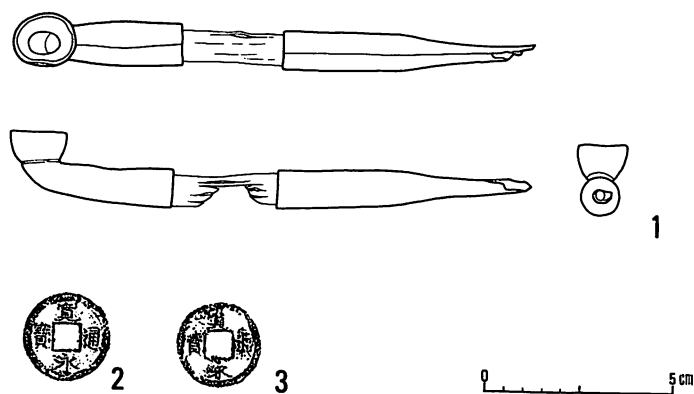


Fig. 184 93号墓墳および出土遺物

### 91号墓墳 (Fig.182、P.1.18-77、34-52)

10-6・10-7 Grid内に位置する。東側に存在する86号墓墳を切る関係にある。平面形態は南北方向に主軸を有す長楕円形を呈し、その規模は長軸1.20m、短軸約1.0mを測る。断面形態は浅い箱皿形を呈し、確認面からの深さは0.24mを測る。ただし、墓墳東側は切り合い関係のため、形態は不明確である。埋葬形態は寝葬であり、頭位は北側であり、体は上向きに近い東向きである。腕部・脚部ともは残存状況が不良のため、それぞれの形態は不明確な点が多いが、腕部・脚部とも屈折した状態であったことは確実である。出土遺物として、煙管の雁首部1点と吸口部1点(木質のラウが僅かに残存する)、火打金1点、銅銭(北宋銭2点・永樂通寶1点)3点が出土している。

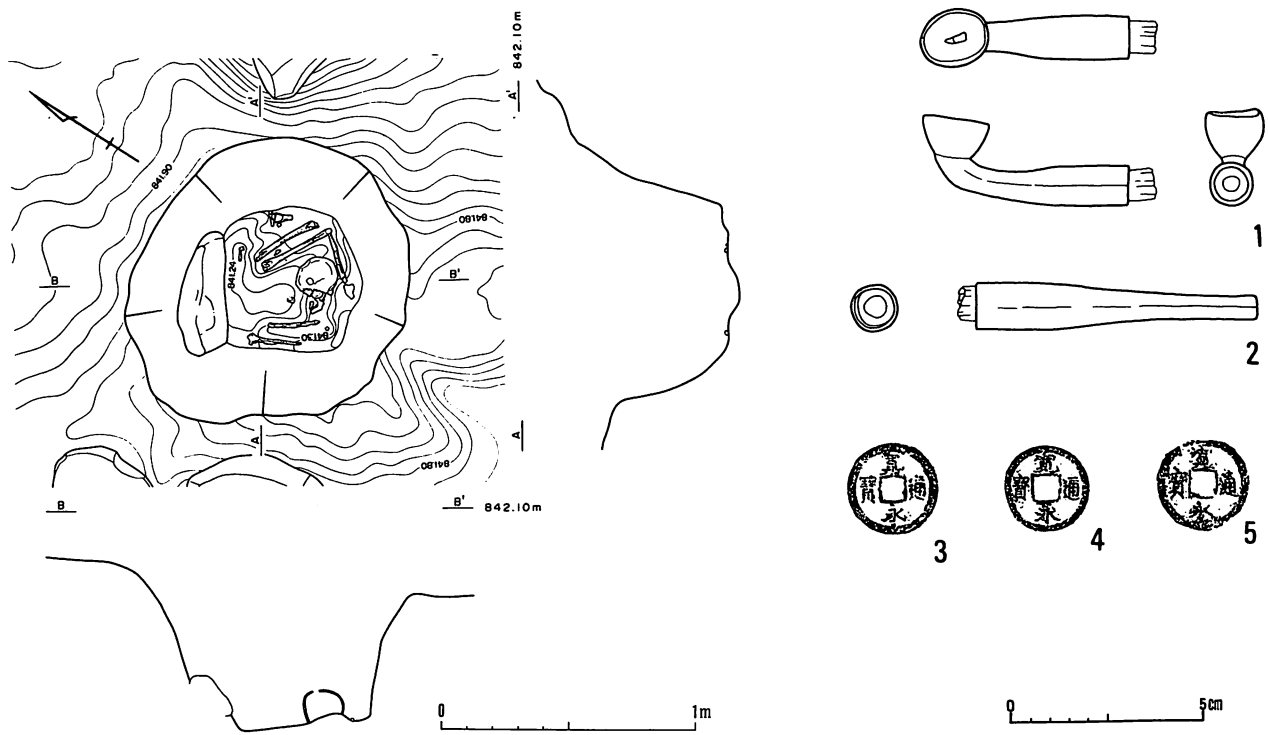


Fig. 185 94号墓墳および出土遺物

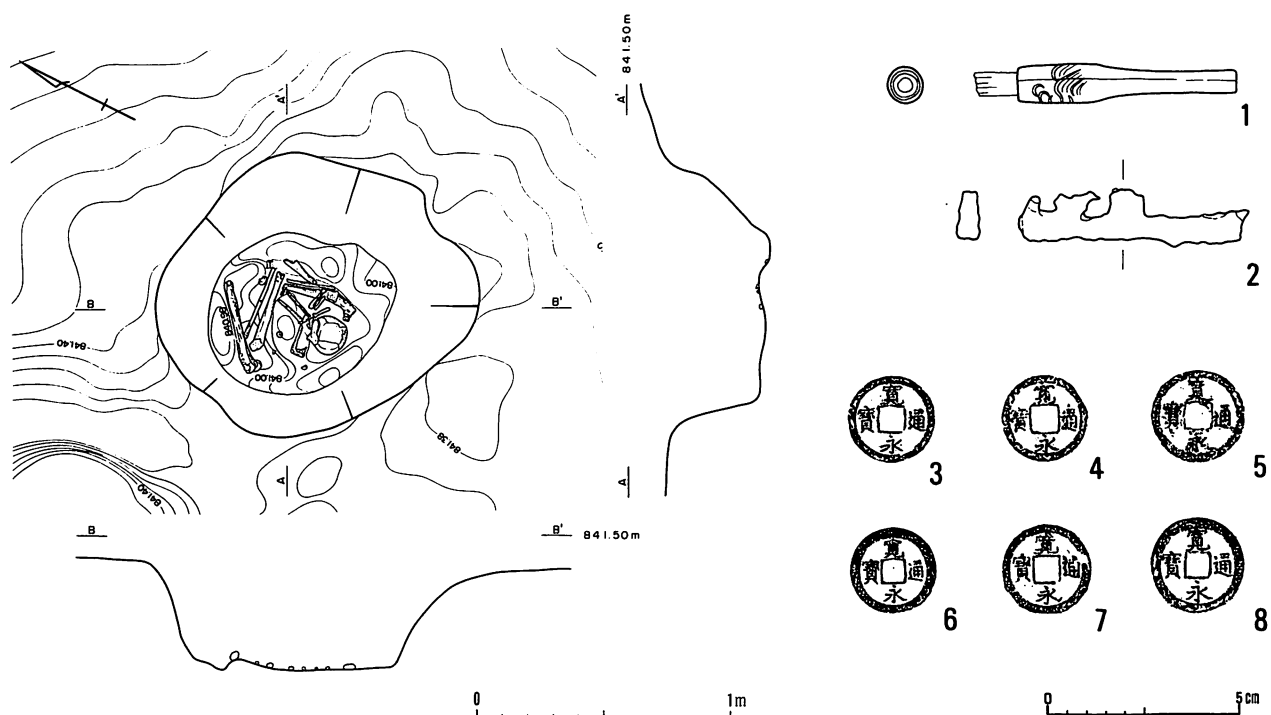


Fig. 186 95号墓墳および出土遺物

### 92号墓墳 (Fig.183)

8-7・8-8 Grid内に位置する。北西側に存在する89号墓墳を切る（接する程度の）関係にある。平面形態は南北方向に主軸を有す不整円形を呈し、その規模は長軸1.20m、短軸約1.05mを測る。断面形態は深い台形を呈し、確認面からの深さは0.97mを測る。埋葬形態は北東向きの座葬である。腕部は前胸部にて手首部を重ね組む状態であり、脚部は屈折し足首部が重なる程度に交脚する状態である。骨の遺存状況は良好である。出土遺物はない。

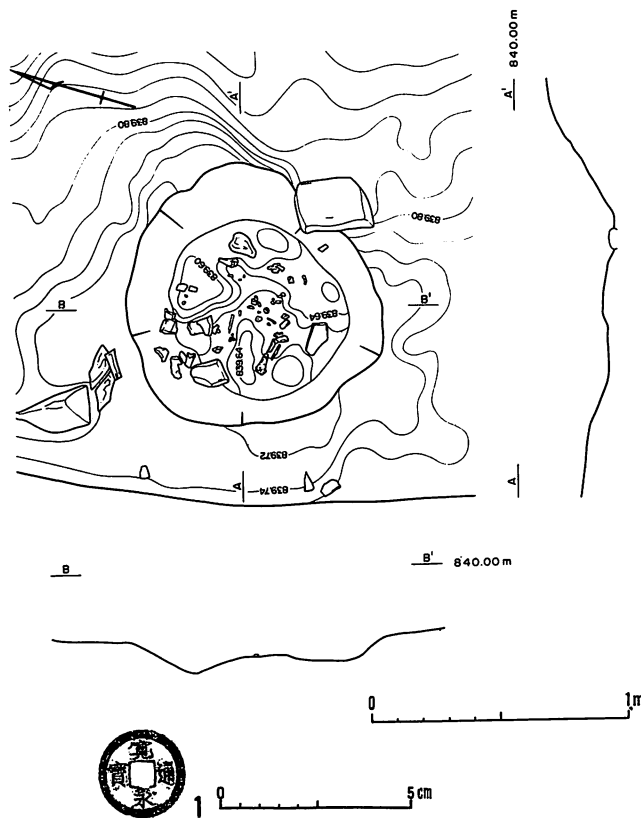


Fig. 187 96号墓墳および出土遺物

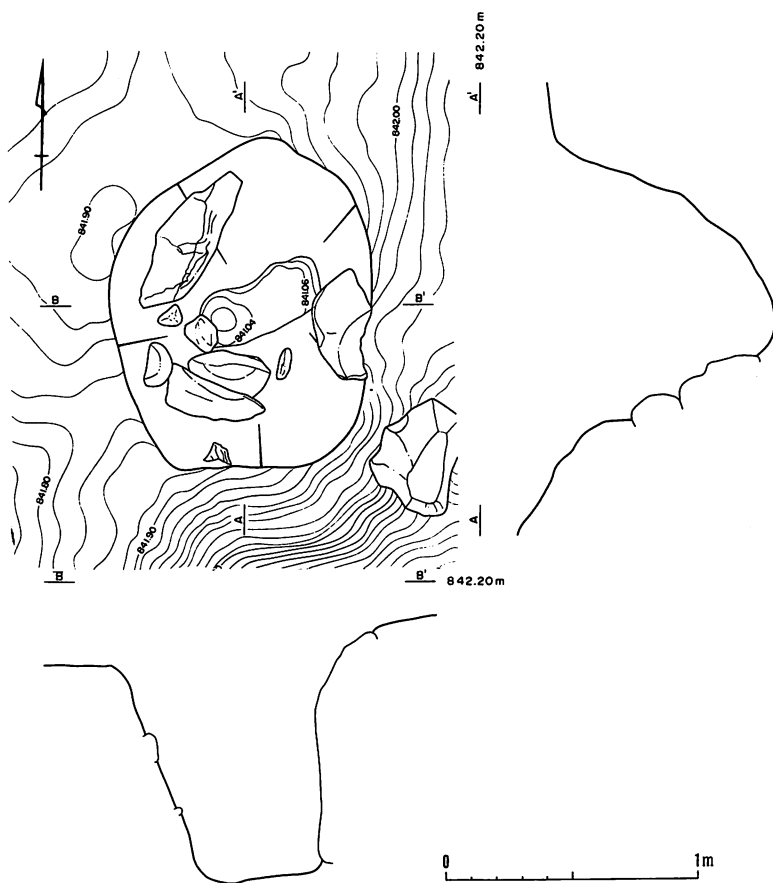


Fig. 188 97号墓墳および出土遺物

93号墓墳 (Fig.184、P1.18-78、34-53)

2-5・2-6 Grid内に位置する。北西側に存在する6号墓墳に切られる関係にある。「墓墳」の形態としては検出できず人骨のみを検出したものであるために、平面形態および断面形態は不明である。埋葬形態は寝棺であり、頭位は北側であり、体は東を向く。腕部は前胸部にて手甲部を重ね組む状態である。脚部は屈折し、揃えた膝部を前腹部に密着する程まで腰部を深く折った状態である。骨の遺存状況は良である。出土遺物として、煙管(雁首部・吸口部ともラウ部に装着されたまま残存)1点、銅銭(全て寛永通寶)2点、鉄銭4点が出土している。

94号墓墳 (Fig.185、

P1.18-79、34-54)

5-7 Grid内西寄りに位置する。平面形態は東西方向に主軸を有す楕円形を呈し、その規模は長軸1.15m、短軸約0.98mを測る。断面形態は箱形に近い台形を呈し、確認面からの深さは0.65mを測る。埋葬形態は北向きの座葬である。腕部は脇が開きぎみになるものの、手甲部は前腹部上に置く状態となる。脚部は屈折するが、交脚せずに膝を立てた状態となる。ただし、左足側の膝部が右足側に倒れていることにより、結果的には交脚に近い状態となっている。本遺跡における座葬は、人骨がなるべく小さく纏まるように埋葬されているケースが多いが、本墓墳の人骨は全体的に纏まらない状態で検出されている特異な例である。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、煙管の雁首部1点と吸口部



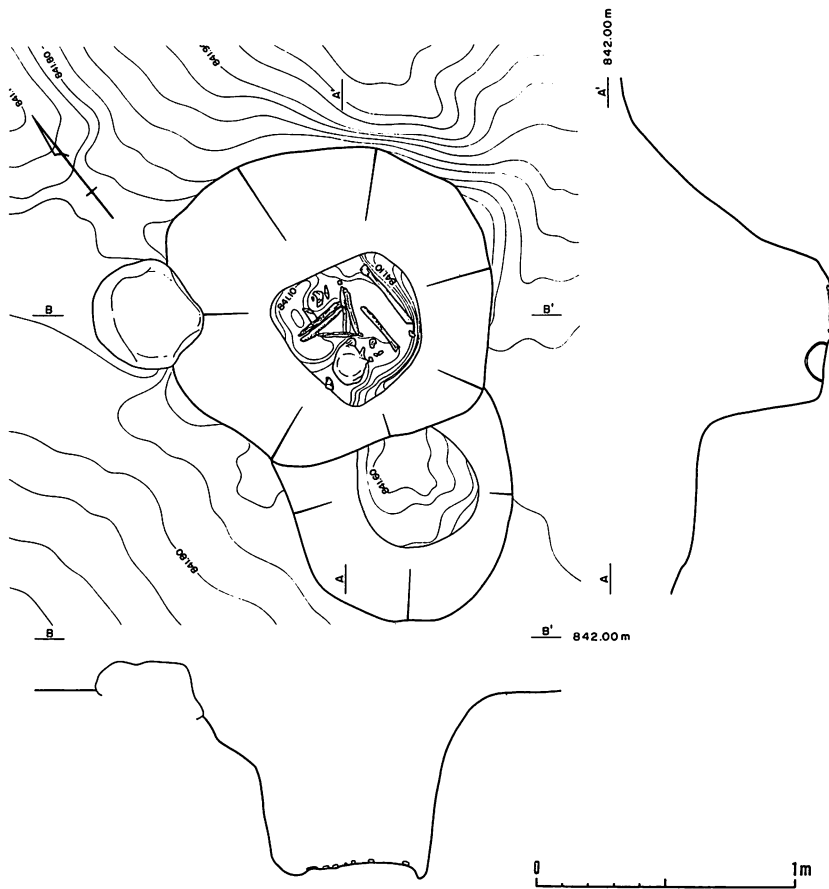
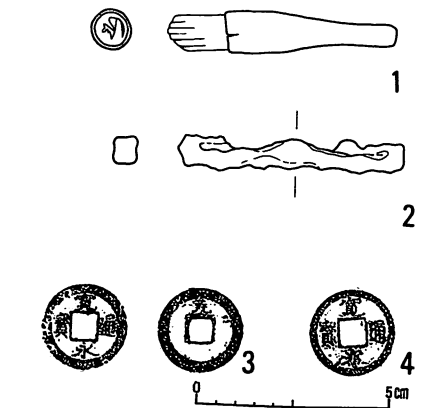


Fig. 189 98号墓墳および出土遺物



1点(木質のラウが僅かに残存する)、銅銭(全て寛永通寶)3点が出土している。

95号墓墳 (Fig.186、

P1.18-79、34-55)

3-7 Grid 内西寄りに位置する。平面形態は東西方向に主軸を有す不整形円形を呈し、その規模は長軸1.10m、短軸1.0mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.45mを測る。埋葬形態は北向きの座葬である。腕部は前胸部上に手首部を揃え置く状態となる。脚部は屈折し、足首部を重ねる程度に交脚する状態となる。腰部の折り方が深く、膝部は肩部に近づく程である。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、煙管の吸口部のみ1点(木質のラウが僅かに残存する)、火打金1点、銅銭(全て寛永通寶)6点が出土している。

96号墓墳 (Fig.187)

3-5 Grid 内中央に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す不整形円形を呈し、その規模は長軸1.0m、短軸0.95mを測る。断面形態は浅い皿形を呈し、確認面からの深さは0.20mを測る。骨の遺存状況が不良であるため埋葬形態は全く不明である。出土遺物として、銅銭(寛永通寶)1点のみが出土している。

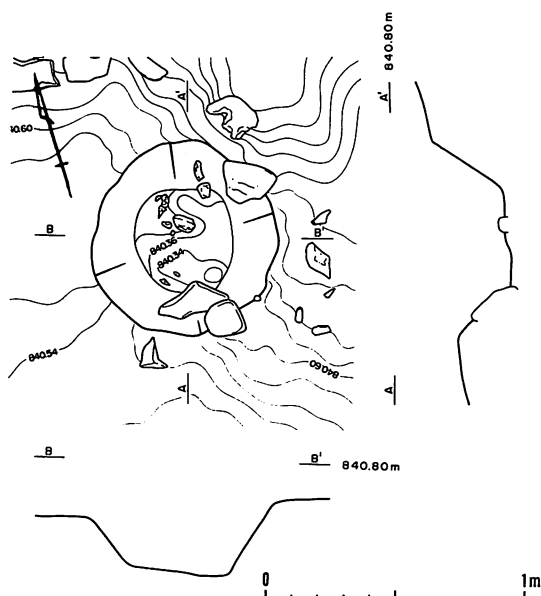


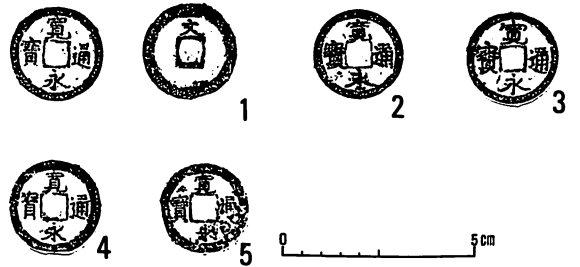
Fig. 190 99号墓墳

97号墓墳 (Fig.188)

4-7 Grid 内南東端に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す長楕円形を呈し、その規模は長軸1.20m、短軸1.0mを測る。断面形態は箱形を呈し、確認面からの深さは0.93mを測る。骨の遺存状況は、頭骨と四肢骨の一部がごく僅かに残る程度であったため埋葬形態は全く不明である。出土遺物はない。



Fig. 191 100号墓墳および出土遺物



98号墓墳 (Fig.189、P.1.18-81、34-56)

4-7・5-7 Grid内に位置する。平面形態は、現況では東西方向に主軸を有す楕円形を呈する。しかし、これは墓墳上端の周辺の崩落が著しいためであり、元は隅丸の方形を呈していたことが壁面から観察できる。その規模は長軸約1.20m、短軸約1.10mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.70mを測る。埋葬形態は北向きの座葬である。腕部は前胸部上手首部を揃え置く状態となる。脚部は屈折し足首部を重ねる程度に交脚し胡坐をかくような状態となる。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、煙管の吸口部のみ1点(木質のラウが僅かに残存する)、火打金1点、銅銭(全て寛永通寶)2点が出土している。

99号墓墳 (Fig.190)

4-5・4-6 Grid内に位置する。平面形態は径約0.70mを測る正円形を呈する。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.27mを測る。骨の遺存状況は、頭骨と四肢骨の一部がごく僅かに残る程度であったため埋葬形態は全く不明である。出土遺物は全くない。

100号墓墳 (Fig.191、P.1.18-82)

5-6 Grid内西端に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す長楕円形を呈し、その規模は長軸1.02m短軸0.80mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.40mを測る。埋葬形態は寝葬であり、頭位は北側であり、体は西向きである。腕部は屈折せずに胸部前方に手首部を揃え置く状態である。脚部は屈折し、揃えた膝部を前腹部に密着する程まで腰部を折った状態である。骨の遺存状況は良である。出土遺物として、銅銭(全て寛永通寶)5点、鉄銭1点が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。



Fig. 192 101号墓墳および出土遺物

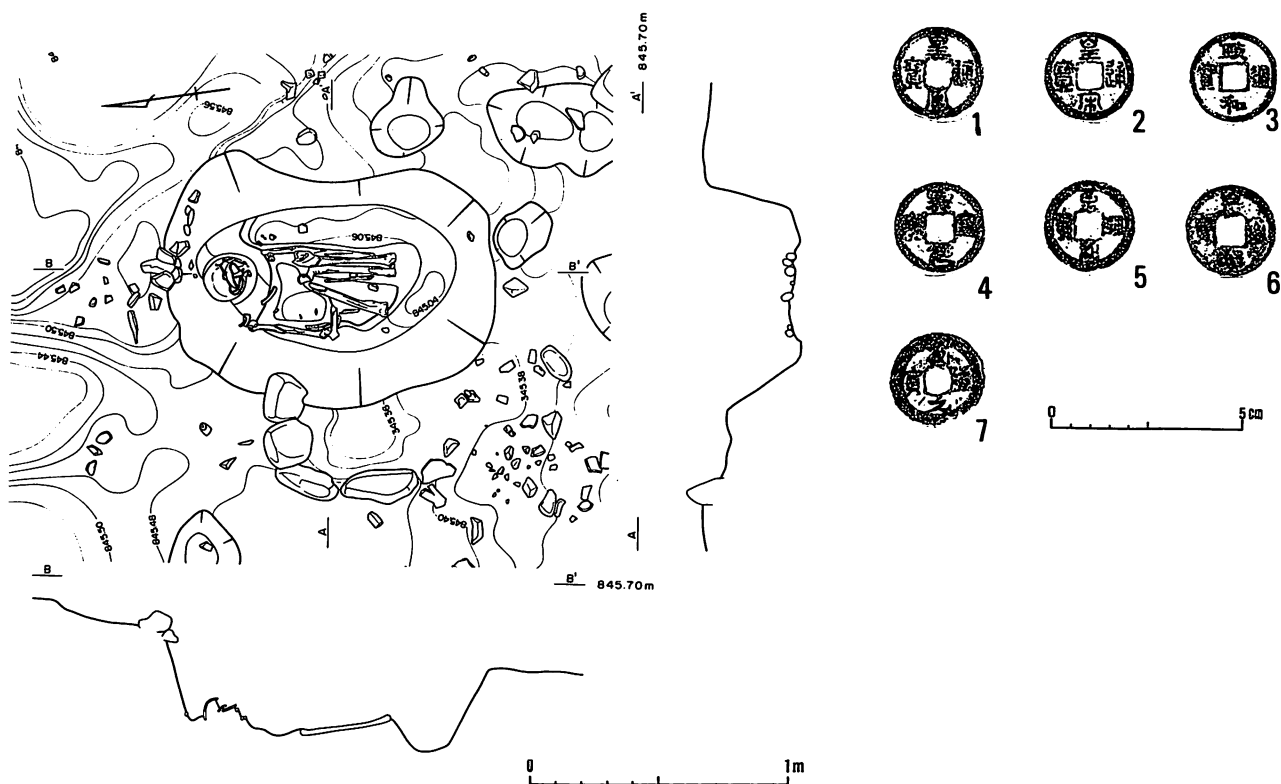


Fig. 193 102号墓壙および出土遺物

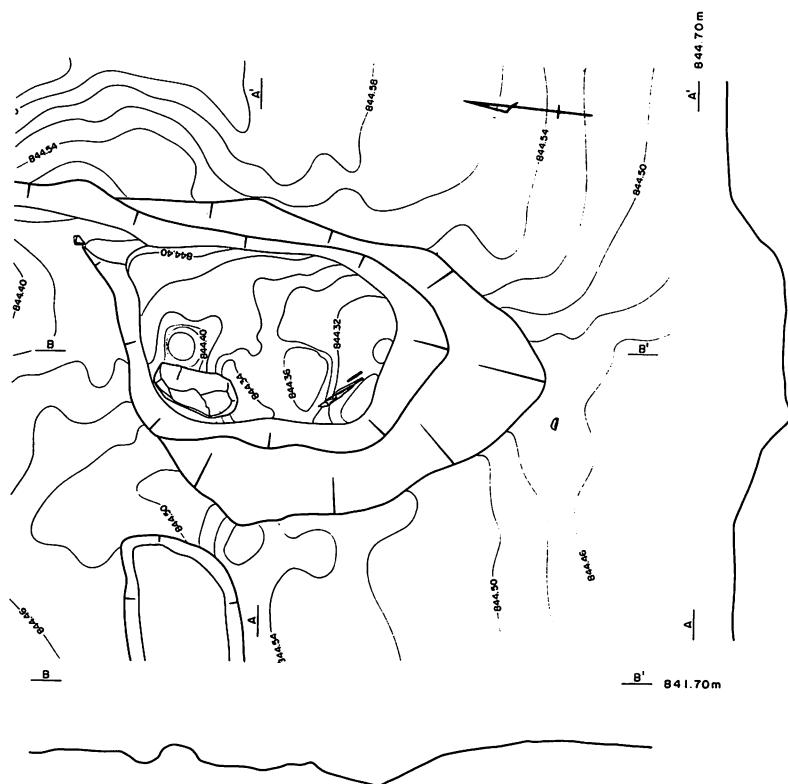


Fig. 194 103号墓壙

#### 101号墓壙 (Fig.192)

5-6 Grid 内中央南寄りに位置する。「墓壙」の形態としては検出できず人骨のみを検出したものであるために、平面形態および断面形態は不明である。骨の遺存状況は、四肢骨(脚部)の一部がごく僅かに残る程度であったため埋葬形態は全く不明である。ただし、脚部(大腿部)骨が並列の状態で見出されていることから、座葬の可能性が高い。出土遺物は銅銭(寛永通寶)1点のみが出土している。

#### 102号墓壙 (Fig.193、P.18-83)

14-13 Grid 内中央に位置する。10号住居址(縄文時代)の中心部を切る関係にある。平面形態は南北方向に主軸を有す長楕円形を呈し、その規模は長軸1.22m、短軸0.88mを測る。断面形態は台形を呈し、確認面からの深さは0.42mを測る。埋葬形態は寝葬であり、頭位は北側にあ

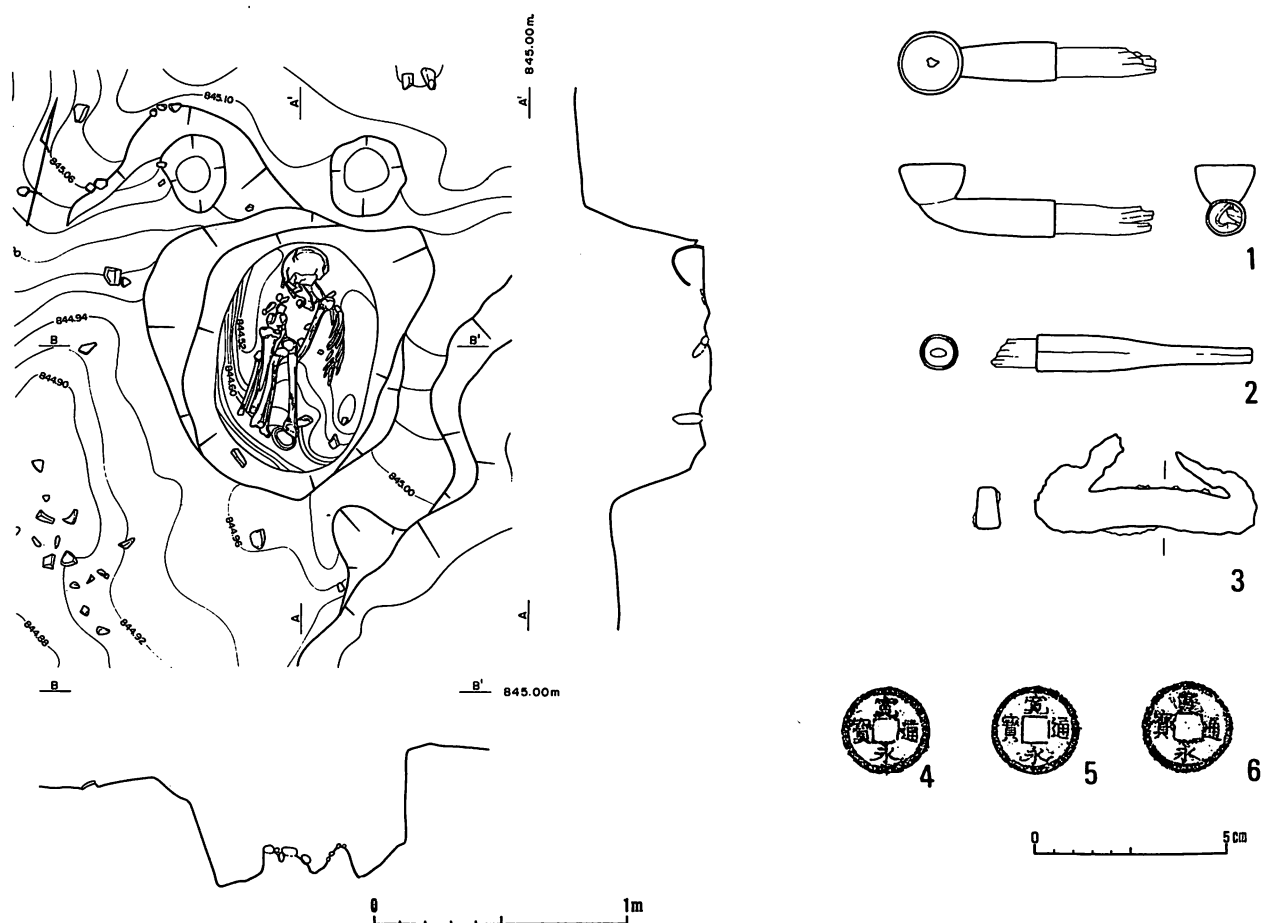


Fig. 195 104号墓墳

り体は西向きである。腕部は骨の遺存状況が不良のため状態は不明である。脚部は屈折し、揃えた膝部を前腹部に密着する程まで腰部を折った状態である。骨の遺存状況は良であるが、比較的の脆い状態である。出土遺物として、銅銭（全て北宋銭）7点が出土している。なお、分析（付篇）ではA・B 2体とあるが、調査中には不明であった。

#### 103号墓墳 (Fig.194、P.1.18-84)

12-13・13-13 Grid内に位置する。平面形態は現況では南北方向に主軸を有す長楕円形を呈し、その規模は長軸1.28m、短軸0.78mを測る。断面形態は浅い皿形を呈し、確認面からの深さは0.22mを測る。ただし、本墓墳は南西側の壁面の崩落が著しく、元は南北方向に主軸を有す長方形を呈していたものと考えられる。骨の遺存状況が頭骨や四肢骨が部分的に残る程度と不良のため、埋葬形態は不明である。ただし、墓墳の形状や頭骨・脚部骨の検出状況から、頭位を北側に置く寝葬である可能性が高い。出土遺物はない。

#### 104号墓墳 (Fig.195、P.1.18-85)

14-10 Grid内西側に位置する。平面形態は南北方向に主軸を有す長楕円形を呈し、その規模は長軸1.12m、短軸0.86mを測る。断面形態は箱形を呈し、確認面からの深さは0.48mを測る。埋葬形態は寝葬であり、頭位は北側にあり体は西向きである。腕部は屈折し、胸部前方に手首部を揃え置く状態である。脚部は屈折し、揃えた膝部を腕部（肘部）に密着するまで腰部を折った状態である。骨の遺存状況は良好である。出土遺物として、煙管の雁首部1点と吸口部1点（木質のラウが僅かに残存する）、火打金1点、銅銭（全て寛永通寶）3点、鉄銭3点が出土している。ただし、鉄銭は図示不能である。

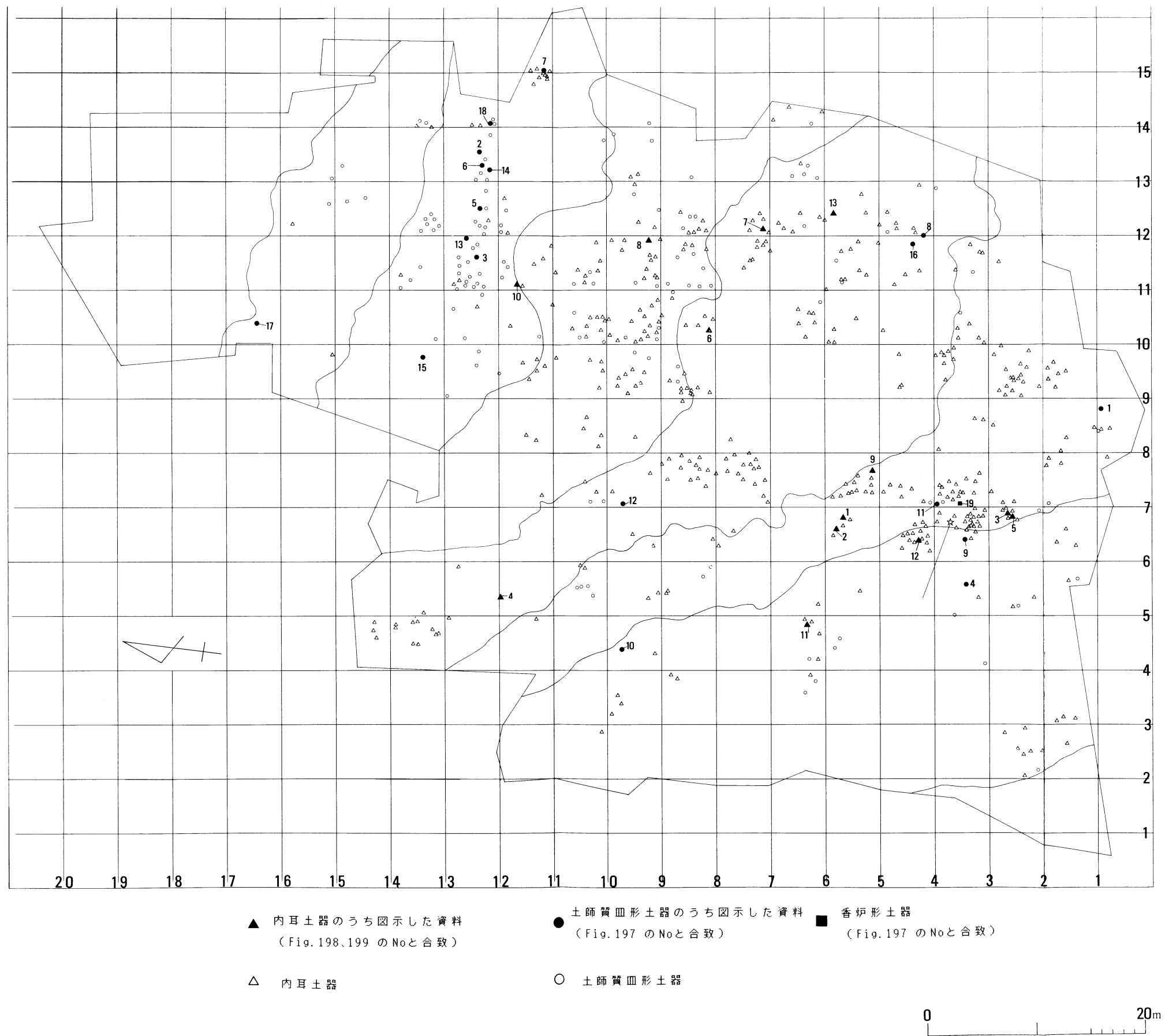


Fig. 196 土師質皿形土器・内耳土器分布図

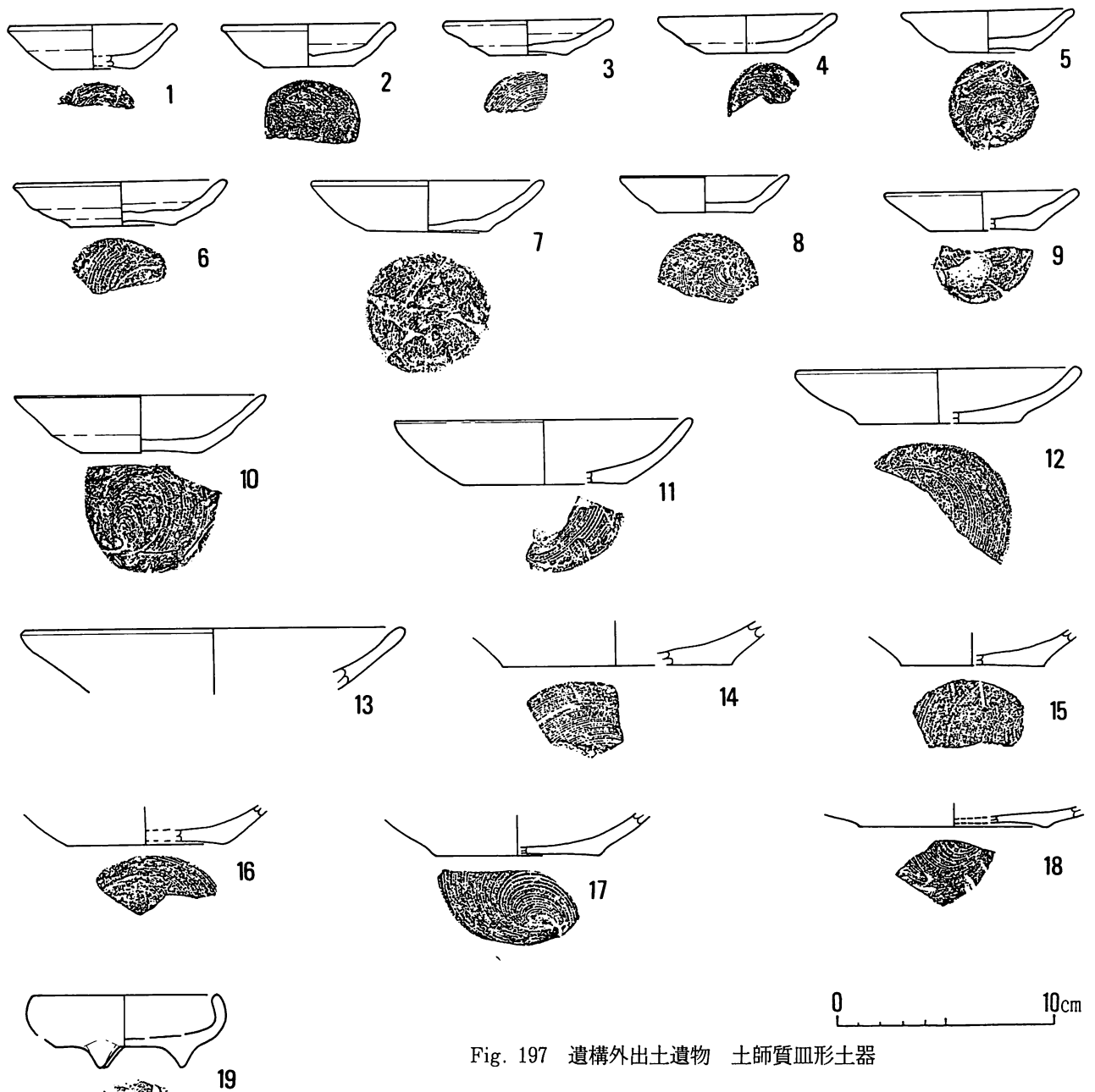


Fig. 197 遺構外出土遺物 土師質皿形土器

#### 5) 遺構外出土の遺物

中世から近世の遺物のうち、遺構に伴わず出土した遺物について説明する。ここで取り扱う遺物は、中世の所産と考えられる土器類・舶載陶磁器・東海系陶器・金属製品他と近世以降の所産と考えられる陶器・磁器・金属製品・土製品他である。なお、本項では、各種別ごとに説明するが、所産時期について中近世が前後している部分がある点を了承されたい。

##### a) 土師質皿形土器 (Fig. 197-1~18, Pl. 27-28)

出土した土師質皿形土器は小片を含め、総点数165点を数える。遺構に伴う資料は本遺跡では確認されていないため、これが遺跡出土総点数ということになる。そのうち実測図示できたものは、18点のみである。なお、遺構外出土の資料のうち、出土地点記録のあった資料については、分布状況をFig. 196に平面分布図として示し、実測図示した資料は個別ナンバーを付記して出土地点を示してある。また、実測図示した各資料の計測値・器形・製作方法・胎土等については、第四章末の観察表 (Tab. 8) に示したとおりである。ここでは、塩川遺跡出土の土師質皿形土器について、分類を中心に若干の説明を加えておきたい。

まず、出土資料についての分類を行なう。分類基準は法量および器形の特徴を示す口縁部の形態を採用することとし、底部あるいは口縁部のみの資料 (Fig. 13~18) は対象外とせざるを得なかった。

#### I類 (Fig. 197-1~5、8、9、P.1.27-28)

口径が7.8cm~8.8cm (8cm前後) の範囲内におさまる資料を一括する。底径/口径比は48%~50%の値に集中するが、器高は1.6cm~2.1cmとその値にやや幅をもつ。口縁部の形態により、さらに二分される。すなわち、口縁端部が厚く丸みを持つもの [I-A群] (1、3、2、9) と尖るほどではないが、比較的薄手のシャープな口縁部を持つもの [I-B群] (4、5、8) である。また、I-A群は底部内面 (みこみ部) と体部内面の境が不明瞭であるのに対して、I-B群はそれが明瞭である点が観察される。成形技法の差と考えられ、あるいは時期差を表しているのかも知れない。

#### II類 (Fig. 197-6、7、10、P.1.27-28)

口径が9.8cm~11cmの範囲内におさまる (10cm前後) 資料を一括する。底径/口径比は47%~55%程度であり器高は2.1cm~2.4cmである。口縁部の形態はいずれも薄手でシャープであるが、6 (Fig. 197-6) の資料のみは口縁端部が外側へ鋭く尖出する形態を持つ。また、6は他の2点と胎土・焼成が異なるようであり、別分類が可能かもしれない。同様な胎土・焼成 (色調は灰色を帯び、良く焼き締まる) は (Fig. 197-18) にも見られる。

#### III類 (Fig. 197-11、12、P.1.27-28)

口径が13cm~13.8cm (13cm前後) の範囲内におさまる資料を一括する。2点のみであり、不明点が多いが両者の器形は体部が内湾する点では共通する。しかし、12は底部が台状になっており、他の類と比較しても異質である。また、両者の胎土・焼成は共通し、前述の6などと同様である。

以上のように分類を試みると塩川遺跡出土の土師器質皿形土器は、大・中・小の3種類に分かれることが解る。ただし、これらが同一時期の所産かどうかは甚だ不明であり、従来唱えられる「セット」に値するかどうか明言することはできない。また、遺構外出土の資料であり、明確に共伴する他の遺物も提示できない。ゆえに、それぞれに具体的な年代観を与えることはここでは避けたい。

#### b) 脚付香炉形土器 (Fig. 197-19、P.1.27-27)

3-7 Gridより出土した資料であり、計測値・成形他は第IV章末のTab. 8に示したとおりである。極端に内湾する体部は土師質皿形土器とは大きく異なる。用途は不明であるが、内面 (特に内湾する体部面とみこみ部中央) に吸炭が著しいことから、内側で何らかを燃焼させたことが推測される。山梨県内では若草町二本柳遺跡や勝沼町勝沼氏館跡などに類例がある。所産時期は15~16世紀代に求められよう。

#### c) 内耳土器 (Fig. 198-1~13、P.1.26-25、P.1.27-26)

出土した内耳土器は小片を含め、総点数654点である。これは遺構外出土の点数であり、遺構に伴う資料がさらに加わる。具体的には1号地下式土壌で1点と3-6 Gスリパチで2点となるため、総数657点となる。このうち実測図示した資料は13点である。なお、遺構外出土の資料のうち、出土地点記録のあった資料については、分布状況をFig. 196に平面分布図として示し、実測図示した資料は個別ナンバーを付記して出土地点を示してある。また実測図示した各資料の計測値、器形、製作方法・胎土等については、第IV章末の観察表 (Tab. 8) に示したとおりである。ここでは塩川遺跡出土の内耳土器について、分類を中心に若干の説明を加えておきたい。なお、本文の性格上、遺構に伴い出土した資料についても、一部ここで取りあげることになる。

出土した資料点数は非常に多いが、そのほとんどは以下に述べる分類中におさまると考えられる。出土した内耳土器は大きく2種類に分かれる。すなわち、鍋形とほうろく形である。鍋形については、器高の高い (身の深い) 形と低い (身の浅い) 形にわかれ、後者は鍋形とほうろく形の間隔的な形態であり、その意味では内耳土器は大きく3種類に分かれるとも言えよう。また、この大分類はさらに口縁部および体部の形態を基準にて細分が可能である。ただし、耳部は伴う資料が少なく、形態や付けられる位置は分類基準に採り入れない。また、口縁端部上面の調整 (いわゆる「面取り」) もすべての類に共通するため、同様である。以下、分類する。

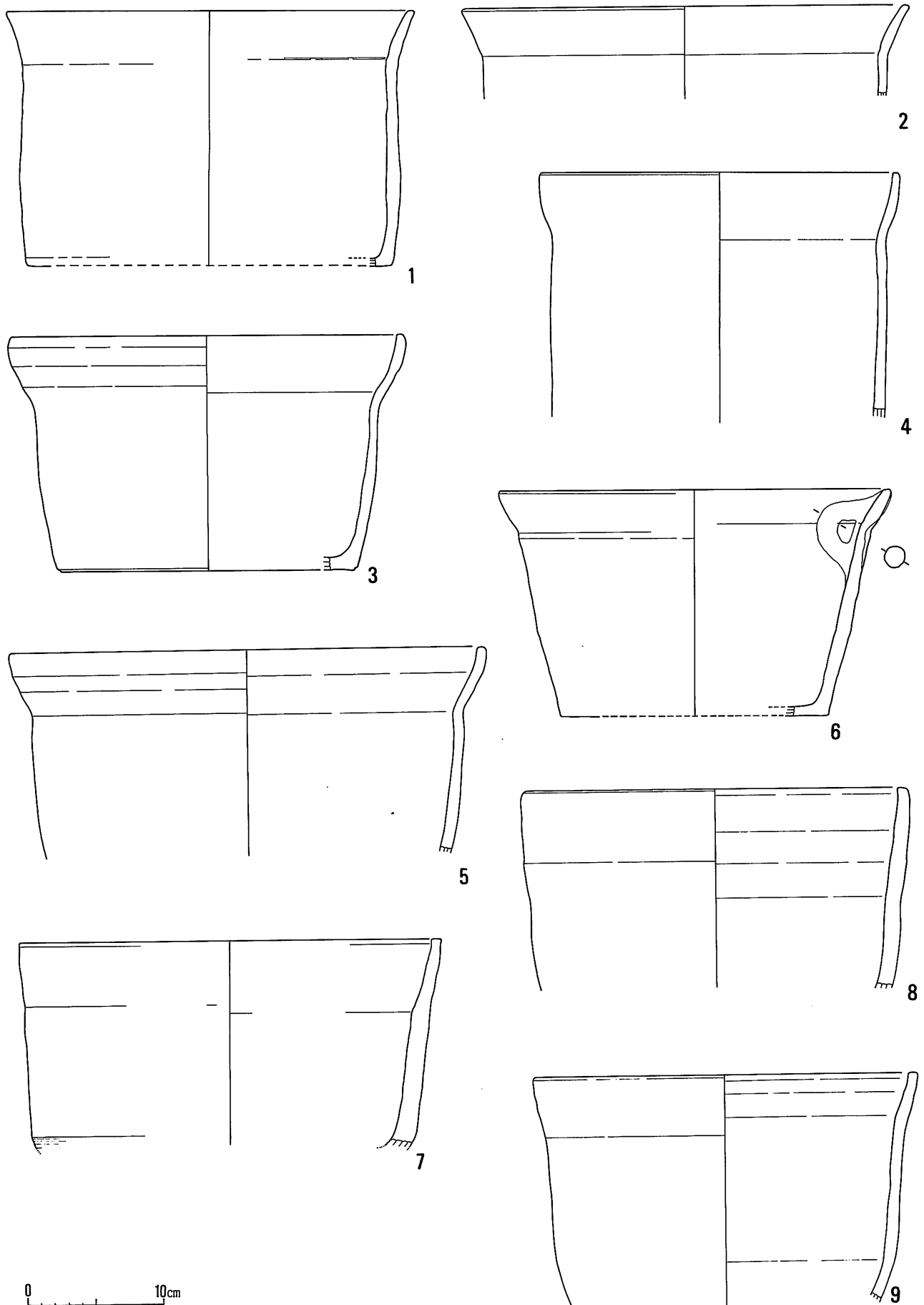


Fig. 198 遺構外出土遺物 内耳土器①



I類 (Fig. 99-2)

器高の高い鍋形であり、3-6 Gスリバチから出土した1点のみが確認された。体部はやや外傾しつつ立ち上がり内傾気味の口縁部へ至る。口縁部外面には弱く幅の広い沈線(凹線)が3条巡り、体部との境は不明瞭である。内面は同じく条線(凹線)が3条巡り、体部との境は段部となり明瞭である。

II類 (Fig. 198-1・2)

器高の高い鍋形であり、器高は18.5cm~20cmを測る。底部は器厚0.7cm前後と体部より薄い平底である。ほぼ垂直、あるいはやや内傾し立ち上がる体部から、直線的に開く口縁部に至る器形を主特徴とする資料である。他の特徴は、口縁部と体部の境が、外面ではやや凹み弱い沈線が巡るように見える程度と不明瞭であるが、内面は段状になり明瞭である点、体部と口縁部の器厚がともに0.9cm前後と全体的に均一で薄手である点、胎土が粗く軽い感がある点などが挙げられる。耳部は伴う資料が確認されなかったため不明である。

III類 (Fig. 198-3・4・5・9・12)

器高の高い鍋形であり、器高は15cm~18cmを測る。底部は平底で、器厚1cm前後と厚く体部下位とほぼ同じである。外傾し下位に丸みを持ちながら立ち上がる体部から、深く内湾しつつ外傾し開く口縁部に至る器形を主特徴とする資料である。口縁部の内湾が小さい資料(9)も混在する。他の特徴は、口縁部と体部の境は、外面では弱いクランク状になり、内面は明瞭な段はなく、非常に弱い稜線を残すのみである点、器厚は体部・口縁部とも1cm前後であるが、その境目付近で20%~30%薄くなる点、良く焼締まり硬質である点が挙げられる。耳部は伴う資料がなく不明である。

IV類 (Fig. 198-6)

器高の高い鍋形であり、器高は15cm~16cmを測る。底部は器厚0.7cm前後と体部より薄い平底である。大きく外傾する体部から、短く外傾する口縁部へ至る器形である。ただし、口縁部の外面は丸みを帯び、内面は直線的である点が特徴的である。口縁部と体部の境は、外面では幅0.5cmほどの弱い沈線が巡り、内面は同じく0.5cmほどの沈線が巡り弱い段状になっている。器厚は体部で1cmほどであるが体部中位はやや厚くなる。また、口縁部は特に中位が膨らむように厚くなっており、全体的に器厚がばらつく感がある。耳部は口縁端部から1cmほど下から内面の段部の位置をまたぐように付けられる。

V類 (Fig. 198-7)

器高の高い鍋形であり、器高は15cm~16cmを測る。やや外傾する体部から、ほとんどそのままの傾斜で直線的な口縁部へ立ち上がる器形である。器厚は体部が1.5cmと厚く、口縁部に至ると緩やかに薄くなる特徴がある。口縁部と体部の境は、外面は直線的に立ち上がるため、弱い稜線がわずかに認められる程度である。内面は体部

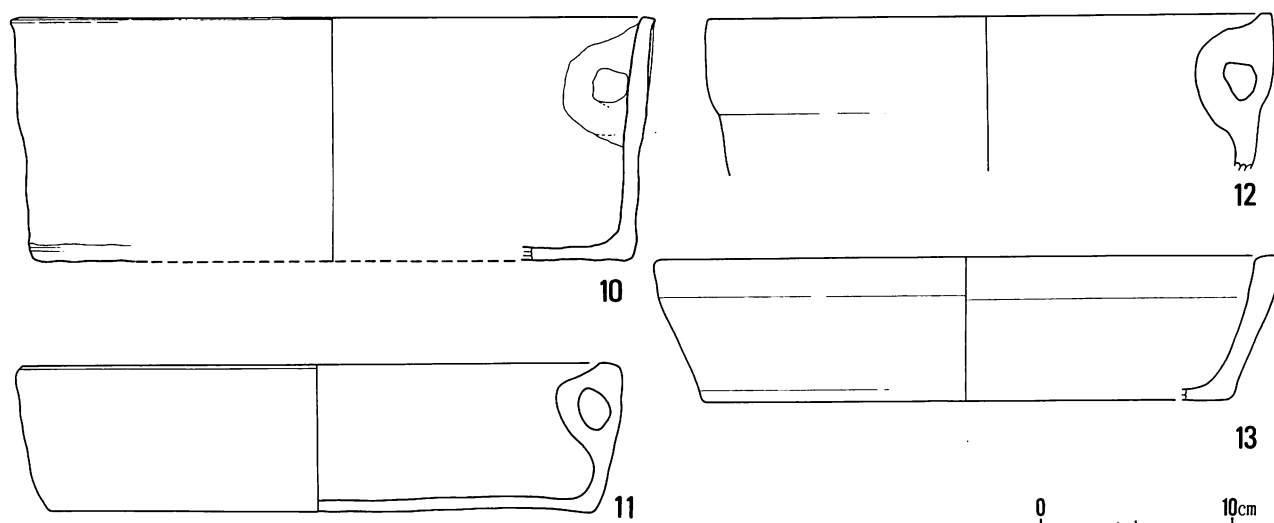


Fig. 199 遺構外出土遺物 内耳土器②

の平均的な器厚が薄くなる変換点が稜線として確認できる。底部・耳部は伴う資料がなく不明である。

#### VI類 (Fig. 198-8)

器高の高い鍋形であり、器高は底部まで伴う資料がなく不明である。体部はやや外傾し、そのまま口縁端部へ至る器形である。口縁部端部はごくわずかに内面へ突出し、弱く内湾する。内外面とも口縁部と体部の境が不明瞭な資料ではあるが、外面には弱い稜線が巡り、これにより境をとられることができる。器厚は体部下位が非常に厚く序々に薄くなりつつ、口縁端部へ至る。IV類とV類は口縁部に多少の差はあるが、器厚・直線的な体部・口縁部に類似点を見る。

#### VII類 (Fig. 199-10)

器高が13cmほどの内耳土器である。ほうろく形とも鍋形ともつかない、中間的な資料である。鍋のように口縁部と体部が分かれることなく、底部から、やや外傾しつつ直線的に口縁端部へいたる器形である。底部は体部よりやや薄い程度であり、ほうろく的ではない。耳部は他の内耳土器より太い形態であり、口縁端部より1cmほど下に付けられている。

#### VIII類 (Fig. 99-3、Fig. 199-11・13)

器高が低い内耳土器、いわゆる「ほうろく」を一括する。器高は7.5cm～8cmを測る。底部からやや外傾し立ち上る体部を経て、内側へやや突出する口縁端部へ至る器形 (Fig. 199-11、Fig. 99-3) と底部から大きく外傾し立ち上がる体部を経て厚みを帯びる口縁端部へ至る器形の2種が認められる。耳部は底部から離して付けられる。胎土や焼成は鍋形の内耳土器に類似し、近世にみられる土師質の「ほうろく」とは異なる。

なお、1号地下式土壇出土の資料 (Fig. 86-1) は胎土や器形とも内耳土器に類似する。しかし、内面に段あるいは稜がまったく認められない点や小穴 (土器を吊すことに関連?) が口縁端部下に穿たれている点から内耳土器である可能性が低い資料として分類からはずしてある。ただし、鍋形土器であることはほぼまちがいないであろう。あるいは、内耳土器の初源的な形態であるかも知れない。

以上のように分類を試みたが、土師質皿形土器と同じく、それぞれに具体的な年代を与えることは、ここでは避けておきたい。

ここで、土師質皿形土器と内耳土器の分布状況について触れておきたい。出土状況は両者とも Fig. 196 に示した。しかし、ドットマークは破片も完形もすべて1点としており、この分布がどれだけの情報を提供しているのか疑問視もされる。しかし全体的な分布の傾向については読み取れるものと考え、図示したものである。調査区全体におよぶ両者の分布であるが、中にいくつかの集中域があることが看取される。

まず、調査区の北東部 (12-12 Grid 周辺) に集中域がある。土師質皿形土器の集中点であり、すぐ南側に存在する竪穴状遺構群に平行するかのようにな帯状に分布する。分布する資料はI類・II類であるが、内耳土器をほとんど見ない。

調査区のほぼ中央東寄り (9-10 Grid 周辺) にも集中域がある。竪穴状遺構の集中する地点であるが、それらに伴う明確な例はない。非常におおまかではあるが、16-29号竪穴状遺構の一群と5-11号竪穴状遺構の一群の間の空間を中心とした地点に集中する傾向があるようである。内耳土器がそのほとんどを占め、各類とも見られる。調査区の南部中央寄りの集中域 (3-6 Grid 周辺) は、3-6G スリバチが存在し、石臼も複数出土した地点である。内耳土器を中心とし、特にIII類が多く見られる。調査区東半平坦地から西半平坦地への斜面際に位置する。

他にも調査区南東部 (2-9 Grid 周辺) ・調査区のほぼ中央 (7-7 Grid 周辺) ・調査区北西部 (13-4 Grid) ・調査区の南西部 (2-2 Grid 周辺) などいくつかの小集中域が見られる。それらが何らかの意味を持つのであろうが、それらを抽出することは現在のところできていない。また、土師質皿形土器・内耳土器が全く分布していない地点も多く、これにも意味を探し出すことが可能かも知れない。いずれにせよ、土師質皿形土器・内耳土器の所産時期を明確に把握していない現況であり、ここでは、集中域の存在を提示するに留めておく。

なお、土師質皿形土器・内耳土器の胎土について、岩石学的分析を河西学氏 (帝京大学山梨文化財研究所) に依頼している。分析対象資料および成果は、「付篇」(P173) を参照されたい。

d) 舶載陶磁器・東海系国産陶器

本遺跡からは数量的には少量で、細かい破片資料ばかりではあるが、舶載（中国）磁器9点（白磁1点、青磁7点、ソーダ釉磁器1点）および舶載陶器1点が出土している。また、この他に東海系国産陶器31点（瀬戸・美濃焼28点・常滑焼3点）も出土している。これらの全てを図示することはできないが、その一部を図示し、説明を加える。

①舶載陶磁器（Fig. 200-1～7、巻頭カラー図版上段）

1は、白磁碗の口縁部である。口縁端部をごく一部欠く。口縁は外反し、外面には蓮弁状の装飾（面取り？）が施されるが部分的であり不明である。内面は装飾なしだが、現存部上端から2cm下に、施釉前の沈線が一条巡る。釉は灰白色で貫入はなく、胎土は灰色である。白磁碗-太宰府V類に類似し12世紀代の所産と考えられる。

2は、青磁脚付筒形香炉の口縁部である。口縁端部上面が広く凹み、内側へ突出する。装飾は、口縁端部外面の直下に、施釉前の沈線が二条巡る。釉は明青緑色で貫入はなく、胎土は灰色である。龍泉窯系と考えられ、いわゆる「砧青磁」の中に見られる「千鳥香炉」に類似する器形であろう。15～16世紀代の所産と考えられる。

3は、青磁碗の口縁部である。口縁端部は強く外反、玉縁になる。装飾は現存部にはない。釉は明青緑色で貫入がある。胎土は灰色である。龍泉窯系で、14世紀後半の所産と考えられる。

4は、青磁碗の口縁部片である。外面は鎗手蓮弁が施される。釉は浅黄色で、貫入はなく、胎土は暗灰色である。龍泉窯系で、13世紀後半の所産と考えられる。

5は、青磁盤（皿？）の底部である。内面は平坦で中心はやや厚みを増す。釉は内外面および高台部端部にも施されるが、底部内面を同心円状に削り取り露胎させている。釉は緑灰色で貫入がある。胎土は白色である。類例を見ず、産地・所産時期は不明である。

6は、磁器の底部である。小片であり器形は不明であるが、釉が明青色の「ソーダ釉」と特殊である。釉は現状では、内面だけに施されているが、外面および底部内面にもわずかに残存するため、元は全面に施されていたと考えられる。産地は中国南部？を推測され、類例から16世紀代の所産と考えられる。

7は、陶器の体部である。釉が「褐釉」と特殊である。浅黄色の釉は体部外面のみに施される。内面は工具による撫でが施される。類例から器形は四耳壺と考えられ、産地は中国南部、13～14世紀の所産と考えられる。

②東海系陶器（Fig. 200-8～15、巻頭カラー図版上段）

8は、瀬戸・美濃焼の鉄釉小型壺の体部である。一部、底部も残存し、篋による切離し痕が見える。底部から内湾気味に立ち上がる体部を経て、張りのある肩部へ至る器形である。釉は黒褐色であり、体部下位と底部外面を除く全面に施される。15世紀末から16世紀代の所産と考えられる。

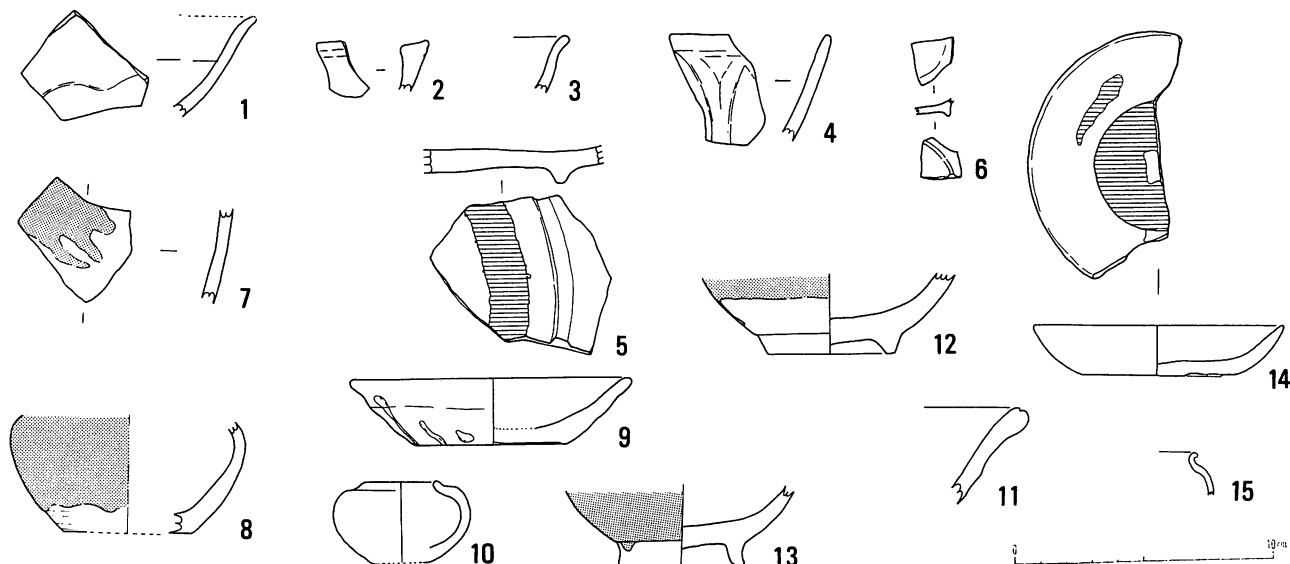


Fig. 200 遺構外出土遺物 舶載陶磁器ほか

9は、志野焼の皿である。底部には非常に低い高台が残り、上位でやや膨らむ体部を経て、丸い口縁端部へ至る器形である。釉は乳白色で全面に施され、志野焼特有の粗い器表面を見せる。16世紀末～17世紀初頭の所産と考えられる。

10は、瀬戸・美濃焼の灰釉小型無頸壺である。糸切痕の残る底部から球形の体部、明瞭な肩部、蓋受状の凹みを経て、短い口縁部へ至る器形である。釉は緑灰色であり、底部外面を除く全面に施される。器表面には、細かい気泡が見られる。13世紀代の所産と考えられる。

11は、東海系の捏鉢の口縁部である。口縁端部は玉縁状に肥厚し、口縁端部より約2cm下を撫でにより薄く仕上げている。また、口縁端部上面に一条の沈線が巡る。胎土は明白色で無釉である。14世紀代の所産と考えられる。

12は、瀬戸・美濃焼の灰釉碗の底部と体部の一部である。高台部の断面形態は台形であり、削り出しである。底部外面は中心部がやや突出する。釉は黄色で、体部外面の下位と底部外面を除く全面に施される。体部の上位から下位へ釉が流れている部分もある。胎土は黄白色であり、体部内面に胎土目積みの痕跡がある。17世紀代の所産と考えられる。

13は、瀬戸・美濃焼の灰釉碗の底部と体部の一部である。高台は断面はほぼ台形であるが裾が広がる形態であり、高台部と体部外面の境は亀裂から付高台であることがわかる。釉は明緑灰色であり、高台部内外面を除く全面に施されている。胎土は黄白色である。16世紀中頃～17世紀初頭の所産と考えられる。

14は、瀬戸・美濃焼の灰釉丸皿である。底部には高台状の低い高まりがある。底部内面は、中心が蛇の目状に高まるように成形され、釉が中心へ掛からないようにしている。おそらく、重ね焼きに対処した手法であろう。この目的通りには釉は中心へ掛からず、底部内面、体部との境に溜っている。釉は浅緑色であり、釉が溜る所は色が深くなっている。16世紀～17世紀代の所産と考えられる。

15は、瀬戸・美濃焼の鉄釉短頸壺の口縁部と体部の一部である。ほぼ直立する体部から、緩い肩部を経て、強く外反する口縁部に至る。非常に薄い器厚である。釉は全面に施され、黒褐色である。器形から小型の「茶壺」と考えられる。15～16世紀代の所産と考えられる。

また、図示はしていないが、常滑焼の大甕破片が3片出土している。(1点のみは巻頭カラー図版上段にあり)

以上のように、出土した舶載陶磁器と東海系陶器について説明を加えた。全体的には、12世紀～17世紀までの幅広い時期の陶磁器が少量づつ出土しており、集中する時期は特定しがたい。塩川遺跡の性格の一面を表しているものと考えられる。

#### e) 肥前系磁器・灯明皿

本遺跡からは肥前に産地を求めることのできる磁器が、墓壙に伴い10点出土している。これらについては、前項(「(4) - 4) 墓壙」)や観察表(Tab. 9)で述べた通りである。ここでは、遺構に伴わず出土した肥前系磁器1点を取り上げる。また、表採資料ではあるが、灯明皿を取り上げ説明を加える。なお、墓壙出土の資料については計測値、特徴等を観察表(Tab. 8)にまとめたが、遺構外の資料についてはできなかつたため、ここで示すこととする。

#### ① 肥前系磁器 (Fig. 201-1、P.1. 27-29)

図示できたものは1点のみである。出土位置は調査区中央西寄りの9-7 Gridであり、75～76号墓壙の西側より出土した。周辺状況から墓壙の副葬品であった可能性が高いが、不明である。口径は推定で8.0cm、底径は3.2cm、器高は5.0cmを測る。器形は、断面が三角形の高台部から腰の張る体部下位を経て、ほぼ直立し丸い口縁端部へ至る。全体的に青味を帯びた色調であり、外面には「柳」状の文様が施される。口縁部内面には幅広の二重圈線が施され、内面はみこみ部の外周に二重圈線が、中心部には「花」文様が施される。高台内銘はない。器表面には気泡や亀裂が見られ、質は良好とは言えない。

#### ② 灯明皿 (Fig. 201-1、2、P.1. 27-29)

2点を図示する。2は、陶器の受部付皿である。出土位置は11-15 Gridであるが、旧塩川神社境内からの表

採資料とした方が適切な表現である。口径は9.6cm、受部径は6.6cm、底径は4.0cm、器高は1.7cmを測る。ロクロ成形であり、底部には篋切痕が残る。断面三角形の受部は、口縁端部の内側約1.5cmの位置に内傾して付けられ、灯芯を支える凹が一方所に穿たれる。口縁端部より受部の端部が低くなる点が特徴である。釉は内面と口縁部外面の上位のみに薄く掛けられる。受部の凹みを中心にタールが多く付着する。産地・所産時期は不明だが、江戸に流通した19世紀代の製品（瀬戸・美濃焼）に類似する。

3は、磁器の皿である。出土位置は2の資料と同じである。口径は10.8cm、底径は3.8cm、器高は2.2cmを測る。釉は内面のみに施され、外面は露胎となる。本来、灯明皿用に作られたかどうかは不明だが、器表内外面にタールが付着している点や釉が内面のみに施される点などから灯明皿として報告する。産地・所産時期は不明である。

f) 金属製品

本遺跡から遺構に伴わず出土した金属製品には、小柄、鏢、古銭、煙管がある。古銭・煙管の計測値・铸造年代等については、観察表（Tab. 5・6・7）に示したとおりである。その他については以下に説明を加える。

①小柄・鏢（Fig. 202-1~3, P.1.27-31）

1は、小柄である。出土位置は10-8 Gridであり、全長11.9cm、最大幅1.6cm、最大厚0.5cmを測る。銅製の柄には「竹の子」意匠の高彫りが施され、僅かに刀身（鉄製）も残存する。柄は銅板を巻いて成形されているが、銅板の厚みは不明である。2は、小柄である。出土位置は10-9 Gridであり、全長9.3cm、最大幅1.4cm、最大厚0.4cmを測る。銅板（0.1cm）を巻いた柄のみの残存である。装飾は見られない。1・2の所産時期は明確ではないが、15~16世紀代に属するものと考えられる。

3は、鏢である。出土位置は10-9 Gridであり、全長6.2cm、最大幅5.1cm、最大厚0.3cmを測る。銅板の端部が内面側へ折り込まれた形状であり、原形は内面側に板等が存在したのと考えられる。四方に「ハート形」の孔が穿たれ、刀身を通す中心の孔は全長2.7cm、最大幅0.8cmを測り、逆三角の形態を呈する。所産時期は明確ではないが、15~16世紀代に属するものと考えられる。

古銭（Fig. 204-1~54）

遺構外出土の古銭は総数54点である。初鑄年代で言えば、754年（開元通宝）から1769年（寛永通宝）におよぶ資料が出土している。

煙管（Fig. 204-55~59）

遺構外出土の煙管は総数5点であ

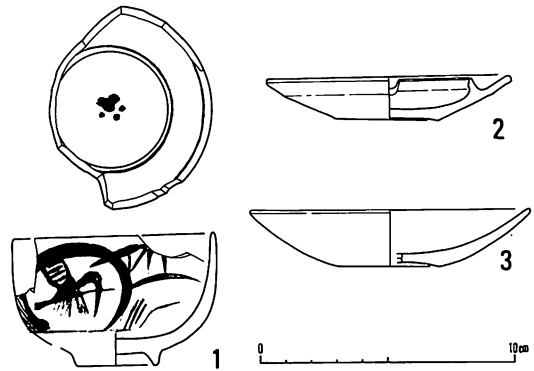


Fig. 201 遺構外出土遺物 陶磁器・灯明皿

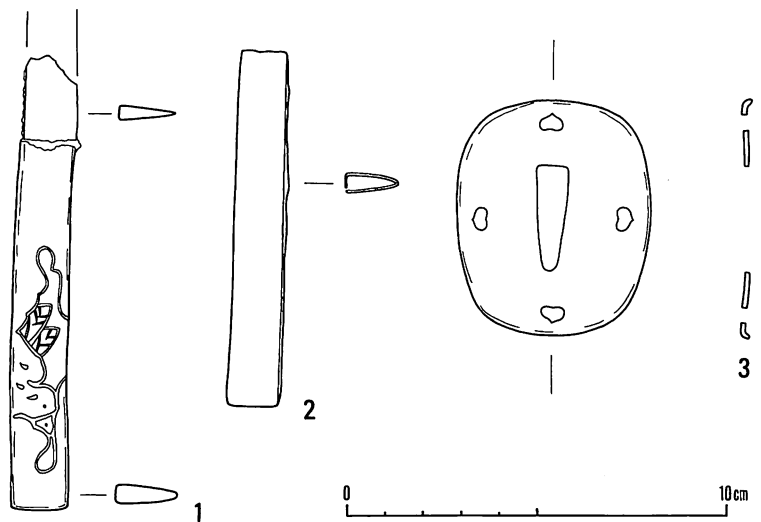


Fig. 202 遺構外出土遺物 小柄・鏢

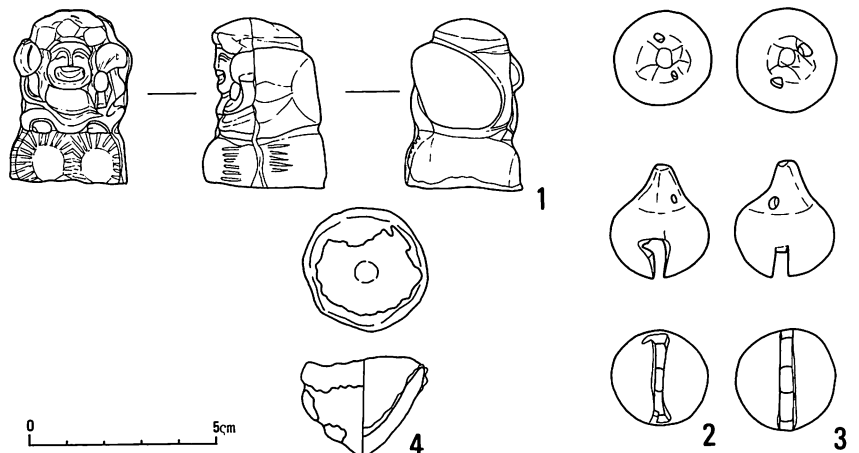


Fig. 203 遺構外出土遺物 土製品・埴塼



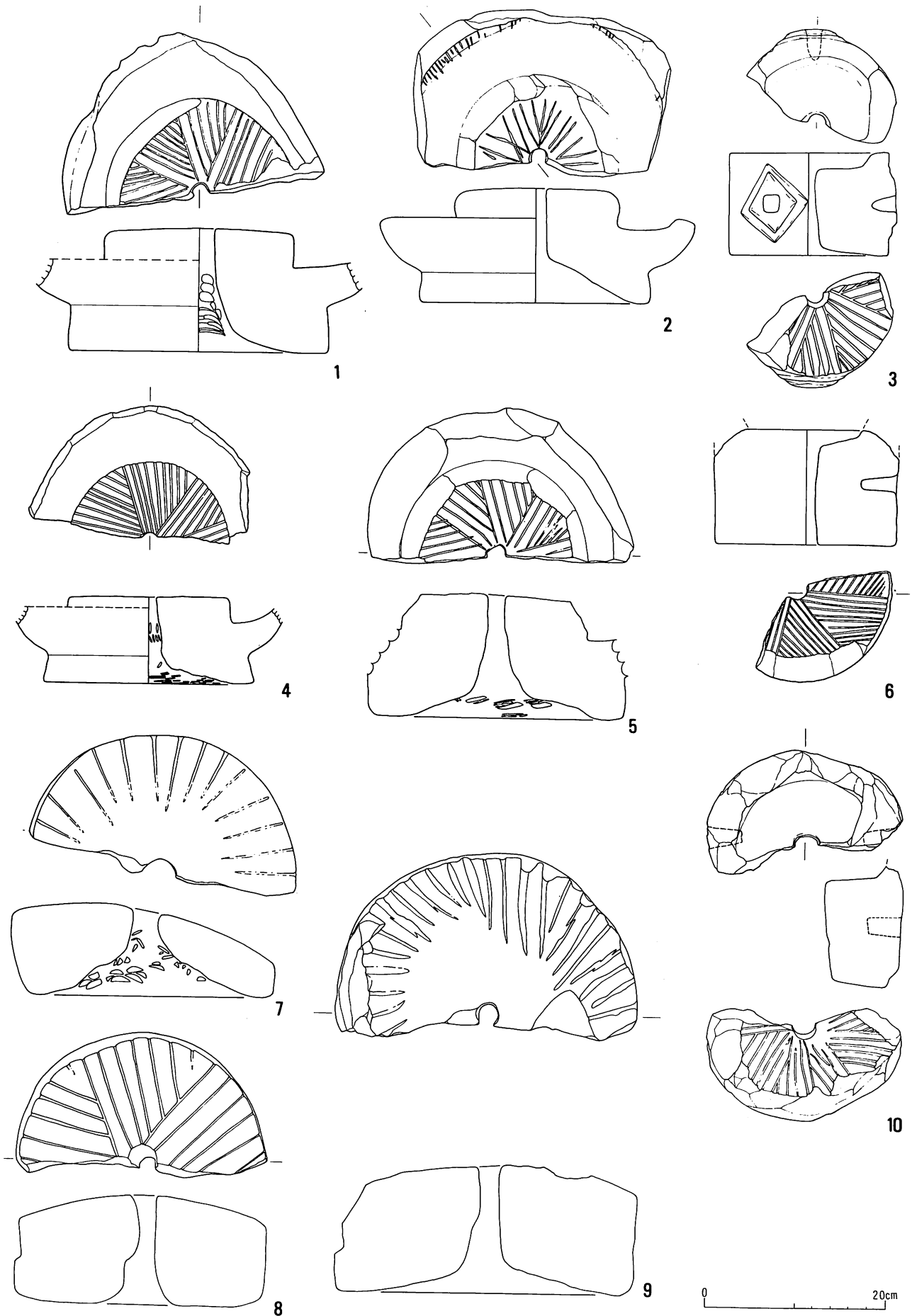


Fig. 205 遺構外出土遺物 石製品①

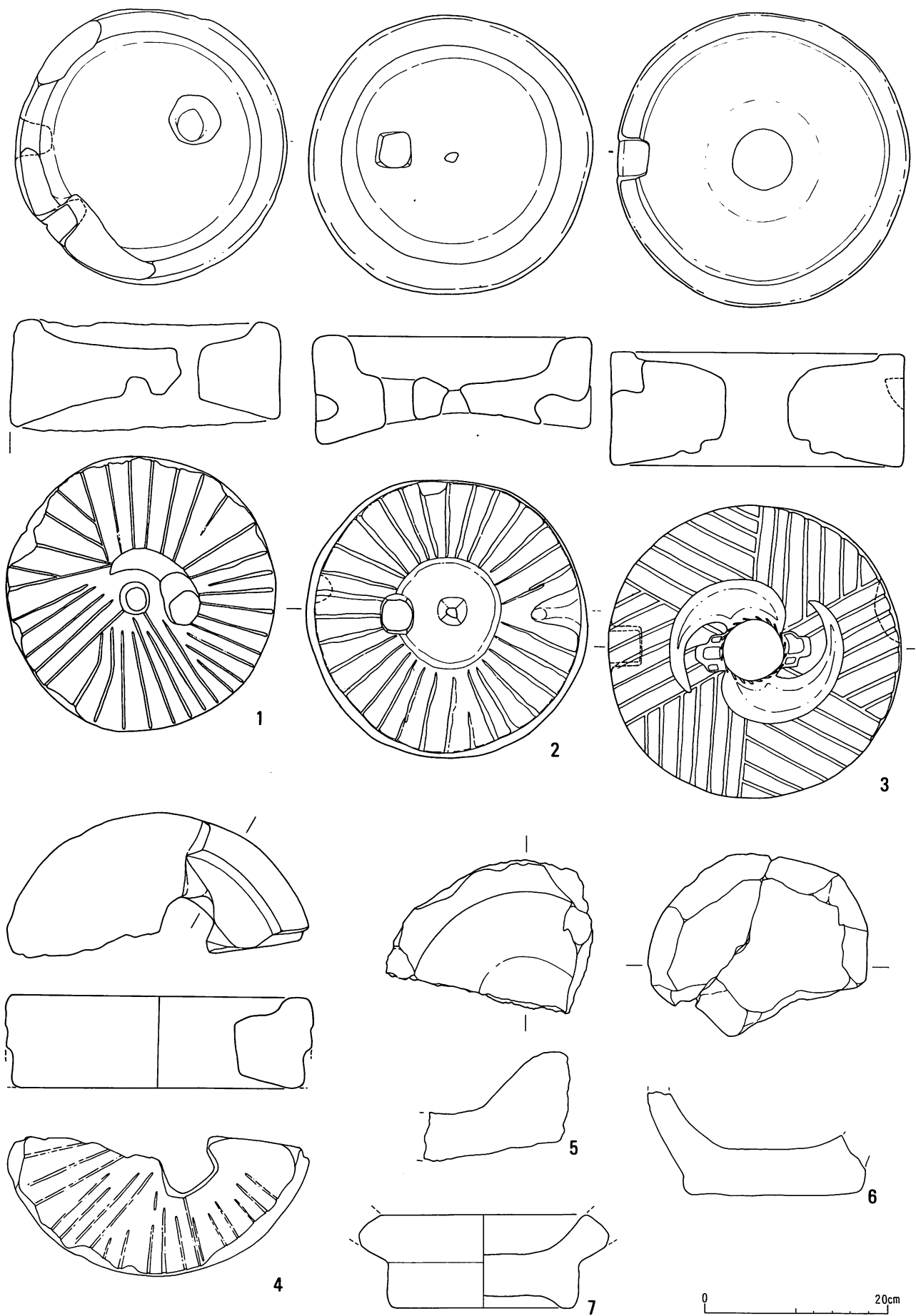
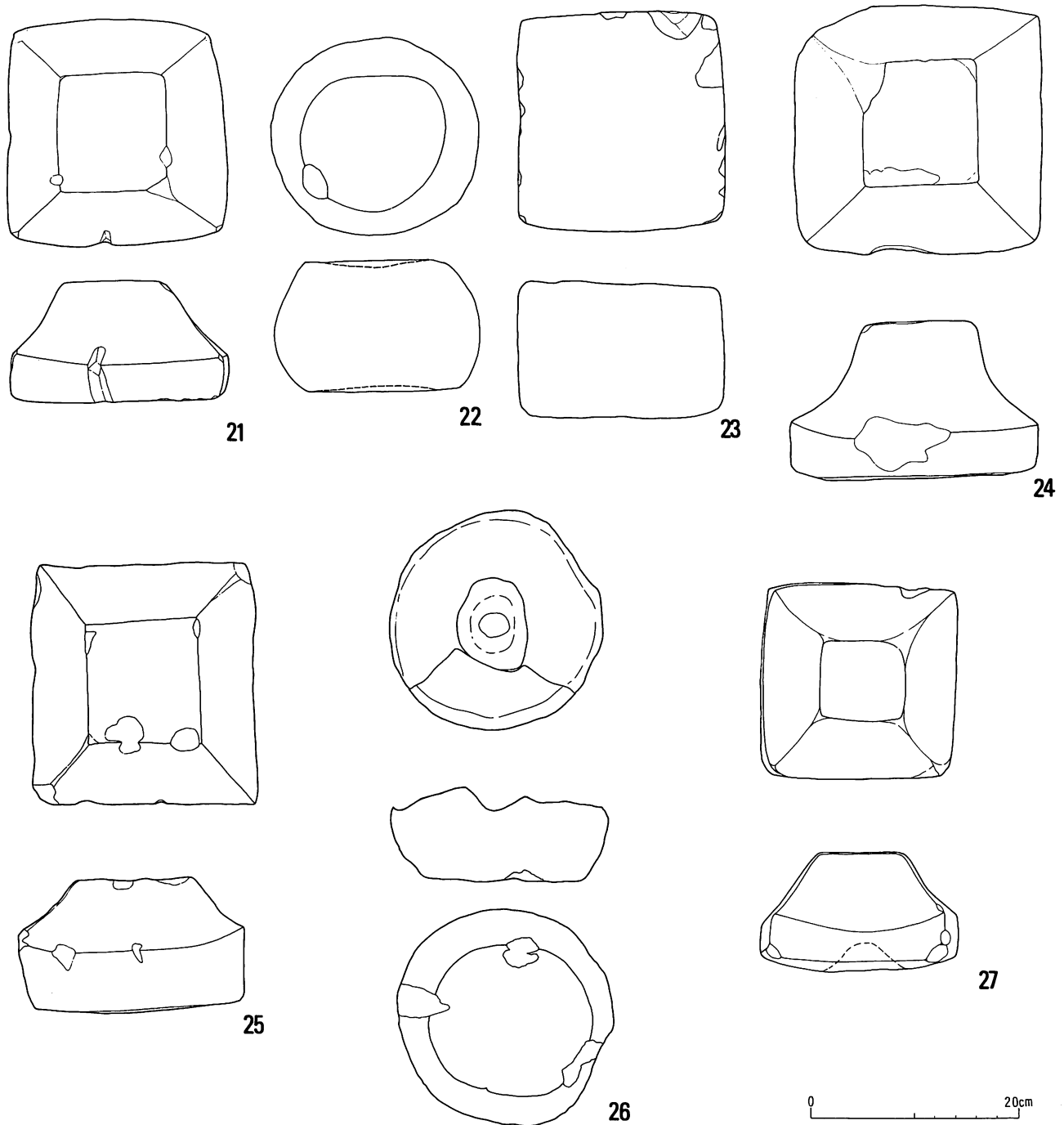


Fig. 206 遺構外出土遺物 石製品②





五輪塔のナンバーは「五輪塔集中区」と「B区」の資料について通して付したため、No.21 からとなっている。

Fig. 207 遺構外出土遺物 石製品③

り、いずれも雁首である。本遺跡からは墓壙に伴い煙管が多く出土しており、これらの大部分も副葬品であった可能性が高い。

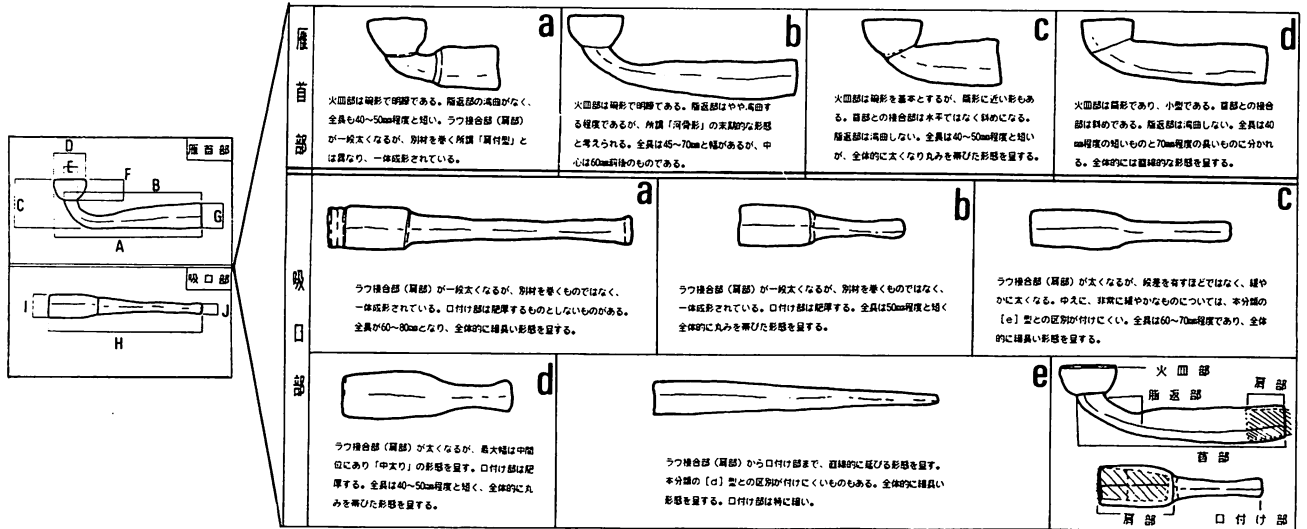
g) 土製品・その他 (Fig. 203-1~3, P.1.27-31)

1は、「大黒天」を模した泥人形である。4-11 Gridより出土した。型作り成形であり、高さ4.5cm、最大幅3.4cmを測る。2・3は、土鈴である。両者とも13-11 Gridから出土した。2・3ともは高さ2.9cm、最大幅2.6cmを測り、作りは粗雑である。1・2・3とも産地は不明だが、19世紀代の所産と考えられる。4は、埴塙である。10-13 Gridから出土した。素材は不明だが、おそらく土製と考えられる。口径3.0cm、器高2.7cmを測り尖底となる。器表面には鉛状の付着物がある。所産時期は不明だが、中世の埴塙と類似する。

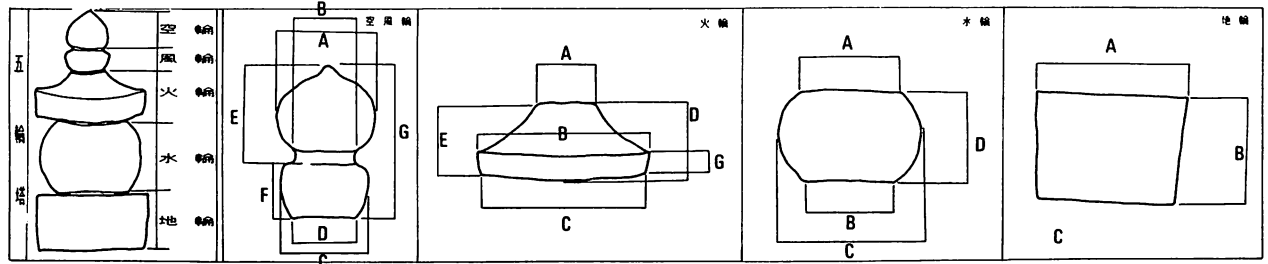
h) 石製品 (Fig. 205~207, P.1.28-37~39, P.1.29-40~44)

遺構外出土の石製品は、石臼・茶臼・五輪塔・不明石製品である。詳細は観察表 (Tab.10~15) に依られたい。

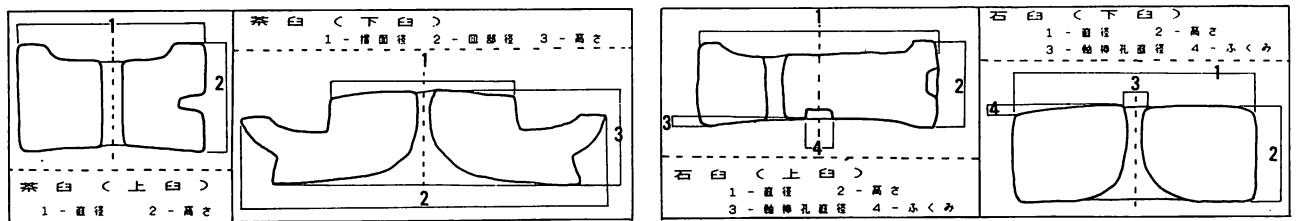
# 遺物観察表 (中・近世)



煙管 計測位置・分類・部位名称 [煙管観察表 (Tab. 7) 対応]



五輪塔 計測位置 [五輪塔観察表 (Tab. 10~13) 対応]



茶臼および石臼 計測位置 [石製品観察表 (Tab. 14・15) 対応]

報告No	調査No	報告No	調査No	報告No	調査No	報告No	調査No	報告No	調査No	報告No	調査No	報告No	調査No	報告No	調査No
1号	4号	14号	22号	27号	38号	40号	63号	53号	7号	66号	113号	79号	127号	92号	129号
2号	5号	15号	27号	28号	51号	41号	66号	54号	8号	67号	109号	80号	132号	93号	141号
3号	9号	16号	30号	29号	52号	42号	67号	55号	14号	68号	112号	81号	122号	94号	138号
4号	10号	17号	26号	30号	53号	43号	68号	56号	15号	69号	110号	82号	123号	95号	144号
5号	11号	18号	28号	31号	54号	44号	69号	57号	79号	70号	111号	83号	124号	96号	142号
6号	12号	19号	31号	32号	70号	45号	71号	58号	101号	71号	114号	84号	125号	97号	143号
7号	16号	20号	33号	33号	55号	46号	75号	59号	102号	72号	115号	85号	130号	98号	145号
8号	17号	21号	21号	34号	56号	47号	77号	60号	103号	73号	116号	86号	126号	99号	146号
9号	18号	22号	35号	35号	57号	48号	74号	61号	105号	74号	117号	87号	128号	100号	147号
10号	19号	23号	36号	36号	59号	49号	80号	62号	104号	75AB号	118号	88号	139号	101号	148号
11号	20号	24号	23号	37号	60号	50号	78号	63号	106号	76号	119号	89号	131号	102号	151号
12号	24号	25号	34号	38号	61号	51号	90号	64号	107号	77号	121号	90号	140号	103号	154号
13号	25号	26号	37号	39号	62号	52号	86号	65号	108号	78号	120号	91号	133号	104号	152号

※B地区の墓塚(中近世)の調査時には遺構外出土の骨片も含めてナンバーを付したため、墓塚として報告できないものが存在した。そのため本報告書において「墓塚」として報告できるものについては新ナンバーを与え、欠番が存在しないようにした。保管している遺物の註記や記録(図面・写真等)については調査時の旧ナンバーが付されており、今後の混乱を避けるために敢えて本表を付した。  
Tab. 3 B地区墓塚ナンバー新旧対応表(報告書の新ナンバー→調査時の旧ナンバー)

Fig.No	銭名	鑄銭地・種類	初鑄年次	銭径	穿径	厚さ	重量	Fig.No	銭名	鑄銭地・種類	初鑄年次	銭径	穿径	厚さ	重量		
101-3	2	寛永通寶	丸屋銭	正徳4年(1714年)	25.8	5.8	1.1	3.5	127-4	30	寛永通寶	正字・背11波	明和6年(1769年)	27.7	6.2	1.2	4.6
101-4	2	寛永通寶	京都・七條銭	享保11年(1726年)	24.7	6.6	1.1	2.7	128-3	31	寛永通寶	不明		24.2	6.0	1.2	1.8
101-5	2	寛永通寶	亀戸・大字	元文2年(1737年)	24.0	6.7	1.1	2.5	130-3	33	寛永通寶	古寛永		24.4	5.9	1.4	3.1
101-6	2	寛永通寶	亀戸・大字	元文2年(1737年)	23.9	6.7	1.0	2.9	132-1	35	治平元寶	北宋銭	治平元年(1064年)	23.3	6.1	1.3	3.3
101-7	2	寛永通寶	新寛永						132-2	35	皇宋通寶	北宋銭	宝元2年(1039年)	24.0	6.7	1.2	2.9
103-1	4	寛永通寶	大阪細字背元	寛保元年(1741年)	25.7	6.1	1.2	2.2	132-3	35	元聖元寶	北宋銭	天聖元年(1023年)	24.4	5.9	1.6	4.2
103-2	4	寛永通寶	新寛永		24.0	6.0	1.1	2.7	134-1	37	寛永通寶	正字文・背文	寛文2年(1668年)	25.2	6.0	1.1	2.8
103-3	4	寛永通寶	水戸・古寛永	寛永12年(1635年)	24.7	5.4	1.2	3.3	134-2	37	寛永通寶	芝銭・古寛永	寛永13年(1636年)	24.0	5.5	1.2	3.6
103-4	4	寛永通寶	不明		24.3	5.8	1.2	2.3	134-3	37	寛永通寶	新寛永		24.1	6.0	1.2	3.1
104-1	5	寛永通寶	吉田島・縮字	元文4年(1739年)	22.8	7.4	1.0	2.4	134-4	37	寛永通寶	虎ノ尾寛小字	元文元年(1736年)	23.0	6.2	0.9	2.0
105-1	6	寛永通寶	亀戸・背文	寛文8年(1668年)	25.3	6.0	1.2	3.6	136-2	40	寛永通寶	秋田・大字	元文3年(1737年)	23.2	5.8	1.3	3.4
105-2	6	寛永通寶	耳白銭	正徳4年(1714年)	24.8	5.9	1.2	3.0	136-3	40	寛永通寶	新寛永		23.1	6.0	1.4	3.5
105-3	6	寛永通寶	伏見手	元文元年(1736年)	23.6	5.8	1.2	2.4	136-4	40	寛永通寶	新寛永		22.8	6.3	1.2	2.6
105-4	6	寛永通寶	旗江銭	享保期(1716年頃)	22.1	6.2	1.2	2.4	136-5	40	寛永通寶	新寛永		23.8	6.2	1.1	2.5
107-1	8	寛永通寶	吉田島・縮字	元文4年(1739年)	21.9	6.8	0.9	1.9	136-6	40	寛永通寶	新寛永		23.1	6.0	1.3	3.6
107-2	8	寛永通寶	亀戸・背文	寛文8年(1668年)	25.0	5.7	1.2	3.1	136-7	40	寛永通寶	新寛永		21.9	6.8	0.9	1.8
107-3	8	寛永通寶	水戸・古寛永	寛永12年(1635年)	25.0	5.8	1.2	3.4	139-2	43	寛永通寶	新寛永		23.3	6.3	1.1	2.1
109-2	10	寛永通寶	新寛永		24.1	6.6	1.4	2.8	139-3	43	寛永通寶	新寛永		25.5	6.5	1.2	1.2
109-3	10	寛永通寶	新寛永		23.0	6.8	1.3	1.8	139-4	43	寛永通寶	新寛永		22.1	5.7	0.9	1.6
109-4	10	寛永通寶	亀戸・背文	寛文8年(1668年)	25.0	5.5	1.1	4.0	139-5	43	寛永通寶	新寛永					0.6
110-2	11	寛永通寶	古寛永		24.5	5.5	1.4	3.6	140-1	44	寛永通寶	芝銭・古寛永	寛永13年(1636年)	25.0	6.0	1.2	3.3
110-3	11	寛永通寶	亀戸・背文	寛文8年(1668年)	25.4	5.7	1.6	2.6	140-2	44	寛永通寶	古寛永		23.0	6.3	1.0	2.1
111-1	12	寛永通寶	水戸・古寛永	寛永12年(1635年)	24.7	5.5	1.4	2.4	140-3	44	寛永通寶	古寛永		23.0	6.9	1.0	2.4
112-4	13	寛永通寶	古寛永		24.9	6.0	1.1	2.8	140-4	44	寛永通寶	古寛永		24.0	5.8	1.2	3.3
112-5	13	寛永通寶	古寛永		24.6	6.2	1.1	2.9	144-1	48	寛永通寶	新寛永		22.8	6.5	1.2	2.6
112-6	13	寛永通寶	古寛永		23.3	6.3	1.2	2.4	146-5	50	寛永通寶	吉田島・異永	元文4年(1739年)	23.3	5.0	1.4	2.4
112-7	13	寛永通寶	古寛永		24.0	5.7	1.3	2.2	146-6	50	寛永通寶	新寛永		22.6	6.4	0.9	2.0
113-6	14	皇宋通寶	北宋銭	宝元2年(1039年)	23.9	7.2	1.1	2.8	148-1	52	寛永通寶	新寛永		23.4	6.2	1.2	2.1
113-7	14	寛永通寶	新寛永		25.6	6.0	1.4	2.8	149-4	54	寛永通寶	萩原銭	元禄13年(1700年)	23.4	5.5	1.3	3.3
113-8	14	寛永通寶	新寛永		23.9	6.1	1.2	3.2	149-5	54	寛永通寶	日光・正字	元文2年(1737年)	22.3	6.0	1.3	2.4
113-9	14	寛永通寶	新寛永		23.6	6.2	1.2	3.0	149-6	54	寛永通寶	含二水永	元文元年(1736年)	22.9	6.5	1.4	2.5
115-4	16	寛永通寶	古寛永		24.8	6.0	1.0	2.6	149-7	54	寛永通寶	亀戸・大字	元文2年(1737年)	24.0	6.8	1.7	2.8
115-5	16	寛永通寶	古寛永		25.0	6.0	1.3	3.6	149-8	55	寛永通寶	新寛永		23.5	6.1	1.3	3.2
115-6	16	聖宋元寶	北宋銭	聖宋元年(1101年)	24.1	6.6	1.2	2.6	149-9	55	寛永通寶	新寛永		22.7	6.1	1.3	2.9
116-3	17	文久永寶	草文・背11波	文久3年(1863年)	27.0	7.0	1.2	4.0	150-3	57	寛永通寶	新寛永		24.3	6.2	1.1	2.6
116-4	17	寛永通寶	新寛永		25.2	6.4	1.2	3.2	150-4	57	寛永通寶	京都・七條銭	享保11年(1726年)	24.0	6.3	1.2	2.7
116-5	17	寛永通寶	新寛永		24.4	6.4	1.3	2.9	150-5	57	寛永通寶	坂本銭	寛永13年(1636年)	24.1	5.8	1.0	2.5
116-6	17	寛永通寶	新寛永		23.3	6.0	1.4	3.6	150-6	57	寛永通寶	新寛永		22.7	6.5	1.3	2.3
116-7	17	寛永通寶	新寛永		23.6	6.4	1.2	2.9	150-7	57	寛永通寶	新寛永		22.3	6.6	1.2	2.0
116-8	17	寛永通寶	新寛永		24.4	6.3	1.1	3.4	151-3	58	寛永通寶	浅草・古寛永	寛永13年(1636年)	24.2	6.0	1.3	3.1
116-9	17	寛永通寶	新寛永		24.3	6.3	0.8	2.4	151-4	58	寛永通寶	新寛永		24.3	5.8	1.2	3.3
117-1	18	寛永通寶	新寛永		24.2	6.4	0.9	1.7	151-5	58	寛永通寶	新寛永		23.0	6.8	1.2	2.0
118-5	19	寛永通寶	退点文・背文	寛文8年(1668年)	25.4	5.7	1.4	4.1	151-6	58	寛永通寶	新寛永		22.1	5.7	1.3	2.0
118-6	19	寛永通寶	新寛永		24.3	5.9	1.4	2.1	153-1	60	寛永通寶	新寛永		25.7	5.8	1.1	3.5
120-6	21	寛永通寶	新寛永		23.4	6.5	1.2	2.7	153-2	60	寛永通寶	新寛永		24.2	5.4	1.3	3.5
120-7	21	寛永通寶	新寛永		23.9	6.4	1.1	2.5	153-3	60	寛永通寶	新寛永		23.9	6.0	1.2	2.8
120-8	21	寛永通寶	新寛永		24.5	6.8	0.9	1.8	153-4	60	寛永通寶	新寛永		23.2	5.9	1.1	3.0
120-11	22	寛永通寶	狹穿孔・背小	元文2年(1737年)	23.1	6.5	1.0	2.3	153-5	60	寛永通寶	新寛永		24.4	5.7	1.1	2.7
120-12	22	寛永通寶	新寛永		23.1	6.3	1.1	2.9	153-6	60	寛永通寶	含二水永	元文元年(1736年)	22.9	6.4	1.1	2.3
120-13	22	寛永通寶	新寛永		24.9	5.4	1.8	3.5	153-7	60	寛永通寶	新寛永		22.8	5.8	1.0	2.3
125-2	28	寛永通寶	吉田島・縮字	元文4年(1739年)	22.7	7.3	1.0	2.3	153-8	60	寛永通寶	大阪細字背元	寛保元年(1741年)	22.7	6.4	1.1	2.3
125-3	28	寛永通寶	新寛永		22.4	6.4	1.0	2.1	153-9	60	寛永通寶	新寛永		24.8	5.5	1.3	3.7
127-3	30	寛永通寶	正字・背11波	明和6年(1769年)	28.4	6.2	1.2	4.6	153-10	60	寛永通寶	新寛永		23.5	6.3	0.9	2.3

Tab. 4 B地区出土 古銭(銅銭) 観察表①

Fig. No	銭名	鑄銭地・種類	初鑄年次	銭径	穿径	厚さ	重量	Fig. No	銭名	鑄銭地・種類	初鑄年次	銭径	穿径	厚さ	重量		
154-1	61	寛永通寶	新寛永		22.3	6.1	1.3	2.3	181-6	90	寛永通寶	新寛永		22.3	6.5	1.1	1.8
154-2	61	寛永通寶	新寛永		23.0	6.1	1.1	2.3	182-4	91	熙寧元寶	北宋銭	熙寧元年(1068年)	24.3	7.0	1.1	2.7
154-3	61	寛永通寶	新寛永		23.1	6.5	1.1	2.2	182-5	91	永樂通寶	明銭	永樂6年(1408年)	25.0	6.0	1.4	3.2
154-4	61	寛永通寶	古寛永		24.7	5.7	1.3	3.6	182-6	91	天禧通寶	北宋銭	天禧年間(1017年~)	23.9	6.5	1.0	2.3
154-5	61	寛永通寶	古寛永		25.0	5.5	1.3	3.6	184-2	93	寛永通寶	新寛永		23.1	6.5	1.3	2.4
155-1	62	寛永通寶	新寛永		23.0	5.9	1.2	2.5	184-3	93	寛永通寶	新寛永		22.3	6.8	1.5	2.3
155-2	62	寛永通寶	古寛永		24.4	5.6	1.3	3.1	185-3	94	寛永通寶	新寛永		24.2	6.2	1.3	3.4
155-3	62	寛永通寶	新寛永		22.8	6.6	1.2	2.4	185-4	94	寛永通寶	新寛永		22.2	6.3	1.0	2.5
158-1	66	寛永通寶	丸屋銭	正徳4年(1714年)	25.6	5.7	1.2	3.8	185-5	94	寛永通寶	新寛永		24.5	6.3	1.3	3.0
158-2	66	寛永通寶	新寛永		25.2	6.0	1.3	3.9	186-3	95	寛永通寶	振江銭	享保期(1716年頃)	23.0	6.5	1.0	2.6
158-3	66	寛永通寶	新寛永		25.3	6.7	0.9	2.1	186-4	95	寛永通寶	新寛永		22.9	6.9	0.9	1.6
158-4	66	寛永通寶	吉田島・縮字	天文4年(1739年)	21.5	6.7	0.9	1.8	186-5	95	寛永通寶	新寛永		24.5	6.6	0.9	2.5
158-5	66	元豊通寶	北宋銭	元豊元年(1078年)	23.5	7.2	1.2	2.3	186-6	95	寛永通寶	新寛永		22.7	5.4	1.1	2.4
159-3	67	寛永通寶	新寛永		22.2	6.5	0.9	1.9	186-7	95	寛永通寶	秋田・大字	元文3年(1737年)	23.6	6.0	1.3	3.0
159-4	67	寛永通寶	新寛永		23.2	6.2	1.1	2.4	186-8	95	寛永通寶	新寛永		25.2	6.0	1.3	3.6
159-5	67	寛永通寶	新寛永		23.3	6.5	1.3	3.2	187-1	96	寛永通寶	新寛永		23.2	6.1	0.9	2.5
159-6	67	寛永通寶	龜戸・大字	元文2年(1736年)	23.8	6.9	1.0	2.6	189-3	98	寛永通寶	大阪細字背元	寛保元年(1741年)	22.6	6.3	1.0	2.3
159-7	67	寛永通寶	古寛永		23.2	5.9	1.2	3.3	189-4	98	寛永通寶	日光・正字	元文2年(1737年)	22.7	6.6	1.0	2.5
164-1	72	寛永通寶	大阪細字背元	寛保元年(1741年)	23.3	6.4	1.2	2.4	191-1	100	寛永通寶	退点文	寛文8年(1668年)	25.2	6.2	1.2	3.4
164-2	72	寛永通寶	新寛永		23.1	6.5	1.1	2.9	191-2	100	寛永通寶	古寛永		23.7	6.4	0.9	2.8
164-3	72	寛永通寶	京都・七條銭	享保11年(1726年)	24.6	6.6	1.2	2.6	191-3	100	寛永通寶	古寛永		24.3	5.8	0.9	2.4
165-1	73	寛永通寶	新寛永		24.2	5.8	1.4	3.2	191-4	100	寛永通寶	新寛永		24.4	5.9	1.2	3.1
165-2	73	寛永通寶	新寛永		24.2	5.9	1.1	3.0	191-5	100	寛永通寶	新寛永		23.5	6.3	1.3	2.3
165-3	73	寛永通寶	新寛永		24.1	6.2	1.3	2.4	192-1	101	寛永通寶	新寛永		25.0	6.2	1.0	2.4
165-4	73	寛永通寶	新寛永		22.7	6.0	1.3	2.6	193-1	102	皇宋通寶	北宋銭(篆)	宝元2年(1039年)	24.2	6.9	1.4	3.0
167-4	75	寛永通寶	新寛永		24.5	6.0	1.2	3.0	193-2	102	皇宋通寶	北宋銭(篆)	宝元2年(1039年)	23.7	6.4	1.2	2.9
167-5	75	寛永通寶	古寛永		24.1	5.9	1.1	2.8	193-3	102	政和通寶	北宋銭(真)	政和通寶(1111年)	23.8	6.4	1.0	2.8
167-6	75	寛永通寶	新寛永		23.1	6.4	1.2	2.6	193-4	102	熙寧元寶	北宋銭(篆)	熙寧元年(1068年)	24.0	6.8	1.3	3.4
167-7	75	寛永通寶	古寛永		24.4	5.5	1.5	3.4	193-5	102	至和通寶	北宋銭(篆)	至和元年(1054年)	24.0	6.8	1.2	2.5
167-8	75	寛永通寶	新寛永		23.4	7.1	1.0	1.9	193-6	102	紹聖元寶	北宋銭(篆)	紹聖元年(1094年)	24.4	7.4	1.3	3.3
167-9	75	寛永通寶	新寛永		22.5	6.3	1.2	1.7	193-7	102	紹聖元寶	北宋銭	紹聖元年(1094年)	25.0	6.4	1.2	2.2
167-10	75	寛永通寶	含二水永	元文元年(1736年)	22.7	6.6	1.0	2.4	195-4	104	寛永通寶	新寛永		23.4	5.8	0.9	2.1
170-1	78	寛永通寶	新寛永		24.2	6.7	1.3	2.2	195-5	104	寛永通寶	新寛永		23.2	6.4	1.2	2.8
170-2	78	寛永通寶	新寛永		24.5	6.7	0.9	1.8	195-6	104	寛永通寶	伏見手	元文元年(1736年)	24.3	7.2	0.9	1.8
170-3	78	寛永通寶	四年銭小様	明和4年(1767年)	22.3	6.4	1.3		204-1	外	淳熙元寶	南宋銭	淳熙元年(1174年)	23.8	6.5	1.0	2.5
173-1	81	寛永通寶	龜戸・大字	元文2年(1737年)	23.8	6.7	1.1	2.7	204-2	外	嘉定通寶	南宋銭	嘉定元年(1208年)	24.0	6.5	1.0	3.0
174-1	82	寛永通寶	新寛永		23.9	7.0	1.3	1.7	204-3	外	皇宋通寶	北宋銭(篆)	宝元2年(1039年)	24.5	7.2	1.0	3.2
174-2	82	寛永通寶	新寛永		23.0	5.3	1.5	2.1	204-4	外	元符通寶	北宋銭(篆)	元符元年(1098年)	24.5	6.8	0.9	3.2
175-1	83	寛永通寶	正字・背11波	明和6年(1769年)	28.5	6.3	1.3	5.1	204-5	外	紹聖元寶	北宋銭(篆)	紹聖元年(1094年)	22.7	6.1	1.0	3.5
175-2	83	寛永通寶	正字・背11波	明和6年(1769年)	28.7	6.5	1.3	5.1	204-6	外	皇宋通寶	北宋銭(真)	宝元2年(1039年)	24.9	7.0	0.9	2.3
175-3	83	寛永通寶	正字・背11波	明和6年(1769年)	28.3	6.2	1.3	4.9	204-7	外	天聖元寶	北宋銭(篆)	天聖元年(1023年)	25.4	7.5	1.3	2.8
175-4	83	寛永通寶	正字・背11波	明和6年(1769年)	28.4	6.5	1.2	4.8	204-8	外	元豊通寶	北宋銭(篆)	元豊元年(1078年)	23.7	5.9	0.9	2.6
175-5	83	寛永通寶	正字・背11波	明和6年(1769年)	28.2	6.6	1.3	5.6	204-9	外	寛永通寶	新寛永		24.0	5.6	1.0	2.7
175-6	83	寛永通寶	新寛永		22.8	6.5	1.1	2.1	204-10	外	寛永通寶	新寛永		24.3	6.3	0.9	3.7
176-3	84	寛永通寶	新寛永		23.4	6.2	1.5	3.1	204-11	外	寛永通寶	新寛永		23.3	6.4	0.9	2.1
178-1	87	寛永通寶	新寛永		21.6	6.3	1.1	1.9	204-12	外	寛永通寶	新寛永		23.8	5.6	0.8	2.5
178-2	87	寛永通寶	新寛永		23.8	5.4	1.4		204-13	外	景德元寶	北宋銭	景德元年(1044年)	24.0	5.9	1.2	3.2
180-1	89	寛永通寶	正字・背文	寛文8年(1668年)	25.3	5.3	1.3	3.5	204-14	外	文久永寶		文久3年(1863年)	26.2	6.2	1.1	3.6
180-2	89	寛永通寶	新寛永		23.0	6.1	1.1	1.8	204-15	外	文久永寶		文久3年(1863年)	26.5	5.6	1.0	3.7
180-3	89	寛永通寶	新寛永		23.0	6.3	1.0	2.0	204-16	外	文久永寶	草文	文久3年(1863年)	26.9	7.5	1.1	3.0
181-3	90	寛永通寶	大阪細字背元	寛保元年(1741年)	23.7	5.4	1.5	2.5	204-17	外	文久永寶		文久3年(1863年)	25.7	6.1	1.0	3.7
181-4	90	寛永通寶	新寛永		23.3	6.5	1.0	2.4	204-18	外	皇宋通寶	北宋銭(真)	宝元2年(1039年)	24.0	6.7	1.0	3.2
181-5	90	寛永通寶	新寛永		23.0	6.8	1.3	2.2	204-19	外	不明			23.0	6.0	0.8	1.9

Tab. 5. B地区出土 古銭(銅銭) 観察表②

Fig.No	裏	銭名	鑄銭地・種類	初鑄年次	銭径	穿径	厚さ	重量	Fig.No	裏	銭名	鑄銭地・種類	初鑄年次	銭径	穿径	厚さ	重量
204-20	外	熙寧元寶	北宋銭(篆)	熙寧元年(1068年)	24.5	6.7	1.0	3.1	204-38	外	寛永通寶	新寛永		23.1	6.1	0.9	2.3
204-21	外	祥符通寶	北宋銭	大中祥符2年(1009)	23.9	6.3	0.8	2.9	204-39	外	寛永通寶	狭穿孔・背小	元文2年(1737年)	22.8	6.4	1.0	3.7
204-22	外	祥符元寶	北宋銭	大中祥符元年(1008)	22.2	6.3	1.0	2.3	204-40	外	祥符通寶	北宋銭	大中祥符2年(1009)	24.7	6.4	0.9	3.2
204-23	外	景裕元寶	北宋銭(真)	景裕元年(1034年)	24.3	6.0	0.9	3.0	204-41	外	祥符元寶	北宋銭	大中祥符元年(1008)	24.3	6.3	1.0	2.4
204-24	外	永樂通寶	明銭?	永樂6年(1408年)	24.8	5.4	1.4	4.2	204-42	外	紹聖元寶	北宋銭	紹聖元年(1094年)	24.0	6.4	1.2	3.1
204-25	外	開元通寶	唐銭	武徳4年(621年)	24.6	6.7	1.0	3.1	204-43	外	太平通寶	北宋銭	太平興国元年(976)	23.7	6.2	0.8	2.2
204-26	外	皇宋通寶	北宋銭(真)	宝元2年(1039年)	24.0	6.8	1.1	3.3	204-44	外	元祐通寶	北宋銭	元祐元年(1086年)	23.6	6.3	1.2	2.9
204-27	外	紹聖元寶	北宋銭	紹聖元年(1094年)	23.7	6.7	0.9	2.8	204-45	外	熙寧元寶	北宋銭(真)	熙寧元年(1068年)	24.1	6.5	1.2	3.3
204-28	外	嘉祐通寶	北宋銭(篆)	嘉祐元年(1056年)	24.0	6.7	0.9	3.0	204-46	外	聖宗元寶	北宋銭	建中靖国元年(1101)	23.9	6.2	1.0	3.2
204-29	外	嘉祐通寶	北宋銭(真)	嘉祐元年(1056年)	23.5	6.4	0.9	2.8	204-47	外	皇宋通寶	北宋銭(真)	宝元2年(1039年)	24.1	6.9	1.2	3.1
204-30	外	洪武通寶	明銭	洪武元年(1368年)	23.5	5.6	1.5	3.1	204-48	外	開元通寶	唐銭	武徳4年(621年)	24.3	6.2	0.9	2.5
204-31	外	開元通寶	唐銭	武徳4年(621年)	24.0	6.0	1.1	3.1	204-49	外	永樂通寶	明銭?	永樂6年(1408年)	24.3	5.4	1.4	3.0
204-32	外	皇宋通寶	北宋銭(真)	宝元2年(1039年)	23.0	6.8	1.0	3.2	204-50	外	皇宋通寶	北宋銭(篆)	宝元2年(1039年)	22.8	6.8	1.0	3.2
204-33	外	永樂通寶	明銭?	永樂6年(1408年)	24.7	5.5	1.0	3.8	204-51	外	元豐元寶	北宋銭(真)	元豐元年(1078年)	23.7	6.8	1.0	2.8
204-34	外	政和通寶	北宋銭	政和元年(1111年)	24.2	6.2	1.0	3.4	204-52	外	不明			23.4	6.9	0.7	2.4
204-35	外	熙寧元寶	北宋銭(篆)	熙寧元年(1068年)	23.9	6.7	1.1	3.2	204-53	外	政和通寶	北宋銭	政和元年(1111年)	24.4	6.4	1.1	3.5
204-36	外	寛永通寶	新寛永		23.4	6.4	0.9	3.2	204-54	外	天聖元寶	北宋銭	天聖元年(1023年)	24.5	5.8	1.4	3.5
204-37	外	寛永通寶	新寛永		25.3	5.7	1.1	3.7	90-1	20	皇宋通寶	北宋銭(篆)	宝元2年(1039年)	24.0	6.1	0.9	3.0
									90-2	20	皇宋通寶	北宋銭(真)	宝元2年(1039年)	24.5	6.5	1.0	2.8
									90-3	20	景德元寶	北宋銭	景德元年(1004年)	25.2	6.0	1.4	3.5
									90-4	20	元祐通寶	北宋銭(真)	元祐元年(1086年)	24.9	7.0	1.2	3.3
									90-5	20	景祐元寶	北宋銭(篆)	景祐元年(1034年)	25.0	5.9	0.9	2.7

註1. 本表(Tab.4~6)はB地区出土の古銭のうち、銅銭についての観察結果をまとめたものである。  
 註2. Fig.101~Fig.195までの古銭は墓堀出土の遺物、Fig.204の古銭は遺構外出土の遺物、Fig.90の古銭は2号段六状遺構内の出土遺物である。  
 註3. 寛永通寶の鑄銭地・種類・初鑄年次については、なるべく細分類するよう努めたが、判別が困難な資料も多く存在した。そのため「古寛永(1626年~1667年)」と「新寛永(1668年~1869年)」までのみしか分類できなかったものもある。  
 註4. 計測値の単位は、銭径・穿径がmm(ミリメートル)、重量はg(グラム)である。また、計測

Tab. 6 B地区出土古銭(銅銭)観察表③

墓	雁首音部								吸口音部				墓	雁首音部								吸口音部					
	Fig.No	A	B	C	D	E	F	G	備考	Fig.No	H	I		J	Fig.No	A	B	C	D	E	F	G	備考	Fig.No	H	I	J
1	100-1	60	55	28	15	7	9	11	雁b	---	---	---	---	56	149-1	53	56	15	14	8	7	9	雁c・d?/吸e	149-2	60	11	6
2	101-1	44	40	20	17	11	9	11	雁b/吸e	101-2	80	11	4	61	154-7				7	7	11	雁b/吸e	154-8		10		
7	106-1							12	不明	---	---	---	---	63	156-1	64	58	23	18	8	10	10	雁b/吸c	156-2	70	10	5
10	109-1	50	40	15	16	7	10	12	雁a:肩断面六角	---	---	---	---	67	---	---	---	---	---	---	---	---	/吸c	159-1	80	10	6
11	110-1	39	32	20	13	8	10	12	雁a	---	---	---	---	68	160-1	39	35	17	15	8	7	9	雁a/吸a	160-2	86	12	8
13	112-1	46	42	19	17	9	9	13	雁b/吸b	112-2	46	12	3	69	161-1	37	32	21	15	9	9	13	雁c/吸d	161-2	53	10	5
14	113-4	43	40	22	15	9	12	12	雁c/吸d	113-5	47	13	8	70	162-1	38	35	14	13	9	8	10	雁a/吸a	162-2	62	9	4
16	115-1	66	60	22	17	8	8	10	雁b/吸e	115-2	59	10	4										/吸e	162-3	74	11	3
17	---	---	---	---	---	---	---	---	/吸d	116-2	54	12	8	71	163-1	68	61	28	18	9	10	11	雁b/	---	---	---	---
19	118-1	48	46	18	15	12	8	12	雁c/吸c	118-2	40	11	4	79	171-1	40	36	18	16	11	8	12	雁c/吸e	171-2	86	12	5
20	---	---	---	---	---	---	---	---	/吸c	119-1	57	10	5	80	172-1	38	32	19	17	10	9	13	雁c/吸d	172-2	54	13	9
21	120-4	40	38	16	13	8	8	10	雁c・d?/吸c	120-5	55	10	6	84	176-1	50	46	19	17	10	10	13	雁c/吸c	176-2	58	12	6
22	120-9	43	40	20	12	11	12	12	雁c/吸d	120-10	63	9	3	86	177-1	55	53	19	18	9	6	11	雁b/吸e	177-2	61	9	5
26	123-1	57	51	24	16	7	9	11	雁b/吸e	123-2	80	10	3	88	179-1	41	36	18	16	9	8	11	雁a/吸a	179-2	65	10	4
28	---	---	---	---	---	---	---	---	/吸c	125-1	68	12	6	90	181-1	54	53	19	15	13	8	12	雁d/吸c・e?	181-2	72	11	4
31	128-1	68	64	21	16	10	8	12	雁b/吸d	128-2	56	12	6	91	182-1	60	55	27	17	9	9	14	雁b/吸e	182-2	59	10	
33	130-1	64	60	26	18	10	11	12	雁b/吸c	130-2	64	12	5	93	184-1	44	40	17	15	10	8	10	雁b/吸c	184-1	67	10	2
34	131-1	53	51	22	15	8	9	10	雁b/吸d	131-2	49	11	6	94	185-1	54	50	24	18	9	11	11	雁b/吸c	185-2	73	12	6
40	136-8	40	37	15	13	8	7	9	雁d/吸c・e?	136-9	57	8	5	95	---	---	---	---	---	---	---	---	/吸c:刻跡あり	186-1	58	9	6
41	137-1	47	43	19	14	9	8	12	雁a/吸d	137-2	57	12	8	98	---	---	---	---	---	---	---	---	/吸d	189-1	44	11	5
47	---	---	---	---	---	---	---	---	/吸c	143-1	68	11	4	04	195-1	51	45	19	17	10	11	10	雁b/吸c	195-2	57	9	4
50	146-1	39	35	19	13	8	9	10	雁d/吸c	146-2	55	10	5	外	204-57	66	58	22	16	8	9	11	雁b:6-7Grid出土	---	---	---	---
52	148-1	70	65	25	19	11	11	14	雁b/吸c	148-2	76	12	6	外	204-55	71	67	21	16	8	10	10	雁b:6-8Grid出土	---	---	---	---
53	149-10	62	54	26	17	6	10	12	雁b:肩帯/吸c	149-11	55	10	5	外	204-58	65	59	18	15	9	9	10	雁b:6-8Grid出土	---	---	---	---
														外	204-56	70	66	21	16	8	10	9	雁b:7-7Grid出土	---	---	---	---
														外	204-59	70	68	21	11	9	8	12	雁d:7-7Grid出土	---	---	---	---

註1. Fig.100~195は墓堀内出土遺物であり、Fig.204は遺構外出土遺物である。  
 註2. 墓堀資料のうち、雁首部や吸口部が単独出土した場合は各欄に「-」を記し示した。また、破損等により計測不能な場合は計測値の各欄を空欄にしてある。  
 註3. 備考欄の分類例は141x-?の手段に示してあるとおりである。  
 ただし、雁首部a型は「雁a」、吸口部a型は「吸a」のように略記している。また、型を断定できないものについては、併記し「?」を付けた。  
 註4. 計測値の単位は全てmm(ミリメートル)である。

Tab. 7 B地区出土煙管(雁首部・吸口部)観察表

Fig-No	器種	出土位置	法量 ( ) =推定・現存 口径/底径/器高	成形・調整技法・器形の特徴	胎土・その他
197-1	土師質 皿形土器	0-8G	(7.8)/(3.8)/2.1	ロクロ成形、底部糸切り。直線的に開く体部、口縁端部は厚く、丸くなる。	明黄褐色。
197-2	土師質 皿形土器	12-13G	8.0 / 4.0 / 2.0	ロクロ成形、底部糸切り。直線的に開く体部、口縁端部は厚く、丸くなる。	明黄褐色。
197-3	土師質 皿形土器	12-11G	(7.8)/(3.5)/1.6	ロクロ成形、底部糸切り。直線的に開く体部、口縁端部は厚く、丸くなるが、上端が平坦となる。	明黄褐色。
197-4	土師質 皿形土器	3-5G	(8.4)/(3.6)/1.8	ロクロ成形、底部糸切り。直線的に開く体部、口縁端部は薄く、シャープとなる。	褐灰色。
197-5	土師質 皿形土器	12-12G	7.8 / 3.6 / 1.9	ロクロ成形、底部糸切り。直線的に開くは体部はやや外反し、シャープとなる。	明黄褐色。
197-6	土師質 皿形土器	12-13G	(9.8)/(4.8)/2.1	ロクロ成形、底部糸切り。内湾する体部、口縁端部は外側へ突出し、薄くシャープである。	褐灰色。
197-7	土師質 皿形土器	11-15G	10.2 / 5.5 / 2.5	ロクロ成形、底部糸切り。内湾する体部、口縁端部は薄くシャープとなる。	にぶい橙色。
197-8	土師質 皿形土器	4-11G	7.8 / 4.4 / 1.7	ロクロ成形、底部糸切り。直線的に開く体部、口縁端部は薄くシャープとなる。体部中位が肥厚する。	にぶい橙色。
197-9	土師質 皿形土器	3-6G	(8.8)/ 4.8 / 1.8	ロクロ成形、底部糸切り。直線的に開く体部、口縁端部は厚く、丸くなる。	にぶい橙色。
197-10	土師質 皿形土器	9-4G	11.8 / 5.4 / 2.6	ロクロ成形、底部糸切り。直線的に開く体部、口縁端部は薄くシャープとなる。体部下位が肥厚する。	褐灰色。
197-11	土師質 皿形土器	3-7G	(13.8)/(7.6)/3.0	ロクロ成形、底部糸切り。内湾する体部、口縁端部は薄くシャープとなる。	褐灰色。
197-12	土師質 皿形土器	9-7G	(13.0)/(7.4)/2.6	ロクロ成形、底部糸切り。内湾する体部、口縁端部は厚く丸くなる。底部が台状になる。	褐灰色。
197-13	土師質 皿形土器	12-11G	(17.8)/ - /(3.1)	ロクロ成形、底部糸切り。	浅黄褐色。
197-14	土師質 皿形土器	12-13G	- / 10.4 /(2.0)	ロクロ成形、底部糸切り。	褐灰色。
197-15	土師質 皿形土器	13-9G	- / 6.6 /(1.5)	ロクロ成形、底部糸切り。	にぶい橙色。 胎土分析資料 3
197-16	土師質 皿形土器	4-11G	- / 7.2 /(1.6)	ロクロ成形、底部糸切り。	褐灰色。 胎土分析資料 4
197-17	土師質 皿形土器	16-10G	- / 8.6 /(1.8)	ロクロ成形、底部糸切り。	褐灰色。
197-18	土師質 皿形土器	12-14G	- / 7.6 /(1.1)	ロクロ成形、底部糸切り。	褐灰色。
197-19	土師質 香炉	3-7G	8.6 / 3.5 / 5.8	ロクロ成形、底部糸切り後に脚部が付される。体部は強く内湾し口縁部は薄くシャープとなる。	外面は褐灰色。内面は黒色。
99-1	播鉢 リハチ	3-6G	25.4 / - /(11.0)	輪積み成形。外傾する体部、内湾する口縁部。口縁端部は丸くなり、口縁部内面に段あり。9本単位の櫛目が下から上へ入る。	にぶい褐色。 胎土分析資料 2
99-2	内耳土器 リハチ	3-6G	(32.0)/ - /(10.5)	成形不明。外傾する体部、内傾気味の口縁部。口縁部内外面に凹線が巡る。体部内外面に不整方向の撫で、口縁部に横撫であり。	灰黄褐色。 胎土分析資料 11
99-3	内耳土器 リハチ	3-6G	(30.0)/ - /(7.2)	成形不明。やや外傾する体部、内側へやや突出する口縁端部。体部内外面に横方向の撫であり。	内面は褐灰色。外面は吸炭。 胎土分析資料 12
93-1	内耳土器 に類似 式土坑	1号地下	(30.4)/ - /(10.4)	輪積み成形?外傾する体部、口縁端部は面取りされる。体部外面に不整方向の撫で、内面に横方向の撫で、口縁部内外に横撫で	にぶい褐色。外面は吸炭。
198-1	内耳土器	5-6G	(30.0)/(25.6)/18.6	成形不明。やや内傾する体部、直線的に開く口縁部。体部内外面に横方向の撫で、口縁部に横撫で。	内面は褐色。外面は吸炭。 胎土分析資料 10
198-2	内耳土器	5-6G	(32.6)/ - /(6.8)	成形不明。直線的に開く口縁部。口縁部内外面に横撫であり。	内面は褐色。外面は吸炭。
198-3	内耳土器	2-6G	(28.6)/(21.4)/17.2	成形不明。外傾する体部は下位が内湾気味。口縁部は内湾する。体部内外面に不整方向の撫で、口縁部内外面に横撫であり。	内面は明黄褐色。外面は吸炭。 胎土分析資料 7
198-4	内耳土器	11-5G	(26.0)/ - /(18.0)	成形不明。ほぼ直立する体部、弱く内湾する口縁部。体部内外面に不整方向の撫で、口縁部内外面に横撫であり。底部は平底。	内外面とも黒色。断面は赤褐色 胎土分析資料 8
198-5	内耳土器	2-6G	(34.8)/ - /(15.0)	成形不明。外傾する体部は全体的に内湾気味、口縁部は内湾。体部内外面に不整方向の撫で、口縁部内外面に横撫であり。	内面は明黄褐色。外面は吸炭。
198-6	内耳土器	8-10G	(28.4)/(19.4)/16.6	成形不明。大きく外傾する体部、短く外傾する口縁部。体部内外面に不整方向の撫で、口縁部内外に横撫であり。底部は平底。	内面は灰黄褐色。外面は吸炭。 胎土分析資料 9
198-7	内耳土器	7-12G	(31.0)/ - /(15.2)	ロクロ成形?体部、口縁部は直線的に連続して開く。体部内外面に不整方向の撫で、口縁部内外面に横撫であり。	内面は黄褐色。外面は吸炭。 胎土分析資料 5
198-8	内耳土器	9-11G	(28.0)/ - /(14.7)	ロクロ成形?体部、口縁部は直立に近い外傾。口縁端部は内側へ突出する。体部内外面に不整方向の撫で、口縁部に横撫であり。	内面は黄褐色。外面は橙色。
198-9	内耳土器	5-7G	(28.0)/ - /(17.0)	成形不明。外傾する体部は下位が内湾気味。口縁部は弱く内湾する。体部内外面に不整方向の撫で、口縁部内外面に横撫であり。	内面は黄褐色。外面は吸炭。
199-10	内耳土器	11-11G	(32.8)/(31.0)/12.8	ロクロ成形?体部は直立に近く外傾する。口縁端部下に太い耳部付く。体部内外面とも不整方向の撫であり。	内面は浅黄褐色。外面は吸炭。 胎土分析資料 6
199-11	内耳土器	6-4G	30.2 / 28.4 / 7.6	成形不明。体部は直立に近く外傾する。体部内外面とも横撫で、底部内面は不整方向の撫で、底面は「ちぢれ目」である。	内面は黄色橙色。外面は吸炭。
199-12	内耳土器	4-6G	(28.8)/ - /(8.2)	成形不明。内湾する口縁部に耳部が付く。口縁部内外面には横撫であり。	内面は黄色橙色。外面は吸炭。
199-13	内耳土器	5-12G	(30.0)/(27.8)/7.2	成形不明。大きく外傾する体部、口縁端部は肥厚する。体部内外面とも横撫であり。口縁端部は面取りされるが、丸みを帯びる。	内外面とも褐灰色。内面に吸炭あり。

註1. 本表はB地区出土の中世土器(土師質土器類・内耳土器)についての観察結果をまとめたものである。

註2. Fig. 197 -1~19の「土師質皿形土器」とは通常「かわらけ」と呼ばれるものに等しい。

ただし、本報告書では形質と器形を表現した呼称である「土師質皿形土器」を採用したものである。

註3. 【胎土・その他】欄にある「胎土分析資料No」は付録「堀川遺跡出土土器の胎土分析」河西 学氏(帝京大学山梨文化財研究所)に対応するものである。

Tab. 8 B地区出土 中世土器(土師質土器類・内耳土器)観察表

壱	Fig.No	法量 (単位=cm) は現存高 A=器高B=口径C=底径	観察内容	壱	Fig.No	法量 (単位=cm) A=器高B=口径C=底径	観察内容
9	108-1	A=2.3, B=6.5, C=2.5	磁器小型碗。肥前系。外面に具須で笹文あり。18c後半。	30	127-2	A=17.6, B=3.4, C=5.4	陶器徳利。京・信楽系(唐津「京焼写し」に類似?)。外面に鉄絵山水文あり。18c後半~?
14	113-2	A=2.3, B=6.5, C=2.5	磁器ベニ皿。産地不明。型押成形。貝殻模倣?。内外面にベニ状付着物あり。18c後半~。	41	137-4	A=3.1, B=4.7, C=2.4	磁器猪口。肥前系。無文。内外面にベニ状付着物あり。18c代。
17	116-1	A=(20.1), C=6.4	陶器徳利。産地不明(在地「小倉焼」に類似)。外面に軸葉で文字「桐風」を表す。19c~?。	41	137-5	A=2.6, B=4.2, C=1.8	磁器猪口。肥前系。外面に具須で菊花文(梅)。内外面にベニ状付着物あり。18c後半~。
21	120-1	A=(19.5), C=7.0	陶器徳利。京・信楽系(唐津「京焼写し」に類似?)。外面に鉄絵山水文あり。18c後半~?。	43	139-1	A=4.6, B=8.4, C=3.4	磁器碗。肥前系。所謂「丸腰半筒碗」。外面に具須で草花文(水仙・蘭の類)。内面に二重線あり。見込み部に手描き五弁花。18c後半。
21	120-2	A=4.5, B=6.5, C=3.0	磁器小型碗。肥前系。外面に具須で連弁文と格子文。口唇部に鉄軸。「焼継ぎ」あり。18c後半~。	44	140-5	A=(4.5), B=9.0	磁器碗。肥前系。外面に具須で海浜風景文。内面に二重線あり。見込み部に鳥文あり。18c後半~。
24	122-2	A=2.3, B=8.7, C=3.0	磁器皿(碗蓋?)。肥前系。外面に具須で雷文に草花文。内面に二重線あり。見込み部に文字「秀」。高台(?)内縁は方形枠内変形文字。18c後半~。	57	150-2	A=4.2, B=7.1, C=3.7	磁器小型碗。肥前系。外面全体に具須がぼかし状に模写。「焼継ぎ」あり。高台内に鉄軸で「九十二」と描く。「焼継ぎ」の整理番号か?。18c末~。
24	122-3	A=(9.4), C=5.0	磁器小型瓶(御神酒徳利?)。肥前系。外面に具須で草花文(松竹梅文)。18c末~。	58	151-7	A=3.1, B=6.4, C=2.5	磁器猪口。肥前系。外面は無文。内面に鉄軸で雷文。年代不明。
30	127-1	A=(4.2), B=7.0, C=2.8	磁器小型碗。肥前系。外面に具須で草花文(梅花花)あり。18c後半~。	69	161-6	A=(18.0), C=6.7	陶器徳利。産地不明(在地「小倉焼」に類似)。19c~?。

Tab. 9 B地区墓塚出土の陶磁器観察表

Fig.No	A	B	C	D	E	F	G	Fig.No	A	B	C	D	E	F	G	Fig.No	A	B	C	D	E	F	G
95-1 ☆	12.9	12.8	12.5	9.2	11.2	5.8	17.0	95-8 ☆	10.4	10.7	10.0	7.3	7.3	3.6	10.9	97-6 ◎	13.2	13.4	12.7	6.9	10.6	5.5	16.1
95-2 ☆	12.9	13.5	13.0	9.5	9.7	4.5	14.2	95-9 ☆	9.4	10.3	9.7	--	7.3	4.7	12.0	97-7 ◎	13.3	13.4	13.0	8.0	13.1	6.5	19.6
95-3 ☆	11.8	12.0	11.8	9.2	7.6	5.7	13.3	97-1 ◎	12.6	11.8	11.1	7.2	9.5	5.7	15.2	97-8 ◎	15.2	12.1	15.3	11.4	11.8	9.5	21.3
95-4 ☆	11.7	11.7	11.3	8.0	8.3	5.4	13.7	97-2 ◎	13.3	13.0	12.4	8.0	9.8	6.4	16.2	97-9 ◎	14.3	14.7	14.1	9.9	12.7	5.8	18.5
95-5 ☆	9.9	10.0	9.8	7.0	7.0	5.0	12.1	97-3 ◎	12.5	11.5	10.1	7.0	9.7	5.1	14.8	97-10 ◎	--	--	--	7.8	--	--	--
95-6 ☆	11.3	11.4	11.4	8.0	7.2	5.5	12.7	97-4 ◎	11.9	12.0	11.8	10.0	9.0	5.5	14.5	97-11 ◎	10.2	10.3	11.1	7.5	8.6	5.2	13.8
95-7 ☆	16.1	11.9	15.7	11.2	14.5	8.8	23.3	97-5 ◎	11.4	11.1	11.3	8.7	7.7	5.7	13.4	97-12 ◎	9.1	9.5	9.4	8.5	8.6	4.6	13.2

(計測値の単位はcm、石質は全て白色石英安山岩、Fig.No欄の☆印は五輪塔集中区、◎印は五輪塔集中区の一括、△印はB地区遺構外を示す)

Tab. 10 B地区出土の五輪塔蓋観察表①(空風輪)

Fig.No	A	B	C	D	E	F	G	Fig.No	A	B	C	D	E	F	G	Fig.No	A	B	C	D	E	F	G
95-10 ☆	7.5	19.5	19.0	3.5	10.0	1.90	5.0	97-13 ◎	8.0	18.0	18.3	2.3	9.5	1.92	4.0	207-25△	10.6	21.5	19.6	5.6	12.6	1.56	7.0
96-24 ◎	--	--	--	--	--	--	3.0	97-14 ◎	10.2	--	22.0	4.0	13.0	1.69	--	207-27△	7.5	16.0	15.4	2.8	10.4	1.48	4.4
96-25 ◎	--	--	--	--	--	--	2.5	207-21△	9.4	20.0	19.7	3.6	11.5	1.71	3.8	----	--	--	--	--	--	--	--
96-26 ◎	--	--	--	--	--	--	3.0	207-24△	10.8	23.5	22.5	4.3	14.7	1.53	5.0	----	--	--	--	--	--	--	--

(計測値の単位はcm、石質は全て白色石英安山岩、Fの値はC/Eの計算値、Fig.No欄の☆印は五輪塔集中区、◎印は五輪塔集中区の一括、△印はB地区遺構外を示す)

Tab. 11 B地区出土の五輪塔蓋観察表②(火輪)

Fig.No	A	B	C	D	Fig.No	A	B	C	D	Fig.No	A	B	C	D	Fig.No	A	B	C	D
95-11 ☆	14.8	14.5	18.4	9.0	95-15 ☆	--	--	33.9	--	97-16 ◎	10.0	13.8	17.0	10.1	97-20 ◎	13.7	13.7	16.4	8.4
95-12 ☆	11.5	10.2	16.0	9.8	96-16 ☆	11.0	10.9	15.0	9.9	97-17 ◎	12.3	12.1	17.4	10.0	207-22△	12.2	12.7	19.8	11.8
95-13 ☆	17.3	11.5	21.4	13.3	96-28 ◎	11.9	11.6	17.6	10.0	97-18 ◎	16.0	16.8	20.0	9.9	207-26△	15.2	--	20.4	--
95-14 ☆	16.6	--	19.9	--	97-15 ◎	13.0	11.0	18.2	11.6	97-19 ◎	13.1	13.3	18.3	9.6	----	--	--	--	--

(計測値の単位はcm、石質は全て白色石英安山岩、Fig.No欄の☆印は五輪塔集中区、◎印は五輪塔集中区の一括、△印はB地区遺構外を示す)

Tab. 12 B地区出土の五輪塔蓋観察表③(水輪)

Fig.No	A	B	C	D	Fig.No	A	B	C	D	Fig.No	A	B	C	D
96-17 ☆	30.9	24.4	30.7	1.27	96-20 ☆	17.2	13.4	16.7	1.28	96-23 ☆	20.2	9.4	20.1	2.15
96-18 ☆	19.6	19.1	14.2	1.03	96-21 ☆	22.1	16.1	21.8	1.37	96-27 ◎	14.4	6.2	13.9	2.32
96-19 ☆	18.8	16.0	12.2	1.18	96-22 ☆	19.6	14.5	19.4	1.35	207-23△	20.8	12.6	20.0	1.65

(計測値の単位はcm、石質は全て白色石英安山岩、Dの値はA/Bの計算値、Fig.No欄の☆印は五輪塔集中区、◎印は五輪塔集中区の一括、△印はB地区遺構外を示す)

Tab. 13 B地区出土の五輪塔蓋観察表④(地輪)

茶白(上白部)						茶白(下白部)						
Fig.No	直径(cm)	高さ(cm)	分画×溝数	石質	備考	Fig.No	槽直径(cm)	皿口径(cm)	高さ(cm)	分画×溝数	石質	備考
205-3	17.5	11.3	不整	暗褐色安山岩・硬	挽手孔変文	205-1	20.0	--	13.6	8×6or9	暗褐色安山岩・硬	下部に鑿痕跡あり
205-6	19.9	12.5	8×11or12	暗褐色安山岩・硬	-----	205-2	18.2	34.9	12.5	不整	暗褐色安山岩・硬	上部に鑿痕跡あり
205-10	20.0	13.5	不整	暗褐色安山岩・硬	摩耗著しい	205-4	17.5	--	9.5	不整	暗褐色安山岩・硬	-----
---	--	--	---	-----	-----	205-5	16.2	--	13.5	4?×6or7	暗褐色安山岩・硬	-----

Tab. 14 B地区出土の石製品観察表①(茶白)

石白(上白部)							石白(下白部)								
Fig.No	直径	高さ	分画×溝数	ふくみ	軸棒孔直径	石質	備考	Fig.No	直径	高さ	分画×溝数	ふくみ	軸棒孔直径	石質	備考
206-1	29.5	30.3	放射型不整	3.2	2.8	灰色安山岩・軟	-----	205-7	29.7	11.4	放射型	3.5	2.7	暗灰色安山岩・軟	摩耗顯著
206-2	30.8	11.8	放射型	3.6	3.3	灰色安山岩・軟	-----	205-8	27.6	12.0	6×7	2.9	1.8	紫灰色安山岩・軟	-----
206-3	32.0	12.4	6×7	3.0	---	赤灰色安山岩・軟	-----	205-9	33.7	14.3	放射型	3.1	2.1	淡灰色安山岩・軟	摩耗顯著
206-4	--	10.3	放射型	---	---	赤灰色安山岩・軟	-----	----	--	--	---	---	---	-----	-----

Tab. 15 B地区出土の石製品観察表②(石白)

(計測値の単位はcm)

(5) 時期不明の遺構と遺物

1) 石組状遺構

1号石組状遺構

(Fig. 208、P.1.13-38)

(位置) 調査区の東端、  
10-14・15 grid、  
11-14・15 grid  
に位置し、地表  
面下約1mの第  
Ⅲ層中にて確認  
された。遺構の  
上部には調査前  
まで神社(塩川  
神社)が存在し、  
何らかの関係が  
ある遺構とも考  
えられたが、究  
明はできなかった。

(形態) 遺構の形態は全  
体像が把握しに  
くい程、不明な  
点が多い。しか  
し、10~130cm  
大の礫が不規則

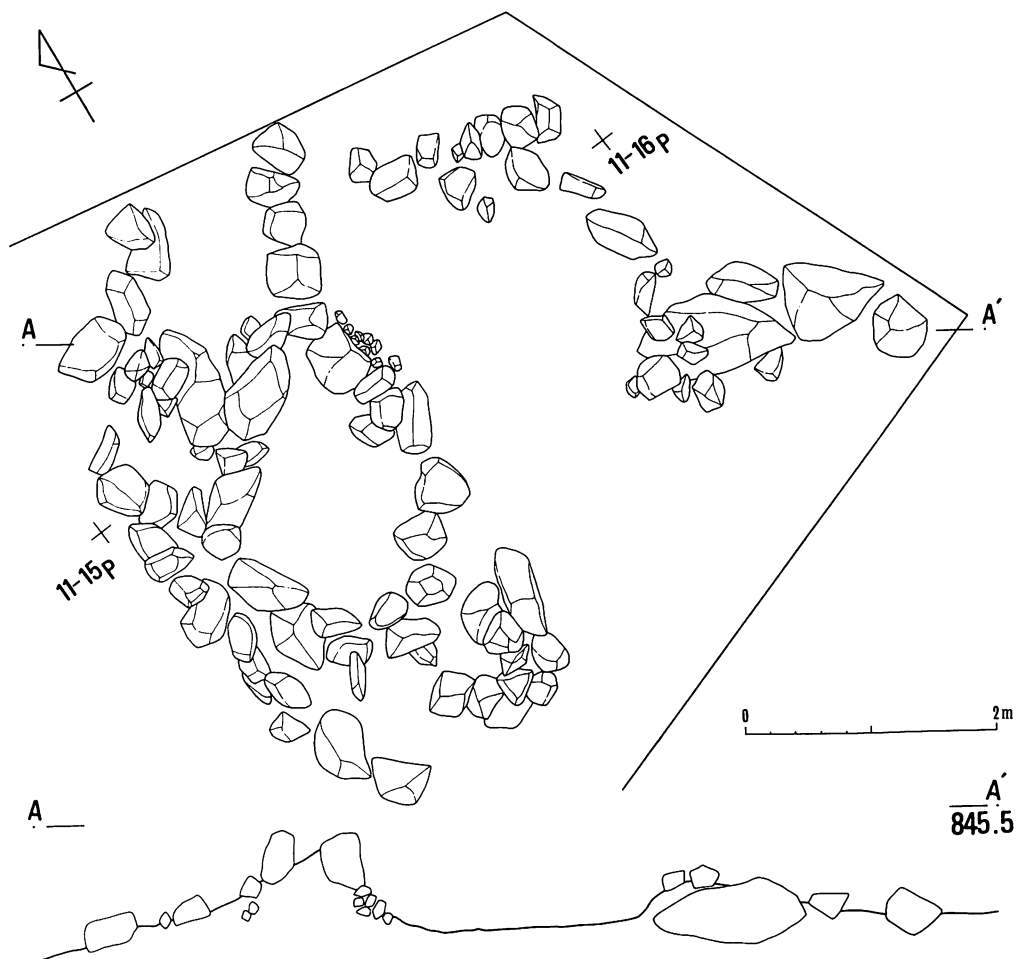


Fig. 208 1号石組状遺構

ではあるが人為的に配されており、遺構であることは間違いない。平面的な形態は、数列の石列が不規則に並ぶ状況を呈す。断面的な形態は各列により異なるが、低い石垣状になる部分と単に礫が並ぶのみの部分が共存する。以下、不明確ではあるが、「石組み」をグループに分け、説明を加える。ただし、各グループは明瞭に区別できるわけではなく、あくまで説明を加えるための便宜的なものである。

(A群) 最も西側のグループである。南北方向に蛇行しているが、両端の礫を結ぶ全長は5.6mを測る。人頭大~70cmの礫を使用し、西面を合わせるように配されている。礫は部分的に積み重ねられる箇所もあるが、全体的には礫を単に並べるのみのグループである。

(B群) A群の東側、C群の西側のグループである。南北方向に蛇行し、両端の礫を結ぶ全長は3.2mを測る。北端は「Y」字状に分かれ、A群とC群を連結させるようになり、この部分については、A群・C群より礫上面のレベルは高く、A・C群の上にB群の礫が重なる状況を見せる。北端部の礫は積み重ねられるが、不規則である。また、面的に揃えた部分も確認できなかった。

(C群) B群の東側のグループである。南北方向に蛇行し、両端の礫を結ぶ全長は5.1mを測る。南端は「J」字状に屈曲している。B群との間隔は最も広い部分で1.4mを測るが、前述のように北寄り部分で接しており、南端部も「J」字状の屈曲部分の端が接している。また、本群には下位に10cm大の礫を充填し、上位に30cm~40cm大の礫を積んだ石垣状の形態を呈す部分が多い。また、その部分以外も30cm~40cm大の礫を2段あるいは3段積み重ねており、その高さは0.7m~1.1mを測る。面的には東側を



揃えているようである。

(D群) 最も東側のグループである。他の群と異なり、北西から南東方向へと伸びており、クランク状に屈折する。北端はC群に接しているが、石垣状の形態は呈さず、20cm～50cm大の礫が並ぶのみである。本群の南東端には70cm大以上の礫が使用されており、この部分は上部に礫を積み重ねている箇所もあるが、不規則である。面的に揃えた状況は確認できなかった。

(遺物) 以上のような形態を呈する石組状遺構であるが、B群とC群の間で若干の遺物が出土した。出土した遺物は土師質皿形土器・内耳土器の破片資料である。ただし、図示可能な遺物は土師質皿形土器1点のみであり、本遺構に伴うとの明確な判断が下せなかったため、遺構外出土の遺物として報告することとする(P129、Fig.197-7)。

(その他) 以上のように、位置・形態等について記述したが、遺構の性格は不明であり、用途・目的も把握することができなかった。また、時期については出土遺物などから、中世に近い時期であろうとは推測されるが、不明である。

## 2) 土坑

### 2号土坑 (Fig.209、P1.13-40)

(位置) 調査区の北西部、13-9 Gridに位置し、第IV層上面にて確認された。3～6号土坑の一群が南西へ約5mに存在する。

(形態) 平面形態は北東部が歪むがほぼ円形を呈し、断面形態は底部中央が窪む箱形を呈する。規模は南北2.2m×2.15mを測り、遺構確認面からの深さは0.62mを測る。

### 3号土坑 (Fig.210、P1.13-39)

(位置) 調査区の北西部、12-8・9 Grid、13-8・9 Gridに位置し、第IV層上面にて確認された。3～6号土坑の一群中の一土坑であり、4・6号土坑を切っている。

(形態) 平面形態は楕円形を呈し、断面形態は底部が皿状になる箱形を呈する。規模は長軸2.8m×短軸2.15mを測り、遺構確認面からの深さは0.88mを測る。

### 4号土坑 (Fig.210、P1.13-39)

(位置) 調査区の北西部、12-8・9 Gridに位置し、第IV層上面にて確認された。3～6号土坑の一群中の一土坑であり、3・6号土坑により切られている。

(形態) 平面形態は不整形を呈し、断面形態は皿形を呈する。規模は長軸1.9m×短軸1.65mを測り、遺構確認面からの深さは0.45mを測る。

### 5号土坑 (Fig.210、P1.13-39)

(位置) 調査区の北西部、12-8 Gridに位置し、第IV層上面にて確認された。3～6号土坑の一群中の一土坑である。

(形態) 平面形態は楕円形を呈し、断面形態は箱形を呈する。規模は長軸2.5m×短軸1.13mを測り、遺構確認面からの深さは0.32mを測る。

### 6号土坑 (Fig.210、P1.13-39)

(位置) 調査区の北西部、12-8 Gridに位置し、第IV層上面にて確認された。3～6号土坑の一群中の一土坑である。3号土坑によって切られ、4号土坑を切っている。

(形態) 平面形態は楕円形を呈し、断面形態は箱形を呈する。規模は長軸2.5m×短軸1.13mを測り、遺構確認面からの深さは0.32mを測る。

### 7号土坑 (Fig.211、P1.10-17)

(位置) 調査区の北西部、13-12 Gridに位置し、第IV層上面にて確認され、8・9号土坑に近接する。

(形態) 平面形態は円形を呈し、断面形態は箱形を呈する。規模は長軸2.5m×短軸1.13mを測り、遺構確認面からの深さは0.32mを測る。底部北寄りに径0.35m、深さ0.5mの土坑が付随している。

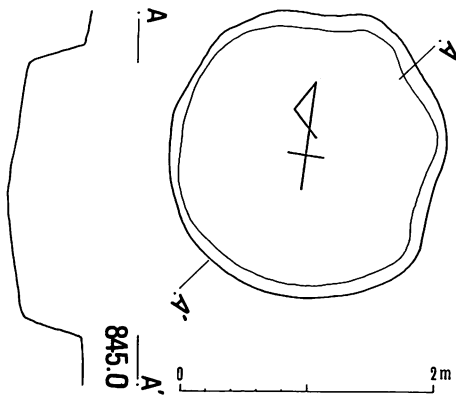


Fig. 209 2号土坑

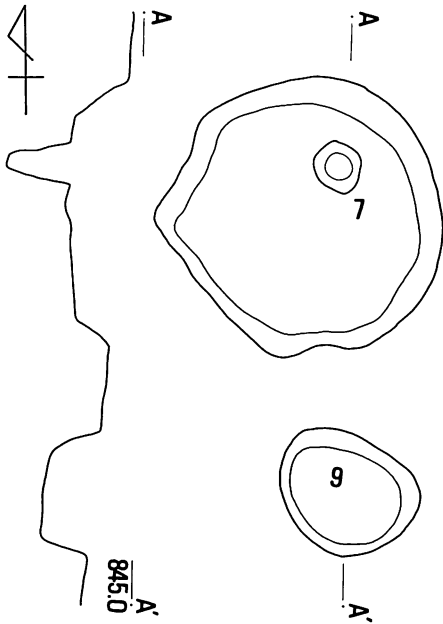


Fig. 211 7·9号土坑

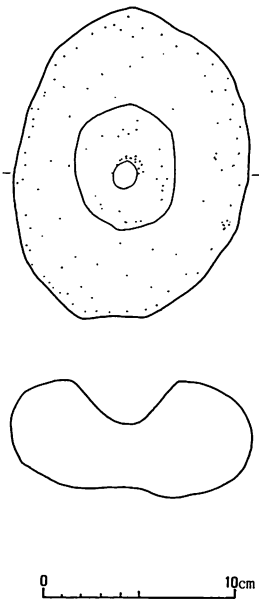


Fig. 212 12号土坑出土遗物

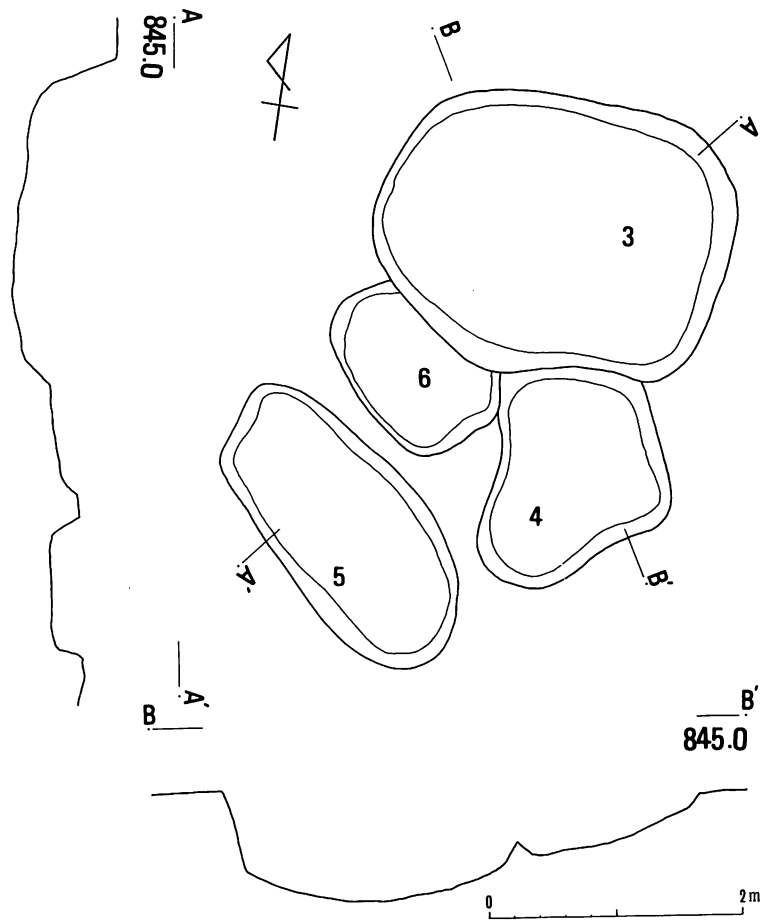


Fig. 210 3~6号土坑

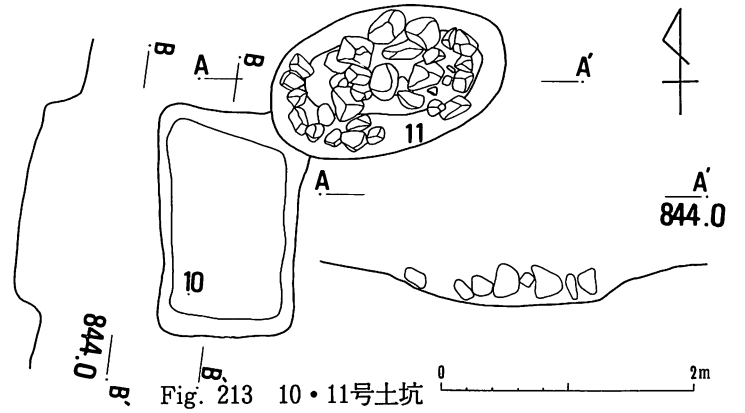


Fig. 213 10·11号土坑

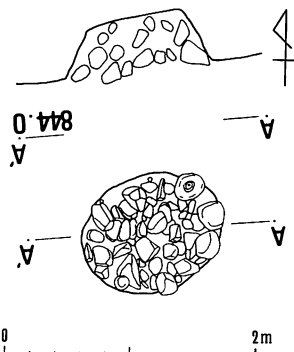


Fig. 214 12号土坑

### 9号土坑 (Fig.211、P1.10-17)

(位置) 12-11・12 Gridに位置し、第IV層上面にて確認された。7・8号土坑に近接する。

(形態) 平面形態は楕円形を呈し、断面形態は、箱形を呈す。規模は、長軸1.15m、短軸0.9mを測り、遺構確認面からの深さは0.42mを測る。

(その他) 覆土の上層中よりニホンジカの前頭骨が出土した。故意に埋納された可能性もあるが、覆土の上層中からの出土であり、混入したものである可能性が高い。共伴遺物がなく、遺構の時期は不明である。なお、本資料を含む塩川遺跡B地区出土の獣骨資料については、分析を金子浩昌氏(早稲田大学)に依頼した。その成果については、「付篇」(P194~)を参照されたい。

### 10号土坑 (Fig.213、P1.13-41)

(位置) 7-13 gridに位置し、第IV層上面にて確認された。

(形態) 平面形態は長方形を呈し、断面形態は箱形を呈す。規模は長軸1.8m×短軸1.1mを測り、遺構確認面からの深さは0.3mを測る。

### 11号土坑 (Fig.213、P1.13-41)

(位置) 7-13 Gridに位置し、第IV層上面にて確認された。

(形態) 平面形態は楕円形を呈し、断面形態は皿形を呈す。規模は長軸1.9m×短軸1.12mを測り、遺構確認面からの深さは0.25mを測る。遺構内には5~25cm大の礫が集中しているが、それぞれの礫には火熱を受けた状況はない。

### 12号土坑 (Fig.214、P1.13-42)

(位置) 7-12 gridに位置し、第IV層上面にて確認された。

(形態) 平面形態は楕円形を呈し、断面形態は箱形を呈す。規模は長軸1.1m×短軸0.93mを測り、遺構確認面からの深さは0.45mを測る。遺構内には拳大~25cm大の礫が集中しているが、それぞれの礫には火熱を受けた状況はない。

(遺物) 凹石状の石製品が1点出土した (Fig.212、P1.29-45)。安山岩の円礫に深い凹みがあり、凹みの内面は磨耗が著しい。時期・用途とも不明である。

## 3) 掘立柱建物址

### 1号掘立柱建物址 (Fig.215)

(位置) 調査区のほぼ中央、8-8・9 grid、9-8・9 gridに位置し、各柱穴とも第IV層上面にて確認された。西側に75・83号墓墳が存在し、北西側の柱穴を切っている。

(形態) 柱穴は合計12基が確認され、北西から南西方向に棟を有す2間×4間の建物址と考えられる。全体的な規模は桁行 (P1-P5) 8.5m、(P6-P10) 8.2m、梁行 (P5-P12) 5.3m、(P4-P11) 5.3mを測り、主軸方位はN-39° - Eを測る。

桁行柱穴間の距離は (P1-P2) は2.2m、(P2-P3) は2.5m、(P3-P4) は2.1m、(P4-P5) は1.9m、(P6-P7) は1.8m、(P7-P8) は2.8m、(P8-P9) は2.0m、(P9-P10) は1.6m、(P11-P12) は1.9mを測る。梁行柱穴間の距離は (P1-P6) 2.5m、(P2-P7) 2.6m、(P3-P8) 2.4m、(P4-P9) 2.6m、(P5-P10) 2.7m、(P10-P12) 2.6m、(P9-P11) 2.8mを測る。

各柱穴の平面形態は円形、断面形態は箱形であり、いずれも類似した形態を有すが、規模は多様である。各柱穴の規模は、P1は南北0.3m×東西0.4m、遺構確認面からの深さ0.32mを測る。以下同様に、P2は0.4m×0.4m、0.32m、P3は0.4m×0.49m、0.3m、P4は0.4m×0.45m、0.31m、P5は0.42m×0.42m、P6は0.4m×0.32m、0.22m、P7は0.4m×0.42m、0.29m、P8は0.5m×0.5m、0.22m、P9は0.28m×0.4m、0.19m、P10は0.4m×0.35m、0.23m、P11は0.41m×0.42m、0.15m、P12は0.38m×0.35m、0.23mを測る。

(その他) 各柱穴等からの出土遺物はなく、遺構の時期・性格は不明である。但し、北西側が土墳墓によって切られていることから、土墳墓の時期(江戸末期)より古い建物址であることは確実である。

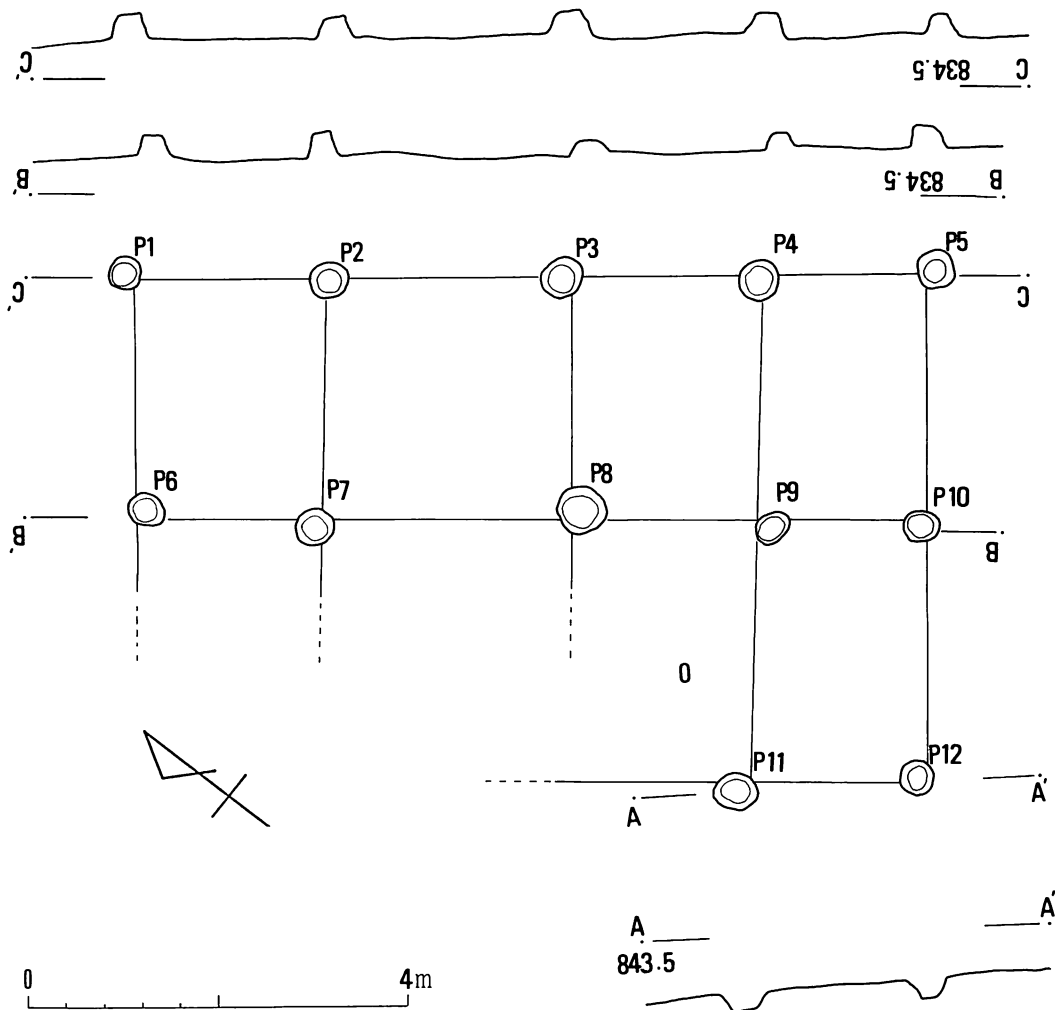


Fig. 215 1号掘立柱建物址

4) 時期不明の遺構外出土遺物

遺構に伴わない時期不明の遺物として、砥石および鉄鏃を図示する。砥石は2点を図示した (Fig.216、P129-46)。1の出土位置は12-9 Grid、材質は粘板岩である。長さ10.5cm、幅3.1cm、厚さ1.5cmを測る板状の形態であり、断面形態は長軸・短軸とも長方形を呈す。実測図正面に研磨の痕跡が観察され、滑らかな平坦面となっている。また、裏面および上端部は欠損するが、他の側面には砥石製作時の加工痕らしき条線が残存する。

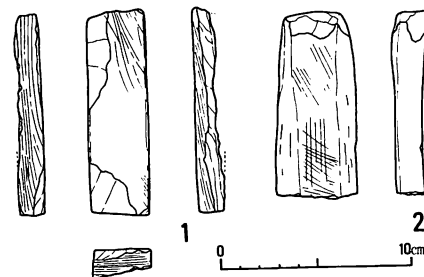


Fig. 216 遺構外出土遺物砥石

2の出土位置は9-11 Grid、材質は安山岩であり、1より軟質である。長さ9.5cm、幅4.3cm、厚さ1.8cmを測る撥状の形態である。断面形態は長軸が凹面のある長方形、短軸が台形を呈す。実測図正面には研磨の痕跡が5面残存し、断面形態を台形にしている。また、裏面には長軸方向に広い凹みを有す滑らかな面が1面観察される。

鉄鏃は1点を図示した (Fig.217、P1.27-32)。1の出土位置は9-11 Gridである。身の一部を欠く以外はほぼ完存し、現存長9.4cm、最大幅3.6cm、最大厚0.5cmを測る。身の平面形態は一辺が約4cmの正三角形を呈すと考えられ、底辺に腸袂を有す。身の断面形態は凸レンズ状を呈し、最大厚0.4cmを測る。箆被の長さは1.9cmを測り、最大厚0.9cm×0.5cmの長方形断面を有す。茎部の長さは3.7cmを測り、最大厚0.5cm×0.5cmの正方形断面を有す。本資料は「短頸箆被腸袂両丸造正三角形式鏃」と考えられ、平安時代の所産が推測されるが、遺構に伴わず伴出遺物もないため、ここではあえて時期不明の遺物として報告するものである。

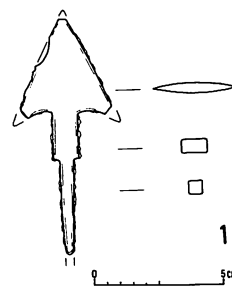


Fig. 217 遺構外出土遺物 鉄鏃

# 第V章 前の山地区の調査

## 第1節 調査の概要

前の山は、塩川の支流である本谷川と釜瀬川の合流点のすぐ南にあり、標高990.191mを測る。山頂からの尾根は、北東方向、南西方向、東方向に延びる。南西尾根は急峻でやせているが、その他の尾根は比較的緩やかで広い。山腹には、戦後しばらくまでこの地の生業として重要であった木炭製造業の名残りである炭焼き窯が、数多く残されている。特に、東方向に延びる尾根の両側の斜面には集中して見られる。山頂は、広さ40㎡の平坦地であり中央には明治期に安置された小御嶽神社と浅間神社の石祠が祭られている。山頂から北方には、「神戸の城山」をはじめ、県境の信州峠へ連なる山波を望み、東方には本谷川沿いに増富温泉方向へ続く山波を望む。また南方には、「比志の城山」「大渡の烽火台」「獅子吼城」を一望することができる。眺望についての環境は、従来唱えられている烽火台の立地条件を十分に満たすものと考えられる。

調査に際しては事前調査として、山頂、尾根上、西斜面を除く山腹の大部分の踏査を行なった。西斜面については急峻で遺構が存在する可能性がないと判断した。山頂部の南側には15mに及ぶ石垣が確認され、中央部の7

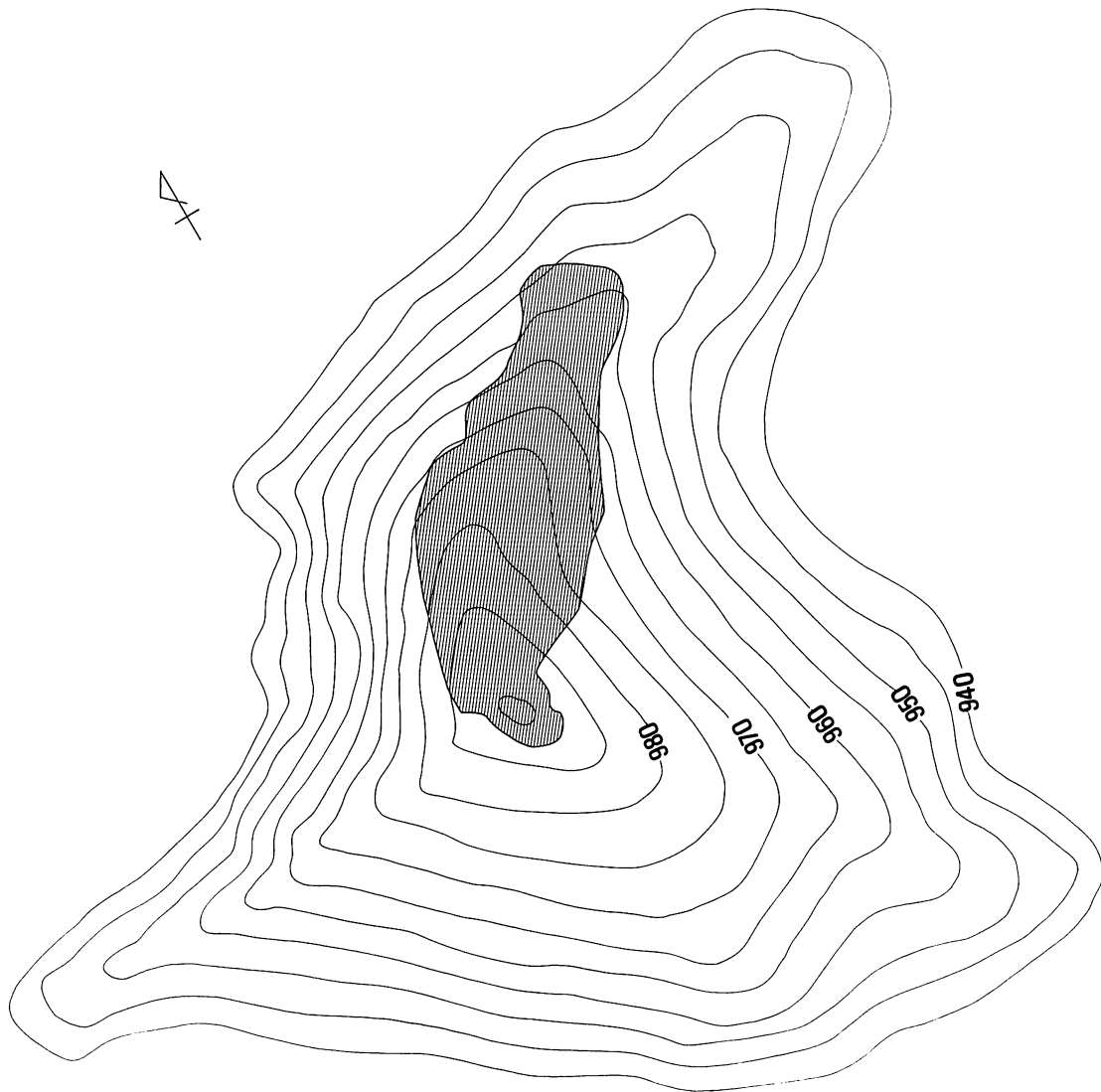


Fig. 218 前の山地区全体図

mの範囲が、最も良好な状態で残っている。北東方向へ延びる尾根上に曲輪と考えられる平坦部の存在が認められた。また、南側斜面には等高線に沿って帯状の平坦部の存在が認められた。工事範囲になっている部分は、山頂の北側半分と北東方向に延びる尾根を含む西側山腹一帯であるため、本調査は、この尾根を中心に山頂より水平距離にして長さ100m。幅約25mの範囲を対象に実施した。

調査は、まず大規模な遺構（堀切、曲輪等）の存在を確認するために、幅約1mのトレンチを任意設定し開始した。その結果、数段の曲輪状のテラスを確認し、全体的な掘り下げへ移行し、遺構・遺物の検出につとめた。掘り下げを行った部分は、Fig.219右図の点線より北の部分である。点線より南の部分については、民有地であるため、地権者の了解を得て現況図の作成を行なった。

テラスは、尾根上の斜面に少なくとも3箇所存在したと思われる。Cテラス（96㎡、標高975m）については、人為的な構築がセクションから確認された。Dテラス（80㎡、標高963m）とBテラス（64㎡、標高980m）については、自然の地形と思われる。Bテラスは、1mの標高差で上部に若干の平坦地が認められたが、併せてBテラスとした。山頂のAテラス（40㎡）も基本的には、自然地形であると思われるが、南側に石垣の存在が確認されたことは、前述の通りである。それぞれのテラスからは棚列跡・柱穴跡は、検出されなかった。土坑については、Cテラスから1基（1号土坑）、Bテラスから10基（2～11号土坑）、Bテラス東側の斜面から1基（12号土坑）が検出された。Bテラスの土坑の覆土は、炭化物層と焼土層が交互に堆積する特徴がみられる。1号土坑と12号土坑も様相の違いはあるが、炭化物を含む。しかし、いずれの土坑からも遺物の検出が認められなかったために土坑の時期や性格を想定する決定的な手がかりはない。

遺物については、前の山地区全域について全く出土していない。

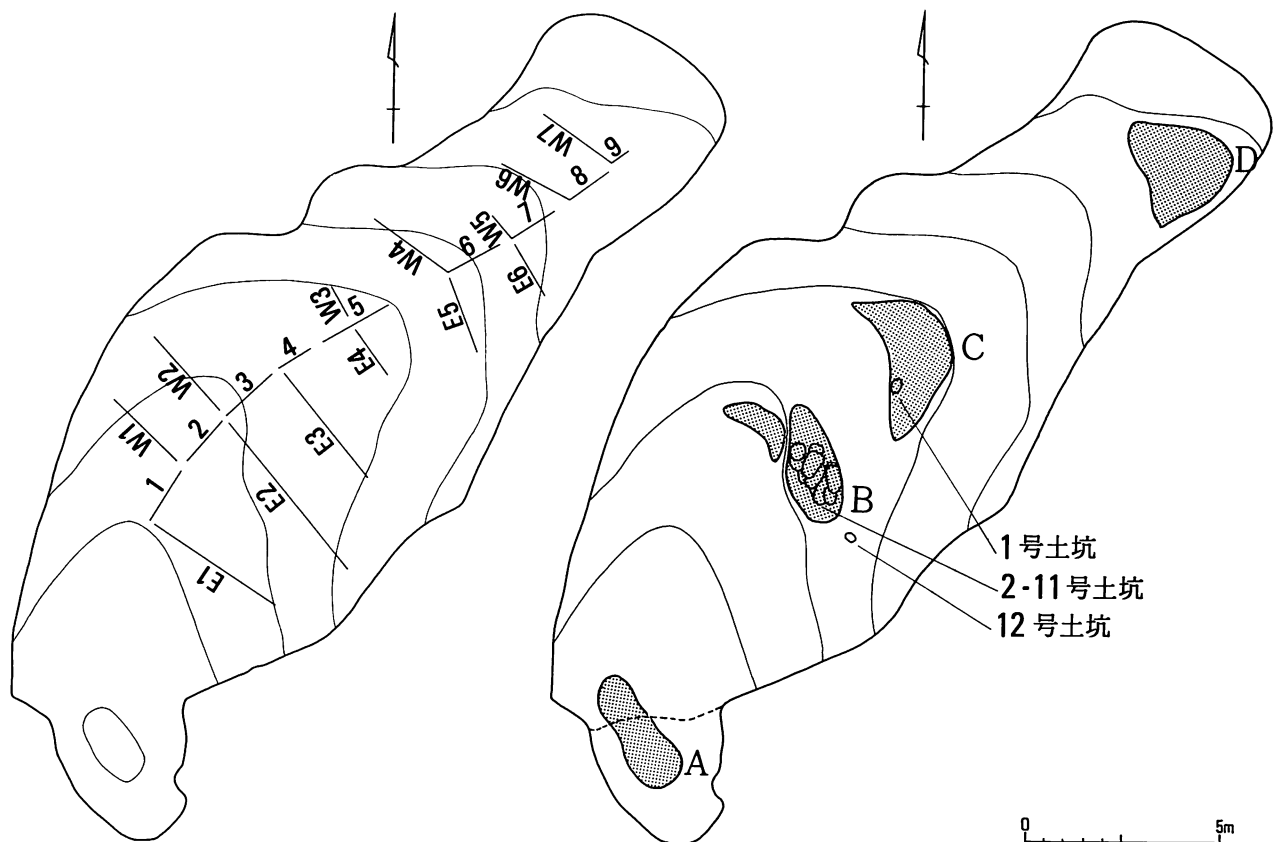


Fig. 219 前の山全体図（トレンチ・遺構）

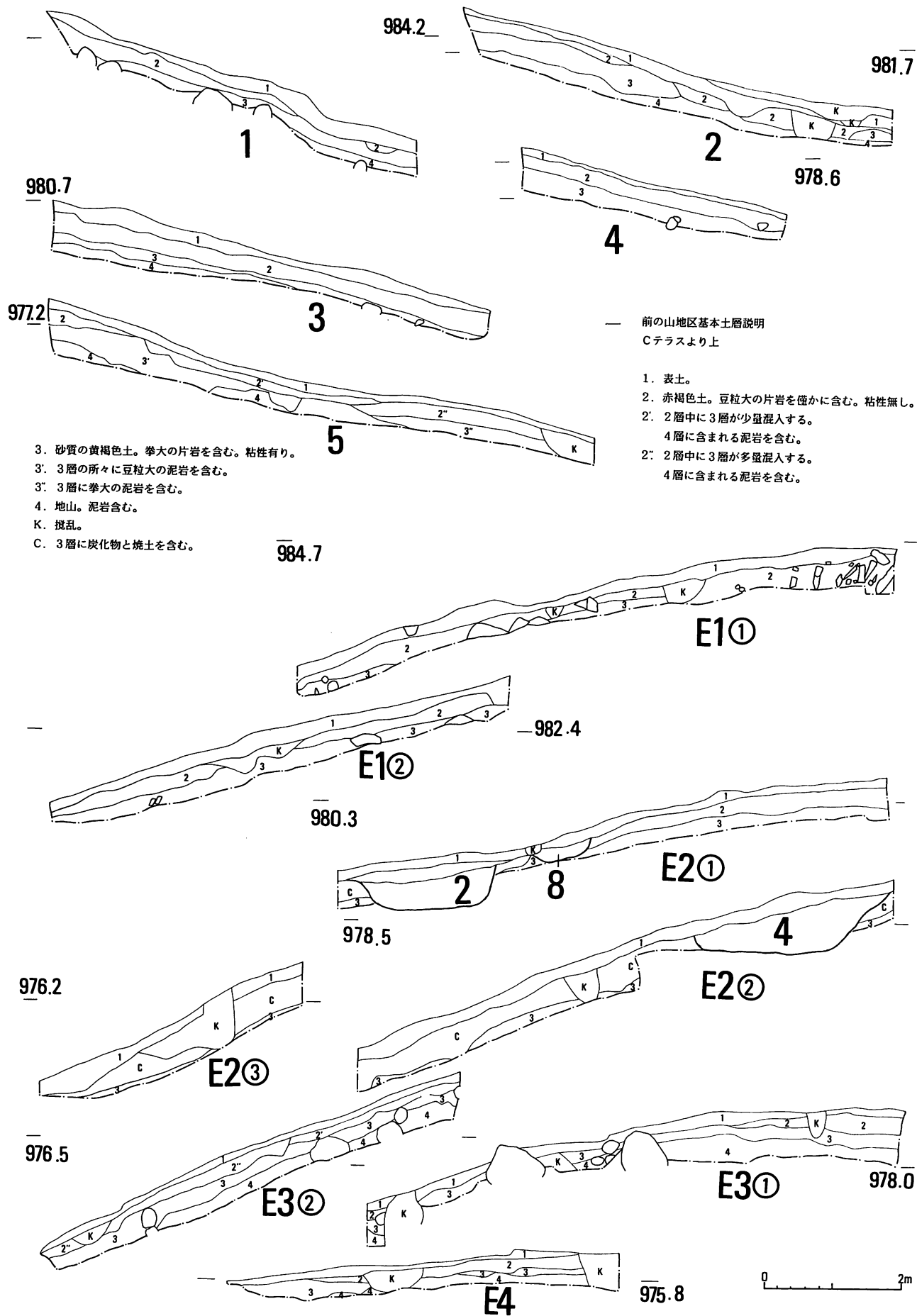


Fig. 220 前の山トレンチセクション図 ①

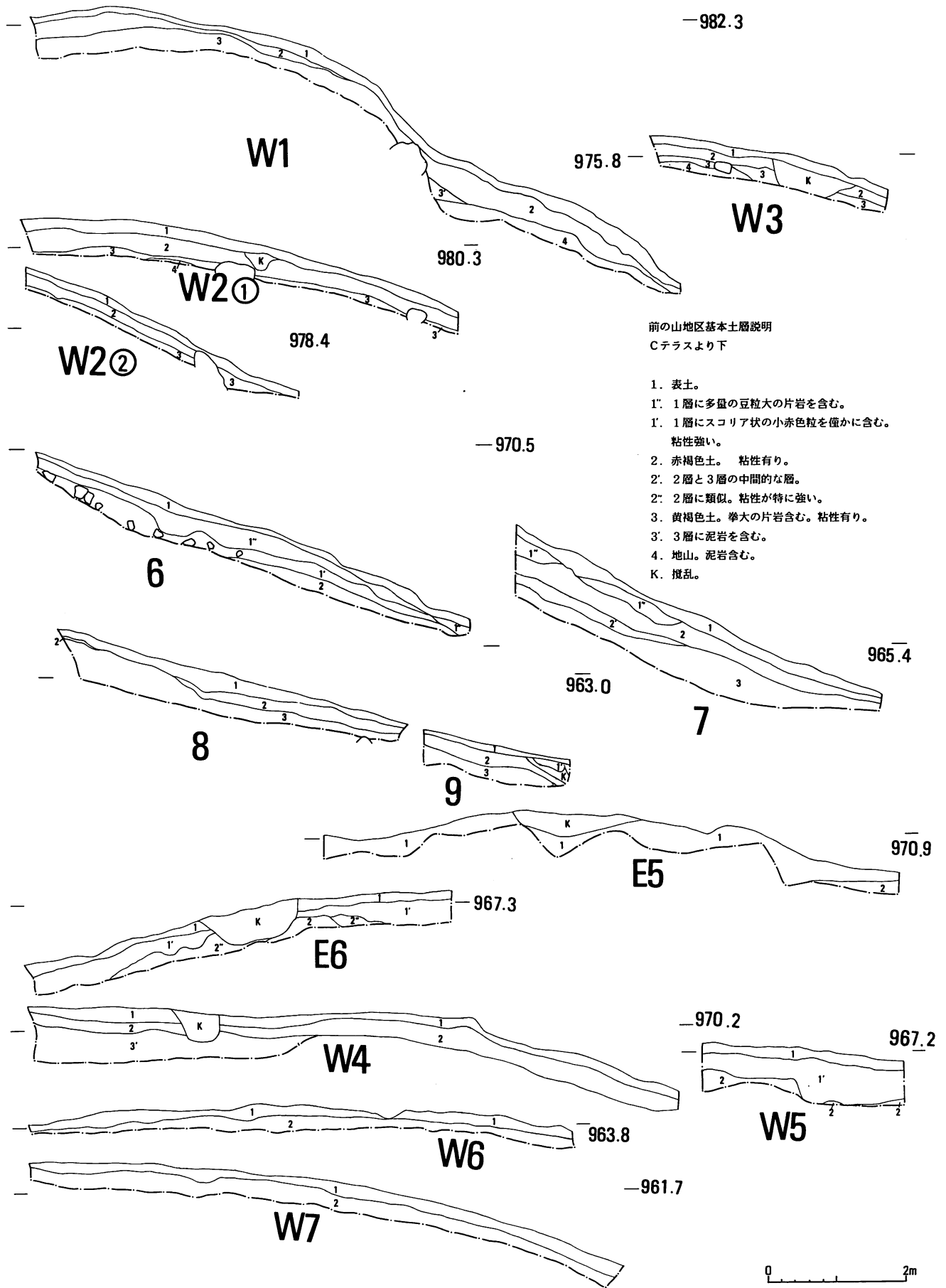


Fig. 221 前の山トレンチセクション図 ②



## 第2節 調査された遺構

前の山地区の基本土層は、山頂からCテラスまでとそれより下部とで若干異なっている。おおむね上部は粘性が弱いに対し、下部は強い。この差異については、様々な原因が予想されるが、前の山地区が標高1,000m近い高所であること、そして山地特有の風の影響を受けやすいことを考えると、微妙な気象条件の違いが土層に影響したことが予想される。また、Cテラス下の斜面のほとんどが片岩質の岩で構成されているため、ここを境に上部と下部の土層の堆積の仕方や質に違いが生じたとも考えられる。基本土層の説明は、Cテラスより上とCテラスより下に分けて行なうことにする。

まず、Fig.219左図を参照されたい。トレンチの位置図である。Cテラスより上の部分（便宜上、上部と記述する。）であるが、山頂から尾根上に沿って順に1、2、3、4、5トレンチを設定し、尾根から東側斜面にはE1、E2、E3、E4トレンチを、西側斜面にはW1、W2、W3トレンチをそれぞれ設定した。Cテラスより下の部分（便宜上、下部と記述する。）は、同様に6、7、8、9、E5、E6、W4、W5、W6、W7を設定した。

### (1) テラス

セクションについてはFig.220とFig.221を参照されたい。

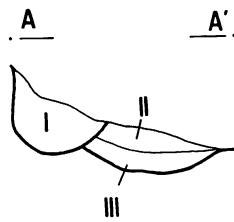
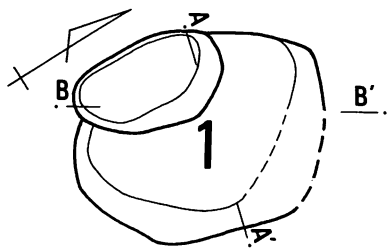
上部において、1、3、4トレンチのセクションについては明らかに自然の堆積であることがわかる。2トレンチのセクションについては3トレンチとの境において、他の上部のトレンチとは異なった堆積が見られる。緩やかな斜面であるにもかかわらず第2層の堆積が不自然であり、人為的な構築の可能性のある地点と考えられた。また、2トレンチから東斜面に沿って設定したE2トレンチには、焼土を伴った土坑の存在が想定されるセクションが3箇所確認され、遺構の存在が明らかになった。周辺を掘り下げたところ、60㎡余りの平坦地と土坑数基のプランが確認されたので、この平坦地をBテラスとした。（土坑については後述する。）しかし、土坑の確認面は第2層上層であるのに対し、平坦地の確認面は第2層下層であり、時期的な違いがあると考えられる。また、Bテラスは、2トレンチのセクションの一部で若干不自然な堆積が見られるものの、その他はほぼ自然の地形であり、人為的に構築された平坦地とは考えにくい。

5トレンチのある地点は現状の地形が平坦であることから、Cテラスとした。5トレンチは、上部のトレンチの中で最も粘性が少ないことが特徴である。上部の土層の中では比較的粘性のある第3層に、泥岩質の地山の層の砂質土が多量に混入している。また、第2層と第3層の間でも土が混じり合ったようすが全面にわたって見られる。これは、人為的なものとするのが妥当であり、平坦地をつくるための構築である可能性がきわめて高い。Cテラスの掘り下げによって、90㎡余りの平坦地と土坑1基が検出された。土坑の確認面は、第3層上面であり、テラスの時期と一致する可能性はある。（土坑については後述する。）

山頂部の平坦地をAテラスとした。山頂部は南側が私有地であるため、北側の約半分の面積（20㎡）の掘り下げにとどまった。表土を5cmほど掘り下げたところで人頭大の大きさの片岩質の岩を多量に含む黄褐色土層にあたった。非常にかたく、土を掘り起こして行うような構築は不可能であったと考えられる。土坑その他の遺構は検出されなかった。しかし、南側に残る石垣は、平坦地を確保するために造られたことは、容易に予想できる。

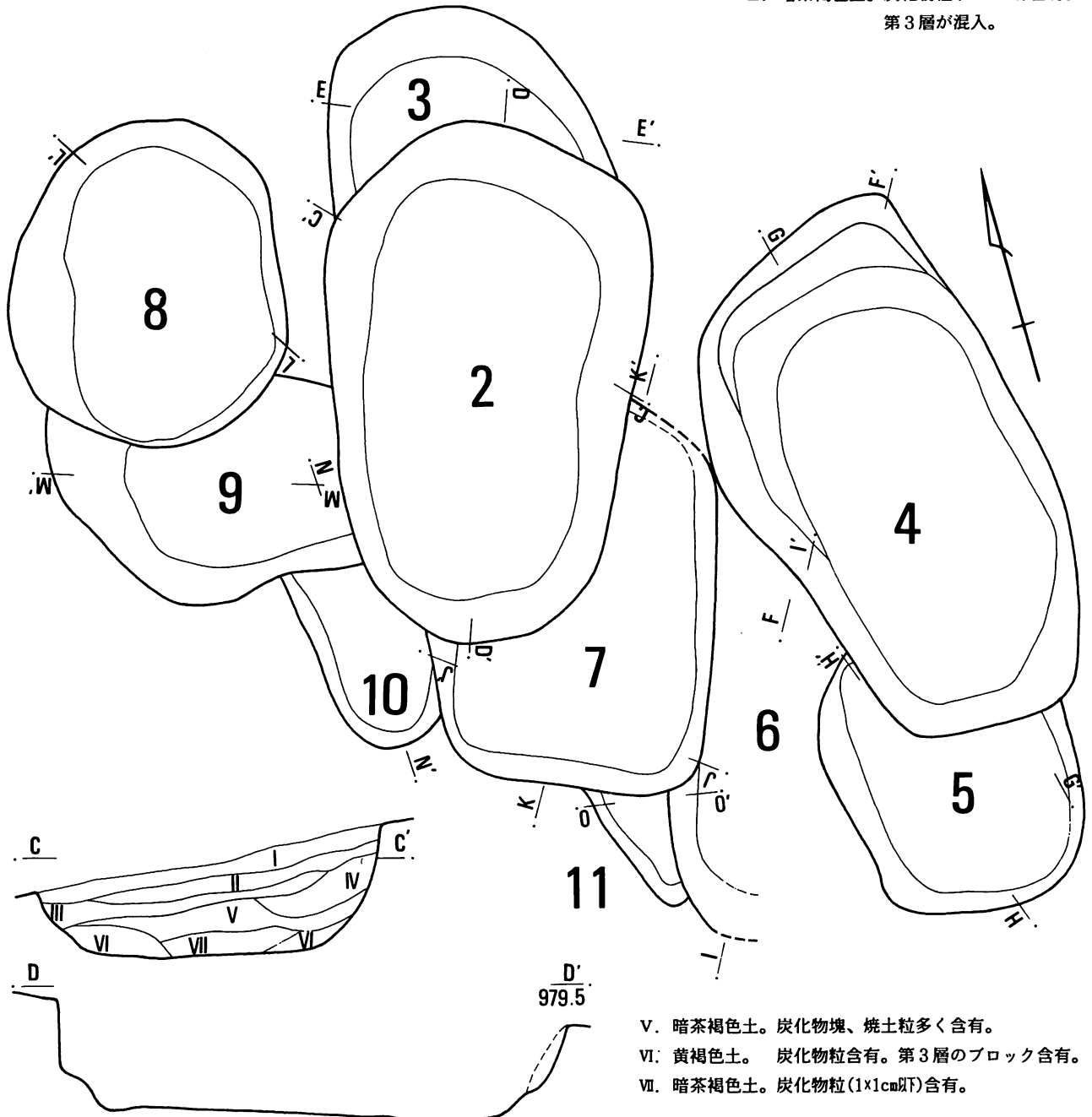
下部のトレンチのセクションからは、自然な土層の堆積の様子がみられる。第1層は、直上の斜面から崩れた片岩の礫を多量に含んでいる層である。第2層は、非常に固く締まっている。周辺を掘り下げた結果、近くに大木の根跡があることからおそらくその影響であると考えられる。下部では、8トレンチから下方が平坦地になっており、Dテラスとした。全面を掘り下げたが、遺構は検出できなかった。

以上、主にセクションを手がかりにテラスについて述べてきた。Aテラス南側の石垣・Cテラスの掘り起こしを行ったような土層は確認されたが、棚列や柱穴といった遺構は確認できなかった。テラスの性格を論じるには資料不足の感がある。



1号土坑セクション図土層説明

- I. 茶褐色土。炭化物粒(1×1cm以下)含有。
- II. 暗茶褐色土。炭化物粒(1×3cm以下)含有。
- III. 暗茶褐色土。炭化物粒(1×1cm以下)含有。  
第3層が混入。



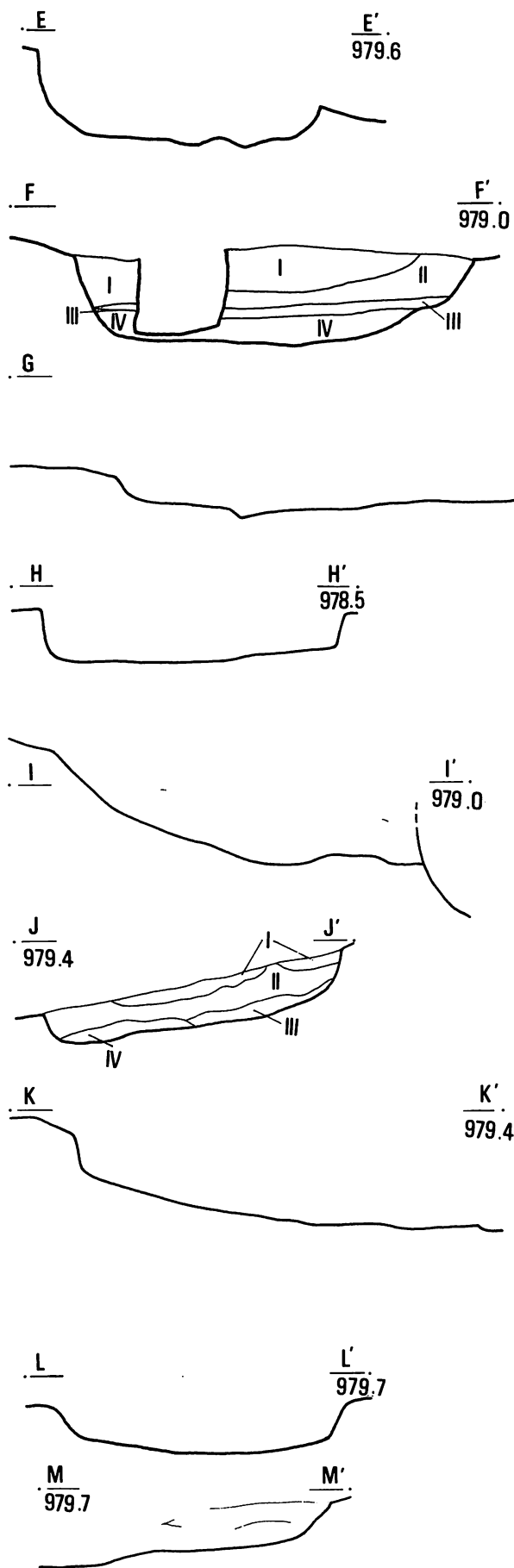
2号土坑セクション図土層説明

- I. 暗茶褐色土。粉状の炭化物粒含有。
- II. 茶褐色土。炭化物粒(0.5×1cm以下)含有。
- III. 暗茶褐色土。炭化物塊、焼土粒多量に含有。
- IV. 黄褐色土。炭化物(1×3cm以下)、粘土粒含有。

- V. 暗茶褐色土。炭化物塊、焼土粒多く含有。
- VI. 黄褐色土。炭化物粒含有。第3層のブロック含有。
- VII. 暗茶褐色土。炭化物粒(1×1cm以下)含有。



Fig. 222 前の山土坑 ①

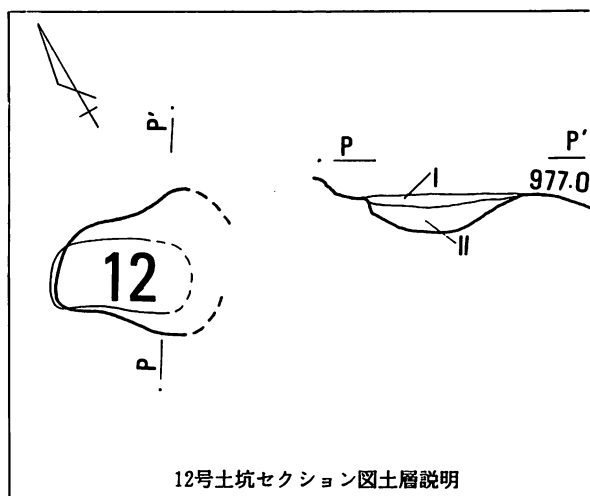


4号土坑セッション図土層説明

- I. 黄褐色土。粉状の炭化物粒含有。
- II. 茶褐色土。炭化物粒(0.5×1cm以下)まばらに含有。
- III. 暗茶褐色土。炭化物塊多く含有、焼土粒下層に残る。
- IV. 茶褐色土。炭化物粒(1×1cm以下)まばらに含有。

7号土坑セッション図土層説明

- I. 黄褐色土。粉状の炭化物粒含有。
- II. 茶褐色土。炭化物粒(0.5×1cm以下)まばらに含有。
- III. 暗茶褐色土。炭化物塊、焼土粒多量に含有。
- IV. 黄褐色土。炭化物粒含有。第3層のブロック含有。



12号土坑セッション図土層説明

- I. 黄褐色土。粉状の炭化物粒僅かに含有。
- II. 黒褐色土。炭化物塊多量に含有。



Fig. 223 前の山土坑 ②

## (2) 土坑 (Fig.219右図・Fig.222・Fig.223・P1.36)

### 1号土坑

1号土坑は、Cテラス上の斜面との境に位置する。平面形態は長軸1.35m、短軸1.08mの楕円形を呈し、断面は円形を呈する。確認面からの深さは、約0.24mを測る。断面形態は、円形を呈する。木の根により一部が攪乱を受けている。覆土は、基本的には炭化物粒が混入した暗茶褐色土であり、3層に分かれている。そのうち第I層は攪乱の影響と考えられるため土坑自体の覆土は2層であったと考えられる。炭化物は、下層において1mm大、上層において3mm大の粒状を呈している。1号土坑は、Cテラス上部の基本土層の第3層上に確認面があることから、Cテラスとの関連が予想される。

### 2号～11号土坑

2号～11号土坑は、Bテラス上に複雑に切り合った状態で検出された。セクション図は2号・4号・7号土坑のものを掲載し他は割愛した。

2号土坑は、Bテラス上の中央部に位置する。平面形態は、長軸3.20m、短軸1.80mの楕円形を呈する。確認面からの深さは、約0.60mを測る。断面形態は、浅鉢形を呈する。覆土は、多量の炭化物が混入した暗褐色土と黄褐色土からなり、7層に分かれている。焼土粒を含んだ暗褐色土と黄褐色土の重層がみられるのが特徴的で、中央の第V層は、10cm大の炭化物塊を多量に含んでいる。

3号土坑は、南に位置する2号土坑に切られている。平面形態は、楕円形と推定される。確認面からの深さは、2号土坑との境において約0.36mを測る。断面形態は、浅鉢形を呈する。覆土は茶褐色土で、3層に分かれており、上層2層は、0.5cm大の炭化物を含み、最下層は、1cm大の炭化物を含む層である。

4号土坑は、2号土坑の東方に位置する。平面形態は、長軸3.22m、短軸1.76mの方形に近い楕円形を呈する。確認面からの深さは、約0.70mを測る。断面形態は、浅鉢形を呈するが北側の壁は階段状になっている。覆土は、炭化物を含む黄褐色土が上層にあり、茶褐色土の層がその下3層にある。第Ⅲ層には、10cm大の炭化物塊を多量に含んでいる。第Ⅲ層をはさむように焼土を多量に含む層がある。

5号土坑は、北方に位置する4号土坑に切られている。平面形態は、長軸1.85m、短軸1.44mの楕円形を呈すると推定される。確認面からの深さは、約0.28mを測る。断面形態は、浅鉢形を呈する。覆土は、暗茶褐色土で、2層に分かれる。下層には、炭化物塊がブロック状に含まれ茶褐色の焼土層が、縞状に堆積している。上層は、焼土を多量に含んでいる。

6号土坑は、東方に位置する4号・5号土坑と西方に位置する7号土坑に切られていると推定される。平面形態は、長軸2.80m、短軸1.20m程度の楕円形と考えられる。深さは、約0.36mを測る。断面形態は、円形に近い浅鉢形を呈する。覆土は、1cm大の炭化物と粒状の焼土を含む茶褐色土で、2層に分かれる。下層には、Cテラス上部の基本土層の第3層の黄褐色土のブロックが混入する。

7号土坑は、北方に位置する2号土坑に切られている。平面形態は、長軸2.48m、短軸1.80mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは、約0.30mを測る。断面形態は、浅鉢形を呈する。覆土は、最上層と最下層が黄褐色土に暗茶褐色土がサンドイッチ状にはさまれた状態である。暗茶褐色土の下層は、10cm大の炭化物塊を多量に含んでいる。

8号土坑は、2号土坑の西方に位置する。平面形態は、長軸2.04m、短軸1.68mの楕円形を呈する。確認面からの深さは、約0.28mを測る。断面形態は、浅鉢形を呈する。覆土は、黄褐色土が上層にあり、1cm大の炭化物と焼土を含んだ茶褐色土が下層にある。

9号土坑は、北方に位置する8号土坑と東方に位置する2号土坑に切られている。平面形態は、規模はつかみかねるがおおよそ楕円形を呈していたと推定される。確認面からの深さは、約0.20mを測る。断面形態は、浅鉢形と推定される。覆土は、粒状の炭化物を含む黄茶褐色土が2層に分かれ、下層には、焼土粒も混入している。

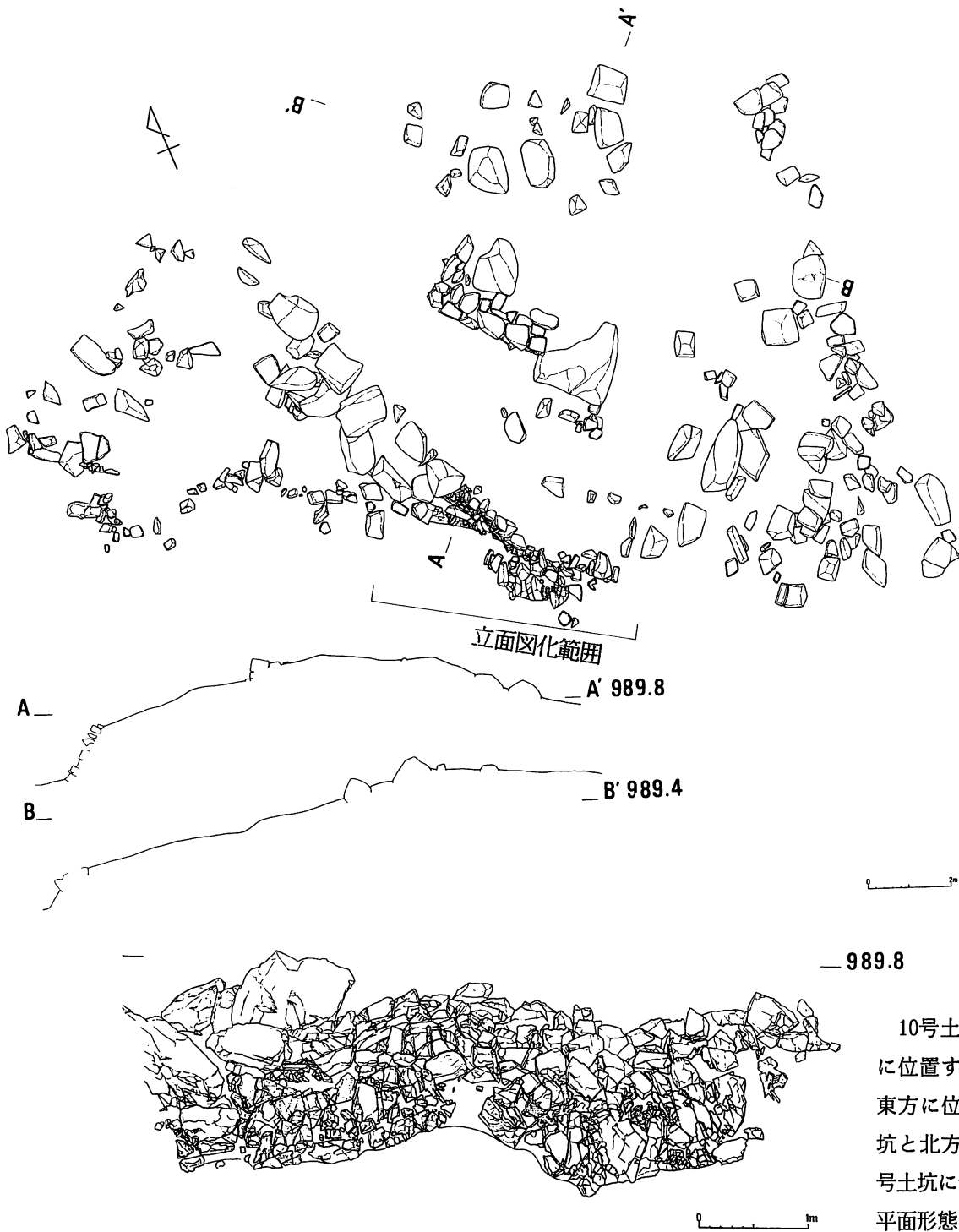


Fig. 224 前の山山頂部現況図

10号土坑は、北東方に位置する2号土坑と東方に位置する7号土坑と北方に位置する9号土坑に切られている。平面形態・断面形態は、現状では不明である。覆土は、焼土を含む暗茶褐色土である。

11号土坑は、東方に位置する6号土坑と北方に位置する7号土坑に切られている。平面形態・断面形態は、現状では不明である。確認面からの深さは、約0.35mを測る。覆土は、焼土を含む暗褐色土である。

#### 12号土坑

12号土坑は、Bテラス東方側の斜面上に位置する。平面形態は、長軸0.80m短軸0.45mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さは、0.21mを測る。断面形態は、円形を呈する。壁がオーバーハングしている状況から、横穴であった可能性もある。覆土は、黄褐色土と黒褐色土の2層に分かれる。下層の黒褐色土には、10cm大の炭化物塊を多量に含む。

### (3) 山頂部の石積み (Fig. 224・P.1.36)

山頂部の南側には、幅約15m、高さ約1.6mの範囲で石積みが残っている。さらに東南の部分を除いて、東側にも列状に石が崩れており、石積みがあった可能性がある。中でも南側中央の幅約7mの範囲は、残存状況が比較的良好であることから、立面図として記録した。石積みは、裏込石を用いない構築方法と推定される。石材は前の山地区にみられる片岩質の石を用いている。西寄りの部分と根石のほとんどについては自然石をそのままに、中央部分については自然石を荒割りして使用していると考えられる。また、根石を据える際に、わずかな平坦地を整形した痕跡がみられる。須玉町江草地区内にある獅子吼城には、曲輪の外郭に多くの石積みが見られるが、それらと比べると稚拙な石積みといえる。前の山地区の石積みについて、その築造時期等は不明である。

## 第3節 まとめ

前述のような成果を得た前の山地区の発掘調査は、様々な意味で非常に困難な発掘調査であったといえる。これらの点をここで述べておくことにより、本調査の現時点における「まとめ」に代えられるかと思う。

その第1点は本調査区における「遺構」を捉えることの困難さである。「烽火台」のような「小規模城郭」における「遺構」とは自然地形を最大限に利用する場合が多く、極端に言えば自然地形に全く手を加えずとも「城郭」たりえた場合もあると考えられる。防御的機能の希薄な施設であれば、それはなおさらである。本調査区においては、地表面踏査・試掘調査・全面的な掘り下げによる本調査を行ない平坦地(テラス)を確認したがこれらが「遺構」であるかどうかの判別には苦慮した。それは例えば一つの平坦地をとってみても少なくとも以下のような3点の捉え方ができることなどからもいえる。

- ①. 全く自然地形である→全く人手が加わらず、土地使用もされない。
- ②. 人為的な所謂「遺構」である→人手が加わり、さらに土地使用される(または「使用されたい」)
- ③. 自然地形を最大限に活かした「遺構」→人手は加えないが、土地使用はされる。

これらのうち、②は確実に「遺構」であり、捉え易いものだろう。ところが、①と③はその判別は困難であり特に遺物や他の遺構(同一時期の柵列など)が伴わない場合には不可能に近い。前の山地区における平坦地(テラス)はA~Dテラスの計4面が確認されたが、このうちCテラスは②に相当する部分もあり、「遺構」と考えることもできる。また、Aテラスも南方の石積みの存在により、②に近いと考えられる。ただし、B・Dテラスは①か③に相当し、それに伴う遺物・遺構が全く確認されなかったため、その判別は不可能に近い。よって全体的には、この平坦地(テラス)の複合体を確実な「遺構群」とはできず、部分的に「遺構」的な箇所が認められる地区と言える程度である。つまり、この調査区について、明確に「城郭」であるとの判断を下すことは現時点ではできないとするしかないのである。また、それは本調査区から1点も遺物が出土しなかったことも要因の一つである。ただし、山頂部(Aテラス)や周辺地域はそのほとんどが未調査(現状保存)であり、その部分に何らかの明確な「遺構」や遺物が残る可能性もある。なお、B・Cテラス付近で確認された土坑群は焼土や炭化物を含むものが多く「烽火」の痕跡かとの疑問もあったが、その形態・覆土・層位的な観点などから現時点では近現代の「炭焼き(伏焼き)」の痕跡である可能性が高いとしておきたい。

第2点目として挙げておきたいのは、遺跡としての性格が不明瞭極まりない「烽火台伝承地」調査の困難さである。「伝承地」とは、その全てが事実と合致するものではないだろう。しかし、そこに「伝承」が存在するからには常に数パーセントの可能性が残されるのであり、あながち軽んじることができない。まして本調査区はその立地環境や眺望については「烽火台」に相応しい地点であり、この「烽火台伝承地」という語句の存在が試掘調査の段階から報告書作成段階にいたるまで、調査担当者を困惑させたのである。簡潔に言えば、立地環境と遺跡の内容との差に常に苦慮したのである。そのため最終的にも、この前の山地区の評価(つまり「烽火台」あるいは「城郭(山城)」であるのか、ないのかの結論)を不明瞭かつ消極的なものせざるをえなかったのである。

前の山地区の調査の意味はそこに明瞭な結論を出すことよりも、小規模城郭的な施設(伝承地等を含めて)のあり方を再考する機会とすることにあると考え、「まとめ」としておきたい。

## 第Ⅵ章 塩川遺跡の調査成果について

塩川遺跡の調査のまとめとして、各時代ごとについての留意点や課題点を記述する。

### (1) 縄文時代

A・B両地区において遺構・遺物が確認された。検出された遺構・遺物は第三章・第四章のとおりであるが、特に早期から晩期にいたる土器資料は質・量ともに豊富である。これらは山間部という本遺跡の立地環境から見て、特異な出土状況であると考えられ、周辺地域との関連性等を考察する上で貴重な調査例となろう。また、土器資料を個別に見ても、周辺地域では出土例の稀な資料が多く含まれており、広い視野での検討が必要である。また、遺構が極端に少ない（あるいは、残存状況が不良なだけかもしれない）ことや各時期の土器資料が存在するものの全体的には少量ずつ出土であることも本遺跡の特徴である。決して断言はできないが、立地環境等を考えると本遺跡は長期居住する場所では無く、「通過地点」的性格が強い場所である時期が多かったことも考えられる。

### (2) 古墳時代

B地区において住居址が1軒のみ確認されたが、「住居址」と確定し難い点もあり、注意が必要である。出土した「S字状口縁台付甕」は口縁稜部が鋭い作りである点・頸部内面に撫での痕跡が残る点・口縁上段部上面が押圧面となる点などの要素から、赤塚次郎氏による分類の「B類」の範疇に納まる資料と考えられ、山梨県北部（北巨摩郡域）においては出土例が非常に少ない資料でもある。本遺跡は長野県佐久地方と甲府盆地を結ぶ山間ルートに位置しており、何らかの人間の動きが当時ここに展開されたことを推測させる。また、小片ではあるが櫛描波状文の施される土器片が共伴している点も特徴的である。

### (3) 平安時代

A地区においては遺構は伴わないものの坏・甕の破片数点が確認され、B地区においては遺物を伴う5軒の竪穴住居址が確認された。以下、これらの資料についての補足と時期的な位置付けを行なう。位置付けについては先学諸氏の研究成果〔註1〕を参考に行ない時期名称もそのまま引用させていただく。しかし、最近では「甲斐型土器」編年の年代観を見直す動きが活発化しており〔註2〕、年代観については後日修正する必要があるかも知れない。

- ・ A地区遺構外遺物－甕は時期判断のできる破片がなく不明である。ただし、坏についてはIX期（10C第1四半期）ないしはX期（10C第2四半期）の所産と考えられる。
- ・ B地区3号住居址－羽釜のみの出土であるが、XIII期（10C末葉）～XIV期（11C前葉）の所産と考えられる。カマドは住居址南東端に設けられる。
- ・ B地区8号住居址－皿・甕（大型・小型）・ロクロ甕（小型）・須恵器が出土する。ロクロ甕の胎土は赤褐色を呈するものの精製されたような観がある。それ以外の甕は形態・胎土とも「甲斐型」である。VIII期（9C第4四半期）の所産と考えられる。カマドは住居址東壁に設けられる。
- ・ B地区9号住居址－坏（すべて内黒・墨書含む）・甕などが出土する。坏の色調は白色を呈するのに対し、甕は赤褐色の「甲斐型」である。VIII期（9C第4四半期）～IX期（10C第1四半期）の所産と考えられる。カマドは住居址北東端近くに設けられたと推測される。
- ・ B地区11号住居址－坏（墨書含む）のみの出土である。XII期（10C第3四半期）の所産と考えられる。カマドは不明だが、焼土の検出状況から住居址東壁側に設けられたと推測される。
- ・ B地区12号住居址－坏（墨書）・羽釜・須恵器・鉄製紡錘車が出土する。坏はIX期（10C第1四半期）ないしはX期（10C第2四半期）の所産であるが、羽釜はXIII期（10C末葉）～XIV期（11C前葉）の所産と時期がずれる。ただし、羽釜はカマド内に残る状態であったため住居址の時期は羽釜の所産時期に合致すると考えられる。カマドは住居址東壁に設けられる。

以上のように各住居址等の時期的な位置付けは考えられる。特に、B地区における住居址のあり方は、Ⅷ期(9C第4四半期)からⅩⅢ・ⅩⅣ期(10C末葉～11C前葉)にかけての時期に極めて小規模な集落(単独住居も含まれる)が存在したことが判る。時期により異なるが、墨書土器の存在や「信州系土器」と「甲斐型土器」の共存などの事象と本遺跡の位置を併せ見ると、「交通の要所」的な本遺跡の性格を考える必要があろう。

〔註1〕坂本美夫・末木健・堀内真 1983年 「山梨県」『神奈川考古』第14号 神奈川考古同人会

〔註2〕山梨県考古学協会主催の「甲斐型土器研究グループ」等が研究を進めている。

#### (4) 中世

B地区においてのみ中世の遺構・遺物が確認された。以下、遺構・遺物についての留意点や課題を述べる。

##### 1) 地下式土壌および竪穴状遺構について

本遺跡の竪穴状遺構は地下式土壌と共通する可能性が高く、両者は調査区中央部から北東部にかけての地点(10-10Grid周辺)に集中して存在する。「地下式土壌(地下式墳)」の性格については諸説が存在し、未だ不明確な点もある。しかし、大きく「葬送に関わる遺構」と捉えるならば、この集中地点における地下式土壌等の構築に際して「墓域」あるいは「葬送儀礼域」的な意識が働いていたことも推測できる。ただし、これらの遺構が貯蔵穴等の別性格を有す可能性もあり、断定はできずあくまで推測の域を出ない。

##### 2) 五輪塔の集中区について

B地区の五輪塔集中区の内容については本文のとおりであるが、課題点について触れておく。

###### a) 五輪塔集中区の性格について

五輪塔集中区に残存した空風輪の資料数などから考えると、少なくとも20基以上の五輪塔が存在したと考えられるが、メインとなるのは墓壙を伴う2基の五輪塔(No.17・No.22+11を指し、特にNo.17がメイン)である。人為的なテラスや段部もこの2基を中心に配列されていたことが検出状況から推測できる。墓壙を伴わない五輪塔の建立には、「供養」(追善)の意味が強いものと考えられ、時間的には「墓壙を伴う五輪塔」→「墓壙を伴わない五輪塔」の流れが推測できる。また、テラスや段部については拡張などの痕跡がなく、一度に作り出された可能性が高い。つまり「墓壙を伴う五輪塔(墓)」に対して、「墓壙を伴わない五輪塔(供養)」を追加することを将来的に見越して「整地」をした可能性もある。ただし、その追加が同時なのか、時間差があるのかは不明である。また、墓壙を伴わない五輪塔には、時間的に大きく隔たる資料も含まれると考えられ、「供養」とは無関係に後世に「集積」されただけのものも多いことが推測できる。

###### b) 五輪塔集中区の時期について

所産時期については副葬品等が皆無であったため、五輪塔の形態から求める他ない。しかし、出土した五輪塔は4部位(空風輪・火輪・水輪・地輪)が分離する形態の資料であり、崩壊してセット関係の把握もできない状態であった。セットが不明な各部位の形態から所産時期を求めることは困難であり、各々に明確な所産時期を与えることはできない。ただし、メインとなるNo.17の地輪は幅30.9cm、高さ24.4cmを測る大型の資料であり、その幅/高比や火葬骨を伴う点から16世紀以前(15世紀前後か?)の資料である可能性が高い。また、No.17に隣接するNo.22+11も火葬骨を伴い、地輪(No.22)の上面高をNo.17に揃える操作をしている点や切り合い関係から時間的にはNo.17が古くNo.22+11が新しいと考えられる。なお、この時間差は比較的短いものと考えられる。被葬者も比較的に近い関係(血縁関係)であることが推測される。

##### 3) 出土遺物について

土器・陶磁器類を中心に時期的な補足や課題点を述べる。

###### a) 土師質皿形土器および内耳土器について

本文中にて形態等による分類を行なった。これらの所産時期については出土層位や共伴遺物によって確認されるべきであるが、本遺跡の資料はその条件を十分には満たさない。ゆえに所産時期は周辺地域における類例から求めることに大きく頼らざるを得ない。しかし、あくまで類例から求めた年代観のため不明確であり、今後の修正・訂正が必要であることは言うまでもない。



## ①土師質皿形土器

I～Ⅲ類の資料は、底径／口径比が50%前後を測る点や底部が糸切り底である点に共通性がある。また、相違点としてはI類における口縁部の差異（シャープか丸みを帯びるか）、I～Ⅲ類における体部の差異（体部が丸みを帯びるか直線的か、底部が台状を呈すか呈さないか）や胎土・焼成の差異が挙げられる。これらの点が本遺跡における土師質皿形土器の所産時期を求める基準になると考えられる。周辺地域の類例などから見ると全体的には15世紀後半～16世紀後半を中心とした年代観が求められる。しかし、B地区から出土した他の遺物の所産時期を併考すると、この年代観以上に幅を持たせたほうが良いのかも知れない。

## ②内耳土器

形態から3つに分類し（鍋形・中間形・ほうろく形）、さらに鍋形の細分を加えI～Ⅷ類に分類した。周辺地域（主として長野県域）の類例などから、数類については大まかな年代観が与えられそうである。

I類—全体が薄手で平均的な器厚を有し、体部は外傾し、口縁部はやや内傾する特徴がある。15世紀中葉～16世紀後半の資料に類似する。3－6 G スリパチで共伴する播鉢や内耳土器Ⅷ類（ほうろく形）の年代観と合致するか否かを注意する必要がある。

Ⅱ類—全体が薄手で平均的な器厚を有し、体部はやや内傾（直立）し、口縁部が直線的（くの字状）に開く特徴がある。15世紀前半～15世紀中葉の資料に類似する。

Ⅲ類—全体が薄手で平均的な器厚を有し、体部はやや内湾ぎみに外傾し、口縁部が内湾して開く特徴がある。16世紀中葉～16世紀後半の資料に類似する。

Ⅳ類—全体がやや厚手で平均的な器厚を有し、体部が大きく開き、口縁部が短く丸みを帯びる特徴がある。16世紀代の資料に類似する。

V・Ⅵ類—全体が厚手で体部下位から口縁部へ徐々に薄くなる器厚を有し、口縁部がほとんど開かない特徴がある。類例が少なく、具体的な年代観は提示できない。

Ⅶ類—鍋形とほうろく形の中間的な形態である。15世紀後半以降の資料に類似するが、時期限定はできない。

Ⅷ類—ほうろく形の形態である。16世紀前半以降の資料に類似する。なお、I類（15世紀中葉～16世紀後半）との共伴例（3－6 G スリパチ）があるが、17世紀以降にも類例のある形態であり時期限定はできない。

## b) 陶磁器について

舶載陶磁器と国内産（東海系）陶器に大別され、少量ながら周辺地域からは出土例の稀な資料が出土している。

### ①舶載陶磁器

すべて中国南部に産地が求められる資料であり、12世紀～16世紀代に所産時期を求められる資料が少量ずつ出土している。日常什器の資料というよりは、「茶の湯」行為に関わるような香炉・四耳壺・碗等が多い。

### ②東海系陶器

すべて瀬戸・美濃焼の資料であり、13世紀～17世紀代に所産時期を求められる資料が少量ずつ出土している。日常什器が主体的だが、茶壺状の小壺なども含み舶載陶磁器同様に考えられる。

### ③その他の遺物

陶磁器・土器類以外の中世の遺物には15～16世紀代の所産と考えられる武具類（小柄・鏝）・明確な時期は不明だが、おおよそ15～16世紀代の所産と考えられる茶臼・石臼などが出土している。

以上のような出土遺物等の内容から本遺跡における中世を考えると、ある特定の階層に限定される集団の「居住域」ないしは「墓域」としての性格を掲げざるを得ない。その階層とは「武士階層」が最も相応しいものであり、本地域における軍事上の要路である「穂坂路」の要点に位置する本調査地点に居住した有力集団とも換言できよう。立地環境が山間地の限られた平坦地であることから、「居住域」と「墓域」が近接せざるを得ない本遺跡の性格が推測できる。ただし、「居住域」については遺物から確認できるのみで建物址等の遺構は確認できず明確な結論付けはできない。また、各々（居住域・墓域）の時期についても限定はできず、その同時性や継続性については問題点として残留する。ここでは15世紀～16世紀代を前後する時期にその中心的な時期を置くことの

できる「館・屋敷」的な性格を有す遺跡であろうことを指摘するに留めておきたい。

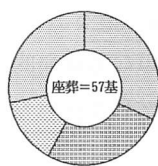
なお、前の山地区については、第V章で「まとめ」を記したのでここでは省略する。ただし「烽火台」の伝承はB地区における中世の遺構・遺物の内容と無縁ではないであろうことだけは、ここで示唆しておきたい。

### (5) 近世

近世については墓墳が主体である。以下、遺構・遺物等のデータを中心に述べる。なお、墓墳には副葬品等から時期的に近世以前の可能性のあるものもあるが、墓墳として一括しこの項において扱う。

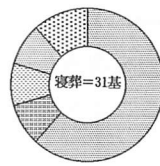
#### 1) 墓墳の形態と埋葬形態の関係について

墓墳の平面形態には円形・方形・楕円形等の数種類が認められた。これらは次に述べるように埋葬形態との関係が強く、その点については埋葬形態別の墓墳平面形態表 (Tab. 16・17) に示したとおりである。これらによると座葬の墓墳は円形を、寝葬の墓墳は楕円形を基本とすることが解る。埋葬形態については、成人以上が埋葬された墓墳については、座葬 (形態は一様ではないが、墓墳内に座り込む形態を基本とする。) と寝葬 (形態は一様ではないが、墓墳内に横たわる形態を基本とする。) の2種類に大別できる。これらの割合は埋葬形態表 (Tab. 18) に示したとおりであり、全体的には座葬が主体的である。



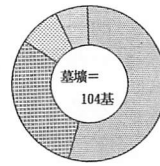
楕円形	18
円形	15
方形	8
不整形	16

Tab. 16 墓墳 (座葬) の平面形態内訳表



楕円	21
円形	3
方形	3
不整形	3
不明	4

Tab. 17 墓墳 (寝葬) の平面形態内訳表



座葬	57
寝葬	31
不明 (乳小児)	9
不明	7

Tab. 18 埋葬形態内訳表

ここで、墓墳の形態と埋葬形態の関係について触れておく。両者が密接な関係を有すことは前述のとおりであり、死→納棺的行為 [註3] →埋葬の流れから推測すれば、埋葬形態が土壌の形態を規制するものと考えられる。本遺跡における両者の関係も「規制に対する被規制の関係」と解釈してよかろう。また、異なる埋葬・墓墳形態の共存性の問題 (同時期の墓墳の埋葬・墓墳形態に差異がある場合には、そこに何らかの選択の意識が存在したことになる。) もある。この問題にアプローチする手法としては、墓墳の所産時期のより細かい細分を経て、その割合を分析することが望ましい。しかし、本遺跡の場合は墓墳の所産時期の細分に限界があり現段階での分析は困難である。

参考までに時期別の埋葬および土壌形態を示すと、(Tab. 19) のようになる。これからは古い時期の墓墳には寝葬+楕円が主体的であることが言える程度であり、ここでは研究の一視点として提示するに留めておく。

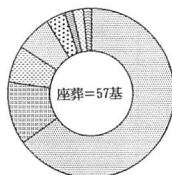
	平面形態					埋葬形態		
	楕円形	円形	不整形円形	方形	不明	寝葬	座葬	不明
I 期	50%	--	----	50%	--	100%	--	--
II 期	----	--	100%	--	--	100%	--	--
III 期	47%	13%	20%	15%	5%	29%	58%	13%
IV 期	40%	32%	15%	9%	4%	18%	64%	18%

Tab. 19 時期別の埋葬および墓墳形態表

[註3] ここで言う「納棺的行為」とは棺桶に遺体を納めることには限定せず、墓まで遺体を運搬できる状態にする行為を指し、遺体を布で包むことや何も手を加えない場合も含まれる。また、この段階である程度は埋葬形態が決定されると考えられる。これらの点についてはさらに検討が必要である。

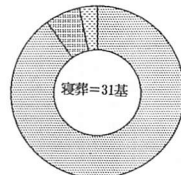
#### 2) 埋葬形態の特徴について

埋葬形態には座葬と寝葬の二者があることは前述のとおりである。ここでは各々の埋葬形態に見える特徴を述べる。まず、座葬であるが埋葬された遺体の向く方向についてのデータを (Tab. 20) に示した。図のとおり、遺体は北方向に向けて埋葬されるものが多く、北西・北東方向まで含めれば約84%が北方向に体を向け埋葬されたこ



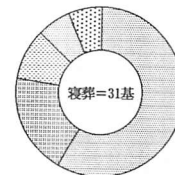
北	37
北東	7
西	4
北西	4
南	2
東	1
南西	1
不明	1

Tab. 20 座葬の遺体方向内訳表



北	28
東	2
南	1

Tab. 21 寝葬の遺体頭位内訳表



西	18
上 (仰向)	6
東	3
北	2
不明	2

Tab. 22 寝葬の遺体方向内訳表

とが解る。また、寝葬については遺体の頭位についてのデータを (Tab. 21) に、体の向く方向についてのデータを (Tab. 22) に示した。図のとおり、頭位は北側が多く、体の向きは西を向くものが多いことが解る。これらのことから言えることは、本遺跡における墓壇の大半は「北枕」などの仏教的思想に基づき埋葬されたものが多く主体的であるということであり、時期的に古い墓壇についても同様である。ただし、割合的には小数である「仏教的思想に基づかない墓壇」にも注意を注ぐ必要がある。これは時間的な要因による事象ではないと考えられ、その背景に何らかの原因を求めたい。しかし、単なる偶発的事象である可能性も否めず、また原因をここで提示することもできない。ここでも今後の課題として残す他はない。

### 3) 被葬者について

森本岩太郎・吉田俊爾両氏による分析結果 (付篇) を受けて挙げられる留意点を挙げておく。

#### ①被葬者の年齢構成について

被葬者の年齢構成 (つまり死亡年齢) を (Tab. 23) にまとめてみた。ここから解るのは壮年期の死亡者が男女ともに多いことである。おそらく、周辺地域における江戸期の平均寿命を表すものと考えられ、山間部と都市部との比較資料としても興味深い。また、乳児～小児の死亡率が低い点は山間部の特徴とも言えるかも知れない。

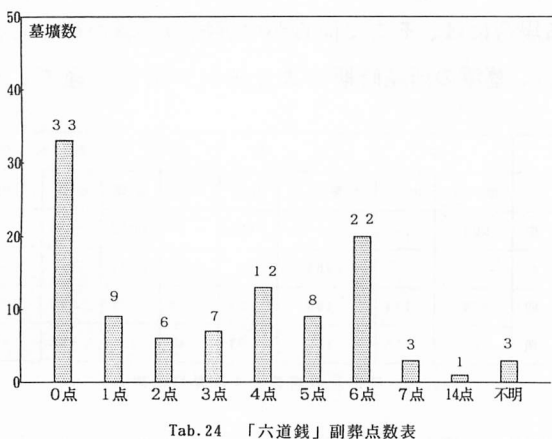
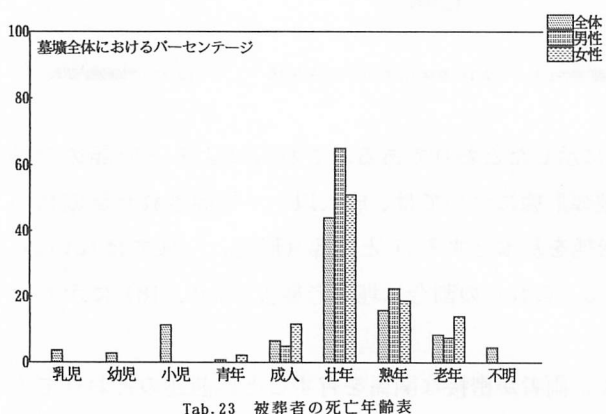
#### ②疾病などについて

江戸都市部の資料には比較的多いとされる骨梅毒症の認められる人骨がここに存在したことは、当時の人々の交流を探る上で重要である。また、関節炎等の症状が認められる人骨には山間部の生業に関係を求めることもできよう。

### 4) 副葬品について

#### a) 副葬銭について

所謂「六道銭」として副葬されたものであるが、本遺跡では必ずしも6点とは限らなかった。その内容は (Tab. 24) のとおりであり、6点を副葬する例は多いものの、全く含まない例も多くある。6点未満の例や超過する例については基本的には「六道銭」を意識した副葬品であると考えられる。ただし、「6」という数にこだわらず「銭を副葬する」という行為そのもので葬送者の有する「六道銭の意識」が満たされた可能性もある。副葬点数が6点から大きく離れる例 (例えば14点など) があることもこの要因によるであろう。しかし本遺跡の場合は残存状況の不良な古銭も多いため、出土点数が埋葬時に合致するか否かの不明点も残され、断言はできない。「六道銭」は近世の貨幣流通構造の究明や墓壇の時期判別に好資料となることは周知のとおりあるが、ここでは古銭の組成に主眼を置いたデータの提示のみを行なった。古銭の種別は大きく4種類 (渡来銭・古寛永・新寛永・鉄銭) に分かれ、その組成パターンについては (Tab. 25) に示したとおりである。また、(Tab. 26) は各組成の割合を示したものであり、これらからは1～2



バツ	T	K	S	Fe		バツ	T	K	S	Fe	
A-1	○	—	—	—	T	C-1	○	○	○	—	T・K・S
-2	—	○	—	—	K	-2	○	○	—	○	T・K・Fe
-3	—	—	○	—	S	-3	○	—	○	○	T・S・Fe
-4	—	—	—	○	Fe	-4	—	○	○	○	K・S・Fe
B-1	○	○	—	—	T・K	D-1	○	○	○	○	T・K・S・Fe
-2	○	—	○	—	T・S	E					-----
-3	○	—	—	○	T・Fe	F					?
-4	—	○	○	—	K・S						
-5	—	—	—	○	K・Fe						
-6	—	—	○	○	S・Fe						

T (渡来銭)・K (古寛永)・S (新寛永)・Fe (鉄銭)  
Tab. 25 「六道銭」組成パターン表

A	A-1	A-2	A-3	A-4	B	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	C	C-1	C-2	C-3	C-4	D	D-1	E: 銭銭	F: 不明
27.9	2.9	1.9	14.4	8.6	30.1	1.0	1.0	0	5.8	2.9	20.2	4.8	0	0	1.0	3.9	0	0	30.1	5.8

二重線内 (A~Fグループ) の数値は、各グループが全体 (墓壇104 基) 内で占める割合を表す。

Tab. 26 「六道銭」組成パターン分布表

種類から成るものが多いことやA-3・A-4・B-6のような新寛永と鉄銭から成るものが多いことが解る。しかし、これらは「六道銭」の点数を無視したデータでありどれだけの情報を提供し得るのかは不明である。

なお、古銭の年代観は渡来銭のみのA-1が17世紀初頭以前、渡来銭+古寛永のB-1が17世紀中葉前後、古寛永のみのA-2が17世紀中葉前後、それ以外は17世紀後半から19世紀中葉前後と考えられる程度である。

b) 煙管について

雁首部・吸口部のみが出土する墓壇も含めれば、全墓壇の約43%に煙管が副葬される。また、性別で見ると成人以上の男性の約60%、成人以上の女性の約42%が煙管を副葬されており、この数値は江戸期の喫煙習慣の比率につながる可能性が高いと考えられる。感覚的には女性の喫煙率が意外と高かったことが推測される。なお、小児 (16才前後) が埋葬される63号墓壇にも煙管が副葬され、喫煙年齢等に疑問点がある。

また、煙管は「個人所有の口に触れた道具」であるため、伝世する可能性が低いものであると考えられる。そのため、副葬された煙管は墓壇の所産時期を確定する好資料であるとも言える。煙管の形態の編年作業は江戸の都市部などで進められており、これらを参考におおまかな所産時期は求められるであろう。年代観については、後述するが、江戸などの都市部と山間部の年代観について、若干の差異があるかも知れず再考を要するだろう。

煙管の年代観については、雁首部の形態からおおまかに求めた。つまり、b型が18世紀代、a型が18世紀末～19世紀初頭、c型が19世紀代前半、d型が19世紀代中葉以降と考えられる。

c) その他の遺物について

①陶磁器について

陶磁器については、所産時期等も含めて観察表 (Tab. 9) に示した。18世紀後半を中心とした時期の資料が多いが、陶磁器が副葬される墓壇は全墓壇の約11%のみに限られた。このような割合を都市部 (江戸) を含めた周辺地域と比較することにより、各地域における陶磁器 (特に非在地産陶磁器) に対する意識 (稀少性からの価値観等) の差を窺うことも可能であろう。また、「焼継ぎ」にて補修された資料についても検討課題として残る。

②玩具について

乳児が埋葬された85号墓壇に陶製の鳩笛が1点のみ副葬されている。産地は不明であるが、江戸の今戸焼 (19世紀前半～中葉) に類似する。ただし、この種の鳩笛については山梨県塩山市の武骨焼との関係があるようであり [註4]、所産時期についても注意が必要である。また、鳩笛がまだ使用不能な乳児の墓壇に副葬されていることは、近親者から被葬者へむけた感情の表れであろうと考えられる。

[註4] 山梨県教育委員会 1990 『山梨県生産遺跡分布調査報告書 (窯業遺跡)』

丹後裕実 1982 「甲斐のやきもの」 『日本やきもの集成2』 平凡社

③鋏・鑿などについて

男性 (壮年) が埋葬された24号墓壇に糸切り鋏が副葬され、小児が埋葬された57号墓壇に鑿が副葬される。両者とも被葬者の性格とはアンバランスな関係で刃物が副葬されており、民俗例などにある「魔除け」的な意味が含まれている可能性もあろう。ただし、この2墓壇のみに見られる事象であり、断定はできない。

5) 墓壇の所産時期について

墓壇の形態・埋葬形態・副葬品等は前述のような状況であるが、副葬品を中心に本遺跡における墓壇の所産時期を求めてみたい。ただし、非常に乱暴な所産時期の位置付けであり、今後の修正が必要であることは言うまでもなく、現段階では「各墓壇の時期は表記した年代以降の所産の可能性はある」程度に捉えていただきたい。また、遺構の切り合い関係からの位置付けは時間幅が把みきれないため、除外して考えた。

- I 期 (17世紀代以前) …… 35・102
- II 期 (17世紀代) …… 12
- III 期 (18世紀代) …… 1・2・3・4・5・6・8・9・13・16・23・24・26・28・29・30・31・33・34・37・43・44・48・52・53・54・55・59・60・61・62・63・65・66・67・71・72・73・75・78・81・82・83・86・87・89・91・93・94・95・96・98・100・101・104
- IV 期 (18世紀末～19世紀代) …… 10・11・14・17・19・21・22・40・41・50・56・57・58・68・69・70・79・80・84・85・88・90
- 不明 (時期判別可能資料なし) …… 7・15・18・20・25・27・32・36・38・39・42・45・46・47・49・51・64・74・76・77・92・97・99・103

また、墓壇の時期に関連して、墓標の問題にもふれておかななくてはならない。本遺跡においては、各墓壇に伴う状態の墓標(墓石)は全く確認されなかった。これは明治17年に全国的に発令された「墓地埋葬にかかると太政官布告令」に伴う墓地改葬が、本地域において明治22年に実施されたことに大きく起因している。ゆえに、本来は各墓壇には墓標を伴うものが多かったことが予想される。移転された墓標群は現在でも近接地(新塩川集落内)に残存しており、これらを詳細に調査することにより墓壇の所産時期の情報がより多く得られるものと考えられる。しかし、今回はそこまで調査の幅を広げることができなかった。今後の課題として残しておく。

#### 6) 墓壇の位置について

墓壇の位置を、所産時期別にみるとFig. 225 のようになる。細かい所産時期の区分ができなかったことや立地環境(限られた平坦地に墓壇が構築されること)などの理由から、墓壇位置の変遷は明確には難しい。しかし、巨視的にこの状況を捉えると以下のようなことが言えそうである。

- I 期の墓壇→単独で平坦地の縁辺部寄りに存在する傾向がある。
- II・III期の墓壇→調査区中央部(Gridの9ライン)を境に、北側寄りにIII期、南側寄りにIV期の墓壇が集中して存在する傾向がある。

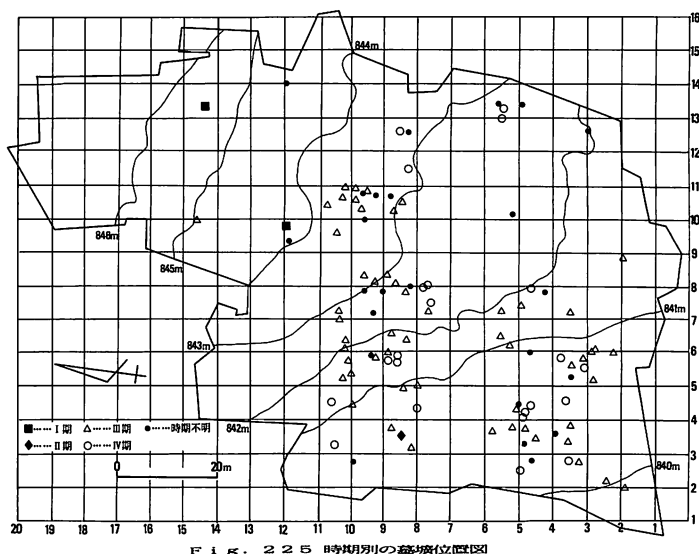


Fig. 225

特にIII・IV期(18世紀代～19世紀代)の墓壇について、墓壇の位置が時期別に「全体的」に変遷するか否かという点は大きな問題点を包括していると考えられる。つまり、長期間に一族(家族)墓的な小墓域が営まれていた(何年も同じ場所に家族を葬り続ける)とするならば、各時期の墓壇は時期別にその位置を変えることなく存在するであろう。ところが共同墓地的な意識がそこに働いていたとすれば、墓壇の位置は時期別に変遷することもある。今回はそこまで分析するには至らなかったが、本遺跡におけるIII・IV期の墓壇の位置は興味深い状況を呈しているものであろう。

#### 7) その他

墓壇に関しては、上記以外にもまだまだ多くの検討課題が残されている。紙数の都合もあり、ここでは触れることができないが、今後も他地域との比較などの検討を続けていきたい。

以上のように塩川遺跡の各時代について述べてみた。時期の判断やその他の記述事項について、大きな過ちを犯している部分や検討不十分な部分も多いと思われる。今後、多くの方々からのご叱正を頂きつつ、塩川遺跡の「まとめ」を続けることができれば、これに勝る幸いはないと考えている。

## 主要参考文献

本報告書の作成過程において、数多くの文献を参考にさせていただいた。以下に掲げ、感謝申し上げたい。

### 【縄文時代】

- 我孫子昭二 1981年 「縄文後期の土器 関東・中部地方」 『縄文土器大成』3 講談社
- 我孫子昭二 1988年 「勝坂式土器様式」 『縄文土器大観』2 小学館
- 新井 和之 1982年 「黒浜式土器」 『縄文文化の研究』5（縄文土器Ⅰ） 雄山閣
- 網谷 克彦 1982年 「北白川下層式土器」 『縄文文化の研究』5（縄文土器Ⅰ） 雄山閣
- 池谷 信之 1985年 「Ⅶ-2 木島式土器の分類と編年」 『平沼吹上遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会
- 今村 啓爾 1982年 「諸磯式土器」 『縄文文化の研究』5（縄文土器Ⅰ） 雄山閣
- 今村 啓爾 1985年 「五領ヶ台式土器の編年—その細分および東北地方との関係を中心に—」 『東京大学考古学研究室研究紀要』第4号
- 植田 真 1988年 「猪沢式土器様式」 『縄文土器大観』2 小学館
- 岡本 勇 1982年 「縄文早期・前期の土器 関東・中部地方」 『縄文土器大成』1 講談社
- 小野 正文 1987年 「第6章 第1節 土器の概観」 『釈迦堂Ⅱ』（山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第21集） 山梨県教育委員会
- 小島 俊彰 1989年 「十三菩提式様式」 『縄文土器大観』1 小学館
- 柿沼 修平 1981年 「称名寺式土器」 『縄文文化の研究』5（縄文土器Ⅰ） 雄山閣
- 渋谷 昌彦 1982年 「木島式土器の研究—木島式土器の型式細分について—」 『静岡県考古学研究』11 静岡県考古学会
- 末木 健 1981年 「曾利式土器」 『縄文文化の研究』5（縄文土器Ⅰ） 雄山閣
- 末木 健 1988年 「曾利式土器様式」 『縄文土器大観』3 小学館
- 鈴木 保彦 1988年 「加曾利E式土器様式」 『縄文土器大観』2 小学館
- 谷口 康浩 1989年 「諸磯式土器様式」 『縄文土器大観』1 小学館
- 谷口 康浩 1989年 「条痕文系土器様式」 『縄文土器大観』1 小学館
- 寺内 隆夫 1987年 「五領ヶ台式土器から勝坂式土器へ—型式変遷における一視点」 『長野県埋蔵文化財センター紀要』1（助）長野県埋蔵文化財センター
- 長沢 宏昌 1989年 「花鳥山遺跡の諸問題」 『花鳥山遺跡・水呑場遺跡』（山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第45集） 山梨県教育委員会
- 中島 庄一 1989年 「称名寺式土器様式」 『縄文土器大観』3 小学館
- 永峯 光一 1981年 「縄文晩期の土器 中部・北陸地方」 『縄文土器大成』4 講談社
- 新津 健 1989年 「第Ⅶ章 遺物・遺構の検討」 『金生遺跡Ⅱ（縄文時代編）』（山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第41集） 山梨県教育委員会
- 西田 泰民 1989年 「堀之内・加曾利B式土器様式」 『縄文土器大観』3 小学館
- 樋口昇一・鈴木保彦・能登 健  
1981年 「縄文中期の土器 関東・中部・北陸地方」 『縄文土器大成』2 講談社
- 増子 康真 1982年 「木島式土器の検討」 『中部高地の考古学』Ⅱ
- 宮下 健司 1989年 「東海系条痕文系土器様式」 『縄文土器大観』1 小学館
- 宮下 健司 1989年 「薄手無文土器様式」 『縄文土器大観』1 小学館
- 三上 徹也 1987年 「梨久保式土器 再考」 『長野県埋蔵文化財センター紀要』1（助）長野県埋蔵文化財センター
- 山口 明 1980年 「縄文時代中期初頭土器群における型式の実態」 『静岡県考古学会シンポジウム

4 縄文土器の交流とその背景—特にその中期初頭の土器群をとおして— 静岡県  
考古学会

- 山本 典幸 1988年 「五領ヶ台式土器様式」 『縄文土器大観』3 小学館  
山梨県教育委員会 1991年 『小坂遺跡』(山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第63集)  
米田 明訓 1978年 「酋利式土器編年の基礎的把握」 『長野県考古学会誌』30 長野県考古学会

【古墳時代】

- 愛知県埋蔵文化財センター 1990年 『廻間遺跡』  
赤塚 次郎 1986年 「“S字甕” 覚書'85」 『年報—昭和60年度—』 愛知県埋蔵文化財センター  
赤塚 次郎 1986年 「“S字甕” について」 『欠山式とその前後』第3回東海埋蔵文化財研究会  
小林 健二 1991年 「甲府盆地におけるS字甕の定着について」 『古文化談叢』第26集 九州古文化研  
究会  
白石 真理 1990年 「弥生時代末から古墳時代前期の土器」 『古屋敷遺跡』 富士吉田市史編さん室・  
古屋敷遺跡調査会  
末木 健・坂本 美夫  
1984年 「山梨県」『古墳時代土器の研究』 古墳時代土器研究会  
田口 一郎 1981年 「S字状口縁台付甕の分類と編年」 『元島名将軍塚古墳』 高崎市教育委員会  
中山 誠二 1986年 「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」 『山梨考古学論集』I 山梨県考古学  
協会

【平安時代】

- 浅野 晴樹 1986年 「羽釜」 『神奈川考古』第21号(『シンポジウム古代末期～中世における在地系土  
器の諸問題』) 神奈川考古同人会  
坂本 美夫・末木 健・堀内 真  
1983年 「甲斐地域」 『神奈川考古』第14号(『シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題』  
第Ⅱ版) 神奈川考古同人会  
田尾 誠敏 1990年 「相模の羽釜」 『東海大学校地内遺跡調査団報告』1 東海大学校地内遺跡調査団  
保坂 康夫 1988年 「山梨県下における古代前半のロクロ整形土器甕をめぐって」 『山梨県考古学協  
会誌』第2号 山梨県考古学協会  
保坂 康夫 1989年 「古代の甲斐型甕をめぐって」 『甲斐の成立と地方的展開』 磯貝正義先生喜寿記  
念論文集刊行会編 角川書店

【中近世】

- 赤羽 一郎 1984年 『常滑焼』考古学ライブラリー23 ニューサイエンス社  
浅野 晴樹 1988年 「関東における中世在地産土器について」 『研究紀要』4 埼玉県埋蔵文化財調査  
事業団  
浅野 晴樹 1991年 「東国における中世在地系土器について—主に関東を中心にして—」 『国立歴史民  
俗博物館研究報告』第31集 国立歴史民俗博物館  
伊藤 正幸 1989年 「甲府盆地における12・3世紀の土器様相」 『山梨考古学論集』Ⅱ 山梨県考古学  
協会  
大橋 康二 1985年 「肥前磁器の流れ」 『季刊 考古学』第13号(特集:江戸時代を掘る) 雄山閣  
大橋 康二 1980年 「中世播鉢考(1)・(2)・(3)」 『考古学ジャーナル』No. 175・177・179 ニューサイ  
エンス社  
大橋 康二 1989年 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社  
大江 正行 1981年 「中世後半の土器について」 『清里・陣場遺跡』 勸群馬県埋蔵文化財調査事業団

- 荻野 繁春 1990年 『『財産目録』に顔を出さない焼物』 『国立歴史民俗博物館研究報告』第25集 国立歴史民俗博物館
- 小川 啓司 1974年 『そば猪口絵柄事典』 光芸出版
- 小野 正敏 1982年 「15・16世紀の染付碗・皿の分類と年代」 『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 亀井 明德 1981年 「14・15世紀の貿易陶磁－とくに日本出土の貿易陶磁－」 『貿易陶磁研究』No.1 日本貿易陶磁研究会
- 川勝政太郎 1967年 『石造美術入門』 社会思想社
- （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985年 『浜町屋敷内遺跡 C地点』
- 京葉線八丁堀遺跡調査会 1990年 『京葉線八丁堀遺跡』
- 古泉 弘 1988年 『江戸を掘る－近世考古学への招待』 柏書房
- 古泉 弘 1987年 『江戸の考古学』 考古学ライブラリー48 ニューサイエンス社
- 古泉 弘 1985年 「江戸の街の出土遺物」 『季刊考古学』第13号（特集：江戸時代を掘る） 雄山閣
- 五島美術館 1984年 『江戸のやきもの』（特別展「江戸のやきもの」図録）
- 坂井 隆 1988年 「中近世の食生活－上野国を中心として－」 『群馬の考古学』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 佐賀県立九州陶磁文化館  
1984年 『国内出土の肥前陶磁』（「北海道から沖縄まで 国内出土の肥前陶磁」展図録）
- 真田町教育委員会 1973年 『日向畑遺跡』
- 座右宝刊行会編 1975年～1983年 『世界陶磁全集』1～19 小学館
- 清水 芳裕 1981年 「第6章 土器・陶器の流通－胎土分析の方法と成果」 『京都大学構内遺跡調査年報』
- 白金館址遺跡調査会 1988年 『白金館址遺跡』I・II
- 新宿区教育委員会 1987年 『自證院遺跡』
- 新宿区教育委員会 1988年 『三栄町遺跡』
- 新宿区立新宿歴史博物館 1990年 『江戸のくらし－近世考古学の世界－』
- 鈴木 公雄 1988年 「出土六道銭の分析」 『芝公園一丁目 増上寺子院群 光学院・貞松院跡 源興院跡』 港区芝公園一丁目遺跡調査団
- 高山 博 1981年 「遺跡において古人骨をどう扱うか」 『考古学ジャーナル』No.197 ニューサイエンス社
- 田形 孝一 1983年 「内耳土器について」 『研究連絡紙』第6号 千葉県文化財センター
- 田口 昭二 1983年 『美濃焼』考古学ライブラリー17 ニューサイエンス社
- たばこと塩の博物館 1985年 『たばこと塩の博物館』（常設展示図録）
- （財）千葉県文化財センター 1984年 『研究紀要』8（「自然科学の手法による遺跡・遺物の研究3－土器胎土分析の基礎的研究－」）
- 土井 卓治 1975年 「民俗資料にあらわれた墓地」 『墓地』日本古代文化の研究1 社会思想社  
東京都教育委員会・朝日新聞社  
1991年 『東京の遺跡展－お江戸八百八町地下探検』
- ニューサイエンス社 1988年 『考古学ジャーナル』No.288（特集：中・近世墓標の諸問題）
- ニューサイエンス社 1988年 『考古学ジャーナル』No.297（特集：近世陶磁器）
- ニューサイエンス社 1988年 『考古学ジャーナル』No.299（特集：中近世の土器と陶磁器）
- 日本貨幣商協同組合 1991年 『日本貨幣型録－1991年版－』



- 野村 一寿 1990年 「第3章 第6節 中世土器・陶磁器」 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4-松本市内その1-総論編』 (助)長野県埋蔵文化財センターほか
- 萩原 三雄 1989年 「中世戦国期における烽火台の特質と史的位置」 『信濃』41-11
- 萩原 三雄 1991年 「結びにかえて-中世城館研究の課題と展望-」 『中世の城と考古学』 新人物往来社
- 服部 英雄 1991年 「中世城館研究の一視角」 『千曲』70号 東信史学会
- 平凡社編 1975~1978年 『陶磁大系』1~48
- 港区麻布一丁目遺跡調査会 1986年 『郵政省飯倉分館構内遺跡』
- 港区芝公園一丁目遺跡調査団 1988年 『芝公園一丁目 増上寺子院群 光学院・貞松院跡 源興院跡』  
満岡忠成・榎崎彰一・林屋晴三編  
1980~1982年 『日本やきもの集成』1~12 平凡社
- 三輪 茂雄 1978年 『白』 ものと人間の文化史25 法政大学出版局
- 森田 勉 1981年 「鎌倉出土の中国陶磁器に関して」 『貿易陶磁研究』No.1 日本貿易陶磁研究会
- 森田 勉 1982年 「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」 『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 森本岩太郎 1981年 「古人骨研究の事例(1)関東」 『考古学ジャーナル』No.197 ニューサイエンス社
- 森本岩太郎 1985年 「江戸時代人の骨」 『季刊 考古学』第13号 雄山閣
- 山梨県教育委員会 1986年 『山梨県の中世城館跡-分布調査報告書-』
- 山梨県教育委員会 1990年 『山梨県生産遺跡分布調査報告書(窯業遺跡)』(山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第51集)
- 横田賢次郎・森田 勉  
1978年 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について-型式分類と編年を中心として-」 『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
- 雄山閣編 1974年 『新訂 陶磁用語辞典』
- 雄山閣編 1989年 『季刊 考古学』第26号(特集:戦国考古学のイメージ)
- 【全般】**  
(須玉町関係文献)
- 山梨県教育委員会 1976年 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-北巨摩郡須玉町地内-』
- 須玉町教育委員会 1983年 『大小久保遺跡-9世紀後半代の土師器製作址-』(須玉町埋蔵文化財調査報告第1集)
- 須玉町教育委員会 1984年 「中尾城遺跡-中世城址と平安時代後半の住居址-・塚田遺跡-中世土壌群と住居址-」(須玉町埋蔵文化財調査報告 第2集)
- 須玉町教育委員会 1986年 『川又南遺跡』(須玉町埋蔵文化財調査報告 第3集) 須玉町教育委員会  
1987年 『津金御所前遺跡』(須玉町埋蔵文化財調査報告 第4集)
- 山梨県教育委員会 1987年 『郷蔵地遺跡』(山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告 第31集)
- 須玉町教育委員会 1988年 『西川遺跡』(須玉町埋蔵文化財調査報告 第5集)
- 山梨県教育委員会 1988年 『西川遺跡』(山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第37集)
- 山梨県教育委員会 1984年 『穂坂路』(山梨県歴史の道調査報告書 第1集)
- 文化庁 1981年 『全国遺跡地図-山梨県-』

# 塩川遺跡出土土器の胎土分析

河西 学 (山梨文化財研究所)

## 1. はじめに

北巨摩郡須玉町塩川に位置する塩川遺跡は、富士川上流の塩川とその支流本谷川の合流点に形成された段丘上に位置している。遺跡周辺地域は、主として泥岩・砂岩・花崗岩類・安山岩・デイサイトなどの地質から構成されている。遺跡より上流の塩川沿いには砂岩・泥岩からなる四万十帯増富層群が分布する。花崗岩類は、甲府岩体の一部が本谷川の上流の金峰山・瑞牆山を中心に広く分布している。遺跡南側には黒富士火山・茅ヶ岳がありデイサイト・安山岩が分布する。また北西の尾根部には横尾山から連続する安山岩が露出している。

今回本遺跡において古墳時代・中世の土器片を分析する機会を得たので以下に報告する。

## 2. 試料

分析試料は本遺跡B地区で出土した土器である。試料表をTable 1 に示す。試料はNo. 1 が古墳時代前期初頭のS字状口縁台付甕 (以下S字甕) 以外はすべて中世の土器である。

Table. 1 分析試料表

試料番号	時代(時期)	種類(器形)	部位	分類	出土地点	Fig./Pl.-No.
No. 1	古墳前期	土師器(S字甕)	体部	赤塚-B類	7号住居址(13-10G)	69-1/24-17-1
No. 2	中世(15~16世紀代)	不明(播鉢)	体部		3-6Gスリパチ	99-1/25-23-1
No. 3	中世(15世紀代)	土師質土器(皿)	底部		13-9G	197-15/27-28-15
No. 4	中世(15世紀代)	土師質土器(皿)	底部		4-11G	197-16/27-28-16
No. 5	中世(15~16世紀代)	内耳土器(鍋)	体部	塩川IV類	7-12G	198-7/26-25-7
No. 6	中世(15~16世紀代)	内耳土器(鍋)	体部	塩川VI類	11-11G	199-10/26-25-10
No. 7	中世(15世紀代)	内耳土器(鍋)	体部	塩川II類	2-6G	198-3/26-24-3
No. 8	中世(15世紀代)	内耳土器(鍋)	体部	塩川II類	11-5G	198-4/26-25-4
No. 9	中世(15世紀代)	内耳土器(鍋)	体部	塩川III類	8-10G	198-6/26-25-6
No. 10	中世(15世紀前半)	内耳土器(鍋)	体部	塩川I類	5-6G	198-1/26-25-1
No. 11	中世(15~16世紀代)	内耳土器(鍋)	体部	塩川V類	3-6Gスリパチ内	99-2/26-24-2
No. 12	中世(15~16世紀代)	内耳土器(ほうろく形)	体部	塩川VII類	3-6Gスリパチ内	99-3/26-24-3

## 3. 分析法

土器試料は、切断機で3×2.5cm程度の大きさに切断し、残りの試料は保存した。脆弱な試料はエポキシ樹脂を含浸させて補強し、岩石薄片と同じ要領で土器の器壁に平行する薄片を作製した。さらにフッ化水素酸蒸気でエッチングし、コバルト亜硝酸ナトリウム飽和溶液に浸してカリ長石を黄色に染色しプレパラートとした。次に以下の方法で岩石鉱物成分のモード分析を行った。偏光顕微鏡下において、オートマチックポイントカウンタを用い、ステージの移動ピッチを薄片長辺方向に0.33mm、同短辺方向に0.40mmとし、各薄片で2,000ポイントを計測した。計数対象は、粒径0.05mm以上の岩石鉱物粒子、およびこれより細粒のマトリックス(“粘土”)部分とし、植物珪酸体はすべてマトリックスに含めた。

## 4. 分析結果

分析結果をTable 2 に示す。これをもとに試料全体の砂粒子・赤褐色粒子・マトリックスの構成を示した全体構成図、および砂粒子の岩石鉱物組成・重鉱物組などをFig. 1 に示す。なお重鉱物組成では右側に基数を表示した。以下に特徴を述べる。

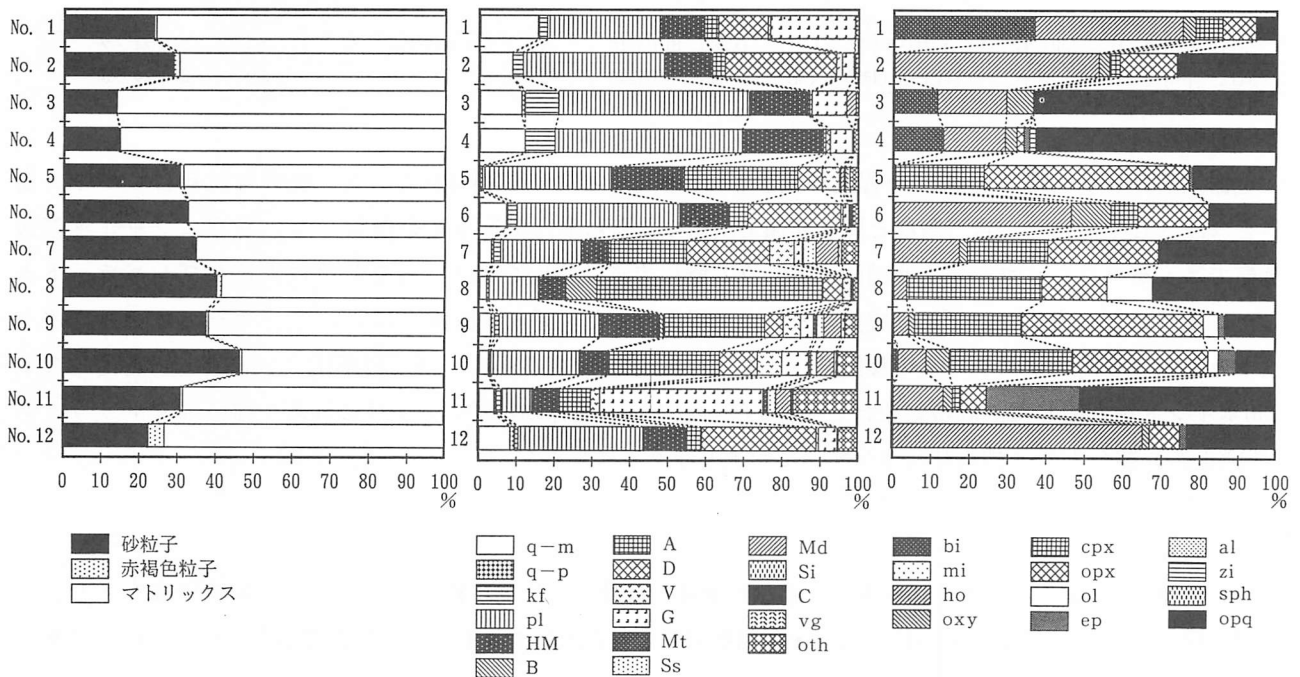
### S字甕 (No. 1)

全体構成では、砂粒子23.8%、赤褐色粒子0.6%、マトリックス75.7%である。岩石鉱物組成では、斜長石29.9%・石英(単結晶)15.4%・花崗岩類22.5%が多く、デイサイト13.3%・安山岩3.6%などを伴う。重鉱物

組成では角閃石39%・黒雲母37%が優勢で、単斜輝石・斜方輝石・酸化角閃石・不透明鉱物などがわずかに含まれる。

Table. 2

試料番号	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9	No. 10	No. 11	No. 12
石英 - 単結晶	73	50	31	35		46	23	17	24	23	25	38
石英 - β型		+						+				
石英 - 多結晶	1		2			3	4		7	3	4	5
カリ長石	10	15	25	23	5	16	12	3	8	3	8	5
斜長石	142	217	139	144	210	280	148	108	201	220	51	150
黒雲母	21		5	8						1		
無色雲母	+											
角閃石	22	39	8	10		40	9	2	5	5	6	34
酸化角閃石	2	2	3	2		9	1		2	4	1	1
単斜輝石	4	2			28	6	11	21	34	22	1	
斜方輝石	5	11		1	64	16	15	10	58	24	3	4
カンラン石						+		7	5	2		
緑簾石				1	1				2	3	11	1
褐簾石			+									
ジルコン				1								
スフェーン	+											
不透明鉱物	3	19	28	39	26	15	16	19	16	7	23	12
玄武岩							4	65	5	2		
安山岩	17	19	2	2	183	31	141	484	203	275	50	17
デイサイト	63	169		3	40	159	152	40	36	96		136
変質火山岩類	2	8			28	4	45	18	35	59	15	3
凝灰岩												
花崗岩類	107	17	25	17	2	11	16	1	26	64	266	22
ホルンフェルス				1					7	8		
変成岩類							1				8	
砂岩							24	1	12	14	13	
泥岩		3	7		5	2	40	2	34	42	25	1
珪質岩					2	2	6	1	8	5	2	1
炭酸塩岩												
火山ガラス - 無色			1		7	2			1	4	1	
火山ガラス - 褐色					1							
変質岩石	3	1		1	8	5	22	6	19	42	95	9
変質鉱物		3		2	4	3	7	3	4	4	8	12
その他												
赤褐色粒子	12	29	2	8	19	6	4	22	13	8	16	82
マトリックス	1513	1396	1722	1702	1367	1344	1299	1170	1235	1060	1368	1467
合計	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000



q-m 石英 - 単結晶 (含β型), q-p 石英 - 多結晶, kf カリ長石, pl 斜長石, HM 重鉱物, B 玄武岩, A 安山岩, D デイサイト, V 変質火山岩類 + 凝灰岩, G 花崗岩類, Mt 変成岩類 (含ホルンフェルス), Ss 砂岩, Md 泥岩, Si 珪質岩, C 炭酸塩岩, vg 火山ガラス, oth その他, bi 黒雲母, mi 無色雲母, ho 角閃石, oxy 酸化角閃石, cpx 単斜輝石, opx 斜方輝石, ol カンラン石, ep 緑簾石, al 褐簾石, zi ジルコン, sph スフェーン, opq 不透明鉱物

Fig. 1 塩川遺跡出土土器の岩石鉱物組成

播鉢 (No. 2)

全体構成では、砂粒子28.8%、赤褐色粒子1.5%、マトリックス69.8%である。岩石鉱物組成は、斜長石37.7%・デイサイト29.4%が多く、石英・重鉱物・花崗岩類・安山岩などを伴う。重鉱物組成では角閃石53%が優勢で、不透明鉱物26%・斜方輝石15%・単斜輝石・酸化角閃石を伴う。

土師質土器 (No. 3、4)

土師質土器 (Ⅲ) の2試料は類似した組成を示す。全体構成では、砂粒子13.8~14.5%、赤褐色粒子0.1~0.4%、マトリックス85.1~86.1%であり、他試料に比較して砂含有率が低くかつ砂は細粒である。岩石鉱物組成では、斜長石49.7~50.4%・石英11.2~12.1%・カリ長石7.9~9.1%・花崗岩類5.9~9.1%および重鉱物15.9~21.4%の含有で特徴づけられる。重鉱物組成は、不透明鉱物63~64%が卓越し、角閃石16~18%・黒雲母11~13%・酸化角閃石などが検出される。

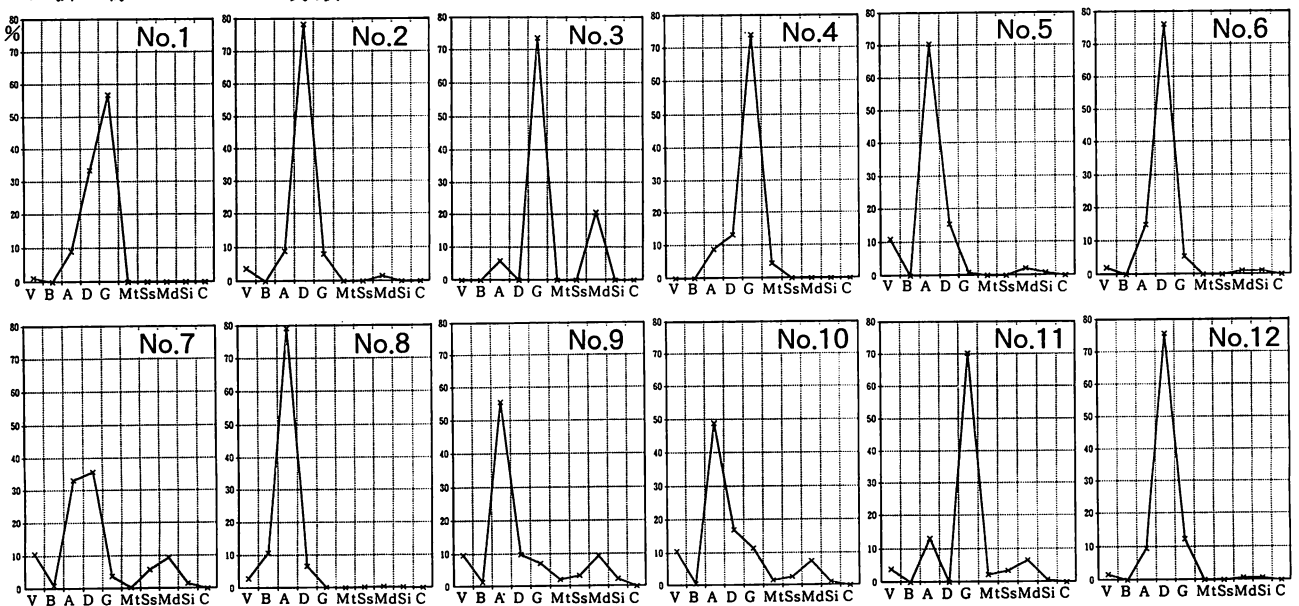
内耳土器

全体構成は、砂粒子がほうろく (No.12) で22.6%、鍋 (No.5~11) で30.7~46.6%と多く、かつ砂粒は粗粒である。赤褐色粒子は、No.12で4.1%とやや多いが、鍋試料では0.3~1.1%と低率である。岩石鉱物組成では、試料ごとに多様な組成を示す。Nos.5、7、8、9、10などの鍋試料は、安山岩が20.2~59.9%と多く、デイサイトやまれに玄武岩を伴い、重鉱物では斜方輝石・単斜輝石を主体に不透明鉱物・角閃石ときにカンラン石を伴う。Nos.6、12は、デイサイトが24.5~30.2%と多く検出され、重鉱物では角閃石が卓越し不透明鉱物・酸化角閃石・輝石などを伴う。No.11は花崗岩類 (43.2%) の優勢で特徴づけられ、重鉱物組成では不透明鉱物が卓越し角閃石・輝石などが含まれる。なおNos.7、9、10、11では、数%以下の泥岩・砂岩などが含有される。

5. 土器の分類

土器の産地推定には、地域を限定することのできる情報を豊富に含んでいる粒子を指標とすることが有効である。そこで地質と関連性が高い岩石粒子である次の、変質火山岩類+凝灰岩・玄武岩・安山岩・デイサイト・花崗岩類・変成岩類 (ホルンフェルスを含む)・砂岩・泥岩・珪質岩・炭酸塩岩を選択した。これら10岩石種のポイント総数で各岩石のポイント数を除した値を変数とし、岩石組成折れ線グラフ (Fig.2) およびクラスタ分析樹形図 (Fig.3、4) (注1) を作成し、土器を以下のように分類した。

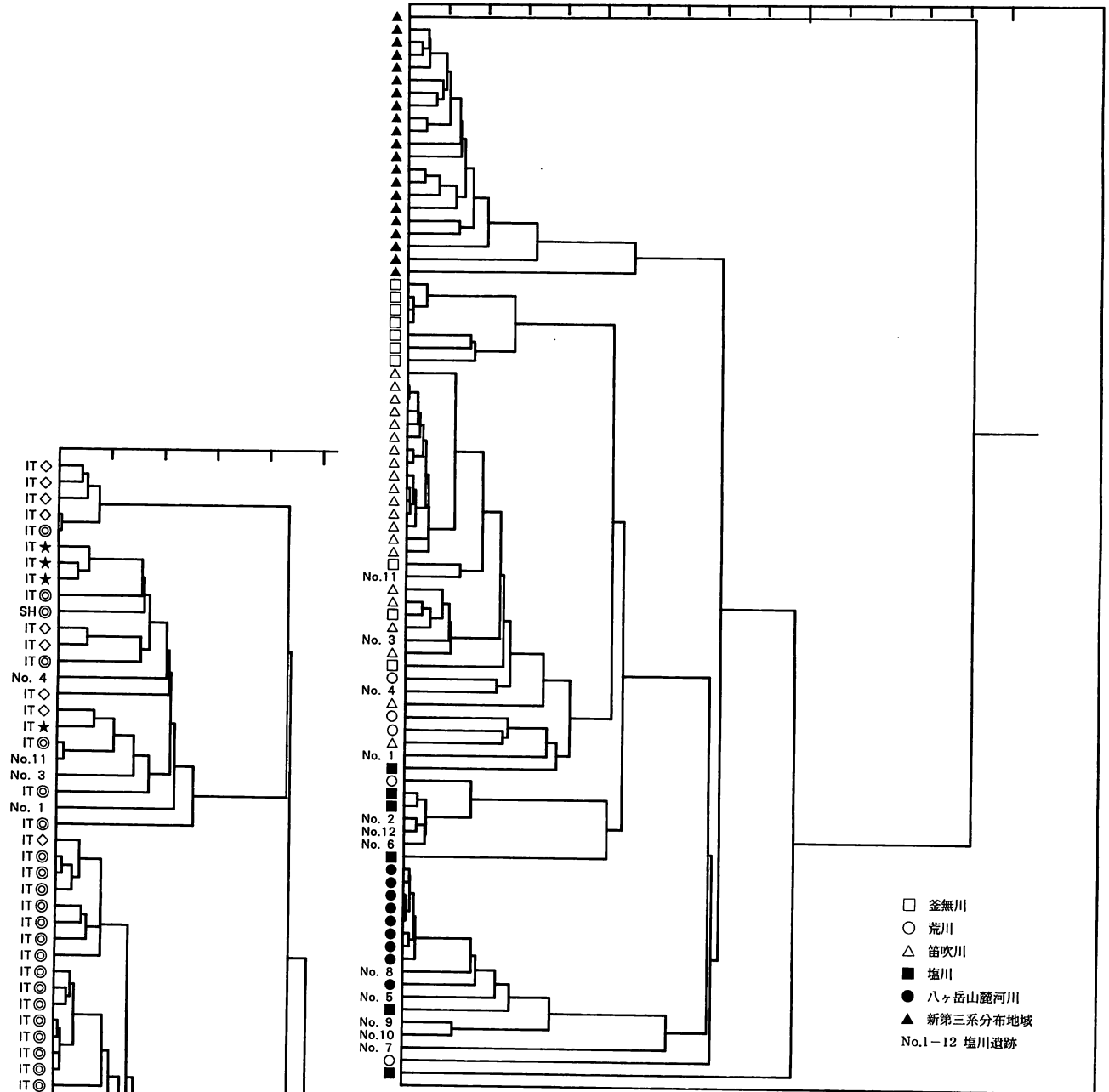
a. 折れ線グラフによる分類



V 変質火山岩類+凝灰岩, B 玄武岩, A 安山岩, D デイサイト, G 花崗岩類, Mt 変成岩類 (含ホルンフェルス), Ss 砂岩, Md 泥岩, Si 珪質岩, C 炭酸塩岩

Fig. 2 塩川遺跡出土土器 岩石組成折れ線グラフ

第3図 塩川遺跡土器と河川砂の樹形図



第4図 塩川・伊藤窪第2・清水端遺跡出土土器の樹形図

I群 花崗岩類の第1ピーク	(I a) 安山岩の第2ピーク	No.11
	(I b) デイサイトの第2ピーク	Nos. 1、4
	(I c) 泥岩の第2ピーク	No. 3
II群 安山岩の第1ピーク	(II a) デイサイトの第2ピーク	Nos. 5、9、10
	(II b) 玄武岩の第2ピーク	No. 8
III群 デイサイトの第1ピーク	(III a) デイサイト≫安山岩・玄武岩	Nos. 2、6、12
	(III b) デイサイト=安山岩	No. 7

以上のように試料数は少ないが多様な分類となっている。

#### b. クラスタ分析による分類

##### 1) 河川砂との比較 (Fig. 3)

甲府盆地の河川砂(河西、1989)および八ヶ岳周辺地域の河川砂(河西ほか、1989)と比較する。No. 1のS字甕試料は、荒川・塩川河川砂と融合している。花崗岩類の卓越するNos. 3、4、11は、花崗岩地域を流域にもつ釜無川・笛吹川および荒川(長潭橋地点)の河川砂と融合している。またデイサイトの優勢なNos. 2、6、12は、茅ヶ岳山麓の塩川およびその支流の河川砂と類似性が高い。安山岩の多いNos. 5、7、8、9、10は、八ヶ岳山麓河川および塩川支流須玉川の河川砂と同一のクラスタを形成している。

##### 2) 周辺地域との比較 (Fig. 4)

韭崎市伊藤窪第2遺跡の土師器・縄文土器(河西、1991)および北巨摩郡明野村清水端遺跡縄文土器(河西ほか、1989)と比較する。S字甕No. 1および花崗岩類の多いNos. 3、4、11は、伊藤窪第2遺跡の主として土師器や一部の縄文土器とともに同一のクラスタを形成している。安山岩の多いNos. 5、8、9、10は、伊藤窪第2遺跡の大部分の縄文土器と融合する。デイサイトの多いNos. 2、6、12は、清水端遺跡の縄文土器と類似性が高い。デイサイトと安山岩がほぼ等量含有されるNo. 7は、伊藤窪第2・清水端遺跡縄文土器の一部と類似性がある。

## 6. 考察

### S字甕

S字甕の全体構成における砂粒子含有率は、本遺跡No. 1の23.8%と伊藤窪第2遺跡の22.1~24.2%とほとんど一致している。Fig. 4では、伊藤窪第2遺跡S字甕と本遺跡No. 1とは直接融合しないものの一群のクラスタを形成し、類似性が高いことが示されている。すなわち石英・カリ長石・斜長石・花崗岩類が多く含まれ、安山岩・デイサイトを伴い、重鉱物組成では黒雲母・角閃石が多く単斜輝石・酸化角閃石・斜方輝石を伴う点で伊藤窪第2遺跡試料と共通する。以上のような共通性は、製作技術の類似性を示すものかもしれない。

Fig. 3において本遺跡S字甕は、塩川・荒川地域河川砂と類似性が高いことが示されている。塩川遺跡の立地する増富地域は多様な岩石が露出する地域であることから搬入土器を判定しにくい。胎土分析からNo. 1が搬入土器であるという積極的な結果は得られていず、したがって花崗岩類・デイサイトの存在から在地的と推定される。しかし県外のデイサイトを伴った花崗岩類地域からのS字甕の搬入の可能性も残される。

愛知県下で近年増加した胎土分析例から、S字甕胎土の特異性が指摘されている(神谷、1989; 矢作ほか、1990; 赤塚、1990; 永草、1991)。分析方法が異なるため単純に比較することはできないが、伊藤窪第2遺跡と同様に本遺跡のS字甕は、黒雲母・角閃石が多い点で愛知県S字甕と共通するが、ザクロ石が計数されない点で異なる。これら他地域との比較は今後の課題である。

### 中世土器

中世土師質土器と内耳土器とで砂粒子の粒径・含有率・岩石鉱物組成に差が認められる。土師質土器は、粒径の小さい砂が少量含有され、その岩石鉱物組成は花崗岩類を主体とするものである。土師質皿No. 3、4は、両者とも類似性の高い組成を示し、さらに伊藤窪第2遺跡の古墳時代前期土師器とも類似性が認められ

る。釜無川・笛吹川あるいは塩川上流（本谷川）や荒川上流域など花崗岩類分布地域周辺地域に産地が推定されるが、分析例が少なく限定は困難である。

播鉢・内耳土器は粒径の粗い砂が多く含有されていることで特徴づけられている。主として花崗岩類・安山岩・デイサイトからなるが、占有率が異なることから複数の産地が推定される。これらの岩石が本遺跡周辺に広く分布すること、特に甲府盆地のデイサイトの分布は黒富士火山を中心とする塩川・荒川流域に集中していること、および茅ヶ岳山麓で在地的と推定される清水端遺跡縄文土器胎土と類似性が高いことなどから、今回の播鉢・内耳土器試料のほとんどは広い範囲内で在地的であると推定される。しかし玄武岩がやや多く含まれるNo.8はたとえば八ヶ岳山麓など安山岩主体でわずかに玄武岩を伴う地域から搬入された可能性も考えられる。産地推定の精度は遺跡の立地によって異なるが、特に本地域は多様な地質が周辺に分布することから搬入土器を推定しにくい特性をもつ。より広範な地域での分析例の増加によって、内耳土器の胎土と遺跡周辺地質との関係が解明されれば、内耳土器の移動の実態が推定できるかもしれない。その中で本遺跡も再検討されるべきである。なお松本・諏訪・佐久盆地出土の内耳鍋は各盆地内でつくられ各盆地内で消費されたと推定されていて（野村、1990）、甲府盆地内での在り方が興味深い。

## 7. まとめ

本地域は多様な周辺地質のため搬入土器を推定しにくい特性をもつ。塩川遺跡出土のS字甕は、伊藤窪第2遺跡のS字甕と類似性があり、デイサイトを伴った花崗岩類分布地域周辺に産地が推定され、在地的な可能性がある。中世土師質土器は、伊藤窪第2遺跡古墳時代土師器と類似性があり、花崗岩類分布地域周辺に産地が推定される。播鉢・内耳土器は土師質土器と異なる胎土を示し、デイサイトの存在から多くが在地的と推定される。玄武岩を伴う土器の産地候補のひとつとして八ヶ岳山麓があげられる。

注1 樹形図は、非類似度をユークリッド平方距離で定義した最短距離法クラスタ分析による。

## 文献

赤塚次郎編（1990）『廻間遺跡』。愛知県埋蔵文化財センター、153P.

神谷友和（1989）S字状口縁台付甕の胎土分析。『町田遺跡』、愛知県埋蔵文化財センター、32-43.

河西 学（1989）甲府盆地における河川堆積物の岩石鉱物組成-土器胎土分析のための基礎データ。山梨県考古学論集、II、505-523.

河西 学（1991）伊藤窪第2遺跡出土土器の胎土分析。『伊藤窪第2遺跡』、韮崎市教育委員会、22-35.

河西 学・榎原功一・大村昭三（1989）八ヶ岳南麓地域とその周辺地域の縄文時代中期末土器群の胎土分析。山梨文化財研究所研究報告、1、1-64.

野村一寿（1990）中世土器・陶磁器。長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書、4、159-192.

森 勇一・永草康次・楯真美子・神谷友和（1989）尾張地方を中心とした土器胎土の地域性について。日本文化財科学会要旨集、42-43.

矢作健二・橋本真紀夫・赤塚次郎（1990）東海地域における弥生時代の土器の胎土分析。日本文化財科学会要旨集、24-25.

# 塩川遺跡出土人骨について

森本岩太郎・吉田俊爾（聖マリアンナ医科大学）

## I. はじめに

平成元年～2年（1989～90）に山梨県北巨摩郡須玉町の塩川遺跡から出土した江戸時代人骨は、土葬骨122体、火葬骨2体の合計124個体分に達する。山梨県埋蔵文化財センターからの委嘱を受けて森本が現地に赴き、その出土状態を調査した。これらの人骨につき報告する。

## II. 人骨所見

人骨の保存状態はおおむね次の状態に区分される。すなわち、(A) 人骨の保存状態が良好で、ほぼ全身の骨が残っているもの。(B) 保存状態がやや不良で人骨の一部が欠損したり、破片となっているもの。(C) 保存状態が不良で、残っている人骨量が少なく、ほとんど破片となっているものである。出土人骨の数は124体分の多量にのぼる。紙数に限界があるので、所見については性別や年齢を判別するための基本的な観察項目、あるいは頭蓋最大長・最大幅から算出される頭蓋長幅示数による頭型、大腿骨・脛骨最大長から算出される推定身長、および人骨に見られる疾病などについてだけ記載する。なお、( ) 内の数字は人骨所見の記載のため便宜上つけた通し番号である。歯について特別な所見がある場合は、アラビア数字で永久歯を示した。頭蓋長幅示数、推定身長算出のための計測はMartin法による。身長の推定にあたっては、大腿骨または脛骨の最大長から藤井の式を用いて算出した。

### (1) 1号人骨（男性、壮年期）

保存状態は良好。頭蓋は長頭型。3主要縫合は、内板では矢状縫合だけが大部分骨結合化するが、外板では骨結合化していない。乳様突起は大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第4度。咬耗度はMartinの第1～2度。6]に齶蝕がある。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は大きい。推定身長約164cm。

### (2) 2号人骨（男性、壮年期）写真3

保存状態は良好。頭蓋は中頭型。3主要縫合は、内板では大部分が骨結合化し、外板でも冠状縫合の一部に骨結合化がある。乳様突起は大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第1度。咬耗度はMartinの第1度～2度。5・6]に齶蝕、5・6]の歯槽部には歯性膿瘍がある。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。

### (3) 3号人骨（男性、老年期）

保存状態は良好。3主要縫合は、内板では大部分が骨結合化し、外板でも部分的に骨結合化している。乳様突起は大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。上・下顎の歯槽は大部分が閉鎖。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約163cm。頸椎に変形性脊椎症がある。

### (4) 4号人骨（女性、成人）

保存状態は不良。乳様突起は小さく、上・下肢骨はきゃしゃである。詳細は不明。

### (5) 5号人骨（女性、壮年期）

保存状態は良好。頭蓋は中頭型。3主要縫合は、内板では大部分が骨結合化し、外板でも部分的に骨結合化している。乳様突起は小さい。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第1度。咬耗度はMartinの第1～2度。上・下肢骨はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。推定身長約147cm。

### (6) 6号人骨（男性、壮年期）

保存状態は良好。頭蓋は中頭型。3主要縫合は、内板では冠状縫合と矢状縫合の大部分に骨結合化があり、外板でも矢状縫合の大部分と冠状縫合の一部に骨結合化がある。乳様突起は大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。咬耗度はMartinの第1～2度。7]に齶蝕がある。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約157cm。



(7) 7号人骨（男性、壮年期）

保存状態は良好。頭蓋は中頭型。3主要縫合は、内板では大部分が骨結合化し、外板でも一部に骨結合化がある。乳様突起は比較的小さい。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第3度。咬耗度はMartinの第1～2度。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は大きい。推定身長約153cm。腰椎に変形性脊椎症がある。

(8) 8号人骨（男性、壮年期）

保存状態は不良。3主要縫合は内板では大部分が骨結合化し、外板でも一部に骨結合化あり。乳様突起はそれほど大きくない。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第4度。咬耗度はMartinの第1～2度。上・下肢骨は頑丈。

(9) 9号人骨（女性、壮年期）

保存状態は良好。3主要縫合は、内・外板とも骨結合化していない。乳様突起は小さい。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第1度。咬耗度はMartinの第1度。上・下肢骨はきわめてきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。推定身長約142cm。

(10) 10号人骨（男性、熟年期）

保存状態は良好。頭蓋は中頭型。3主要縫合は、内板では大部分が骨結合化し、外板でも冠状縫合の一部に骨結合化がある。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。咬耗度はMartinの第3度。上・下肢骨は比較的頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約152cm。胸・腰椎に変形性脊椎症がある。

(11) 11号人骨（男性、壮年期）

保存状態は良好。頭蓋は中頭型。3主要縫合は、内板では大部分が骨結合化し、外板でも一部に骨結合化がある。乳様突起は大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。咬耗度はMartinの第2度。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約165cm。腰椎に変形性脊椎症がある。

(12) 12号人骨（女性、壮年期）

保存状態は良好。頭蓋は長頭型。3主要縫合は、内・外板とも一部に骨結合化がある。乳様突起は小さい。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第1度。前頭骨には慢性骨膜炎がある。上顎の歯槽は大部分閉鎖。咬耗度はMartinの第2度。7に齶蝕がある。上・下肢骨はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。推定身長約147cm。左右の膝関節に変形性関節症がある。

(13) 13号人骨（男性、老年期）

保存状態は良好。3主要縫合は、内板・外板とも大部分が骨結合化。乳様突起は大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。上・下顎とも歯槽の大部分が閉鎖。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約154cm。胸・腰椎に変形性脊椎症あり。

(14) 14号人骨（女性、壮年期）

保存状態は不良。3主要縫合は内・外板とも骨結合化していない。咬耗度はMartinの第1～2度。上・下肢骨はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。推定身長約143cm。

(15) 15号人骨（性別不詳、小児期）

保存状態は不良。6才前後の小児骨である。詳細は不明。

(16) 16号人骨（男性、熟年期）写真5

保存状態は良好。頭蓋は長頭型。3主要縫合は、内板では大部分が骨結合化し、外板でも冠状縫合の一部に骨結合化がある。乳様突起は大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。咬耗度はMartinの第2～4度。7|6に齶蝕があり、また5|の歯槽部に歯性膿瘍がある。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約163cm。左尺骨体下部1/3に慢性骨髓骨炎がある。

(17) 17号人骨（男性、熟年期）

保存状態は良好。頭蓋は長頭型。3主要縫合は、内板では大部分が骨結合化し、外板でも冠状縫合とラムダ縫合の一部に骨結合化がある。乳様突起は比較的大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第3度。

上・下顎の歯槽は大部分が閉鎖。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約158cm。胸・腰椎に変形性脊椎症がある。

(18) 18号人骨（性別不詳、幼児期）

保存状態は不良。3才前後の幼児骨である。詳細は不明。

(19) 19号人骨（男性、壮年期）

保存状態は良好。頭蓋は長頭型。3主要縫合は内・外板とも骨結合化していない。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第3度。咬耗度はMartinの第1度。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約153cm。

(20) 20号人骨（女性、老年期）

保存状態は良好。頭蓋は中頭型。3主要縫合は、内板では大部分が骨結合化し、外板では部分的に骨結合化。乳様突起は小さい。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。歯槽は全て閉鎖。上・下肢骨はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約141cm。胸・腰椎に変形性脊椎症がある。

(21) 21号人骨（男性、壮年期）

保存状態は良好。頭蓋は長頭型。3主要縫合は、内・外板とも骨結合化していない。乳様突起は大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。咬耗度はMartinの第1～2度。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約161cm。胸椎に変形性脊椎症がある。

(22) 22号人骨（女性、壮年期）

保存状態は良好。3主要縫合は、内板では大部分が骨結合化し、内板では矢状縫合の一部だけ骨結合化。乳様突起は比較的大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。咬耗度はMartinの第2度。上・下肢骨はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。

(23) 23号人骨（女性、熟年期）

保存状態は良好。3主要縫合は内・外板とも大部分に骨結合化がある。乳様突起は小さい。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。咬耗度はMartinの第2～3度。上・下肢骨はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。推定身長約146cm。

(24) 24号人骨（男性、壮年期）

保存状態は不良。3主要縫合は内・外板とも部分的に骨結合化している。乳様突起は比較的大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。咬耗度はMartinの第1～2度。上・下肢骨は比較的頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。

(25) 25号人骨（男性、壮年期）

保存状態は良好。頭蓋は長頭型。3主要縫合は内・外板とも骨結合化していない。乳様突起は大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。咬耗度はMartinの第1度。6に齶蝕がある。上・下肢骨は比較的頑丈。推定身長約153cm。

(26) 26号人骨（男性、壮年期）

保存状態は良好。頭蓋は中頭型。3主要縫合は、内・外板とも骨結合化していない。乳様突起は大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。咬耗度はMartinの第1～2度。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約159cm。

(27) 27号人骨（性別不詳、小児期）

保存状態は良好。13才前後の小児骨である。詳細は不明。

(28) 28号人骨（男性、熟年期）

保存状態は良好。頭蓋は中頭型。3主要縫合は内板では全体的に骨結合化し、外板でも部分的に骨結合化している。乳様突起の膨隆はそれほど大きくないが、外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第3度。上顎前歯、下顎大臼歯の歯槽部は全て閉鎖し、残っている歯の咬耗度はMartinの第2～3度。6に齶蝕がある。上・

下肢骨は極めて頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約153cm。

(29) 29号人骨（女性、熟年期）

保存状態は良好。3主要縫合は、内板では大部分が骨結合化し、外板でも矢状縫合の一部に骨結合がある。乳様突起は小さい。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第1度。上・下肢骨はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。

(30) 30号人骨（男性、壮年期）

保存状態は良好。3主要縫合は、内・外板とも骨結合化していない。咬耗度はMartinの第1～2度。上・下肢骨は頑丈。推定身長約164cm。

(31) 31号人骨（男性、壮年期）写真1

保存状態は良好。頭蓋は長頭型。3主要縫合は、内・外板とも骨結合化していない。乳様突起は大きく膨隆し、外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第3度。咬耗度はMartinの第1～2度。18に齶蝕、またその歯槽部に歯性膿瘍がある。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約158cm。

(32) 32号人骨（性別不詳、小児期）

保存状態は良好。8才前後の小児骨である。詳細は不明。

(33) 33号人骨（男性、壮年期）

保存状態は良好。頭蓋は中頭型。3主要縫合は、内板では冠状縫合全体と矢状縫合の一部に骨結合化があり、外板では骨結合化がない。乳様突起は大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。咬耗度はMartinの第2度。上・下肢骨は比較的頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約151cm。

(34) 34号人骨（女性、老年期）

保存状態は良好。3主要縫合は、内外板とも大部分が骨結合化している。乳様突起は小さい。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。上・下顎の歯槽は大部分が閉鎖。上肢骨はきゃしゃであるが、下肢骨は比較的頑丈。大坐骨切痕の湾曲は大きい。推定身長約153cm。胸・腰椎に変形性脊椎症がある。

(35) 35号人骨（女性、熟年期）

保存状態は不良。頭蓋は中頭型。3主要縫合は、内・外板とも大部分が骨結合化している。乳様突起は小さい。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第1度。下顎の後歯槽部は大部分が閉鎖。咬耗度はMartinの第1～4度。7に齶蝕がある。上・下肢骨はきゃしゃ。

(36) 36号骨（性別不詳、小児期）

保存状態は良好。7才前後の小児骨で、乳歯列に欠落はないが、6|6・6|6の萌出は完了し、咬耗も僅かに認められる。

(37) 37号人骨（性別不詳、乳児期）

保存状態は不良。1才前後の乳児骨である。詳細は不明。

(38) 38号人骨（性別不詳、乳児期）

保存状態は不良。2才前後の乳児骨である。詳細は不明。

(39) 39号人骨（女性、老年期）

保存状態は良好。頭蓋は中頭型。3主要縫合は、内板では大部分が骨結合化、外板では一部が骨結合化。乳様突起は小さい。上・下顎の歯槽は大部分が閉鎖。上・下肢骨はきゃしゃ。

(40) 40号人骨（女性、壮年期）

保存状態は良好。頭蓋は中頭型。3主要縫合は内・外板とも骨結合化していない。乳様突起は小さい。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第1度。咬耗度はMartinの第1度。上・下肢骨はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。推定身長約143cm。

(41) 41号人骨（女性、壮年期）

保存状態は良好。頭蓋は中頭型。3主要縫合は、内板では冠状縫合の全部と、矢状・ラムダ縫合の一部

が骨結合化しているが、外板では骨結合化していない。乳様突起は小さい。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第1度。咬耗度はMartinの第1～2度。5|・7|7に齶蝕がある。上・下肢骨はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。推定身長約147cm。

(42) 42号人骨（性別不詳、小児期）

保存状態は不良。15才前後の小児骨である。詳細は不明。

(43) 43号人骨（女性、壮年期）写真2

保存状態は良好。頭蓋は中頭型。3主要縫合は、内・外板とも骨結合化していない。乳様突起は比較的大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第1度。前頭骨、硬口蓋に梅毒性骨膜炎がある。咬耗度はMartinの第1～2度。6|7・7|8に齶蝕がある。|7の歯槽部に歯性膿瘍がある。上・下肢骨はそれほどきゃしゃではない。大坐骨切痕の湾曲は大きい。推定身長約151cm。左右の鎖骨、左上腕骨体、右尺骨体、左右の脛骨体、右腓骨体にも梅毒性骨炎がある。

(44) 44号人骨（性別不詳、小児期）

保存状態は良好。13才前後の小児骨。詳細は不明。

(45) 45号人骨（男性、壮年期）

保存状態は不良。頭蓋は長頭型。3主要縫合は内・外板とも骨結合化していない。乳様突起は大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。咬耗度はMartinの第1～2度。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。

(46) 46号人骨（女性、壮年期）

保存状態は良好。3主要縫合は内・外板とも骨結合化していない。乳様突起は小さい。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。咬耗度はMartinの第1～2度。8|7・5|6に齶蝕がある。上・下肢骨はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。

(47) 47号人骨（女性、青年期）

保存状態は不良。18才前後の女性人骨である。上・下肢骨はきわめてきゃしゃ。

(48) 48号人骨（女性、熟年期）

保存状態は良好。頭蓋は中頭型。3主要縫合は、内板では冠状縫合の全部と矢状縫合の一部が骨結合化し、外板では骨結合化していない。乳様突起は小さい。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第1度。下顎の歯槽の大部分は閉鎖し、上顎でも後歯の歯槽部はほとんど閉鎖。咬耗度はMartinの第2～3度。7|に齶蝕がある。上・下肢骨はそれほどきゃしゃでない。大坐骨切痕の湾曲は大きい。推定身長約153cm。

(49) 49号人骨（女性、壮年期）

保存状態は不良。乳様突起は小さい。咬耗度はMartinの第1～2度。上・下肢骨はきゃしゃ。

(50) 50号人骨（女性、壮年期）

保存状態は不良。歯の咬耗度はMartinの第1度。上肢骨は比較的頑丈、下肢骨はきゃしゃ。大腿骨頭も小さい。

(51) 51号人骨（女性、熟年期）

保存状態は不良。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第1度。咬耗度はMartinの第2～3度。上・下肢骨はきゃしゃ。

(52) 52号人骨（女性、壮年期）

保存状態は不良。3主要縫合は内・外板とも骨結合化していない。乳様突起は小さい。咬耗度はMartinの第1度。上・下肢骨はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。

(53) 53号人骨（男性、成人）

保存状態は不良。仙骨底横径に対する仙骨底椎骨関節面の横径の割合が大きいので、男性と思われる。腰椎に変形性脊椎症がある。

(54) 54号人骨（性別不詳、成人）

保存状態はきわめて不良。頭蓋片、長骨片などがあるが、詳細は不明。

(55) 55号人骨（女性、成人）

保存状態は極めて不良。上・下肢骨はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。

(56) 56号人骨（性別不詳、成人）

保存状態は不良。詳細は不明。

(57) 57号人骨（性別不詳、小児期）

保存状態はきわめて不良。小児骨である。詳細は不明。

(58) 58号人骨（性別不詳、小児期）

保存状態は不良。6才前後の小児骨である。詳細は不明。

(59) 59号人骨（性別不詳、小児期）

保存状態は良好。11才前後の小児骨。5|5・5|5は歯槽に残り、7|5|5|7・7|5|5|7は未萌出、そのほかの永久歯は萌出完了。6|6・6|6には咬耗がある。

(60) 60号人骨（男性、壮年期）写真6

保存状態は良好。頭蓋は中頭型。3主要縫合は、内板では冠状縫合と矢状縫合の大部分が骨結合化し、外板でも冠状縫合の一部が骨結合化している。乳様突起は大きく膨隆。咬耗度はMartinの第1～2度。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約159cm。左距腿関節、右脛・腓骨体に慢性骨髓骨炎がある。

(61) 61号人骨（男性、熟年期）

保存状態は良好。頭蓋は長頭型。3主要縫合は内・外板とも一部に骨結合化がある。乳様突起は大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。咬耗度はMartinの第2～3度。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約158cm。左肘関節に変形性関節症、胸・腰椎に変形性脊椎症がある。

(62) 62号人骨（女性、熟年期）

保存状態は良好。頭蓋は長頭型。3主要縫合は、内板では冠状縫合と矢状縫合の大部分に骨結合化があり、外板でも冠状縫合の一部に骨結合化がある。乳様突起は小さい。外後頭隆起はBrocaの第2度。上顎の歯槽は大部分が閉鎖。咬耗度はMartinの第2～3度。上・下肢骨はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。腰椎に変形性脊椎症がある。

(63) 63号人骨（性別不詳、小児期）

保存状態は不良。16才前後の小児人骨。智歯は未萌出で歯根は未完成。ほかの歯は全て萌出完了。咬耗度はMartinの第1度。長骨の骨端線はまだ骨結合化していない。

(64) 64号人骨（男性、壮年期）

保存状態は良好。3主要縫合は内・外板とも骨結合化していない。乳様突起は比較的大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第1度。咬耗度はMartinの第1度。上・下肢骨は比較的頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。

(65) 65号人骨（女性、壮年期）

保存状態は良好。3主要縫合は内・外板とも骨結合化していない。乳様突起は小さく、外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第1度。咬耗度はMartinの第1度。上・下肢骨はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。

(66) 66号人骨（性別不詳、小児期）

保存状態はきわめて不良。8才前後の小児骨である。詳細は不明。

(67) 67号人骨（男性、熟年期）

保存状態は良好。3主要縫合は、内板では大部分が骨結合化し、外板でも一部に骨結合化がある。乳様突起は大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。上顎の歯槽は大部分が閉鎖。咬耗度はMartin

の第1～2度。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約158cm。胸・腰椎に変形性脊椎症がある。

(68) 68号人骨（女性、老年期）

保存状態は良好。頭蓋は短頭型。3主要縫合は、内・外板とも大部分に骨結合化がある。乳様突起は小さい。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第1度。歯槽は大部分が閉鎖。上・下肢骨はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。推定身長約144cm。頸椎に変形性脊椎症がある。

(69) 69号人骨（女性、熟年期）

保存状態は良好。頭蓋は短頭型。3主要縫合は、内板では大部分が骨結合化し、外板でも冠状縫合と矢状縫合の一部に骨結合化がある。乳様突起は小さい。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。上顎の歯槽は大部分が閉鎖。咬耗度はMartinの第1度。6・5・7に齶蝕がある。上・下肢骨はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。推定身長約146cm。胸・腰椎には変形性脊椎症がある。

(70) 70号人骨（男性、老年期）

保存状態は良好。頭蓋は長頭型。3主要縫合は、内板では大部分に骨結合化があり、外板でも部分的に骨結合化がある。乳様突起は大きい。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。上・下顎の歯槽は大部分が閉鎖。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約155cm。胸・腰椎に変形性脊椎症がある。

(71) 71号人骨（男性、熟年期）

保存状態は良好。3主要縫合は、内板では大部分が骨結合化し、外板でも一部に骨結合化がある。乳様突起は大きく膨隆し、外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第3度。咬耗度はMartinの第2～3度。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は大きい。推定身長約160cm。

(72) 72号人骨（男性、壮年期）写真4

保存状態は良好。頭蓋は長頭型。3主要縫合は、内・外板とも一部に骨結合化がある。乳様突起は大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。咬耗度はMartinの第2～3度。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長は約162cm。胸・腰椎に変形性脊椎症がある。

(73) 73号人骨（性別不詳、小児期）

保存状態は不良。6才前後の小児骨である。詳細は不明。

(74) 74号人骨（性別不詳、幼児期）

保存状態は不良。4才前後の幼児骨である。詳細は不明。

(75) 75号-A人骨（女性、壮年期）

保存状態は良好。頭蓋は短頭型。3主要縫合は内・外板とも一部に骨結合化がある。乳様突起は比較的大きい。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。咬耗度はMartinの第1度。4・3・2・3・4・6・5・4・3・2・4に齶蝕がある。上・下肢骨はそれほどきゃしゃではない。大坐骨切痕の湾曲は大きい。推定身長約144cm。

(76) 75号-B人骨（女性、壮年期）

保存状態は不良。3主要縫合は、内板では大部分骨結合化し、外板では骨結合化がない。上・下肢骨はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。

(77) 76号人骨（男性、壮年期）

保存状態は不良。頭蓋は長頭型。3主要縫合は、内板では大部分が骨結合化し、外板では骨結合化がない。乳様突起は大きく膨隆。後頭隆起の膨隆度はBrocaの第3度。咬耗度はMartinの第2～3度。6に齶蝕がある。上・下肢骨はそれほど頑丈ではない。

(78) 77号人骨（女性、壮年期）

保存状態は良好。頭蓋は短頭型。3主要縫合は内・外板とも骨結合化がない。乳様突起は小さい。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第1度。咬耗度はMartinの第1度。5に齶蝕があり、1の歯槽部には歯性膿瘍がある。上・下肢骨はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。推定身長約144cm。

(79) 78号人骨（女性、壮年期）

保存状態は良好。3主要縫合は、内・外板とも骨結合化がない。乳様突起は小さく、外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第0度。咬耗度はMartinの第1度。上・下肢骨はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。推定身長約148cm。

(80) 79号人骨（女性、老年期）

保存状態は不良。3主要縫合は、内板では冠状縫合と矢状縫合の大部分に骨結合化があり、外板でも冠状縫合の大部分に骨結合化がある。乳様突起は小さい。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。下顎の歯槽は大部分が閉鎖。上・下肢骨はきゃしゃ。

(81) 80号人骨（女性、壮年期）

保存状態は不良。3主要縫合は、内板では冠状縫合と矢状縫合の大部分に骨結合化がある。外板では骨結合化がない。咬耗度はMartinの第1～2度。上・下肢骨はきゃしゃ。

(82) 81号人骨（男性、壮年期）

保存状態は良好。頭蓋は短頭型。3主要縫合は、内板では冠状縫合の大部分に骨結合化があり、外板ではいずれも骨結合化がない。乳様突起は大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第4度。6 5 4に齶蝕がある。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は大きい。推定身長約158cm。

(83) 82号人骨（男性、壮年期）

保存状態は良好。頭蓋は長頭型。3主要縫合は、内・外板とも骨結合化がない。乳様突起は大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第1度。咬耗度はMartinの第1～2度。6 7に齶蝕がある。上・下肢骨ともあまり頑丈ではない。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長は147cm。

(84) 83号人骨（性別不詳、乳児期）

保存状態は不良。2才前後の乳児骨。詳細は不明。

(85) 84号－A人骨（女性、熟年期）

保存状態は良好。3主要縫合は、内・外板とも冠状縫合と矢状縫合の大部分に骨結合化がある。乳様突起は小さい。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。上・下肢骨はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。推定身長約142cm。

(86) 84号－B人骨（性別不詳、幼児期）

保存状態は不良。3才前後の幼児骨である。詳細は不明。

(87) 85号人骨（性別不詳、幼児期）

保存状態は不良。5才前後の幼児骨である。詳細は不明。

(88) 86号人骨（男性、熟年期）

保存状態は良好。咬耗度はMartinの第2～3度。下顎の歯槽は大部分閉鎖。上・下肢骨は比較的頑丈。大坐骨切痕の湾曲は大きい。推定身長約154cm。

(89) 87号人骨（男性、壮年期）

保存状態は良好。3主要縫合は、内板では冠状縫合の大部分に骨結合化があり、外板では骨結合化がない。乳様突起は大きく膨隆し、外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第4度。咬耗度はMartinの第1度。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約154cm。

(90) 88号人骨（女性、壮年期）

保存状態は良好。3主要縫合は、内・外板とも骨結合化がない。乳様突起は小さく、外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第1度。咬耗度はMartinの第1～2度。上・下肢骨はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。推定身長約151cm。

(91) 89号人骨（女性、老年期）

保存状態は良好。3主要縫合は、内・外板とも大部分に骨結合化がある。乳様突起は小さい。外後頭隆

起の膨隆度はBrocaの第1度。歯槽は大部分が閉鎖。上・下肢骨はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。推定身長約141cm。

(92) 90号人骨（女性、壮年期）

保存状態は不良。3主要縫合は、内・外板とも骨結合化がない。乳様突起はそれほど小さくはない。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。咬耗度はMartinの第1～2度。1 5 6に齶蝕がある。上・下肢骨はきゃしゃ。

(93) 91号人骨（男性、成人）

保存状態は不良。頭蓋は後頭骨片だけがある。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約162cm。

(94) 92号人骨（男性、壮年期）

保存状態は良好。頭蓋は長頭型。3主要縫合は内・外板ともに骨結合化がない。乳様突起は大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第5度。咬耗度はMartinの第1～2度。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約158cm。

(95) 93号人骨（女性、壮年期）

保存状態は不良。3主要縫合は、内板では冠状縫合の大部分と矢状縫合の一部が骨結合化し、外板では骨結合化がない。乳様突起はそれほど小さくはない。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第1度。咬耗度はMartinの第2度。上、下肢骨はきゃしゃ。

(96) 94号人骨（女性、壮年期）

保存状態は良好。頭蓋は長頭型。3主要縫合は、内、外板とも大部分に骨結合化がある。乳様突起は小さい。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第1度。咬耗度はMartinの第1～2度。7 3・7に齶蝕がある。上、下肢骨はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。

(97) 95号人骨（男性、壮年期）

保存状態は良好。頭蓋は長頭型。3主要縫合は、内板では大部分に骨結合化があり、外板でも冠状縫合の一部が骨結合化。乳様突起は大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。咬耗度はMartinの第1～2度。上、下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約162cm。

(98) 96号人骨（女性、成人）

保存状態はきわめて不良。頭蓋がない。上・下肢骨はきゃしゃで、大坐骨切痕の湾曲は大きい。

(99) 98号人骨（男性、熟年期）

保存状態は良好。3主要縫合は、内板では大部分に骨結合化があり、外板でも一部に骨結合化がある。乳様突起は大きく膨隆。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。上顎の歯槽は大部分が閉鎖。咬耗度はMartinの第1度。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約157cm。

(100) 99号人骨（性別不詳、年齢不詳）

保存状態はきわめて不良。側頭骨錐体片が1個ある。詳細は不明。

(101) 100号人骨（女性、壮年期）

保存状態は良好。3主要縫合は、内・外板とも骨結合化がない。乳様突起は小さく、外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第1度。咬耗度はMartinの第1～2度。上・下肢骨はきゃしゃ。

(102) 101号人骨（性別不詳、年齢不詳）

保存状態はきわめて不良。左右の大腿骨体片が各1個残っている。詳細は不明。

(103) 102号人骨-A（女性、壮年期）

保存状態は良好。3主要縫合は、内板では大部分に骨結合化があり、外板では骨結合化がない。乳様突起は小さい。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第1度。咬耗度はMartinの第1～2度。上・下肢はきゃしゃ。大坐骨切痕の湾曲は大きい。



(104) 102号人骨－B（男性、壮年期）

保存状態は不良。咬耗度はMartinの第2度。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。

(105) 103号人骨（女性、成人）

保存状態は不良。乳様突起は小さい。下肢骨はきゃしゃ。詳細は不明。

(106) 104号人骨（男性、壮年期）

保存状態は良好。3主要縫合は、内板では冠状縫合の全部、外板では冠状縫合の一部に骨結合化がある。乳様突起は大きく膨隆し、外後頭隆起の膨隆度はBrocaの第2度。咬耗度はMartinの第2度。7.6|6・16に齶蝕がある。上・下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の湾曲は小さい。推定身長約155cm。

(107) A号人骨（性別不詳、年齢不詳）

保存状態はきわめて不良。脳頭蓋片が1個ある。詳細は不明。

(108) B号人骨（性別不詳、成人）

保存状態はきわめて不良。脳頭蓋片、長骨片が10数個ある。詳細は不明。

(109) C号人骨（性別不詳、小児期）

保存状態は不良。11才前後の小児骨である。詳細は不明。

(110) D号人骨（性別不詳、小児期）

保存状態はきわめて不良。詳細は不明。

(111) E号人骨（性別不詳、年齢不詳）

保存状態はきわめて不良。右寛骨片が3個ある。詳細は不明。

(112) F号人骨（性別不詳、成人）

保存状態はきわめて不良。成人の長骨片が3個ある。詳細は不明。

(113) G号人骨（性別不詳、壮年期）

保存状態はきわめて不良。咬耗度はMartinの第1～2度。詳細は不明。

(114) H号人骨（性別不詳、乳児期）

保存状態は良好。1才未満の乳児骨である。詳細は不明。

(115) I号人骨（性別不詳、新生児期）

保存状態は不良。詳細は不明。

(116) J号人骨（性別不詳、新生児期）

保存状態はきわめて不良。詳細は不明。

(117) K号人骨（性別不詳、幼児期）

保存状態は不良。長骨片が残っている。詳細は不明。

(118) L号人骨（性別不詳、小児期）

保存状態はきわめて不良。8才前後の小児の乳後歯と、未萌出の永久歯がある。詳細は不明。

(119) M号人骨（性別不詳、年齢不詳）

保存状態はきわめて不良。成人の手・足の骨などが13個ある。詳細は不明。

(120) N号人骨（性別不詳、成人）

保存状態はきわめて不良。成人の長骨片が10数個ある。詳細は不明。

(121) O号人骨（女性、成人）

保存状態はきわめて不良。左の大腿骨・脛骨体だけがあり、その作りはきゃしゃである。

(122) P号人骨（性別不詳、幼児期）

保存状態は不良。4才前後の幼児骨である。詳細は不明。

(123) No.22地輪下人骨（性別不詳、年齢不詳）

火葬骨が約40g残っている。詳細は不明。

(124) No.17地輪下人骨 (男性、成人)

火葬骨が約260g残っている。後頭骨片や脛骨体片の骨質はきわめて厚いので、男性成人骨と思われる。

Ⅲ. 考察

塩川遺跡から出土した江戸時代人骨は土葬骨122体、火葬骨2体、合計124個体分である。

(1) 性別・年齢構成

第1表の出土人骨一覧をもとに、出土人骨を性別・年齢別にまとめたのが第2表である。成人96体、未成人(子供など)28体であるから、成人と未成人との比は約3:1である。ちなみに一橋高校遺跡出土人骨(東京、江戸時代、17世紀)の年齢構成では、小児・幼児骨の出土個体数が全体の58.4%を占めると言う(森本岩太郎ほか、1985)。このことは、江戸時代の塩川村では、17世紀の江戸のような発展途上の大都市と比べ栄養状態や衛生状態が良く、疫病などもあまり流行しなかったことを物語る。成人の年齢構成については、男女の合計で老年期8体、熟年期18体、壮年期51体であるから、それらの比は約1:2:6で壮年期の死者が多い。これを性別でみると、壮年期は男性の68%、女性の63%を占めている。成人の男・女比はほぼ1:1で同数である。

第2表 出土人骨個体数

	成人					未成人					計
	老年	熟年	壮年	不詳	小計	新生児・乳児	幼児	小児	青年	小計	
男性	3	9	26	3	41	0	0	0	0	0	41
女性	5	9	24	5	43	0	0	0	1	1	44
不詳	0	0	1	11	12	6	6	15	0	27	39
計	8	18	51	19	96	6	6	15	1	28	124

(2) 形質の特徴

第3表に見られるように、頭蓋長幅示数を算出できたのは、男性25体、女性15体である。頭型の内訳は、男性では長頭型15(60%)・中頭型9(36%)・短頭型1個体(4%)、女性では長頭型3(20%)・中頭型8(53%)・短頭型4(27%)個体である。男性では長頭型が一番多く、女性では中頭型が一番多い。また、これらの頭蓋の最大長、最大幅、長幅示数を第3表にまとめた。これによると、頭蓋長幅示数の平均値は、男性75.4%、女性78.8で、男性は中頭型の下限、女性は中頭型である。

第3表 頭蓋計測値(mm)・長幅示数

	男性			女性		
	資料数	平均値	±標準偏差	資料数	平均値	±標準偏差
頭蓋最大長	25	184.6	±5.79	15	171.7	±6.72
頭蓋最大幅	25	139.1	±4.90	15	135.2	±3.43
頭蓋長幅示数	25	75.4	±2.68	15	78.8	±3.26

次に、大腿骨または脛骨の最大長から推定身長を算出できたのは、男性32体、女性18体である(第4表)。この表から一番資料数の多い右大腿骨最大長を用いた推定身長の平均値を見ると、男性では157.9cm、女性では145.8cmである。

第4表 大腿骨・脛骨最大長からの推定身長(cm)

	男性					女性				
	資料数	平均値	±標準偏差	最小	最大	資料数	平均値	±標準偏差	最小	最大
左大腿骨最大長から	9	156.9	±4.68	147	163	8	147.0	±4.30	142	153
左脛骨最大長から	6	157.5	±3.55	154	162	0	-	-	-	-
右大腿骨最大長から	16	157.9	±4.01	151	164	9	145.8	±3.08	141	151
右脛骨最大長から	1	153.0	-	-	-	1	142.0	-	-	-

以上の頭蓋長幅示数と推定身長について、比較的資料数の多い男性を用いて考察すると、まず頭蓋長幅示数では、江戸時代人（関東地方）男性の平均値は約77で中頭型、また中世（関東地方）の男性の平均値は約74で長頭型であるという（鈴木 尚、1969）。塩川遺跡出土の男性頭蓋の平均は、中世と江戸時代人とのほぼ中間値である。次に推定身長については鎌倉時代人159cm、室町時代人157cm、江戸時代人156cmと言われ（平本嘉助、1972）、塩川遺跡の男性はやはり中世と江戸時代人との中間値を示す。これらのことから、塩川遺跡出土の男性骨の形質は、頭型についても身長についても中世人の形質的特徴を受け継いでいると言ってもよい。

### （3）疾病

歯についてみると、齲蝕が男性11体、女性10体、計21体、歯性膿瘍が男性3体、女性2体計5体に認められる。次に頭蓋の慢性骨膜炎（梅毒性？）が女性1体（24号）に見られる。上肢骨では、左肘関節の変形性関節症（105号）および尺骨体の慢性骨髄骨炎（30号）が男性各1体に見られる。また体幹骨では、頸・胸・腰椎の変形性脊椎症が男性12体、女性4体、計16体に見られる。最後に下肢骨についてみると、左右膝関節の変形性関節症が女性1体（24号）に、右脛・腓骨体に慢性骨髄骨炎に右距腿関節炎をともなったものが男性1体（103号）に認められる。以上のほかにほぼ全身の骨の梅毒性骨炎が女性1体（68号）に認められる。

## IV. まとめ

塩川遺跡出土の江戸時代人骨は土葬骨122体・火葬骨2体・計124個体分である。その内訳は男性41体・女性44体・性別不詳39体で、男女数がほぼ等しい。また成人骨が96体・未成人骨が28体で、未成人が約23%を占める。成人では男女とも壮年期が過半数を占め、熟年期がこれに次ぎ、老年期が少なかった。頭蓋長幅示数によれば男性が中頭型の下限、女性が中頭型、また推定身長は男性が158cm、女性が146cmで、頭型・身長ともに中世から近世への移行像を示した。歯の齲蝕（虫歯）が21体（17%）、頸・胸・腰椎の変形性脊椎症が16体（13%）に見られた。その他、変形性関節症・骨髄骨炎なども少数個体に認められた。骨梅毒症が1個体（および同疑似が1個体）にあった。

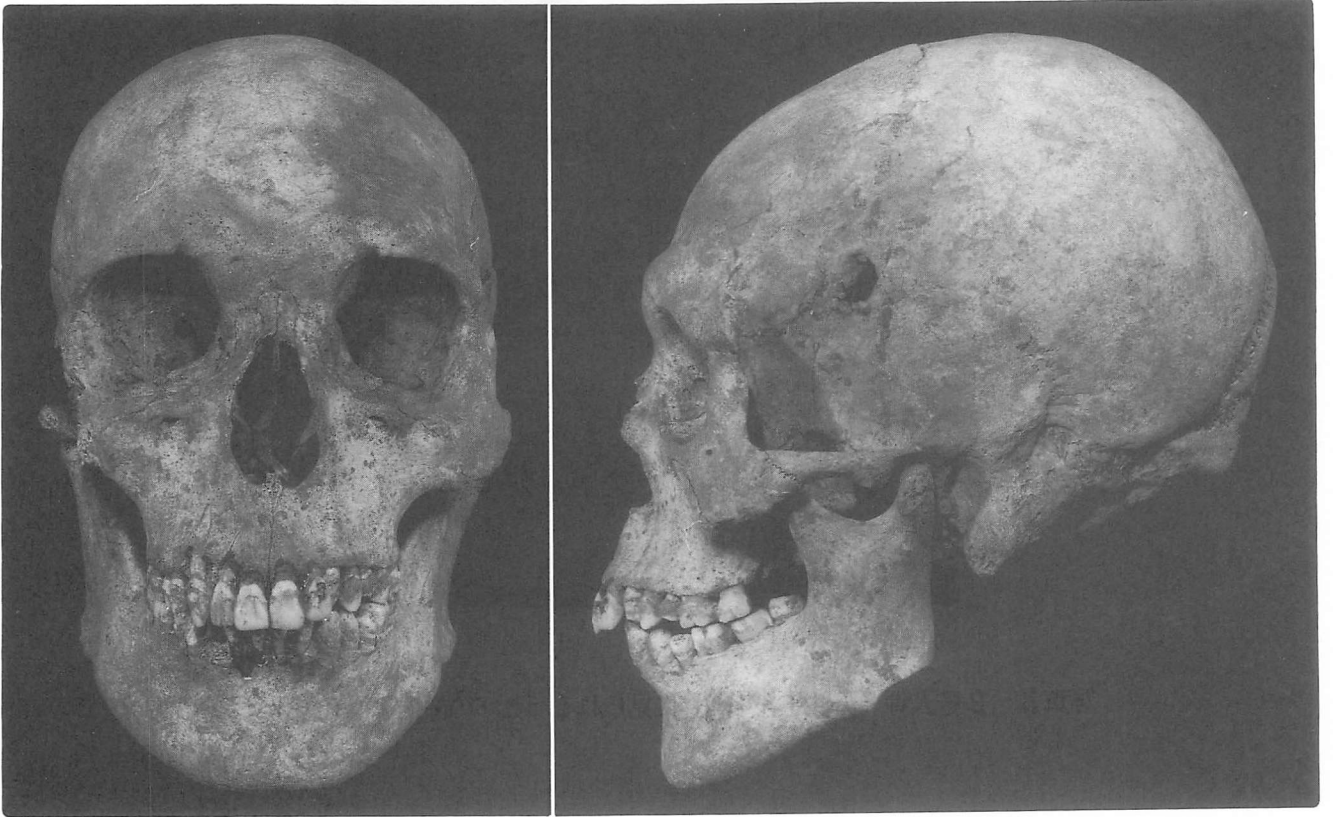


写真1 31号人骨頭蓋（男性・壮年期）の前面観と左側面観。

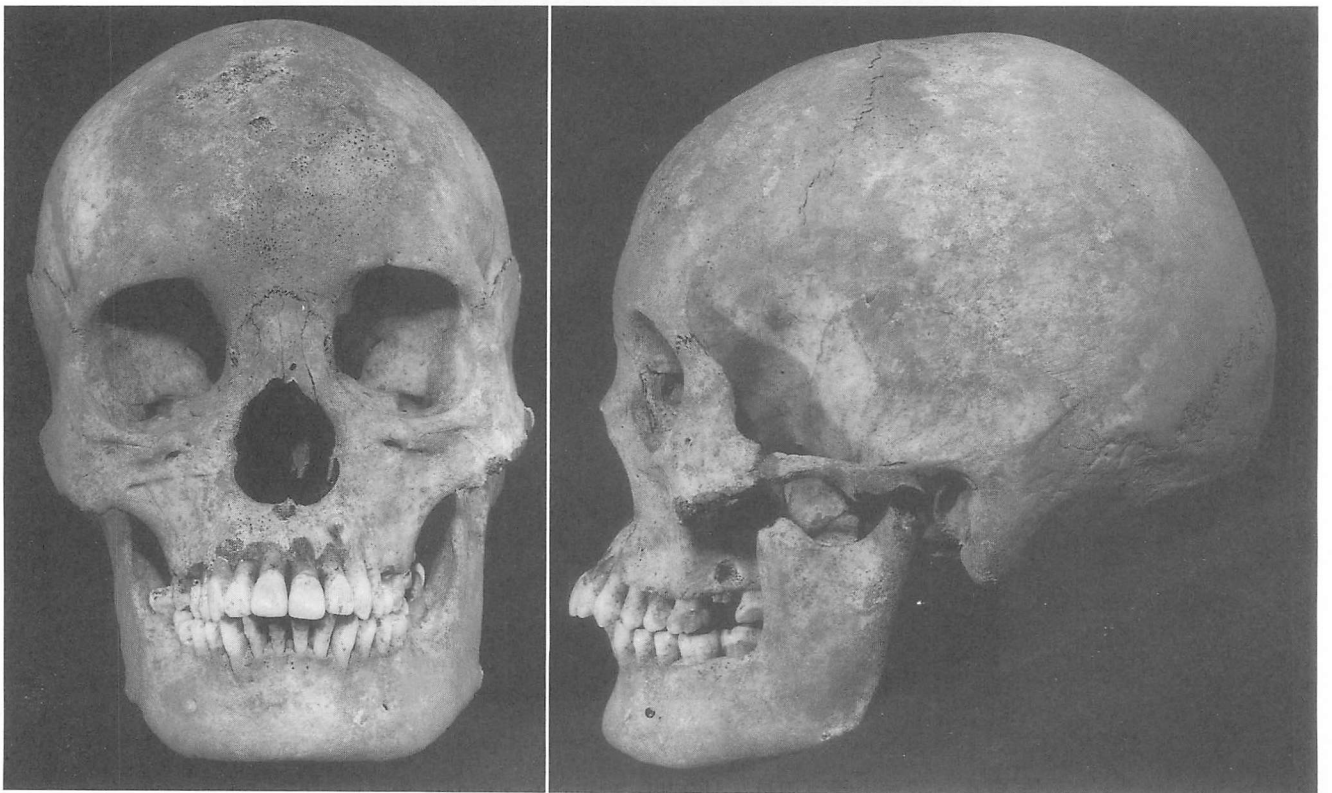


写真2 43号人骨頭蓋（女性・壮年期）の前面観と左側面観

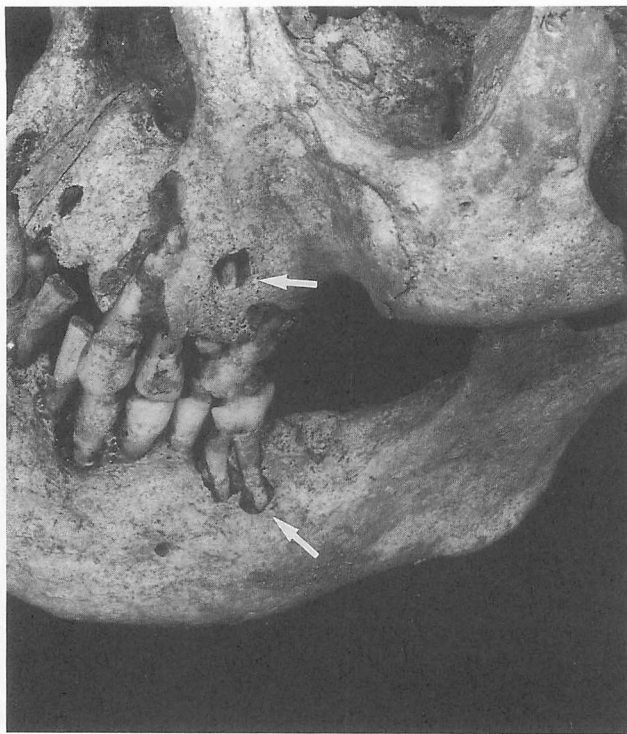


写真3 2号人骨（男性・壮年期）に見られる5と6の歯性膿瘍（矢印）。

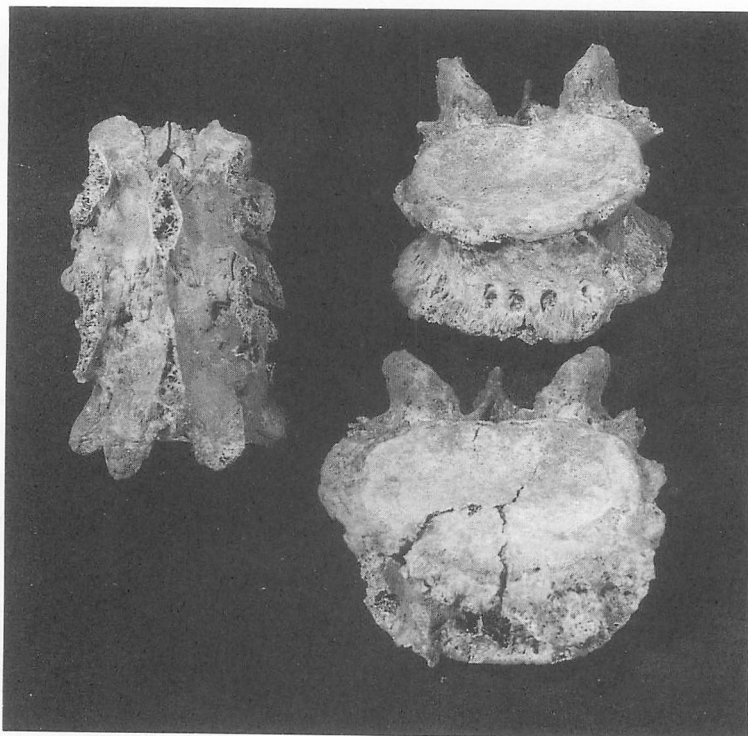


写真4 72号人骨（男性・壮年期）に見られる変形性脊椎症。  
左は第12胸椎と第1腰椎の骨結合化。  
右は第3・4腰椎体に見られる骨棘。

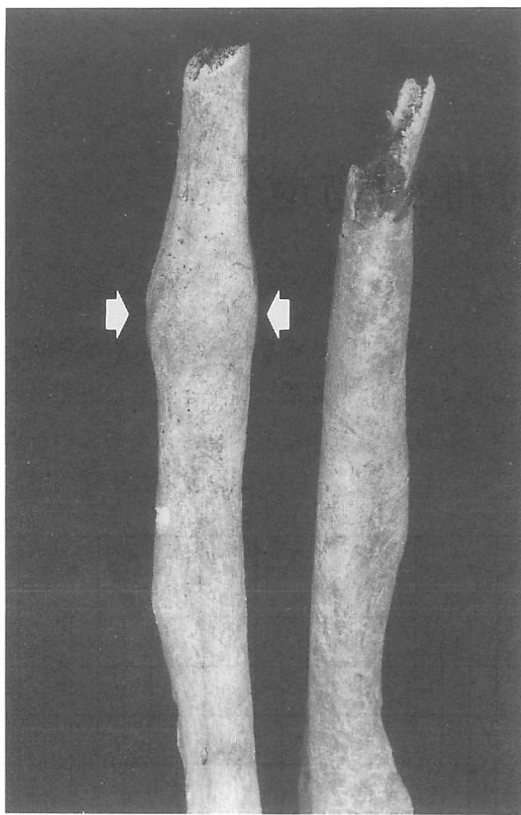


写真5 16号人骨（男性・熟年期）の右尺骨体に見られる慢性骨髄炎（矢印）。  
右尺骨体は正常。

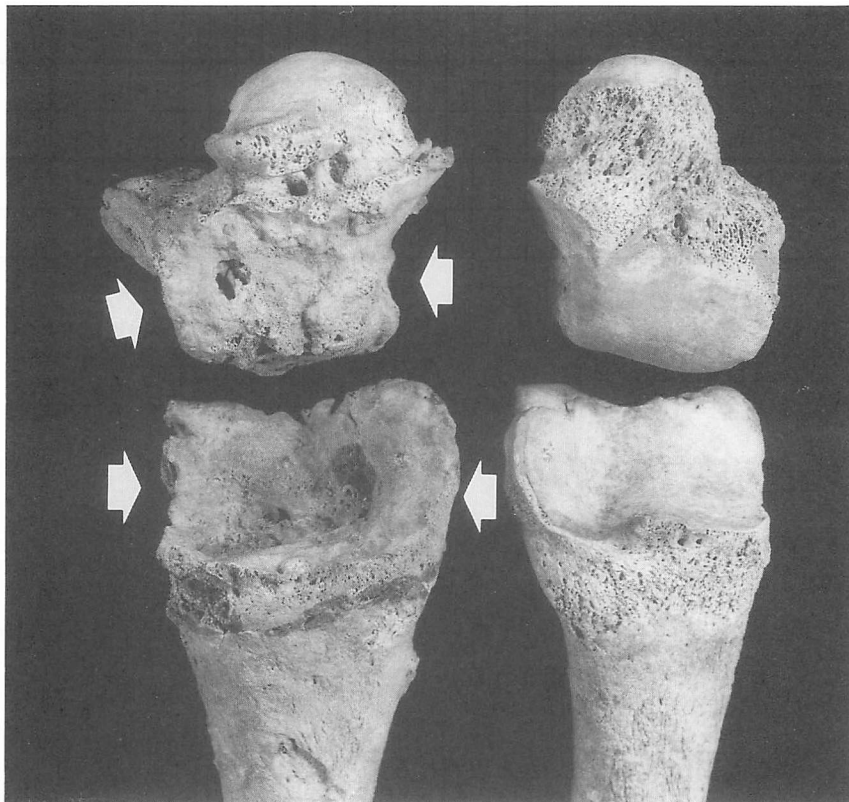


写真6 60号人骨（男性・壮年期）に見られる左距腿関節の慢性  
関節炎による変形（矢印）。  
右距腿関節は正常。

# 塩川遺跡出土の脊椎動物遺体

早稲田大学 金子浩昌

本遺跡（塩川遺跡B地区）で出土した動物遺存体は、ごく一部が土坑中から検出されたが大部分は幾つかのグリッドでの包含層中での出土であった。そのために時期的な確認が難しいと思われるが、伴出する遺物から近世のものではないかと考えられている。もっとも、盛土中など外見的にも新しいと考えられる骨を除いてである。

## I 検出された動物の種名表

種別 地点	cra 頭蓋骨 ☆1	md 下顎骨	vert 脊 椎 骨 ☆2	rib 肋骨 ☆2	scap 肩 甲 骨 ☆3	hum 上 腕 骨	rad 桡 骨	ul 尺 骨	mc 中 手 骨	pel 寛 骨	fe 大 腿 骨	tib 脛 骨	fib 腓 骨	ta 距 骨	ca 踵 骨	ml 中 足 骨	dig 指 骨	
	p (s) d	p (s) d	p (s) d	p (s) d	p (s) d	p (s) d	p (s) d	p (s) d	p (s) d	p (s) d	p (s) d	p (s) d	p (s) d	p (s) d	p (s) d	p (s) d	p (s) d	
ニノツツ 1-6G	r l																2	
1-7G	r l	M <sub>2</sub>	T L															
2-6G	r l		Ax <sub>1</sub>															
6-6G	r l					1												
2-7G	r l	nt, fr l 落角坐	(M <sub>2</sub> ~ M <sub>3</sub> )			1						1						
3-7G	r l	角坐骨				1									1			
9-7G	r l									(1)								
1-12G	r l					(1)						(1)						
3-7G	r l	落角坐																
No9F3	r l	front ♂																
?	r l	front ♂	(M <sub>3</sub> )				1											
97 6-7G	r l		歯 fr															
7-7G	r l					1		1										
4/5 1-6G	r l					1												
1-7G	r l	1																

## II 標本の記載

### 1. ヒト *Homo sapiens*

#### 1-7 Grid 第三層内

下顎骨の連合部近域を残すのみの小片が出土している。咬面が破損し、歯の様子が不明である。歯槽が閉鎖し少なくとも切歯はなかったのではないかとと思われる。

#### 4-6 Grid

大腿骨片、おそらく埋葬骨の一部ではないかとと思われる。

### 2. イヌ *Canis familiaris*

#### 11-13 Grid 第四層上面

ほぼ一個体分の骨が揃っていた。ただ骨の保存は良好ではなく、また発掘による取り上げも若干不十分な点がある。







下顎歯。

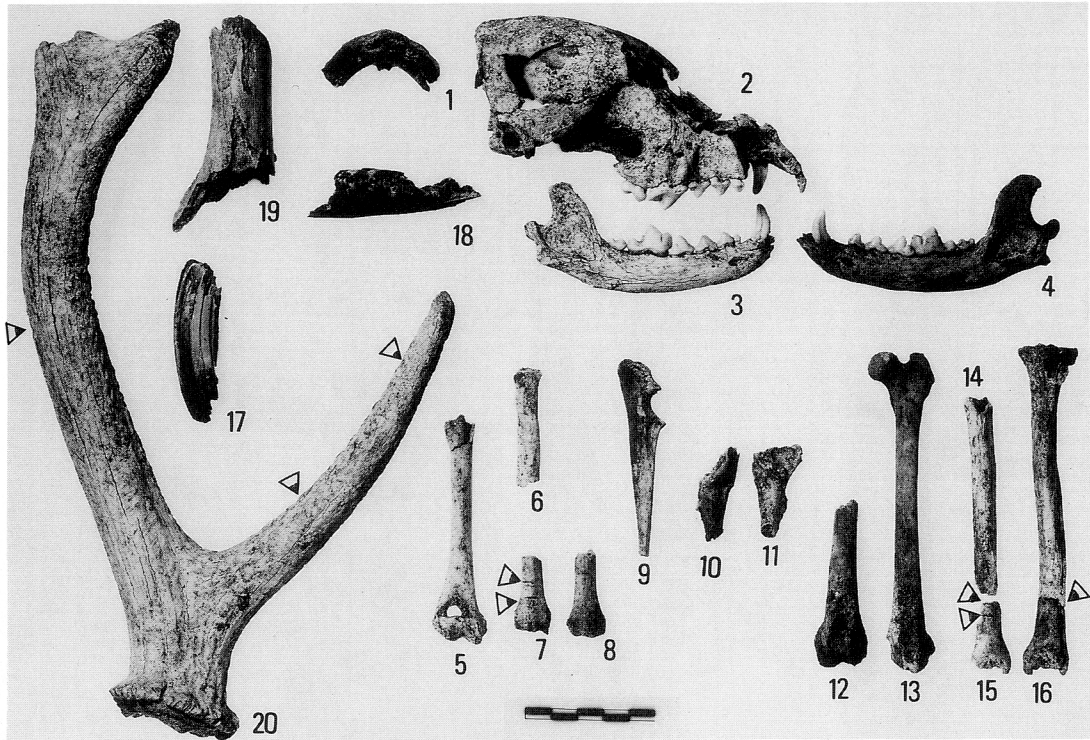
肢骨、上腕骨左2・右1、距骨左2、踵骨右1、骨左、骨右、脛骨左

脊椎骨、軸椎・胸椎各1、軸椎が前方半分のみを残しているのは、この部分で頭部の切断が行われた結果ではないかと思われる。

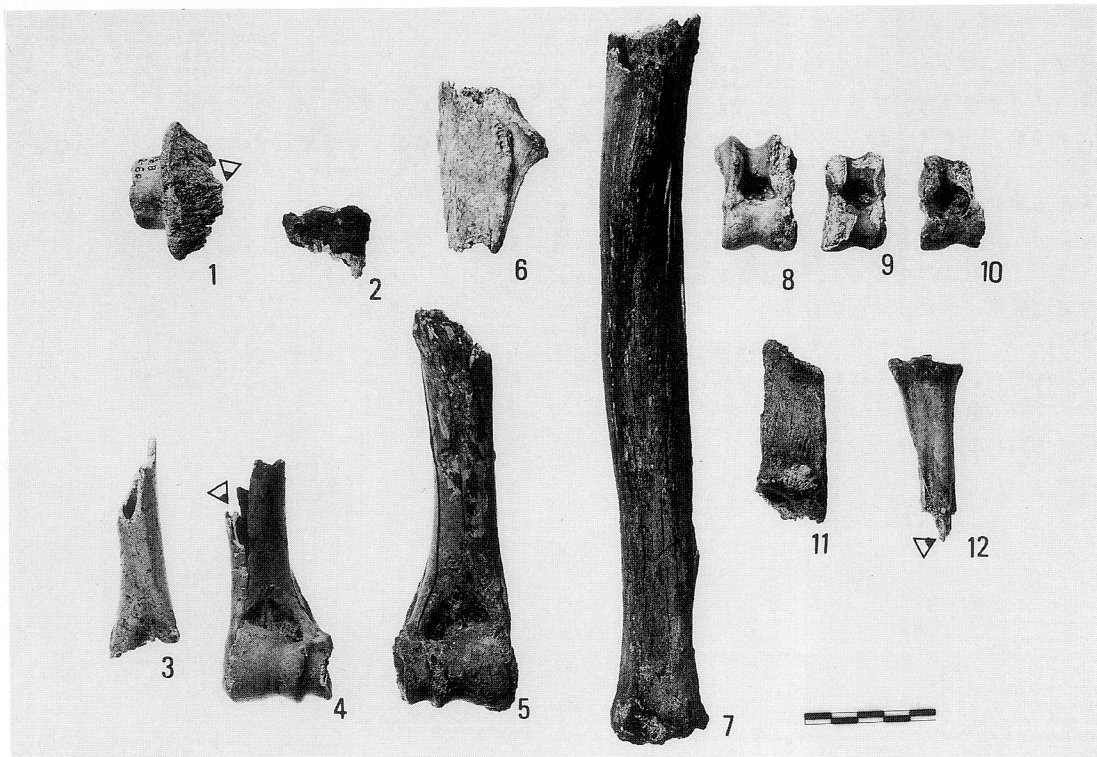
四肢骨の中で検出されている骨の他に肩甲骨、大腿骨、中手骨、中足骨と趾骨がある。若し、この地で捕獲されたシカが、ここで解体されたとすれば当然それらの骨もここに残っていてもよいように思われる。それが検出出来ないということは、骨が脆弱のために破損する率が高かったか、骨が別の目的で利用された結果である可能性があるかも知れない。例えば肩甲骨などは祭器の一つとして使われることはなかったか、あるいはシカの中手・中足骨は刺器やこうがい（筭）として長い間使われてきた骨である。近世においても何らかの用途がなかったとはいえないのではないだろうか。例えば中手あるいは中足骨を針入れに使っている例がある。中手・中足骨の近位部を切断し、筒状になった中に針を入れているのである。

### Ⅲ. まとめ

本遺跡で検出された動物遺体は、脊椎動物や大型の獣類のみであった。シカを主体として、それにイノシシが加わるものであった。こうした様相は、近世における内陸の山間に近い場所での獣と人間との関わりを示す具体的な例として興味深いと思っている。ただし、ここに残された動物のみが当時の人々との関連をもった種類であるとは到底考えられないであろう。生活の資源としての獣であれば、貝・魚・鳥・獣類のいろいろな種類がさらにあつたはずである。これについては今後の調査例によって明らかにされることもあるのではないかと考えている。

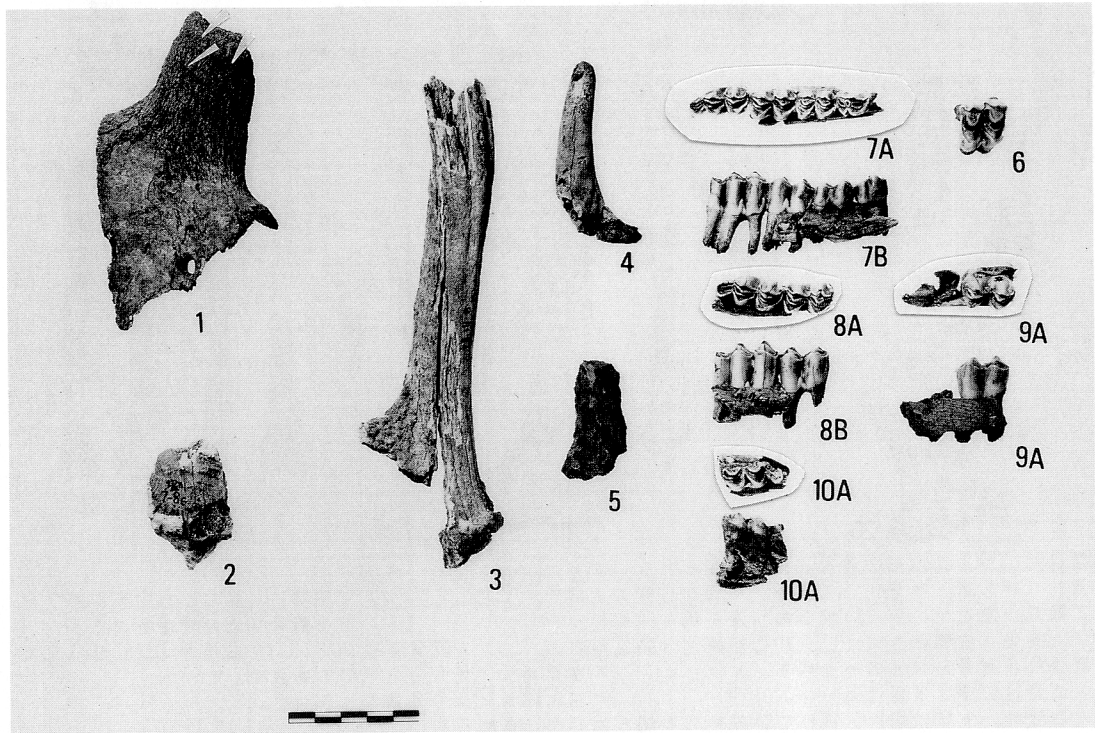


1. ヒ 下顎骨片（左右連合部の破片。歯槽は見られない。）
2. イ 頭蓋片（押し潰されたように破損。前頭から吻の上面を欠く。）
3. イ 右下顎片（左右とも完存。雄？）
4. イ 左下顎片（左右で色が違い埋存の状況が異なっていたらしい。）
5. イ 右上腕骨（近位骨端を欠く。）
6. 7. イ 右橈骨（中間部を欠く。矢印に切痕が3条あり。）
8. イ 左橈骨遠位部
9. イ 右尺骨（遠位部分を欠く。）
10. イ 右寛骨片（寛骨臼付近のみを残す。）
11. イ 左寛骨片（寛骨臼付近のみを残す。）
12. イ 右大腿骨遠位部（破損は新しい。）
13. イ 左大腿骨（遠位骨端を一部欠く。）
14. 15. イ 右脛骨（矢印に切痕。折れているものも切られていたためらしい。）
16. イ 右脛骨（遠位部の変色したところに切痕があり、深く切れている。）
17. ヱ 下顎白歯片（一部が残るのみ。）
18. イ 下顎片（元は完存していたらしい。乳白歯残る。）
19. イ 右腕骨片（骨体の一部を残すのみ。打ち割っている。）
20. ニホンジカ 右角（落角。矢印は 襷のかじりあと。白っぽく新しい感じのもの。）



ニホンジカの遺存骨

1. 環骨（骨体の約半分を残す。矢印方向で切断されたものであろう。）
2. 右桡骨（近位骨端を僅かに残すのみ。元はもつと残っていたのではないか。）
3. 右上腕骨片（最も小さい個体のもの。割れ口は新しい。）
4. 左上腕骨片（中間の大きさのもの。骨体は矢印位置で打ち割られたあと、亀裂が生じて変形している。）
5. 右上腕骨片（最も大きいもの。雄。上端つまり近位部の破損は新しい。）
6. 右寛骨臼部（内側割れ口は新しいので、元はもう少し大きい個体であったらう。）
7. 左脛骨（両端を欠損。これも割れ口は新しく、元は完存していたもの。自然のひび割れが著しい。）
8. 9. 10 右距骨（8が最大で雄、他は雌か。）
11. 右踵骨（骨端骨が脱れている。）



ニホンジカの遺存体

1. 右前頭骨片（ほぼ眼窩部分が残る。角座骨の前面に切痕が見られる。）
2. 角座骨とその直上（表面にたくさんの切り込み痕が見られ、結局この角座部分を切断している。ナタのようなもので切っている。）
3. 左角の角座と角幹（落角）
4. 角の枝の部分
5. 角幹片（このような角片が多く、一本の角であつたらしい。）
6. 左M<sup>2</sup>（摩滅は強い。歯根基部に切痕が付く。）
7. 右下顎骨片（P<sub>4</sub>～M<sub>3</sub>）、M<sub>1</sub>～M<sub>3</sub>の摩滅指数は2・3・5
8. 右下顎骨片（M<sub>2</sub>・3）、摩滅指数は4・5
9. 右下顎骨片（P<sub>2</sub>）、摩滅指数は5）
10. 左下顎骨片（M<sub>3</sub>）、摩滅指数は3？

# 版 圖

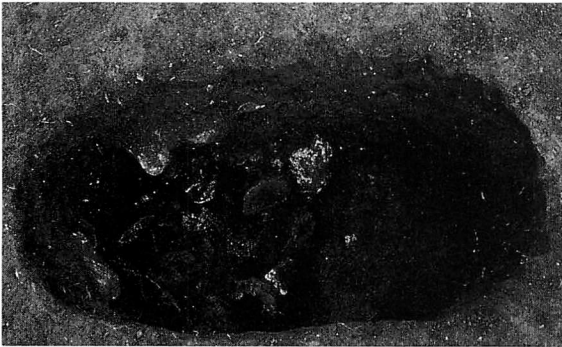




1. A地区遠景 (矢印がA地区、西)



2. A地区調査風景



3. 1号土坑



4. 2号土坑および3号土坑



5. 6～9号土坑



6. 3号土坑 (遺物出土状況)



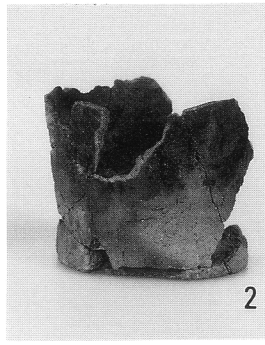
7. 1号・2号溝状遺構  
(手前が1号)



8. 試掘調査風景



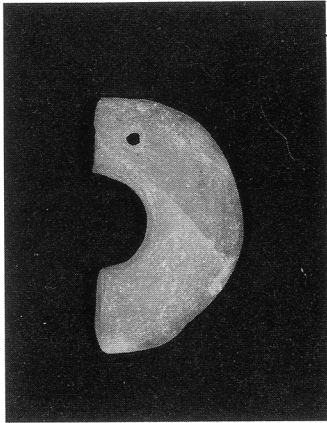
1. 1号土坑



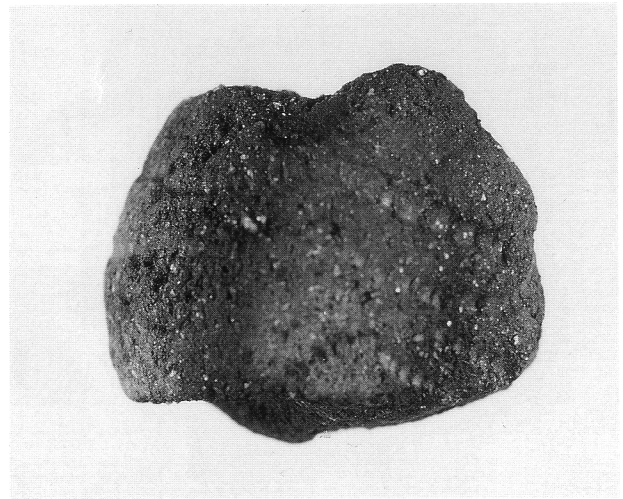
2. 3号土坑



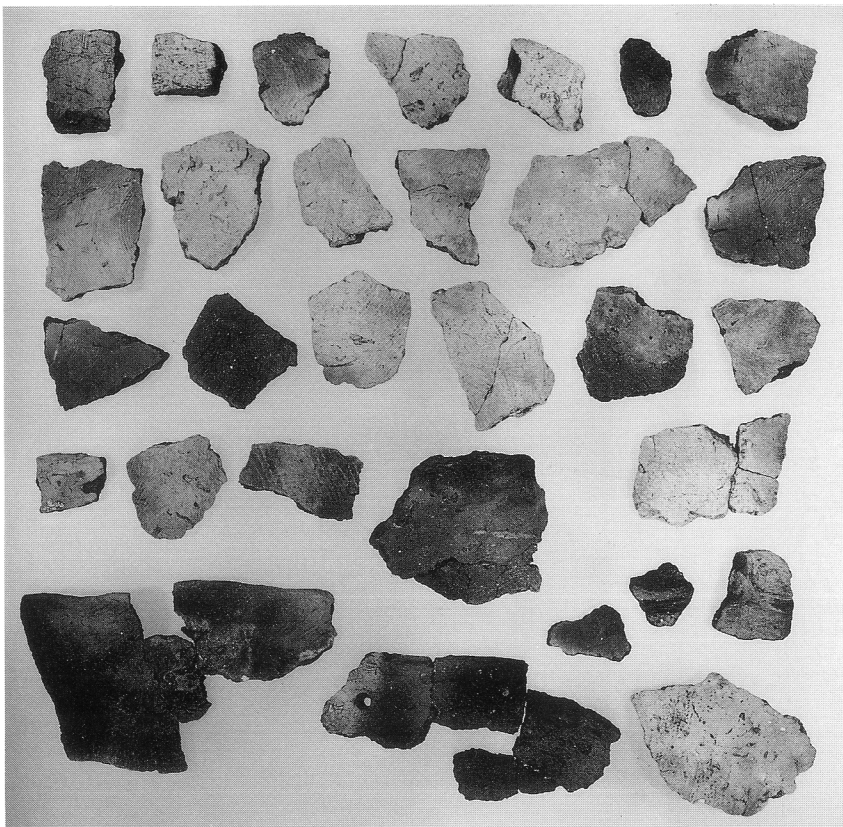
3. 3号土坑



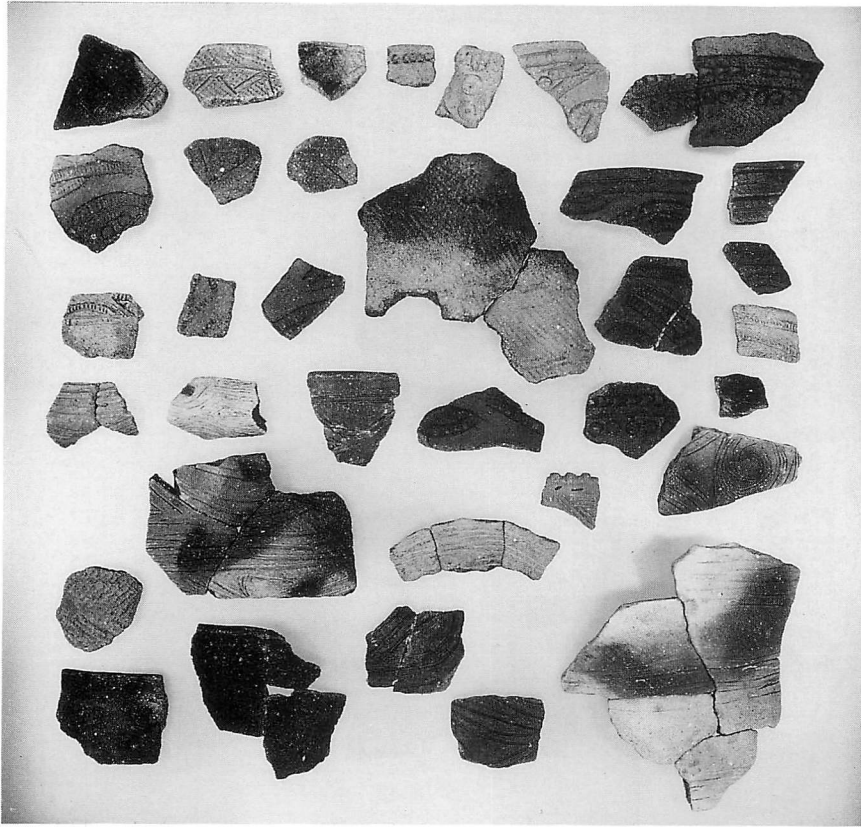
4. 遺構外出土の耳飾



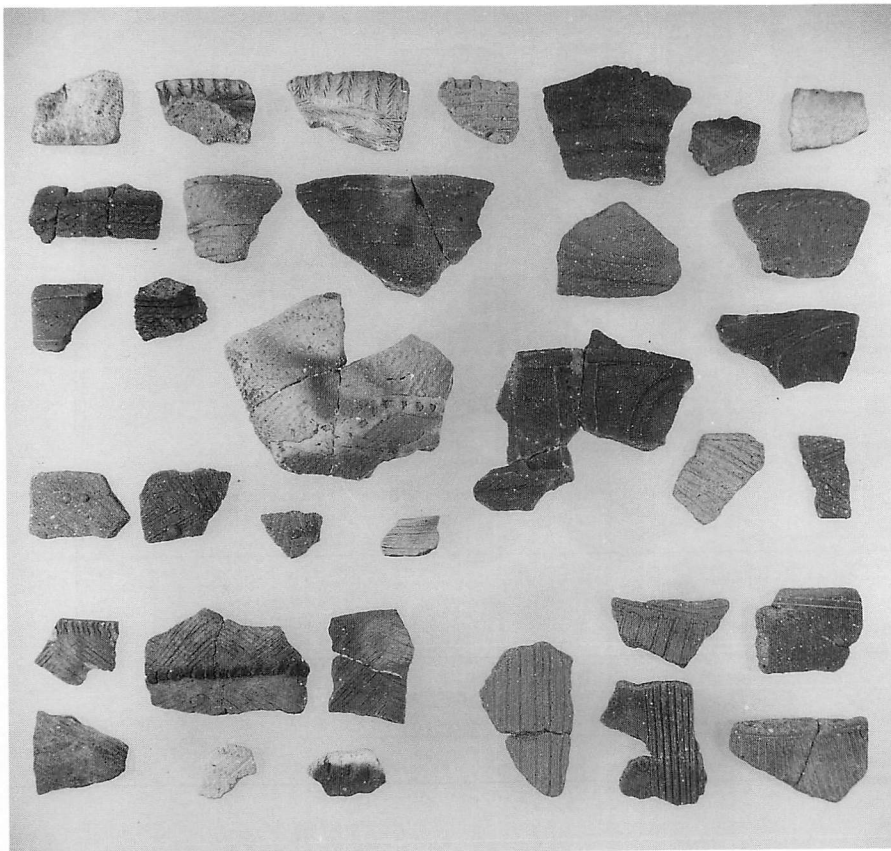
5. 遺構外出土の土偶



6. 遺構外出土の縄文土器①

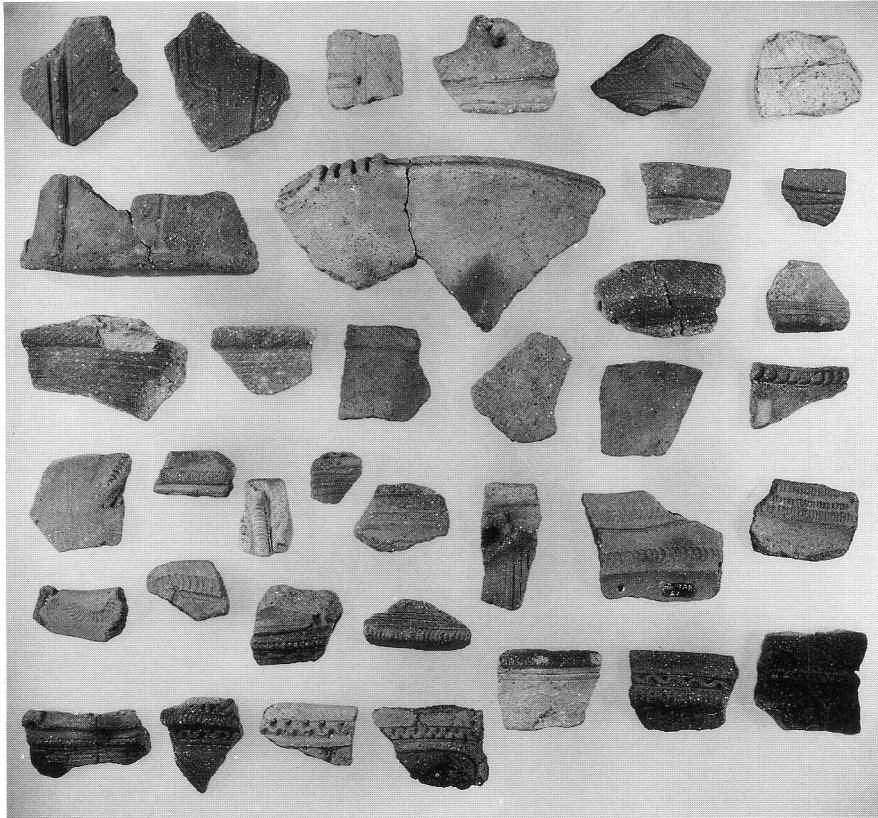


7. 遺構外出土の縄文土器②

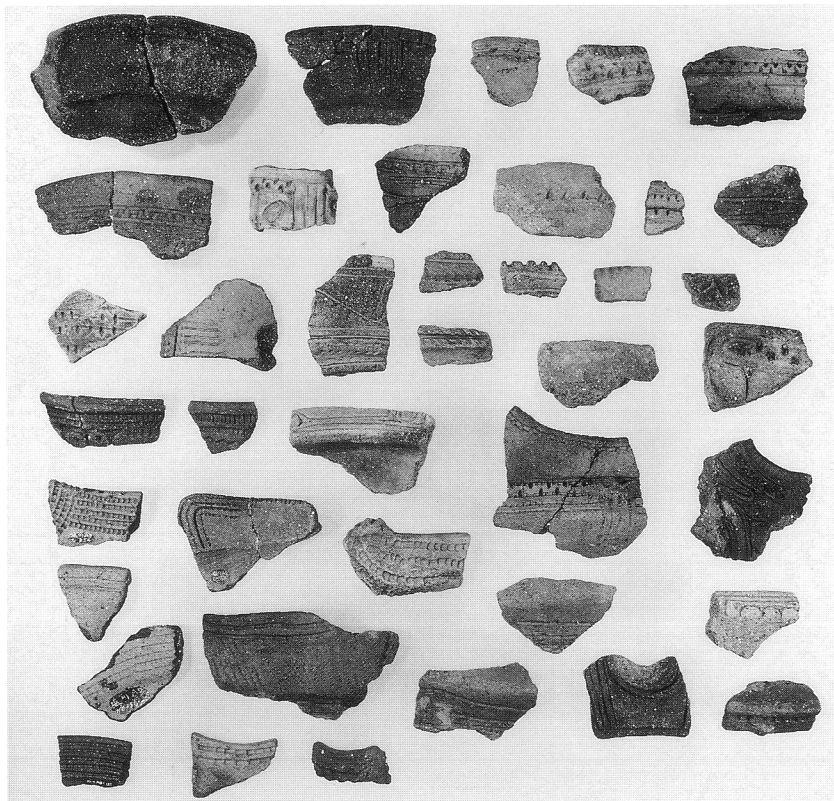


8. 遺構外出土の縄文土器③



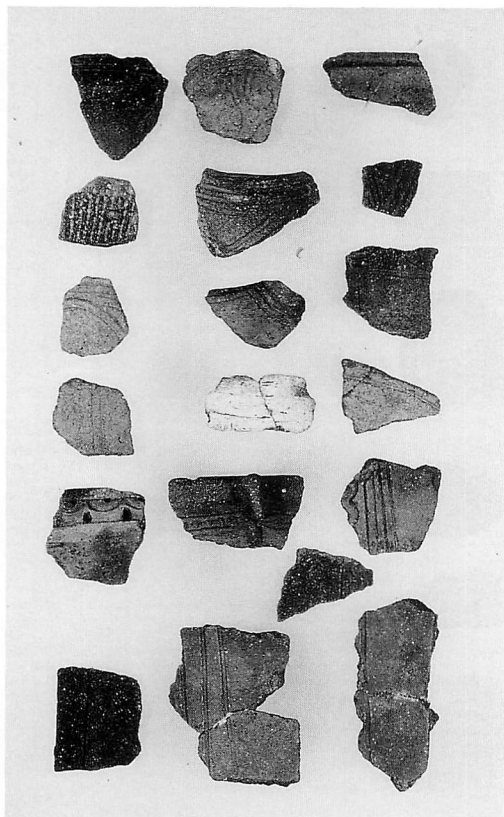


9. 遺構外出土の縄文土器④



10. 遺構外出土の縄文土器⑤

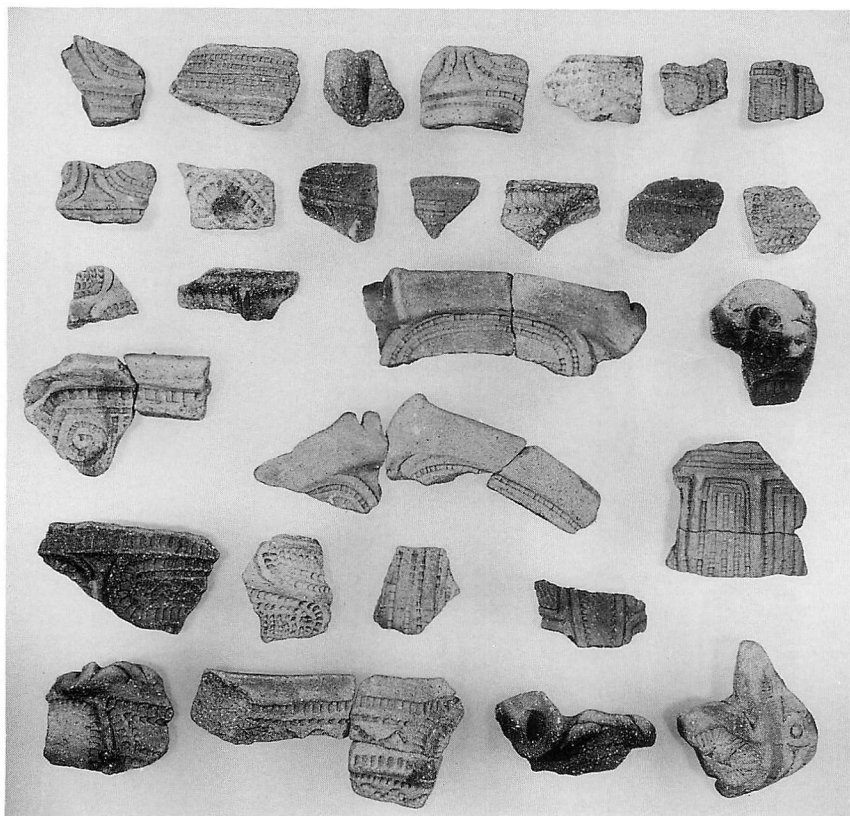




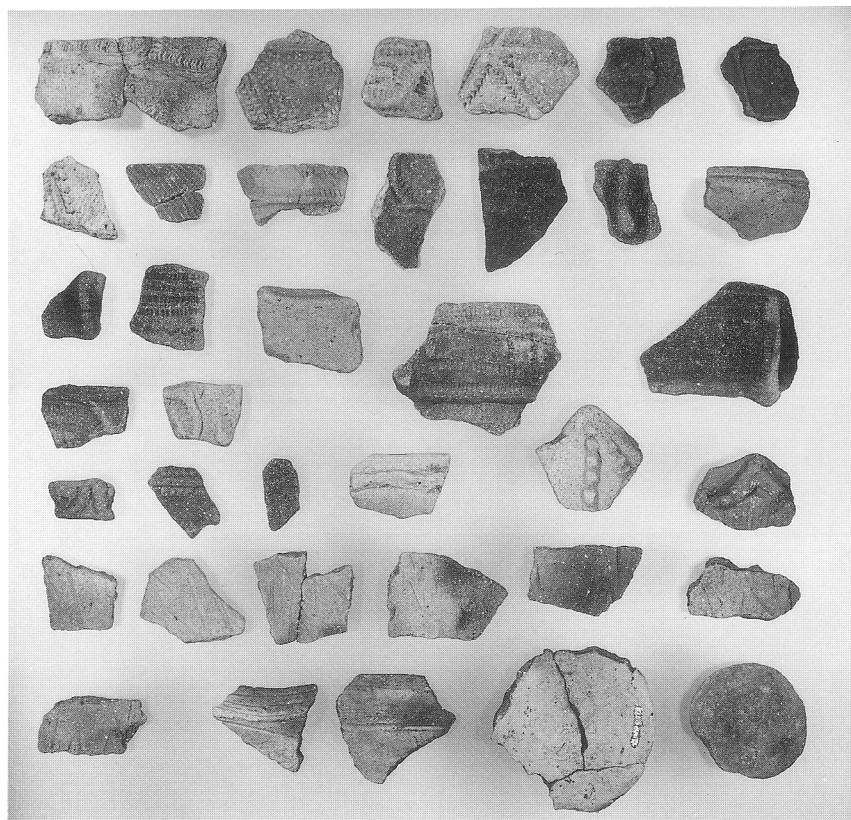
11. 遺構外出土の縄文土器⑥



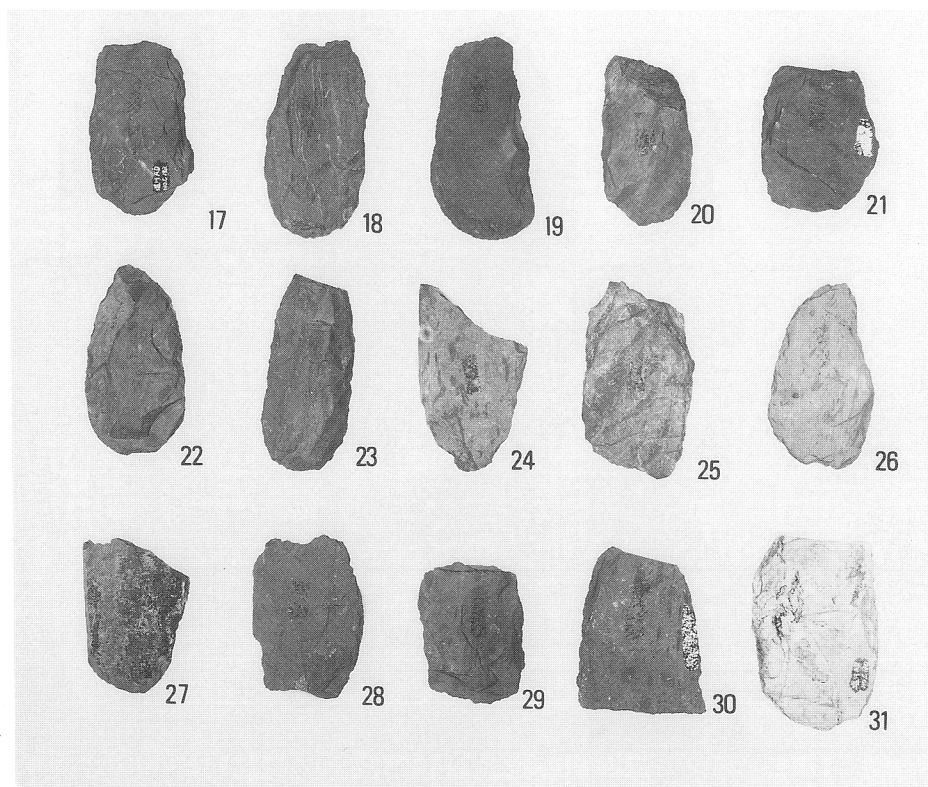
12. 遺構外出土の縄文土器⑦



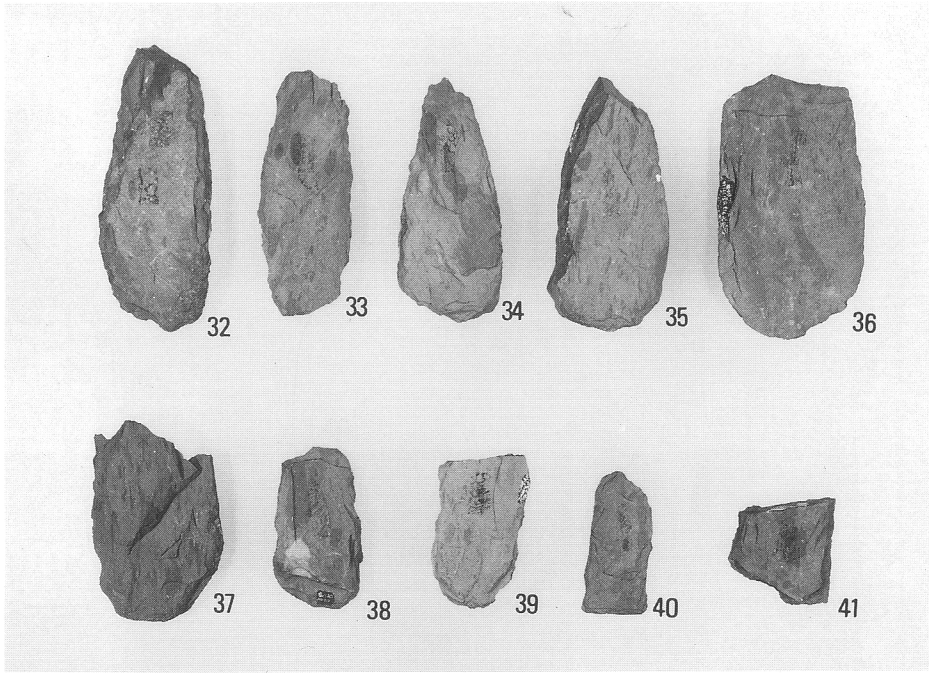
13. 遺構外出土の縄文土器⑧



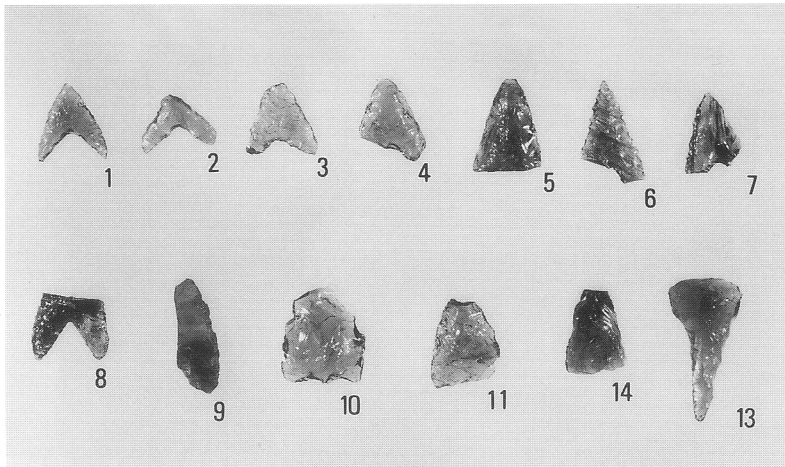
14. 遺構外出土の縄文土器⑨



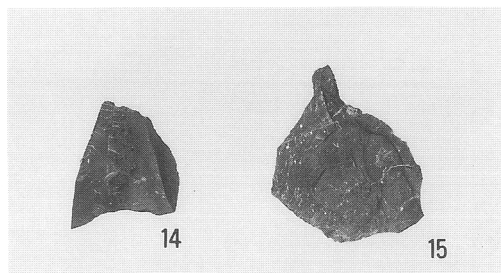
15. 遺構外出土の石器①



16. 遺構外出土の石器②



17. 遺構外出土の石器③



18. 遺構外出土の石器④



19. 遺構外出土の石器⑤





1. B地区遠景(南→)



2. B地区近景(東→)



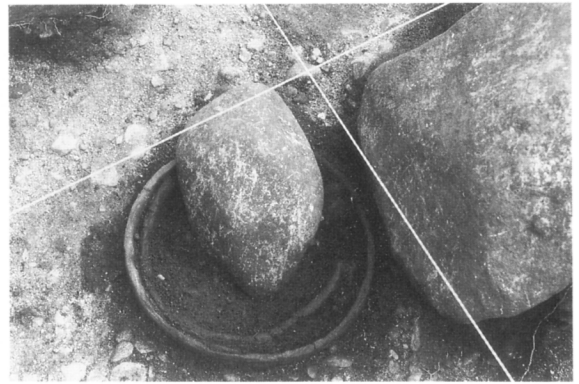
3. B地区調査風景



4. B地区調査風景



5. 1号住居址



6. 1号住居址 埋甕



7. 2号住居址



8. 2号住居址 埋甕



9. 4号住居址



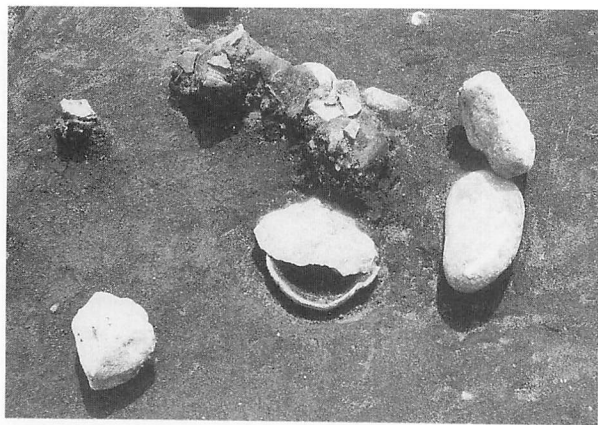
10. 5号住居址



11. 6号住居址



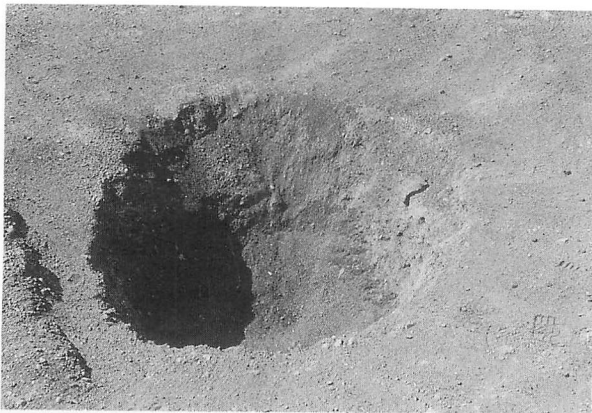
12. 10号住居址



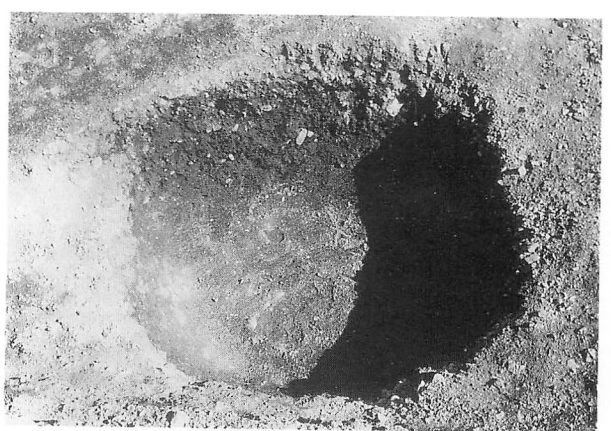
13. 1号埋甕



14. 2号埋甕



15. 1号土坑



16. 13号土坑





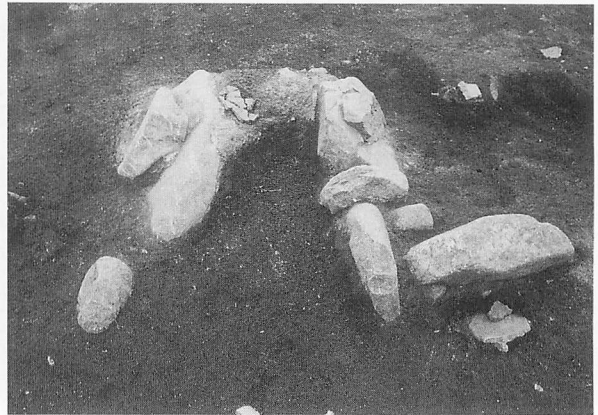
17. 7～9号土坑(左より7. 8. 9号)



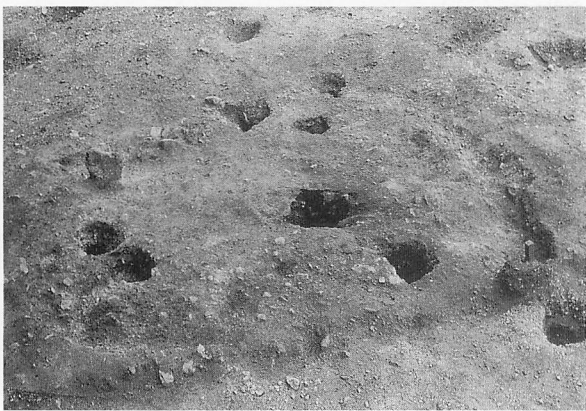
18. 7号住居址



19. 7号住居址(遺物出土状況)



20. 3号住居址



21. 8号住居址



22. 8号住居址 カマド



23. 9号住居址



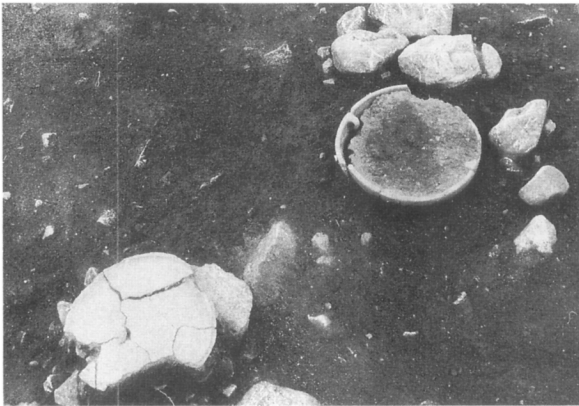
24. 9号住居址(遺物出土状況)



25. 12号住居址



26. 12号住居址 カマド



27. 内耳土器出土状況 (6-4 Grid)

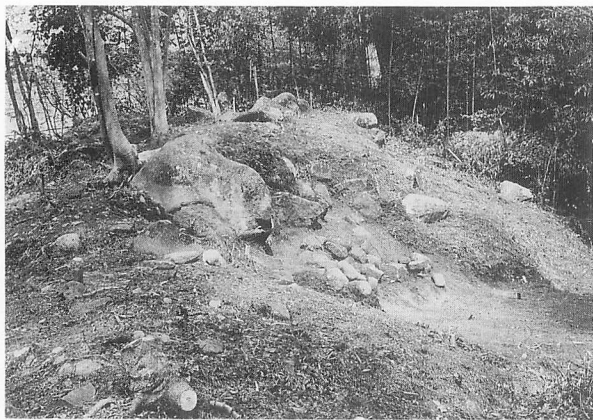


28. 石臼・茶臼出土状況 (1-6 Grid)



29. 竪穴状遺構 地下式土壇ほか 全体写真 (B地区-4区)





30. 五輪塔集中区全景 (西→)



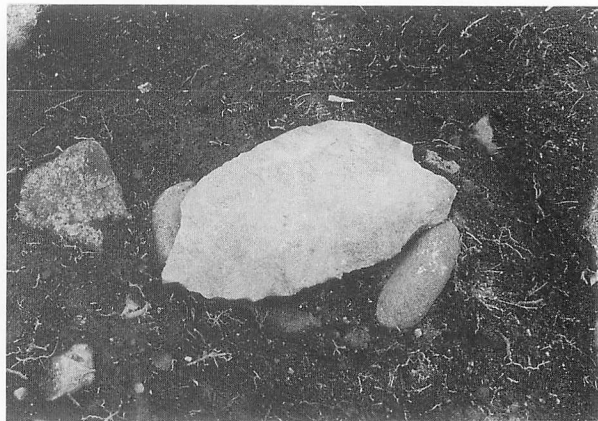
31. 五輪塔集中区近景 (東→)



(俯瞰)



32. No.23地輪下の石積状況



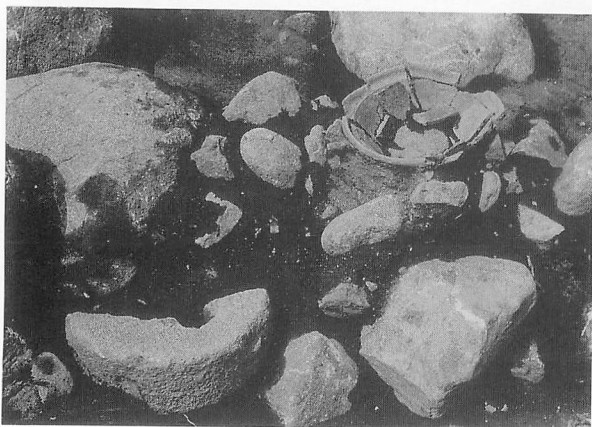
33. No.17地輪下墓壇の蓋石



34. No.22地輪下墓壇



35. No.17地輪下墓壇

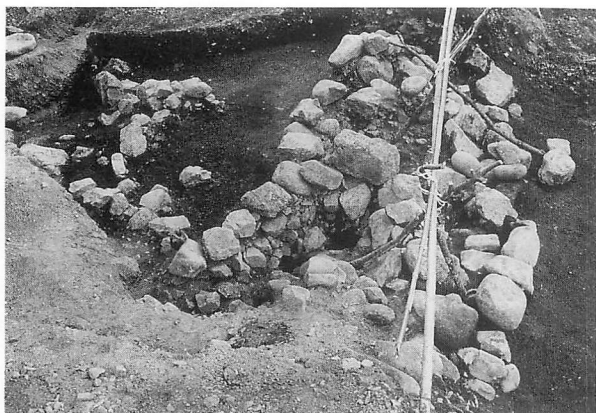


36. 3-6 Gスリパチ周辺の状況



37. 3-6 Gスリパチ (遺物出土状況)

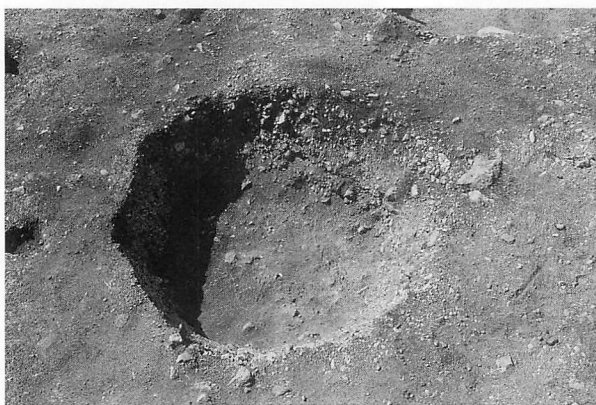




38. 1号石組状遺構



39. 3～6号土坑



40. 2号土坑



41. 10号土坑



42. 12号土坑



43. 調査風景 (北東→)



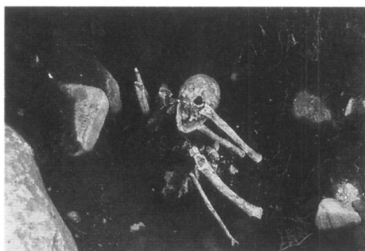
44. 調査風景



45. A地区よりB地区を臨む (南東→)



1. 1号墓墳



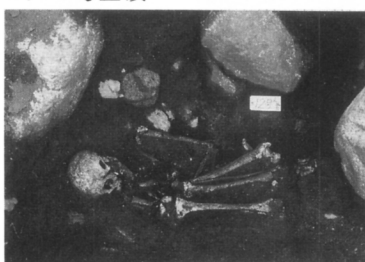
2. 2号墓墳



3. 3号墓墳



4. 5号墓墳



5. 6号墓墳



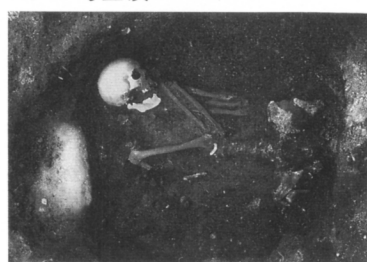
6. 7号墓墳



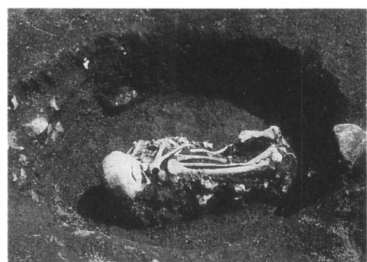
7. 9号墓墳



8. 10号墓墳



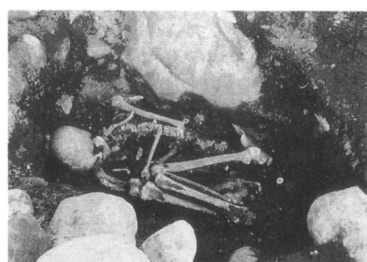
9. 11号墓墳



10. 12号墓墳



11. 13号墓墳



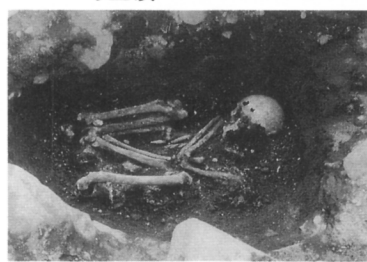
12. 16号墓墳



13. 17号墓墳



14. 18号墓墳



15. 19号墓墳



16. 21号墓墳

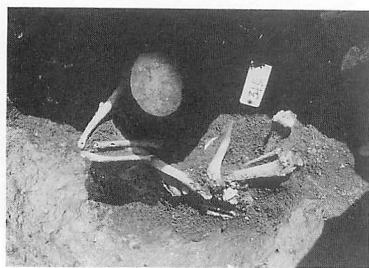


17. 21号墓墳

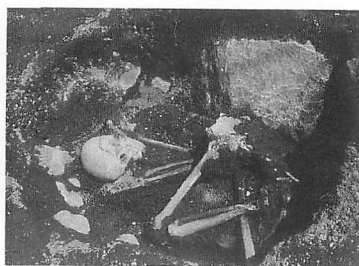


18. 23号墓墳

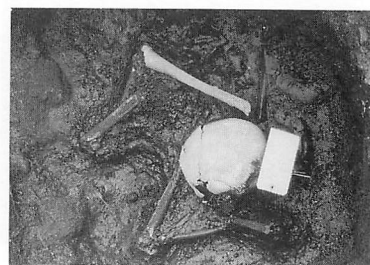




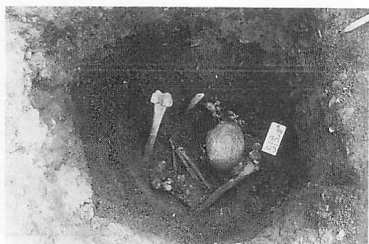
19. 25号墓墳



20. 26号墓墳



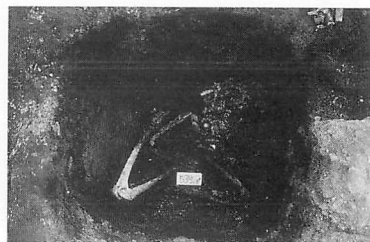
21. 27号墓墳



22. 28号墓墳



23. 29号墓墳



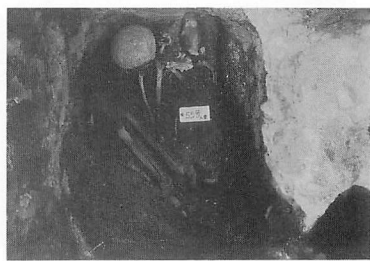
24. 30号墓墳



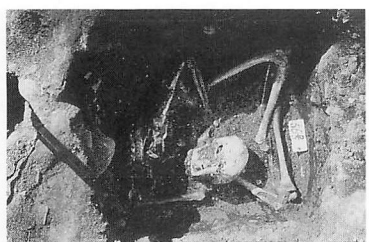
25. 31号墓墳



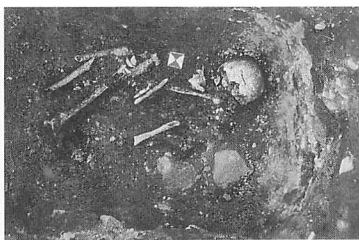
26. 32号墓墳



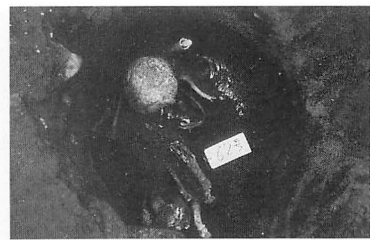
27. 33号墓墳



28. 34号墓墳



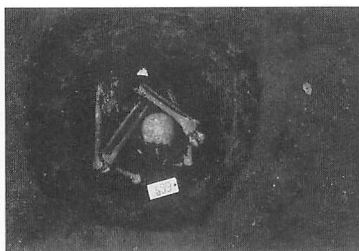
29. 35号墓墳



30. 39号墓墳



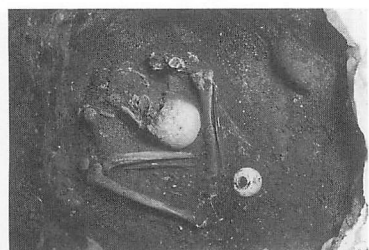
31. 40号墓墳



32. 41号墓墳



33. 42号墓墳



34. 43号墓墳



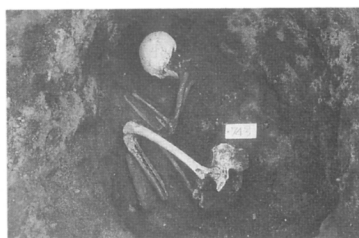
35. 44号墓墳



36. 45号墓墳



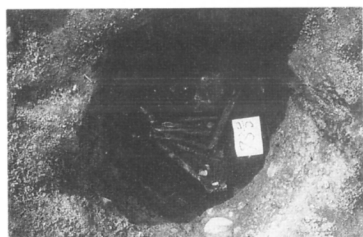
37. 47号墓塚



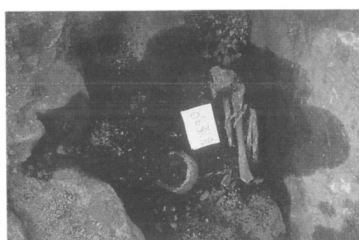
38. 48号墓塚



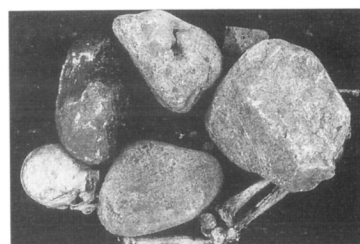
39. 49号墓塚



40. 50号墓塚



41. 52号墓塚



42. 53号墓塚



43. 55号墓塚



44. 56号墓塚



45. 53号墓塚



46. 57号墓塚



47. 58号墓塚



48. 59号墓塚



49. 60号墓塚



50. 61号墓塚



51. 62号墓塚



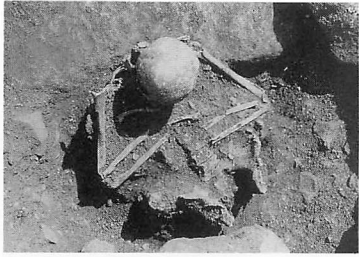
52. 63号墓塚



53. 64号墓塚



54. 67号墓塚



55. 68号墓壙



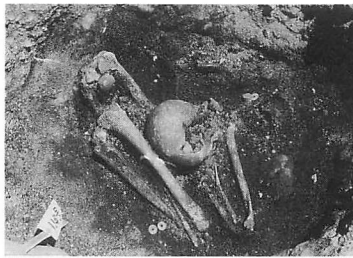
56. 69号墓壙



57. 69号墓壙 (遺物出土狀況)



58. 70号墓壙



59. 71号墓壙



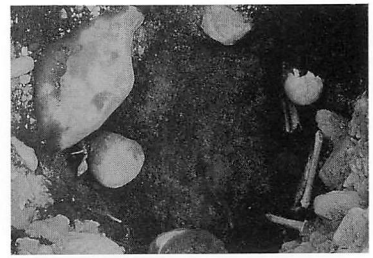
60. 72号墓壙



61. 73号墓壙



62. 74号墓壙



63. 75号墓壙



64. 76号墓壙



65. 77号墓壙



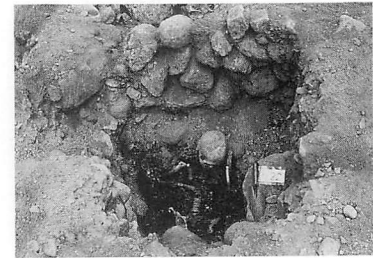
66. 78号墓壙



67. 79号墓壙



68. 80号墓壙



69. 81号墓壙



70. 82号墓壙



71. 84号墓壙



72. 85号墓壙





73. 87号墓壇



74. 88号墓壇



75. 88号墓壇



76. 90号墓壇



77. 91号墓壇



78. 93号墓壇



79. 94号墓壇



80. 95号墓壇



81. 98号墓壇



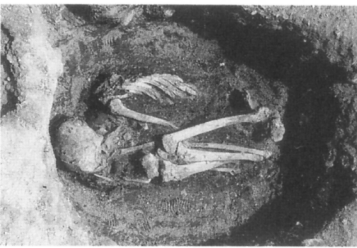
82. 100号墓壇



83. 102号墓壇



84. 130号墓壇



85. 104号墓壇



86. 60号墓壇周辺の状況(南西→)



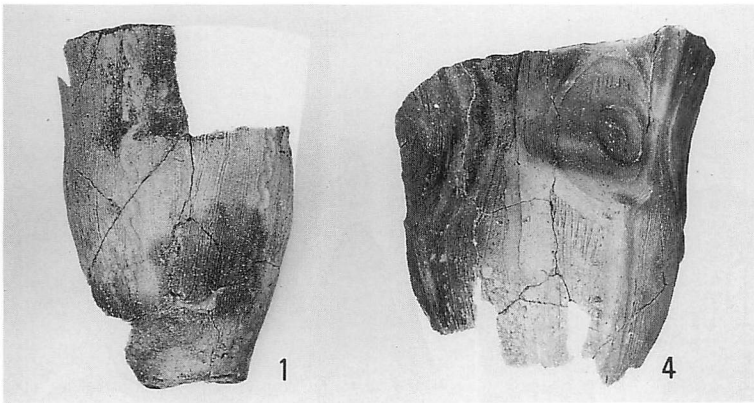
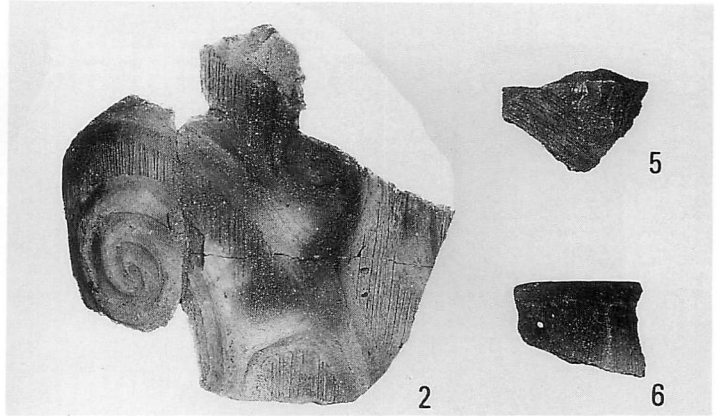
87. 調査風景



88. 墓壇の調査風景

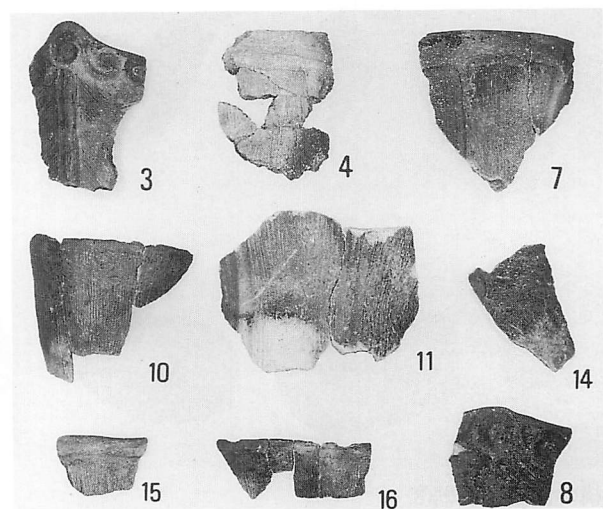
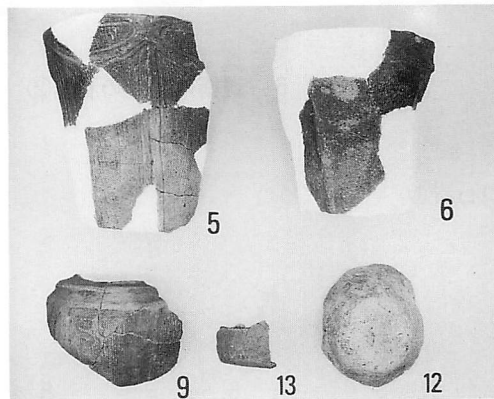


89. 墓壇の調査風景



1. 1号住居址

2. 2号住居址

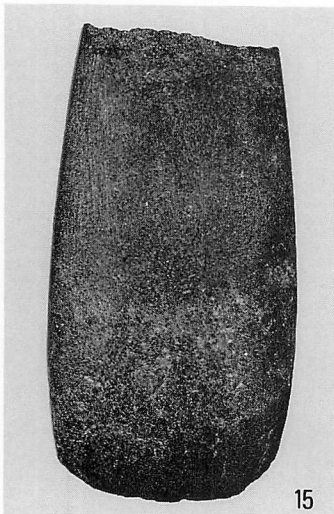




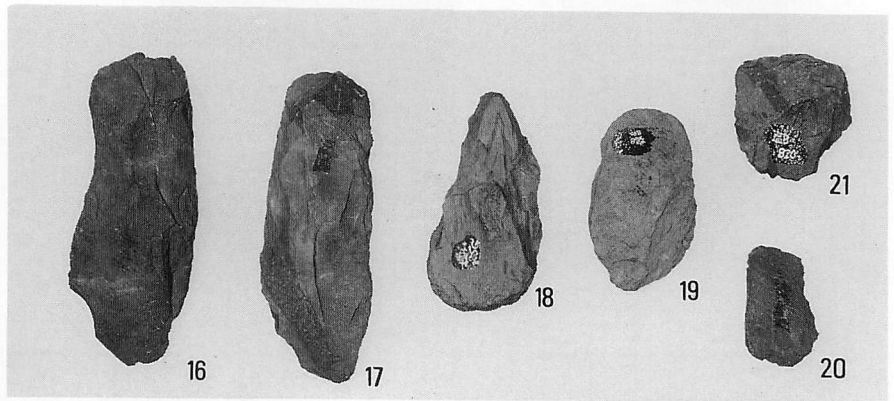
3. 1号埋甕



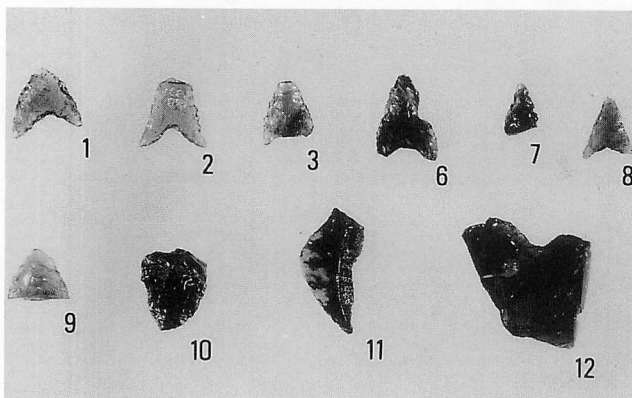
4. 2号埋甕



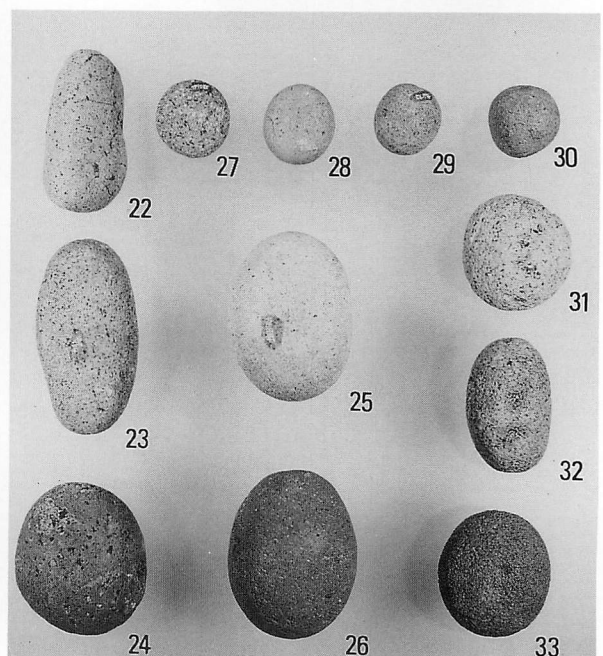
5. 遺構外出土の石器①



6. 遺構外出土の石器②

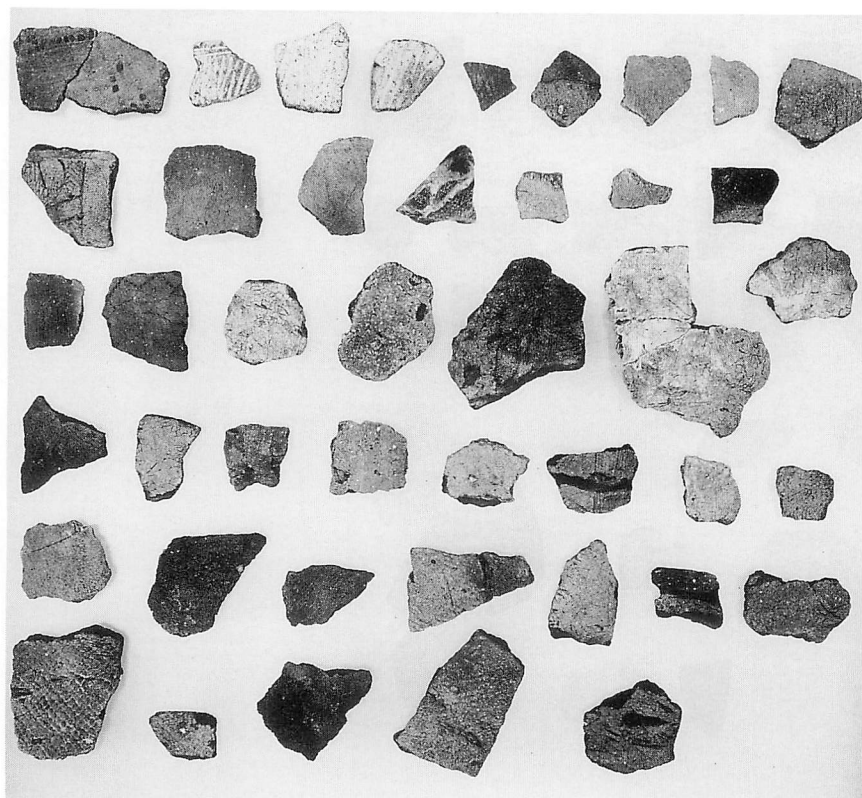


7. 遺構外出土の石器③

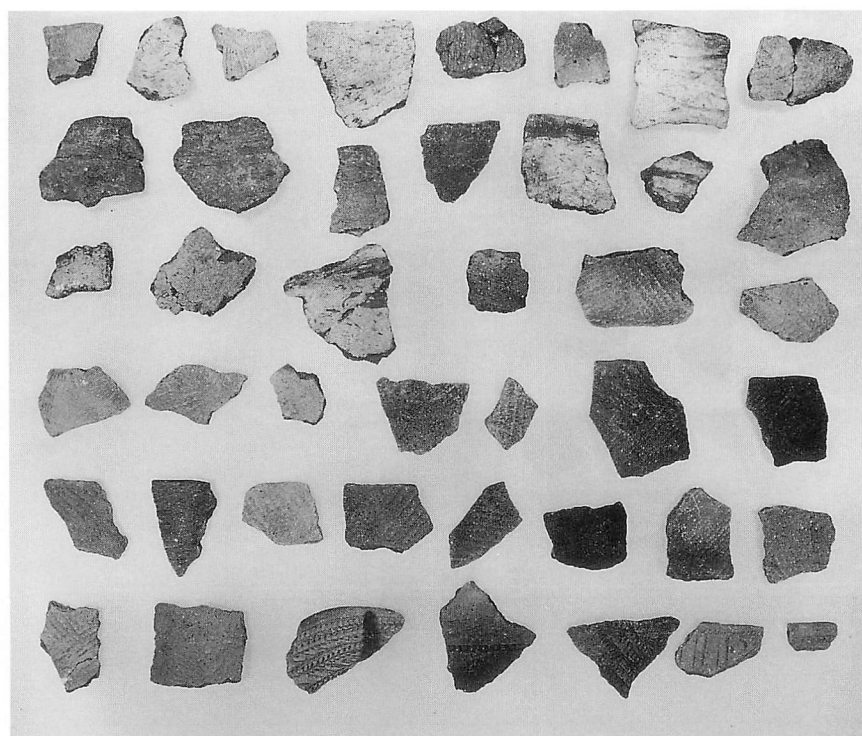


8. 遺構外出土の石器④

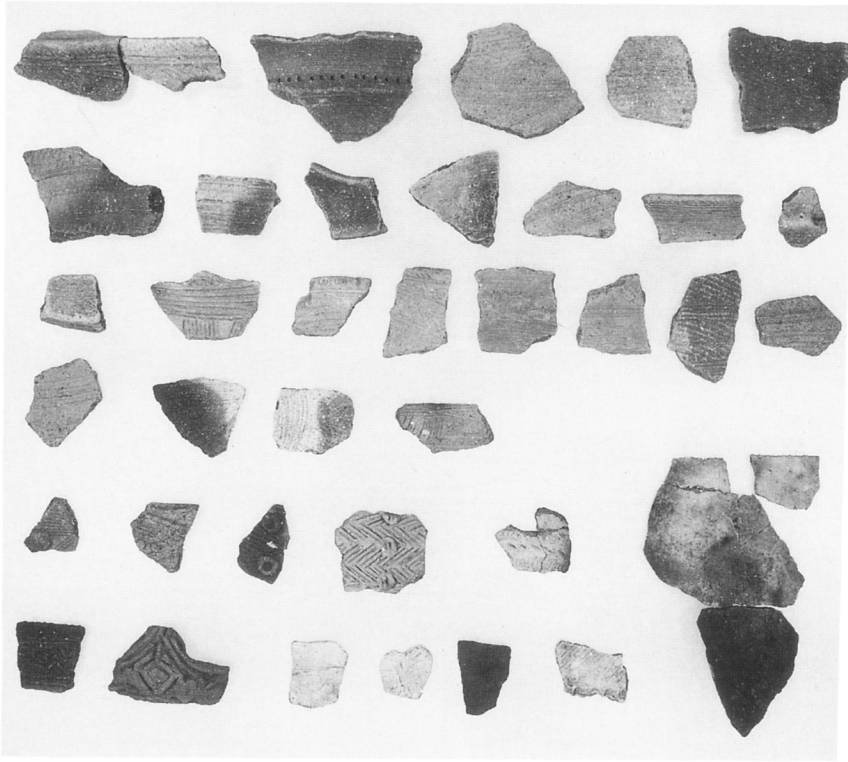




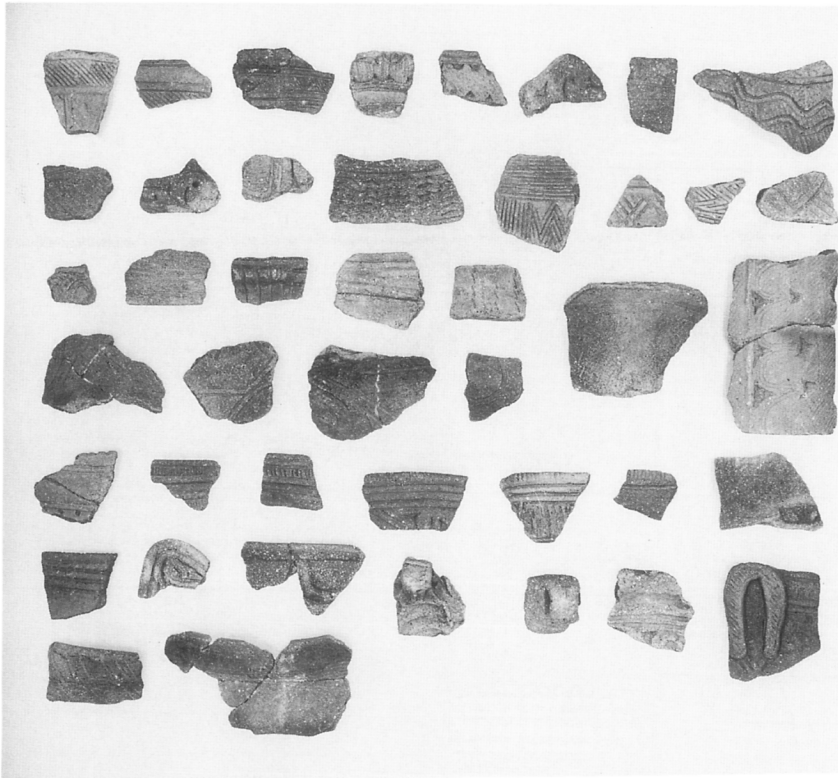
10. 遺構外出土の縄文土器①



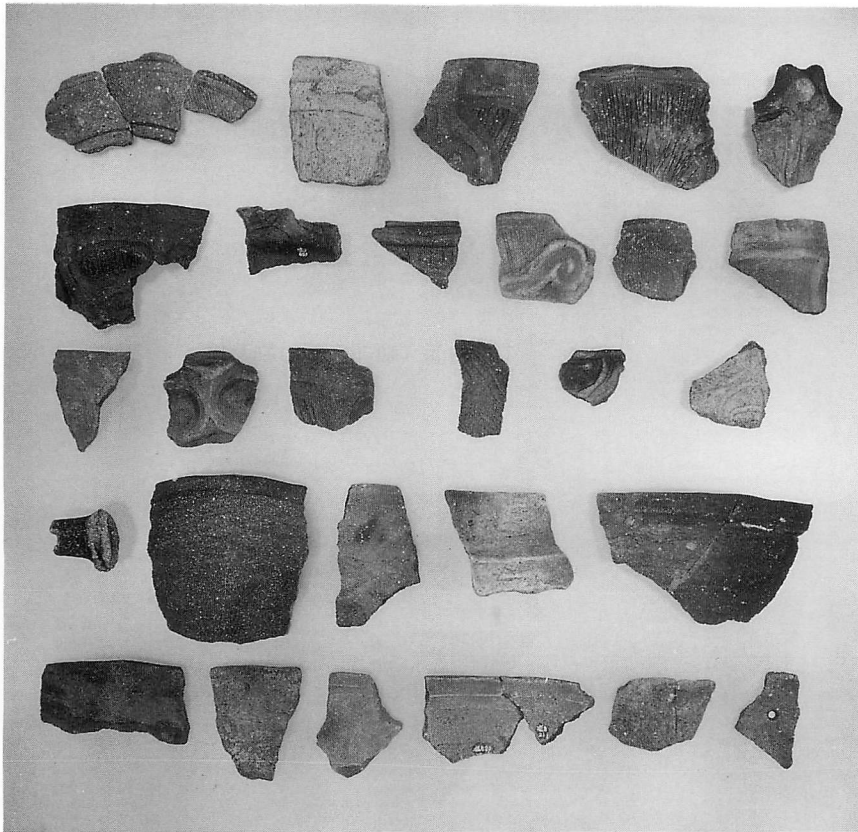
11. 遺構外出土の縄文土器②



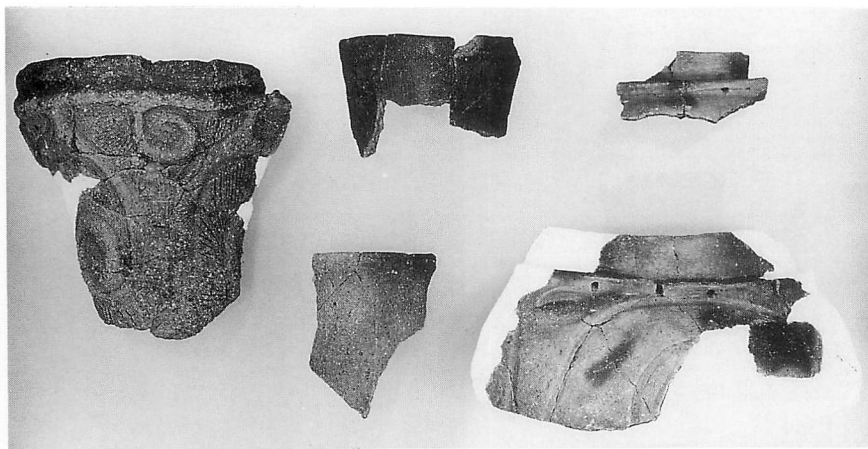
12. 遺構外出土の縄文土器③



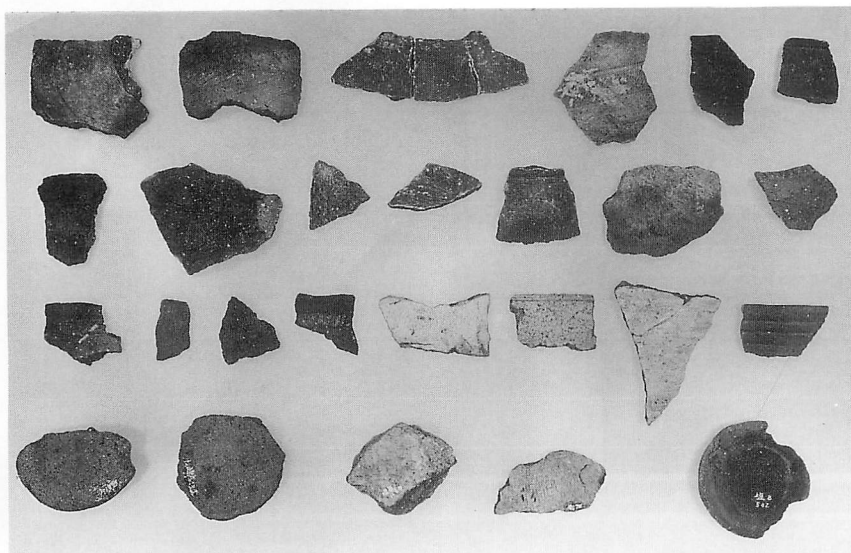
13. 遺構外出土の縄文土器④



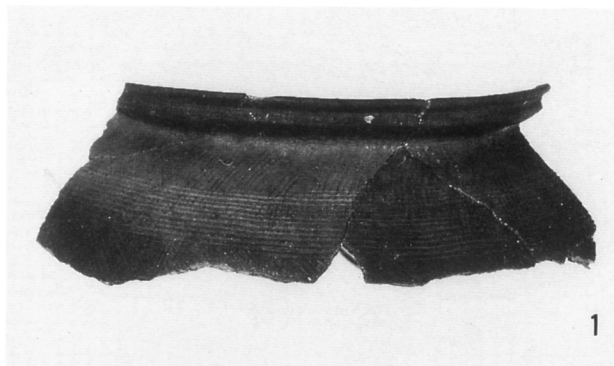
14. 遺構外出土の縄文土器⑤



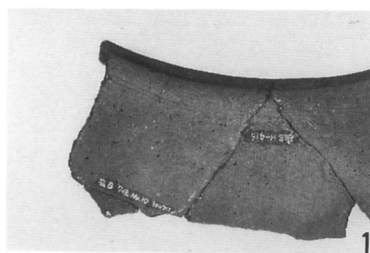
15. 遺構外出土の縄文土器⑥



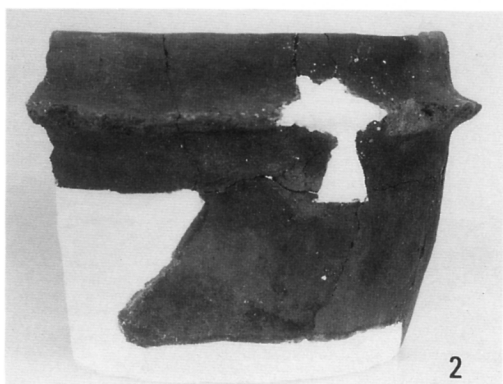
16. 遺構外出土の縄文土器⑦



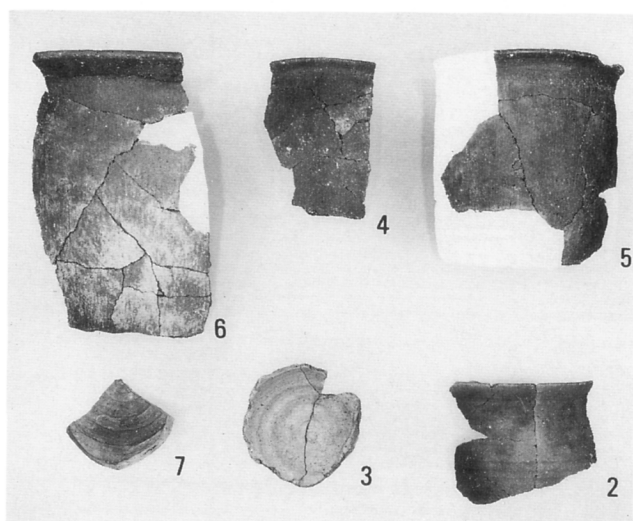
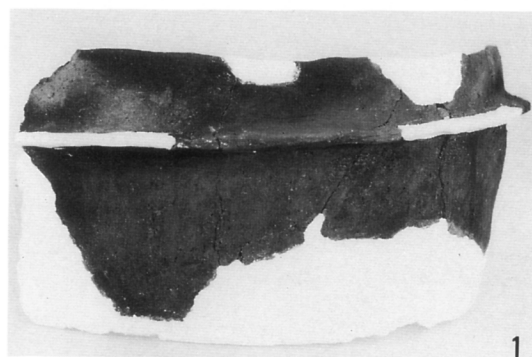
17. 7号住居址



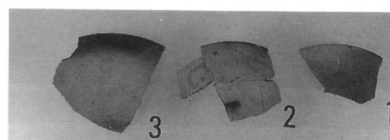
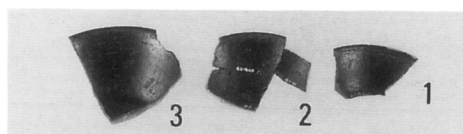
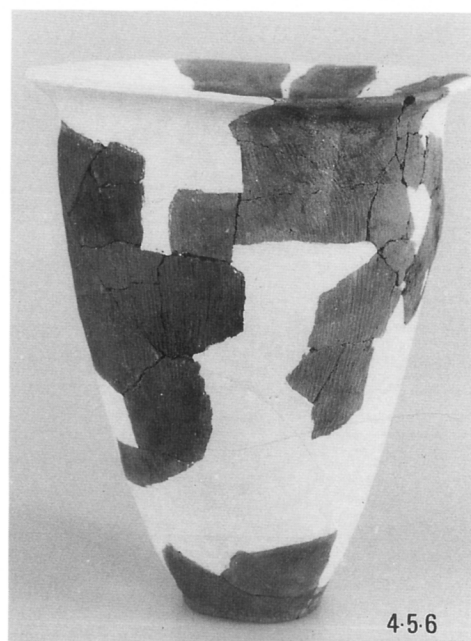
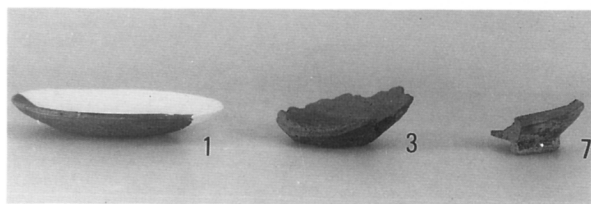
1の内面(頸部内面の刷毛目)



18. 3号住居址

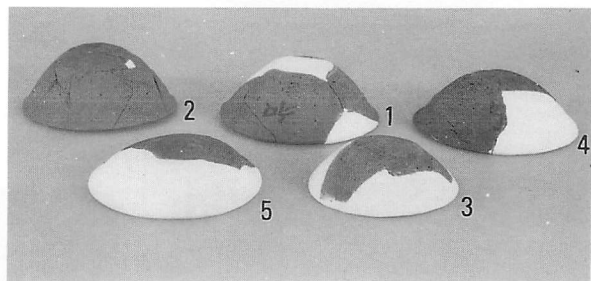
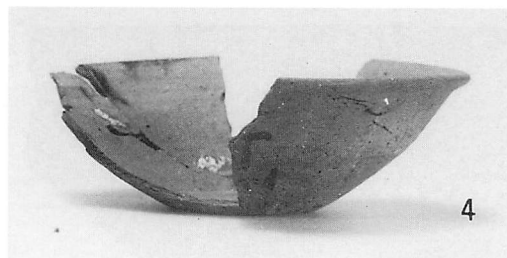


19. 8号住居址

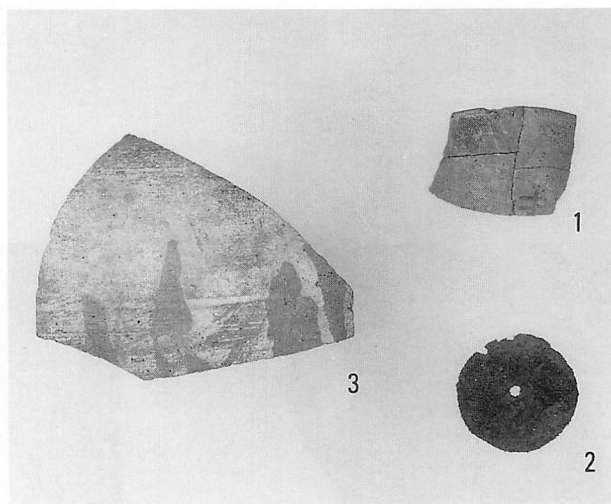


20. 9号住居址

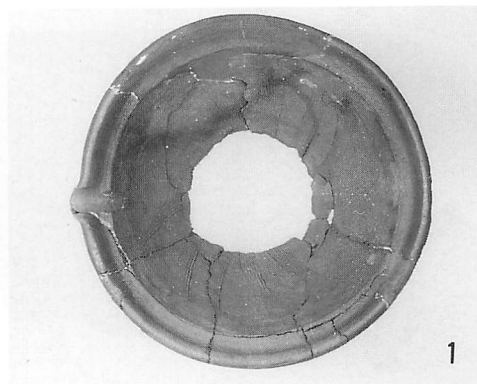




21. 11号住居址

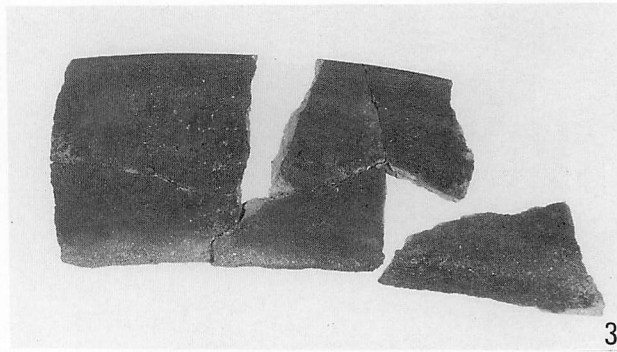
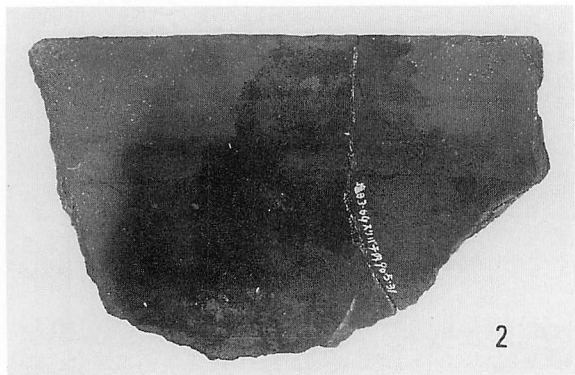


22. 12号住居址

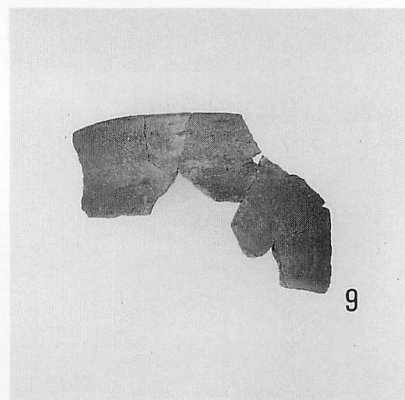
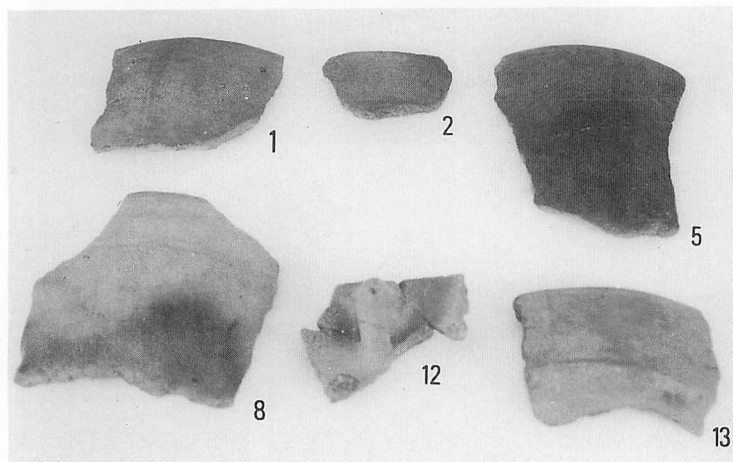


23. 3-6 Gスリバチ①

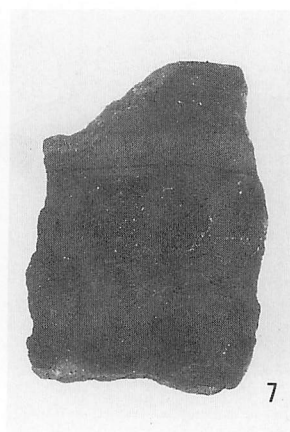
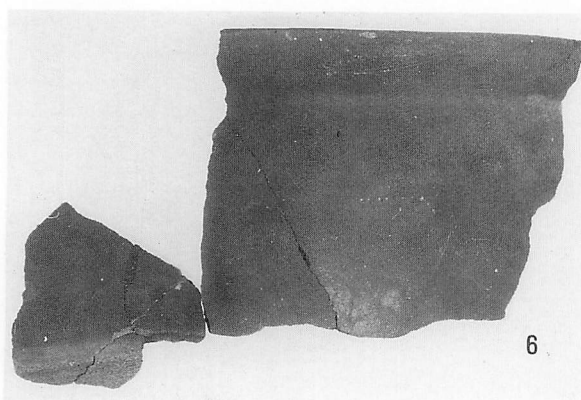
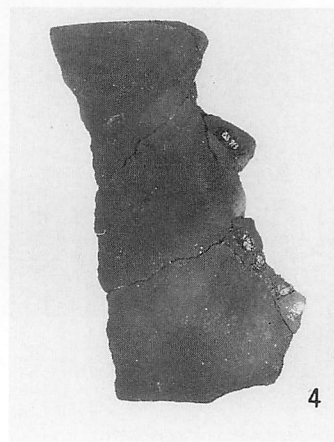
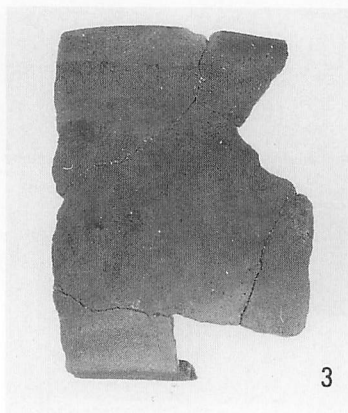
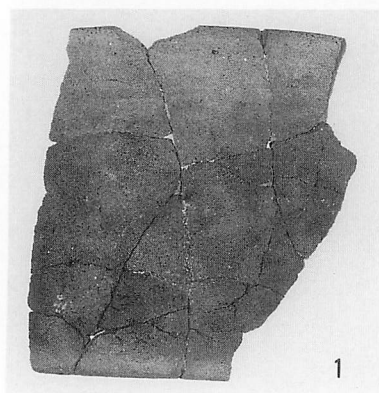
1の内面



24. 3-6 Gスリバチ②



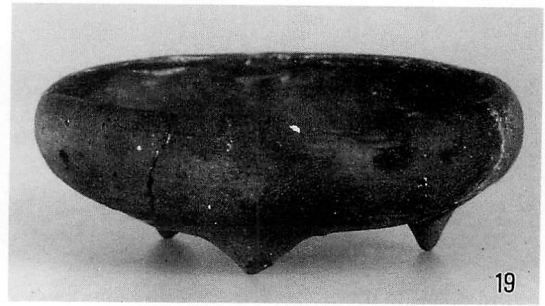
(左上1は地下式土壇出土)



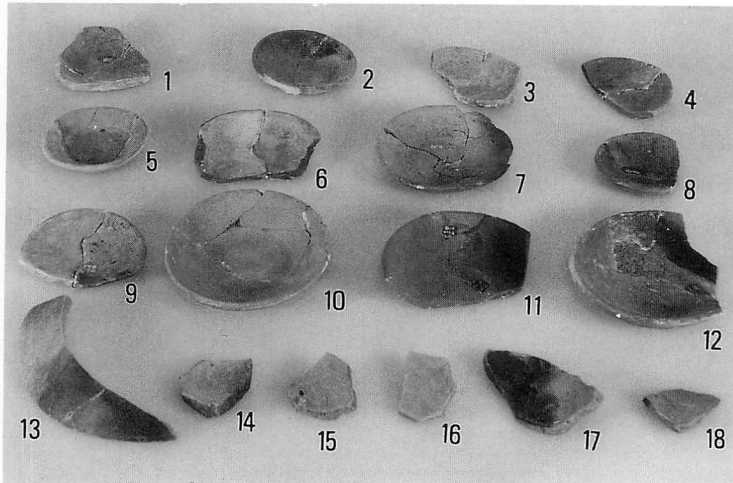
25. 遺構外出土の内耳土器①



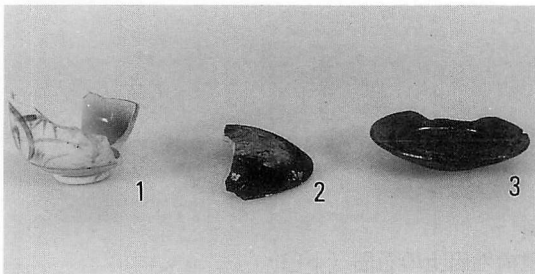
26. 遺構外出土の内耳土器②



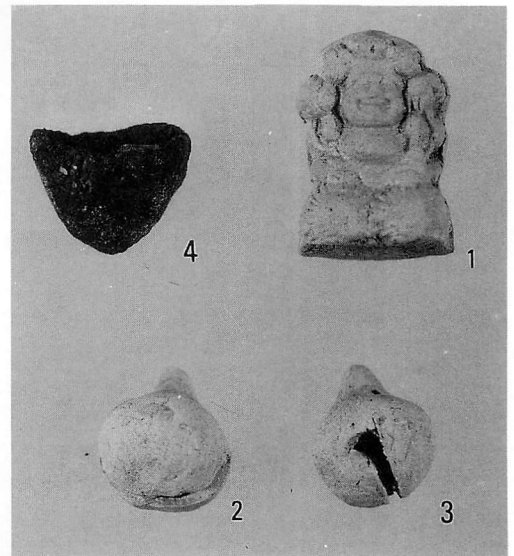
27. 脚付香炉形土器



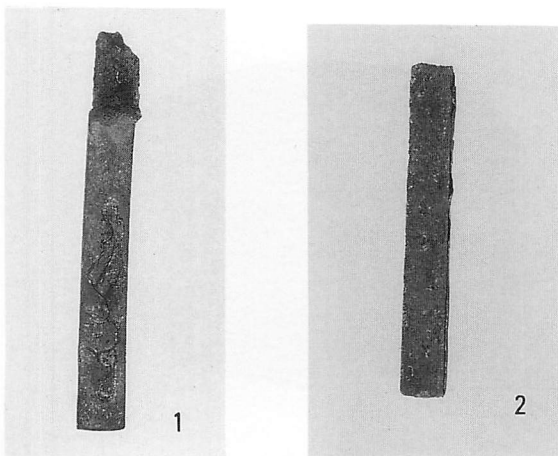
28. 遺構外出土の土師質皿形土器



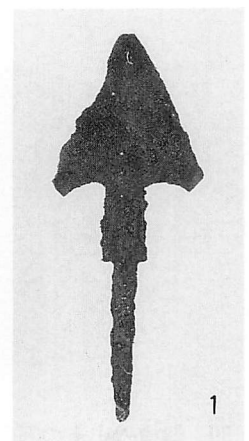
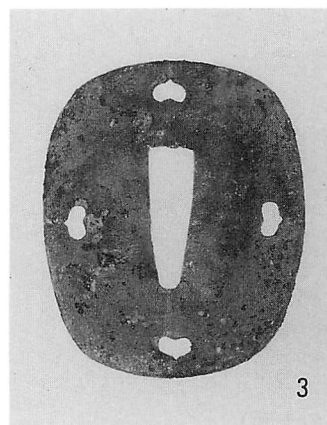
29. 遺構外出土の肥前系磁器・灯明皿



31. 遺構外出土の土製品、他



30. 遺構外出土の金属製品(銅製品)



32. 遺構外出土の  
金属製品(鉄鏃)





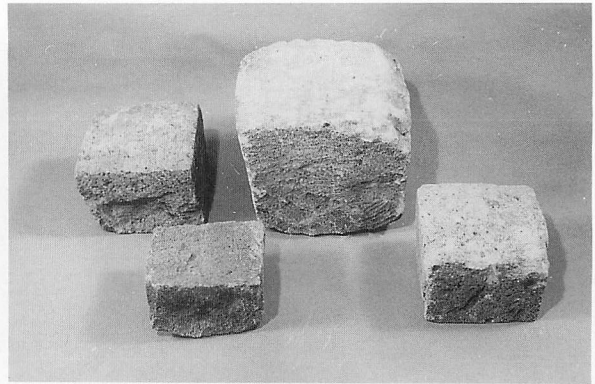
33. 五輪塔集中区出土の五輪塔（空風輪）



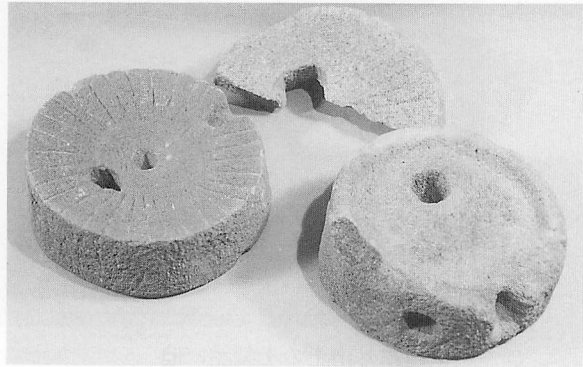
34. 五輪塔集中区出土の五輪塔（火輪）



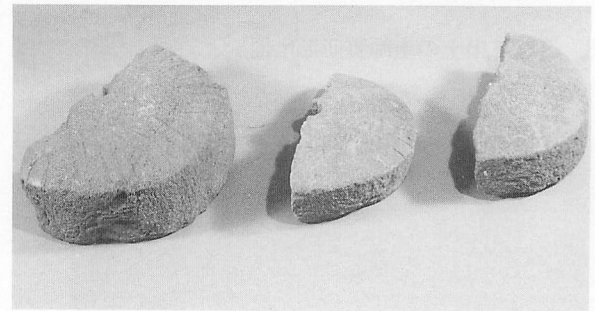
35. 五輪塔集中区出土の五輪塔（水輪）



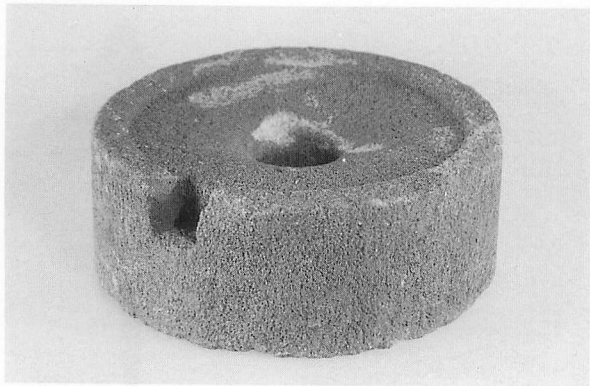
36. 五輪塔集中区出土の五輪塔（地輪）



37. 遺構外出土の石臼（上臼）



38. 遺構外出土の石臼（下臼）

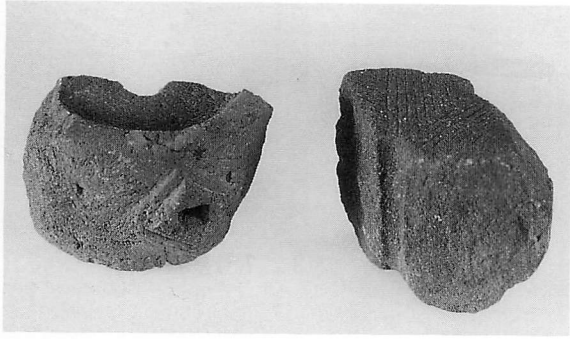


39. 遺構外出土の石臼（3の上面）



(3の上面)





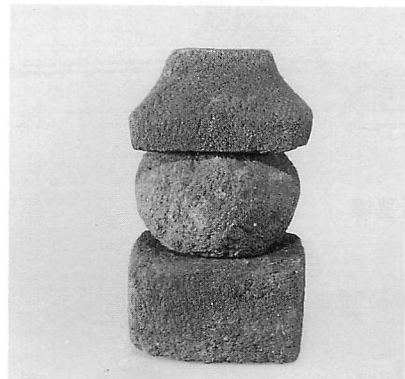
40. 遺構外出土の茶臼（上臼）



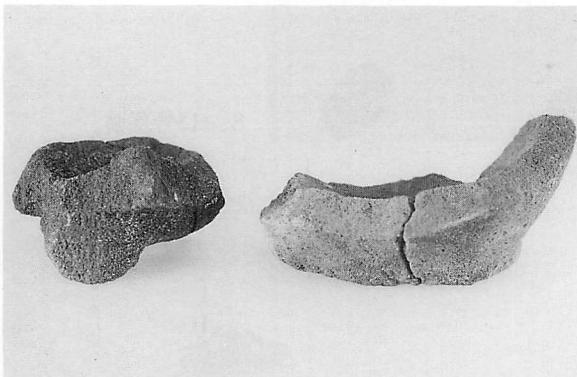
41. 遺構外出土の茶臼（下臼）



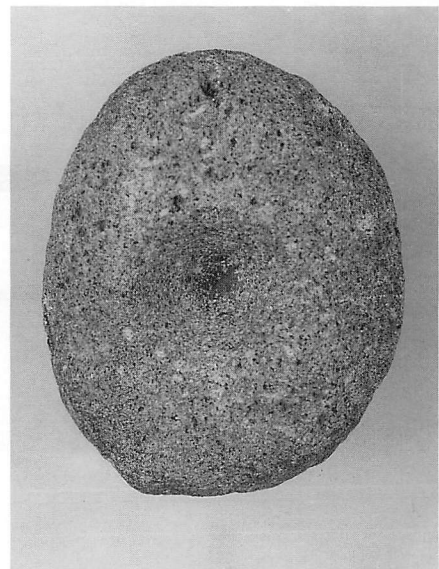
42. 遺構外出土の茶臼（下臼）



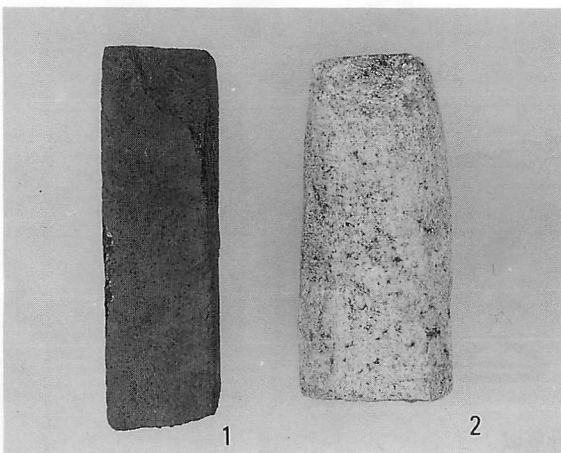
43. 遺構外出土の五輪塔



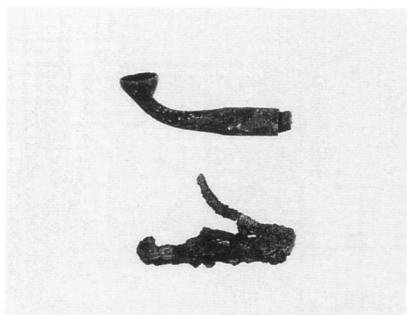
44. 遺構外出土の不明石製品



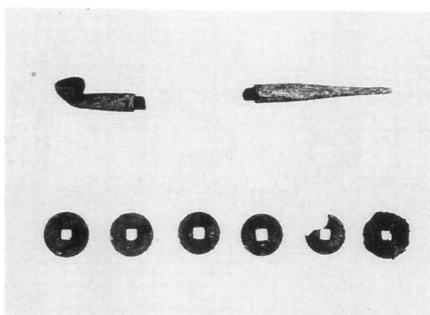
45. 遺構外出土の不明石製品（時期不明）



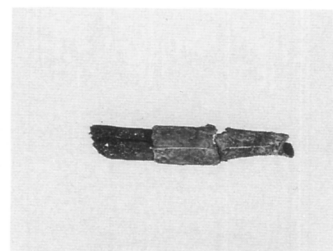
46. 遺構外出土の砥石



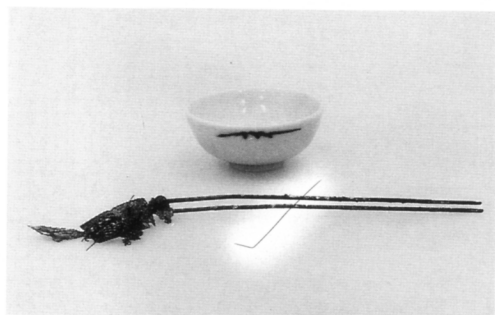
1. 1号墓墳



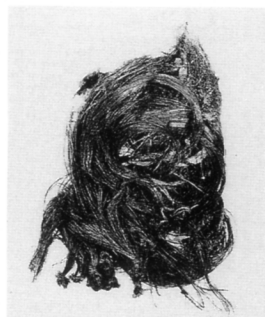
2. 2号墓墳



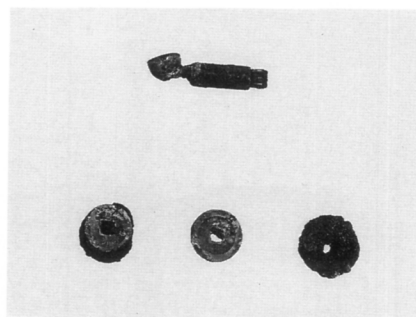
3. 7号墓墳



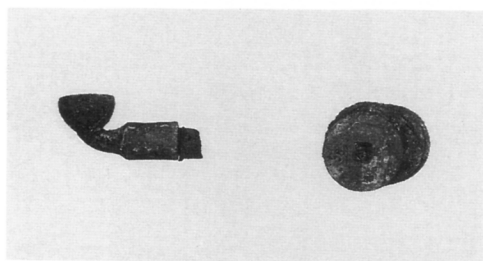
4. 9号墓墳



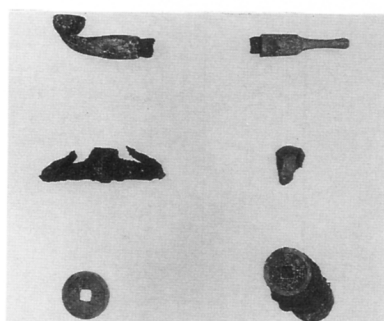
5. 9号墓墳 (頭髮)



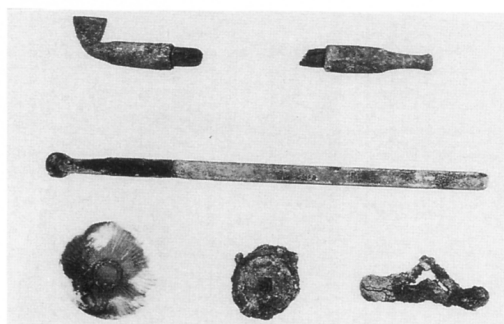
6. 10号墓墳



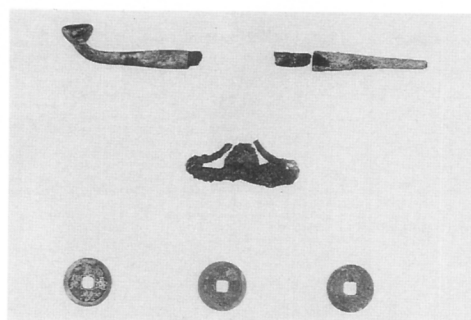
7. 11号墓墳



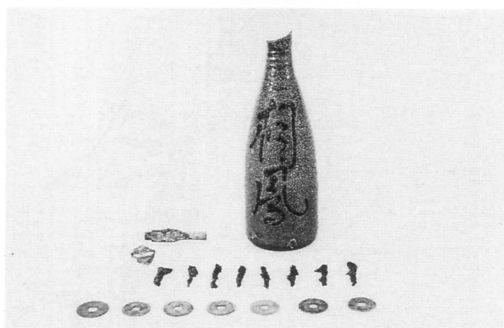
8. 13号墓墳



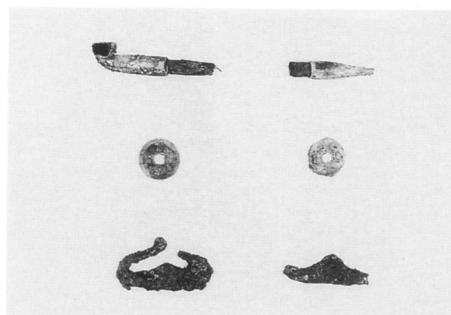
9. 14号墓墳



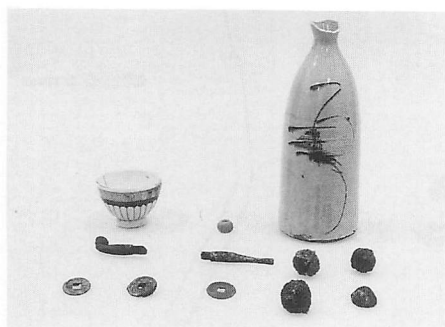
10. 16号墓墳



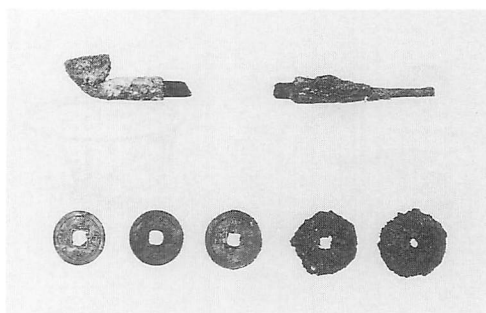
11. 17号墓墳



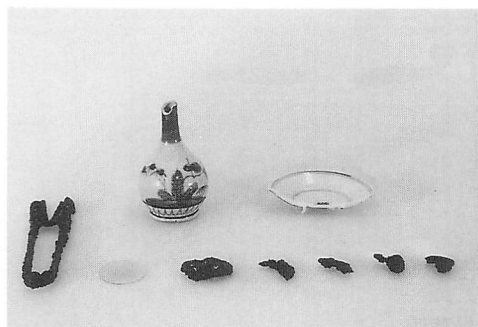
12. 19号墓墳



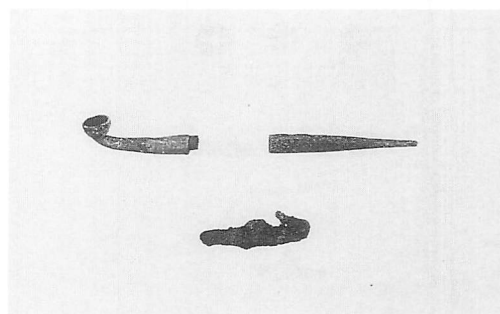
13. 21号墓壙



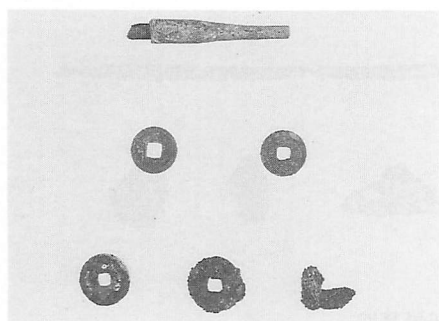
14. 22号墓壙



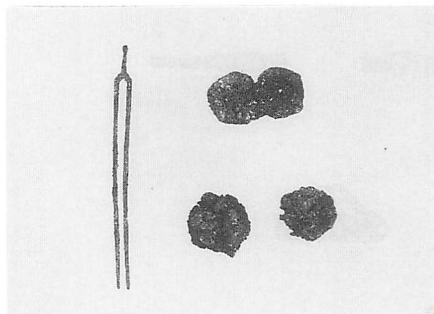
15. 24号墓壙



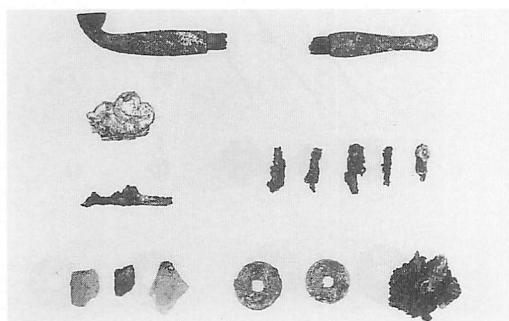
16. 26号墓壙



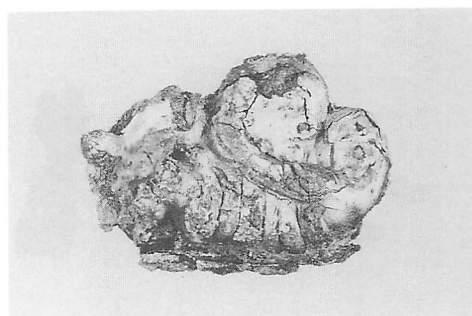
17. 28号墓壙



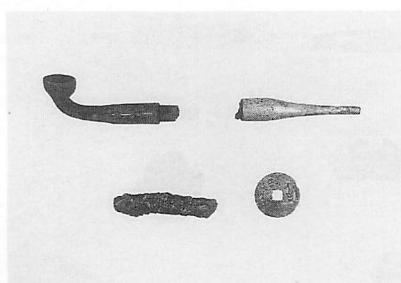
18. 29号墓壙



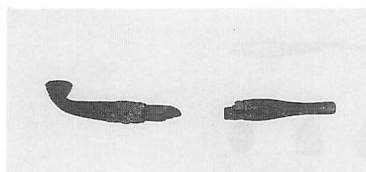
19. 31号墓壙



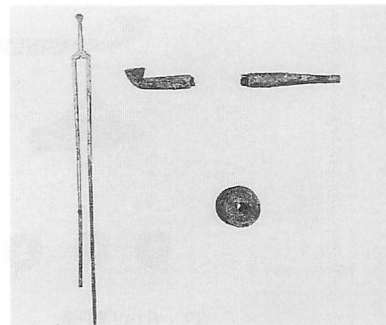
20. 31号墓壙 (飾金具)



21. 33号墓壙



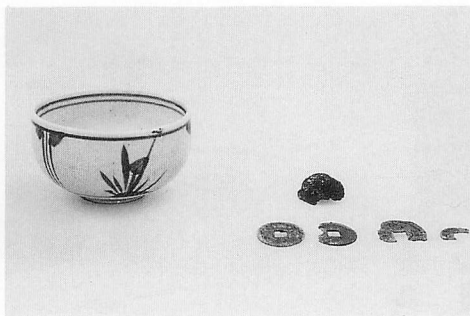
22. 34号墓壙



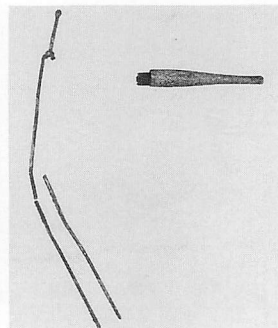
23. 40号墓壙



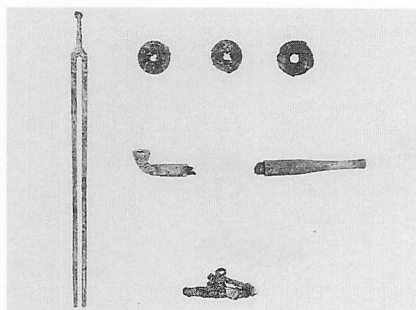
24. 41号墓壙



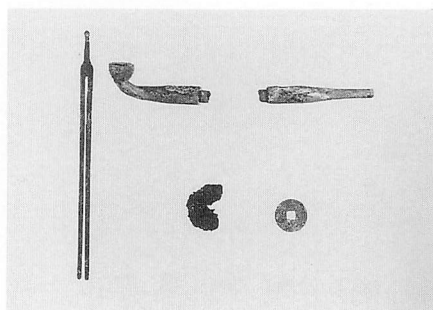
25. 43号墓壙



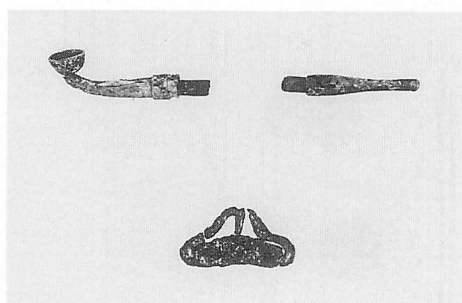
26. 47号墓壙



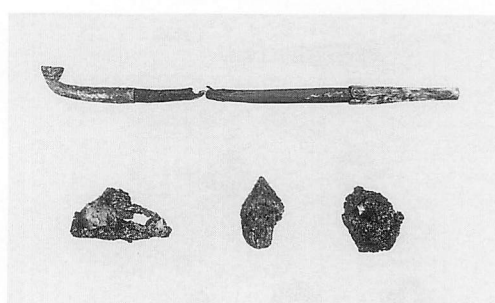
27. 50号墓壙



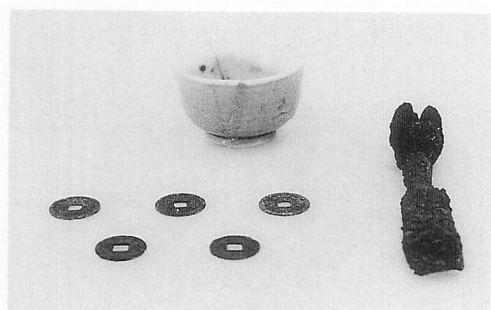
28. 52号墓壙



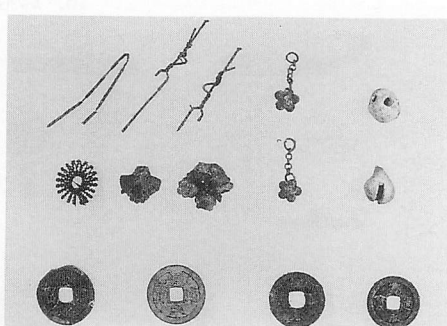
29. 53号墓壙



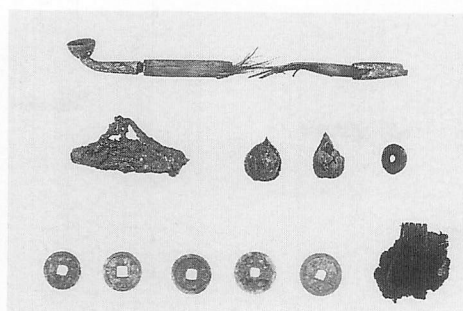
30. 56号墓壙



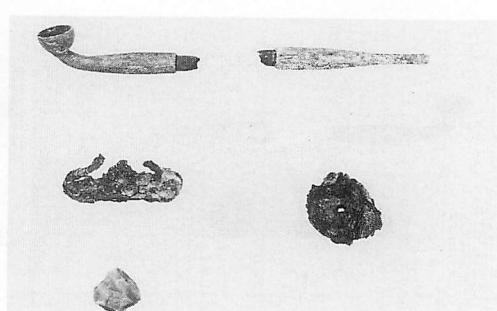
31. 57号墓壙



32. 58号墓壙

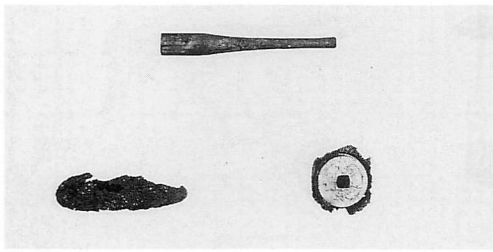


33. 61号墓壙

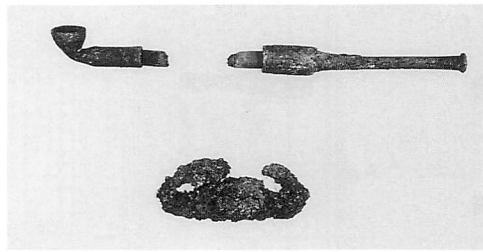


34. 63号墓壙

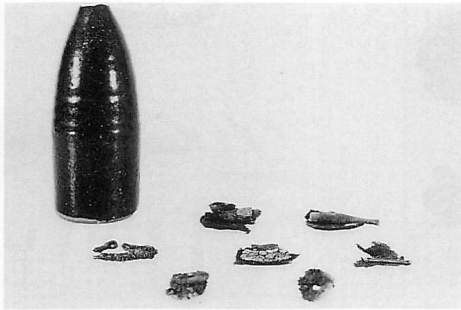




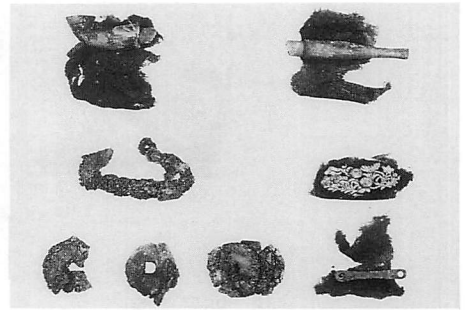
35. 67号墓坑



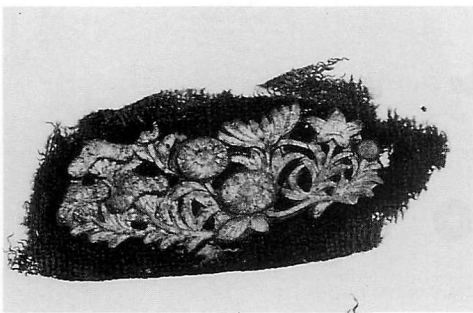
36. 68号墓坑



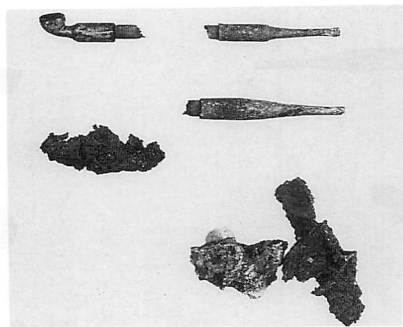
37. 69号墓坑



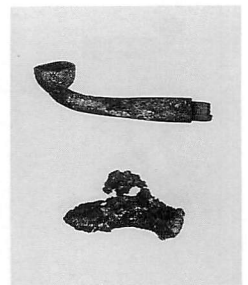
38. 69号墓坑 (俯瞰)



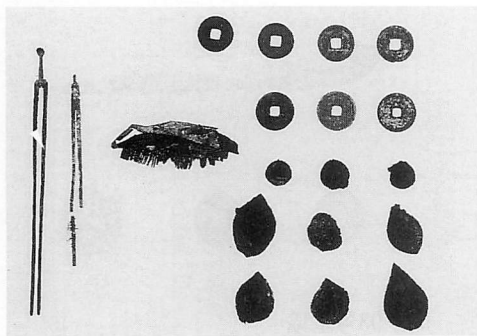
39. 69号墓坑 (饰金具)



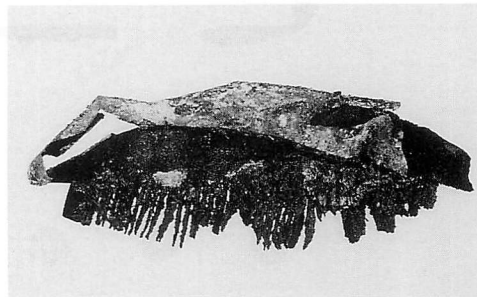
40. 70号墓坑



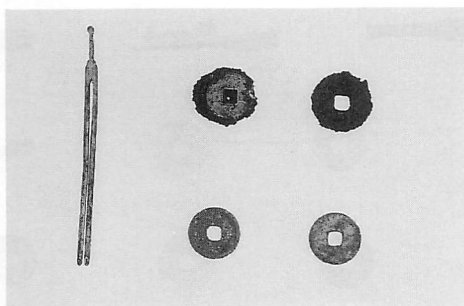
41. 75号墓坑



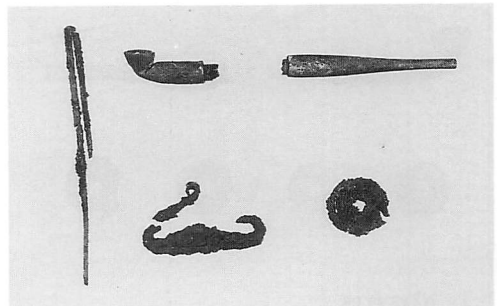
42. 75号墓坑



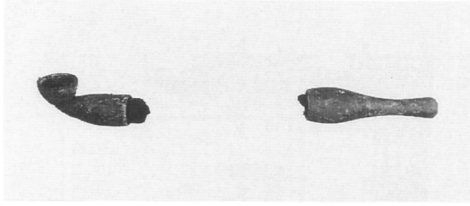
43. 75号墓坑 (櫛)



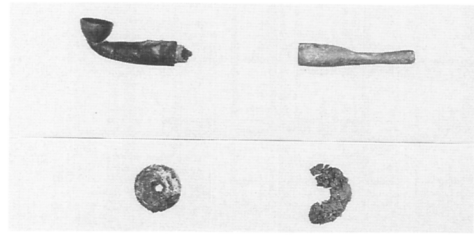
44. 76g号墓坑



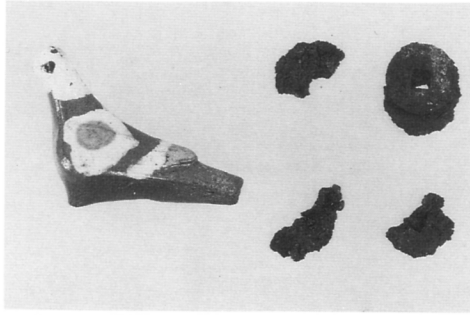
45. 79号墓坑



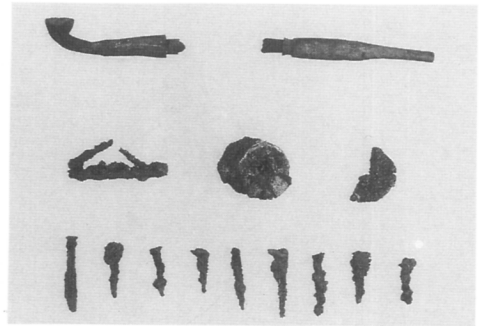
46. 80号墓壙



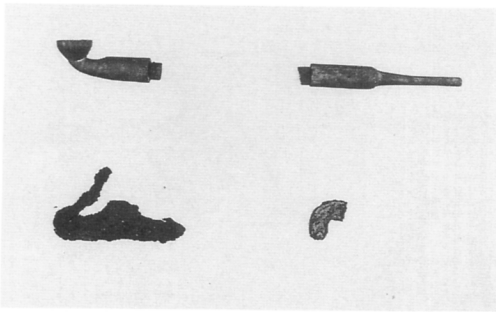
47. 81号墓壙



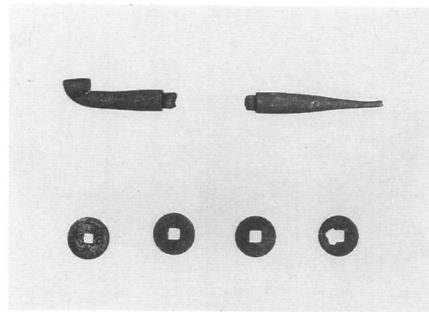
48. 85号墓壙



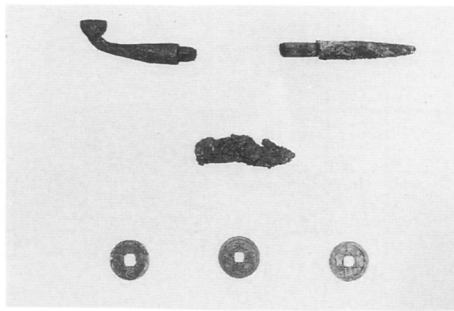
49. 86号墓壙



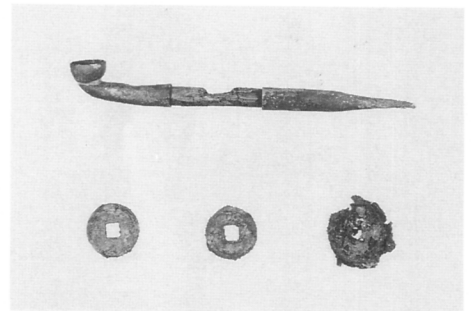
50. 88号墓壙



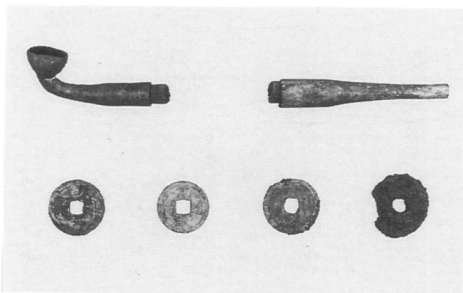
51. 90号墓壙



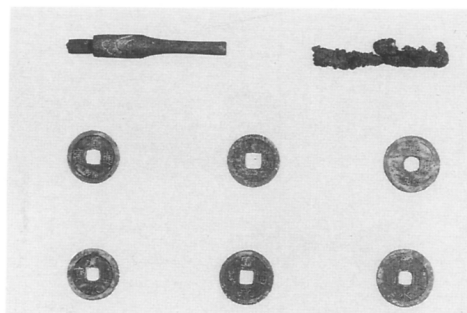
52. 90号墓壙



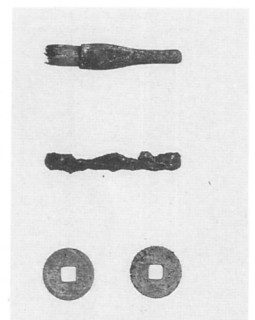
53. 93号墓壙



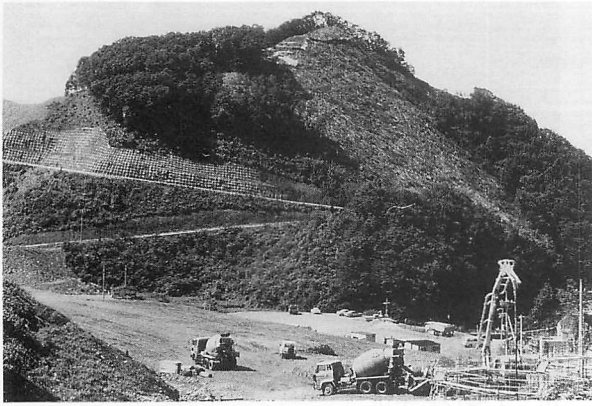
54. 94号墓壙



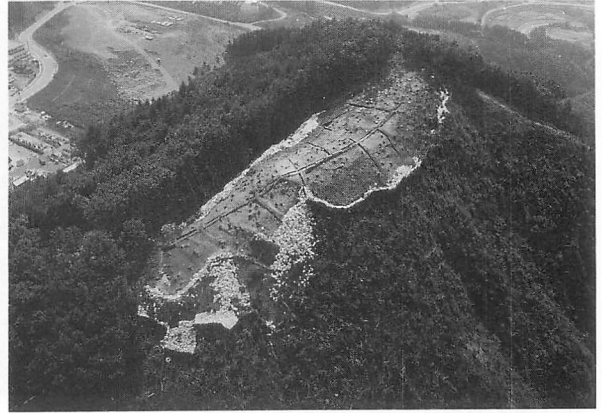
55. 95号墓壙



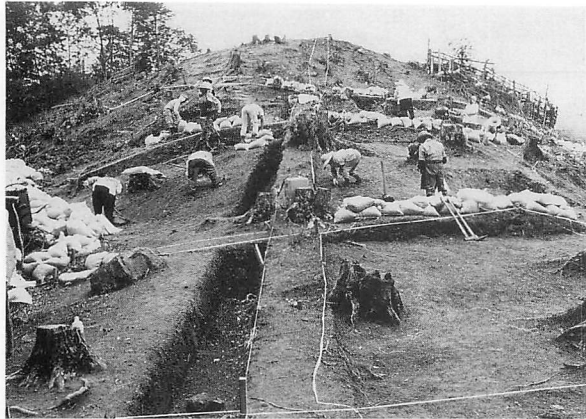
56. 98号墓壙



1. 前の山地区遠景 (北東→)



2. 前の山地区航空写真 (北西→)



3. DテラスよりCテラス臨む



4. Cテラス近景 (西→)



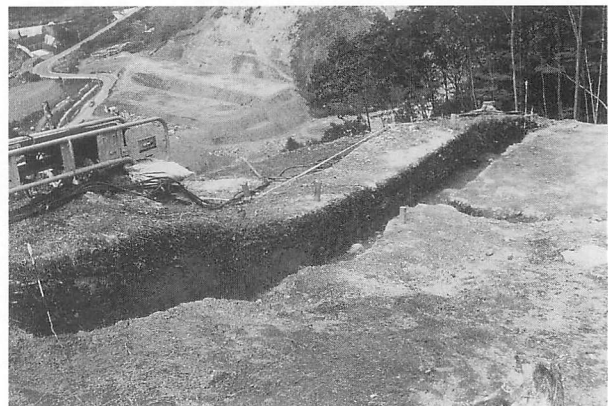
5. 調査風景  
(土坑群の検出)



6. AテラスよCテラス臨む



7. CテラスよりDテラス臨む



8. Cテラスセクション

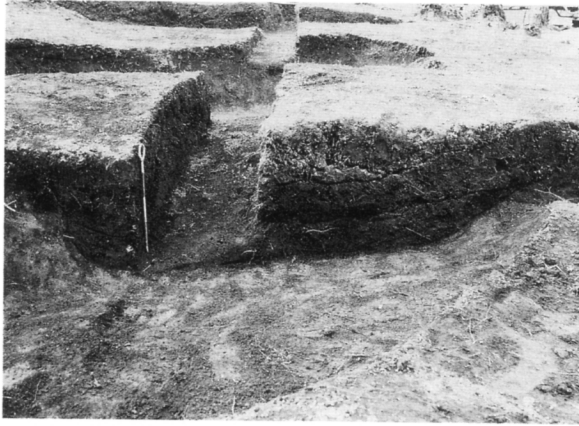




9. 調査風景 (土嚢・ベルコンによる表土除去作業)



10. 1~12号土坑



11. 4号土坑セクション



12. 12号土坑セクション



13. 山頂部 石垣 (北東→)



14. 山頂部 石垣 (西→)



15. 山頂部 現況



16. 試掘調査風景



## 報告書概要

フリガナ	シオ カワ イ セキ		
書名	塩川遺跡		
副題	塩川ダム建設工事に伴う発掘調査報告書		
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第70集		
著者	保坂 裕史・森原 明廣		
発行者	山梨県教育委員会・山梨県土木部		
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター		
住所・電話	山梨県東八代郡中道町下曾根923番地 ☎0552-66-3881		
印刷所	㈱峡南堂印刷所 山梨県甲府市丸の内1-10-1 ☎0552-35-2528		
印刷日・発行日	印刷：1992年3月20日 発行：1992年3月31日		
シオカワイセキ 塩川遺跡	所在地	山梨県北巨摩郡須玉町比志・小尾	
	25000分の1地図名・位置	瑞 牆 山	北緯 35° 51' 20" 東経 138° 30' 45"
概 要	主な時代	A 地区：縄文時代前期～後期、平安時代 B 地区：縄文時代早期～晩期、古墳時代前期、平安時代、中世、近世 前の山地区：時期不明	
	主な遺構	A 地区：縄文時代の土坑、時期不明の土坑・溝状遺構 B 地区：住居跡（縄文・古墳・平安）、土坑（縄文ほか）、地下式土壇・五輪塔集中区（中世）、墓壇（近世）、掘立柱建物址・竪穴状遺構・石組状遺構（時期不明）ほか 前の山地区：テラス状遺構・山頂部の石積・土坑（時期不明）	
	主な遺物	A 地区：土器・石器・土偶・土製耳飾（縄文時代前期～後期）、土器（平安時代）ほか B 地区：土器・石器（縄文時代早期～晩期）、S字甕（古墳時代前期）、土師器・須恵器・鉄器（平安時代）、土器・陶磁器・五輪塔・石臼・茶臼・銅製品（鐔・小柄）・古銭・金属製品（煙管・火打金・飾金具ほか）陶磁器・土製品（近世）、植物遺存体（胡桃・栗）、動物遺存体（人、馬、猪、鹿、犬） 前の山地区：なし	
	特殊遺構 特殊遺物	B 地区：舶載陶磁器、金属製品、墓壇を伴う五輪塔（中世） 104墓の墓壇およびそれに伴う人骨・副葬品（近世）	
	調査期間	A 地区：1989年5月15日～8月4日 B 地区：1989年7月17日～12月18日および1990年5月7日～11月20日 前の山地区：1991年5月7日～9月17日	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第70集

山梨県北巨摩郡須玉町

しお かわ い せき  
塩 川 遺 跡

— 塩川ダム建設に伴う発掘調査報告書 —

印刷日 1992年3月20日  
発行日 1992年3月31日

編集 山梨県埋蔵文化財センター  
山梨県東八代郡中道町下曾根923  
☎ 0552-66-3881

発行所 山梨県教育委員会  
印刷所 (株) 峡南堂印刷所

